undecided

raki &竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｕｎｄｅｃｉｄｅｄ

【Ｎコード】
Ｎ６８４８Ｌ

【作者名】
ｒａｋｉ　＆竜司

【あらすじ】
月の綺麗な街のとある物語。
初夏の候、大切なものを喪った過去のトラウマによって鬱屈とした日々を過ごしていた高校生、外崎暁（とざきあきら）は堕落した日常から「脱出」すべく部屋を飛び出した。
その夜、暁はクラスメイトの篠原亜美（しのはらあみ）に出くわし、明くる日から彼女が親友から依頼された、ある些細な事件の解決に協力することとなる。
そして、些細なことであったはずのその事件の裏に隠された重大な

秘密が徐々に明らかになっていく。
有名推理小説家、鬼頭火山。失意に包まれた彼の残した暗号をめぐり、暁と亜美は陳腐な日常を少しずつ色づけていく。
そして物語は予測不能な展開を迎えることとなる。紐解かれしは、運命の螺旋か、それとも偶然の輪か――――。

予想外の展開と緻密な伏線が織り成すひと夏の物語。

＊この小説はブログや他小説サイトにも掲載しています

プロローグ（前書き）

「緻密な伏線」や「予想外の展開」を大事にしています。
作者は私ともう一人います。
打ち合わせなしで交互に書いていますので、作者すら予想外であるような展開が生み出せたと思っています。
質問、感想には必ず返信いたします。一度読んでいただけると嬉しいです。
製作開始当時、１６歳で初めての執筆だったこともあり、５話か６話辺りまでは全面的に未熟さが目立ちますが、後ろの話になるにつれて実力は徐々に成長してきます。
特に３０話辺りからは読者様を驚かせる展開になっていると自負しています。
作者の成長も見ていただけると嬉しく思います。
また、一人称と三人称を意図的に切り替えている場面がありますのでご了承ください。

プロローグ

それは遥か遠くの夢。

気が付くと、白と青と緑の世界に僕はたたずんでいた。どれだけ時間が経ったろうか。白いのは雲、青いのは空、そして緑色は風という名前だったと思い出した。

ここは何処だろう。目の前に小さな扉があった。茶色の扉だが木製ではない。扉の奥にはきっと何も無い。だからそれを開いても意味はない。目の前の扉は本来の役割を失っているのだ。

背後の空は黒く渦巻いていた。黙示録的な意味がそこにはある。しかしそれが何なのかは理解出来なかった。

風は消えていた。

ここにきて自分が同時に三六〇度景色を見渡せていることに気が付いた。“肉体”という概念はあるのに自分は視覚だけで存在している。背後を感じ取ったのは肉体があったからなのだろうか……

黙示録的な意味はまだわからない。しかし僕はそれが恐怖へ続くと悟ったようだ。

風はまた吹き出した。

扉は閉じたままだ。触れることは出来ない。開かなくちゃいけないと感じはじめていた。

黒い渦は同心円状の波紋を成していた。中心には深い闇が現れ、それは腕のような形を形成していった。闇は強まり、全てを包み込もうとする。漆黒の腕はこちらにまっすぐ伸びてくる。

俺は扉を開いていた。俺の「手」で、そして意志で。

扉をくぐり抜けると、そこには夜空が広がっていた。星は無く、あるのは三つの月だけだ。

ひとつは時を司り、ひとつは空間を司り、ひとつは心を司る。そんな気がした。

月光は次第に強まり僕を包み込んだ。

そうか、俺を呼んでいたのは……

六月二十四日　水曜日

またあの夢を見ていた。あの夢を見た朝はいつも目覚めがいい。
少年はベッドから降りて窓辺に立った。二日ぶりの晴天だ。朝日影を浴びて一度だけ伸びをする。
今日が始まる。何もかも変わらない日常がまた始まる。
俺はまだ、知らなかった。この日が全ての始まりになることを。

脱出　～始まりのあかつきへ～

- 1 -

――六月二十三日、火曜日。

ベッドに寝ッ転がッて、考えていたんだ。
何の為に、生きてるのかッて……
結構深刻に悩んでたんだ。
でも、今日の夕暮れは特別だ。
いつものとは違うよ。嫌なことがあって、悲観的になって、生きる意味が分からないって嘆いてた時とは違うみたいなんだ。
ずっとずっと、重要なことを考えている。
学校から帰って来て、チキンカレーを食って、ベッドに横になって考えている。薄暗い光の射し込む窓を見つめて。
……ああ、やっぱりだ。こんな静けさにこそ、永遠の幸福が、夢が、温もりが……
――待て。
これでいいのか？　これでは、いつかの夕暮れの繰り返しじゃあないのか？
「……そうなのか？」
風が吹いた。カーテンが網戸に吸い寄せられるのを目の端で捉えた。
……チッ。
どうやら、いつかの繰り返しだったようだ。俺は。俺は、取り残されてしまったんだ。
日常に、置いてきぼりにされちまったんだ。

「脱出しねぇと！！」
始まった。俺の脱出劇。

- 2 -

少年、外崎暁（とざきあきら）は家を飛び出していつもの通学路を走っていた。学校までは徒歩で三十分程だ。しかし今は学校に向かっているわけではない。「脱出」を決めた以上家に居ることはただもどかしいだけだったのだ。

目指しているのは学校の先にある、今は使われていない寂れた病院だ。俺が「俺」を失った場所……そして、それよりもっと大切なモノを失った場所……俺が変わるとしたら、あの場所で以外には有り得ない。

暁は市内の私立高校に通う十六歳だ。中肉中背、特に目立つようなこともなく無難に生きてきた普通の高校生だった。両親は田舎で暮らしていて、暁はそこより少し都会のこの街で一人暮らしをしていた。バイトをしていたこともあったが今はしていない。というのも、人間嫌いの暁にとってはあの場所にいることは苦痛でしかなかったのだ。両親からの仕送りで十分に生活は出来ていた。

通学路の近くには、三軒のコンビニと喫茶店、ファミレス、本屋、デパートがあり、基本的には生活に困ることはない。

気が付くと、完全に日は落ち、辺りは暗くなっていた。夏が近づいてきたこの時期だが、風は涼しく、Ｔシャツ一枚だと寒く感じることもある。

暁は学校の校門の前を通り過ぎると商店街の坂道を駆け上がり人気のない裏道に入った。辺りは余計に暗くなり、風はさらに冷たくなった。十分以上も走ったので相当に息は上がっていた。

暁は病院の門の前に立っていた。何度も来たことはある。だけど、ここ数年は来ていなかった。確か最後に来たのは三年前だ。あの時

は門をくぐることは出来なかった。
胃が痛みだした。……こうなると俺はもう駄目なんだ。暁はそれから一時間ほど格闘したが結局門をくぐれなかった。トラウマに打ち勝つことは出来なかった。

午後九時を過ぎた頃、暁はコンビニで買ったお茶を学校の近くの公園で飲み干した。喉が渇いて死にそうだった。
情けない自分が心底嫌だった。生きる意味なんてない。でも死ぬ勇気なんてない。こうゆう奴なんだ、俺は。馬鹿だな、最初から分かっていたのに、今日はいつもと違うとか思ったりしてさ。
病院は来年取り壊す予定だった。今日はもしかしたら最後のチャンスだったのかもしれない。それとも、もう来るなってことかな……。
ベンチに寝そべって目を閉じた。……最悪だ。

- 3 -

絶望に浸り、闇に溶け込もうとしていた暁を誰かの声が引き戻した。
「暁？　何してんの？」
起き上がると目の前には篠原亜美（しのはらあみ）がいた。視覚で確認するのに数秒かかったが、そもそも女子で俺に話し掛けてくるやつは亜美しかいない。
「何って……昼寝」
そう応えると亜美は不満そうに反論した。
「こんな遅くに公園で昼寝してるやつがどこにいんのよ？」
「いや、ここに」
亜美は呆れた顔をして、反撃の理論を組み立てているようだった。

篠原亜美は暁と同じ学校に通う十六歳、二年C組のクラスメートだ。痩せ型で背は暁より五センチほど小さい。どちらかといえば男子ウケしそうな顔立ちだ。暁の数少ない友人の一人である。

俺が人間哲学を脳内で構築……もとい、窓の外を眺めてぼーっとしてるのに興味を持ったらしく「近寄り難い奴」で名がとおっている俺に躊躇なく話し掛けてきたのがきっかけで友人になったやつだ。

「お前こそ何してんだ？　こんな時間に」

「学校に忘れ物取りに行った帰り」

どうやら、反撃の理論は諦めたらしい。

亜美は唐突に尋ねた。

「『鍵穴』読んだ？」

『鍵穴』とは、先週亜美から借りた推理小説だ。

「ああ、半分位までは読んだと思う。あれって新島警部が犯人だろ」

「ええっ！　なんで判ったの？　ってゴメンまだ半分だっけ……」

「別にいいよ。どうせそうだと思ってたし」

「あんたって、なんで犯人当てられんの？　なんかむかつく！」

亜美はかなり悔しそうだった。というのも、今回が初めてではないからである。元推理小説同好会の俺達は（亜美に無理矢理誘われ半ば強引に入会したのだが）、今でも度々推理小説を貸し借りしていて、いつも俺が犯人を当てているので、最近では俺が犯人を当てられるかの勝負になり変わっている。

「ははは。俺の唯一の特技だからな。お前は観察力がないんだよ」

「いいよ、いつか負かしてやるから。そうだ！　明日の放課後遊びに行こうよ。晋也とか誘って」

「明日……ねぇ」

そうか。また今日は終わるんだな。変わらない日のひとつとして消えていく。

「考えとく」

「何それー。うーん……まあいいや。じゃあ、明日また」

「ああ、じゃあな」

亜美は振り返ることもなく公園を去った。
暁は亜美の去る姿を見て妙なことに気付いた。あいつ、忘れ物取りに行った帰りとか言って、何も持ってないじゃんか。
亜美が来たせいで絶望に浸り損なった気がした。俺は取りあえず明日も生きることにした。「脱出」はまた後だ。まだ……まだ、時間はある。

翌朝、暁はいつもの幻想的な夢とともに始まりの日を迎えるのだった。

脱出　～始まりのあかつきへ～（後書き）

いきなり、日にちが解り難くて申し訳ありません！

スタートライン

- 1 -

「……鮫島さん。鮫島さん」
「へ……？」
その声の主は居酒屋『彼岸花』の亭主河内であると、ほろ酔い状態の鮫島には理解が遅れた。
「河内さん……かい。何をしてるんですか、こんな遅くに」
現在時刻は既に夜中の三時を回っていた。ここは、事件現場のあの場所から少し離れた暗黒の商店街。提灯に光の灯る店は流石にこの時間にはなかった。辺りは本当に真っ暗。
「あたしねぇ、思うんですわ。こんなことを言ったらあれかも分かりませんが……。鮫島さんにはどうしても」
「……もしかして、それを言うために？」
考えてみれば不自然だった。何故、河内は鮫島がここにいるとわかったのか。
鮫島は真っ暗闇の中、河内の顔を覗き込んだ。何故か鼓動は激しい。酒の飲み過ぎとはまた別の理由だ。
「河内さん、な……ん……なんで俺がここにいると？　わかったの？」
今夜は妙な静けさがそこに介在した。その静けさが暗闇から来るのではないだろうことを鮫島はもうわかっていた。
「鮫島さん」
その声は、深い。
鮫島はブルッと身震いした。
「……河内さん、もう帰って寝ないぃ……こんな遅くに……う！？」
振り返った二、三センチという至近距離に河内の真っ暗な顔が在った。鮫島は二、三歩後ずさりながら、

「も、もう帰った方が、い……いい……ッ」
その声は明らかに怯えていた。河内の奇妙な両目を見つめて……
「あの人が犯人でしょう？」
「！？」
「……ほら、あの、新島警部」
鮫島の酔いは、完全に覚めていた。

――暁は、そこまで読んだところで『鍵穴』を閉じた。
……やっぱ新島か。
「暁っ」
「ん？」
誰かが自分の名を呼んだ。振り返ると、そこに立っていたのは高山竜司だった。
「おお……竜司、……なんだよ」
「数学の点数、どうだったんだ？」
周りの連中が、丁度竜司の声を掻き消す騒音を発したため、暁には竜司の声がよく聴こえなかった。
「ん？　何？」
「数学だ数学。どうだったんだよ、お前」
「ああ……何だ。数学か。まぁ普通だった。九十点」
竜司の顔を下から覗き込む。ニヤニヤしていやがった。
「……俺の、……勝ちだな。九十一点！！」
「うっ」
「ははは。ま、とりあえず後でジュース1本だからな。じゃー」
竜司は教室を出ていった。その後を目で追っていると、亜美が目に入った。浮かない顔をして窓の方を見ていた。
……そういや、今日、放課後遊び行くんだッけか。
――キーンコーンカーンコーン。
休み時間が終わっちまった。俺は大きなあくびをしてから、机の

中の教科書を引きずりだした。

- 2 -

筒がなく放課に入った。することがない。暇だ。

「亜美……、おーい亜美！」

亜美は俺の声に気付いて、こちらに接近してきた。

「……どうすんの？　遊ぶとか……」

亜美は思い出したように「ああ！」と俺の話を遮って、そのまま続けた。

「どうする？　……行く？　どっか。まぁ行く場所とかあんまないけど。……うん。なんか、やっぱ面倒だからいいや。アハハ」

「……」

「いや、ごめんね！　言い出しっぺなのに……、うん。また今度、では！」

「……おい」

亜美は帰った。俺は教室に取り残され、仕方がないのでサザンを口ずさむことにした。二分で飽きた。よく二分も持ったと思う。まぁ、教室には俺1人だったので、それだけ続けられたというのもある。馬鹿馬鹿しくなってきた。帰った。寝た。

……ま、こんなもんさ。

「……！」

気付いたら、メールが来ていた。

……亜美からだ。

「……な……ん……？？」

その摩訶不思議な内容は、寝起きの俺を覚醒させるのに十分な威力を持っていて、それでいてかなり馬鹿馬鹿しい。しかし、乗る価値はある。いや、どうせ手が余る程暇なんだ。やってやろう。

「……忙しくなりそうだな。これから」

そのメールにはこうあった……――

失意のメタファー

眼前にたたずむ男の名は鬼頭火山（きとうかざん）。本名は神崎冬也（かんざきとうや）。小説家として二十六歳でデビューしてから十六作の作品を世に放ち、去年発売された『鍵穴』は推理小説の金字塔とも称された。今年の冬で四十九歳になる彼は、まるで鬼のような、厳格なオーラをまとっているようだった。しかし、同時に彼は奇妙な失意に包まれていた。

篠原亜美は鬼頭から渡された一枚のメモをしっかりとズボンのポケットに入れて、鬼頭に深くお辞儀をした。

「約束、絶対守ってもらいますからね」

「もちろん。ただし、君が勝ったなら、の話だ。頑張りたまえ」

鬼頭の顔は先に待っている結末を見通しているかのように自信に満ちていた。しかしすぐに先程と同じ失意の顔に戻っていた。彼の自信を裏付けているものは解らないが、亜美の脳内にはそれが絶望に近いものだという漠然としたイメージが揺らめいていた。

「君も変わっているな。私は翼をもがれた鷹だというのに……」

それが、鬼頭が別れ際に放った一言であった。

鬼頭と別れた後、亜美はすぐに携帯を取り出してメールを打ちはじめた。

暁はファミレスでコーヒーを飲みながら二時間前の亜美のメールを思い返していた。

Ｄａｔｅ：１６：５２
Ｆｒｏｍ：亜美
Ｓｕｂ：大ニュース！！
今日は遊び行けなくってゴメンｍ（＿＿）ｍ
実は、鬼頭火山と真剣勝負することになりました～

暁にも協力してもらうよ
詳しくは直接話すから21時に昨日の公園で！
では　また後で（＾―＿―）ー☆

亜美のメールには、色々と不可解なポイントはある。ひとつは小説家鬼頭火山と亜美が互いに面識があるような表現が見受けられたこと。メディアに姿を見せない方ではあるが、仮にも有名小説家である。一般人と突然面識を持つとは考えにくい。それから、真剣勝負という言葉。どうすれば推理小説家と真剣勝負なんてことになるというんだろう。

亜美はいつも、他人と話すときは明るくしているが、独りのときは意外にクールな表情を見せる。その特徴はメールでも発揮されるので、彼女の真意や心境を一件のメールから判断するのは難しかった。

暁は先程読み終えた『鍵穴』を開くと作者の略歴を見た。出身県が同じということには気付いていたが、暁はそこから何かを推理しようとは思わなかった。亜美は先程から電話にもメールにも応えることはない。あくまで直接話すつもりらしい。その時に全てを聞き出せばいいことだ。

『鍵穴』を閉じると、暁はファミレスを出た。

約束の時間までは二時間ほどあった。することがなくなると、なぜか訪れてしまう場所が暁にはある。学校から十五分程歩いた所にある、御宝神社である。御宝神社は入口を案内する看板の脇から伸びる二〇〇段はある巨大な階段を上った所に建つ本堂が地元では有名である。縁結びの願掛けが昔から行われていたらしいが、今日では年に一度の夏祭りの日以外は二〇〇段もの階段を上ってまでここに来る人はそういない。

暁は階段を上り、御宝神社の本堂の前まで来ていた。しかし、暁

がいつも訪れる場所はここではない。本堂の周りには林が広がり、そのまま山に続いている。本堂の西に林を少し開いた道がある。だがこれを知っている人は地元でも少ない。林の中の小道を進むとすぐに林を抜ける。そこには一メートル位の高さの柵で囲まれた小さなスペースがあった。柵の向こうはなだらかな崖になっていて、この街の全体を見渡すことが出来た。

時が経ち、人々から忘れられた場所。ここから眺める街は美しく、世界の広さと狭さとを同時に感じさせる。

思い出は数えきれない。俺までここを忘れるわけにはいかない。ここは始まり場所だ。そして終わりの場所はあの病院。そうだ、俺は3年前から既に終わってしまった世界に暮らしている。目を閉じると、声が頭に響く。幸せだった頃の俺の声。それから、隣にいた「あいつ」の声。

なんでこうなったのか、俺は未だにそう思うことがある。不条理の中で生きる人間はいつ悲しみに襲われたとしてもおかしくない。解っていた。解っていたんだ。だけどやっぱり納得なんて出来ない。何度も誰かを憎んだ。誰かを憎まなきゃやっていけなかった。

涙が頬をつたう。俺はこの時代、この場所に、俺として生まれた。「あいつ」も同じだ。意味を与えられ生まれた命が意味なくして散ることは許されない。だから俺も醜く生きるしかないんだ、これから、ずっと。

かなり時間が経って、強く爽やかな風が吹き抜けた。

そろそろここを出よう。

公園に着くと、暁はベンチに横たわった。公園の時計は合っているかは怪しいが、九時二十分前だった。亜美はいつも時間ピッタリにやって来る。今度こそやることがなくなった。眠ってしまおうか……。暁は静かに目を閉じた。

暁は気付き始めていた。円を描いていた毎日が螺旋のように少し

ずつ変化し始めていることに……。

GAME

-1-

公園の時計は正しい時間を刻んでいなかった。暁が目を覚ましたのは公園の時計の針が九時四十二分を丁度差したそのときだった。暁は正しい時刻を確認するためポケットの携帯を取り出そうと手を動かした。

「……」

ふとした矢先、暁の手は動きを止めた。このとき、暁の脳内を渦巻いていたのはある種の既視感……、一般にデジャビュと呼ばれるものだった。

……何だ。どこかで……

そして暁は真相を悟った。

携帯に表示された時刻が二十一時三十分を過ぎた辺りで、ようやく亜美が公園を訪れた。

約束の時間を三十分オーバーだ。だが暁は反論しなかった。

「ゴッメ～ンっ！　遅れちゃった。ハァ、ハァ……」

亜美は走って来たのか、息が上がっている。膝に手をついて呼吸を正そうとしている。

……そんな急がなくてもいいのに。

「はぁー、……ごめんね。もう大丈夫だから……」

「あ……いや、無理しなくていいよ。俺も今来た所だし……」

亜美は人一倍責任感の強い女だった。故に、自分で設定した時刻に自分で遅れるなどもっての他、相手が待っていたとなれば尚更だ。

これまでの付き合いである程度、亜美の性格を知っていた暁は、細やかな嘘で少しでも亜美の罪悪感を取り払ったつもりだった。だ

が今回の嘘は、耳を澄ませばよく聞く常套句。
　こんな冗談で良ければ笑ってくれといった想いの込められた発言。これまでの関係から導き出せる最善の返答だった。
「……はぁ、ハハ。いいよ、別に。気にかけなくても……どうせ寝てたんでしょ？　ほら、寝癖」
　亜美に逆立った髪の毛を引っ掴まれながら、
「……なんだ、すべてお見通しか」
　と暁はぼやいた。

　たまに吹く涼しい夜風は、公園の外灯に照らされし木々をざわつかせ、二人の頬を優しく撫でる。ここ、『夜光（やこう）公園』には外灯が一つしかないが、その名の通り夜も明るい公園だった。オレンジ色に照らされた木々、砂場、地面、ブランコ、その全てが一様に美しく幻想的に感じるのは、暁が普段そういったモノを避けて生きていることを、如実に彼の胸に語らせる。だが、誰が見てもそれは美しい。
　二人は公園の隅にある四メートル程の小高い緑の山の頂上にいた。腰を下ろし、前を見据えていた。暁は唐突に放った。
「なぁ……、感じないか。こうしていると、なんだか、言葉には出来ない何かを……」
　その声は真面目だった。
　隣にいた亜美は暁の顔を覗き込む。声は続けた。
「こういった感覚が人間特有のものなのか……、はたまた他の生命、いや、生命だけに限らない存在全てが感じ取れるんだろうか。例えば、人間が明らかに他の生物と違うこと、それは大脳新皮質だ。わかるか？　そこは理性を司っているらしい……、あんまり詳しくは知らないが。でもなぁ、本能で感じるようなものじゃあないだろ、これは」
　真面目な顔をしたまま、暁は左に振り向いた。そこには、薄ら笑いを浮かべた亜美の横顔が在った。

「……面白いね。やっぱそうゆうこと考えてたんだ。……あのときも、……そーゆーこと考えてたんでしょ」
「あのとき？」
「ほら、あたしが初めて話しかけたとき」
「……ああ、あれか。まぁ、……うん」
そこで会話は途切れた。
一台の車がブーンと音を立て公園の前を通りすぎ、また一台通りすぎた。
亜美が口を開いた。
「じゃあ、そろそろ本題に入るよ」
「ああ……、でもちょっと待ってくれ」
「なに」
暁にはどうしても確認したいことがあった。だが、直接的にそれを尋ねるのは気が引けるというか、暁のような性格の持ち主には出来ない。いや、逆に彼のような性格の持ち主だからこそ問いだせることかもしれないが……。
「あの……さ、……お前……」
「……」
「……お前さ」
「うん、なに？」
「……」
「なんなのさ！？」
「あ～いや、暇だなぁーと……、思ってさ……うん、何でもない」
「はぁ？」
ハハハ、と濁し、暁は本題を施した。亜美は不満そうな表情を見せたが、本題に入ると　同時に活気の溢れた顔つきになった。

鬼頭火山の熱烈なファンであり、彼の作品全てを購入熟読した篠原亜美は、偶然に偶然を重ね、その賭けに勝った。

初めはただの遊び気分でやっていたその賭けの首謀者、佐藤静枝（さとうしずえ）は、亜美の同級生。学校は違うが、中学生のとき同じ塾に通っていたこともあり、尚且つ、当時クラスに知り合いのいない同士だった二人は席も隣だったため、必然的によく話し合う仲になった。後に二人は唯一無二の親友同士となり、中学を卒業以来、先週の土曜日まで会うことはなかった。

「久しぶりだね、シズ」

「……もうウチらも高二か。一年とちょっとぶりだよな。ッて、全然変わってねえじゃん！　お前～」

「アハハハ、シズだって変わってないよぉー、全然！」

女にしては男勝りな威勢と言葉遣い。そして男共を魅了するハイカラルックス。変わってないとは言われたものの、髪は金色に染められ、耳にはピアス。どうみても外見的には変わっていたが、亜美が変わってないと言ったのは静枝そのもののことだったんだろう。

「ふん、確かにウチは変わってねぇよ？　ウチ自身はな……、んで、この天才的な頭脳もね。キャハッ」

そう、亜美が静枝に惹かれた何よりもの理由、それは静枝の天才的な頭脳にあった。

端から見れば頭の悪そうなギャルにしか見えないが（もっとも、その辺のギャルなど足元にも及ばぬ程の美形であるが）その実態は全国共通模試トップ１０入り、県内では二位を誇る曲者だ。勿論、県内最高峰の高校にトップ入学、以来校内のテストでは一位の座を譲ったことは一度もない。

そんな静枝を亜美は尊敬していたし、羨望していた。

マックで一時間程おしゃべりし、その後デパートで買い物を終えたあと、二人は亜美の家へ落ち着いた。実は、静枝が亜美の家へ来

るのはこれが初めてである。亜美の部屋でゲームをしたり、パソコンをいじったりしながら談笑していた二人だったが、小一時間も経てば飽きが回ってきた。口数は少なくなり、静枝はとうとう気になっていたことを口にした。
「アミさぁー、彼氏デキた？」
「え？　……できないけど」
「ふーん」
ルックス的には男ウケする顔の亜美だったが、告白されたことはまだ1回しかなく、告白したことも1回しかない。どちらの場合も、失恋という形で幕を閉じたのだが……
「そぉなんだ、はん。好きな人もいねぇワケ？　いるべ」
「えー、どうなんだろう。好きってゆうか、うん……」
好きな人、その言葉が耳に入ってきたとき、亜美の脳裏には確かにある異性の顔が浮かんできたがそれが真に「好き」という感情なのか、疑わしいところだった。
「わかんない」
と言って、静枝にも、自分自身にも誤魔化しを与えることにした。
「はーん……あー疲れた」
静枝はだらしなく床に仰向けに倒れた。膝を立てていたので短いスカートは翻り、ピンク色のファンシーなパンツが亜美には丸見えだった。
「パンツ、見えてるよ」
「う～、ん、ん……んん？」
「……ん？」
「あ！」
静枝の目は、頭上の棚に置かれた本に釘付けとなった。
その本のタイトルは、
「鍵穴！」
である。
「ああ、それ、なに？　知ってるの？　シズ」

物語の発端は、常に偶然が付き物だ。今回の場合も例外ではない。
「知ってるも何も、これは……」
聞いている者の興味をそそるそのくだり……
亜美は『鍵穴』を高評価しているだけあって、俄然聞き入る。
そして、放たれた一言は、
「あんたこれ知ってたの」
であった。
亜美の肩から力が抜けた。
「……なんなのさぁー。あたしはねー、こう見えて鬼頭火山の大ファンなの。あの人の作品全部読んだんだから。その辺のファンにはファンと語らせないわよ」
言い終えて、亜美はニヤリと笑った。その目は強い自信に満ち、鬼頭火山についてなら何でも聞きなさいといった雰囲気を醸し出していた。
そんな亜美を見て、静枝は上半身だけを起こし、こう言った。
「ぢゃあ、ア・タ・シとしょーぶ、してくれないかしら?」
その目は、亜美よりも強い自信で満ち満ちていた……

数刻の時が経った。
時刻は夜の十時を回っている。
「……負けました」
その部屋で行われていた勝負。その勝者は……
「あたしの勝ちね」
篠原亜美だ。
「……いや、シズ、なかなか強かったよ。まさか、シズがあんなに鬼頭火山について詳しいだなんて……」
亜美は驚いていた。

そのゲーム内容はこうだ。

単純極まりなく、鬼頭火山の作品について問題を出し合い、より多くの正解を答えられた方の勝ち。互いに二十個の問いを出題する。

亜美の部屋には『鍵穴』を含めた鬼頭火山の作品全十六作があったので、解答の真偽について困ることはなかった。

ちなみに、二人はこの勝負においてあるモノを賭けた。

亜美は「世界の十本指に入る鬼頭火山のファン（自称）」を、対する静枝は「ウチと鬼頭火山に関するある重大な秘密」を賭けた。

亜美は負ければ鬼頭火山について胸を張って語ることを許されず、静枝は負ければある重大な秘密について亜美に打ち明けなくてはならない。

勝負は互いに一歩も譲らず、最終局面へと突入した。

静枝はベッドに飛び乗り、真剣な表情で床に正座し前だけを見つめる亜美を立った状態で見下ろし、右手を腰にあて、左手で亜美を指差す。

「はぁぁ。これで最期ねぇえ～。ふふふ。ふふ。行くわよ、はぁッ……鬼頭火山のデビュー作『鬼頭火山』！！　あの作品の最後の一文を読み上げなさい」

「……！！」

一瞬、亜美は動揺した。が、亜美にもプライドがある。

「……その時、神は我々を見ていたかどうかなど問題ではなく、善悪の創造を図った精神こそ、真に罰せられるべきではないのか……いや、常々、人など自分がいちばん可愛いので、だからあのとき、あのとき市川はあの部屋の鍵を閉めてしまったんだろう……でしょ？　シズ……」

言い終えて、亜美はベッドに立った静枝を見上げた。

静枝は静かにベッドから降りた。そして、ヘナッと座り込んだかと思うと、

「……あーあ。全問正解か……ちぇ。あんたやるわね。もういいや。ウチの負け」

と言った。
「え？　でも、次あたしの質問に正解したら、サドンデスに持ち越しッてなるんじゃ……」
「いいよ。もう、メンドッちーから。はぁ～あ……賭けはあんたの勝ちだヨ。アミちゃん……負けました」
「あは……凄いあたし、あのシズに勝っちゃったよ。あたしの勝ちね……いや、シズ、なかなか強かったよ。まさか、シズがあんなに鬼頭火山について詳しいだなんて……あ、あ。いいの？　やった！　あたしの勝ち！！　……ッてことは、ひ、秘密を、教えてもらうよッ。わーい……」
静枝は静かに言い放った。
亜美にとっては、重大である秘密を……
「わたくし、佐藤静枝は、『鍵穴』の作者である鬼頭火山の……実の姪でぇーす！」
そう言い放った静枝の笑顔は、同じ女の亜美も見とれる程可愛く、いやそれ以上に放たれた言葉に驚愕し、半ば昇天しかけた。

- 3 -

「アミ？　おーい……。篠原さーん……」
「……はい？」
亜美は五秒程経ってから自分が静枝に呼ばれているのに気が付いた。
「『はい？』じゃあねえよ。普通そんな驚く？」
「驚くよ～。全然知らなかったもん」
「はいはい、ゴメンゴメン。ほら、ウチッて秘密主義者でしょ？」
静枝は可愛らしく笑ってみせたが、亜美は誤魔化されなかった。
「初めて聞いた」
亜美がむくれていると、静枝は亜美の手を取って言った。

「はは…バレた？　おじさんには誰にも言うなって言われてたからさ。……それより、アミに頼みがある」
「頼み？」
あの静枝が頼み？　亜美は静枝との思い出を簡単に思い返してみたが、静枝が亜美に真剣に頼みごとをすることなど今までになかった。
「実はね……先月、おじさんが小説家辞めるって言い出してさ」
「ええ！？　おじさんって、鬼頭火山が！？」
亜美は静枝が言っていることが信じられなかった。鬼頭火山は現在４９歳。小説家としてはまだまだやっていけるはずである。
「ウン。何でだろーね……。ウチにはまだまだ書きたいって顔してるようにみえたんだけど。訳聞いても、『そんなのかんけーねー』っつって」
「小島……よしお？」
亜美は真剣にたずねてしまった。
「……はぁぁ。アミさ……鬼頭火山が若干時代遅れのギャグかましてたらどう思うよ？」
静枝は呆れ顔でそう尋ねた。
「ファンとして、受け入れるべきかな」
亜美がまたもや真剣に答えてしまったので、静枝は自分がふざけてアレンジした鬼頭火山の発言を訂正することなく、この話をスルーすることにした。
「で、頼みっていうのはね……」
亜美は静枝にも解決できない何かに無性に興味があった。次の言葉までの数秒間、亜美の部屋の中は緊張感に満たされていた。そして静枝はついに口を開いた。
「アミにおじさんを説得してほしい」
「ええ！？　あ、あたしが？」
無茶振りもいいところだった。家庭内で解決できないことをどうして自分が解決できるだろう。

「無理だよぉ～。あたしはファンだけど家族じゃないんだよ？　いきなり知らない人に小説家続けてくださいなんて言われても納得いく訳ないしー……」

一瞬鬼頭火山に会えるかも、とも思ったが説得という条件が付く以上簡単に引き受けるわけにはいかなった。しかし、見たところ静枝は勝算があるような顔をしていた。

「ウチはね、アミ。どれだけ鬼頭火山という小説家とその作品を知っていても、親戚である以上あたりまえになっちゃう。それに誰にも言ってなかったけど、ウチは生まれつき瞬間記憶能力の持ち主だから一回小説読めば頭ん中はガイドブックみたいなもんだからさ。しかーし、亜美は本物の鬼頭火山ファン、しかもマニア級のね。おじさんが元気ないときはいつもウチがおじさんの作品の知識を聞かせて励ました。でもおじさんはウチが気ぃ使って励ましてたのに気付いてるから……。おじさん、本物のファンに会えばきっと小説書く気になる。だから、お願い！！」

「シズ……」

静枝がここまで押してくるとは思わなかった。瞬間記憶能力にも驚いたが、静枝がここまで真面目な話を出してくることに驚いた。いつもならこんなことはまず無い。

実際の亜美の気持ちとしては静枝の力になれるなら協力したいという方向へ変わってきていた。依然として自信は無いが……「決断の時だ」そんな気がした。亜美は腹を決めた。

「分かりました。負けたよ、シズ。やってみることにする。鬼頭火山とも話してみたいし……ね。でも、シズ。駄目かもしれないよ。あんまり期待しないでね？」

「分かってる。これが最後の手だから。人事を尽くしてなんとやら……だよ。じゃあ後で話は通しておくからな、アミ君。おじさんウチのこと大好きだから、絶対最後にはＯＫだすから安心してくれてダイジョブだから。日程と住所は後でメールするね～」

「あ、うん……」

……待て。今何かおかしな事を言ったような……！！！
「ま、待った！！　シ、シズ、住所って……、シズは一緒に来ないの！？　あたし独り？？」
「当たり前ッしょ。ウチがいても気ぃ使ってるっていう状況を顕著に表しちゃうだけでしょ？　というわけで、ファイトッ！！　あみりん！」
静枝がガッツポーズをしている間、亜美は数十秒前の自分の決断が思っていた以上に大きなものだったと気付いた。ファイト、アミちゃん……自分を奮い立たせ、亜美は深呼吸をした。
当たって砕けよ、と天の声が聞こえたような気がした。

- 4 -

「なるほど」
暁は亜美の話を聞いてまず、そう口にした。
これまでの亜美の話をまとめると、佐藤静枝という亜美の親友に頼まれて、彼女は小説家鬼頭火山の引退を止めさせる説得にいくことになったということになる。だがその後、何らかの理由によって説得するはずの鬼頭火山と真剣勝負する流れになるわけだ。
「……で、推理するにお前は今日の朝か昼に佐藤静枝から連絡を受け、放課後鬼頭火山宅に向かった……」
「うん。それで今日は遊びに行けなくなっちゃったのよ。朝、シズからメールがあって、今日なら予定が空いてるって」
亜美は続けて、その後起きたことを話そうとした。
「それでね、ここまでが鬼頭火山と戦うことになる話の前の予備知識でー…」
「待った……少し休憩させてくれ」
暁はすかさず止めた。話の全容はしっかりと掴んだが、おそらくここから先が最も大事なところだろう。落ち着いてから聞きたかっ

た。
「喉渇いたろ？　何か飲み物買ってくるよ。何がいい？」
実際、亜美は走ってここに来た上に、ほとんど喋りっぱなしだったので苦しそうだった。こんな時間になってまで俺に協力を求めるとなると、よっぽど勝負の勝利条件が難しいのだろう……っとここまで至って自分の力を過信し過ぎていることに気付き、恥ずかしくなった。
「うーん……。じゃあ、コーラ。……あっ、カロリーゼロのだよ。」
「カロリーゼロって、別にお前太ってないだろ」
「あんたの眼は節穴ですか。現状維持は進歩なり…。ほら、メモって！」
つまり、どうやら少し太ったらしい。もう少し余裕はあるが放っておくと太ると言いたいのだろう。
「何がメモって、だよ。他は？」
「特に無い」
「じゃあその辺の自販機でいいか……。じゃ、行ってくる」
「うん。ありがと」
暁は夜光公園の裏の自販機に向かった。
現状維持は進歩……もしそうなら、俺は一応進んでいるのだろうか？

午後十時になると車の通りは先程よりも減っているように思われた。亜美は暁が先程渡したゼロカロリーのコーラを半分ほど飲み干して、話し始めた。
「あのさ、暁。あたしなんかが鬼頭火山の運命を変えるようなことしていいのかな？」
亜美は迷っていた。大の大人が辞めると言っているのだからちゃんとした理由があったのだろうか。しかし、亜美は一度鬼頭火山との勝負を決意しているのだ。暁は亜美の決意を信じたかった。

「知ってるか？　ビッグバンにより宇宙が無数に誕生するとして、その中で生命が存在する宇宙が生まれる確率は十の二百二十九乗分の一なんだ。さらにその生命がオレたちみたいな人になる。これは偶然か？　オレは必然なんじゃないかって思ってる。神とか、造物主とか、そういうんじゃなくて、オレたちは生まれるべくして生まれてきたって思いたい。だから、なんていうか……あたしなんか、とか言うな。お前がやると決めたならそれも必然なんだ。一人の小説家の運命を変えることが意味ある自分を証明するひとつの方法なのかもしれない。そして、お前の運命すら変えるものなのかもしれない」

　一歩間違えれば矛盾をはらみそうな理論だったが亜美を導くには十分だった。亜美は俺の言いたいことは察してくれただろう。

「そっか。うん……じゃあ、やってみようかな。シズの為にも、自分の為にも、暁の為にも」

「は？　俺も？」

「そうだよ。だって、あたしの行動が暁の運命を変えるかもしれないでしょ？」

「まあ、そういうことになるけどさ……」

　一瞬、亜美は俺の過去を知ってるんじゃないかという錯覚を覚えた。

「それじゃ、そろそろ後半戦といきますか」

　と、亜美が話題を本題に戻したので、暁も決意を持って話を聞くことにした。ここまで聞いたならもう後には引けない。

「ああ。話してくれ」

　月明かりの中、亜美の声は静かに語りだした。

- 5 -

　亜美は学校から出てから一旦アパートに戻ると、私服に着替え十

分足らずで自宅を後にした。鬼頭火山と会う約束をしている時間は午後四時過ぎ頃だった。六時限目の化学が終了した後、亜美は暁に全てを話そうか迷っていたが、結局話さずに出て来てしまった。独りでは心細いが複数人で押しかけるわけにはいかない。覚悟を決めるしかなかった。

鬼頭火山の邸宅は亜美や暁の住む地区から電車で二十分ほどの所にある。本名は神崎冬也で、もちろん表札にも神崎と書いてあるはずだ。

家を出て、三十分程時間が過ぎ、亜美は静枝から知らされていた住所まで来た。そこにある家は周辺の家の三倍近くある豪邸で、いかにもといった感じだった。壁は大部分がグレーで外から見える窓は十個。全体を見渡すと、左右対称で築十五、六年の家に見えた。

いざチャイムを押すとなるとやはり緊張した。押すか押さないか悩んでいると、不意に後ろから声がした。

「君が静枝の親友の篠原君だね？」

「！！！！」

亜美が振り返ると、そこには鬼頭火山が立っていた。雑誌で数回見た程度ではあったが、ファンとして間違えるはずは無い。

「悪いね。裏庭にいたもので気付かなかったよ」

「い、いえ……私こそ、突然会いたいなどと、わがまま言って……」

「気にすることは無い。静枝から紹介は受けているよ。私の世界一のファンだって？」

シズのやつ、ハードル上げたな……！！

「はは……。自称ですが……。それより、一般人と会ってもいいんですか？」

「静枝が世話になってるというなら、普通のファンとは違う。とはいえ、今回は特別だがな」

コワいイメージが多少あったのだが基本的には気さくなおじさんのようだ。大物のオーラは出ているが……。

「さあ、あがりなさい。私に話があって来たのだろう？」

「あっ、ハイ。おじゃまします」
来る前に考えたシナリオとは既にかなり外れていた。もはや、その場で対応するしかない。
亜美はついに鬼頭火山の自宅に足を踏み入れたのだった。

鬼頭に案内された部屋は予想していたよりもずっと小さく、亜美はそこが小説を出版する際の出版社側との打ち合わせなどで使う部屋だと推測した。部屋にはテーブルと椅子があるだけである。室内は快適な温度に設定されていたので、鬼頭はあらかじめ亜美をこの部屋に招き入れることを決めていたようだ。
「静枝とはいつ出会ったのかね？」
「中学の頃です。凄いですよね。静枝ちゃん、とっても優秀で」
鬼頭が静枝を溺愛していると聞いていたので、そんな話題を振ると「ハハハハ。まあ、私の娘ではないが、小さな頃からあの子に勉強を教えていたからなぁ」
と、まんざらでもなさそうだ。
その後五、六分互いのことを話し、ついに話は本題に入った。
「ところで、君の話したいこととはなんだね？」
このとき亜美は鬼頭が自分の言おうとしていることを察しているという確信を得た。彼の瞳はまさにそれを語っているのである。
「もうお気づきだと思いますが、私は静枝からあなたが小説家を辞めると言っていることを聞いています。私も静枝と同じ意見、つまり神崎さんには鬼頭火山として小説家を続けてほしいと思っています」
「なるほど、やはり静枝の頼みだったか。だが、いくら君が私のファンであり、静枝の親友だとしてもそれだけは従うわけにはいかんのだよ」
「……なんで、辞めちゃうんですか？」
「君には関係のないことだよ」

鬼頭はやはり本気のようであった。しかし、同時に静枝が言っていたように小説家をまだ続けたいという様子も見受けられた。
「静枝にも関係ないことですか？　静枝も言っていましたが、私にはあなたが小説を書きたがっているように見えます」
鬼頭はしばらく黙り込んだままであった。そして、彼は亜美の目をじっと見て言った。
「君にはわからない何かが起きている、そう解釈してほしい。決して作品が作れないわけではないのだ。ただ、もう意味が無いのだよ。私にはもう小説を書く意味が……ない」
亜美は、今の鬼頭火山は自分の会いたかった彼ではないと気付いた。もう、遠慮する必要はなかった。
「今のあなたは偉大な作家ではないです」
突然の反撃に鬼頭はかなり驚いた様子だった。亜美は続けた。
「あなたは書きたい小説が書けるのに、それを意味がないなんて言っている。ファンがあなたのことを心配しているのに理由も話さずに勝手に、ひとりで全部終わりにしようとしている。何を恐れているんですか？　世界一のファンを、あなたは捨てようとしてるんですよ！！」
「……悪いね。私は君一人のためにもう一度筆を取ろうとは思わない」
「神崎さん。鬼頭火山の世界一のファンは私じゃないです。あなたのことが本当に大好きな人は、世界一のファンは……佐藤静枝です」
亜美は鬼頭の目をしっかりと見て彼の返答を待った。
「……」
一分程考え鬼頭は何かを決意したようだった。
「負けたよ。君がそこまで言うとはね……。ただし、条件がある」
「……条件……ですか？」
「私と真剣勝負をして、君が勝利したら、私は君たちに全てを話すとしよう。小説を続けるとまでは約束できんがね」
「本当ですか！？　ありがとうございます！！　そ、それで、真剣

勝負というのは……」
　鬼頭はテーブルに置かれた紅茶を一口飲んで続けた。
「単純だ。私が作った暗号を解き、その暗号が示す場所にたどり着けば君の勝ちだ。ただし、制限時間は二十日後の七月十四日までだ。その日に私は暗号が示す場所に来るだろう。君がそこに来なければ今後君と会うこともないだろう」
「鬼頭火山の作った暗号をたったの一人で解くんですか？」
「友人と協力しても構わない。だが静枝と協力するのはだめだ。静枝はその暗号に似たものを一度解いている。二十日後までは、静枝と話すことを禁ずる。私と君が勝負することになったことは私の方から静枝に話しておこう」
「……分かりました。やりましょう。暗号は全部でいくつですか？」
「複数個あるが、それぞれ示す場所は一つ、要するに第一の暗号の示す場所に第二の暗号があるといった感じだ。それ以上のヒントはやれん」
　複数個、その言い方は実に抽象的で、勝負に負けないために数十個もの暗号を作るのではないかという不安を覚えたが、こればかりは鬼頭の推理小説家としてのプライドが健在であることを信じるしかなかった。
「はい。これで……十分です。絶対にこのゲームに勝ってみせます」
「健闘を祈っているよ、篠原君。それではまず、第一の暗号の隠し場所を君に教えよう」
　そう言うと、鬼頭はテーブルの下に付いている棚から十センチ四方のメモ用紙とボールペンを取り出すと、メモになにやら文字を書いて、二つ折りにして亜美に手渡した。
　亜美が中を見ようとすると、鬼頭はそれを止めた。
「待ちなさい。それを見るのはここを出た後にしてくれんかね。今いろいろと質問されてうっかり答えを言ってしまったら話しにならんのでね」
　断る理由もないので亜美はそれを了承した。

「さて、これでもう話は終わりかな？」
「はい。いろいろありがとうございました！！」
その後は自然と亜美が帰宅する流れになった。
玄関を出ると鬼頭はふと重要なことを思い出したようだった。
「そうだ、篠原君。重要なことを言い忘れていたよ。暗号を解いても今日は行動しないでくれ。君に先回りして暗号を隠す必要があるだろう。明日は学校はあるかね？」
「ありますよ。明日は木曜なので」
「では、君が学校にいる間に暗号を設置するとしよう。つまり君が動いていいのは明日の夕方頃からだ。いいね？」
「分かりました。明日の放課後以降からということですね」
「そうなるな。まあ、せいぜい頑張ることだ」
鬼頭は門のところまで送ってくれた。亜美は、
「約束、絶対守ってもらいますからね」
と、最後に確認した。
「もちろん。ただし、君が勝ったなら、の話だ。頑張りたまえ」
どうやら、努力しだいではなんとか攻略できる勝負のようだ。少なくとも鬼頭の言葉からはそう感じられた。
「……君も変わっているな。私は翼をもがれた鷹だというのに……」
鬼頭の自らを嘲笑うような言葉に何か深い意味がありそうではあった。が、聞いても教えてくれそうになかったので、そんなことないですよ、と軽く受け流しておくことにした。
「それでは二十日後に、また。今日はありがとうございました」
「そうなればいいがね」
そんな会話を済ませ、亜美は鬼頭の家を後にした。

- 6 -

時刻は午後十時十五分、夜光公園は静まり返っていた。

「あきらぁ、疲れたんですけどー」
本当にこの女が果敢に鬼頭火山に立ち向かい、大冒険をしてきたのかと疑いたくなるほど気の抜けた声だった。しかし、ここまで話し続ければ疲れるのもおかしくはないだろう。
「ごくろーさん。それで亜美、暗号ってのは？」
「うん。ちょっと待ってね……」
亜美は財布を取り出すとその中から一枚の紙切れを引き抜いて暁に手渡した。

「初めが肝心である」
市場・内閣・最果て・大雨・ノア・図案・書斎・館長・ニアミス・行雲・ケア

『鉢』の中に、『位置』あり。『位置』とは『位置・灸・霊』であり、『禄・霊・灸』のパーツから成る。『荷・酸・霊』と『荷・酸・位置』番目のパーツは間に道標を持つ。

紙にはそう書かれていた。
「解る？」
亜美が横から覗き込んだ。
「いや、そんなすぐには……お前は？」
「うーん……後半のカッコは多分数字を意味してて、『道標』は次の暗号のことだと思う」
亜美の推測は暁の推測と完璧に一致していた。
「この暗号はおそらく、前半の単語の羅列を解かないと後半の文章が意味をなさないタイプだな。鬼頭火山の小説でも殺人予告であったやつだ」
しばらくの間二人は考え込んでいたがさすがに長居しすぎた為、時刻は午後１０時４５分を回っていた。
「亜美、もう遅いから続きは明日だ」

「そうだね……明日は二人で授業サボっちゃおうか」
亜美は人差し指を立てて提案してきた。
「授業中にこっそり出来るだろ」
見なくても亜美が不満そうにしているのがわかった
「何でそうなわけ？　ノリ悪いな～」
「俺がツッコミいれなきゃ暴走するだろーが」
「あたしを何だと思ってんのよ、キミは。まあ、必要ならば無理矢理連れ出すし。……じゃ、そろそろ帰るね」
「送ろうか？」
亜美の性格からして断るのはわかってはいたが一応聞いてみることにした。午後11時はさすがに遅いと思ったからということもあるが。
「ありがと。でも、いいよ。家近いから」
「そうか。……じゃあ、気をつけて」
「また明日ね、協力ありがとう」
そう言うと亜美は公園から外へ出た。了承したつもりはないが、どうやら協力することになったらしい。亜美は振り返って手を振っていた。
この二日間で繰り返しの毎日が大きく変貌していた。もしかしたら、本当に亜美の行動が自分の運命を変えるかもしれない。暁は手を振り返しながらそう思い始めていた。
ふと、今日の朝見た幻想的な夢のタイトルが浮かんできた。「始まりの世界」それはまさしくあの夢の世界を表したタイトルだった。始まり……か。いったい何が始まるのか。どこへ行き着くのか。この思考が過去との戦いを余儀なくさせそうで、怖かった。
あの夢の中で、もし扉を開かなかったらどうなっていたんだろう。暁はしばし、月光に包まれながら幻想空間の中に入り浸っていた。

知識と閃きと――

- 1 -

目を覚ますと、カーテンから光が漏れていた。時計は八時二十五分を差している。外崎暁はベッドから降りて伸びをするともう一度時計を見た。

ヤバイ……絶対遅刻だろこれ！！！！

暁は着替えるとすぐに家を出て、走った。どうせ冷蔵庫にはろくなものは無いはずだ。朝食をとるつもりはなかった。にしても、一昨日も同じルートを走ったような……。

「おーい！！」

後方から聞き覚えのある声が聞こえる。関わりあいたくないので、そのまま加速して振り切ることにした。

一方、暁の後方を走っていた男、木原晋也（きはらしんや）は暁が加速したのを見てにやりと笑った。

「にゃろ～、この俺から逃げようってか」

晋也は暁のクラスの違う同級生だ。「典型的チャラ男」と呼ばれているほどの、だらしのない若者の代表である。

晋也が暁に追いついたのはその一分後だった。

「ちっ、追いつきやがったな」

「逃げんなって。もう遅刻の心配はないだろ？」

事実、晋也から逃げることで多少の余裕は生まれたようだ。暁はここからは歩くことにした。

「お前さ、あんまり俺に近づくなよ。亜美にも俺たちが仲良しだと勘違いされてんだぜ」

暁は露骨にいやな顔をしてみせた。

「ひでーなー。ウチの学園の数少ないおな中だろ～？」

「死語だろ、それ」

「ナニナニ？　亜美ちゃんと二人きりで遊びたいわけ？」
こいつといるとイライラする。心の底からそう思っていた。
「お前と一緒にいるのが嫌なだけだ」
「ふーん。俺はてっきり『あのこと』を忘れて楽しくやっていく決心が出来たのかと思ったけどね……」
「……」
暁は立ち止まった。
「もう一度言ってみろ、晋也」
暁の目は鋭い視線を晋也に向けて放っていた。
「お、おい……。冗談だって……。お、お前の気持ちはマジでよく分かってるさ。悪かったよ……な？」
「あのこと……亜美に話すんじゃねーぞ」
「ああ。分かってるよ。……ほ、ほら、遅刻すんぞ。俺は先行くかんな。遅れんなよ」
晋也が去ったのを確認してから、暁はまた走り始めた。

「セーフだよ、暁。気を付けないと、今日は授業抜けるんだからさ」
チャイムと同時に着席すると、亜美が近づいてきてそう言った。
「授業抜け出すのと、遅刻すんのはカンケーないだろ？」
「あるよ。先生に見つかったら抜け出しにくくなるもん」
「どっちでも同じだろ……この学校、学力はまあまあだけど、ゆるいし」
つい、亜美を味方する発言をしてしまい後悔した。
「じゃ、決定。先生来る前に抜けよ？」
まさか、とは思っていたがどうやら本気の脱出を図るようだ。
「マジでやんのか？」
「晋也に無理やり連れてかれたってことにするから平気だよ」
その一言が決定打だった。

「へぇー。なるほどね。……それじゃ、了承しよう」
「やった！　そうこなくちゃ。じゃあ、屋上にでも行きますか」
ホームルームを無視して、暁と亜美は屋上に向かった。亜美に、授業を受けたくなかっただけだろ、と疑いの目を向けながら。

屋上には爽やかな風が吹いていた。広いスペースにベンチが1つという殺風景な場所ではあるが学校という縛られた空間から独立した空間であるような雰囲気があった。校庭では、一年生がスポーツテストをしていた。二人はベンチに腰掛けると、それぞれコピーしておいた暗号を取り出し、解読を始めた。
「で、亜美？　暗号は解けたのか？」
無理だと分かっていたが、試しに聞いてみると
「無理だよー、全然解んないし」
と予想どおりの返答だった。
「ねえ、『ノア』ってなあに？」
唐突な質問だった。暗号の前半、言葉の羅列の中にある「ノア」のことをいっているのだろう。
「多分、聖書のノアの箱舟のエピソードに出てくる『ノア』だろ」
「やっぱりそっか。でもさ、あの羅列ってつながりないんだよね」
正直、ヒントなしでは難しいように思われた。犯人を当てるのは得意な暁だが、暗号となると話は別だ。それに、どう見ても言葉の羅列に共通項はなかった。
「もう無理。あたし、頭痛くなってきた」
「ああ、何も思いつかない。参ったな、ホント」
時間はただ過ぎ去っていくだけで、何のヒントもくれやしなかった。くだらない話をしながら数時間が過ぎた。その間も絶えず暗号を見ていたがインスピレーションはなく、傍から見たら怠惰な気持ちに負け、だらけている高校生でしかなかった。暁はいつの間にや

ら座っていたベンチから追い出され、そのベンチには亜美が寝そべって、退屈そうに足をバタバタさせていた。
「お昼何食べる？」
「学食でカレー」
「ふーん。あたし、パンでいいや。あっ、そういえば、パンといえば昨日学校の帰り道にあるパン屋で松田見たよ」
暁は松田と聞いてピンとこなかった。知り合いに松田なる者がいただろうか？
「誰だっけ？」
「合唱部の顧問、英語科の松田だよ」
亜美は呆れ顔で言った。
「ああ～。いたな、そんなの。一年のとき英語の担当だったやつだよな、確か。でも、アイツがどうした？」
「別に。見ただけ」
「なんだ、不倫でもしてたのかと思った」
完全に暗号の話から逸れていた。一瞬、亜美は暗号の存在を忘れてるんじゃないかと思ったが、次の一言でそれが杞憂だったと知った。
「どうせ解んないしさ、単語を英語にでもしてみる？」
もともと関係のないものでも変換することで共通項を見つけられるかもしれない。可能性は低いかもしれないが、念のため試してみても悪くはなかった。
「ちょっと待ってて」
亜美は暗号解読のために電子辞書を持ってきていたので、スクールバッグから取り出し、単語を英語に直し始めた。
二、三分経って亜美はメモを渡してきた。
「どう？　何か気付きそう？」
メモの左側には日本語が、右側には英語が書かれていた。

市場　ａ　ｍａｒｋｅｔ

内閣　ａ　ｃａｂｉｎｅｔ
最果て　ｔｈｅ　ｆａｒｔｈｅｓｔ　ｌａｎｄ
大雨　ａ　ｈｅａｖｙ　ｒａｉｎ
ノア　ｎｏａｈ
図案　ａ　ｄｅｓｉｇｎ
書斎　ａ　ｓｔｕｄｙ
館長　ａ　ｄｉｒｅｃｔｏｒ
ニアミス　ａ　ｎｅａｒ　ｍｉｓｓ
行雲　Ｆｌｏａｔｉｎｇ　ｃｌｏｕｄｓ
ケア　ｃａｒｅ

「うーん。やっぱり解んないな……ん？」
ふと、暁はこの表に間違いを見つけた。
「なあ、亜美。『ｎｏａｈ』って人名だから『Ｎｏａｈ』だろ？」
「あっ、そーか。そうだよね、書き間違えちゃった……」
この瞬間暁はある重大なことに気が付いた。最初の文字だ……。
全ては「初め」に記されていたのだ。
「謎は全て解けた！」
暁は何処かの探偵漫画の主人公の気分で声高々と言い放った。
「えっ、マジですか！！　何？　何が分かったのよ？」
「言ったろ。全てだ」
「もー！！　めんどくさいなー！！　早く言いなさいよー」
亜美は真相が知りたくてしょうがないようだ。
「亜美、お前、書いてて気付かなかったのか？　このメモを縦に読んでみな」
「……えっ、縦に？　……あっ！！！！」
それぞれの単語の初めの一文字を読み繋げると「市内最大ノ図書館ニ行ケ」となるのだ。つまり「初めが肝心である」とはそういうことだった。
「凄い！！　さすが暁。よく思いついたね？」

「お前が『Ｎｏａｈ』を小文字で書かなかったら解らなかったよ。縦読みなんていきなり思いつけないし」
　偶然ではあったが、この一歩は大きかった。
「よおし。あとは後半の解読だけだね」
「いや、その必要はないよ」
　暁の一言に亜美は目を丸くしていた。
「な、何で？」
「図書館の棚に数字が書いてあるのを見たことがあるだろ？　アレは日本十進分類法っていう方法で本を分類して分野ごとに本を置いてるからなんだ。つまり、後半の数字は分類を表している」
　暁はざっと説明しながら携帯電話を取り出してネットに接続した。
「なるほど……でも、それぞれの数字が何を表してるのか分かるの？」
「それを今から調べるんだよ」
　暁は検索フォームに「日本十進分類法」と入力して、『鉢』『位置』『位置・灸・霊』つまり、『８』『１』『１９０』が分類法上で何を示すのか調べた。
「よし！　分かったぞ。『８』は『言語』に関わる本、『１』は『哲学』に関わる本、『１９０』は哲学の中の『キリスト教』を示してる。『禄・霊・灸』のパーツとはおそらく『６０９』のページのことだろう。となれば『荷・酸・霊』『荷・酸・位置』は『２３０』『２３１』ページということになる」
　それを聞くと、亜美は実際に暗号を訳してみせた。
「さっき暁が言ったことを暗号文に反映させてみるね。『市内最大の図書館に行け。言語に関する本の棚の中に哲学に関する本が混ざっている。哲学に関する本とは詳しく言えば、キリスト教に関する本であり、六〇九ページからなる。その本の二三〇ページと二三一ページの間には次の暗号が隠されている』」
　亜美の訳はほとんど正しいものであると、暁は確信していた。
「ついに、解いたな。意外に早かった。まあ、最初の暗号だけど…

…」

「うん。暁と協力して正解だったみたい。学校終わったらすぐに図書館だよ。棚の整理とかされたらシャレになんないからさ」

亜美の言うとおりだった。今回の暗号を解いて分かった。この勝負は時間との戦いでもあるということが。

屋上の爽やかな風は二人にとって追い風であるようであった。

「亜美、勝つぞ、この勝負」

「うん。絶対ね」

今、鬼頭火山との真剣勝負の火蓋が切って落とされた。

知識と閃きと――（後書き）

縦読みは理解していただいたと思います。
さて、問題は日本十進分類法のくだりですが、解ってもらえたかなぁ。
まさに「知識と閃きと」が必要なわけです。
ある程度の運と発想力、知識がないと解けない仕組みになってるので、僕の暗号は。
現文の先生に「図書館の分類の数字何て言うんですか」って質問したなぁ。
懐かしいですｗｗ

数学の叡智

- 1 -

暁と亜美は、学校が終わるとすぐに市内最大の図書館へと向かった。

市内最大と言われ思いつく場所は一つしかない。そもそも、図書館と言われて思いつくのは二人にとっても共通である。

「あそこでしょ？　市内最大って」

「ああ、てかそこしか俺は知らない……名前知らないけどな」

なんと、学校から歩いて二十分の地点にある、二人もよく利用する図書館だ。そこにあの有名小説家の鬼頭火山が自分たちに暗号を残した……まるで宝探しゲームだね、と亜美が小さく囁いた。

やはり平日の夕方頃とあって、市内最大の図書館と言えど人影は少なかった。館内は広い容積を誇る反面ひっそりとし、周囲を見渡しても数人いるかいないかといったところである。一階には主にビデオ、ＣＤ、ＤＶＤなどが置いてあり、二人の目的は二階のブックコーナーだ。

「いよいよだな」

「うん……」

亜美はここに至り、一抹の不安に駆られた。

……もし、ハズレていたらどうしよう。

「亜美」

「……えっ？」

「心配するな。きっとあるよ」

「……あ、うん」

このとき暁が発した言葉は、亜美に想像以上の効果をもたらした

と、果たして暁は感じ取ることができただろうか……。
亜美は階段を上る暁の背中を見つめ、意味もなくニヤけてみせた。

目当ての本は言語に関する本棚に隠れている。まずはその本棚を探さねばならない。だが市内最大とは伊達ではなくその広さには肩を落とす。
「言語ってどこにあんの～？」
「……まぁよく来てるんだが、普段意識しねぇしな。分類なんて……」
暁が言い終わるか終わらないかの内に、彼の前に従業員とおぼしき男性が目の前を横切った。
「あ、すいません。ちょっと、言語の分類って……」
「あ、あちらですね」
男性は右の腕で暁の肩越しにその場所を指し示した。
暁は数秒あっけにとられ、身動きが取れなくなってしまった。
「……あ……」
眼球だけを左に傾け、至近距離にある男性従業員の袖のまくられた腕を凝視する。そして暁はあのときの光景とそれにまつわる記憶を映像と共に鮮明に、クリアに思い出していた。目の前には男が立っていた。あの、忌まわしき記憶の影の創造者……そして、あいつを奪った――。
しかし、暁はそこで現実に戻った。立ちくらみが徐々に引いていくのに伴い、耳に声が、遠く響いてくるように……。
「――暁？」
気づくと、暁の肩からは男性従業員の腕は消え、亜美が顔を覗き込んでいた。
どしたの？　と今にも言いそうな顔で亜美は半ば放心状態の暁を見つめていた。
「な、何でも無い……」

「……大丈夫？」
「ああ……」
それは一般にデジャヴと呼ばれるもので、暁にとってはある意味で恐怖心を煽る最大の原因と化していくのだった……。

「……これか」
途中暁に災難は降りかかったものの、二人は無事に目的の本を手にしていた。
「……すごい。ほんとに、キリスト関連の哲学書が……鬼頭火山の第一の暗号はクリアだね！」

『キリストの哲学』
著者　宮澤睦（みやざわあつし）

「……宮澤、ん？」
「なんて読むの？　それ」
「あつし。……コイツどっかで……」
「あつし？　あれ？　なんかその人どっかで……」
「あ！」
二人は同時に目を見開き、顔を見合わせた。
「コイツは……！」
宮澤睦、現在六十八歳のベテラン哲学者でありながら評論家でもあり、キリスト教の専門家でもある。５年前、そのキリスト教への精通の高度さから、あるネットユーザーが『キリストＪａｐａｎ』と有名掲示板にて打ち込んだのがきっかけで、蔓延、彼は一躍、時の人となった。
だが暁と亜美が驚嘆の声を上げたのはそれらの事実からではない。
「この人って、『鍵穴』の解説書いた人だよね？」
推理小説の金字塔と称された鬼頭火山の最高傑作『鍵穴』の解説

をつとめた男、それが今二人が目にする名を持つ人物だった。
暁は最終ページを開いた。
そこには六〇九の数字があり、やはりこの本で間違いないようだ。
この本の二三〇ページと二三一ページの間に次の暗号が隠されている。
逸る気持ちを抑え、暁はページをめくった。
「……」
「え？　暗号あった？暁」
暁は手を止めて考えた。紙1つ挟まっていない二三〇、二三一ページをじっと睨んで考えた。
……どういうことだ？　まさかハズして……。
暁は、ページとページの間には鬼頭火山が暗号を記した紙が入っているとばかり思っていたが、開いてみるとそこに紙らしきものはない。
とすると、考えられるのは……。
「このページの中に、暗号があるのか」
ということになる。予想はしていたことなのでそこまでの動揺は暁にはない。むしろ、彼は喜んだ。これで紙でも入っていれば逆に興ざめである。暁には新要素という意味で良い刺激となったのだ。
「さて、亜美。第二の暗号だ……解くぞっ！」

- 2 -

「へいらっしゃい！　お嬢ちゃん、今日は何が欲しいんだい？」
「今日は大根ですっ」
「おお、デッケェのが採れたんでさぁ！」
「え？　ホントっ！　買う買う」
「へへっ！　嬢ちゃんはお得意様よお、十円に負けてやらぁ！」
「ええ～？　十円！　おじさん優しいっ！　ありがとねっ」

「いいってもんよ！　まいど！」

六月二十六日（金）

「お母さーん。大根買ってきたよ～」
「あ、早かったわね、亜美」
「うん。またあのおじさん負けてくれたんだよ。しかも十円」
「あらまぁ、十円？　よっぽど若い女の子が好きなようね、あのおじさんは」
篠原亜美の母、篠原優子（しのはらゆうこ）はタバコをふかしながら、
「アタシが行っても一円も負けねぇくせによ……」
と小声で呟く。
母が機嫌を悪くする前に手を打たないと、延々と続く愚痴を聞かされる羽目になる。経験上その末路が良かった試しはなく、亜美は速攻でご飯の支度を促すことにした。
「お母さん、お腹減ったから、もうご飯にしない？　ほらもう時間も押してるし」
壁に掛けられた時計の針は、ちょうど二十時を差そうとしていた。
「そうね。……そろそろたべとかないと、ママ、お仕事間に合わないわねー」
随分気の抜けた声をタバコの煙と一緒に吐き出した優子は、立ち上がってキッチンへと向かった。
「今日はお鍋よ。大根グツグツ」
優子の顔は、何やら危険な笑みで一瞬満ちかけたが、すぐに気の抜けた顔に戻った。
「あたしも手伝うよ」
三年前に夫と離婚した優子はその日以来、今日まで女手一つで亜美を養ってきた。そんな母の苦労が判らない亜美ではない。母にはできる限り楽をして欲しかった。

「亜美は優しい娘……」
「え？」
「あたしがあんたくらいの時はね、ロクに勉強もしないで、人の車に傷つけたりしてさ。よく親にメーワクかけてたよ。アタシバカだったのよ」
「……」
「……」
水道の音がやけに響く夜だった。

六月二十七日（土）

自宅でくつろいでいた暁に、亜美からの電話が鳴った。
時刻は午前九時ちょっと前あたり。
「もしもし暁ぁ？」
「……はい」
「え？　もしかして寝てたかな？　その声は」
「……何だよ。ねみいん……」
「オキロー！　……てわたしもそんな元気じゃないんだけどね」
「……暗号はどうだ」
「暗号全然ダメ！　お手上げだよ。そっちは？」
「……同じく」
「ああ、残念」
「……」
二日前、市内最大の図書館にて第二の暗号とおぼしき本を発見した二人は、それを借りじっくり検証することにした。
二三〇、二三一ページのコピーを亜美が、本体を暁が受け持ち、それぞれが自宅でも謎解きに励んだ。勿論、授業を抜け出して学校の屋上でもアレコレ悩んだ。先生に見つかり怒られた。
――――そうこうする内に、もう二日。第二の暗号に二日も掛け

てしまっている。
……だんだん二人は思い始めた。こんなことしてていいのか？
と。
「……」
亜美は静枝に頼まれている分もあるが暁はただ協力しているだけである。止めようと思えば止められるのだ。
あくまでこのイベントの主犯は篠原亜美、外崎暁ではない。
「亜美」
「……んー？」
眠そうな亜美には悪いかも知れないとは思いつつも、暁は正直な気持ちを言うことにした。それがお互いにとっても好ましいことだと思ったからだ。それにもうすぐ期末テストも控えている。そろそろ現実を見るべきだ。
「明日、俺の部屋に来い。絶対ェー、解くぞ」
「……え」
そう。だらけている暇はない。暁はつい最近になって感じ始めた日常の変化とやらに、全てを託すことにしたのだ。今回の期末は赤点二つくらいは出るだろう。しかし、そんなことは関係ない。この繰り返される毎日から『脱出』すること、それさえ叶えば彼は満足だった。
だから、暁は休日の午前だというのにベッドから身を起こした。突き詰めれば、彼は幸せが欲しかったのだ。

六月二十九日（月）

亜美は日曜日に暁の家へ行かなかった。
「調子が悪い」という内容のメールを受け取った暁は、仕方なく一人で暗号の解読を試みるがあえなく失敗。彼はここにきて焦り出した。暗号解読……どちらかと言えば自分は得意な方だという自覚は

あったが、ここまでチンプンカンプンな暗号の解読には経験がない。
……そもそも、本当にこの本であっているのか？
「……いやいや」
暁は留まる。わざわざ『鍵穴』の解説者の本というオプションまで付いていた訳は、やはりこれが本物の暗号であると確信させるために違いない。
暁は今一度、机の上に開かれたそれに目を落とした。
そこには前のページからまたがって、キリスト教網要云々について詳しい記載が成されているだけで、これといって目立った箇所はない。単なる文字の羅列である。しかも本のサイズは少年コミックの約４倍。……デカい！
「くそ……皆目見当つかない」
あっという間に時間は過ぎ去り、日付が変わる頃、暁は眠りに落ちた……。

そして迎えた今日。
偶然の刹那、その謎は解かれることとなる。
騒がしい学校の廊下を歩く１人の男が、水道で手を洗う暁に声をかけた。
「よお、暁、久しぶりだな」
暁が振り返った先にいたのは暁の友人の高山竜司（たかやまりゅうじ）である。
「久しぶりでもねーだろ……あッ、竜司！」
この男なら、暗号を解けるかも知れない……。
暁には確かな予感があった。
「今、お前が俺に話しかけたのは偶然かな？　どっちにしろ、お前が俺の運命を変える手助けをするかもな……」
「はぁ？」
不敵な笑みを浮かべ、暁は竜司の肩にポンと手を置き、
「協力、してもらうぜ？　竜司君」

暁の胸の内は、久々に活気付いていた。

- 3 -

約束の期日まで、残り十五日となった放課後、高山竜司は学校の図書室にて暗号の解読に着手し始めた。

一方、それを頼んだ外崎暁は、二日も顔を見ない篠原亜美を訪ねるため、学校を後にしていた。

誰もいない図書室にて、竜司は暁から手渡された本の二三〇、二三一ページを開き、どこか暗号として機能しそうな箇所はないかと、ただ全面が小さな文字だけで埋め尽くされた二ページにひたすら見入っていた。

「答えは、二三〇、二三一ページの間に隠されている……」

別れ際、暁が放った一言を口に出して言ってみたが、やはり何のインスピレーションもわいてこなかった。

試しに、もう何度も黙読した二三〇ページの文頭から文末までを声に出して言ってみる。

「リスト教神学の全領域を聖書に基づいて体系化」

二二九ページの一番下の右隅には「キ」とあるのを確認した竜司だが、その行為に意味が無いことは重々承知の上である。竜司は頭をかきむしり、暁との約束を思い返していた。

……もし、この暗号が解けたら、お前の欲しがっていたアレをやるよ。

暁のその一言で火の付いた竜司であるが、一向に手のつかない暗号解読を前に、そのやる気はだんだんと、着実に萎えていった。

……本当にくれるんだろうな、アイツ。

竜司は本を閉じた。その行為に大した意味は無い。言ってみれば、なんとなく閉じたのだ。物語には常に偶然が付きまとう。その偶然の連鎖が語られる価値のある物語を偶然にも創造するのである。

「……ん？」

竜司は本の側面を見ていてある発見をした。

本を形成する紙一枚一枚が、ある一箇所に集約され固定されているために紙はバラバラと散らばらないなどと、いちいち口に出して言うことすら馬鹿馬鹿しいが、紙が集約されたその箇所の名称を竜司は知らなかった。というより、そんな所に名称など無いと思っていた、いや、そもそも話題にすら上がらないため、あったとしてもどうでもいい箇所。そんな箇所に、竜司はある発見をしたのだ。

注意して見なければ見落としてしまう、その程度の異常……まるで、ページとページの間にノリを塗り、それが側面からほんの少しはみ出たような跡……それが、紙が集約された部位で見つけた竜司の発見だった。

それを見た途端、竜司は閃いた。だが、それとこれを結びつけたのはやはり竜司の力量があってこそと言える。

今まで受けた数学の模試では常に学年トップ、更には県内一位、いく時には満点で全国一位も獲得したことのある竜司は、予備校や塾には頼らず、そのほとんどが常人離れした数学的思考能力によった、言わば数学の天才なのだ。

今回の結びつきが数学的思考を必要としたかは別として、その柔軟な思考は、暁の発言にヒントを得た。

「答えは、二三〇、二三一ページの間に隠されている」

あたかも子供騙しのようなカラクリだと、竜司は鼻で笑った。

「謎は解けた」

竜司は、二三〇、二三一ページをもう一度開き、両端をグッと力強く掴んだ。そして、それをそのまま外側に向けて更に開いていった。

ビリビリという音に混じり、パリパリという音が耳に聞こえ、竜司は口元をニヤリとさせた。

……鬼頭火山も大したことはないな。

最後にバリッという音がして、二三〇と二三一ページを境に、本

は真っ二つに割れてしまった。
「あ……やべ」
まあいいか、と竜司は呟き、校内では使用の禁止が原則の携帯電話を取り出し、ずっと欲しかったアレがとうとう手入るのかと、小躍りした。

『ピンポーン』
と、篠原という表札の掛かったアパートの一室の呼び出しリンを押したのは、不安げな表情を募らせる暁であった。
前に何度か来たこともあり、すっかり自宅から篠原宅までの道順は覚えたものの、常に不安は拭えない。暁はあの人が出てこないことを祈った。
「はーい」という声と共に、『ガチャリ』とドアが開いた。
「……あら！　外崎君！　久しぶりじゃないの～！　どーぞ上がって」
「あ……失礼します」
暁の祈りは虚しく、出てきたのは亜美の母、篠原優子であった。
暁は苦笑いしつつ、遠慮がちに靴を脱いだ。
「最近勉強の方はどうお？　……もしかして亜美のこと心配して来てくれたん？」
優子は、台所で素早く客人用に飲み物を用意した。
「あ……すいません。なんか、いきなり来て……。えーと」
暁は、１ＬＤＫの比較的広くない室内を見渡し、亜美の姿がないことに気が付いた。
暁の様子を見て、優子は暁が訪ねてきた目的を理解した。
「亜美ならいないよ」
「……どこですか」
「今は病院。点滴受けてるのよ」
「ああ、そーなんですか……」

暁は、自分が今ここにいる意味が無いことに気付き、さっさと帰ることにした。
「あの。亜美は……そんな重体？　なんすか……」
優子はタバコをふかしながら応えた。
「んーん。平気みたいよ。お医者さんも、あと二、三日もすれば元気になるだろうッてさ」
「あ、そうすか、良かった。うん……」
「亜美になんか伝えることとかあるの？　良ければアタシが……」
「あ、大丈夫です。そんなに状態悪くないなら、安心したんで、ちょっと心配だったんで、じゃあ、失礼しました」
暁は軽くお辞儀をして玄関に向かった。
「また来なね」
「はい、失礼しました」
『ガチャン』と扉を開け、暁は家路に戻った。
――ブルルル。
ちょうどアパートから出た辺りで、暁の携帯が振動した。
どうやらEメールを一件受信したようだ。送ってきたのは……。

「……竜司？　もう解いたのか？」
すぐ横を車の行き交う歩道を歩きつつ、その文面を確認した。

よう（、ε′）
暗号見つけたぜ

これが暗号だ←

お前　本当にアレくれるんだろうな。まぁあってたらでいいけどよ

７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７１０

十字架を背負いし者に
数と方向をあたえよ

- 4 -

竜司から受け取った暗号を元に、暁は自宅に帰ってからその解読に挑んでいた。

７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７１０
十字架を背負いし者に
数と方向をあたえよ

暁は、この暗号の構成に見覚えがあった。これも鬼頭火山の作品に登場する暗号の一つに似ているのだ。
今回の暗号ゲーム……どうやら鬼頭火山の作品を熟知していれば、解読のおおまかな手順について困ることはないらしい。それが判ればいくらか安心できる。
暁は竜司とのメールのやりとりを思い返した。
『どうやってその暗号を導き出した？』
『単なる偶然……。本に細工があった。普通じゃ開かないレベルにまで本を開き、そこに小さな、人が書いた文字があった。それが、さっき送ったヤツだ』
『はぁ？　もっと詳しく教えろ』
『痕跡を残さないように、鬼頭火山はノリで本を元通りの状態にしたんだ。明日お前に実物を見せるさ。見れば一発で理解できるさ』
『そっか、わかった。じゃあ、明日。本な、持ってこいよ。ところで、どうだ？　お前が見て、この暗号解けそうか』
『何とも言えないが、とりあえず暇があったら今夜にでも取り組ん

でみよう』

『そうだぜ。お前、暗号を見つけてくれたのには感謝するが、アレをくれてやる条件は、暗号を解くことだ。せいぜい頑張れや』

『てめー』

……ありがとよ、竜司。

暁は心の中で礼を述べ、再び暗号に目を落とした。

――まずは、数と数との何らかの規則性を見つけねばならない。

暁は、比較的数学のできる方であり、この手の暗号には自信があった。

最初の直感が大切である。暁がこれらの数字を見て最初に脳裏に浮かんだ言葉、そう、単なる数字の並びを人類は数列と呼ぶ。

数列の基本は、一般項を求めることにある。

７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７１０

「この数列は……等差数列でもなければ、等比数列でもないな」

等差数列とは、次のような数列を言う。

１０　１５　２０　２５　３０　３５

つまり、数が規則正しい差をもって変化していく数列のことを言うのだ。この場合、初項は１０、項差は５であり、等差数列の一般項の公式から、

５ｎ＋５

が一般項となる。ｎに３を代入すれば、この数列の３番目にくる数字が判るというわけだ。

等比数列とは、次のような数列を指す。

１０　　１００　　１０００　　１００００

つまり、規則正しい比をもって変化していく数列のことを言う。この場合、初項は１０、項比は１０となるので、等比数列の一般項の公式から、

１０×１０のｎ－１乗

が一般項となる。これも等差数列と同じように、ｎに3を代入すれば、この数列の三番目の数字を導き出せるというわけなのだ。

７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７１０

この数列は、上記の二つに当てはまらない。等差数列、等比数列以外にも数列には種類があるかもしれなが、暁はこの二つの数列しかまだ知らない。

「……調べるのも面倒だ」

ゆえに、暁に残された選択肢は、この数列を並び替え、どうにかして等差数列もしくは等比数列のどちらかにもっていくことである。というより、暁は初め、この数列を、見た時あることに瞬間的に気付いていた。数字を並べ替え、

６７０　６８０　６９０　７００　７１０　７２０　７３０　７４０

という数列に変形することで、この数列の一般項を導き出せるということに……。

「……」

数列において、果たして数字の並びを変えるなど、していいことなのか？
いや、鬼頭は初めからそうさせることを企んでいたのだ。何故なら、それが、暗号が暗号として成り立つための醍醐味的な要素となってくるのだから。
暁はものの数秒で変形した数列の一般項を叩き出した。

１０ｎ＋６６０

この一般項を目にした途端、暁は驚愕の表情を見せ、声にならない悲鳴を上げた。
今一度、暗号の下部の記述を確かめる。

『十字架を背負いし者に
数と方向をあたえよ』

「これは……」
即ち、十字架とは１０を、背負いし者とはｎを指していたのだ！
暁はここで肩の力を抜いた。
初めはチンプンカンプンだった暗号が、解読に一歩近づいた。悩んだ時間が多かった分、達成感は大きい。
……亜美、お前が復帰する頃にはこの暗号は解けてるかもな。
「早く良くなれよ……」
そう小さく呟き、暁は静かに、ゆっくりと、目を閉じた……。

六月三十日（火）

いつものように登校してきた暁に、亜美が声を掛けた。
「おはよー」

暁は振り返り、一瞬目を丸くしたかと思うとすぐにもとの冷静沈着な目つきになり、
「ああ……良くなったのか」
と一言告げ、前に向き直った。数秒の沈黙が流れた後、亜美がくちをとがらせて言った。
「ちょっとー！　少しは心配しなさいよ！」
「ああ……ハハ。元気そうだな」
「うん、ちょっと熱出ちゃったんだよね。最近疲れてんのかな、あたし……」
言いながら、亜美はいつの間にか暁の横に付き一緒になって歩いていた。
「……おい。あんまくっつくな。……勘違いされるだろーが」
暁がちょっと困った表情でそんなことを言うものなので、亜美は余計に暁との幅を詰めた。
「にひひー」
「にひひーじゃねぇよ。バカかお前っ……！！」
暁が顔を赤らめてそう言うと、亜美は恥ずかしそうにちょっとだけ暁との幅を広げた。
「おおっ！　お二人さん……いつの間にそんなラブラブな関係になったんですかぁ！？」
「……！？？」
暁と亜美のすぐ後ろで、そう大きくさえずったのは……。
「あ、おはよ。晋也じゃん」
不良高校生、木原晋也である。
「晋也……お前また髪染めたな。こんどこそ特別指導じゃねぇのか？」
「そんなん知るかよ」
「お前な……」
暁が呆れた途端、亜美が口を開いた。
「言っときますけど、別にラブラブじゃないから」

怒ったフリをしてそんなことを言う。
「は、は、は！！　いや立派なカップルですよ！　一緒に学校来ちゃうなんてね」
「晋也……おふざけもほどほどにしろよ」
暁の結構ホンキな声が聞こえたため、晋也は早々にその場を後にすることにした。
「ではお二人さん、バイバーイ！」
「……ったく」
前を走っていく晋也を眺めながら、亜美が言った。
「……あたしたちも走ろーよ。ほら、遅刻しちゃうよっ」
亜美は暁を置いていきなり突っ走っていった。
「あっおっい！　……クソ！　もーこんな時間かよ！！」
暁も、二人の後を追うようにして走り出した。

昼休み、昼食を持って誰もいない屋上に集まったのは、暁、竜司、亜美の三人であった。
ここなら、周りの雑音は耳に入らず、集中して暗号解読に取り組む事が出来る。
三人は円形になって地べたに座り込み、弁当を広げた。
竜司は唐揚げを頬張りながらバッグから本を取り出した。宮澤睦『キリストの哲学』である。
「見ろ」
竜司は真っ二つに割れたその本を両手に持って、二人に暗号を見せた。
「……おお、なるほど。そういうことか」
暁は暗号の位置を見て全てを理解した。第一の暗号の全てを。
「本来なら見るハズもない所……つまり角の固い部分に沿って鬼頭は暗号を記し、万が一見えないように暗号の上から薄くノリ付けしていやがった」

竜司は最後に「結局俺には通用しなかったがな」などと言ってお茶を濁した。

ふと竜司と亜美は目が合った。二人は初対面である。

「……凄いですね。暁も判らなかったのに。あ、篠原です。よろしくね」

「ああ、高山です」

「自己紹介は後でいいだろ……二人共コレを見てくれ」

そう言って暁が真ん中に置いたのは、何やら書いてあるルーズリーフだ。

「その本に書いてある暗号を俺なりに解読してみた。すると紙に書いてあるように、これらの数字はこの一般項を持つ等差数列に変形することができるんだ」

７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７１０

十字架を背負いし者に
数と方向をあたえよ
←←

６７０　６８０　６９０　７００　７１０　７２０　７３０　７４０

１０ｎ＋６６０

紙を見て竜司が口を開いた。

「理屈は合ってる。だが数列なら並び替え次第で他にも作れるぜ」

「暗号の記述だよ。１０は十字架を、ｎは背負いし者……どうかな？」

「ほんとだっ！　すごーい」

亜美が驚いた。

「……多少強引な気もするが、とりあえずはこれでいってみるか」

竜司はまだ疑っているようである。
「よし……！　じゃあまずはｎに数と方向をあたえるぞ」
暁の声に触発されたのか、亜美が突然声をあげた。
「……ｎは北！」
驚いたような表情で暁の顔に指を指して固まっている。
暁は眉間にシワを寄せてパンを口に頬張った。
「北……北か」
「じゃあ数字はなんだ？」
竜司はコーラを一気に飲み干し、数秒でその自問に自答した。
「ふー……１４か１３……だな」
「？？？」
ハテナマークを浮かべてエビフライをかじる亜美にすかさず暁が説明する。
「アルファベット順。Ａを１とすればＮは１４。Ａを０とすることもあるからな」
「なるへそ」
「１３と１４……代入しか思いつかない」
「俺もだよ、暁」
暁はシャーペンを胸ポケットから取り出し、パンにパクつきながら紙の余白に計算した。
「出た！」
亜美も竜司も、体を前屈みにして覗き込む。
「８００と７９０……」
この数字を見た途端、亜美は今までにないほど目を大きく見開き、
「あーーーーーッ！！！！」
「……え？？」
「亜美？」
竜司も暁も、亜美が何故叫んだのかが判らない。まさか亜美が自分たちより先に隠された数学的な秘密をこれらの数字に見いだしたとは思えない。

「８００よ！」
「……８００？　これがなに？　篠原さん……大丈夫かい？」
亜美は興奮しているようで、息が荒かった。暁も竜司も、興味津々である。
そして亜美は遂に真相を口にした。
「あたしの家の近くにあるのっ！　８００はまさに『八百屋』！！うちの近くに八百屋さんがあって、あたしが行くとスッゴい安…じゃない！　そこの主人は北野（きたの）さんなのッ！！！！　てゆーかその店の名前は『北の八百屋』なのぉッ！！！！！！　ね！？　コレは、来たんじゃないの！？？」
「……」
竜司も暁も、もはや絶句するしかなかった。

数学の叡智（後書き）

重要登場人物の紹介

・木原晋也
暁の中学の同級生。チャラチャラした外見とお調子者の性格から、不良あるいはだらしのない若者として、しばしば見られる。学園内で暁の過去を知る者の一人。

・高山竜司
暁の高校一年からの友人で、数学の天才。
頭の回転は速く、暁とテストの点数で競争をしていたりする。
暁の持つ「アレ」を欲しがっており、暗号解読の報酬として譲り受ける約束をする。

与えられし最初の旋律

-1-

暗号を解き昼休みを終えた後、暁、亜美、竜司の三人は授業に復帰し、暗号解読用に回転していた脳に休息を与えることにした。午後の授業は思いの外早く終了し、三人は脳をもう一度暗号解読用に切り替えつつ放課後を迎えた。

「じゃあ亜美、その八百屋に案内してくれ」

そう言いながら意気揚々と学校の玄関を出たのは暁だった。その右斜め前には亜美、そして竜司は左にいた。

「んっ？」

暁は玄関から五歩足を進めたところで身体に異変を察知し、後舌面を軟口蓋後部に押し当て有声の気息を鼻から洩らした音を、クエスチョンマークを添えて発した。異変が起きた部位は右腕である。まるで何者かに掴まれているかのように動かない。そこで暁は気が付いた。暗号を解いた安心感からか、今まで脳の動きが完全にスリープモードであったことに。つまり、なんてことはない。実際に何者かに掴まれているのだ。

暁はその主体を確認するために、体を反転させた。

暁の視線の先には、一人の女子生徒がいた。

「光（ひかり）？」

光とはその生徒の名前である。

「暁くん……またサボるつもりですかぁ？」

女子生徒、二宮光（にのみやひかり）は暁の腕を解放すると、静かに訴えた。

「サボる？　待て。何を……だ？」

暁は自分が何をサボっていたのか考えたが、授業以外に思い当たることはなかった。

「委員会ですよぉ」

光は泣きそうな声で言った。
「ああっ……！」
暁は自分のやるべき仕事を思い出した。図書委員会の仕事が今週の月曜日と火曜日に設定されていたのだ。確か、新しく購入された本を棚に入れるのと古い本を第二図書室に移す仕事だったはずである。
「どーした？」
竜司が後方から尋ねてきた。
「あれっ？　二宮さんじゃん。どうしたの？」
亜美はこちらに近づきながら光の方に尋ねた。
どうやら雲行きが怪しかった。ここは逃げるべきだと暁は判断した。
「悪い！！　光、今日は無理だ。用がある」
「……今日も……です」
「いっ……！　き、昨日もサボったんだしさ、今日も止めちゃおうぜ？」
「やりました、昨日。……私一人で。……寂しかったです」
え……なんで誰かに頼まないんだよ、コイツ。　暁は、幼稚園の子供にも敬語を使うような光の性格からしてそれが困難であることは分かってたのだが、あえて心の奥でぼやいた。
「ご、ご苦労様。えーっと……ごめん」
竜司と亜美はどうやら状況を悟ったらしく、黙ってこちらを見ていた。しかし、暁は見逃さなかった。竜司が笑いを堪えていることを……。
「で……なんとかならない……かな？」
「……うぅっ……暁君、そんなに私と一緒が嫌なんですかぁ」
「うっ……そんなこと言われても……」
竜司は今にも吹き出しそうである。亜美は、やっちゃったな、という目でこちらを見ている。
光は涙目でこちらを見つめていた。

おいおい、何つう顔してんだ……。
「ま、待て！　わかったから！　やるよ！　俺が悪かった！」
「ほ、本当ですか？」
「本当だって……」
「抜け出すとか……」
「ないない」
「良かったです。嬉しいです、私」
大袈裟過ぎだろ……。何で了承してんだ、俺。まあ、自業自得か。
「亜美、竜司、そういうわけだ。今日は同伴出来ない」
「じゃあ明日にする？」
「いや、もし時間切れなんてことになったら洒落にならない。二人で暗号を回収してくれ」
亜美も竜司もその点は快く了承してくれた。
「ククククク。暁、一生懸命、頑張れよ」
竜司は、今回は任せろという意味も僅かに込めて茶化してみせた。
「竜司、テメェ後で覚えてろよ」
「んん？　さて、何のことやらねぇ」
そんなやりとりの後、とんだ地雷を踏んだな、と思いながら暁は玄関に後戻りするのだった。二宮光と共に。

- 2 -

暁達の通う学園、月代学園は、関東最大の規模を誇る学校である。三年前の中等部設立によって校舎が増築され、全部で五号棟まであり、設備については二つの体育館と運動場を完備している。図書室は中等部設立前の三号棟の二階と設立後の五号棟の一、二階に位置しており、新しく作られた二段構造の図書室を第一図書室、もう一つを第二図書室としている。しかし、実質的には第二図書室は古くなって読まれなくなった本が集まる倉庫となっており、図書委員会

の主要な仕事の一つは新図書室から旧図書室への本の移動となっている。
暁と光は第一図書室の一階に来ていた。光は机の上のスクールバッグを開くと、暁に尋ねた。
「スポーツドリンクとお茶、どっちがいいですかぁ？」
光は両手にペットボトルを持っていた。
「用意してたのか？　悪いな。俺はどっちでもいいよ、別に」
すると光はスポーツドリンクを取り出して暁に手渡した。
「昨日はどれくらい終わったんだ？」
暁がペットボトルの蓋を開けながら尋ねると光は現在の進行状況を説明した。
「新しい本はみんな棚に入れましたよ。あと、古い本も少し段ボールに入れときました。後は残りの古い本を段ボールに入れて、第二図書室に運ぶだけです」
「なんだ、ほとんど済んだんだな。んじゃ、さっさと終わらせるぞ」
暁は俄然やる気が出たようだったが、光の表情を見てすぐに安易な考えだったと気付いた。
「ど、どうした？」
「残りの本は一五十冊、段ボールは現時点で三十箱あるんです」
「……マジで？」
「まじです」
「ゼロ一個多くね？」
「しょうがないですよ、頑張りましょ！」
光はニコッと微笑み、ガッツポーズを決めた。
暁は対照的に、やっぱり無理にでも逃げるべきだったと後悔していた。

商店街はいつもと同じように、賑わっていた。当今、どこを見てもシャッターが降りている商店街がよくテレビに映されるが、この

商店街はそのようなこととは無縁である。
「竜司君、ほら、あれが例の八百屋だよ」
亜美は道向かいの八百屋を指差して、竜司に言った。
「ふーん、普通の八百屋だな、見たところ」
竜司は暗号に不信感を抱いていた。
「篠原さんさ、なんかピンとくる？　俺はどうしてもまだ裏がある気がして……」
「裏って？」
「八百屋ってだけじゃ、暗号の場所は特定できないだろ？　場所自体に意味があって、地図とかから意味を見出だすのかとも考えたが情報が少なくて地図に何を書き込めばいいかもわからない」
竜司はわけが分からないといった様子だった。
「なんだ、そんなこと？　多分そんなに深くないと思うよ。だって、この八百屋のおじさんの奥さん、鬼頭火山の高校時代の同級生だから」
「えっ、ええ！？　まじで！？」
竜司は今までの思考が無駄だったと知って落胆した。ここでやっと、亜美が「北の八百屋」を思い付くに至った理由が解かった。

亜美は、二メートル後方に竜司を引き連れ、「北の八百屋」の客が少なくなったのを見計らって店主北野に話し掛けた。
「おじさん、こんにちは！」
「へいらっしゃい！　おう嬢ちゃん、今日は何を買ってくれんだい？」
北野は、いつもどおり亜美を客として迎えた。しかし、今日は買い物が目的ではない。
「今日は野菜じゃなくておじさんに用があるの」
「へ？　おれにかい？」
「うん！　おじさんのとこに鬼頭火山……来なかった？」

北野は一瞬動揺した顔をして、すぐにいつものにこやかな顔に戻った。
「へんっ、嬢ちゃん、確かにこないだうっかりおれの嫁さんが鬼頭火山の同級生だって言っちまったがな、これ以上鬼頭火山の秘密を話すわけにゃあ、いかねぇな～」
「ふうーん、秘密あるんだ～。じゃあやっぱり最近来たんだね。暗号渡されたんでしょ？」
北野はしまったという表情で口を押さえた。
「ぐっ、引っ掛けたな」
「はは、あたしなんにもしてないよ～」
「ははははっ、嬢ちゃんには隠し事ができねぇなぁ」
竜司は後方で疎外感を感じつつ、静かに二人の会話を聞いていた。なんていう頭の悪そうな会話なんだろう……。まあ、俺なら上手くいかなかったろうし、アレが手に入るとしたら、間接的にこの娘のおかげか。
竜司がそんなことを思っている間に、亜美は北野から情報を引き出していた。
「おじさん、鬼頭火山はここに来て何をしていったの？」
「何をしたって、手紙を渡されたよ、しかもなぜかおれにな。ある人物に渡してほしいってよ」
手紙……。亜美に向けられたものに間違いなかった。
「お、おじさん！　その手紙見せて！　ある人物って、多分あたし！」
「嬢ちゃんがかい？　鬼頭火山は、『ある人物』には二つの条件が当てはまると言っていたぞ。一つは鬼頭火山の本名を知っている。二つ目は『決着の日』の日にちを知っている。だそうだ」
亜美はどちらの答も知っていた。鬼頭火山の本名は「神崎冬也」、「決着の日」とは、この勝負が終わる日。つまり七月十四日のことである。
「おじさんは答、知ってるの？」

「おうよっ。なんせおれは条件を満たした人物に手紙を渡すように言われてるからな。さて、嬢ちゃん、答は知ってるのかい？」
亜美は余裕の表情で北野に答を言った。
「鬼頭火山の本名は『神崎冬也』、決着の日は『七月十四日』。……でしょっ？」
北野は少し驚いた様子だった。
「正解だ、嬢ちゃん。たまげたなぁ、嬢ちゃんが『ある人物』だったとはなあ！　おそらく女子高生が来るだろうとは聞いていたんだがな」
「おじさん！　早く！」
亜美が急かすと、北野は、待ってなと言い放って、店の奥に歩いて行った。
「やったね！　竜司君」
亜美が喜んでいると、竜司は不敵な笑みを浮かべて言った。
「覚悟した方がいいよ……。次の暗号は複数だ」
亜美は首を傾げ、斜め上を見て、竜司の言葉の根拠を考えた。
「ん～～、なんでそう言えるの？」
「確信はもてないが、鬼頭火山が今までと比べて遥かに直接的な方法で暗号を渡してきた。そこから推測したんだ。間接的に暗号を渡すには、情報量に限りがあるから」
「そっか、そういえば前に暁が暗号を一つに絞られると見つけ出すのが大変だとか言ってたな。そういうことだったんだ」
亜美が納得したところで北野が白い封筒を持って戻ってきた。
「ほらよ、これが鬼頭火山の手紙だ。しかし、回りくどいよなあ。よお嬢ちゃん、これの中身は何なんだい？」
「ヒミツ。後であたしの大冒険のお話を聞かせてあげるね。おじさん、協力ありがとう！」
「そうかい。そりゃあ楽しみだな。嬢ちゃんの為にうまい野菜と果物揃えてっから、いつでも買いに来な！　またまけてやんよ」
亜美は北野から手紙を受け取ると、もう一度お礼を言った。

かくして亜美と竜司は「北の八百屋」で新しい暗号を入手することに成功したのだった。

午後六時。暗号を入手した亜美と竜司は商店街の喫茶店に入っていた。

「ふぅー、疲れたね、竜司君。どうする？　暁に電話する？」

亜美はテーブルに突っ伏しながら言った。

「いや、さすがにまだ終わってないだろうし、あいつのことだから、今言ったら抜け出して来るだろ。少々問題のある女の子もいるしね」

「私、問題なんかないですよぉ」

亜美が光を真似ると竜司は目を丸くした。

「すっげえ似てる」

「ホント？　文化祭でやろっかな」

亜美は去年、文化祭で行われる「校内モノマネ選手権」に出場し優勝したので、まんざら嘘でもない。

「じゃあ、もうちょっとしたら電話しよっか。そうと決まれば……暗号、お先に拝見といきましょうか！」

亜美は勢いよく封筒の封を開けた。

- 3 -

「ちゅん」

「？」

「ちゅんっ」

「？？」

「っちゅん」

「お、おい。光、何だその音は！？」

時刻は六時を回ったところだった。暁は、二つ奥の棚の後ろにい

るはずの光に謎の音について尋ねた。
「っちゅん！　く、くしゃみですよぉ……。何に聞こえたんですかぁ？　暁くん？」
「どんなくしゃみだよ。サイレンサー付きの拳銃の音にしか聞こえねぇって」
「ひどいです！　かわいくくしゃみしてるつもりです！」
……めんどくせーな。
暁は会話に無意味さを感じながら、光に関する情報をふと呼び起こしていた
二宮光、彼女は暁と亜美のクラスメートであり暁の隣の席に座る女子である。おっとりとした喋り方が特徴的で、図書室に毎日通っている本オタクとしても有名である。もちろん、それ故に彼女は図書委員になったのだが。
暁は疲労感を感じながらも、来年は絶対に図書委員にはならないと決めた。
「ほこりかなぁ……」
光は古くなった本のタイトルが書かれたリストを片手に棚の横に置かれた椅子に腰掛けた。
「竜司が噂してんじゃないか？」
暁はリストに書いてある『言語と文字から見る古代宗教』という本を探して光のいる棚の近くで立ち止まった。
「なんで竜司くんが私を噂するんです？」
「冗談だよ、冗談」
余計な体力を使いたくなかったのでこの話題は流すことにした。
「光、宗教ってどの棚だっけ？」
光はどの本ですか、と言いながら暁に近づいてきた。
「これは……確か二十四番の棚の手前の方ですね」
「そっか、サンキュー。詳しいな、お前」
「図書室のことは任せてください！」
「ああ。じゃあ俺行ってくるわ。二十四番って二階だろ」

「あ、はい。頑張りましょう。もうすぐ終わります、あと一時間ってところですかね」
「はあ……。もうすぐ……ねぇ」
暁は光の気の利かない発言に落ち込みながら二十四番の棚に向かったのだった。

暁が二階から一階へ戻る階段を歩いていると、光は下で何やら楽しそうに仕事を続けていた。本当に本が好きらしい。鼻歌まで歌っているようだった。
暁が光に近づいて行くと、徐々に光の歌う鼻歌が聞こえてきた。それは暁の知っている曲であった。しかし、知っているといっても、聞き覚えがある程度である。確かクラシックの有名な曲だったはずだ。
「その曲……」
「はい？　ああ、この曲知ってますか？」
光は首を軽く傾げて言った。
「いや、聞いたことあるなぁと思って」
「カノンですよ。私、この曲好きなんです」
カノン。曲名を聞いて思い出した。小学生の頃、新任の音楽の教師が自己紹介がてら何か管楽器で演奏していた曲だ。児童には、その曲に歌詞をつけた歌を教えていたと思う。というのも、一見単純に見える旋律だがリコーダーで吹くにはかなり難易度がある曲なのだ。
「カノン……か。確かこの曲は何度も同じような旋律を繰り返す曲……だよな？」
「はい。ホントはカノンっていうのは音楽の形式の名前なんです。この曲はその形式で成り立つ有名な曲なので略称で『カノン』って呼ばれているんですよ」
「へえぇ、なるほどね……。しかし、意外に学があるんだな、お前」

これは、本心だった。暁は光のことをどうしようもない人間かと思っていたが、案外まともなのかもしれない。

「そんなことないですよぉ。たまたま本で読んだんです。興味があったので」

「そうか。俺も興味のある分野は幾分得意かな」

「暁くんの得意分野って何なんですか？」

「推理小説とか……サスペンスものとか。俺、よく犯人当てるんだ」

そういえば、鬼頭火山の推理小説でも犯人当てに成功していた方だと思った。

「本当に？　凄いです、暁くん！　それじゃあ、『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』っていう本知ってます？　トリックが複雑で犯人当てるの難しいと思いますよ」

「ああ、あれな。今度読もうと思ってたんだ。夏休みにでも読むかな……なんて」

確か心理描写なら鬼頭火山を超えると言われている推理小説家の作品だったろう。どうやら、光もかなり推理小説には詳しいようだ。

「あの作品はオススメですよ。……あ、もうこんな時間ですか。暁くん、急ぎましょ」

「ああ、そうだな」

暁と光は再び作業に取り掛かった。

午後七時、喫茶店。

「竜司君、解けた？」

亜美が竜司に尋ねた。

「いや、なんか集中出来ね。篠原さんは？」

「あたしは能力的に無理だよー。どれから手をつけたらいいのかさっぱりだし」

テーブルに置かれた紙には複数の暗号が書かれていた。「ここまでよく頑張った。ゴールまであと一歩だ。ここに記した暗号は全て

解かなくても次の暗号の場所が分かるかもしれない。知恵を絞り、頑張りたまえ。」という言葉を添えて。

「今日は厳しいな。さすがに一日で二つの暗号解読は無理だ」

竜司は本日中の解読は不可能と判断した。亜美もまた、そのような様子である。

「じゃあ、そろそろ暁に連絡入れるね」

「ああ。そうしよう」

亜美は携帯電話を取り出すと、暁に電話をかけた。呼び出し音が7回程鳴った。どうやらまだ仕事が終わっていないようだ。

「暁、まだやってるみたい」

「ふうん。まあ、終わったら着信見てかけ直してくるだろ」

「そうだね。じゃあもう少し待とうかな」

午後七時三十分過ぎになってようやく、暁と光は図書委員の仕事を終わらせた。

「ご苦労様でした、暁くん」

光は弱々しく拍手している。

「ああ、お前も昨日、今日とよく頑張ったな。俺も次からは忘れないようにするよ」

「はい。でも楽しかったですよ、私。暁くんとたくさんお話しましたし」

「そんくらいで楽しいなら、いつでも話し相手になるぜ。隣の席だしな」

「本当ですか？　ありがとうございます！」

「ああ。それじゃあ、また明日な」

「はい。さようなら！」

光と別れ廊下に出るとすぐに、暁は制服のポケットから携帯電話を取り出した。

「あれっ？」

いつの間にか亜美から電話があったようだ。暁は学校を出てからすぐに亜美に電話した。

――プルルルル……。

「はい……暁？　仕事終わった？」

「ワリイ、電話気付かなかった。今ちょうど終わったとこだ。暗号、見つかったか？」

「うん！　バッチリ。今私たち、商店街の喫茶店にいるんだけど、暗号のコピー渡したいから来てくれない？」

「もちろん。時間がないからな。すぐ行く」

亜美との電話を終えると暁は、商店街へと向かった。

午後八時を回った。辺りはすっかり暗くなり、夕方から比べれば客の数も相当減っている。喫茶店内の客もたったの三人である。

三人の客、暁、亜美、竜司は合流後、先程亜美がコンビニでコピーしてきた鬼頭火山からの暗号をじっと見つめていた。

「眠い……」

暁が呟くと、亜美と竜司も続いた。

「私も今日は疲れた」

「もう限界だな」

店内はしばしの沈黙に包まれた。

「よし！　皆、今日はご苦労だった。最初に感じた自分自身の直感が一番大事だ。今日は帰って、個々で解読しよう。明日からは学校で意見を出し合いながら解読しよう」

暁が堪えられなくなって叫んだ。

「うん。賛成」

亜美も力無く頷いた。

「この店、マジで軽食しかないしな……。まずは飯だな。それから集中して解く！」

竜司はなぜか今日の予定を説明した。もはや三人にまともな思考

など出来やしなかった。故に竜司の店に対する不満を聞いた店員のわざとらしい咳ばらいも、誰ひとり気付かなかった。
午後八時十分、店の前で別れた三人は、それぞれの自宅に帰って行った。

帰宅した暁はすぐにシャワーを浴びて、インスタントラーメンで簡単に夕食を済ました。
「眠い……。だが、一応暗号を解く方針くらい立てないと……」
暁はコーヒーを二口程飲んで、もう一度、暗号に目を落とした。

?「新・上・満・下」を一度に掲げる場所

?「日没する向」　ビブリオテカ

?孤ドクなエイ君
「猫」「注意」「隣人」「オペラ」「自然」

?ＰＸＴＨＲＢＲ
あ　う　え　う　え　う

?「陰になり日向にならず」

?５０＝Ｌ　１００＝「１」　５００＝「２」　１０００＝Ｍ

全部で六つの暗号だった。まず、暁は変換出来るところだけは直そうと考えた。
「?の『日没する向』は『西』だろう。あとは……。ヤバイ、それだけかよ。全然わかんねーぞ……」
その後一時間、暗号と向き合ったが、答は出てこなかった。

一瞬瞼を閉じたとき、暁は激しい睡魔に襲われた。
月の照らす街、暁は深い眠りについた。

- 4 -

七月一日水曜日。
暁と亜美、竜司は授業中に暗号を解いていた。しかし、結局昼休みまでに三人とも暗号解読に至ることはなかった。とはいっても、昼休みになった今もなお、その状況は変わっていない。
「学食なんて久しぶりだなー」
校内の食堂の一番奥の席で、亜美は美味しそうに「冷やしうどんA」を食べている。食堂には生徒が溢れかえらんばかりに集まるので、メニューの数は多めである。暁は「冷やしうどんA」と「冷やしうどんB」の差がいまだにわからなかった。一つ言えるのはAよりBの方が六十円高いということ。
「なあ、暁。この暗号、なぜこんなにやりにくいんだと思う？」
竜司がカレーをスプーンに乗せて言った。
「そりゃあ、数が多くて注意が分散するから……か」
暁もまたカレーを食べながら答えた。
竜司の質問は疑問ではなく、確認だった。したがって、竜司は暁がそう答えるとわかっていた。
「そうだ。だから数を減らすぞ」
竜司がそう言うと、亜美が首を傾げた。
「どうやって？　減らすには解く、解くには減らす。堂々巡りだよ」
亜美は天井を指差し、その指をぐるぐると回した。堂々巡りのジェスチャーらしい。
「亜美、減らす方法はある。単純に対象を絞るんだ」
暁が亜美に説明した。
「あぁー……。なるほどね！　そうしよう！　どれからいく？」

「まずは？と？にしようか。異議は？」
暁が提案すると、亜美がすぐに賛成した。
「なし！」
続いて、竜司も賛成した。
「オッケー。まずは？と？だ」
方針は決まった。しかし、この後もよい結果は得られなかった。
暁は、わずかに焦りを感じながらこの日を終えた。

七月二日木曜日。この日は模試だった。某予備校の制作したテストが学校で実施される模試である。
最後の教科である国語が終わると、ショートホームルームがあって、下校という流れだった。
午後二時過ぎには、校内の生徒はほとんど下校していた。暁達は貸し切り状態の図書室に集まっていた。
「なあ、？の『新・上・満・下』を一度に掲げる場所って、つまり、普通は一度には見られないってことだよな？」
暁がふと気が付いて、尋ねた。
「そうだな。時とともに変化するってことになるな」
竜司は、それがどうしたというような表情で答えた。
しかし、暁の発言は明らかに一瞬、空気を変えた。三人とも心に何か引っかかったような感覚を覚えたのだ。
暁と竜司は、まるで春の夢の記憶のように、その姿を儚くも消し去ってしまった。
最後まで記憶を留めていたのは亜美だった。
「月……」
亜美が静かに呟いた。
「月？」
竜司がすぐに亜美の言葉の意味を問う。
「月だよ！！　新月に上弦、満月、下弦！」

「！！！　そうか！　なるほど……」
「へへーん、一番乗り！！」
亜美は得意げな表情で言った。
「じゃあ答えは学校……か？」
暁は生徒手帳を取り出して、校章を指差した。それを見て竜司がまとめた。
「なるほど、校章か。月代学園の校章には四種類の月がそれぞれ描かれている。見ている側から考えれば時間軸は常に同時だ。そして、それを掲げる場所……」
「つまりこの学校ってわけね」
亜美が竜司に代わって結論を出した。
かなりの時間を費やして出した、第一の答だった。

午後五時三十分、第一図書室。
「竜司、起きろ。竜司！！」
暁は顔に暗号のコピーを置いて、長椅子で横になっている竜司を起こした。
「あぁ？　暁？　ヤベ……寝すぎた。　俺、どんくらい寝てた？」
竜司は完全に覚醒していない状態ながら、状況を把握した。
「あたしたちが出掛けたのが三時くらいだから……」
亜美が斜め上を見ながら言った。それを聞いて竜司は完全に覚醒した。
「待て。お前ら、俺が寝てる間に仲良くお出かけしてたのか？」
「亜美がついて来いって言うから」
「で、何処に行ってたんだ？」
「亜美の服を買いに」
「おいおい、正気か？　暗号はどうした？　まさかホントに仲良くお出かけとはなぁ！」
「落ち着け、そして安心しろ。今から解く。ヒントを得たんだ」

苛々を隠せない状況の竜司にとって、暁が平然と言った一言など、全く信憑性がなかった。

「ホントかよ。だいたい何で俺に一言言わなかった？」

「竜司君寝てたじゃん。それに、ただ服買っただけじゃないよ。学校の西を調べてきたの。でも、ただの住宅街だから、暗号の隠し場所じゃあないなと確信して……」

亜美が竜司の隣に座って説明しようとすると、竜司は目つきを変えて話を遮り、こう言った。

「確信して……？　それってつまり、『西』が西を表してないってことか？」

竜司の質問を聞いて、亜美は暁に視線を送った。それは説明を促すものである。

「そういうことだ。なあ竜司、『西』って方向以外に何を示す？」

「……スペインか！」

竜司は身を乗り出して叫んだ。

「つくづく思うが、頭の回転かなり速いよな、お前って」

暁は自分だったらスペインを漢字一字で示すと「西」となることを数秒間で導けるだろうかと考えながら言った。

「ヒントを得たって割には、答が出せていないから変だと思ったら、辞書が必要だったわけか」

竜司は電子辞書を取り出すと、西日辞典を呼び出した。

「『日没する向　ビブリオテカ』ってことは、ビブリオテカっていうスペイン語を翻訳すればいいんだろ？　スペルわかんねえな……」

竜司が呟くと、暁は、適当に探してくれ、と言いながら窓の外を見た。

外はまだ明るい。窓は開いていないが風が吹いていることはわかった。蝶が飛んでいる。蝶と蛾を区別しているのは日本人くらいのものであるがおそらく蝶だろうと思われた。

「夏だな、そろそろ」

「え？」

亜美がどうしたの、と聞こうとすると暁は亜美の方を向いて言った。

「この勝負が終わって、期末テストやって、そしたらもう夏休みだ。また普通の日常に戻るのかな……」

暁はどこと無く、悲しい顔をしていた。

亜美が何かを言おうとした瞬間、竜司が電子辞書を閉じた。

「わかったのか？」

暁が竜司の方に向き直した。

「ここだ。ビブリオテカはスペイン語で図書室。つまり月代の図書室のことだよ」

心臓が高鳴った。進んでいる。一歩ずつ、確実に。

窓の外では、世界が夕陽に浸っていた。

与えられし最初の旋律（後書き）

・二宮光（にのみやひかり）

暁と共に月代学園の図書委員会に所属する、本好きの女子高生。
何かと変わったことをすることが多い。
図書室をこよなく愛しており、どの本がどの棚にあるかを完全に記憶している。
クラシック曲「カノン」を好んでいる。

次回は、今回の暗号の解決編的な回であり、その他にも心理的な重要回でもあり、他にもいろいろと盛り込んでいるので、少しは楽しめるかと思います。
今回は新たな暗号の入手と、二宮光の登場がメインです。
余談ではありますが、1章に関しては、現実世界と、小説内での世界の時間は同時でした。
つまり、作者である僕と竜司は、この小説を２００９年の6月下旬、小説内での「始まりの日」近くにこの小説を書き始めたんです。
なので、季節感と、時事ネタ的表現は、約1年遅れていますのでご了承ください。
次回、暁や亜美や竜司たちの感覚を味わいたい方（いねーよ笑）は、今回の暗号を解いてみてくださいね。
登場人物しか解きえない、今回の「月の暗号」みたいなのはもうないので。
次回はカノンでも聴きながら読むといいかもしれませんね。
あくまで僕のおすすめですが・・・

雨のち晴れ

-1-

七月四日土曜日、暁は自宅で暗号と向かい合っていた。昨日から続く雨のせいで、図書館に行くことさえ億劫だった。

七月三日は収穫はなかった。雨のせいで屋上も使えず、図書室も何やら教師達が会議室に使っていたので、能率が上がらず、結局は自宅で各自、解読となったのだ。

日が変わって、本日七月四日もまた、前日と同じく、各自で解読となった。暁の住む部屋は特別使いやすいわけではないが、暗号解読の為の資料は最低限揃っている。

「?番『孤ドクなエイ君　猫、注意、隣人、オペラ、自然』……か」

うまくいけば、数日のうちに四つの暗号を解読出来るはずであった。各自で解読する上で、範囲を絞るやり方に都合が悪くなった為に、三人はそれぞれ別の暗号を解くことになった。暁は?、亜美は?、竜司は?と?をそれぞれ担当した。

現在の時刻は六時十三分、室内には雨が窓を叩く音が響いている。

「暑いな……」

室内の温度は三十五度程まで上がっていると思われる。暁は扇風機の首ふりを止めて、常に自分に風が当たるようにした。

部屋の中央にある机に目をやると、一冊のノートがある。暁は今日を含めた二日間で答の一歩手前まで来ていた。最初に「ドク」「エイ」がカタカナである理由は単に注目させたいからであると睨んだ暁は、まずそれを変換する作業に入った。しかし、「西」がスペインを意味した?の暗号から、「ドク」「エイ」が「独」「英」を指し、それぞれ「ドイツ」「イギリス」を表していると仮定するまでは至ったが、そこから先はわずかな進歩しかない。

机の上にあるノートには「孤ドクなエイ君」の文字の後に書かれ

ていた五つの単語のドイツ語訳と英語訳とが書かれていた。

猫　Ｋａｔｚｅ　ｃａｔ
注意　Ａｃｈｔｕｎｇ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ
隣人　Ｎａｃｈｂａｒ　ｎｅｉｇｈｂｏｒ
オペラ　Ｏｐｅｒ　ｏｐｅｒａ
自然　Ｎａｔｕｒ　ｎａｔｕｒｅ

「あーあ……」

いつもの調子なら、もう解読出来てもいい頃だった。しかし、それは錯覚かもしれなかった。なぜなら、亜美はともかく竜司でさえまだ答を出してはいないからだ。

仮に次が最後の暗号だとしたら、どれだけの時間が残されているのだろう。暁は七月十四日から遡るやり方で残り時間を考えた。七月十四日、この日には既に解読を終えていなくてはいけない。次に、今回と次回で終わると仮定したので、単純に残り時間を等しく分けてみた。

七月九日。この日がタイムリミットだった。だが、実際には暗号は次で最後とは限らない。暁は焦りを感じずにはいられなかった。

午後七時、突然雨が上がった。さっきまで、激しく窓を叩いていたのが嘘のようだった。

「そろそろ、お金下ろさなきゃな。飯も無いし……。今日の内に出掛けるか……」

暁の父親は、田舎で小さな会社の社長をしている。社長といっても世間一般にイメージされている社長とは違い、自ら飛び回って仕事をするような社長である。

暁は、中学一年生のときからこの街に住んでいる。以前からこの街に住んでいた祖母が病気にかかり、その世話と、入院する病院の関係もあり、母と二人でこの街に引っ越してきた。しかし、三年生の頃、祖母は他界した。その後、母親は父親の仕事のサポートの為

に田舎に戻った。だがその頃、既に月代学園に合格していた暁は、田舎に戻らずこの街でアパートの一室を借りて暮らすこととなったのだ。一応は父親が社長ということもあり、お金には困らないわけではある。だが暁は、世話になるのは高校生の間だけと決めていた。もちろん、高校生の間にあの事件のことに自らけじめをつけると仮定して……であるが。

暁は財布と暗号のコピーをズボンの右ポケットに、携帯電話を左ポケットに入れ、アパートを出た。暗号の解読ノートを持って行くか、一瞬悩んだが、荷物になるので置いていくことにした。

アパートを出て、しばらく歩くと、雨上がりの街の特有の匂いが辺りを満たしていることに気が付いた。確か前にも雨上がりの夜に出掛けたことがあった。あのときは公園に行ったんだっけ……。

街には誰ひとりいなかった。怖くなるくらいの静けさだ。何の恐怖かといえば……そう、最後の人類になったかのような恐怖、そこはかとない孤独感。何がマイナスの雰囲気を出しているのだろうか……。この空間を自分だけで独占しているという考え方も出来るはずである。それは奇妙な感覚だった。

そんな孤独感を打ち消したのは、左ポケットの携帯電話が発した着信音だった。誰からだろう……。

竜司からだった。竜司が電話してきたのだ。出ない理由もないので暁は迷わず通話ボタンを押した。

「もしもし、どうした？　竜司」

「？の暗号を解いた」

「ホントか！？」

「ったくよ。鬼頭火山も手抜きが酷いぜ。こんな簡単な暗号に二日も使うとは、自己嫌悪に陥るところだよ」

「何だ、そんな簡単だったのか？」

竜司は、最悪だ、とこぼした。

「？『５０＝Ｌ　１００＝［１］　５００＝［２］　１０００＝Ｍ』の答は『ＣＤ』だ。おそらくコンパクトディスクを指している」

「何でCDなんだ？」
「アラビア数字をローマ数字に変換すれば終了」
竜司がそっけなく言った。
「ああ、なるほどな。確かに、意外なほど簡単な解法だな。腹立たしい……」
暁もまた、何故もっと早く気付かなかったのかと自己嫌悪に陥った。二や五のようなアラビア数字を、？や？のようなローマ数字にするだけであるのに。
「？、？で場所が限定されていて良かったな、多分、図書室のCDコーナーにいけば何かしらの収穫は得られるぜ。？だけ解いてもさっぱりだ」
……！！
「……」
「暁、どうした？」
「なあ、この暗号って難易度と重要度がリンクしてないか？」
暁はふと気が付いたことを竜司に話した。
「なるほどな……。確かに？、？は難易度に見合った情報だった。そうかもな」
「だったら？が一番重要かもな」
「ああ。正直、？は他の答がないと厳しいな。一応やってみるが……」
？とは「陰になり日向にならず」という暗号のことである。暁も竜司もヒントとなる情報の乏しさには気付いていた。
「そうだな。俺も頑張ってみるよ」
「ああ。頑張れや。期待してる。……じゃあ、この辺で」
「おう。じゃあまた後でな」
電話を切ると、暁は走り出した。早く用を済ませ、暗号を解くためだ。残りは三つ。今回の暗号も後半戦に入ったことになる。
明日の朝までには解こう。暁は強く握った掌に決意を込め、雨に濡れたアスファルトの上をひたすら走った。

- 2 -

午後九時、夜光公園は海底遺跡を思わせる潤いに包まれた空間に変化していた。木々の一本一本が雨を吸い込み、遊具は数え切れない水滴に覆われている。湿った土は、歩く度にじゃりじゃりと音を立てる。そして、蛙の声は一定のリズムを刻みつづけていた。

暁は簡素な屋根の付いたベンチの、濡れていない場所を探して座った。屋根の外の夜空は晴れていた。この街では星は見えない。故郷では、友人達とよく星空を見た。感傷的な気持ちになるまでには至らないが、懐かしい感じはした。星の代わりに月がやわらかな光を放っていた。

「あと一歩、なのにな……」

用事を済ませた後、暁は意味なく夜光公園に足を運んだ。しかし、正確には意味がないわけではない。ここに来ると落ち着くという思いがあったのだろう。

夜光公園にいると自然と亜美のことが思い出される。彼女はもう暗号を解いただろうか。

「亜美……」

「なあに？」

「わっ！！！！！！」

暁は転びかけて、寸前で踏み止まった。目の前には亜美が立っていた。

「何してんの？」

亜美は平然と言った。そのため、暁にはその言葉の意味が、転びかけたことに対してだか、こんな時間に夜光公園にいることに対してだか分からなかった。

「なんでここにいるんだよ？」

「よく来るの、あたし」

「へえ……。夜にたった一人は、危なくないか？　気をつけろよ」
「うん。気をつける。それで、暗号解読の調子はどう？」
調子が良いか悪いかといったら、明らかに後者である。
「耳が痛いね。そっちは？」
「あたしの勝ちね、暁クン」
「と、解けたのか？」
「初めて勝ったー！！」
亜美が跳びはねている最中、暁はいよいよ焦りが頂点に達した。
このままでは足を引っ張ることになる。
「お前が解いてたのって『ＰＸＴＨＲＢＲ　あ　う　え　う　え　う』っていうやつだろ？　どうやって解くんだ？」
「あのね、あたし、まずインターネットで調べようかと思って、駄目もとでまんま検索のとこに入力したの。そしたら、間違えて全部アルファベットで入力しちゃってさ。それで気が付いたの。『あうえうえう』は母音かなって」
「なるほど！！　その母音を『ＰＸＴＨＲＢＲ』の適当なところに入れれば……」
「うん。それで出た答が『ＰａＸＴｕＨｅＲｕＢｅＲｕ』つまり『パッヘルベル』」
暁はここで再度、自己嫌悪することとなった。「ＸＴＵ」が「っ」を示すというところが盲点だった。とはいえ、簡単な暗号だったことは否めない。
「なあ、パッヘルベルってなんだ？」
おそらく人名だろうと思いつつ、暁は亜美に尋ねた。
「調べたんだけど、バロック時代のドイツのオルガン奏者みたい。代表作は『カノン』……」
「『カノン』！？」
「どうしたの？」
「光が『カノン』に関して話してて……。だけどそれ以外に今何か閃いたような……」

確かに何かが脳内を掻き混ぜたような感じがした。重要なのは、その閃きが無から生じたものでなく、既存の情報から作り出されたものであることだ。

「暗号……解けそう？」

亜美が暁の顔を覗き込んだ。

暁はポケットから暗号を取り出し、じっと見つめた。そして、その行動に意味がないことを察した。

「違う、これじゃない」

「……何が？」

「家にノートがあるんだよ。五つの単語のドイツ語訳と英語訳がかいてあるノートが」

「ドイツ語訳と英語訳？？」

「後で説明する。とにかく、すぐに確認した方がよさそうだ。悪いけど、先に帰るよ」

暁はそういうと、立ち上がって公園の出口に向かって歩き出した。

「暁！」

数メートル歩いたところで、亜美に呼び止められた。亜美は何か言いたそうだった。

「な、何？」

「もしこの勝負が終わっても、あたしたちは変わらないよ」

「え？」

あまりに唐突で、暁には何のことかよくわからなかった。

「暁、こないだ言ってたでしょ。この勝負が終わって、期末テストやって…夏休みになったら、また普通の生活に戻るのかなって」

思い出した。それは一昨日、図書室で言ったことだった。

「あ、ああ……」

「暁、前は毎日、苦しんでたでしょ。あたしは暁が苦しんでた理由はわからないけど、苦しそうにしてたのは気付いてた。でも、あたしや竜司君と今までよりもたくさん話すようになって、少し元気になったんじゃない？　だから、これからも、一緒にいれば、大丈夫

だよ。きっと、悲しいこととか、なくなるから」
　亜美が自分のことをここまで気にしていたとは知らなかった。
　馬鹿だな、俺は。亜美の言葉で、心から安心している。今、はっきりとわかった。俺は以前の閉塞した、誰もいない日常に戻って、果てしない苦悩を再び感じるのではないかということに言い知れぬ孤独を、恐怖を感じていたのだ。目の前に手を差し伸べてくれる、大切な人がいたのにも関わらず……。
「……そうだな。今まで心配かけてごめん。それから……、ありがとう」
「……うん！」
「……」
「……」
　何やら、気まずくなってしまった。しかし、空気が悪くなったわけじゃない。妙に恥ずかしくなってしまったに過ぎなかった。次に繰り出すべき最良の言葉が浮かばなかった。心の手が、暴れだした心臓の鼓動を止めんばかりに押さえ付けようとしていた。その様を気付かれないように、ただ必死に平然を装うのがやっとで、どうしたらよいかわからない。
「ほ、ほら！　あとは暁だけなんだから、早く暗号解かなきゃ！」
　亜美の方が先に口を開いた。それは、動揺を隠すような口調だった。
　自分から言い出したくせに、何でお前まで照れてんだよ……。
「あ、ああ。それじゃ、また後で……な」
「うん。バイバイ」
　暁は公園を出た。
　世界が微かに明るくなった。踏み出した一歩が軽くて驚いた。しかし、忘れてはいけない、これはまだ途中だ。あの事件の決着は着いていない。だが、このパラダイムシフトは暁にとって、大きかった。この日のことは決して忘れないだろう、そう思った。
　この街の月は、変わりなく黄金色の光を零していた。

暁は、アパートに帰るとすぐにテーブルの前に座った。テーブルの上には数時間前に部屋を出た時と変わることなく、一冊のノートが広げられている。

猫　Ｋａｔｚｅ　Ｃａｔ
注意　Ａｃｈｔｕｎｇ　ａｔｔｅｎｔｉｏｎ
隣人　Ｎａｃｈｂａｒ　ｎｅｉｇｈｂｏｒ
オペラ　Ｏｐｅｒ　ｏｐｅｒａ
自然　Ｎａｔｕｒ　ｎａｔｕｒｅ

閃きの半分はここから来ているはずだった。そして、もう半分は「カノン」という言葉から来ている。

それから一分も経たない内のことだったろう。突如、道は開けた。

「そうか……！！　答は初めにあったんだ！」

暁は携帯電話を開き、メール画面を開いた。宛先は亜美と竜司である。しかし、その本文は暗号の答が書かれたものではなかった。その内容は明日、七月五日に学校に集まってほしいというものものだった。

明らかになった暗号は五つ。暁たちは鬼頭火山の暗号に王手をかけていた。

狂い始めた追復曲-Ｋａｎｏｎ-

-1-

七月五日、日曜日。月代学園には部活動で数十人の生徒が登校していたが、第一図書室にいたのは、暁、亜美、竜司の三人だけだった。

午前十時三十分を過ぎた頃、三人は勉強をしに来た生徒四人と入れ違いに図書室を出た。三人が向かったのは二年Ｃ組の教室である。

「ねえ、これって実際何なのさ？」

亜美が、図書室から無断で持ち出したＣＤ十二枚を見ながら言った。

「『パッヘルベルのカノン』を曲目に含んだＣＤだ」

暁は手にＣＤプレーヤーを持ちながら答えた。

それを聞き、今度は竜司が尋ねる。

「しかし、何で『パッヘルベルのカノン』を含むなんだ？」

「昨日、？の暗号を解いたんだ。『孤ドクなエイ君』はドイツ語と英語』を表していた。その後の五つの単語はそれぞれドイツ語訳と英語訳にしてみると、意味を持つ。最初の暗号と同じだ。頭文字を抜き出して読む。そうすると……」

「そうすると？」

亜美は説明の続きを催促した。

「ドイツ語訳の方は頭文字が『Ｋ』の『Ｋａｎｏｎ』、英語訳の方は頭文字が『Ｃ』の『ｃａｎｏｎ』になる」

「どう違うの？」

「『Ｋ』から始まるのはドイツ語での、『Ｃ』から始まるのは英語での『カノン』のスペルだ。それと？の答『パッヘルベル』、？の答『ＣＤ』、？？の答『月代学園の図書室』。これらの情報から推測するに、おそらくその十二枚のＣＤの中に暗号の答があるはずだ」

暁の推測が語られたところで、三人は二年C組に到着した。
暁は教卓にCDプレーヤーを置くと、電源コードのプラグをコンセントに差し込んだ。
「ね、ねえ！　まさかとは思うけど、クラシックを十二枚もこれから聴くの！？」
亜美が不安な面持ちで叫んだ。
「まっ、それしかないね、篠原さん」
竜司が一枚目のCDを取り出してCDプレーヤーに入れながら言った。
「眠くなりそー……」
亜美が目を細めてうなだれた。
「安心しろ、亜美。曲自体に意味があるなら、素人の俺らには聴いてもわからないよ。俺が狙ってるのはCDの入れ替えがなされているってシナリオだ」
「そんなにうまくいくかなあ……」
確かに、暁も竜司も不安は持っていた。しかし？の暗号の解読が困難である以上、今ある情報に全てを賭けるしかなかった。暁は期待と不安のなか、CDプレーヤーの再生ボタンを押した。

七月八日、水曜日。約束の日まで残り一週間を切ったこの日、暁たちはまだ暗号を解読出来ていなかった。七月五日の試みは大方の不安が現実となって、結局失敗に終わり、まさに逆転負けしそうな勢いであった。十二枚のCDは、『パッヘルベルのカノン』を曲目に含むごく普通のものであった。
まるで、チェックしたにも関わらずそれを阻止され、さらにクイーンもビショップもナイトもルークも取られてしまったような感じであった。
その後の月曜日も火曜日も同じだった。？の暗号、「陰になり日向にならず」を解こうにもわけがわからず、CDを聴き直しても成

果は得られず、暁たちは焦燥感に駆られていた。
放課後、暁たち三人は第一図書室二階、ＣＤコーナーの前で、寝そべっていた。
「有り得ねーよー。ここに来て打つ手無しとかさ……」
暁は天井の斑模様を見ながら呟いた。
「万事休す……か」
竜司は瞼を固く閉じて言う。
「はあ……。難しすぎだよ、お手上げ」
亜美は前髪をいじりながら、けだるそうにぼやいた。
三人共限界に近づいていた。集中力は途切れ、茫然としていた。図書室の隣の小ホールだか、もしくはその奥の中庭であるかはわからないが、管弦楽部がカノンを合奏していた。どうやら、次の定期演奏会で曲目に入っているらしい。三人にとっては、もう何度も聴いた曲であり、耳慣れた曲であった。
階段を上る音がした。三人が階段の方向に目をやると、一人の生徒が立っていた。
「あれ？　皆さん、何してるんですかぁ？」
二宮光だった。暁は早くも疲労感を感じ、彼女の登場に、もう勘弁してくれ、と思っていた。
「二宮さんは何しに来たの？」
黙っている暁と竜司に代わって、亜美が会話を試みた。
「本読もうと思って来たんです。そしたら、皆さんがいて……」
「ホントに本が好きなんだね。二宮さんって」
「はい！　それに、今日はここなら、管弦楽部のカノンも聴けるし快適です！」
暁は何となく、管弦楽部の練習風景を想像していた。ヴァイオリンを弾く女子生徒の姿が目に浮かんだ。そして、イメージは次第に旋律の方に移っていった。繰り返されるメロディー。初めのメロディーから、もう四分程の時間、同じ種類の旋律を奏でていると思う。
「ん？」

先程と曲が変わったような気がした。いや、確実に変わった。あまりに自然なシフトの仕方だった為に気付くのが遅れただけだ。
「なあ、光。今、曲変わったよな？」
「はい？　……ああ。ジーグに入ったんですよ」
ジーグ……。パッヘルベルのカノンを収録したＣＤを集めた時、二種類の題名があった。「カノン」という表記と「カノンとジーグ」という表記だった。暁たち三人は、それが単なる省略、非省略の違いだと判断していたが、光の言い方ではそのような意味ではないらしかった。
「ジーグって、何なんだ？」
「ジーグは舞曲のことですよ」
「『カノン』と『カノンとジーグ』はどう違うんだ？　俺たち、てっきり省略かと思ってたんだが……」
暁が急に話し出したのを見て、亜美と竜司は期待を抱いていた。暁が何かを閃いたのかもしれない……と。
「省略……ですか？　若干ズレてますね。『パッヘルベルのカノン』の正式名は『三つのヴァイオリンと通奏低音のためのカノンとジーグ二長調』なんです。だから、『カノン』と言った場合、後半部に当たる『ジーグ』の部分はカットされているんです。つまり、違いは『ジーグ』が入るかどうかってことですね」
「なるほど……。要するに、本来『カノン』『ジーグ』の二つの要素を持っていたのに、いつからか『カノン』だけを取り出したものが出回り始めたわけ……か」
「はい。『カノン』があまりに有名なので、『ジーグ』はあまり評価されていないんですよ。私は好きなんですけどね。でも、それがどうかしたんですかぁ？」
暁の脳内に、ある日本語の表現が浮かんだ。「陰日向になる」という言い回し……。意味は、裏で支えたり、表に立ったりしていろいろと援助すること。？の暗号は「陰になり日向にならず」である。
「陰日向になる」の意味と対応させたらどうだろうか？

暁は亜美と竜司の方を向いて、言った。
「裏で支えることはあるが、表に立つことはない……。？の暗号はそういう意味だ」
亜美と竜司は顔を見合わせた。二人とも答とおぼしきものに辿り着いたのである。
「常に注目されることはないが、曲の後半を担っている。答は……『ジーグ』だ！」
「で、でも、『カノン』も、『カノンとジーグ』も一通り調べたよ？」
亜美は十二枚のＣＤを指差して、言った。
「まだ、調べてないものがある。『ジーグ』が単体で収録されているＣＤだ。光、そういうパターンはあり得るのか？」
暁の問いに、光は数秒間考え、答えた。
「わからないですけど、私はそのパターンは見たことないです」
「……賭けだな」
この答以外には思い付かなかった。これが最後の賭けである。これを外したら、おそらくもう打つ手は無いだろう。
「亜美、竜司、棚のＣＤを全部調べるぞ！」
暁の呼びかけと同時に亜美と竜司は棚を調べはじめた。暁は、探索を始める前に光の方に向き直った。
「光、ありがとう！　お前のおかげで希望が見えた」
「なんだか、よくわからないですけど、お役に立てたなら良かったです。探し物見つかると良いですね」
「ああ。うまくいけばいいけど……」
「それじゃ、私は読む本を探してるのでこれで。何か私が役に立てることがあったら、おっしゃってください」
そういうと、光はお辞儀をして、本棚の方に歩いて行った。
「さて……。俺も探さなきゃな」
午後五時、最後の鍵を探すべく、大捜索が始まった。

午後五時十五分、二年C組教室。

見つかったCDはたったの一枚だった。図書室にあったCDで唯一『パッヘルベルのジーグ』を単独で収録しているCDだ。見た目が普通だった為に、それをCDプレーヤーで再生する必要があった。図書室ではコンセントが空いていなかったので、三人は誰もいない二年C組の教室にやって来た。

「これが駄目だったら、どうしようか……」

亜美は、CDプレーヤーに、持って来たCDをセットしながら不安を口にした。亜美の脳裏には先日の失敗の映像がしっかりと焼き付いていた。

「そしたら、また次の手を考えるさ」

暁は落ち着いた気持ちで構えていた。もうこれしか望みはないのだ。実際、これが駄目でも諦めないだろう。しかし、それは事実上の敗北を意味している。

「よし……。これでチェックメイトだ。俺は暁の推理を信じるぜ」

竜司は空々しい口調で言ってみせた。

「ったく、ハードル上げんなよ」

「もしミスったら、二宮に告白な」

「バカ言うな。もしOKされてみろ。精神いかれちまうよ。一応、恩人になる可能性あるけどな」

そんな冗談の後、暁たちは教卓のCDプレーヤーを囲むような位置で立った。そして、中央の亜美が再生ボタンに指を置いた。

「いくよ！」

「おう！」

カチッ。

教室が緊張で満たされた。

「……」

「……」

「……何も入ってない……？」

一瞬、戸惑ったが、暁はすぐに冷静な手つきでＣＤを取り出した。

「ビンゴだよ。これは鬼頭火山によって入れ替えられたものだ。おそらく中身は……」

「テキストデータ……だな」

竜司が暁に続いて言った。

「よーし！！　二人ともウチに来て！　あたしのパソコンでそのＣＤの中身を確かめよう！」

亜美は内心、失敗の二文字に怯えていたが、暁と竜司の言葉を聞いて、俄然やる気を漲らせた。

「ああ。今度こそチェックメイトを決めてやる」

暁は取り出したＣＤをじっと見つめて言った。

今度は、暗号を完全に解読したといって良かった。喜びは大きいが、やはり今は焦りの方がさらに大きかった。三人はすぐに二年Ｃ組を出ようとした。

その刹那、三人の視界に一人の女子生徒が入り込んだ。よく見ると、その女子は、月代学園の制服を着ていなかった。私服で校内に入り教師に見つかると面倒なので、普通はそんなことはしないだろう。つまり、彼女はこの学園の生徒では……ない。

誰なんだ、一体……。三人の動きが止まってから数秒後、亜美が口を開いた。

「シ、シズ……！」

シズ……？。聞き覚えがあった。はっきりと記憶している。事の始まりは亜美がシズと呼ぶ、彼女の親友、佐藤静枝（さとうしずえ）の頼みにあったのだ。つまり、目の前に立っている人物は鬼頭火山の姪、佐藤静枝だというのか！？

「ア、アミ……！　大変……なの！」

静枝はとぎれとぎれに言った。彼女は、かなり息を切らしていた。

暁はこの世界のずっと奥のどこかで、何かの歯車が外れたような

感じを覚えた。

亜美が鬼頭火山に、静枝とは話してはならないと言われていたのは、静枝自身もわかっているはずである。それでも亜美に何かを伝えなければならなかった……。どんな理由があるというのだ……。暁は、目の前の異常事態に恐怖さえ感じていた。これから何が起こるというのか。

静枝は膝に手を置いて呼吸を整えている。

彼女が姿を現したことが一体、何を意味しているか、暁には見当もつかない。

繰り返し続けていた静かな旋律が、不協和音とともにノイズへと変わっていくのが、はっきりと分かった。

狂い始めた追復曲 - Ｋａｎｏｎ - （後書き）

次から1章後半に突入します！

暗雲の到来（前書き）

次の更新は今週末以降になるかも・・・です。

暗雲の到来

- 1 -

それはあまりにも衝撃的で、にわかには信じがたい事実。
静枝は亜美の腕に抱かれて涙を流している……
この世界は理不尽だ。
何故、こんなにも美しい人が悲しむ必要がある？
暁は静枝を見て思った。
せめて、俺みたいな奴だけにして欲しい。
親しい者が消えて無くなる悲しみを若くして背負うのは。
暁は、学校の廊下で崩れ落ちた静枝に過去の自分を重ね合わせていた。
今、静枝の心中がどんなものであるか、暁には痛いほどわかる。
「……う……うぅ……うううう」
「……シズ」
亜美にはしゃがんだままの静枝を優しく抱くことしか出来なかった。その表情は、ただただ、辛さ。
「……なん……」
竜司は口元に手を添え、驚きと困惑の混じった表情で静枝を見つめる。ひとつの露出した悲しみを目の当たりにして、平静を保てる高校生はそういない。竜司は無言で目をつむり、静枝に同情の念を捧げた。
暁は携帯を取り出した。
既にニュースステロップにも流れていた。
「……マジ……かよ……」
有名小説家　鬼頭火山さん死去　死因は自殺か

あの鬼頭火山が死んだ。
暗号だけを残しこの世を去った。
「ううううっ！」
静枝のあえぎが廊下に響き渡るのを、暁はただただ、聞き入るしかなかった……

数十分後、四人は学校から一番近いファミレスに向かっていた。
「……ごめんね。もう大丈夫だから」
静枝はそう言うと後ろに振り向き立ち止まった。そして後ろを歩いていた竜司と暁の顔をまじまじと見つめた。
そのとき、歩道の横を行く車が起こす風で静枝の艶やかな金髪がなびいた。
その一瞬を暁と竜司は見逃さなかった。
まさしく、美女。露わになったその容姿は見る者を魅了する奇跡の美しさ。顔だけではない。浮き上がった腰のラインに服の上からでもわかる豊満な胸。そしてそのファッションセンスもモデル並み。言うこと無しの絶世の美女である。
これだけ魅力的な女を、暁も竜司も目にしたことがなかった。見ていると自分の容姿が恥ずかしいほどの低ランクだと思い知らされる。それくらい、佐藤静枝は可愛かった。
突如として、沈黙を破り口を開いたのは冷や汗を浮かべる竜司であった。
「あ、あの。モ……モデルかなんかを、おやりで？」
……この阿呆は何を言い出すのか？　先ほど、おじさんが死んだばかりだと聞かなかったのだろうか？
暁はため息をつき額を手のひらであてがった。
静枝は、先ほどとは一転して表情を和らげ「アハッ」と竜司のスットコを笑い飛ばした。一瞬、彼女が元気になった気がして暁は安心した。竜司のスットコも馬鹿にはならないようだ。

「あんたたちが亜美の協力者？」
いきなり初対面であんたたちとは、なかなか度胸のある女だ。肝っ玉も座っているらしい。
「……あ、はい……」
暁はなるべく丁寧に返答した。まだ会ったばかり。どんな性格か不明な以上、慎重に接するのがベストである。
「ふーん……」
と、まるで賞味期間切れのパンを見るかのような目つきで二人を眺め回した静枝は、再び前に向き直り歩き始めた。
「さ、早く行きましょ。アミリン♪」
「うん！　ほら、二人も早くっ」
亜美がスカートを揺らし走り出し、その後ろを静枝が追っかけて行った。男二人は取り残され、その内の数学がデキるほうがこんなことを呆然と言い放った。
「……なんかさ、俺たちさっき、まるで賞味期間切れのパンを見るかのような目つきで眺め回されなかったか？　あの金髪女に」
すると、特に取り柄がなくしがないほうの男は、特に反論もせずそれに同感したという……

- 2 -

夕食時とあってか、店内の人数は賑わっていた。
窓際の席に座った暁たちは、外の街頭に照らされた幻想的な植物を目にすることができた。暁はメロンソーダを飲みながら佐藤静枝の話に耳を傾けていた。
「電話しても出なかったから、直接行ってみたら……玄関先で首を……吊ってたって……おばさんが……」
話によれば、第一発見者は鬼頭の奥さんらしい。発覚は昨日の午後。

……それにしても、自殺とは……

「遺書もないし、私にも……動機は全然……わからないの」

静枝は全く飲み物に手をつけていない。きっと気分でないのだろう。時々、窓の外を見てしんみりとした表情を見せては、すぐにうつむいてしまう。

暁は冷静になって考えた。

何故、鬼頭は自殺したのか？

そういえば、と暁は思い出した。亜美は鬼頭の大ファンである。亜美もさっきからほとんど喋らないが、きっと内心とても悲しんでいるのに違いない。

沈黙が流れた。だがまたしてもこの男がそれを破った。

「ええと、それで君は……どうして、俺たちの所に？」

尋ねはしたが、きっと竜司もわかっているに違いない。静枝が俺たちを訪ねてきた理由……

「うん……、うち、納得いかないから」

「納得……というと？」

いつの間にか竜司が場を仕切っている気がする。

「だって……！　小説やめるとか、しかも何にも言わないで死んじゃうなんて、納得出来ないでしょ！？」

結構デカい声だったため、周りの客の数人がこちらをチラ見してきた。

「それで、そういえばって思い出したの。……あんたたちがおじさんと勝負してること。確か……勝てば小説をやめようとする理由を話すって。手がかりはもう、それしかないの。だから私も今から協力するよ」

「え？」

亜美が顔を上げた。

暁は確認の意味も込めて、静枝に尋ねた。

「……協力……するって」

静枝は凛とした表情で暁と目を合わせた。その表情からは、固い

決意が感じられる。
「きっとおじさんは、暗号に答えを隠しているはず。約束を破るような人じゃないから」
竜司は慌てて聞き返した。
「つまりそれって、暗号の答えに何故小説をやめるかっていうのと、自殺した理由も含まれるってことか？」
静枝は無言で首を縦に振った。そして静かに語り出す……
「警察も、奥さんも、家族の誰もわからない。知ることができるのは、暗号を解いた者だけ」
暁は唾を飲んだ。自分たちが今から首を突っ込もうとしていることの重大性……、俺たちが関わっていいことなのか？
竜司が口を開いた。
「この……今までのこと、全て警察に話して、任せた方がいいんじゃ……」
「ダメ」
竜司の提案を、静枝が制した。
「それなら、おじさんは遺書でも書いてるはず。すぐ見つけられるようにね。……考えてもみてよ、家族にさえ黙ってることなんだよ？　知る権利があるのは……暗号を知るうちらだけなのよ」
全員が、何か重みのようなものをその身に感じていた。それなりの覚悟がこのゲームには必要であると。
このゲームは、主催者が死してなお、続いているのだ。
「……」
暁は思考した。何かが引っかかる……彼の死には何か……
「ちょ、ちょっと待てよ」
暁は感じていた疑問を正確に捉えた。
「何故だ？　どうして彼は、俺たちに教える前に……」
「さぁ……わからないわ。それも含めて、暗号に……」
静枝を遮り、暁は言う。
「違う。……自殺。つまり、死ぬつもりだった……？　彼は……死

なねばいけない理由があったのか？」
　自分でも、正確に自答できていないのはわかっていた。だが暁にはどうしても引っかかった。約束の七月十四日まであと一週間というところで彼は死んだ。……自殺なら、一週間くらい己の意志で伸ばせたはず。
　にも関わらず彼は約束の一週間前に自殺した。
　彼をそうさせたのは、一体……
「とりあえず、今日はこのへんにしない？　もう遅いし」
　と切り出したのは亜美だ。
　気付けば、もう二十時を回ろうとしていた。
「そうだな……。そろそろ帰るか」
　と竜司が席を立った。
「うん……また連絡して」
　そう言って、静枝も立ち上がった。
「暁？」
　椅子に腰掛けたままの暁を見て、亜美が声を掛けた。
「ああ、俺はまだここにいるよ」
　特に理由はなかった。なんとなく、まだ家に帰りたくなかった。
「そっか、じゃあまた明日。バイバイ」
「ああ、じゃあな」
　三人が店を出て家路につくのを、暁は窓から一人ぼんやりと眺めていた。
　メロンソーダを口に含み、視線をそのまま上に上げた。するとそこには、雲に隠れた小さな月がこちらをいじらしく伺っていた。
　なんとなく、月に馬鹿にされた気がした暁は遥か宇宙のかなたにある月に対し悪態をついてみせた。

七月九日（木）

またあの夢だ。
目の前に扉がある。
開けないと。……ん？
どういうことだ？……足が動かない。
俺は後ろを振り返った。
するとそこにいたのは、鬼頭火山であった。
「……あ、あの」
「……」
「……あなたは何故、死んだのですか？」
「関係ない」
彼が言い終えるか終えないかのうちに、彼の首に縄がかかった。
一瞬のことであった。彼は頭上高くまで吊り上げられ、何かをうめいている。
言いようのない恐怖に襲われた俺は動かない足を必死に動かそうとした。
――――扉を！
「ハァッ！」
暁はそこで目を覚ました。生まれて何度目かの悪夢を見てしまった。気分が悪い。
冷蔵庫を開けてラッキーサイダーをコップで一杯飲み干した。時計に目をやると夜中の3時であった。
「……はぁー」
汗だくになっていた。恐ろしい夢であるのは覚えているが、もう既に内容が全体的に薄れてきてしまっている。
暁は今更ながら思い返した。鬼頭が死んだという事実を。
ついこの前まで暗号を解くのは楽しみのひとつでもあったが、鬼頭の死がそれをそうでなくさせた。
「次が……ラストか」

どうしても明るい気持ちにはなれなかった。
しかし解かねばいけないという思いも次第に強まっていく中、暁はベッドに横になり深い眠りに再度ついたのだった……

学校に着いてすぐ、暁は亜美の姿を探した。
教室にはまだ亜美の姿どころか、誰の姿もない。
……当たり前か。
暁は今日、いつもより一時間も早く学校に着いていたからだ。別に理由はなかった。なんとなくである。
広い教室で一人きりの暁はあまりに暇だったためにサザンを口ずさんでみた。五分で飽きた。これでも続いたほうである。
「はぁ～、誰か来ねぇかなぁ」
「ウ～」
「!?」
背後で低いうめき声を聞いた暁はとっさに振り返った。
そこには人間が一人立っていた。
「……ひ、光かよ!?」
「ウ～負けた～」
二宮光は泣いていた。
暁は困惑しつつ尋ねた。
「な、何に？　負けた？」
唐突すぎる。会っていきなり泣かれても困る。
「ここ、二年C組では私がトップを飾ってきました……ずっとです」
トップ？　トップって……。ああ！
「教室に一番乗りしてたってか!?」
「……ハイ」
「かぁ～～～っ」
暁は呆れた。
……そんだけの理由で泣くなよな！

「一体、いつからいたんですかぁ？」
涙ぐみながらそんなことを訊いてくる。何故泣く？　泣くな！
「……七時三十分くらいかな」
「早すぎですよぉっっ」
「だぁーっ！！　デケェ声出すなッ！　そして泣くな……誰か来たら、俺がなんかしたみてーじゃねぇか」
「な……なんか？　なんかって……！！　なんかする気ですかぁ！？」
「しねぇよッッ！」
なんて女なんだ！　コイツは！

照りつける太陽――
そろそろ本格的に暑い季節がやってきた……そう感じさせる昼下がり。
暁、竜司、亜美の三人はいつかのように屋上に集まっていた。
昨夜の静枝を交えた会談の後、自宅に着いた亜美はパソコンでCDの中身を調べたはず。
「それで、どうだった？」
暁が聞く。
「えーとね。これを見てよ」
そう言うと亜美は、手に持っていた黒いファイルから3枚の紙を取り出した。
暁はそれを手に取り、しかと眺めた。
「これが最後の暗号か」

Saar
ablation
gauche
unbelliever

oak
Bahama
Janus
Sacchari n

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる?』

◎風化した未熟なヤヌスは言った。『騙されるなよ。リンゴが二個ある。そこへ猫がやってきてリンゴを一つくわえていった。さていくつ?』

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

◎ある化学者が言った。『ある物質をいじくった。すると炭素56水素40窒素8酸素24硫黄8という組合せになっちまった。元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』

篠原亜美へ

よくぞここまでたどり着いたね。約束の日にちまで、もう残りわずかではないのか?
これが最後の暗号だよ。
待ってるよ。では
鬼頭より

「……」
「……」
暁も竜司も、手渡された一枚の紙に見入るしかなかった。どう見

ても簡単に解けそうな感じはしない。
「これが……最後」
亜美の表情はいつになく真剣だった。紙を見つめる彼女の真摯な眼差しには力強さと美しさを感じる。
暁は額に汗を浮かべて遥か上空を見渡した。太陽光がまぶしい。目を細めただ上空を見ていた。
……そこにいんのか？　鬼頭火山……
暁は目を下に落とした。
学校の屋上、そして三階、二階とずうーっと下の下……はたまた、彼は地獄の門でその首を吊っているのだろうか。
暁はぶるっと体を震わせた。夏の暑さとは裏腹に、冷や汗をかいていた。想像してしまった恐怖が脳裏を離れなかった。
――ふとした矢先、暁は竜司が喋っていることに気付いた。
「本当に鬼頭は待っているだろうか」
「……待ってるワケ……ないだろ」
暑さが思考力を奪っていく中、暁は竜司の問いに弱々しく答えた。太陽光に照らされて黄色に輝く竜司が、頬に汗を伝らせてこう言った。
「最後の文を見る限り、彼はこの暗号を作った段階ではまだ自殺を考えてはいなかったはずだ。七月十四日になれば彼はこの暗号の示す場所に行くつもりだったッてわけだ……
しかし彼は死んだ。彼が本当に、俺たちのことを考え手を打っているとしたら、そこにはおそらく手紙かなんかがある……ッてことだよな？」
話を振られた亜美は首を縦に振った。

今日の放課後は三人とも速やかに自宅に帰ることになった。それというのも、彼らの疲労はここ数日で溜まりに溜まり、そろそろ限界が近づいていたのだ。高校生ならば普通に高校生活を送るだけで

かなり疲労するが、彼らの場合は有名推理小説家の暗号解読もプラスである。疲れないほうがおかしい。
いくら切羽詰まった状況とはいえ、休息は必要である。
「プ～ッはぁ」
暁はラッキーサイダーを飲み干して思った。
……全く、下らねー世の中だなあ。
勢い良くベッドに身を投げ出し、目をつむった。ベッドがギシギシいう。
……ッたくよぉ。
「……」
理由がはっきりとしないのだが、暁はイライラしていた。
きっとこの前受けた模試の出来があまりよくなかったのと、この暑さが原因であろう。
……大学どうしょうか。
暁の受験に対する意識は強かった。親に迷惑をかけたくないのもあって、大学はなるべく良いところに行きたかった。
だが、自分にそれだけの学力がないのはわかっていた。それを向上させるような糧となるようなものも、冷静に考えれば俺にはないと、暁ははっきりと自覚していたのだ。
……ダメ人間だな。俺は。
「……」
不意に亜美のことを思い出した。なんとなく、あいつならこんな俺でも認めてくれるような気がしたのだ。
……ッて、これでいいのかよ？　本当はもっともっと、なりたい自分は今の自分とはかけ離れているんじゃねぇのか？　それは無理だと諦めるのか？　……俺は、何がしたいんだろう。
暁は暗号のことを完全に忘れ、いつの間にか安らかな寝息を立てていた。

七月十日（金）

目が覚めた暁は朝一番に携帯を確認する癖がついていた。全日の夜に届いたメールなどがないかを確認するためだ。

今日は珍しくメールが一件。

……誰だ？

学級連絡です

我が校の生徒の一人が新型インフルエンザに感染したために明日から一週間休校となります

その間は衛生面に十分気を付けてなるべく外出を避け自主学習に取り込んで下さい

「……は……ぁ？　マジ……か……？」

新型インフルエンザ――別名豚インフルエンザ。

今、全世界で猛威を奮っている感染症の一種だ。そいつがとうとう、この辺りにまではるばるやって来てくれたらしい。

「本気かコレ？　クッソ……やたらに外出出来ねぇじゃん」

暁はベッドからのそりと起き上がり、まずは朝食を済ませることにした。

覚束無い足取りで冷蔵庫までなんとかたどり着いたところで大きなあくびをし、それから冷蔵庫を開けた。

中を覗くと食べたい物が何も無かったため、今日は朝を抜かすことにした。

「あー……」

とあることを思い出した。暗号である。確か、机の上に昨日亜美が作成した、テキストデータをコピーした紙があったはずだ。

ドタドタと音を立てて机に向かい、ああ、やはりあった。

つらつらと色々書いてある紙があった。とりあえず暁はそれを乱暴につかんでベッドにぶっ倒れてみた。とても、眠い。

まだ朝の六時じゃねぇか。今日学校ねぇんだろ？　寝たいッつうの。

朝の暁は基本、不機嫌である。

暗雲の到来（後書き）

１章は１６話までになりそうです。
２章以降はブログと平行して更新しようと考えています。
もしも読者の方がいらっしゃるならば（自己満に近いので、いない前提なんですが・・・）、要望があれば更新速度はある程度調整可能です。
しかし、おそらく今よりはるかに更新速度は落ちるかと思います。
制作に追いつくと厄介なので・・・。
ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｋｅｎｔａｒｏ２００７ｇｏ
一応ブログのリンクです。

暴虐の嵐

- 1 -

七月十日（金）の午後――。

無事、二度寝を終えた暁は椅子に腰掛け、机の上に置かれた暗号に目を落としていた。

Ｓａａｒ
ａｂｌａｔｉｏｎ
ｇａｕｃｈｅ
ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ
ｏａｋ
Ｂａｈａｍａ
Ｊａｎｕｓ
Ｓａｃｃｈａｒｉｎ

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる？』

◎風化した未熟なヤヌスは言った。『騙されるなよ。リンゴが二個ある。そこへ猫がやってきてリンゴを一つくわえていった。さていくつ？』

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

◎ある化学者が言った。『ある物質をいじくった。すると炭素

５６水素４０窒素８酸素２４硫黄８という組合せになっちまった。元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』

篠原亜美へ
よくぞここまでたどり着いたね。約束の日にちまで、もう残りわずかではないのか？
これが最後の暗号だよ。
待ってるよ。では
鬼頭より

暁はなるべく冷静に考えようとした。まず明らかに、最後の鬼頭から亜美へ向けられたコメントは暗号に関係ないと見ていいだろう。次に目を向けるべきは全体の構成である。八つの英単語に、四つの問いのようなもの。一見しただけでは何がなんだかわからない。情報と情報の関連性……。
「……ぉ……おぉ」
下から三つ目の英単語に暁は注目した。『Ｂａｈａｍａ』。問のひとつに、『バハマは言った……』という書き出しのものがある。どうやらこれとこれは関係ありとみて良さそうだ。
この事実からでもわかることはたくさんあった。『～は言った』の部分に相当する名詞が、上の八つの英単語で構成されているということである。
……よし。方向性は導けた。
暁は確かな手応えを早くもつかんだことを実感した。
――不意に、暁の携帯が机の上で振動した。なんとなく予想はついた。おそらくは亜美か竜司のどちらかであろうと。
しかし、メールの送り主はその二人のどちらでもなかった。
受信ボックスの一番上には見覚えのある名前があった。
「……晋也？」

なぁ暁
お前に渡したいものがあるんだ（；∇；）／～～
総合病院に今いるんだわ
きてくれねぇかな

何故、晋也が総合病院に？
「……まさか」
晋也が新型インフルエンザの感染者だとしたら、行きたくなかった。
しかし、普段メールなどしてこないことを考えると、渡したいものとはそれ程重要なものなのだろうか？
暁の脳に浮かんでくる疑問は絶えなかった。第一、何故自分にメールしてきたのかがわからない。仲の良い奴なら他にいくらでもいるはずだ。
……ッて、考え過ぎか。
暁は一息入れるため、冷蔵庫の中からペプシを取り出し、威勢良くその栓を開けた。その瞬間、プシュッという音と共に大量の二酸化炭素が空気中に散布した。
中の液体をコップになみなみと注ぎ込んだら、それを一気に飲み干す。
……ま、気が向いたらな。晋也君。
鼻で笑いながら、暁はペプシを冷蔵庫に戻した。

暁が黒い液体を勢い良く飲み込んだちょうどその頃、亜美は暗号の解読に着手していた。
クーラーがよく効いていて、脳を働かせる環境としては悪くない。
あまり広くない部屋の中央に置かれた足の低い円上のテーブルの上には、鬼頭の最後の暗号が記された紙と氷の入ったオレンジジュースが置かれていた。

「……」

亜美はまず単純に考えようと思い、八つの英単語の日本語訳を調べ始めた。

Ｓａａｒ　ザール川
ａｂｌａｔｉｏｎ　風化・浸食
ｇａｕｃｈｅ　未熟な
ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ　不信仰者
ｏａｋ　オーク
Ｂａｈａｍａ　バハマ
Ｊａｎｕｓ　ヤヌス
Ｓａｃｃｈａｒｉｎ　サッカリン

ここに至り、亜美も暁と同様に『～は言った』に相当する部分が８つの英単語から構成される名詞になると気付いた。

だが、それがわかったところでまだ解読にはほど遠いということにも気付いていた。念のため縦読みをしてみたが意味を成さないとわかり、亜美は解読の歩を進めることにした。

まずはこれに目をつけた。

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる？』

「それってつまりこういうことでしょ？」

亜美は英単語の日本語訳を書いたルーズリーフの下半分に数式を書いていった。

０．５＋０．２５＋０．１２５＋０．０６２５＋……＝？

まさしく、問題文をそのまま数式に表した形がこれである。……これを極限まで足すとは一体、何を意味するのか？

一般的な高校生ならちょっと考えればわかることであった。

「いつまで足してもー……1になることはない。でも、極限までそれを足せば1に限りなく近づく……？　だから答えは1だ」

なんとなくの答えは出せたものの、数学にそこまでの自信はなかった亜美は強力な助っ人に確認をとることにとした。

「もしもし、シズ～」

亜美が電話を掛けた相手は、あの天才女子高生佐藤静枝である。

「ぉーう、アミリン♪」

静枝の明るい声を聞いて、亜美は胸をなで下ろした。

「あのさ、どこまで解けた？」

静枝にはメールで暗号を伝えてあった。

「ううーん、7割ッてトコかな？　そっちはど？」

亜美は7割と聞いて驚いた。さすがは佐藤静枝……。

「えーとね、こちらはビミョーッす。あの最初の半分の半分を足すとかゆうのはなんなの？」

「んーあれね。ま、1でいいっしょ。他に思いつかないしね」

「やっぱ1かー……。うん！　わかった。じゃあまた連絡するね」

亜美は敢えて他の問の答えを聞かなかった。まずは自分の力で解いてみるのが亜美のポリシーである。

「ぅーッす。んじゃまた」

電話が切れた。

一方、竜司は四つ目の問に取りかかっていた。既に他三つの問いは、怪しい部分もあるが一応答えを出すことには成功していた。四つ目の問はこうだ。

◎ある化学者が言った。『ある物質をいじくった。すると炭素

５６水素４０窒素８酸素２４硫黄８という組合せになっちまった。元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』

まず、問題文を読んだだけではまるで雲をつかむようだと竜司は眉をひそめた。

故に竜司は『～は言った』の部分に注目した。『ある化学者』とは上の八つの英単語のうちのどれを指すのか。ここまで来た竜司には消去法で答えをひとつに限定することができる。

『Ｓａｃｃｈａｒｉｎ』が正解である。英和で調べるとサッカリンと出て、サッカリンを広辞苑で調べると人工甘味料のひとつと出る。人工という語句が化学との関連性を竜司の中で裏付けしたのだ。

竜司はＳａｃｃｈａｒｉｎの分子式の組合せを問題文に則した形でノートに記してみた。

炭素７水素５窒素１酸素３硫黄１

「んー……！」

すぐに竜司は気付いた。Ｓａｃｃｈａｒｉｎの分子式と問題文の分子式を構成する原子の種類と配列が全く同じことに。違うのは……。

「……決まりだな。チェックメイトだ」

ただふたつの分子式に共通しないのは構成する原子の数。

ここで問題文をもう一度見てみる。すると最後のほうにこうある。

『……元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』――つまり、と竜司は閃く。数学の天才とは伊達ではない。

「比べるということは要するに比をとるということ。つまり倍数なんだ」

ふたつの分子式をよく見ればわかる。問題文の分子式を構成する原子の数がＳａｃｃｈａｒｉｎの分子式を構成する原子の数をそれぞれ八倍しているのである。

つまり答えは、
「8」
である。

午後の二時を過ぎた辺りで、暁は休憩を入れることにした。1時間以上ぶっ通しで脳を使っていたものだから、だいぶ疲れが溜まっていた。
暁は椅子を離れベッドに寝ころんだ。
ぼーっと天井を見ていると、ポケットの中で携帯が振動しついることに気が付いた。
「ん？」
電話を掛けてきたのは竜司であった。
「もしもし」
「俺だ。暗号はどうだ」
「ああ……なんとか」
「そうか。それより暁、信じられるか？」
「……あ？」
「寝ぼけてんなぁー。ホラ、インフルエンザ。学校閉鎖ッてよ」
「ああ。まぁ……確かに信じ難い。この辺で猛威を奮うとは……」
「あり得ねーよな」
「てかよ。お前、全部解けたのか？　あの四つの問い」
「いや、ババマはまだだ」
……あの三つ目のやつか。
「実はよぉ竜司。俺もそれは解けてない」
「お前もか……。その前に答え合わせしよう。他の三つはできたんだろ？」
「あぁ……じゃあ早く言えよう」
「最初が1、次が3、最後が8」
「……マジ？　2番目のやつが違うんだけど」

「え？　いくつだよ」
「……1じゃねぇの？」

◎風化した未熟なヤヌスは言った。『騙されるなよ。リンゴが二個ある。そこへ猫がやってきてリンゴを一つくわえていった。さていくつ？』

「おい、騙されてるぜ、まんまと。ハハハハ！」
竜司は笑っていた。
「ちょっと待て。騙されてるの、お前じゃねぇの？」
「くわえていったんだぞ。漢字に直してみろ」
竜司は得意げに言い放った。
「いやいやいや、落ち着け。……そんなの俺だって知ってる。この問いを聞けばみんながお前と同じ答えをだす。だろ？　だから騙されてんのはお前だ……」
言われてみれば確かに、と竜司は少し不安になった。
……シンプルになり過ぎたか？　俺……。
――――いや、しかし。
「待てよ。暁……。そもそも、お前も気付いたと思うが、これを解くには『騙される』の定義が必要だよな」
「いや、まぁそうだけど。一応俺は広辞苑で『騙す』を調べた」
「……で？」
「大した参考にもならなかった」
「……そうか」
暁は頭をボリボリと掻いた。
「仕方がないからさ、亜美とか佐藤静枝にも聞くしかない」
「うん……特に、佐藤のほうは有力だ。あいつは以前似たような暗号を解いたことがあるらしいし」
「じゃあまた連絡するわ」
「じゃあな」

電話が切れた。

- 2 -

午後三時を回った辺りで、暁は再び暗号に取り掛かり出した。
気温の高さにうなだれつつも、扇風機の風でなんとか暑さをしのいだ。
……なんでこのアパートにはクーラーがねぇんだよ。

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

「なんだよ。これ。福徳の神？　わかんね」
この三つ目の問は竜司ですらまだ手付かず……。そもそもこれは問か？　旅ッて？
「……これも……聞くしか」
なんとなく、佐藤静枝に頼り切っている自分に情けなさを感じた。
……あ。
と思い出したのは、晋也のことであった。不良高校生、木原晋也。彼は今、総合病院にいるらしいが一体どうしてだろう。まさか本当に新型インフルエンザに感染したのだろうか……。
しかし、そんなことはどうでもよかった。
言いくるめれば、やはり暗号だってどうでもいい。俺には執着心が欠けてしまっている。最初から大した価値の無いものだと思って行動するようになったのは、いつからだろうか？
結構最近な気がする。あまり入り込めば良いことはないと、全てに手を抜き始めたのはいいが、だからといって幸せを手に入れたわけではなかった……。
じゃあ、あいつらも価値のないモノだろうか。

いずれなくなる関係なのか……。
「……」
いや、そんなわけはない。
暁は亜美の言葉を思い出していた。
あの夜の言葉を暁は一字一句覚えていた。
――もしこの勝負が終わってもあたしたちは変わらないよ
変わらない……――。
果たして、俺はそれを信じていいのだろうか。
――だから、これからも、一緒にいれば、大丈夫だよ。きっと、悲しいこととか、なくなるから
「……――あぁ」
俺はもう、信じるしかない。……いや、違う。
この感情は、もっと別のものだ。ああ、こんな感情、久しぶりだな……。
「信……じ……たい」
暁は目つきを変えた。

七月十一日（土）

「こんちーっ」
可愛らしい挨拶と共に亜美の住む部屋のドアを開けたのは、制服姿に身を包んだ佐藤静枝だった。
それを笑顔で迎え入れた亜美は、一言。
「遅いよ～シズ！　もうみんな来て待ってたんだよ」

「あぁ～ゴメン！　ちょっと学校行ってて」
集合時間の午後一時をまるまる一時間オーバーした静枝は、急いで靴を脱ぎ玄関に上がった。
玄関先からドタドタと騒音が響くのを無視して、暁と竜司は暗号に見入っていた。
しばらくすると髪がゴールドに装飾されたスカートの短い女がリビングに侵入してきた。
「あっ……」
暁が声を上げてその人物を見上げる。続いて竜司も顔を上げた。
先に声を発したのは静枝のほうだった。
「こんにちは、亜美から話は聞いてるよ。高山と外崎だっけ？」
「あ……あぁ」
暁は静枝に見入ってしまった。先日見たときと全く変わらない、この美しさ。将来テレビにでも出るんじゃねぇか？　この女。
静枝のすぐ後ろから亜美がひょこっと姿を現した。
「座っていいよ、シズ」
「お言葉に甘えま～す」
と言って静枝は床にあった座布団の上に腰を下ろした。
「さて……それじゃあさっそく、成果を見してよ」
丸い円形のテーブルを挟んで真ん前に座る暁に、静枝が言った。
早くしなさいよ、と言わんばかりの圧力を感じつつ、暁は一枚のルーズリーフを差し出した。
そこには竜司、暁、亜美の3人がそれぞれ出した問の答えが記されてあった。

竜司　1　3　？　8
暁　1　1　？　8
亜美　1　3　？　8

「まだ四つの問いの答えを出したくらいで、暗号の解読には至って

いない」
暁が説明した。
「にゃるほどね。バハマのやつはみんなわからないッてコト？」
と言った静枝の隣に氷の入ったグラスにオレンジジュースのペットボトルを持った亜美が座り込んだ。
「まだわからない」
暁が答えた。
亜美がグラスにオレンジジュースをなみなみと注いだ。鮮やかなフルーツ色だ。
さんきゅ、と小さく答え静枝はオレンジジュースに口をつけた。
そんな様子を見て、竜司が口を開いた。
「それで、君は解けたの？」
「いーえ、まだです。進行具合としてはキミらとおんなじよ」
静枝に期待していた分、竜司も暁も少しだけ落胆した。
「二つ目の問はどうなの？」
と亜美が。
「……まぁ二つ目は『3』で間違いないわね」
暁も竜司も少し驚いた。
三人の間でも、この問いについて絶対の自信があるわけではなかったが、静枝には確信があるかのように聞こえた。
「根拠は？」
ただ一人推理をハズした暁が恥ずかしそうに問う。
「うちが四歳の頃、おじさんが全く同じ問いを出してきた。その答えが3だから」
とてもシンプルな理由であり、暁も竜司も拍子抜けした。
――だけどさ、と竜司が反論した。
「それだと君がいないと解けなかったッてわけじゃ……」
「ま、つまり場合分けさせようッて魂胆があったわけでしょ。結局答えはひとつしかないんだし、最後になって初めてどちらが正しかったを明らかにさせる――――つまり、時間稼ぎ」

「……な、なるほど」
やっぱりか、と竜司と暁は顔を見合わせた。
「じゃあ問題は三つ目」
亜美が暗号を眺めながら呟く。

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

「静枝……さん、さ。これ、どうなの？」
と暁が。
静枝は暁を上目遣いで数秒睨んだ後、
「……結論から言うケド、うちにもよくわかんない。でもこれまでの流れから、答えが数字になるのは確かね。……てか、静枝さんはヤメテ」
「え？　わかんないの？　シズが？？」
亜美はちょっとビックリした様子で静枝の顔を覗き込んだ。
「だって、ウチだって知らないことは知らないもんっ！　なによ、日本の福徳の神って」
「待て！」
「ん？」
突然声を上げたのは、暗号に見入っていた竜司であった。何か重大なことに気付いた様子だ。
「旅の道中に三人殺されたんだろ？　てことはこいつらは少なくとも三人以上の複数で旅をしていたんじゃねぇ？」
……確かに。
暁は納得し、だから何なのかと思考を押し進める。
……福徳。ユダヤ……ユダヤ？
「ユダヤの神……」
暁の脳内で何かが渦巻いた。思い出せそうで思い出すに至らない。身体は見えてるのに、重要な顔が見えてないかのような感覚……。

「ゆ……？」
暁の取っ掛かりが見事に外れた。思い出した。
……――唯一神、ヤハウェ。
「ぉ……っ唯一神、ヤハウェだ」
「は？」
竜司が眉間にシワを寄せた。何を言っている……こいつは？
「ユダヤの神とは即ち、ヤハウェ。唯一神だ！　……つまり複数なのは」
「日本の神のほう」
亜美が暁の代わりに結論を明確にした。
「……なるほどな。そうか……そうか」
竜司は激しく思考していた。日本にいる複数の神とはなんだ？
静枝もまた竜司と同じことを考えた。福徳であり、複数の神……。
福徳とは幸福と利益のことである。
「……」
クーラーの効いたあまり広いとは言えない部屋で、高校生４人は押し黙ってしまった。この中の誰も、日本の神について詳しい者はいなかった。
生憎、パソコンが壊れて使えないというから残念だ。
仕方がない……と暁は携帯を取り出した。
「ｅｚｗｅｂで調べる。すぐ出るよな」
「ＰＣサイトのほうがよくない？」
と亜美。
「まぁ落ち着け……お。なんだ……最初からパケットなんか気にしないでやりゃあよかったわ」
暁は口元をニヤリとさせて言った。
「答えは……――七福神だ！」
「おお！」
……ということは。
「正解は『５』かな」

真っ先に答えたのは静枝。計算方法は単純明快。
ユダヤの神が一人、七福神は七人、一緒に旅をすれば八人。そこで三人殺されたら残りは五人。全ての問の答えが今、導き出された。
「ようし！　全ての問が片付いたな。あとは……」
暁は三人の顔を順々に見ていった。
「この答えを、どこにどう繋げるかだ」
……順調だ。
暁は感じていた。一歩一歩、着実に鬼頭の暗号は解読に向かわされている……。
しかし、同時にこうも感じていた。
……順調すぎやしないか？
……どこかで大きなミスをしているんじゃないのか？
「……」
だが、笑顔で話す亜美と静枝を見て、そんな不安は暁の中から余韻だけを残して消え去った……。

- 3 -

メールアドレスと電話番号を交換したあと、暁、竜司、静枝の三人は亜美のアパートを後にした。それというのも、あと少しすると日本列島のちょうどこの辺りを、巨大な台風が直撃するというのだ。まさか亜美の家に泊まるわけにはいかない。
自宅アパートに着いた暁は窓の外で雲行きが怪しくなる空を見つめ不安に駆られていた。
竜司は自宅のリビングでソファーに腰掛けながらあることを思い出していた。
「あのヤロ……」
竜司は携帯を取り出した。
電車に揺られ自宅に向かう静枝は窓の外で次第に闇に染まる空を

見つめて浮かない表情を浮かべた。
……おじさん。
まるでこの空模様は自分の今の心情にそっくりだと、静枝は鼻で笑った。
亜美は暗号の解読に繋がることを信じて、過去の鬼頭の作品に目を通していた。
「死ぬなんて……絶対何か、重大な秘密が……ある」
そう呟いて、とうとう窓に打ちつけ始めた雨の音に耳を傾けた。
『ブルルル、ブルルル』
暁の携帯が振動した。
電話を入れてきたのは、竜司のようだ。
「はい」
「俺だ……おい！　お前まさか忘れたわけじゃねぇだろうな」
「？」
「ホラ、暗号解くの手伝ったらアレをくれるって」
「……あ。忘れてた」
暁はベッドから起き上がり、机の引き出しを開けた。
「よし……いいか、だったらこの嵐がどっか行ったらお前が家に持って来い」
「はぁ？　今度学校行くときでいいだろ？」
「おまっ！　学校に持ってくるつもりかぁ？」
「なんだよ」
……あ。あった。
「見つかったらヤバいだろッ」
「大丈夫だ。ビビり過ぎだお前。俺を信じろ」
「……わかった。信じよう。またあとでな。じゃあ」
「おう」
夕刻が過ぎた頃には、雨は本降りとなり窓やらに打ちつける音は

うるさいを通り越し、心地いい。
そんな音に耳を傾けながら、椅子に腰掛けテレビを見ていた暁は、一瞬暗号のことを忘れかけていた。それというのも、報道されたニュースの内容があまりに衝撃的であったからだ。
そのニュースの内容は、望まない妊娠をしてしまった中央高校の二年の女子生徒が、自宅のトイレで赤ちゃんを出産し、用意した包丁で赤ちゃんの身体をバラバラにトイレに流したというものだった。
暁は逮捕された女子生徒の身になって想像してみた。なんとおぞましいことか。暁は喉の渇きを覚え、水道に向かった。
水を一杯飲み、時計に目をやった。午後の六時半であった。
今晩は何を食べようかと冷蔵庫を覗いていると、前々から気になっていた事件についてニュースが流れた。
一旦夕食のことを頭の隅に置いて、テレビ画面に目を向けた。
「……市で起こった複数の殺人事件について、警視庁は、犯人が同一犯ではないかとの見解を明らかにしました」
よく見るアナウンサーが、警視庁前でそう中継した。
ちょうど亜美や暁が鬼頭からの最初の暗号に取り掛かり始めた頃、暁の住むすぐ近くで殺人事件が発生した。そのときは暁もある程度は警戒したが、暗号に身を打ち込むことでその警戒心は徐々に薄れていったのだ……。しかしまたすぐに次の事件が発生した。今度は暁の住む所からはだいぶ離れた所であるが、これまた殺人である。両事件は未解決。暁の周囲では、これが同一犯によるものだという噂は立っていたが、とうとう警察も世間と同意見を出したわけだ。その後も事件は多発し、暁が知るだけで計七件の殺人が起こり、その全てが未解決である。……一体、どんな奴なんだろう。
暁は再び冷蔵庫を開けた。

夕食を済ませた暁は、あまりに強い暴風雨に窓が割れる心配もしつつ、暗号に目を落とした。

Ｓａａｒ
ａｂｌａｔｉｏｎ
ｇａｕｃｈｅ
ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ
ｏａｋ
Ｂａｈａｍａ
Ｊａｎｕｓ
Ｓａｃｃｈａｒｉｎ

この八つの英単語が、四つの問いの『～は言った』の部分に相当する名詞を構成するのは、既知の事実。

では、と暁は考えた。

あの四つの問いを解かせたいだけならば、この八つの英単語は不必要である。故に、あの四つ問いの答えと、この八つの英単語には何らかの関係がなくてはならない。

暁は亜美からもらった英単語の和訳のコピーを取り出した。

Ｓａａｒ　ザール川
ａｂｌａｔｉｏｎ　風化・浸食
ｇａｕｃｈｅ　未熟な
ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ　不信仰者
ｏａｋ　オーク
Ｂａｈａｍａ　バハマ
Ｊａｎｕｓ　ヤヌス
Ｓａｃｃｈａｒｉｎ　サッカリン

これと暗号の問いを見比べてみる。

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその

半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる？』

この問いに対応する英単語は即ち、ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ、ｏａｋ、Ｓａａｒである。

よって、この三つの英単語がこの問の答えである１と対応しているのだ。まずはこの考え方で、暁は他も同様にして次のような表を作った。

ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ
ｏａｋ　１
Ｓａａｒ

ａｂｌａｔｉｏｎ
ｇａｕｃｈｅ　３
Ｊａｎｕｓ

Ｂａｈａｍａ　５

Ｓａｃｃｈａｒｉｎ　８

何度も確認し、これであっていることを確かめた。

ここで、ふと暁は暗号とは全く関係ないことを思い出した。晋也のことである。あれ以来、メールも電話もないことから、やはり大した用ではなかったのではないかと暁は思っていた。しかし……。

雨と風のうちつける窓の外を見て暁は不安になった。

……あいつ。大丈夫かな。

その瞬間、空がカッと光り、二秒後に爆音が響いた。暁は体をビクッとさせ、晋也のことを一旦頭から追い出すことにした。思えば、暁は晋也にいじめを受けていた時期さえあった。暁はある程度晋也

のことを憎んでいる面もあるが、彼に救われたことも何度かあるため、憎みきれてはいなかったのだ。

晋也のことを頭から追い出したのは決して彼を見捨てたからではなく、嵐のせいでどうせ外には出られないためであった。……嵐が去ったら見舞ってやるか、などと考えながら暁は低くうなる雷鳴に耳を傾けていた。

ただひとつ暁が感じていたのは、晋也によくないことが起こったろうということだけだった。

午後の九時を既に回ったが、嵐は一向におさまる気配を見せない。それどころかその勢いは増すばかりだ。

暁の暗号解読は停滞していた。暗号を解くにあたり必ずぶち当たる壁、それが今である。

その暗号が複雑であればあるほで、壁は高く感じるものだ。だが解いてみれば何てことはなく、案外壁には穴なんかが空いていたりするものだ。

だが――これは暁の予感であるが、壁を今夜中に越えることは恐らく無理だ。

暁は額に浮かぶ汗に半ば怒りのような感情を覚え、もはや暗号解読どころではなかった。

……あちぃ。

扇風機だけでは我慢ならなくなってきた暁は、いっそ裸で外に飛び出してやろうかと考えたが、そんなことをすればどこかの地デジキャラと同じ目に合うであろうことは分かりきっていたので、シャワーでも浴びて気分を転換させる試みにでた。

シャワーを浴びつつ、暁は考えた。自分は今日はもう寝て、他の人に任せようと。

暁は約一年半後の大学受験のことを心配しだした。本当にこんなことしてて、いいのか？

思えばもう長い間自主学習を怠っていると、暁はここに至りようやく焦りだした。暁は理系を選択したが、化学は大の苦手である。というか、とりたて自分に得意な科目があるとしたら数学ただひとつであると、暁はちゃんと自覚していた。

シャワー室から出て体を拭き、パンツを履いた。そしてそのままの格好で鏡の前に立った。

鏡の中にいる自分に問いかけた。

……お前は誰だ?

しかし、返答はない。

顔をまじまじと見つめてこんなことを思った。……もし、自分がもう一人いたら、そいつとどんな話をするだろうか……。馬鹿げた妄想だな、と鼻で笑うと、鏡の中の自分は同じようにして笑ってみせた。そのとき、少し変な気分になった。まるで自分が自分であって、自分でない感覚……。

暁は服を着た。

暁がシャワーを浴びる頃、静枝は鬼頭との思い出を脳裏で馳せていた。

静枝は小さいとき、鬼頭に育てられていた。それというのも、静枝の両親は貧しい家庭の中共働き、子供を世話する余裕がなかった。静枝が小学六年生のとき、父親が過労死。母親は半年で再婚、新しい夫は企業の社長で再婚後はお金に困ることはなかった。

ちょうどその時期に静枝は母親と新しい父親のもとに返され、今も両親のもと暮らしている。

だが幼少時から小学校高学年までの間世話をされれば、静枝にとって実質的な意味での父親は鬼頭であったのだ。

それ故に、鬼頭の死は静枝に大きなショックを与えてしまった。しかも死因は自殺、静枝は怒りと悲しみを同時に覚えた。

……どうして、自殺なんか……。

静枝は頬をパンパンと叩いた。
いつまでもメソメソしていては始まらない……。
静枝は自分にそう言い聞かせ、勉強机の上に置かれた暗号に目をやる。
……ウチが解かないで、誰が解くの？
静枝は椅子に座った。
……絶対、理由をつきとめるんだから！
長い夜の闘いが始まった。

病棟の白目

- 1 -

七月十三日（月）

決戦の日の前日となったが、未だに暗号が解けた者は出なかった。
それに伴い、嵐も止むことを知らなかった。
午前九時にしては暗すぎると、暁は窓の外を見やった。
土曜日の夜、確かに暁は解読へ一歩前進した感覚をつかんだ。だがそれ以上の前進は、日曜日丸々一日を浪費しても得られなかった。延々と止むことのない嵐が暁をあざ笑うかのように暴威を奮っている。それに加えてこの夏特有の脱力を催す暑さが、暁の体力と気力を奪っていった。
だが進展がない最大の理由はやはり焦りだろう。
人の死の理由やらが関わってくれば、それなりの責任感は伴ってくる。そして鬼頭の死……。死を間近にしているような気がして、暁は訳もわからず焦った。暗号に入り込めば込むほど、冥界からの鬼頭の呼び声に答えるような自分を感じてしまい、どうにも手が付けられないでいた。
とにもかくにも、もう時間がなかった。
暁はドッとした疲れを感じた。ゲームに負ける予感さえしてきた暁は、とりあえず竜司にメールをした。暗号のほうはどうだ？
という気休めにもならないメール。しないほうがまだマシなメールであった。しかし、人間焦ると、パニクるものだ。暁は暗号のことは忘れてベッドに横になった。別に眠いからではない。なんとなくだった。
「あー！　あちぃ」
声に出して感情を表現してみたが、焦りは増すばかりだった。

……よし、落ち着け、俺……。
暁は冷静さを取り戻すべく、洗面所に行き顔を洗ってきた。
「……」
案外それは効果的で、意外なほどに暁は冷静さを取り戻した。顔が涼しく、頭が冴えてくる予感がした。
暁は椅子に座った。
……いける。
まずはこれまでの考察をまとめてみた。

unbeliever　1
oak
Saar

ablation　3
gauche
Janus

Bahama　5

Saccharin　8

グループ分けは完了したのだ。後は関連性を調べさえすればいい。
暁は、今までの推理が外れていることを恐れた。もし最初の骨組みでミスをしていれば、その時点で解読者は袋小路に迷い込んだネズミと化す。それだけはあってはならない。もう時間もない。故に暁は今までの推理があっていると信じて解き進めるしかない。
「数字と単語の関連性だ」
声に出して、考えを整理する。……ダメだ思い浮かばない。
暁は考えを一転させることにした。ふとあることを思い出す。こ

の暗号の三つ目の問いを自分は間違えた、と……。
その原因は考えすぎにあった。シンプルさが自分には欠けている。
ならば――――。
暁は単語を並べ替えた。

oak
Saar
unbeliever

Janus
gauche
ablation

Bahama

Saccharin

まず1、3、5、8という数の大小関係に着目し、グループ別に上から小さい順に並べる。さらにグループ内でも小さい順に並べる。
上から縦読みすると、

osu jga bs

となり、暁の見たことのない英単語が完成した。つまり、ボツ。
暁は自分のやった試みが単純すぎたことに気付いた。
「……――――――!!」
暁は重要なことに気が付いた。この暗号の答えは、必ず場所を示さなくてはならないということだ。だが、だからといってどうにもならない。根本的に、この暗号を解くことができないからだ。
外の雨が勢いを増した。

そして、雷が落ち、暁の頭上の電気は消え、扇風機まで止まった。
「……マ……ジ??」
暁はハハハと、薄ら笑いを浮かべた。

午後の三時を回ったところでようやく電力は復帰し、暁は暗号の解読を再開させた。
『ブルルル、ブルルル』
ポケットに入れた携帯が振動した。竜司からメールが届いた。

よう　お前はどうなんだよ
俺は微妙だ
なんとも言えない

暁はすぐに返した。

ダメだ　全く　解ける気がしない　てか微妙ってなんだよ

暁はベッドに横たわった。
……まさか、解けねえのかな？　俺……。
暁は目をつむった。

「……わかんない」
亜美はテーブルに顔を突っ伏した。希望が見えなかった。
相変わらず外の嵐は激しい。
亜美は鬼頭が首を吊るシーンを想像した。彼は一体どんな気持ちで自分の首に縄をかけたのか……。
突如として、亜美の携帯が鳴った。
静枝からのコールだ。

「もしもし、シズ？」
「うん、アミリン……どうしよう、うち……」
亜美にはわかった。静枝の声が、まだ解読に成功していないことを如実に物語っている。
「シズ……大丈夫。きっと、解けるよ」
「気持ち悪い……」
「え」
「さっきからなんか、吐き気する……もう切るね」
「し、シズ！？」
『ツーツーツーツー』
電話が切れた。

雷と雨は混じり、風が大地を揺らめす。
窓から覗ける外の景色はまるで大地が大声で泣いているかのよう……。
竜司は部屋の中から窓を通し、大地の激しい蹂躙の跡をただただ見ていた。
長い時間暗号と闘い、竜司はある結論を得た。
「俺には……わからなかった……」
竜司は、静枝が亜美に抱かれて涙を流す光景を思い出して、心の奥で謝った。
すまない、と――――。
「……」
遥か遠くで雷が落ちるのが見えた。数秒後、地鳴りのような雷鳴が竜司のいる空間を包み込んだ……。

午後の五時になると、嘘のように嵐は静まった。
暁は窓の外を見た。

雨も降ってない。風も吹いてない。雷もどこかへ行ったようだ。
「……マジか」
暁は制服に着替え、スクールバックに暗号と数枚のルーズリーフを入れて、アパートのドアを開けた。
空気は湿っぽく、何故か心地のよいそよ風が吹いていた。
数日ぶりに外出した気分である。鳥のチュンチュンという鳴き声まで聞こえてきた。まるで爽やかな朝であるが、実際には午後の5時だ。
……これが嵐の前の静けさじゃなきゃいいがな。
鍵を閉め、目的地に向かって歩き出した。

- 2 -

三十分もすれば、暁は目的の総合病院前に到着していた。
広い駐車場に、大きな施設。ここが、市内最大の総合病院である。
入り口まで歩いていく途中、赤いドレスに身を包んだ美しい女性とすれ違った。振り返って見たときには、女性はもういなかった。
入り口まで行くと、ドアが自動で左右にスライドした。自動ドアなのは、少しでも患者に負担を与えないためか。
入ってすぐ目に映ったのは、激しく嘔吐する五歳くらいの男の子だった。母親らしき人物がその子のすぐ側で背中をさすってあげていた。
受付にたどり着いた暁は、目の前の四十代くらいの受付役に声をかけた。
「あの。木原晋也という17歳の高校生男子が入院していませんか？」
「はい？　面会ですか？」
「あ、はい」
暁に晋也が入院している確信はなかったが、いなければ帰るだけ

だ。
「えーとね、一〇〇号室にいるよ。十五階ね」
「ありがとうございます」
エレベーターに向かう途中、あの男の子に目がいった。辛そうに涙を流しながら嘔吐する男の子は、広い待合い場の中央で周囲の注目を浴びていた。看護婦も数人男の子の周りに集まっていた。
エレベーターの近くにはエレベーターを待つ若い男が一人立っていた。携帯をいじくり、時々周りを見たりする。大体二十代後半といったところだろうか。
暁もエレベーターの近くで足を止めた。しばらく待っていると、ドアが開き中から数人が出てきた。エレベーターに乗り込む。
「えっくしょいっ」
一〇〇号室の奥でくしゃみをする音が響いた。この部屋は今、木原晋也が一人で貸し切り状態である。
晋也は窓の外をぼうっと眺めた。さっきまでの嵐が嘘みたいだ。コツコツと部屋に足音が響く。晋也は顔を左に向け、部屋の入り口の辺りを見据えた。
見覚えのある男が近寄ってくる。
「暁ぁ!!」
「よう」
暁は窓際の回転椅子に座り、病室を見渡した。
「なんだ……結構明るくて、いいじゃないか」
「暁、来てくれたのかお前!!」
「ああ、ところでお前、なんで入院してんだ?」
見たところ、骨折などの外傷はない様子だ。ちょっと以前より痩せただろうか。
「ああ、俺……心臓病なんだよ」
「えぇ!?」
驚いた。初耳である。
「今週手術」

「うえぇえッッ！！？？」
もっとビックリ。
「なんか胸が痛むなーって思ってたら、いきなり倒れて、目の前真っ暗よ。ハハ、気付いたら病院。まるで作り話みてーだろ」
「……大変だな」
暁はスクールバックの中からフルーツ詰め合わせセットを取り出した。
「えっ？　おま……」
「ここ来る途中、八百屋で買ってきた。見舞いっつったら安くしてくれたからな」
晋也は目を丸くして暁を見た。
「……お前ッて、そんな気ぃ利く奴だったッけ？」
暁は鼻で笑った。
「ところでよぉ、渡したいもんって？」
晋也は急に満面に笑みを漏らし、暁に尋ねた。
「……あのさ、お前、亜美ちゃんと付き合ってんの？」
「……はぁ？」
晋也は驚くべきことを口にした。
「俺さぁ、前から気になってたんだよね。亜美ちゃん」
暁は絶句した。
……まさか、嘘だろ？
「いや～、もし男いんなら諦めるけどよ。いないなら……クク」
晋也の表情は危険な笑みで満たされていた。
暁はある種の危機感のようなものを感じたが、頭を振って自分を落ち着かせた。
「……いやまさか。お前、いつからだ……」
「結構前」
「……俺は付き合ってない」
暁ははっきりとそう答えた。
いやでもよ――と晋也は切り出した。

「お前ら、二人で屋上抜け出したり、一緒になってなんかやったり、端から見りゃ付き合ってるようにしか見えねえけど」
「……いや、でも、違う」
晋也は暁に疑いの目を向けた。本当は付き合ってるんだろ、とでも言いたげな顔だ。
「……狙うなら勝手にやってろよ。俺は別に協力しねぇからな」
暁は窓の外に顔を向けてそう言った。
「待て！！　お前にコレを亜美ちゃんに渡してもらいたい」
そう言って晋也がすぐ横の引き出しから取り出したものは――
「……は？　手紙？」
晋也らしくない、と暁には感じた。
手のひらに収まるくらいの大きさのそれは、可愛くもハートのシールで封がされていた。
「お前……正気か？？」
今時ラブレターとは、恥ずかしくないのだろうか。
「俺は見た目はチャラチャラしててよ、なんか中身もチャラチャラしてそうに思われがちだが、違うんだぜ」
「……？」
暁には晋也の言いたいことが分からなかった。
「雨、降ってきたな」
晋也に言われ振り返ると、ポツポツとちょうど降り出した頃である。
「あ……傘忘れた」
先ほどまでのは、どうやら嵐の前の静けさだったようだ。
「じゃあ泊まってけや……なかなか悪くねぇぞ、病院も」
「はぁ？」
「ひひ……俺の担当、まだ若くってさ。訊いたら二十二だとよ。羨ましいだろ」
「何がだよ」
「看護婦だよ、看護婦。おしり触っても、怒らないんだぜ……ひひ

ひ」
「……最低だな」
暁は立ち上がった。
「お、おいおい待ってくれよおッ！！　もう帰る気かぁ！？」
「ああ、帰る。じゃあな」
「ああ、待ってくれ！！　話を聞けよ」
「ああ？」
「……かわいそうだと思わねーのかてめえは」
「あ？」
「俺……言ったろさっき。今週手術ッて……。……医者なんて言ったと思う？」
「……」
「五分五分だってよ。生きるか死ぬか」
「なっ」
「へっ……ビックリだろ。なぁもう少し、話をさせてくれよ」
暁は静かに回転椅子に近付いた。そして静かに座った。
「その話まじか？」
「ああ、金曜日に手術」
暁は少し動揺した。もしかしたら、もう二度と会えないかもしれないというのか？
雨が本降りになってきた。どちらにせよ、暁が帰ることはできなくなった。
「死ぬ前にお前に渡せてよかったわ」
何故晋也が自分を呼んだのかを暁は理解した。
「まだ決まったわけじゃねぇだろ」
「まぁな……」
その後、長い沈黙が流れた。一体どれほどの間黙っていたかわからない。ただ、雨の音が異様に心地よく、それは強烈な睡魔を暁にもたらした……――――。

記憶がはっきりするまで、大した時間はかからなかった。暁は肩を揺すられ、薄く目を開けた。
「おーい、もう起きろよ」
「……」
声は右から左に流れるように、まだ状況がつかめていない。
……ここはどこだ？
そう自問したとき、自分が晋也に会うために総合病院に訪れたことを思い出した。
「……！？」
よく見れば、自分はベッドの上にいるじゃないか。何故だろう？
「……おい！！　お前バカか！？　ハハハハ」
晋也が笑っている。
とりあえず状況を把握せねば。
「……なぁ」
と声をかけたとき、暁には大体の予想がついていた。恐らく自分はいつの間にか寝てしまい、晋也によってベッドに寝かされたのだろうと。
「俺何時間くらい寝てた？」
薄らぼんやりと暗号のことを思い出しながら、暁は時計に目をやった。もう九時を回っていた。ここに来たのが五時くらいだとみて……。
晋也は考え込むような様子をして――いつの間にやら、その手には暗号を記した紙が握られていて――言い放った。
「二十五時間くらいかな」
「……？？？？？」
「丸一日以上は寝てたな。よくそんな寝れるよ。お前最近寝てなかったのか！？」
晋也は薄ら笑いを浮かべてそう言ったのだ……。
……一日、だと？？？？

暁はベッドから起き上がり、相対するベッドに寝ころがる晋也に近付いた。動揺を隠せない。

「……今？　十四日の二十一時だってか……？」

晋也はさも面白げに「うん」と答えた。よく見れば、フルーツ詰め合わせセットも消えている。コイツがすべて食ったのか。

暁は立ったまま窓の外を眺めた。雨がざあざあと降っている。携帯を取り出して、画面を覗く。晋也の言うことが嘘だと信じて……。

「……クソ」

携帯にも、きちんと表示されていた。現在が七月十四日（火）の二十一時過ぎだと。

暁は回転椅子に腰掛け、半ば放心状態で自分の情けなさを嘆いた。何故丸一日も眠りこけたのだろうか。本当に信じられない。

「お前の携帯ブーブーいってたぜ」

晋也が暗号を見つめながら言った。

……コイツ、勝手に俺のバックあさったな。

「はぁ」と言って暁は手のひらで顔を覆った。絶望が心を支配する。指と指の間から、壁に掛けられた時計をもう一度見る。午後九時二十四分。

……間に合うか？

暁は携帯を取り出した。見ると、着信が五件、Eメールの受信が八件である。

Eメールはすべて亜美と竜司と静枝からのもので、その内容はどれも暗号の進行具合を尋ねるようなものばかり。解読のヒントは得られない。

雨の音がやかましかった。

「なぁ暁」

「ああ！？」

寝起きということもあり、暁は不機嫌である。

「この単語と数字の関係は何だ？」

それがわからねえから苦労してんだよッ！！

「返せ。時間がねぇ」
暁は手を差し出した。すると、暗号に見入っていた晋也がこんなことを言った。
「お前が暗号好きなのは知ってるぜ。……なぁ、こんなのは試したか？　この数字がそれぞれの英単語の『～番目』を示すとしたら……」
晋也の意外なアドバイスを耳にした途端、暁の頭の中で覚醒が起こった。

unbeliever
oak　1
Saar

ablation
gauche　3
Janus

Bahama　5

Saccharin　8

ここから、数字の示すアルファベットだけを抜き出すと……

s o u
n u l
m

i

となる。

「何故……気付かなかったんだ……」

暁は口元に手をあて、目を大きく見開き八つのアルファベットを凝視した。

……これを意味のある羅列に並び替える。

「……」

わからない。思いつかない。しかし解読まであと一歩だ。あと一歩……。

晋也がある英単語を口にした。

「ＬＵＭＩＮＯＵＳ」

「……ッ！！！」

暁は口を開いた。静かに、晋也は続ける。

「意味は『夜光性の』じゃなかったッけ？」

――――謎が解けた。

暁はなりふり構わず病室を抜け出した。走った。携帯も途中で落とした。バックも病室に置いてきた。しかし、手には握られていた。晋也の愛のラブレターが。

「ぉおぉォオぅおおう」

病院でダッシュだ。目的地に向かえ。その足で、その脳で……――――。

病棟の白目（後書き）

あと3話で1章が完結します！

伯林のトリックスター

- 1 -

暁は雨の中を走った。解読に至った興奮、そしてこれから何が自分に待ち受けるのか……。

打ちつける雨は痛いほどに強い。

「ハァッハァッハァッ……ハァッ」

聞こえるのは、雨の音だけ。ただ、耳の中をザァーという音が支配していた。

鬼頭火山最後の暗号は、病棟の一室にて解き明かされた。この世界でその全貌をすべて理解したのは、暁一人である。

答えは『ＬＵＭＩＮＯＵＳ』で、意味は『夜光性の』である。そこから導ける答えはただひとつ……。

夜光公園だ。

「ハァッハァッハァッ……ハハハハ！！」

暁は雨に打たれつ走りつ、笑った。

……本当に俺がこんな大役任されていいのか？　おかしくなっちまいそうだぜ。

亜美にも竜司にも、静枝にも知らせてやりたかった。暗号は解けた。もう安心しろ――と。

「……ハァ……ハァ……」

だんだんと、ペースが落ちてきた。走りっぱなしはさすがにもたない。暁は走るのをやめ歩き出した。

冷静に考えれば、手紙が置いてあるということはない。竜司の予想は間違っていたわけである。何故なら鬼頭は期限を設定したからだ。期限を過ぎれば、手紙はひとりでにどこかへゆくだろうか？

暁は立ち止まった。もうびしょ濡れであり、体の濡れていない部分はなかった。

夜光公園で待つのは、果たして冥界からの扉をこじ開けた鬼頭か――――それとも。

「……ハァ、ハァ」

……何故だ？

「何故死んだんだ……？」

暁はまた走り出した。前から傘を差した男歩いてきた。

「なんでだ！？　鬼頭ッ」

傘を差した男はギョッとして前から走ってくる暁を見た。傘も差さず何かをわめきながら走る制服姿の暁は、端から見ればただの危険人物である。

しかし、そんなの関係ねぇ。そう呟き、暁は走るスピードを更に上げた。

「うおうおおう」

――もうすぐだ。あとちょっと。静枝ちゃん、待ってな。不条理なオジサンの死の理由は、俺が突き止める。安心しろ。俺にあんたを不条理から救い出すことはできないが、一抹の原因なら伝えることができる。

俺にもわかるんだ。なぁ佐藤さん。俺も、大切なもんを何年か前に失ったよ。そいつは親友だったよ。よく遊んだよ。でもな、死んじまいやがったんだ。あのヤロー……。

おお、見ろよ。静枝ちゃん。見えてきたぜ。見えてきたよ……夜光公園だ。

「ハァッハァッハァァア」

光輝く電灯が、今日は寂しく、雨が光を掻き消していた。

暁は夜光公園の真ん中に何かを見た。黒い影だ。

雨は一層勢いを増した。

思考することは何もない。あとは行くだけだ。

……あんたの負けだ。鬼頭火山。いや、神崎冬也。

「ハァッハァ……ハァ……」

暁は黒い影と相対した。

暁を待っていたかのように、雨が弱まりだした。どこかで鬼頭が自分を見ているような気さえする、この不思議な感覚……。

公園の電灯の逆光で顔はよく見えないが、年をとった男であるのはわかった。背は高い。一八〇近くある。

徐々に、徐々に、オレンジの光が彼の顔の輪郭を浮かび上がらせていった。

暁は唾を飲み込み、更に男との距離を詰めた。その距離は、約三メートル。

暁はまじまじとその顔を覗いた。そして気付く。

「……！！」

暁の眼前にそびえるこの男、名は……。

「宮澤睦（みやざわあつし）だ……お前はなんて名だ」

その声は高圧的で、暁は一瞬気圧された。

……宮澤睦。『鍵穴』の解説者だ。

何故こいつが？

「……あ。外崎暁です」

心臓の音がバクバク鳴りだした。

「ふん……。暗号の答を言え」

「え？　あ……る……ＬＵＭＩＮＯＵＳ」

宮澤は暁を値踏みするように見つめたあと、もの惜しげに口を開いた。

「正解だ。よくあの暗号を解いたな……。じゃあ早速教えよう」

――――き、きた！！

暁はまたもや唾を飲み込んだ。それと同時に、宮澤の口がゆっくりと開いた。

「俺は鬼頭とは師弟の関係だ。あいつに物書きを教えたのは俺だ。……あいつの書く小説は日に日に精度を増し、弟子の中でも一番できたのがあいつだった。飲み込みも早く、独創的でもあった」

小雨が降る中、暁は黙って話を聞いていた。

「あいつがわけのわからんことを言い始めたのは、俺が鍵穴の解説を書き終えた直後だった」

……わけのわからんこと？

暁の興味はがぜんそそられた。

「あいつは知っての通り推理ものが得意だ。頭もキレた……。電話がかかってきて、こう言った。『もう我慢できない』ってな」

暁は聞き入る。

宮澤は一呼吸置いて話を再開した。

「あいつが好奇心旺盛なのは、あいつがペーペーのときから見てた俺はわかっていた。あいつ、思いついたアイデアは実際に試してみないと気が済まないタチなんだよ……」

「……」

「あいつの作品には、いつも死人が出てくる。いつも……素晴らしい殺し方が紹介される」

「……！？」

……まさか……。

「近頃この辺で複数の殺人事件が起こったろ。あれはすべて、奴の仕業だ」

暁は絶句した。

……そんな、ばかな。

「やっちまったのさ。あいつは人を殺したんだ」

暁は自分がこの話を聞いてよかったと思った。静枝が聞いたら、彼女は更にショックを受ける……。

「本当ですか……」

「ああ、だからアイツは、小説を止める決心をしたんだ。これ以上、

殺しのアイデアを思い浮かべないようにってな」
「……マジ……かよ」
暁はやりきれない思いでいっぱいになった。このことはいずれ静枝に伝えねばならない宿命に自分があることを、今更ながら後悔した。
「鬼頭は……殺人鬼だったの……か」
「まぁ信じらんねーよな。無理はない。だが事実だ。実際あいつは、お前らとの真剣勝負を約束したあと、限界がきて一人やっちまった。その殺しの快感が新鮮だったのか、奴は自分で組み立てた殺人理論で何人も殺りやがった……。そして先日、最後の電話があった」
暁は絶望の表情で宮澤の話を聞き入っていた。
……神崎、あんたは……。
「鬼頭は、人を殺したこと、そしてガキと真剣勝負を約束したことを俺に打ち明け、あることを頼んだ」
暁は小雨の降る空を見上げ、目をつむった。
……あんたは。
「七月十四日に、ここ夜光公園に来て欲しいと。そして暗号の答えを知る者に、全てを打ち明けてやって欲しいと……」
宮澤はそこまで言うと、長いロングコートの内側からタバコの箱を取り出して、中から一本抜き取った。
「俺の話はここまでだ。何か聞きたいことはあるか？」
暁はつむっていた目を開け、宮澤と目を合わせた。
そして、言う。
「神崎さんは……何か言い残してなかったのですか？」
宮澤は考え込むようなフリをして空を見上げた。雨足が強まってきた。
……潮時だな、鬼頭。
宮澤は雨を降らす夜の空に追悼の念を飛ばし、暁に背を向けた。
「じゃあな、こぞう。警察には言うなよ」
宮澤はそう言い残し、夜の闇へと消えていった。

暁は宮澤が消えたあとも、一人夜光公園の真ん中にたたずみ、不覚ながらも涙を流した。

それは同情の涙ではない。悲しみの涙ではない。怒りの涙ではない。

この世の不条理への捧げであった。

暁は神の存在など信じてはいない。そして神への信仰もない。だが降りしきる雨の中、暁は地に膝をつき天に向けて思いを飛ばした。

「……願わくば……彼女が……悲しみを乗り越え……一人で……強く……生きていけますように……神……さま、お願いします……神様」

雨の音だけが、妙に頭に響く夜の物語であった……――――。

伯林のトリックスター（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます！
物語も終盤です。

・宮澤睦（みやざわあつし）

第二の暗号が隠されていた書籍『キリストの哲学』の著者。

現在６８歳のベテラン哲学者でありながら評論家でもあり、キリスト教の専門家でもある。５年前、そのキリスト教への精通の高度さから、あるネットユーザーが『キリストＪａｐａｎ』と有名掲示板にて打ち込んだのがきっかけで、一躍、時の人となる。

推理小説の金字塔と称された鬼頭火山の最高傑作『鍵穴』の解説をつとめた人物であり、鬼頭火山の師でもある。

やるべきこと（前書き）

今回と次回は一人称で固定しています。

やるべきこと

-1-

雨はまだ止まない。この街のことじゃない。俺の心のなかの話だ。

俺は、明後日集まってくれ、そんな内容のメールを送った。あの夜に、薄れていく思考を振り絞るようにして、震える手で、仲間たち三人に。静枝に。亜美に。竜司に。

七月十五日水曜日、昨日から俺はベッドにずっと座っていた。何も食べず、一睡もせず。

携帯電話がメールを三通受信していた。亜美、竜司、静枝からだった。明日、七月十六日の午前十時に夜光公園に集まるように、と用件だけ書いたメールに対して、理由を求める返信だ。

無視した。悪意を持ってではない。体が動かなかったのだ。今日はまず俺自身が立ち直らなきゃいけなかった。そのために作った一日だ。

あれから、涙は一滴も流していない。あのときも、俺のときもそうだった。俺に関わると命を失うんじゃないかって、訳の分からない妄想をしていた。馬鹿らしい……。

昨日は、ただ苦しかった。そう感じながら、忘れてしまいたい記憶を思い返す。

夜光公園を出たのは真実を知ってから二十分くらい経ってからだった。冷静になっていた。恐ろしいくらいに。家に帰ろうとして、荷物が病院にあるって気が付いた。

病院に入った。びしょ濡れだし、常識的に考えてこの時間に病院には入れない、普通だったら。ただ、普通でなかった。

病室には晋也がいた。ごく当たり前ではあるが……。いろんなことを聞かれた。なんて答えたか全部忘れてしまったけれど、ただ部屋を出るとき「今日はありがとな」って言われた。胸の辺りが苦しかった。それから荷物を持ってアパートに戻った。普通に服を着替えて、そして、あのメールを送信した。

今日は、七月十五日は晴れた。太陽が眩しいくらいに輝く。俺は八時間振りに、立ち上がった。窓を開ける為だった。暑くは感じなかったが、空気が澱んでいた。変わる気がしたということもある。自分が、この絶望感が。

昨日から、やるべきことは明確だった。佐藤静枝に、彼女に全てを伝える。だけど、それだけでは無責任だ。俺が最初に立ち直って、導かなくてはいけない。一日で、たった一日で。俺がそれを諦める前に。

しかし、何も変わらなかった。決意だけでは何も。

時はただひたすら進みつづけた。時計の時針が一周回っても、気分は最悪だった。既に日は落ちて、辺りは闇に包まれていた。

携帯が鳴った。誰だろう……。あの三人の内の誰かかな。

……違った。……公衆電話??

「……」

俺は、迷った挙句、通話ボタンを押した。

「もしもし……」

「暁か？　俺だ。晋也だけど」

「晋也？　……ああ、病院だもんな。見つかったのか携帯使ってるとこ」

「いや、ただ充電切れただけだ。なあ暁、昨日の……」

「まだ手紙は渡せてないぞ」

「はあ？　そうじゃねえよ。暁、何か話せとか、説明しろとかは言わねーけどさ、昨日のお前はおかしかった。誰が見ても……だ」

「ほっといてくれ。聞かない方がいい。今のお前にとってはな」

「だからよ、別に言う必要はねえって。ただな、よく聴けや、暁」

「……何だ？」
妙に改まった声であった。昨日も感じたが、以前の晋也とは何か違う。
「俺は死ぬかもしんねーけど、一つ決めてることがある。たとえ死にそうでも、死んだ眼はしねぇってな」
「……」
「気持ちだけは強くいてーんだよ。ただ楽観的とは違う。最悪な展開を見ないように逃げてるんじゃない」
「何が言いたいんだ？」
「……暁。……あんまり言いたくはねーけどな。お前が下を向いたままとぼけるつもりならハッキリ言ってやるよ。同じ眼をしてるんだよ……鳴海の時と」
鳴海……。その名を聞いたとたんに世界が歪んだ。全ての事象が反転した。直後、再び反転し、高速でそれを数十回繰り返した。
「晋也……。お前……」
次の一言が怖かった。だが、優しかった。晋也はハッキリ言ってやらなかった。善くも悪くも、この後の一言が絶望から俺を救うのだ。
「いいか、お前がもしあのときと同じ状況にいるなら、よく考えろ。お前のやるべきことをな」
……数秒間の沈黙があった。心に深く響いた。
「……わかった。わかったよ」
「……よし。……じゃあまあ、落ち着いたらまたお見舞いに来てくれよな。あっ！　フルーツ詰め合わせを忘れるなよっ！」
晋也はそういって受話器を置いたようだ。どうやらフルーツの詰め合わせを気に入ったらしい……。
あいつ……。勘違いしているようだった。俺が大切な誰かを失ったと、そう思ったんだろう。「やるべきことを考えろ」……か。晋也は勘違いしていたが、その言葉は当事者である静枝でなくても、俺にも当てはまるような言葉だった。

俺を変えたのは、意外にも晋也だった。俺はもっと感謝しなきゃいけないのかもしれない。そういえば、あの事件の後、最初に声を掛けてきたのはあの晋也だった。

俺は目を覚ました。俺が駄目なときに晋也がしてくれたことを、今度は俺が佐藤静枝にしてやればいい。簡単なことでは決してないけれど、それが俺の“やるべきこと”だ。

-2-

七月十六日木曜日、時計の秒針に起こされた。というよりかは、起きた瞬間、最初に耳に入って来たのがその音だったという方が正しい。

相変わらずの晴れ。今日ばかりはミスマッチだろう、そう文句を言いたくなった。誰だかわからない誰かに。

約束は十時だ、今が朝六時。これが彼女とデートの約束、だったら気が楽なんだが、言うまでもなく彼女はいないわけで、いや論ずるべきはそこではなく、今日やるべきことが一連の事件の真実を当事者でない者が当事者に話すというヘビーな仕事である故に気が楽でないということでだろう。

それにしても……「彼女」か。晋也の手紙を今日亜美に渡すわけであるが、今日の話を聞いた後にラブレターを渡されるのはどうなんだろうか。俺はたとえ興味があっても、あのハートのシールを丁寧に剥がし、中身を拝見するようなことは出来ない。心臓病のことは書いてあるのだろうか。俺に口止めをしなかった辺りから考えると、別に本人は気にしてないのかもしれない。

亜美はどうだろうか。静枝を支えるのは多分亜美の役目だ。人間はたった一人で立つことは出来ない。もし出来たなら、それはただの夢、すぐに覚める夢だ。なんせ、「人」の「夢」は「儚い」のだから。大切な人を失った親友と心臓病で死ぬかもわからない中で告

白してきた男。亜美の負担は計り知れない。
どう思っているのだろうか。亜美は晋也のことを。……素直に応援できない自分がいた。それはつまり、俺は亜美のことが――とか、そういうことなのか？
……わかんね。大切と好きは違うような。でも好きなら大切だよな。竜司も大切な友達だが、好きとは違……って、まず次元が違うわ！！
自分でツッコミ。しかも全て心の中でだ、最悪だ。
と、ここまで自分を最大限に明るくさせてみたわけだが、俺の中ではまだ雨は上がらない。昨日が雷雨なら、今日は雨。自分を呪うような最低最悪なイメージが去っただけであって、悲しみと苦しみなんかは常に渦巻いている。
ただ、静かだった。昨日とはそこが違う。静かな悲しみ。それは対等に向かうべき相手。俺はそれが出来なかったのかもしれない。晋也は頑張ってくれたけれど。静枝もまた、それが出来ないかもしれない。でも、それは彼女の問題だ。だから願った。ただ、願ったんだ、俺は。
誰だかわからない……誰かに。

- 3 -

午前十時、暁は夜光公園に到着した。いつかの屋根付きベンチに亜美と静枝が座っていた。竜司は二人に向かい合うように平行に並ぶもう一つのベンチに座っている。　三人共、既に到着していた。
暁はゆっくりとベンチに歩み寄った。
「久しぶりだな。急に呼び出して悪かった」
暁は穏やかに言った。
「ねえ暁、いったいどうしたの？　十四日も連絡取れなかったし、昨日だって……」

亜美が心配そうに言った。暁はただすまないと思うしかなかった。
「皆に連絡しなかったのはすまなかった。ただ、それどころではなかったんだ」
「何があった？　俺たちを呼んだってことは、やはりあのことか？」
竜司は暁の方を向かずに尋ねた。
「あの日、俺は暗号を解いた。ある男の助言によってな」
「なっ！？」
暁以外の三人は驚きを隠せなかった。まさか、暗号が解けていたとは誰も予想していなかったのだ。
「うそ！？　ど、どういうこと！？」
静枝は立ち上がって、驚嘆の表情を見せながら言った。
「時間も迫っていた。それに、気も逸っていた。だから……結果、俺一人が真実を知った。知って……しまった」
「知ってしまった？　それって……どういう意味？」
暁は、これから言わなくてはならないことを思うと気が滅入るばかりだった。
「……知らない方が良いかもしれない。……だけど、俺はそれを君に話すと決めたんだ」
「……」
沈黙が続いた。暁は言い出せなかった。だけど言わなくてはいけなかった。
「話して」
静枝ははっきりとした口調で言った。
「……」
「ウチには、知る権利がある。……覚悟はできたから」
「わかった」
暁は最初から話すつもりだった。だけど、結果として静枝の了承を得て話す形となった。
「十四日の夜のことだ――――」

静枝は泣いた。泣き続けた。夜光公園には四人の他に誰もいなかった。響いた。静枝の悲しみの声が。悲しみだった。怒りでも苦しみでもなく、深い悲しみ。

「何で？　何でそんなことしたの？　おじさん……教えて……おじさん……」

暁はただ見ているしかなかった。静枝は悪いことは何もしてない。ただただ優しかった。優しさだけでいろんなことをした。大好きなおじさんのために。

「そんなことって……。何なんだよ……。俺たちが求めていたものって……」

竜司は手の平で両目を覆い隠している。

「シズ……」

亜美は涙を流しながらも、静枝を強く抱きしめた。

「君はよく頑張ったよ。その想いは伝わったと思う」

静枝には届かないかもしれない。だけど、暁はそう言った。

「……なんにもできなかった。おじさんは苦しんでいたのに、そんなこと気が付きもせずに……」

暁は、揺るぎない決意を持っていた。このままじゃ終わらせない。こんな悲しい終わり方なんて……。

「鬼頭火山は、神崎さんは罪を犯したんだ。君はそれを一生背負わなくちゃいけない」

暁は真剣な眼差しで言った。

「……わかってる。おじさんは……人を……」

「ああ。皆が神崎さんを非難するだろう。彼は、人を何人も…」

「暁！！」

竜司が暁を止めた。聴いていられなかったのだろう。憎悪の表情さえ見せている。

「暁、テメエ！！　そんなことしか言えねぇのかよ！！　もっと言うことはないのかよ！！」

「……現実だ。変わらない事実」
暁は眉一つ動かさずに言った。
「テメエよ、だったら……！！」
竜司は戦闘体勢にはいっていた。
「待って……！　いいんだ。言ってることは合ってる……。私のおじさんは……」
静枝は声を震わせ、想い出を思い返すように青空を見上げた。
「まだ……好きか？」
暁が呟いた。
「え……？」
静枝は亜美に抱かれながら、こちらを見た。
「『やるべきことを考えろ』、自分のやるべきことを……」
「ウチのやるべき……こと？」
「君だけは……君だけは……大好きでいてやってくれ。誰が非難しようとも、世界一残酷な言葉を浴びせられても……神崎さんのことを想っていてやってくれ。それが、君の……“やるべきこと”だ」
「……」
「まだ……好きか？　おじさんのこと」
もう一度尋ねた。静枝の出した答を、聴くために。
「……うん。だって、おじさんは……ウチの……ウチの大切な人だから！！」
静枝はそう叫んだ。泣き叫んだ。瞳に光を宿して。
「そっか。……強いんだな、君は」
暁の頬を枯れたと思っていた涙が伝った。
「大丈夫だよ、君なら立ち上がれる。もう厳しい話しは終わりなんだ。我慢しなくていい。気の済むまで……泣いていい」
暁は立ち上がると、仄かに笑みを浮かべて、静枝の肩にそっと手を置いた。
「う……うあああ」
静枝は堪えていた悲しみを解放して、それに身を任せた。

竜司は顔伏せていた。涙を隠していたのかもしれない。亜美も泣いていた。親友として……。

夜光公園に、再び悲しい泣き声が響いた。

届いただろうか、その声は……。届いただろうか、その思いは……。

空は青く、そして深かった。

今日は一人でいろいろと整理したいから、そう言って静枝は駅に入っていった。勿論、自宅に帰るためだろう。そう遠くはないと言っていたので心配はいらない。

亜美が送って行くと言ったのだが、もう大丈夫だから、と静枝は微かに笑った。大丈夫だというには少々無理があるだろう。そんな簡単に心の傷は癒えない。ただ、彼女は全てを捨てるようなことはしないだろう。少なくとも暁はそうであると思いたかった。それが暁の伝えたかったことでもあったから。

そうやって、一連の事件は結末を迎えた。

やるべきこと（後書き）

1章はあと次で最終話です！

終焉（前書き）

1章最終話です。
17話は7月3日から4日までに更新します。
遅れて申し訳ありません！

終焉

- 1 -

「ちょっとかっこよかったよ」
静枝を送った駅からの帰り道（何処に帰るのかもわからないが）で、後ろで歩いてた亜美が　そんなことを言ってきた。
ちなみに竜司は自転車で来ていたので早々と自宅へ帰ってしまったわけだけれど。
「俺は何もしてないよ。晋也が……あいつが助けてくれたんだ」
「晋也が？　へー……。どんな風に？」
「暗号を解いたのもあいつだし、真実を知って落ち込んでた俺に、事情を知らないくせに『やるべきことを考えろ』って活を入れてくれたのもあいつだ」
亜美は驚いた顔でこちらを見た。いや、最初からこちらを見ていたかもしれないけど。
「そうなんだー。そんな偉大な人だっけ、晋也。ただのチャラ男くんとは違う気がしてたけど」
「そうなのか？」
「だって晋也って、皆を楽しませようとしてふざけたりしてるような気がしない？」
「……そっか。あいつ傷害事件とかもないよな」
「傷害事件って……。さすがにそれはそれが普通じゃない？」
変な言い回しだった気がする。
「それもそうだ」
久しぶりに亜美と話した感じがした。久しぶりというほどに時間が空いたわけではないけれど、そう感じた。
「暁が最初に真実を知ってよかった」
それは多分、自分に難しい役割が来なくてよかったという意味で

はないだろう。
「何で？」
「晋也がそう言ってくれても、あたしには何も出来なかったと思うから」
「ふーん。亜美、お前はこれからやることがいっぱいあるんだぞ」
「なあに？　やることって？」
「そこで何も思い付かないとこがお前の良いところだよ」
「何それー。意味わかんないよ」
いつもの不満そうな表情。やっぱり、久しぶりだな。
「佐藤静枝を支えるってのは、お前にとっては当たり前なんだろ。でも、それがお前がやるべきことであり、お前だから出来ることだ」
「……そっかぁ。そうだね。……アリガト」
「その“アリガト”はどういう意味だ？」
「第一の意味、気付かせてくれて“アリガト”。第二の意味、何も出来ないあたしにやるべきことを与えてくれて“アリガト”」
「フッ、そりゃあ深い言葉だな。……アリガト」
亜美は目を丸くした。
「暁、その“アリガト”はどういう意味？」
「何も出来ない俺を、何かが出来る奴にしてくれて“アリガト”だ」
第二の意味、孤独な俺の傍にいてくれて“アリガト”は恥ずかしくて言えませんが。
「ふうん。感謝されといてあげるわ」
「何でいきなり上から目線？」
「照れ隠し」
「言っちゃ駄目だろ、それ」
「そうだね」
気付くと住宅街を歩いていた。行きも通った道だから、別に特別なことではないけど。
住宅の壁で蝉が鳴いていた。時期はまだ早過ぎるくらいである。仲間は一匹もいない。そんなに鳴いてもメスどころか、オスでさえ

一匹もいないのに。フライングだ、お前は。可哀相に、早くに死ぬんじゃねーぞ。晋也も頑張ってんだ。

……逆か。これじゃあ主として蝉を応援してるみたいだな。

「ねぇ暁、他は？」

「は？」

「やるべきことはいっぱいあるって言ってたじゃん。まだ一つしか聞いてないよ」

「ああ、それね。晋也に会いに行ってやってくれよ」

「ええっ！　何で？」

「総合病院にいるんだ、あいつ。お見舞いに行ってやってくれ」

お見舞いというか、告白の答えを言いにというか……。

「何で!?　何かあったの!?」

「詳しくは本人から聞いてくれ。で、これが手紙な」

俺は、晋也に託されたラブレターを亜美に渡した。

「あっカワイイ！　ハートのシール」

こけた。漫画みたく。

着眼点おかしいだろ!!　ヘテロドックス極まりない。

「あのな……。男の手紙にハートのシールだぞ。なんつうか、意味が違うだろ」

「ええっ!!!!　じゃあこれって……」

「いわゆる、ラブレターってやつだ」

「まじですか……。晋也が？　あたしに？」

亜美って意外に天然っぽいところがあるよな……。

「じゃ、確かに渡したからな。お見舞いは今日中な、絶対」

絶対を強調した。手術のことは一応言わなかった。晋也が隠すつもりなのかは知らないけど、一応。

「今日？　まあ……わかった」

驚きが隠しきれない様子だった。困惑といった方が近いか。

そこで俺たちは丁度、総合病院に行く道と自宅に帰るための道とで分かれるT字路に着いた。

「じゃあ、あたしは晋也のとこ行ってくるね」
「ああ、それじゃあ晋也によろしく」
「……うん。バイバイ」
意識的に（少なくとも俺は）、イエスかノーかという話はしなかった。
亜美がどうするかはわからない。だけど、俺にとってはそんなことは今は関係なかった。
助かってほしい。手術が成功してほしい。それが俺の願いだった。

- 2 -

亜美は晋也の病室のドアを二回ノックした。病室から「どうぞ」という声がする。晋也の声だった。病室に入ると、ほのかに薬品の臭いがした。
木原晋也は目をぱちくりさせている。
「あ、亜美ちゃん!?」
「よっ、晋也。元気？　……じゃ、ないか……」
「いやいや、元気元気！　来てくれたんだ？」
「うん。暁に言われたんだ、晋也がここにいるって」
亜美は椅子に腰掛けて持って来たお見舞いの花を花瓶にさした。
「暁が言ってたよ。晋也が助けてくれたって」
「助けた？　ああ昨日の電話か」
「ありがとう。結果的にあたしもあたしの親友も晋也の言葉に救われたから」
晋也は恥ずかしそうにしていた。
「そうか。暁一人が悲しんでいたわけじゃなかったか。そりゃあ、何と言うか、励みになるな。俺が人の役に立つとか、キャラ違うし」
「でもあたしはね、わかってたよ。晋也がそういうやつだって」
「そうなんだ……。それが俺の本性だって言うなら、ちょっと嬉し

いな。……でも、違うんだ。俺はそんなにいい人じゃない。俺はきっと、暁には及ばない」
「どういうこと？」
晋也は窓の外を見渡した。
「いつかわかるよ」
「ふーん……。……ねえ晋也、なんで入院してるの？」
「あれ？　知らないんだ？　……なるほど、暁のやつ、気を遣いやがったな」
いいやつだな、と晋也は笑った。
「悪い病気なの？」
亜美は心配だった。暁の言動の裏に、何か恐怖を感じていたからだ。
「まあ……。白血病やら癌やらよりはずっとマシだけどよ。生きるか死ぬかは五分五分だ。心臓がおかしくて、明日には手術がある」
「……！　うそっ……。全然知らなかった。……五分五分……」
「そんなに心配しないでよ。俺はまだまだ死なねーからさ」
「頑張ってね、告白して死ぬなんて映画みたいな展開、絶対許さないからね」
亜美は強い眼でそう言った。
「俺の手紙、読んでくれた？」
「……うん。漢字間違ってたよ」
「えっ、マジ？」
「嘘。照れ隠し」
「亜美ちゃん、それ言っちゃダメじゃん」
「そうだね」
しばしの沈黙の後、亜美が口を開いた。
「私の出した答え、言うね、晋也」
「えっ、ああ……うん」
「……私は――――――」

午後五時、総合病院のエレベーターにはサザンを口ずさむ十六歳の男しかいなかった。まあ、俺だけど。

十五階はこれまた人っ子一人いなかった。偶然ではない……？

いや、ただのくだらない深読みだった。廊下の奥の病室からお見舞いに来たらしい老夫婦が出て来たのだ。

一〇〇号室だったよな……。晋也のやつ、どうなったかな……。何がかといえば勿論、告白の件についてである。

手術に影響がなきゃいいけど……。

「入るぞ、晋也？」

そう言うと同時に病室に入った。

晋也はこちらを見て驚いていた。

「あ、暁？　また来てくれたのかよ。お前ってやつはよぉ」

今日は来ないだろうと思っていたのだろう。俺からしたらお礼も出来ずに死なれては困るし、そもそもこいつが消えるなんて、想像がつかない。当たり前のことだった。

「明日だろ、手術」

「ああ、今さっき親が来てさ。また七時くらいに来るってよ。やっぱ心配なのかねぇ」

「まあな。そりゃあ、心配だろ」

俺はいつかと同じようにフルーツの詰め合わせを取り出して、机に置いた。

「おっ、わりいな。マジでありがとう」

「気にするな。感謝してんのは、俺なんだ。まだまだ足りねーよ。お前には死なれては困る。もっと、俺はお前に……」

「そっか……。亜美ちゃんにも言われたよ。俺って感謝されてんだなぁ」

晋也はまだ明るい空を眺めていた。あるいは、晋也には他のもの

が見えていたのかもしれないけど。
「絶対に戻って来いよ。生活指導の高村が淋しそうだぜ」
「そうだな、心臓が弱ってんだし、あいつもへたなことは出来ねーしな」
病室に二人の笑い声が響いた。
それから、ほんの僅かだけ、沈黙が続いた。
「暁、俺な、死にたくねーよ」
静かな声だった。泣いていた。初めて晋也が恐怖の感情を見せた瞬間であった。
「……大丈夫だ、お前が死ぬはずない」
「……なあ」
「何だ？」
「俺、亜美ちゃんになんて言われたと思う？」
「……さあ」
晋也は泣きながら笑った。いや、笑いながら泣いたのかな。
「今は、晋也は友達にしか見えない。でも、親友にはなれると思うんだ。晋也がそれでもあたしを好きでいてくれるなら、今度は元気な姿であたしに晋也の良いところを見せてみなさい、って」
つまり答えはノーだった。それが、亜美が出した答えだった。
「そっか……。ちなみに最後の方が命令口調なのはなんでだ？」
「照れ隠し……らしい」
「……亜美らしいな」
「ホント、亜美ちゃんらしいよ」
亜美は晋也を理解していた、俺以上に。亜美は強い人間だ。
「なあ暁、亜美ちゃんのこと大切にしろよ」
「俺に言われてもな……でもそうだな、あいつは大切にしなきゃいけないやつだ。だけどな晋也、お前も大切な友達だ」
晋也は口を中途半端に開けたまま、黙ってこちらを見ていた。
「ありがとう……ありがとう……暁……」
病室は太陽の黄金の香りに満たされていた。

それから二日が経った。
なんでもない、当たり前の事実、一〇〇号室には、心からの笑顔で語らう晋也、俺、亜美の三人の姿があったのだった。
窓からは、変わらない光の雫が、溢れんばかりにこぼれていた。

- 4 -

七月二十一日火曜日、学校がまた始まった。新型インフルエンザもある程度は収まりがついたようだ。
俺が事件の真実を知ってから一週間、事件が終幕を迎えてから五日間、晋也の手術が成功してから四日間が経った。時の流れるのは早いものだ。いろいろなものを得た気がした。言うまでもなく失ったものも計り知れないけれど。
十九日の日曜日には、亜美と一緒に晋也に会いにいった。元気そうだった。退院もかなり近いそうだ。激しい運動は出来ないらしいけど、晋也は「肉体労働が無理じゃニート決定だ」とか言って、俺たちを笑わせていた。
晋也のクラスでも、晋也の事はしっかり伝えられたらしい。お見舞いも増えることだろう。
ところで、今日は終業式である。期末テストは延期。中止ではないと聞いたときの生徒の様子は凄まじく、クーデターを起こす勢いだったが、俺にとってはどうでもよいことだった。
終業式が終わり、放課後になったのは、昼下がり。今日は暗号も委員会もないので、他の生徒と同じように玄関を出た。
「あ？」
俺は、玄関から五歩歩いたところで、体に異常を感じ、口を広く開き、舌を低く下げ、その先端を下歯の歯ぐきに触れる程度の位置

におき、声帯を振るわせて出る音をクエスチョンマークを添えて発した。
つまり、誰かに右腕を掴まれているわけだが、もはや主体を確認するまでもなかった。
二宮光は、携帯を片手に満面の笑み、である。いや、それ以前にいつもは縛っている髪がストレート化していて、誰だコイツと本気で思ってしまったのが最初の印象なのだが。
しかし、思いの外、可愛かった。
「似合ってるな、見た目は」
「何ですかぁ、見た目って？」
「いや、何でもない」
性格と見た目が激しく懸け離れているとは言わない方がいいだろう。
「イメチェンです、カワイイですかぁ？」
「イメチェンって、教室じゃまだ変わってなかったろ」
「そうですけど、今からイメチェンなんです」
ものすごく変わったタイミングでイメチェンをするなぁ……。コイツ、天然ならまだ救いようがあるが、ただの変な子なんじゃないか？
「で、何か用？」
「なんか暁くん私に対して素っ気なくないですかぁ？」
「何かご用ですか、お嬢さん？」
「暁くんキモチワルイですよぉ」
「ぶっとばすぞ、お前」
ホントに救いようがない。
「それで、暁くん。何の用ですか？」
「こっちがその質問をしていたんだがな」
「あっ、そうでした。暁くん、メールアドレス教えてくれませんかぁ？」
あれ……、そういえば教えてなかったか？

「ああ構わないけど、お前ってメールとかすんのか？」
「しますよぉ。現代っ子ですから、私」
「メール＝現代ってのがお前の考えなら、お前は確実に現代っ子じゃないけどな」
「そうなんですかぁ？」
ああ、不毛な会話だ。……でも、たまにはこんなのもいいかもしれない。
俺は携帯を取り出して赤外線でプロフィールを光の携帯へ送った。プロフィールといってもアドレスと電話番号しか登録されていない簡素なものだ。
それにしても、メールが最先端である光が、赤外線が使えるのはどういうことだろうか。全くもってこの女もヘテロドックス極まりない。
「ありがとうございました、後ほどメールしますね！」
「ああ。それじゃあ、また後で」
「はい！　さようなら、暁くん」
嵐が去った。
へんてこな嵐が。
そういえば、今日はあまり、亜美や竜司と話していなかった。今、何処にいるんだろう……？
「なあなあ、そこの兄ちゃん」
後ろから聞き覚えのある声がした。
竜司だった。どうやらまだ学校にいたらしい。
「何だその意味不明なノリは？」
「忘れてんだよ！　何もかもな！　頭大丈夫か、暁クン」
「はぁ？」
「今度は二宮といちゃつきやがったな、テメエ。もっとやるべき何かがあんだろーが！」
……あ。
「忘れてた」

「やっと思い出したか。ったくよ、待たせやがって」
「家に」
「は？」
「家に忘れた」
竜司は呆れた表情でこちらを眺めた。
「わかったよ。お前を信じた俺が馬鹿だった。取りに行くからいいよ。今日は用があるから、明日な」
竜司は諦めた口調で言った。可哀相な事実がまだあるのだけれど。
「あの……さ。落ち着いて聞いてくれ、うん。俺さ、今日の夜から実家に帰っちゃうんだよねー……。帰って来るのは八月一日で……」
「……呆れた」
「ゴメン！　後でなんかおごるから、それで勘弁してくれ、な？」
「しょうがねえな。それじゃあそれで勘弁してやるよ。次忘れたらキレるぞ、マジで」
「本当にゴメン！　じゃあ、八月一日に……な」
「ああ、またな」
そう言って、竜司は駐輪場に向かって歩いて行った。
そうこうしている内に校内の生徒も減ってきたようだ。遅くなってしまった。結局、亜美とは会わなかった。どうやら帰ってしまったみたいだ。
「帰る……か」
この後、簡単に荷造りもしなくてはいけないので、寄り道せずに帰ることにした。たまにはそんな普通の日もあっていいだろう。

俺はアパートに到着するとすぐに異変に気が付いた。階段の前に誰かが座っている。
……！！！！
近付くと正体がはっきりとわかった。
――――佐藤静枝だった。

何故、俺のアパートにいるんだ？
俺が驚きのあまり立ちすくんでいると、静枝は俺の存在に気が付いた。
「あーきらっ！！　元気？？」
ええ……！？　スゴイにこやかに話し掛けられたんですけど。
というかまず、この人俺のこと名前で呼んでたっけ？
「何でここにいんの？」
「アミに聞いちゃった。ここに住んでるんだー」
若干キャラが変わってる気がした……。
しかし静枝の美しさは相変わらずだ。
「驚いた。あまりに急過ぎて」
「ゴメンゴメン！　今日はちょっとお礼が言いたくてさ」
「お礼なんて……。俺だって人に助けてもらった側なんだ。気にすることはないよ」
「それでも、ウチが立ち直れたのはアキラのお陰だから。本当にありがとうございました！」
静枝は深々とお辞儀をした。
「こちらこそ、ありがとう。わざわざ俺なんかを訪ねてさ。上がってく？　お茶ぐらい出すけど」
「そうしたいところなんだけど、いろいろと忙しくてね。もう、行かなきゃ」
「ふーん。大変だな。じゃあ、また機会があったらな」
「うん！　ホントにアリガトね。……それから、好きだよ、アキラ」
そう言って、頬を赤らめながら、静枝は走り去った。
「……」
告られてしまった。
俺はしばらくの間、その場でただ呆然としていた。
竜司君、どうやら俺は賞味期限切れのパンから高級フランスパン辺りに昇格したみたいだ。

駅前の広場は噴水を囲む形で、円形に広がっている。まるでヨーロッパにある洒落た街のような風景で、高級ホテルとか一風変わった雑貨屋なんかが建ち並んでいる。

この駅は、静枝を送った駅とは違う駅で、街の中心に近い位置にある。俺はタクシーでここまで来たけれど、実際の話、家に近いあの駅からでも乗り換え無しで実家のある町には帰ることが出来た。ただ、たまに帰るときくらいブランドのちょっと高めのお菓子の一つや二つ買って行ってやろうと思い、この辺りまでやって来たのだ。田舎には、田舎らしく、洒落た店なんて一つも存在しないから。

俺が乗る予定の電車は三十分後に到着する。そもそももっと早い電車に今すぐ乗ることも出来るのだけど、まだこの街にいたい気分だったこともあり、駅前で店を眺めているわけである。

いろいろなことがあったな、そう思った。実際は暗号と格闘し、真実を知って、晋也の手術があって……といった感じだけど、今まで塞ぎ込んでいた俺からしたら大冒険だった。

少しは変われたかな、俺。

「はぁ……」

「幸せ逃げちゃうよ」

「うわっ！！！」

後ろに亜美がいた。

突然の登場にア然としてしまうばかりだった。

「な、何でここに？」

見送りに来たわけじゃないのは明らかだ。

「え？　よく来るのよ、あたし」

「どこにでも現れるんだな、お前は。どこでもドアとか持ってんじゃないのか？」

「惜しいな、暁クン。どこでもドアじゃなくて猫型ロボットの方を

持ってるのよ」
「そりゃあ愉快だな」
くだらねぇ……と、俺は心の中で呟いた。
「何よ、その素っ気無い感じは」
「いや、お前らしいな……と思ってさ」
「あたしらしいって？」
「後で教えてやる」
「……そ。じゃあ、楽しみに待ってる」
亜美は珍しく満足げな表情を見せた。
そんな亜美は買い物に来たらしく、手には商品が入った紙袋があった。
「帰省ってやつ？」
「まあな、七月中だけ。八月には戻って来る」
「ふうん。それじゃあ夏祭りには間に合うんだ。行くんでしょ、祭」
「伝統あるからな、ここの祭。高校入ってからは行ってないけど……」
「そうなの？　じゃあ、一緒に行かない？」
「静枝と行かなくていいのかよ？」
「あらら？　いつから静枝だなんて名前で呼ぶ仲になったのかな？　美人だもんねーシズは。何かあったのかな？　んん？？」
女の勘は怖いな、ホント。一方的に言われただけだけど。
「俺は割と名前で呼んでるだろ！？　亜美だって光だってさ」
「二宮さん？　モテモテだね～、あきらくんは」
遊ばれている……。
「ついこの間告られたやつにからかわれても困るなぁ、んん？」
「うっ……。おのれそう来たか……。うん、今回は引き分けておきましょう」
「感謝します」
晋也、心の友よ。お陰で助かった。
「じゃああたし、お母さん待たせてるから。今度竜司君と三人で遊

びに行こうね」
「ああ、そうだな」
夏祭りの話は何処へ行ったのやら……。亜美はそんなことは忘れて、すたすたと歩いて行った。
「あっ。暁っ」
亜美は急に振り返って俺を呼んだ。
「ん？」
「……お土産、よろしくね」
「……ったく、何もねーけどな、田舎だし。期待すんなよ」
「やったあ！　ありがとう！」
亜美はそう言って、二十メートル程先のぬいぐるみ屋に消えていった。
そろそろ時間だな。
駅に向かって歩き出した俺は、どこか晴れ晴れしい表情だったと思う。

脱出の序章は、終始普通とはかけ離れていた。
噴水の水が高く上がった。輝く月の引力に、昕われるようにして。
俺は夏の始まるこの街で、小さくて、でも大きくて、そして大切な、そんな一歩を確かに踏み出したんだ。

終焔（後書き）

読んでいただいた方々、本当にありがとうございます！
次回からは2章になります。
読んでいただける嬉しいです。
次回以降の配信は、ブログとの同時公開になりますので、しばらく続きは出せないかもしれません。
しかし、遅くとも来月の初めには17話を公開したいと考えております。
今後ともよろしくお願いします。
私のブログに関しては「哲学のプロムナード」または「鬼頭火山」と検索していただければ簡単に見つかると思います。

新展開（前書き）

これまでのあらすじ

月の綺麗な街に、ある二人の高校生がいた。

初夏の候、大切な友を失うという過去のトラウマにより、鬱屈とした日々を過ごしていた高校生、外崎暁（とさきあきら）は堕落した日常から「脱出」すべく、部屋を飛び出した。

その夜、暁はクラスメイトの一人である篠原亜美（しのはらあみ）に出くわし、明くる日から彼女が親友から依頼されたある事件の解決に協力することとなる。

有名推理小説家、鬼頭火山。失意に包まれた彼の残した暗号をめぐり、暁と亜美は陳腐な日常を少しずつ色づけていく。

そんな中、暁は気付き始めていた。篠原亜美の存在が、自らの運命を開いてくれていることに。円環のように同じ道を歩んできた運命が、徐々に螺旋の如く移り行く運命に変わりつつあった。

同時に、暁の中で亜美の存在がかけがえのないものへと変わり行く中、事件は急展開を見せる。

一連の事件が、一度幕を下ろし、終焉を迎える時、暁は運命を切り開くための、確かな一歩を踏み出していた。

事件の疲れも癒えた頃、夏の長期休暇も始まり、世間はすっかり夏色に染まっていった。暁は七月が終わるまでの間、地元の田舎へ帰省することとなっていた。

小学生時代を過ごした田舎に帰ると、暁は幼き頃の親友、坂本洋平（さかもとようへい）と再開する。

満天の星空の下、常識を超えた物語が始まろうとしていた。

新展開

-1-

坂本洋平（さかもとようへい）は空を見ていた。

そこは砂浜、打ち寄せる波の音が心地いい。

見上げていた洋平の目に、太陽の光の中から現れた大きな鷹の姿が映った。

その鷹は、大きな羽根を羽ばたかせ、洋平の頭上高くを悠然と過ぎ去っていった。だが、それ以上は目で追おうとしなかった。

洋平は、青く澄み渡った空を眺めて、その視線の先に在るであろう無限の宇宙を想像していた。風が砂を舞い上げ、洋平の髪をなびかせた。

……宇宙の外側には、一体何が在るのだろう。

風は意外にも長く吹き続いたので、風上に横目で威嚇をした。それが功を成したのか、偶然にも風は止み、一瞬の静けさが訪れた。

この一瞬にこそ、趣を感じさせる風情があった。

全ての音が無くなったその時、洋平の思考もまた、停止した。

止まった思考の中で見る海の風景は、実に、ゆっくりと動いていた。

ザザーン……――――

洋平は右を見た。

波の音に混じり、何者かの足音が、右から自分に近付いてくるのを感じたからだ。

洋平の目には、見覚えのある男の姿が映っていた。だが、同時に違和感を覚えた。

「……よう、洋平じゃねえか」

男は洋平に近くで立ち止まり、そのまま右に顔を傾け、海を眺めた。

洋平は事情を悟り、視線を海の方に戻した。
「帰ってきたのか……」
「まあな。ところでお前、こんなとこで何やってんだ？」
「海を眺めてたんだ」
外崎暁（とざきあきら）は、洋平のあまりにラフな返答に、声を上げて笑ってしまった。
「よぉ、確かに海は綺麗だが、俺の話を聞かないか？　あっちで色々あったんだ」
「……いいよ。俺も色々あったしな」
「そうか、楽しみだな」
暁は笑ってみせた。

高校に進学すると、以前とは違った自分を見せる人間が多い。それは、良い意味で違う場合もあれば、悪い意味で違う場合もある。
洋平の経験上、ほとんどの場合が悪い意味で、なのだが……。しかし、暁と話しているうちに気付いた。暁は良い意味で変わったのだと。それは、小学校時代の暁の親友であった洋平にとっても、喜ばしいことであった。だが、逆に、それが意外であったことから、洋平は暁の話を聞くうちに、暁との距離を感じてもいた。置いてきぼりにされたような感覚に近かった。
暁は、敢えて、暗い話は話題にしなかった。久しぶりに再会したのだ。テンションの低くなる話は必要ない。必要なのは、ハハハと笑い飛ばせる話であった。ゆえに、鬼頭火山（きとうかざん）と佐藤静枝（さとうしずえ）の件については口に出さなかった。勿論、鳴海（なるみ）のことも。
「二宮（にのみや）って奴がいるんさ。やべーんさ。女なんだけどさ、頭おかしいッつうか、天然なのかバカなのかわかんない感じの」
「ハハハ」
「くしゃみがサイレンサー付きの銃の音だし」
「ハハハハ、すげえな」

時刻が昼過ぎになってきた。洋平は腕時計を見た。
「なぁ、これから暇か？」
暁には、洋平が昼食を誘っているかのように感じた。断る理由もない。
「暇だな」
「じゃあ、もう昼過ぎだし、飯でもどうだ」
「ああ、どっか、新しくできたとこかあんのか？」
「あるよ。長座（ちょうざ）ラーメンッてゆう、結構評判のが」
ラーメンと聞くと、暁の口の中で唾液が分泌された。キラキラと光るラーメンが目に浮かんできた。
「おお……ラーメン食いてぇ」
「よし、決まりだな」
二人は浜辺を出た。
暁は懐かしい町並みを眺めて、洋平に聞いた。
「お前、高校どこ？」
「外国語専門第二高等学校」
「え」
「ビビったか？　この辺じゃあ一番難関とされる高校だ。偏差値ボーダーは七〇……」
「えぇ？　……すげえな、偏差値七〇！？　てか、外国語ッて」
「……勿論、専門学校。外国語を専門的に学習するんだよ。普通の高校とはちょっと違うよ」
「ちょっと待て……何？　外国語ッて？　何語？」
「選択制なんだけどさ、一年生のときに全員必修で、英語、ドイツ語、ロシア語、中国語の４ヶ国語を習う。んで、二年生になったら、選択制になるんだけど、俺は英語コースッてのを選択した」
「？？？　英語コース？　数学とか国語は？」
「勿論やるさ。進学高校より質は落ちるけどね」
「……どんな学習すんの？」
「やっぱ将来性を見込んだ学習ばっかだなあ。通訳の資格とか、語

学の教師とか……資格を取るための勉強が主」
「……へぇー、なんか、すごいな。お前、何になるんだ？」
「……通訳かな。まだ決めてないけど」
「ふーん……」
そこで会話は途切れた。
入り組んだ道を抜け、車の行き交う道路を渡り、静かな商店街を横切ったところに、目的のラーメン屋があった。
店内は賑わっていた。知った顔がいないかと、暁は店内を見回したが、いないようであった。店員に案内され、四人用の席に二人で座った。あまり大きな店ではないので、店内にいる客の顔がよく見える。やはり、知り合いはいないようだ、と暁は安堵した。キョロキョロして落ち着きのない暁を見て、洋平が、
「どうした？　知り合いでもいたか」
とにやけながら。暁は、洋平に心の中を見透かされたような感じがして、少し腹の心地が良くなかった。暁が、水をグビッと一口飲むと、洋平が静かに口を開いた。
「この前よぉ、俺、心霊体験したんさ。怖いモノ知らずの俺もさすがにビビったぜ」
洋平が怖いモノ知らずなのは、暁もよく知っている。この街の廃虚と化したビルに夜中に1人で入り込み、屋上で花火を上げたというのは有名な話だ。今では覚えている人間も極少数であろうが。
「何があった」
「……ちょうど、一ヶ月くらい前の話だ。その日の俺はなかなか寝付けず、夜中の三時だというのに外に出た。親にバレないようにそうッとな。夜中の空気は湿っぽくて、まるで肌にまとわりつくかのようだった。俺は補導を覚悟で、夜中の静かな街をひたすら歩いた。俺以外に外を出歩く人間はいなかった。聞こえるのは虫の鳴く音くらいだ。俺は、高い所に行きたくてあの廃ビルに入り込んだんだ」
そこで、洋平は一旦話すのを止めて、暁の目を覗き込んだ。覚えているか？　という疑問を投げかける視線であった。

「あの廃ビルッて、花火の？」
「そう、俺がガキの頃、花火を上げた、あの廃ビルだ……。何故、そもそも、何故、俺は外に出たのか、ハッキリとは覚えていない。ただなぁ、なんとなく、不思議な気分ではあった。気付くと、何にも考えてない自分がいたんだよ。ぼーっとしてるというか、無意識にというか。俺はあの廃ビルの階段を音を立てて登っていったんだ。もともと怖いとは思っていなかったからな、あんな所、怖くはなかった。……しかし、三階に着いた辺りでな、聞いたんだよ。廊下の奥の方で、女が低〜く笑う、笑い声を！　心臓が少し痛んだな、あの瞬間だけは……マジでビビったぜ。だが、だが俺は戻らなかった。さらに上に上がっていった。言っとくがな、勿論、光なんてどこにも無いんだぜ。三六〇度、視界は暗闇だ。真っ暗よ。だが目は徐々に慣れていくもんだからな、なんとか、見ようとすれば見えるもんだ。……俺は屋上に出てな、とりあえずビルの端まで行ったんだ。その時、背後で音がした。振り返ると、いやがったんだ。思わず声を上げちまったぜ……。白い服を着た女がよぉ！」
　暁は、そこまで聞くと笑った。暁は、洋平の話を信じていなかった。すると、洋平もつられて笑い出した。初めは小さく、徐々にオーバーに。
「ウソくせぇなぁ！　オイ」
「ハハハハ！　騙されたか？　なぁ、オイ」
「……はぁーあ、全然怖くねぇ」
「……」
　洋平は、いつの間にか無表情で暁の顔を覗き込んでいた。
「……え」
「……フフ。お前さん、どうやら信じてないようだなぁ。この話、嘘偽りはどこにもないと、俺に証明することはできないが、全部、真実だよ」
「……」
「続きを聞きたいだろ」

洋平は暁の返答を待つことなく話を再開した。

「……実はな、白い服の女、俺は以前にも見たことがあったんだ。これはまだ誰にも言ってないことだ。そう、ガキの頃、花火を上げて戻ろうとしたとき、あの女はいたんだよ。全く同じ場所にな。そんときは、幻覚だと思い込んでたんだが、最近になってあれは幽霊じゃねぇかと疑うようになった。んで、眠れぬ夜がきて、偶然にも俺は高い所に登りたくなり、あのときと同じ場所に行ったんだ。……なぁ、偶然にしちゃあ出来過ぎてると思わないか？　俺は、あのとき、あの女に呼ばれていた……そう思うとしっくりくるんだな、これが」

洋平の前にトンコツラーメンが運ばれてきた。暁は、自分が何も注文していないことに気付いた。「ら、ラーメン下さい」と慌てて店員に頼んだ。

洋平は、ズズズーッとラーメンをすすった。実に美味そうな食べ方であった。暁の口の中に唾液がはびこった。

洋平は、麺を飲み込むと、スープを口に運び、口の中を満足させた。暁は、洋平が話し出すのを待った。

「操られていたのではないか、と思うんだわ。俺は、尋常でない恐怖心を払いのけ、女に近付いていった。その女の顔は真っ青だった。俺は、腰が抜けそうになるのをこらえて立っていた。女と目を合わせてな。女の近くには、得体の知れない冷気が立ちこめていた。寒気さえ感じたほどだ。いつの間にか体は膠着して、全く動かなかった。逃げようにも逃げられない。女はだんだんと俺に近付いてきた。目は真っ黒で、思い出しただけで飯が食えなくなりそうなくらい気味が悪い……。突如、女は限界まで口をひきつらせた、身の毛もよだつほどの笑顔を作った。俺は、一瞬意識を失いかけたが、なんとか、声を出した。ただ、大きな声で呻いた。そして、手を動かした。あの女の顔を殴ったんだ。……豆腐を殴ったかのような、生々し過ぎる感触だったのを覚えてる。気付いたら、朝になってて、俺は廃ビルの屋上に仰向けに倒れていたんだ」

「……マジかよ」
「本当だよ。全て。まぁ、信じろとは言わない。どうだっていい話だからな」
洋平は、チャーシューをひとつ箸で取って、口に頬張った。確かに、そんな話はどうでもよかった……――――暁は、洋平の言葉を、脳裏に何度も反芻させていた。

- 2 -

洋平と別れたあと、実家に戻った暁は、学校の数学の課題に手をつけていた。
これと言って、課題を急ぐ理由はなかったが、余りに暇を持て余していたためでもある。
小一時間もすると、勉強にも飽きが差し、暁はベッドの上に転がった。懐かしの感触が、皮膚を通して暁を包んだ。実家に戻るのは、約一年振りだ。暁は、長い休暇の取れる夏休みにしか、実家に顔を出さない。
窓の外を見ると、緑が美しかった。今日の天気は、晴れ晴れとしていて、風も穏やかに吹いている。こういった自然を垣間見ると、実家に戻るのも悪くないな、と思えた。
暁は、何も考えないで、しばらくベッドに横たわっていた。こうしてぼーっとしているのも、なかなか悪くない。心地が良い。しかし、だんだんとそれは迫ってきた。ジワジワと暁の身体を蝕んだ。
「……」
暑さである。暁の部屋には、クーラーが存在しない。扇風機は、別の部屋にあるので、わざわざ持ってくるのも面倒だった。暁は、うなだれ始めた。仕方がないので、クーラーが効いたリビングに移動するしかない。暁は、ベッドから起き上がり、階段を下りた。そして、クーラーが効いたリビングに入ると同時に、表情をほころば

せた――――涼しい！　リビングには、暁の両親がいた。暁は、コップを取り出して、三ツ矢サイダーを並々と注いだ。それを一気に飲み干し、また注いだ。暁は、無類の炭酸好きだった。朝一番も炭酸なのだ。

「あー……暇だ」

暁は家を出た。行くアテもなく、ただ、ぶらぶらと外を歩いた。しばらくすると、懐かしのコンビニが目に入ってきた。小学生の頃、よく洋平と行ったものだ。

「いらっしゃいませー」

欲しいものはなかったが、とりあえず入ってみた。

雑誌が置かれたコーナーを眺めていると、見覚えのある名前があった。

鬼頭火山　自殺の真相

水着アイドルが表紙の雑誌の隅に、そう書かれている。暁は手に取り、目的のページを探した。……あった。

「……！？」

暁は、見出しの文字を見て、目を疑った。

師　宮澤睦（みやざわあつし）のコメント

……まさか、言ったんじゃないだろうな！？

暁は記事に目を走らせた。万が一ということもあり得る。自ら警察に言うなと口止めしてきた手前、真相を明かすとは思えないが……。

「……」

暁の心配は杞憂だった。宮澤は、暁に話したこととは全く関係のないことをコメントしたようだ。鬼頭の死を残念がるコメントが、全体の半分を占めていた。暁は、雑誌を棚に戻した。宮澤は、あく

までも真実を伏せる気でいるらしい。きっと面倒事が嫌いなのだろう。暁は、適当な少年コミックを手に取り、レジへと向かった。レジには、自分と同世代くらいの女がいた。よく見れば、なんとまぁ、小学生の頃の、暁の意中の相手ではないか。暁は、気付かないフリをして、目を伏せた。さっさとコンビニを出たい一心である。まさか、こんな所でバイトをしているとは……。

暁は、千円札を持ったまま相手の顔色をうかがった。上目遣いで、こっそりと。女は「四五〇円です」と言って、暁と目を合わせた。髪は伸び、より大人の体になっていた。暁は、その瞳を直視できず、千円札を置いて、コミックをわし掴みにして、お釣りももらわず店を小走りに出た。暁は、外に出ると走って逃げた。

「……ハァハァ。なんてことをしちまったんだぁ～！！　ハッハハ」

心臓の音がうるさい。暁は振り返り、立ち止まった。

「ハァハァ……クッソ！　なんであの女……ハア」

今更ながら、自分の犯した行為を後悔した。俺はなんて恥ずかしい奴なのか、と暁は自分を戒めた。仕方なく、コンビニに歩いて戻る。なんて言えばいいのか？

「俺はもうダメだ。死んだ方がマシだ！　……なんてダサい奴なんだ……ぜってーキモがられてる……」

「あのう」

「……！！？？」

事もあろうか、バイト女子はお釣りを持って暁の前に現れた。暁は驚き、2センチばかり飛び跳ねた。

「あ、あ……あ、ありがとう」

「……ハイ」

暁は、バイト女子が自分の正体に気付かないことを切に祈りつつ、お釣りを受け取った。バイト女子は、お釣りを受け渡すとそのままコンビニに戻っていった。

暁は、クルリと体を回転させ、ふぅ～と一息。胸に手を当て、歩

き出した。

暁は鏡を見ていた。理由は簡単だ。己の容姿を再確認するためである。今までルックスに気を使うことはなかったが、このとき暁の心を何かが支配していた。いつかのときと同じ感覚……これは……。

「……これは……恋？」

己の吐いたセリフに、苦笑いした。バカげてる。だが、何だろうか、この感情は……高校生になって、少しオープンになったとでも言うのだろうか。

……そう、暁は間違いなく、一目惚れしたのだ。近くのコンビニで働くバイト女子に恋をしたのだ。昔好きだった女子に再度恋愛感情を沸騰させたのだ。暁はノリノリだった。故郷に戻ったというアクションも引き金となり、暁はいつになくテンションが高かった。

「ようし……ようしようし～～～～～し」

暁の恋愛経験は薄っぺらい紙の如くである。今までに付き合った女性の数は、ゼロ。たが、暁は決心してしまった。どこからともなく彼の心を高揚とさせるのは、まさしく予感。暁は一時のテンションに全てを委ね、ある目標を掲げ上げた。勇ましき目標だった。心踊る目標だった。暁は鏡の前で、両親に聞こえないように、小さく吠えた。

「俺は、如月愛（きさらぎあい）を彼女にするぜ！！」

翌日、暁の部屋には坂本洋平と暁の二人がいた。

洋平は、しどろもどろな暁の説明を聞き、何とかあることを理解した。

「……要するに、お前は、如月愛が好きなんだな？」

回りくどい暁の説明の仕方に、若干腹を立てた確認だった。だが、言いたいことは伝わった。

「そうだ。だから協力してくれ」
　暁の冷静な表情を見て、洋平は呆れた。
「あのなぁ、暁」
「なんだ」
「目を覚ませ」
「え」
「お前な、アホか？　女なんかにうつつを抜かそうなどと……お前は何がしたいんだ？」
「言ってるだろ、さっきから。如月愛と……付き合いたい……」
「何故？」
「知らん！　人を好きになるのに理由なんかいらないだろッ……ハハハハハ」
「ハハハハじゃねぇ。なぁ、お前はよく昔言ってたじゃねぇか。世の中下らないと、調子に乗ればロクなことがないと」
　洋平の口調は、まるで暁を諭すようであった。
　こんなことを真面目に話せるのは、暁と洋平が親友同士だからである。暁は、笑い混じりに、しかし、目だけは真剣な表情で言った。
「その通りだ。世の中は下らねー。何をしたって退屈なことばかりだ。俺はそう思って今まで毎日過ごしてきた。でもなぁ、そろそろここらでひとつ、バカをしてみてえという気持ちが、徐々に沸いて出てくんだわ。まるで、抑えてたもう一人の自分が、目覚めるように」
　暁はそこまで言うと、サイダーをグビッと飲み込んだ。
　洋平は頭をポリポリと掻いていた。
「わかるか、わかるはずだ。なぁ、そうやってよお、いずれ目が覚める。あー下らねーとな。こんなこと止めようッてな。それまでの退屈しのぎさ……俺が何を言いたいか、わかるか？」
「……」
「つまり、本気じゃないってことよ。考えてもみろ。俺が正気を失

うほど女に惑わされるわけがねぇじゃねぇか、な」
「……あくまでお遊びか」
多少皮肉の入った言い方だった。暁は、自分の発言が、男として最低であったことをきちんと認識していた。
「……まぁ、でもよ。付き合えたら、それはそれで、きちんとやってくつもりだ」
「ふっ。おい……わかってねぇな。そんな中途半端な野郎が、長続きするか」
「言ったろ。あくまでお遊びだ」
洋平は立ち上がった。暁を見ないで、そのまま部屋のドアの方に向かって行った。
「おい！！」
「……俺んちに来い。お前のお遊びに付き合ってやるよ」
「え！！　マジか！！」
洋平の横顔は笑っていた。どうやら、暁の無謀な挑戦の手助けを勝って出る決意をしてくれたらしい。
「俺んちに行けば、クーラーもある。パソコンもある……ヘアーアイロンもある。ワックスもある。お前を改造できる。あの女がプロフをやってりゃ、色々わかる。まぁとにかく来い。そっからだ」
「洋平！！」
二人は家を出た。

プラム・プディング

- 1 -

「如月愛、十七歳、学生。好きなもの：テディベア、プラム・プディング。嫌いなもの：幽霊、レモンティー。部活：軽音楽部……」

洋平はコーラの入ったグラスを片手に、入手した情報を次々と口にした。

「……うん。なんっていうか、典型的なかわいい系な女の子だな」

暁は少しニヤケながら言った。

それを聞いた洋平は「あーあ……」という、可哀相なやつに同情するような言葉を呟き、クーラーのリモコンで冷えすぎた室内の温度を下げた。

「何だ？　あーあって？」

可哀相なやつが尋ねた。

「あのさ、一応確認するが、如月愛って隣のクラスにいたあいつだよな？」

「隣の」というのは、洋平があらかじめ暁から聞いていた「同じクラスになったことがない」という確認情報と、暁と洋平が六年間ずっと三組までクラスがある中の二組に所属していたことを意味する深い言葉である。

「ああ。そうだけど」

「わかってると思うけど、俺達は持ち上がりだから中学も同じなんだ。それで、確かにテディベアのちっこいのを中学生にもなってよく持ってたのも確かだ」

「へぇ……。人気は？　モテてた？」

「愚問だな。なんというか……というか寧ろ『難というか』って感じだが、あれと付き合うのは俺的には無理だ」

「え？　何でさ？」

「ルックスに関しては一般的な美的感覚を持ち合わせている人にならば誰にでも無難に好まれると思う。……が、『嫌いなもの、幽霊』はかなり引っかかるなって」
「別に普通だろ？」
洋平は過去の記憶を鮮明に思い出し、脳内で文章化した。
「至って普通の、本当に少し可愛らしい女の子くらいの普通の女子だったと思う。俺は例外として如月愛に告られたら、オーケーするかしないかは五分だな。好きだったらの話だけど。そういう意味ならモテてたと言えるかもしれない」
「回りくどいな。つまりどういうことだ？」
「これから告るって奴に言えることじゃないかもしれないが、親友として言っておく。変な噂があるんだ。それが、彼女の価値を下げている。如月愛に告った奴は……」
洋平はそこでコーラを一口だけ飲んだ。
「……な、何だよ」
「死ぬ」
洋平は真剣な目で言った。
「は？」
「だから、死ぬんだ」
「あのな、洋平。言っていいことと悪いことがあるだろ」
暁は呆れた表情で反論した。まさかそんなことがあるわけないのだから。
「四人だ。まず中学時代では別の学校の生徒と山下雄馬（やましたゆうま）が告って、それぞれ四日後に事故死した」
「山下雄馬！？　あの野球少年の雄馬が？　し、死んだのか？」
山下雄馬、彼は一つ下の学年の野球大好き少年だった。友達ではないが、校内では知らない人はいない有名人だった。
「偶然かもしれないが、必然とも言えなくもないだろ？　二人とも四日後に事故死だなんてよ」
「マジかよ。……じゃあ『嫌いなもの、幽霊』が引っかかるのは？」

「更に複雑な話になるんだが……。山下じゃない方が先に告ったわけなんだが、その四日前に如月愛は複数の友人と肝試しに行ってるらしくてな。昨日言おうか迷ったんだが、俺が見た幽霊ってのは割と有名な方で、俺の中学じゃあ誰でも知ってる怪談話なんだ。だから肝試しの会場にはあの廃墟が使われた。それで、出会ってしまったんだ、例の女に……」

「呪われたとでも言おうってか？」

「落ち着けよ。こっからは俺が話したやつと少し違う怪談話にシフトするんだ」

暁は洋平が下らない嘘を語っているという疑いをなくした。こんなややこしい驚かし方があるはずない。

「本当かどうかは分からないが、昔テディベアが好きな女子中学生がいた。正確には一体のテディベアだ。つまり、お気に入りの熊のぬいぐるみを大好きでいつも持ち歩く少女がいたんだ。少女はクラスの人気者で、勉強もスポーツも出来る三拍子揃った少女だった。ある日の放課後にひとりの男子生徒がその少女に告白した。少女は申し訳ないと思いながらも断った。しかし、それに過剰に反応した男子生徒は少女を殴って気絶させて、例の廃墟に連れて行き、そこで少女を殺し自殺した。その事件の後、あの廃墟で少女の霊を目撃され始めたそうだ」

「つまり、テディベア好きの如月愛がその幽霊と出会ったことで他の人よりも強く呪われたってわけか？」

「まあ、認めたくはないが、そういう噂だ。続き、聞きたいか？」

洋平は暁の目を見つめながら言う。

「聞きたくないな……。だけど、乗りかかった舟だし、俺が仮に告白した場合、彼女を結果的に傷つけるかもしれないしな……」

「いいか。俺の気持ちとしてはこれを聞いたら、もう引いてほしい。ややこしいことに巻き込まれに行く必要はない」

「内容次第だな」

「同情の念しか浮かばないような話だぞ」

「いいから、話せよ」
コーラが飲み干された後のグラスに入った三つの氷が音をたてて配置を変え、一回転した。
洋平はゆっくりと口を開く。
「普通の人間は偶然として片付けるような話だ。如月愛も例外じゃなかった。だけど、退屈な学校の連中からしたら価値のある噂話だったんだろう。如月愛は決して弱い人間じゃあないし、自分一人なら簡単に立ち直れたはずだ」
「苛められた……のか？」
「いや、お前の知っているとおり、俺らの学年は苛めなんて一つも無かった。だから、形を変えたんだ。あくまで噂として……な」
仲間はいっぱいいたしな、と洋平は思い出すように言った。
「終わり……か？」
暁は終わってほしいという願いを込めて聞いた。
「まさか。こっからが彼女の不幸話だよ。噂のこともあって如月愛は男子と距離を置きだした。というよりも親しくなりすぎないようになった。それが功を奏して、中学卒業まで誰にも告られなかった」
「二回だって多いしな」
「高校ははなぶさ高校、確か『英』って書いて『はなぶさ』だったと思う。偏差値は五十二くらいかな。まあ、とにもかくにも如月愛は私立英高校に入学したわけだが、そこで噂は消滅。俺も詳しくは知らないが、本人も立ち直ったらしい」
「めでたしめでたし……のわけないよな……」
犠牲者は四人。全く忘れたわけではない。
「ああ。ここで三人目の死亡者が出る。噂では一年の夏らしいが、こっからはかなり噂自体が怪しいから素直に信じきれない。“俺が聞いた話では”だが、一年の夏に同じ学校のテニス部部長の先輩に告られて、四日後にその先輩は事故死したそうだ」
「……マジ……で？」
「一年の冬、同じクラスの地味な男子生徒に告られて……」

「四日後に事故死」
「正解」
「……」
「……」
予想とレベルが違った。暁の体験と同じくらいの悪夢だ。いや、それ以上か……。
「なあ、洋平。告られて、如月はどう答えたんだ？」
「最初の二人は断ってる。あとはわからないな」
しばらくの間、沈黙が室内を支配した。
「そっか……。自分のことを好きな人が死ぬなんて、辛いよな……」
佐藤静枝の泣く姿を思い出しながら暁は、ただ如月愛の悲しみの深さを想像した。
「だろうな。噂では最近、夜な夜な許しを請いにあの廃墟に通ってるって話もある」
「でも、バイトしてるってことは、一応前を向いて生きているってことだろうか……？」
「何かしていないと気が保たないんじゃないか？」
洋平の表情は諦念の色を覗かせている。
「救いを……求めてんじゃないかな？」
暁は思ったことをただ口にした。
「暁、気持ちは解るが、俺たちは無力だよ。お前がそれでもまだ、告白するって言うなら、予定通りしっかりカッコ良くしてやるけどよ、さすがに引き下がるしかないだろ？」
「除霊とか、御祓いはダメなのか？」
「多分もう試しただろ」
「だよな……。しかし、引っかかる……」
暁の中では腑に落ちない点があった。
「暁、どうした？」
「四日後に事故死って、何だ？」
「は？」

洋平は暁の言葉の意味が解らなかった。
「四日後に事故死ってのが共通点だが、関係ないだろ。それに、お前が話した心霊話も、告白した男子生徒が廃墟で殺人と自殺をする理由が解らない。殴ったならそのまま殴って殺せばいいだろ。廃墟に行く必要はないし、女子とはいえ担いで廃墟に運ぶのはかなりキツいし、誰かに見つかるに決まってる」
「確かに……」
「そもそもあの廃墟ってそんな昔のものじゃないだろう？　せいぜい二十年前って感じだ。俺が小学生のときにも噂は既に出来上がっていたはずだ。お前は小学生の時に目撃したみたいだが、噂は無かっただろ。ここ数年ここらじゃ殺人事件なんて起きてねーわけだし」
「全部作り話……ってことか？」
洋平は茫然としている。「何でそんな簡単なことに気付かなかったんだ」と、テーブルを思い切り叩いた。
「“本当かどうかは分からないが”なんて説明は要らない。全部作り話だったんだよ。ここを離れていた俺だから気付いた」
「ま、待て、暁。じゃあ俺が見た白い服の女は……？」
暁は右の口角を僅かに上げて、微笑した。
「もしかしたら、導かれたのかもな。お前が廃墟に導かれて白い服の女を見て、俺が故郷に帰ってふと海に出掛けるとお前と再会し、コンビニに行って如月愛を目撃、何故か一目惚れしてお前に相談、そしたらお前が如月愛に起こったことを話す」
「そして、事の真相を掴む……か。神様は俺達を悲劇の舞台に招待してくれたようだな」
洋平は詩的に続けた。
「どうかな。喜劇とはいかないだろうが、ハッピーエンドにはなるかもしれないぞ？」
「は？」
「救いの手、差し伸べてみないか？」
暁は今度は左の口角も上げて言った。

田舎町の小さな物語が幕を上げた。

- 2 -

「プラム・プディングって知ってるか？」
暁が夕陽を背に言った。
「如月愛の好きなもの……か。気になっていたんだけど、何なんだ？　そのプラム……」
「プラム・プディング」
「そう、それ。食べ物の名前か？」
洋平は砂浜にしゃがんでいた。木の棒で何やら文字を書いている。多分ドイツ語だろう。ライティングも出来るのだろうか。
「クリスマス・プディングとも言うんだけどな」
「ん？　それは知ってるぞ。イギリスにホームステイしたときに食べたな、確か」
イギリスにホームステイしたのか、コイツは。
「そうか。ちなみに雑学を言わせてもらうと、プラム・プディングは日本の雑煮みたいに家々でこだわりの味を持っているんだ。クリスマスに食べるケーキみたいなものだが……って、それは知ってるか」
「ああ。具だけのパウンドケーキだったな。切ったらコインが入ってビックリしたよ」
「それはかなり凝ってる方だな、確かそれで占いをするんだ。普通はしないだろうけど」
「だろうな。それで、ただの雑談か？　今日はもうやることないし、俺は構わないけど」
洋平はそう言うと、ドイツ語の下に今度は英語で「Ｆｅｂｒｕａｒｙ」と書いた。
二月……なるほど。如月か。何書いてると思えば……。

暁がそんなことを考えていると、視界に夕陽のオレンジが飛び込んだ。先日洋平と再会した砂浜は姿を変えていた。黄金の光が海に零れ落ちる。夕陽と影は奇妙な調和を保ち、決して混ざり合わず、かつ乖離せず、数分間だけのこの美しきコントラストは、ありきたりでありながら心に深く染み渡る。

暁は夕陽を眺めていて、洋平の問いに答えていないことに気が付き急いで言葉を探した。

「雑談だが、脱線はしていない」

「と、いうと？」

「如月もまた導かれたんじゃないかって思ってな」

「プラム・プディングっていう記述に何かあるのか？」

「シンクロニシティ」

暁はそう言って、洋平の書いたドイツ語の隣に「Ｓｙｎｃｈｒｏｎｉｃｉｔｙ」と書いた。

「何だ、シンクロニシティって？　訳は……『共時性』か？」

洋平は顔を上げ、暁の顔を覗き込んだ。

「よく知ってんな。ユングっていう心理学者は知ってるよな？」

「ああ。聞いたことはあるけど」

ホントによく知ってるな、コイツは。

「ユングは、全てではないとしても、いくつかの『偶然の一致』は文字通りの『偶然』ではなく、非因果的な複数の事実と現象の『同時発生』だとしたんだ。ユングのシンクロニシティの最も有名な例は、プラム・プディングに関わるもの。ある年にフランスの詩人デシャンが、ドゥフォルジュボー氏からプラム・プディングをご馳走してもらったことがあった。その十年後、デシャンはパリのレストランでメニューからプラム・プディングを注文したが、給仕は最後のプディングが他の客に出されてしまったと告げた。その客がまさにドゥフォルジュボー氏だったんだ。更に十七年経過して、デシャンはある集会で再びプラム・プディングを注文した。デシャンは昔の出来事を思い出し、『これでドゥフォルジュボー氏が居れば役者

が揃う』と友人に冗談で話したそうだ。そしたらまさにその瞬間に、ドゥフォルジュボー氏が部屋に入ってきたってわけ」

「すごい偶然だな」

「つまりシンクロニシティとは、意味ある偶然の一致ってことなんだけど、解かりやすい例がある。例えばある日の深夜、俺が夢を見たとする。洋平の家が火事になる夢だ。それで眼を覚まして心配になって電話してみると、お前が寝ている中、家が燃え始めていた。お前は俺の電話で起きてすぐに家を飛び出して助かった。俺の電話で眼を覚まさなかったら逃げ遅れて焼死体だったって話」

「縁起でもねー話すんなよ！　……しかしまあ、多少ニュアンスは違うが、今回の事件はシンクロニシティって言いたいわけか」

「そういうこと。もしかしたら、霊がいると思い込むことで本当に呪われたって思い込んじゃう……みたいな簡単な心理効果かもしれないけどな」

会話が途切れてしばらく経つと、日は沈んだ。いきなりは暗くならないが、さっきまでの光の神々しさに目が慣れてしまって、闇が深く見えた。

「今日は俺んとこ、泊まれよ」

「何で？」

「明日から動き出すんだろ。作戦会議だ」

「なるほどな。いきなり出てきて、全部嘘話ですって言っても効果はなさそうだし……」

「しかし、お前が人助けとはな」

洋平はからかうような口調で言った。

「ちょっとしたパラダイムシフトがあってね」

「フッ……サポートは任せな、暁」

「ああ。頼む」

潮風が強く吹いた。

波の音はいつかの追複曲を連想させる静かな響きを奏でていた。

「うおおおお！！」

洋平の自宅から南に二キロ行った所にある、丘の頂上で、暁は感嘆の声を上げた。

「昔はよく見ただろ？　夜中に家をこっそり抜け出してさ」

洋平は夜空を見上げて言った。

「すげーな。向こうじゃ全然見えないし、久しぶりに見たぜこんなの」

暁と洋平の目には満天の星空が映っていた。

「夕陽が綺麗だったからよ、今日はよく見える気がしたんだ。月も無いし赤いセロハンも家にあったから」

「赤いセロハン？　この懐中電灯にくっ付いてるやつか」

「ガキの頃は気にしなかったが、赤いセロハンで光を赤くすれば目が暗さに慣れても眩しくないだろ。星が綺麗に見えるんだ」

「なるほど。自動車のテールランプの赤色と同じってわけか」

「言っても、ガキの頃はただ単に遊びに来ただけで星空目当てじゃなかったけどな」

暁は自分が思いのほか感動していることに驚いた。感情のかけらが次々と修復されていく感じがあった。

言葉が絶え間なく頭を巡った。自分の中の言葉達が物語を構築していくようなイメージだ。

鬼頭火山ならどんな言葉でこの空を形容するだろうか。

「天の川ってこんなに綺麗だったっけ？」

素人でも確実に分かる天の川だった。暁は洋平の姿を横に確認して、話題を振った。洋平の博識は夕方に確認したばかりだし。何より中学では天文部だったらしい。雑学の一つや二つ、簡単に出してくるだろう。

「そうだな。俺も中学の時以来だから結構感動してるよ。……天の

川。晴れた夜空に乳白色に淡く光る無数の星の集まり。今の時期から秋にかけてよーく見える。日本では織り姫と彦星の七夕伝説が有名だな。英語ではＭｉｌｋｙ－Ｗａｙ。ちなみに真ん中の輝星ははくちょう座α星だ。いわゆる、デネブだな」

「へえぇ……。さすがは元天文部。じゃあＭｉｌｋｙ－Ｗａｙの由来は知ってるか？」

「ミルクを零した様に見えるからとか……」

「小学生とかにはそう教えることが多いな。洋平なら聞いたことあると思うが、ギリシア神話で天の川は女神ヘラの乳がほとばしって出来たんだ」

「聞いたことあるな。確かガラクシアスとか何とかって呼ばれてたとか……」

「正解。ガラクシアスは乳の川って意味だよ……確かな」

予想通り知的な会話が出来そうである。素人とはいえ、暁はギリシア神話をモチーフにした推理小説を読んだことがあるので、そちらの方面からなら星座にも詳しい方であった。

「暁、夏の大三角って分かるか？」

「こと座のベガ、はくちょう座のデネブ、わし座のアルタイルだろ。東の空の星の中じゃ、抜きん出て光ってるから分かるよ」

「やるな、暁。目が慣れてきたか。面白いのを見せてやるよ」

そう言うと、洋平は西の空を指差した。

「北斗七星の下に春の大三角があるんだ。春の大三角の左の二つと北斗七星をつなぐ。北斗七星からアークトゥルスを通って、スピカまでだ。すると……これが春の大曲線」

「うわ。見えた見えた。言われると気付くな」

「まあそんなものだよな、人生」

それは含みを持った言葉だった。

「人生……ね。言われると気付く……か。如月愛もそうだな。言われなきゃ一生捕らわれる。相手は恐怖心が生み出した亡霊だから……な」

暁は洋平の言わんとしたことを代弁した。
「明日、うまくいきゃあいいがな。呪われてなんかいないって、証明する気なんだろ？」
洋平は西を向いたまま言った。
「まずはコミュニケーションを取らないとな。俺のこと忘れてると思うからさ」
ある意味衝撃的な再会をした訳だけど……。
「そうだな。……よし！　そろそろ帰るか」
「ああ。緊張して眠れなそうだな……」
「ははは。まあ、頑張ろうぜ」
洋平は軽く笑い飛ばして懐中電灯の電気を付けた。
暁も懐中電灯を付けて丘を下る洋平を追った。
もう一度空を見上げた。さそり座のアンタレスがやけに際立つ。
俺がオリオン好きか何かなら死の予兆みたいだな、と呟きながら暁は夏の夜空をしっかりと目に焼き付けた。
決戦前夜は暑さの気にならない、爽やかな夜だった。

プラム・プディング（後書き）

今週は2話公開しましたが、これからは基本、毎週1話になるかと思います。
遅くなって申し訳ありませんでした。
これからもよろしくお願いします！

ｌｏｖｅ・ｋｉｌｌｅｒ（前書き）

作中で登場する「スマブラ」は任天堂制作の人気ゲーム「大乱闘スマッシュブラザーズ」シリーズのゲームキューブ版を基に、我々が勝手に登場させた『ｕｎｄｅｃｉｄｅｄ』の物語内の対戦ゲームとお考え下さいｗ

love・killer

-1-

正午前に部活を終えた如月は、家に帰らずそのままバイト先のコンビニへと向かった。

……今日は店長もいないし、アタシ一人だから、制服のまんまやっちゃおうかな。

コンビニに着くと、制服の上から自分で作ったお気に入りのエプロンを着て、鏡の前に立った。ポニーテールをツインテールに変え、たたでさえ短いスカートの丈を更に短くし、エプロンでスカートを隠した。正面から見ると、まるで下を何も履いていないかのように見える。如月は、そんな自分を鏡で見て、顔を赤らめて笑った。

……うふふ、アタシって、小悪魔なんだから♪♪

如月はレジに向かった。

「完璧だな……お前は今、紛うことなきイケメンだ」

洋平は、隣を歩く暁を見て言った。

暁の髪は真っ直ぐになり、トップは良い感じに立っていた。そして、暁の半径一メートル以内いる人間には、もれなく南国フルーティーの香りが届くよう、身体には洋平お気に入りの香水が振りかけられている。

暁は、今までにない感覚を味わっていた。確かに、以前よりは格好良くなっただろうが、暁はそれに過剰に反応していた。まるで、自分がとてつもないイケメンになったかのような……。

「よぉし、大丈夫だ。きっと上手くいく」

洋平の声が力強い。暁は唾を飲み込んだ。ゴクリという音を立てて……。

そろそろ、目的のコンビニが見えてきた。
「……ふう。着いたか……」
暁は、大して暑くもないのに喉の渇きを覚えた。恐らく、如月愛に話しかけるという、これから起こるであろうことへの緊張、あるいは恐怖感が原因であろう。暁は頬を叩いた。
「ふっ。気合い入ってるなぁ」
横を歩く洋平が笑った。
暁は敢えて、外から中の様子をうかがおうとしなかった。入ってからのお楽しみにしたいという念が強く働いたのだ。暁はドアに手をやった。「頑張れよう」という洋平の声を最後に、暁は店内へと足を踏み入れた。駐車場にいくつか車は止まっていたが、店内に客は暁一人だけであった。レジには誰もいなかった。
「……」
まさか、という懸念が暁の脳裏をよぎったそのとき――――
「いらっしゃいませー」
と言って、商品棚の影からひょこっと姿を現したのは、如月愛であった。
暁は、昨日の羞恥の事など綺麗さっぱり忘れ去り、しかし、心臓の音は耳に響いたが、声をかけた。
「あの――」
「あっ、外崎クン？」
……何っ。
どうやら、如月は暁の顔にかつての面影を見たようだ。イケメンっぽく加工された暁を、暁だと見抜いた。というか、昨日から気付いていたのではないだろうか――暁は困惑してしまった。言いたいことがあったのに、うまく思い出せない。
「久しぶりだね。いつの間に帰ってきてたんだ」
如月は、無表情にそう言ってのけた。
「あ……あ～～……えーと」
「？？」

……ああ、そうだ、思い出した。しかし、待てよ。落ち着け俺。俺は何をしにきたんだ？　えーと、確か、最終的な目標としては、この女を救うんだったな。いや、待て、よく考えろ。それって、この女が本当に苦しんでるかどうかってのがポイントだよな。なぁ、洋平。そうだろ？　え？　てかさ、これでもしこの女別に霊の事とか何とも思ってなかったら俺ただのばかだよな。そもそも今思ったけど、これって俺たちが進んで関わるような問題か？？　救いの手を差し伸べるだあ？　うぬぼれすぎじゃねぇのか？　もっと、身の程を知るべきなんじゃないのか？　彼女と俺に何の関係があるんだ、なぁ、これはただの身の程知らずのおせっかい的行為ではないのかぁ？？

暁は聞こうとしていたことを完全に忘れ、根本的な行為の意味について考え始めた。如月はみるみるうちに顔を曇らせていった。暁は焦った。さっきまでの自信はどこへ行ったのだろうか。我慢しきれなくなったのか、如月が口を開いた。

「どうかした？？」

……すまぬ。洋平。作戦は失敗だ。

「あ、ああ、久しぶり。ははは、何でもないよ。いや、声かけてみただけ」

暁はそう言って、無理な笑顔を作った。如月は更に表情を曇らせたが、すぐに表情を和らげ、「そっか」と言った。

関わったとは言っても、小学校のとき何度か話しただけ。それだけの関係だった。無論、仲がいいわけでもない……暁は「じゃーな」と言って背を向けた。そして、そのまま店を出た。

「よぉ！　おい！　上手くいったみたいだなぁ！　話はついたのか？」

洋平がニヤニヤしながら暁に近付いてきた。暁は、浮かない顔をして嘘をついた。興味がなくなった――などとは言いたくなかったのだ。せっかく自分をイケメンにしてくれた友人の前で……。

「なんか、気にしてなんかないってよ。全然、余裕だってさ。霊な

んか知るかッて感じだった」
「……え？」
「だからさ、俺たちの出る幕は無いみたいだわ。ま、そゆこと……家に戻ってゲームでもしようぜ？」
帰ろうとする暁の腕を、洋平がグッとつかんだ。その力強さに、暁は固い意志のようなものを感じた。
洋平はいつになく真剣な表情で、暁の顔を一瞥した。
「何があった？　お前らしくねぇ……まさか、冷たい待遇を受けたのかい？」
……そうじゃない。
「もういいよ、帰ろう」
「あんなに乗り気だったじゃねぇか、どうしたんだよ！？」
「……洋平。お前、わからねぇのか？？」
「は？？」
「ここまで協力してもらって言うのはなんだが、俺は今目が覚めた」
洋平は、何が何だかわからない、という風である。
「何が言いたい？」
「……如月がよ、どんな思いをしていようが、やはり俺には何の関係もないんだ。それに、告ったら死ぬんだろ？　そんな危険な女に恋愛感情など、もはや、ない」
そこまで言うと、暁は洋平の表情をうかがった。洋平は至って普通の表情をしていた。部屋に転がっている参考書を見るかのような目つきである。暁は、申し訳なさそうに顔をうつむけた。自分が勝手を言っていることは、重々承知の上である。
「わかったよ。そうゆうことか……つまりお前は、どうでもよくなったってことか。まぁいいぜ？？　元はと言えば、お前がアイツを救うとか言い出したのが始まりだもんな。興味がなくなったんなら、それでいいよ。確かに、よく考えれば、俺らが関与するような問題じゃねぇし……」
洋平はそう言って、ようやく腕を離した。そしてコンビニに背を

向け、スタスタと歩いていった。暁もそれについていった。
……俺らは関係ないんだ。何をヒーローごっこ紛いなことを……。
暁は呆れた表情で、とても、とても小さく笑った――――そのときだった。
「ねぇ、ちょっと！」
「……んん？」
「待って！！」
「おお？」
洋平が先に振り返り、次に暁が振り返った。
そこには、制服にエプロン姿の如月愛が立っていた。暁は目を丸くした。
如月は、暁の腹の辺りを指差し、こう言い放った。
「それ、アタシのだから、返して！！」
「……？？？？」
暁は戸惑った。下を見ても、どれも暁の装備品に他ならない……ベルト、ジーパン、Tシャツ、全部、暁が着てきたものだ。
「後ろ後ろ、ズボンのポケットよ！　ペンがあるでしょ」
暁は後ろのポケットに手をはわせた。すると、何かある。抜き取って顔の前に持っていく……シルバーの細いボールペンだった。こんなもの、入れた覚えはない。
「それ、アタシの。返して」
そう言って、ピッとボールペンを奪い取ると、如月は不振な表情で暁と洋平を交互に眺め始めた。暁は尋ねた。
「そのペン、なに？」
如月は考え込むようなフリをしたあと、すぐに表情をほころばせ、先ほどのペンを顔の前にやって、こう答えた。
「これはペン型盗聴器……あんたたちのさっきの会話、ぜーんぶ聞かせてもらったわ？」
「……な」
「色々と面白いことを言っていたわね。幽霊がどうの、告白したら

死ぬだの、アタシを救うだのなんだのって……」
……驚いた。全部、盗聴されている。
「外崎クン、アタシのこと好きなの？　うふふ、ごめんなさいね。アタシはあなたに興味ないわ……ところで、あんたたち何？　あら、坂本クンまで！　おひさ」
「あ……久しぶり」
暁は率直に思った。この娘、こんなよく喋る娘だったのか？
「あんたたち、何を企んでたわけ？　教えて」
洋平が暁の横に歩み出た。
「俺たちは、君が霊に呪われているんじゃないかと思って直接話をしにきた」
「……霊？」
「君に告白した人間は四日後に死んだ……交通事故で」
「……」
「しかし、よく考えたら、関係はない。君は呪われてはいない。偶然にすぎないんだ」
「……アハッ」
「……！？」
如月は、口元に手をやり、笑い出した。笑う意味がわからない。
暁と洋平は、如月が被害妄想に苦しんでいるのではと疑っていたが、先ほどからの言動で、それが違うということが証明されている。彼女は、予想以上に明るいようである。
「何で笑ってんだよ」
暁が聞いた。
……何か、俺たちは大きなミスを犯している。暁にはそう思えてならなかった。
「アハッ……面白い、だって、ここまでうまく騙されてるなんてね、笑っちゃうわよ」
「だ……ま……？？」
「あんたたちもみんなと一緒。大馬鹿……てゆーか、何で今頃そん

な話題出すのよ。まぁいいけど、とにかく、まんまと騙されてるわよ、アハハハハ」

洋平は眉間にシワを寄せて、更に一歩前に出た。

「何だ……何が言いたい？」

如月は笑顔のまま答える。

「幽霊話も、あのテディベア好きの少女の話も、まるで単なる作り話。久しぶりに笑えたから教えてあげる……アタシが全部仕組んだのよ、何もかも」

……何を言っているんだ、この女は……理解できない！

「アタシ、告白してくる男ッて、嫌いなの。大ッ嫌いよ……『愛』のアの字も知らねーヒヨッコが、舐めた真似してくれるのよね……覚悟もないくせにさ」

「何なんだ？」

「全て、うまい辻褄合わせのためなのよ？　ふふ……」

「はっきり言え」

洋平が迫った。如月の顔から笑みが消えた。そして、無表情に彼女は言い放った……。

「アタシがあの二人を、殺したのよ」

- 2 -

洋平の部屋には、奇妙な雰囲気が漂っていた。つい先ほどの会話を、真摯に受け止められない。一見して、荒唐無稽だと思われる如月の話は、一概には嘘だとは断定できなかった。

テディベア好きも、少女の話も、全て、如月が呪われていると思わせるために彼女が流したデマであった……と、いきなり言われても、容易には信じられないのだった。

洋平は麦茶が入ったコップを横から眺めながら言った。

「もしも、如月の言うことが真実なら、如月を救う必要などない…

…」

そんなことは、二人にとっては今更どうでもいいことだった。しかし、敢えて洋平はそれを確認したのだ。彼にも、他意はなかった。暁が口を開く。

「考えるべきは、如月の言うことが本当か嘘かだ」

二人は、先ほどの如月との会話を思い出していた……――――

『……殺したって、お前が？』

暁は、半信半疑で尋ねた。この女が醸し出す異様な雰囲気……嘘を言ってるようには思えないが……。

『そう、アタシが殺ったの』

『……』

『嘘はついてないわ。うふふ、でも、信じられないわよね？　信じなくていいわよ。だって、こんなの、どうだっていい話……』

『なぁおい』

暁は携帯電話を取り出した。

『殺したのなら、君は殺人犯ってことだろ？　警察に言ったのか？』

如月はまた笑い出した。

『アハッ……何言ってんの？　そんなことしたら、アタシ捕まっちゃうじゃない？？』

『落ち着けよ……殺しただと？　嘘臭ぇにもほどがあるな。ウケ狙いか？』

洋平が威勢良く言い放った。

『そんなことアタシに聞いてどうするの？　アタシが何を喋ろうが、証拠なんかどこにも無いんだから、ただの絵空事にしかならない……この会話自体がさ……違う？』

如月は、面白そうなものを見る目つきで暁と洋平を見つめながら言った。暁は、それでも聞いた。

『それでもいい。嘘かホントかもどうでもいい。あの二人ッて、君

に告って死んだ二人のことだろ？　死因は交通事故だ。君が交通事故に見せかけて殺したッてのか？』

暁は一気にまくし立てた。如月は会話に飽きたのか、その場で携帯をいじりながら答えた。

『そーそ。交通事故に見せかけた、ただの殺人。朝飯前よ、警察の目をかいくぐることなんて』

如月は、携帯画面に夢中、といった風だ。洋平も暁も、何も言えなかった。如月の頭がおかしいとしか考えられなかったのだ。如月は、そんな二人の視線に気付いたのか、顔を上げ弁解しだした。

『ちょっと！　何その目？　頭おかしいと思ってんでしょ。やーね、もう……アタシはまともだから！　本当にアタシが殺ッたの！』

笑顔でそんなことを言ってくる。

『証拠は？』

という洋平の言葉に、またも如月は吹いた。

『だーかーら！　そんなの存在するわけないでしょーが？　坂本クン、自分の存在証明できる？　無理でしょ、自分の存在すら証明できないくせに、他のことに……』

『どう殺したんだ！？』

暁が如月をさえぎった。如月はジッと暁を睨んだあと、こう答えた。

『……それは言えない』

『……何故？』

『暁、もういい。帰ろう、帰ってスマブラでも……』

呆れた表情の洋平を、暁は腕だけで制した。暁は、真剣な表情で如月の返答を待った。

『話してくれ、君が苦しんでいるなら、救いたい』

そんなことを真剣に言う自分を客観視すると恥ずかしくなってくるが、今の暁には関係のないことだった。如月は、ニヤニヤするのを止め、至って平凡な表情で暁を見つめていた。そして、彼女は口

を開いた。
『何も苦しんでないから。バイバイ。アタシバイトだし』
そう言って、彼女は行ってしまった。……少なくとも、彼女は苦しんでいるようには見えなかった。むしろ、人生を満喫しているような、そんな愉快さすら感じとれた。だから、自分たちが出る幕なんてない。もう、おとなしく引き下がるしか……。
『あの、待って！！』
『……え？』
コンビニのドアに手をかけたちょうどそのとき、背後から声がした。如月は、ムスッとした表情で振り返った。
『なんかよう？』
目の前には、にやけた暁が立っていた。携帯を差し出し、こんなことを言った。
『メアド教えてくれない？』
『……』
『いや、なんつうか、もっと君と話してみたくて』
『……』
『だ……ダメ？』
如月は、ほんのちょっぴり顔を赤らめ、まんざらでもなさそうに携帯を取り出した。
二人は赤外線でプロフィールを交換し終え、普通に別れた。その様子を見て洋平が、『おいおい』などと言っていたが、結果的には作戦は成功したのだ。まずは、コンタクトを取ること、それは成功した。
それから口数も少なく、暁と洋平は帰路についたのだった。

「どうなんだろう」
暁が漏らした。
「何が？？」

と洋平が。
暁はスマブラの用意をしながら、
「決まってんだろ。彼女の話が本当か嘘かだよ」
と言った。
洋平は、もう麦茶を三杯も飲んでいた。そんな洋平を見て、暁が「飲みすぎだぞ」と注意した。しかし、それでも洋平は、四杯目を注ぎ足した。
「どうかしたのか？」
ゲームキューブの電源を押しながら、暁が心配した。洋平はすぐに飲み干し、五杯目を飲みにかかった。
「おい？」
洋平の様子がおかしい。おちゃらけたオープニングムービーが流れる中、暁は洋平の異常を察知した。息遣いが荒く、彼の両目は赤く充血していた。その目は、先ほどから一点に集中されていた……何を見ているのだ？
暁は洋平の視線の先を見やった。そこには……窓があった。晴れやかな空を映している。
「おい、どうした」
洋平は、六杯目を飲み干すと、ようやく窓から目を離し、暁と目を合わせた。そして、洋平は震える声で言ったのだ。
「やべえ……見ちまった」
「……見た？　何を」
「白い服の女だよ……！！　俺、呪われてんのかな？」
「え？　窓に？」
「ああ」
暁は窓に近付いた。洋平がブツブツとこんなことを言う。
「……じーっとうかがっていやがった……そこから……あぁ……」
暁は窓を開けて確かめたが、白い服を着た女など、当然いなかった。何故ならここは、二階だからだ。

「……」

暁は学習机に寄りかかり、肩の力を抜いた。色々と整理したいことがあった。一方、洋平は「ううう」とうなりながら、頭を掻いている。どうやら、幻覚の女に怯えてるようだ。暁はしばらく考え込んだあと、スマブラをやりだした。それにつられ、洋平もうなりながらコントローラーを手にした。九時になった辺りで、二人はようやく満身創痍、コントローラーを手放した。ゲームのやりすぎで妙なテンションになっていることに暁はまったく気にも掛けなかった。窓からは綺麗な夜空が見えた。洋平はテレビの前で倒れ込み、ピクリとも動かない。暁は如月にメールをした。

「……きさ……ら……ぎぃ」

暁は黄昏た。脳内麻薬の分泌量がハンパではなかった。まるでドラッグを使用したかのごとく脳内は異常をきたしていた。暁はまどろみ状態の中、メールの受信音を聞いた。

如月がメールを返してきたらしい。

明日は無理
今から朝方にかけてなら
暇だけど
十時までに今日の
コンビニに来て

暁はこの文字列を見て、騒いだ。「イエイ、ヨオ」と、何度も繰り返した。しかし、どうにも足取りが覚束ない。それに少し頭痛もした。暁は踊るのを止め、ベッドにドスンと腰を下ろした。脳内麻薬のせいで、正常な思考判断ができなくなっていた。気付けば、ボ～ッとしていた。何気なく時計に目をやると……しまった。もうこんな時間かよ!!

暁は急いで身支度をし、一足先に眠りについた洋平を部屋に残し、坂本宅を出た。外は真っ暗だった。暁は走った。

十時十五分――――暁は息を切らしてコンビニに着いた。駐車場には、如月が待っていた。
「十五分遅刻」
「ご、ゴメン」
「いいわ。じゃあ来て」
如月は歩き出した。暁が後ろから声をかける。
「ま、待て！！　どこ行くの？」
如月は振り返り、事も無げに
「ん、アタシんち」
と言った。よく見るとツインテールがポニーテールになっている。
「こんな外で話すのヤダから。外崎クンちもヤダから、うち」
「……」
こんな夜遅くに、大した親交もない若い男を家に上がらせる娘がいるだろうか？　それとも、何か企んでいるのか――
「心配しなくていいよ」
「……え？」
「アタシ……強いから、外崎クンが変な気を起こしても、全然余裕だから」
「……変な気？」
「アタシみたいな可愛い娘と部屋で二人きりになったら、大抵の男は我慢できなくなっちゃうでしょ？　でもアタシ強いから……結構武闘派なの」
「……はぁ」
「まぁいいわ。ところで話ってなに？」
さっきから、一度も後ろを見ずに如月は喋っている。後ろを歩く暁には、彼女がどんな表情でいるかわからない。
「電話すればいいものを、わざわざ会ってまでしなきゃいけない話って……なに？」

含みのある聞き方だった。
暁は思い切って尋ねた。
「君が何者か知りたい」
「……」
前を歩く如月は、振り返らない。暁は続けた。
「ただのほら吹きか……」
「……」
「謎のベールに包まれた女なのか……」
如月が立ち止まった。しかし、振り返らない。暁も立ち止まる。
暁は如月が喋り出すのを待っていたが、一向に喋る気配がないので、自分が口を開くことにした。
「君が……ただのほら吹きなら、そう言ってくれよ。もしそうなら、もう興味はない。だが、違うなら……」
「知りたい？　アタシの実態」
「！」
如月が僅かに首をひねらせた。首のラインが際立って美しい。
真っ暗な歩道……さっきから、車は一台も通らない。不気味な静けさが辺りを包んだ。
「……俺はただ、知りたいだけ……お前からは……今までとは違うモノを感じる」
暁は、ありのままの感想を述べた。何故、この女に惹かれたのか、どうしてなのか。それがわかったとき、暁の脳内にある言葉が浮かび上がった……今、目の前にいる女、昔から秘めた魅力を持っていた女……初めて会ったときに得たインスピレーション……この女は！
「一体……お前……！」
「ふふふふ」
「！？」
如月は、ゆっくりと振り返った。暗くて表情は見えないが、笑っているのはわかった。如月は、一歩、暁に近付いた。コツ――と音

がした。
「アタシが何者か……面白いわね、外崎クン、感じちゃうなんて」
「……」
「アタシは……――――」
暁の額に、黒光りする銃口が突き立てられた。
「なっ!?」
「アタシは、殺し屋なの」
カチ――という音を、暁は聞いた。

- 3 -

「ちょ……」
「サヨウナラ、外崎クン」
「ちょ、まっ……!!!!」
――ガァアン!!
暁は倒れた。如月は暁に向けて、発砲した。しかし、それは――
「何寝っ転がってんの？　空砲よ」
「……え」
暁は額の辺りに指をはわせた。穴は開いていなかった。無論、出血もない。生きている。
暁は、自分が助かったことを知ると、ふぅーと安堵の息を漏らした……が、すぐにパニックに陥った。暁は手足をばたつかせ、なるべく如月から離れようと体を動かした。動悸も激しく、逃げること以外に脳は思考しない――暁の『生』への欲求が大胆に露出された瞬間だった。何か言おうとしたが、言葉にならない。
「わっい……ぅあぁ!!」
「なあにぃ？　何て言ってるのかしらぁ？　あははっ」
如月は銃を暁に向けて、ヘラヘラと笑っていた。如月は暁との距離を一気に詰め、暁の上に馬乗りになり、暁の口の中に銃を突き刺

した。
「ああ……あああ！！」
「アハハハハハ」
「ああアあああッ！！」
「可愛いそうな外崎クン……もう逃げられない」
「あえぉーーッあぇおッ」
「ん？　やめろって言ってるの？　わかったやめるわ」
如月は暁の口から銃を抜き出し、立ち上がった。暁は、それと同時にバッと立ち上がり、息を切らして如月を睨んだ。それが精一杯の威嚇だった。如月は銃を腰にしまい、そのまま暁に背を向け歩いていってしまった。暁はその場にへたれ込み、息を整えた。
……落ち着いて考えるんだ。今、俺がすべきことは……。
しかし、先ほど殺人の被害者になり損ねたのがショックで、考えようにも脳がうまく作動しない。断片的な映像が、脳内で展開されては、思考は途切れた。
「ハァ……ハァ……」
暁は立ち上がった。見ると、如月が小さく見えた。車がライトをビカビカ光らせ、暁の横を通り過ぎた。
……あの銃、ホンモノか！？
遠くから、如月の声が小さく聞こえてきた。
「……おーい、うちこないのー？？……」
……行けるか！！　あんなことされてッ！！
如月が遠くで手を振っているのが見えた。暁は決断しなくてはいけない。これから闇の世界に足を踏み入れるのか、戻って洋平とゲームキューブで遊ぶのか。だが、既に暁の答えは決まっていた。
「てめぇこのッ如月ッまちやがれコノッ」
暁は再び走った。如月の元へ――……。

「ここがうち」

あれから結構な距離を歩きたどり着いたのは、人気のない場所にたたずむひっそりとした一軒家であった。これといって特徴のない、二階建ての普通の家。もうすぐ夜の十一時になるというときに、ＪＫの住む家へ上がるのは初めてであった。暁はそれなりの緊張を覚えた。

家の中は真っ暗だった。どこにも電気が付いていないかのような、そんな感じがした。

暁は尋ねた。

「親は？」

如月は暗闇の中階段を上っていった。

「今仕事で海外だから、アタシ一人だよ」

海外で仕事をするとは、きっとそこそこの職には就いているんだろう。

「Ｍａｒｔｉｎ　Ｍａｘ（マーチン・マックス）だっけな？」

「ん？」

「父さんのターゲット」

なるほど、そういうことか。そこそこどころじゃねぇな。親子揃って殺し屋か。

「き、如月」

「何？」

「教えてくれ。俺はどうなる」

階段を上り終えると、長い廊下に出た。両側にいくつものドアがあるのを、薄暗い中確認できた。その中でも一番奥、廊下の突き当たりの部屋が父の部屋であると如月は教えた。如月の部屋は父の部屋に向かって左側の奥から三番目のドアの向こうにあった。ドアが開かれると、溢れんばかりの光が漏れた。初めから点いていたのだろうか。

入ると、そこはさっきまでとは打って変わっての別世界――――滅茶苦茶ファンシーな、女の子ッて感じの部屋だった。壁紙が薄いピンク色である。暁は意味もなくドキドキした。

「何そわそわしてんの？　やめときなさい。死ぬわよ」
ただ突っ立っていただけなのに死ぬとは、タダ事ではない。暁は更にそわそわし出した。
「――あ、そーだ、確かこの辺にぃ～！！」
「……ん？」
如月は、様々なモノとモノで形成されたゴチャゴチャの層の中をあさり始めた。とゆうか、今気付いた……この部屋は、多少いや、かなり、汚い。この女、典型的なモノが片付けられない女なのか？
辺りを見回していると、本やらＣＤやら、丸められたゴミクズやら、様々なモノが散乱している。よく見れば足場などほどんど、いや、ない。気付けばもう、何かを壊した音が足下から聞こえてくるではないか……。しかし、それにしても、部屋が汚い割りには、清潔な香りがする部屋だった。
暁は笑った。どんな恐ろしい兵器の立ち並ぶ部屋かと思いきや、よく有りがちな（あまりないが）ただの汚い部屋であった。暁は、不意に母の言っていたことを思い出した。「部屋が汚い女の子とは結婚しちゃだめだからね」……この女とは、部屋が汚いとかゆう以前の問題で無いと思うが……。
そんなどうでもいいことを考えていると、ふとある物に目がいった。それは『殺人術』と書かれた本の上に寝そべっていた。黒光りするそれは、先ほど口の中に入れられたモノと同じモノだった。そう、ピストルだ。暁は、何かを探す如月に目をやった。
……この女、マジで……。
バキキ
しまった。カセットを踏んで壊してしまった。暁は焦り、もう一度如月の方を見た。まだ、しゃがみ込んで何かを探している。今のうちにどこか安全な……あった！　あそこなら安全だッ！！
暁は、部屋に唯一置かれた三脚椅子に向かって恐る恐る歩を進めていった。背後で「あれーどこー？」という声が聞こえた――そのときだった。何かが足に絡まり、暁は大きな破壊音を響かせ、大転

倒した。彼女に殺されないことを祈りながら、暁は自分の足に絡まったモノに対し、怒りの感情を露わにした。そんなことをしても意味はない。しかし、他に怒る対象はない――――暁は足に絡みついたモノを手でつかみ、顔の前にぶら下げた。……布？　いや……これは！　暁は上半身だけ起こし、それの端と端を指でつまんで顔の前に展開した。

……おう、まい、ゴッド。

それは、ピンクと白のシマシマの、可愛げのある小さな赤いリボンが正面に装飾された、そう、如月のパンティだった。

「どうしたの？」

と如月は振り返り、パンティを眺める暁を見た。暁は如月の視線に気付き、そのパンツを放り投げた――そのとき、既に暁は死を覚悟していたが、このあと更なる悲劇に襲われるとは……。悲しいことに、放り投げられた如月のパンツは、暁の頭上を舞い、重力によって下降した――暁の頭部目掛け！

「なんてプレイしてんのよ！」

と言って、如月のパンツを頭から被った暁に、如月はサッカーボールを投げ飛ばし裁きの鉄槌を下した。「ままま待て誤解だばぁ」と言って、暁は顔面に飛んできたサッカーボールを食い込ませ、その場に倒れた。「しかもそれ今日アタシがさっきまで履いてたやつ！」という恥ずかしそうな声と共に暁の元に届いたのは、宙を舞う二冊の百科辞典だった――このままでは致命傷を負うだろうことを理解した暁はまず頭に装着された如月曰わく今日さっきまで履いてたやつを乱暴にむしり取り、顔面をボクサーみたいにガードした。そのお陰で、腕に多少のダメージは負ったものの、顔面へのダメージは避けることができた。暁は敢えて何も喋らず、気絶しているように見せかける作戦に出た。それが最も安全だと思ったからだ。

しばらく倒れたままでいると、暁の視界に如月の顔が映った。――次は何だ！？　と身構えたとき、暁の顔の前にペットボトルが差し出された。

「はいこれ、飲めば？」
　如月のその笑顔からは、危険は感じなかったため、暁は上半身を起こしてペットボトルを受け取った。
「……まさか、さっきから探してたの、コレ？」
「うん！　この前買ったやつ、それおいしいよ！　飲んでみて」
　暁は見たことないラベルに多少の不安を感じながらも、中の透明の液体を飲んだ。
「……あ、うめえ」
「でしょ？」
　如月は立ち上がり、歩く度にバキバキという破壊音を立てながら、ベッドに向かっていった。そういえば、昼間は制服だったが、今は私服である。私服もなかなかおしゃれだ。膝下までのジーンズに、可愛いロゴ入りの半袖Tシャツ。暁は如月に見とれた。やはり、可愛い。
　……こんな娘が、殺し屋だなんて。
　しかし、暁にとっては、それで良かった。暁はこのつまらない毎日から抜け出したいといつも思っていた。何か特別な、他と違う体験をしたかった。それを叶えてくれそうな人間が、目の前にいる。
「……アタシってさ、こんなんだから、友達いないんだよね」
　如月は浮かない顔をしてそんなことを言った。暁は敢えて反応しなかった。
「ううん、ウソ。ホントはいるけどね、でも、なんてゆーか、形だけの友達ってゆーかさ、親友ってゆうの？　そういう人、いないんだよね」
　暁はジュースを飲んだ。わざとらしく。
「でもしょうがないよね。だってアタシは……殺し屋の娘。アタシ自身も殺し屋……アタシのこと理解してくれる人なんて、いないの」
　暁は聞いた。別に興味があったわけではない。相槌代わりである。
「親は？　お父さんも……」
「じゃあ、外崎クンは親の愛情だけで満足できる？」

「……」
「母さんはもういないし……兄さんももういないし……」
暁は、まるで別世界の話を聞かされているような気分だった。母も兄も死んだというのか。暁は如月を気の毒に思った。
「だけどね、父さんからね、殺し屋はそういうもんだって教わってきた……だから、今更……」
如月が悲しい表情を見せた。暁は言葉に窮した。
「アタシからすれば、そっちの世界が特別……わかる？　ねぇ……」
「……わ……かる……よ」
如月は立ち上がり、落ちていた銃を拾った。それを暁に向けて言った。
「はあ？　おいっ！」
「外崎クン……あなたなら、仲良くなれるかも……でもね、母さんも兄さんも、それで死んだ」
「ハァ！？　待て待て！！」
「本当はあのとき……弾が入ってるかどうかなんて確認しなかったの。入ってたら入ってたでいいと思ってた……」
暁はもう、何も言うことができなかった。
「アタシが告白してきた人間を殺してきた理由わかった？　まさに今とおんなじ……」
暁は必死に説得しようとした。
「待て……違うぞ。人を愛するのに、理由なんかいらないんだ！！　好きになっていいんだ！！　何もかも……これで本当にサヨウナラ……弾は入ってる」
「待てッ」
「アタシに人を好きにさせないで！！！！」
――――――……パァン――！！！！

- 4 -

時計の針は、十一時四十五分を差していた。寝起きの頭を抱えて、洋平は出しっぱなしだった麦茶をコップに注ぎ、喉を潤した……もう一度時計に目をやる。外の暗さから考えて、夜であることは間違いない。洋平は、暁がいないことに関して、さほど疑問に思わなかった。どうせトイレにでも行っているんだろうくらいにしか、考えていなかった。

そういえば、と洋平はあることを思い出した。今日の夜は、両親が法事関係で家にいないのである。つまり、この家には今二人の人間しかいないということ……洋平はそう思うと、かえって息苦しくなった。家全体が静止しているかのように、そこは静かだった。空気が重く、湿っていた。

「……」

……暁はどうしたんだ？

洋平は妙な胸騒ぎを覚えながらも、部屋のドアを開け、廊下の突き当たりにあるトイレを見た。トイレのドアはほんの少しだけ開いていた。人が入っていれば、隙間から光が漏れてもいいはずだが、そこには暗闇しか存在しなかった。

「お～い！　暁！」

洋平は無理に大きな声を出した。暁がこの家のどこにもいないことは薄々感じ取れていた……だがそれを事実として認めてしまえば、同時にもう一つの不気味な存在を認めることになってしまう。洋平はさっきよりも更に大きな声で暁の名を呼んだが、無論、返答はない。洋平は部屋のドアを閉めた。クーラーは寝る前から点いていたはずだが、今は止まっている……暁がけしたのだろうか？

ガタン

と階下で音がした。洋平はビクッと身体を浮かせ、部屋のドアの

方を見た。自分以外の誰かが息衝く音が、どこからともなく聞こえてきた。洋平は唾を飲み込み、耳を更に澄ました。確かに聞こえてくる、人間では決して有り得ない、息遣い。

洋平は、数ヶ月前と同じ冷気を右の頬辺りに感じた。その瞬間、全身に鳥肌が立ち、洋平は息をするのも忘れてソレの存在を認めた。

……オーケイ。来るなら来い。

洋平は深呼吸をしてから、三六〇度部屋を見回した。階下での音が激しさを増したが、お構いなしに携帯を探した。それが命綱だった。

徐々に音は近付いてきた。それと同時に、低いうなり声が抑揚を利かせて響いてきた。洋平は携帯を見つけると、すぐに暁の番号をプッシュした。

バタン

と部屋のドアが開かれた。誰もいない。しかし、奴がすぐ近くにいるのはわかった。暁の番号をプッシュし終えたそのときだった……部屋の電気が消えてしまった。そして、音という音が全くしなくなり、聞こえるのは、携帯のコールだけだ。洋平は、窓際に行き、夜空を見渡した。他に明るいものがなかったからだ。しかし、背後で「ふふふ」という笑い声を聞いたとき、洋平の思考は一点に絞られた。

……如何にして、恐怖を捨て去り、奴と対峙するか。

洋平は、数ヶ月前に自分がやったことを思い出しながら、振り返った。案の定、暗くて何も見えなかったが、関係なかった。奴が触れてきたら、腕をつかみ、また殴り飛ばすつもりだった。十回コールしても暁が出ないため、洋平は電話を切って携帯を投げ捨てた。

……ほら、こいよ、決着つけにきたんだろ？

洋平は、闇の中を蠢く白い影を、その目でかすかに捉えていた……。

暁の頬から、薄くナイフで切ったかのように、血が流れ出た。発砲音を間近で聴いたため、耳の中でキィーンという音がする……。暁は、ただただ、真摯な眼差しで如月の目を見つめていた。彼女は、発砲する直前、わざと銃口をズラした。暁に当たらないように……。

如月は泣きそうな表情でその場にへたり込み「ううう」と声を漏らした。

暁は理解していた。彼女に自分がかけてやれる言葉などないということを。如月は小さな声で「ゴメンサナイ」と繰り返している。その手には、暁に向けて放たれた銃が握られていた。暁は立ち上がり、時計を探した。しかし、この部屋には、残念なことに時計はないようだった。暁はポケットから携帯を取り出し、時間を確認するため、画面を開いた。

「……着信？　洋平？」

何故か、洋平という文字を見たとき、暁は妙な胸騒ぎを覚えた。彼の身に何か良くないことが起こった……予感がした。

「あの、如月」

「ぅ……う……う」

如月は顔を伏せて泣いていた。暁はしかし、行かなくてはならない。嫌な予感がする。

「如月……俺、もう行くわ」

「……うう」

「じゃあな……」

暁は部屋のドアに手をかけたが、そこからしばらく動かなかった。如月を見ては手に力を込めようとし、ためらう。それを三回くらい繰り返して、ようやく決心がついた。

暁はドアノブから手を離し、如月の元に歩み寄った。そしてしゃがむ。

「……如月」

「……何？」

如月は顔を伏せたまま返答した。
「頼みがある……」
「……何？」
「一緒に来てくれないか」
「……え？」
「嫌な予感がするんだ……洋平に何かあったかのような」
それから三十秒間程の沈黙があったが、遂に如月は顔を上げて言った。
「わかった。行くよ」
暁は笑顔で礼を言い、立ち上がった。
「行こう」
「うん」
二人は家を出た。

洋平の家に着いたとき、既にそこはもぬけの殻だった。
「クッソ！　やはりか！　遅かった……」
暁は床に投げ捨てられた洋平の携帯を見て、怒りを感じた。洋平のコールにどうして気付かなかったのか、今更悔いても仕方がないが、他にどうしようもない。こんな時間に、しかも家に携帯を置いてどこかに出掛けるわけがない。考えられるのは……。
「ねぇ……鍵も開きっぱなしだし、家中どこにもいないし……これッて、誘拐？」
そう言ったのは、不安げな表情を見せる如月だった。
「……嫌な予感がしたんだ」
暁は、座り込みながら独り言のようにそう言った。
「警察呼ばないの？」
と如月が。
暁は言った。
「いや……目星は付いてる」

暁は立ち上がった。
「何なの？」
「こっちだ」
暁と如月は家を出て、駐車場にある洋平の自転車を車道に出した。
「あ！鍵がかかってやがる」
すると、如月はナイフを取り出して、鍵穴にそれを突っ込んだ。
暗くて良く見えないが、ガチャガチャという音は聞こえてくる。三十秒もしないで鍵は外れた。
「サンキュー如月！　後ろ乗れ！」
「え？」
「早く！」
言われるままに如月は後ろに乗った。暁には、暗くて如月の表情は見えないが、彼女が恥ずかしそうにしているのがわかった。恐らく、こんな体験初めてなのだろう。男と自転車を二人乗りするなんて……だが、それは暁にも言えることだった。女子を後ろに乗せて走るのは、これが人生初なのだ。
暁は一気に自転車を飛ばした。夜中であるため、車もほとんど通らない。風が二人の髪を巻き上げた。如月は、振り落とされないように、しっかりと暁の両肩をつかんでいた。暁は夢中で自転車を漕いだ。目的地は……
「ねえ！　どこ向かってるの？」
「廃ビルだ！」
「……ねぇ」
「ああ？」
「もしさ、もしアタシが殺し屋でもなんでもない、単なる妄想おバカ女だったら、アタシについてこなかった？」
暁は少し考えた。でもすぐに答えた。
「多分なぁ！」
「……ふーん」
「どうして！？」

如月は少し考えた。しかしすぐに返答した。
「別にぃ～～！！」
「……あーそうかよ！」
次の突き当たりを曲がると、廃ビルが見えてくる。
暁は一応聞いた。
「なぁ！！」
「んん？」
「如月ッてさぁ！　どんくらい強いわけ？」
これから如月に戦ってもらう相手は、よもやすれば幽霊なのだ。
弱かったら困る。
「んー……。父さんはどこに出しても恥ずかしくない一流なんだけど……アタシも今まで何度も仕事こなしてきたし、かなり強い方だと思うけど」
最後の方は、声が少し小さかった。暁はだんだんと不安になってきた……。
「不良三十人くらいなら、素手でも勝てるわ」
とても心強い言葉だ。暁は安堵した。
気付けば、もう廃ビルの前まで来ていた。如月が叫んだ。
「あっ！　上！」
「え……」
屋上には、白い服を着た何かがぼんやりと見えた……アレが洋平の言っていた霊か。
暁と如月は自転車を降りると、すぐに中へと入った。暁は入ったことがないため、階段がどこかすらわからない。そもそも、周りは三六〇度暗闇なのだ。
「こっち！」
「――――え」
暁の手を如月がつかんで走り出した。ＪＫと手を繋いだのも、人生初である。
「何度か肝試しに来たから」

そう言って、更に如月はスピードを上げた。それにしても、こんな恐ろしい所にたったひとりで入り込み、花火まで上げた洋平は最強だな……と感心していると、あっという間に屋上に出る扉の前に着いた。背後から低いうなり声が響く――如月が扉を開けた。

ビュウー……――――

と強い風が吹いていた。如月は「スカート履いて来なくて良かった」などと漏らしながら、辺りを見回している。良く見れば、中心に誰か倒れているではないか。

――――あれは！

「洋平！」

暁が走った。風が強い。昔、誰かに聞いた。霊が出る前は、風が強いと……。

「洋平！」

洋平は、肩を揺すっても目を覚まさない。呼吸もしていれば、ちゃんと心臓も動いていた。

「どう？」

如月が心配そうに聞いた。

「どうやら……気絶してるみたいだ」

「ふふふふふふ」

「！？？？？」

暁と如月は一斉に振り返った。一人……そこには白い服を着た女が立っていた。

……なんなんだ？　コイツは！！

「ふふふふふふ……ふ」

強風が吹く中、女は、一歩一歩、こちらに近付いてきた。如月はナイフを取り出し、女に向かっていった。

「き、如月ッ」

如月と女は相対した。

如月は口の端をほんの少し釣り上げて、ナイフを構え――――一言。

「容赦しないわよ」
如月が動いた――！！

ｌｏｖｅ・ｋｉｌｌｅｒ（後書き）

この小説『ｕｎｄｅｃｉｄｅｄ』の作者、僕（ｒａｋｉ）と竜司は中学時代の友人同士なのですが、高校生になった今でも、時々僕のウチに集まります。
そこで、よくゲームをするのですが、いつもは勉強なんかで忙しい僕らがたまにゲームなんてやるものですから、１時間を越えた辺りで、妙なテンションになるんですよね（笑）
この小説は、打ち合わせなしでリレーをする形式なので、僕らにしか判らないある種のネタが練りこまれていたりするんです。
今回の作中で暁と洋平がまるで狂ったようにゲームをやっているのはそんな背景があったり・・・。
今回の話がメールで送られて来た時は、あの妙なテンションをうまく再現しているな、と事情を知っている僕は密かに楽しんでいましたｗ

赤色の願い（前書き）

田舎編もいよいよクライマックスです。
どうにか、読んでいただける方に、楽しんでもらえることを祈りますw

赤色の願い

- 1 -

如月愛は暁が予想していた以上の身体能力を持っていた。三歩で白い服の女の付近まで接近し、四歩目で右足を踏み切り左の拳で女の右腹部に強烈な一撃を加え、そのまま時計回りに回転し首をナイフで斬りつけた。ここまでの動きでまだ二秒も経っていない。

「やった……か？」

暁は如月の攻撃に驚くとともに安堵した。勝負がついたように見えたからだ。だが、相手は人間ではないのだ。考えが甘かった。

女は物理的に避けられない反動さえも受け付けず、傷を負うことも無かったのだ。

「う、うそ！？　感覚はあったのに」

如月はバックステップと同時に驚嘆の言葉を吐いた。

暁は一歩も動けず、ただ如月が戦うのを見ているしかなかった。

女は如月の攻撃を受けた後ほとんど動かなかったが、不気味な笑い声とともにゆっくりと左右に揺れ出した。

「な、何！？」

すると、女は目にも止まらぬ速さで弧を描くように移動し、如月の背後に回り込んだ。

「消え……」

「如月！　後ろだ！」

「！！！！」

一瞬女の姿を見失った如月は、暁の言葉を聞くやいなや振り返り、ナイフを構えたが、女は既に青白い腕を如月に向かって伸ばしていた。

「きゃっ……」

如月は小さく悲鳴を上げた。
女の両腕は如月の首を強く締めつけた。
如月は両腕両脚をじたばたさせ、抵抗したが、またしても女は石像のごとく動かない。
如月は苦しみの表情を顕わにし、遂に右手のナイフを取り落とした。
ナイフが地に落ちる音で、暁は我に返った。
「如月!!　クソ……!!」
暁はすぐに女の背後に接近した。
「外崎ク……ン、来ちゃダメ。逃げ……て」
女に首を締めつけられながらも、如月は暁を逃がそうとしていた。
「バカヤロっ!!　出来るか、そんなこと!!」
暁が叫んだ瞬間、突如として女は悲痛の表情を浮かべ、締めつけていた両手の力を弱めた。
「!!!!」
如月はその隙を逃さなかった。女の両腕を掴み、両脚で思い切り女を弾き飛ばした。
「如月!　無事か?」
「うん。でも、何で急に攻撃が効くようになったんだろ?」
「……解らない。それより、一旦退却だ」
「う、うん」
二人は白い服の女がこちらの動きに気付く前に屋上から退いた。

十階プラス屋上の設計であるこの廃ビルであるが、潰れる前は会社か事務所の類いであったのだろう。机や棚が各部屋に無造作に放置されている。また、小部屋で細かく仕切られているのも特徴的である。いつかのカルト宗教のアジトを彷彿とさせる造りである。
二人は七階のオフィスルームの机の陰に隠れていた。
「坂本クン、置いてきて大丈夫だった?」

如月は左手を口に当てて言った。
「時間なかったしな。気絶してる内は安心して大丈夫だろう。……しかし、あの化物をどうやって倒すんだ？」
無論、目を覚まして攻撃体勢に入ったら返り討ちに遭うという意味である。
「化物……ね。物理攻撃が当たるだけいいけど、ダメージは皆無だからなあ」
「物理攻撃……！！！！」
白い服の女は幽霊とは言えないくらいの存在感を持っていた。その違和感ともいえる存在感の強さの正体は実体がはっきりとし過ぎていることなのだと、如月の言葉で気が付いた。
「幽霊なんかじゃない……」
暁ははっきりとそう言った。
「えっ……？」
「アイツを初めて見たのは洋平だ。知り合いの中でだけどな。如月、お前がこの廃ビルの噂を作ったのはいつだ？」
「人に話したのは中学入ってからだけど」
「そうじゃない。作った時間の話だ。お前の中であの物語が確立されたのはいつだ？」
「……小学校高学年の頃かな」
如月は何かを思い出したような表情で呟いた。
「そうか……。やはり同時期か。……如月、あいつは、あの女は……」
「……やっぱり、そういうこと……ね」
如月は暁の瞳をジッと見つめていた。
「お前の強い思いがあの女を作り出したんだ。だから、如月の意識と少なからずリンクしてる。俺の声に反応したのもそのせいだろう。意図的ではないが、無意識でもない。偶然と超次元の産物って訳か」
「……偶然と超次元。……うーん、違うよ。超次元であっても偶然じゃない」

「えっ？」
　如月は服の中に隠れていた何かを取り出した。
　それはペンダントだった。ペンダントには赤色の宝石と思われる石が付けられていた。鎖は綺麗な銀色で宝石の赤色が僅かな光と共に反射して輝いている。
「綺麗だな」
　暁は見たままの感想を述べた。もちろん、それがどんな代物なのか、という疑問のニュアンスを含んではいるが。
「偶然じゃないって言ったな。関係あるのか？　その……ペンダントと」
　暁は部屋の入口に注意を払いつつ尋ねた。
　如月は静かに、語り出した。
「小さい頃、六つ上の兄さんから貰ったんだ。魔法の宝石だって。この石を夜空に掲げて自分の十二星座の首星と重ね合わせて、願い事を言うと三つだけ叶えてくれるんだって」
「……何を願ったんだ？」
「家族に戻ってきて欲しいって……。でも、ダメだった。やっぱり、迷信だから」
「そっか……」
　如月は膝を抱え込んだ格好で斜め上を見ている。
「でもね、それでも願わずにはいられなかった。だから願ったんだ、アタシの星座、さそり座の『アンタレス』に。叶わないって思ってても、今度は……アタシの作った噂を現実にして欲しいって……」
「！！」
　そうか……。如月の願いはそれで叶えられてしまったのか。おそらくは如月愛本人に直接関係しなければ願いは叶わない。それが、兄の「願い」だったのだろう。
　たとえ迷信でも、作り話でも、それが如月の兄の、如月に対する「願い」だった――
「二つ目は？　まだ残ってるのか？」

「もう使った……。アタシは悲しみを分かって欲しかったのかもしれない。救いの手を差し伸べてくれる人を導いて欲しいって、お願いした。……外崎クン、ごめんなさい。あなたたちを巻き込んだのは……多分アタシ」

「……そうだった……のか。……でもさ……如月、気にすんな。そいつは俺の意思も半分入ってるんだ」

「……ありがとう」

如月はペンダントを見つめて、感謝した。

導き。暁と洋平の以前の会話はあながち間違ってはいなかった。彼らは、まさしく「導き」を受けていたのだ。迷信や作り話かもしれない「意味ある偶然」に――

暁は、如月が何をしようとしているか察していた。だが、それは正しいことなのだろうか？　如月の為になるのだろうか？

「外崎クン、三つ目はまだ残ってる。だから……ここで願えばいいのよ。私が作ってしまったアレが消えてしまうようにって……」

「……」

如月は部屋の南にある窓に近寄って行った。手に兄の形見を持って……。

「……如月」

「……何？」

「逃げるなよ」

「逃げてないよ。……これ以上、あなたたちを危険に巻き込めない」

「違うよ。それは言い訳だ。如月、あの女がお前や洋平を襲ったのは、お前が心の奥でまだ孤独であることを、全てをはねのけてしまうことを、望んでいたからじゃないのか？　このままお前が変わらないなら、状況は打破できない。お前は苦しいままなんだ。それで本当にいいのか？」

「……よく……ない。よくないよ。でも！！　アタシなんかが今更……！！」

「……バカか如月、お前がどんな人間かなんて関係ないんだ。お前は今までよく頑張ったよ。もう、無理しなくてもいいんだ。お前が願ったんだろ？　救いの手を……差し伸べさせてくれよ、俺に」

如月は暁を見たまま、一筋の涙を零した。

「……外崎クン。……ありがとう。やってみる。……自分と向き合ってみる」

如月は右手でペンダントを握りしめ、ただ一回頷いた。石の願い事なんかに頼らず自分の力で全てを終わらせる、自分で自分を変える、そんな決意の色をその瞳に覗かせて。

「よし。如月、俺はちょっと様子を見てくる。お前は少し休め。いろいろ整理しなきゃいけないこともあるだろ」

「うん。でも、あの女が現れたら、すぐに逃げてよ。外崎クン弱そうだし」

「……俺はインドア派なんだよ！　ほっといてくれ……」

暁はそう言い放つと、部屋を出て廊下に出た。廃墟と化したビルの廊下に冷たい風が強く吹き付けていた。

- 2 -

暁は十階と屋上を繋ぐ階段を登り始めていた。

如月が作り上げた白い服の女のフィールドは、基本的に屋上であるようだ。如月の負の思いが強まった時のみ廃ビルを離れることが出来るのだろう。

暁が屋上の様子を見に行くに至った理由は二つある。

一つは、如月に自分と対話し、負の感情を断ち切る時間を与える為。

もう一つは洋平の様子を見る為だ。洋平が拉致されたのか、憑依されて自分で廃ビルに出向いたのかは判らないが、もし目を覚ましてしまったら混乱してしまう。……否、戦いを挑むだろう。彼はそ

ういう人間だ。
しかし、状況は以前とは違う。今の如月の心は不安定だ。白い服の女が洋平を容赦なく殺そうとしても不思議ではない。とはいえ、もし洋平が覚醒していた場合、暁にはそれに対処する術はないのではあるが。
暁は極力足音をたてないようにゆっくりと階段を登った。暁は屋上の扉に付いた窓から屋上の様子を見渡した。屋上には先程と体勢を変えずに横たわる坂本洋平の姿があった。
「女が……いない？」
「フフフフ」
「！！！！」
背後に不気味な笑い声を聞き、振り返った暁の目の前には白い服の女が恐ろしい表情で笑っていた。
次の瞬間、女は暁の首を両手で掴み、そのままの体勢で扉を突き破って前進した。そのスピードと突然の展開に、暁は状況を把握できずにいた。
ガシャンッ！！！！
入口から十メートル程の距離に位置するフェンスに、暁は思い切り叩きつけられた。首には依然として女の青白い手が掛かっている。
「……っつ……！」
暁は、抵抗することはおろか、声を上げることさえ出来なかった。全身に強い痛みが走る。軽自動車にはねられたぐらいの衝撃はあったであろう。
ギシッ……。そんな音がした。横目で音のした方向を見ると、フェンスの接続部分が外れかかっている。フェンスの向こうには足場はない。このまま、抵抗出来なければ間違いなく十階建てのビルから落ちることになる。
……くそ！！　冗談じゃねーぞ。
フェンスは今にも壊れそうなくらいに変形していた。それでもなお、女は暁の体をフェンスに押しつけている。

「く……そ……！！」

もうダメだ、暁がそう思った瞬間、女の体で陰になって見えない扉の方向から、如月の声が聞こえた。

「もう止めて！！」

女は腕の力を少しだけ緩めた。女は真っ黒な目を、カッと開き、ゆっくり如月がいるであろう方向に振り返った。しかし、それでもまだ女の腕は暁の首に向かって伸びている。

「如月……」

暁は声を掛けようと試みたが、どうやらしばらくは喋れそうになかった。

「もう……誰も傷つけないで！！　アタシはもう、あなたになんか頼らない。悲しいことも、辛いことも、受け入れる。自分の幸せを手に入れる。だから、もうこの世界から消えて！！」

如月の言葉は女に向けてのものだが、同時に暁に対して意思表示も含まれていたのかもしれない。

しかし、どちらにせよ如月は女の目の前で、ハッキリと自身の変化を見せつけたのだ。

「……フフフフ」

女は笑いながら、体を闇に溶け込ませていった。女の体が、消えていく……。

女の笑い声はその姿が完全に確認出来なくなる、その瞬間まで続いていた。

まるで、その存在を、記憶に焼き付けるように……。

- 3 -

「終わった……ね」

如月は暁に歩み寄って、そう言った。

「ああ。助かったよ」

暁はフェンスのそばに座り込んでいた。骨折こそしていないが、全身を金属製のフェンスに激しく打ちつけたのだから、簡単に動けるはずもなかった。

「すぐ逃げろって言ったじゃん……ばか」

「あの女から素敵なサプライズがあってな。見つかっちまった」

「ハハハ。でも、無事で良かっ……」

如月は急に言葉を止めた。

「如月？　……おい！！　如月！！」

暁が呼び掛けたその時、如月は座り込んでいた暁に重なるように倒れてしまった。おそらくは、心的な疲れがあったのだろう。負の心の具現化した存在が消え去ったのも要因かもしれない。

「大丈夫か！！」

「外崎クン……ごめんなさい。大丈夫だから……！！！」

如月が立ち上がろうとした瞬間、『ガキンッ』という音が屋上に響いた。如月が倒れた時、その衝撃で二人は外れかかっているフェンスに寄りかかってしまったのだ。

フェンスが外れ、一瞬にして二人は空中に投げ出された。

暁はとっさの判断で壊れたフェンスの隣のフェンスを右手で掴み、左手で如月の腕を掴もうと試みたが、そのどちらも位置的な問題によって惜しくも失敗してしまった。

「くッ……！！」

しかし、その刹那一本の腕が暁の手首を掴んだ。

「！！！！」

「暁！！」

洋平だった。如月が倒れた時、洋平は目を覚ましていたのだ。

屋上には、暁と洋平の姿があった。

「ハァ……ハァ……ハァ……！！」

暁は突然の事故で乱れていた息を整えた。

「何だってんだ……！！　俺は何でここに……。お前ら、何てアブねーことを……」

洋平のそんな言葉が認識された瞬間に暁は重大なことに気が付いた。

「洋……平、如月、如月愛はどうなった!?」

「……ダメ、だ。悪い、俺は何がなんだか分からなかったんだ。視界にお前らが落ちかけてるのが見えて、反射的に動いた。だから、一番近かったお前の腕しか掴めなかった」

洋平は拳を握りしめてコンクリートの床を殴った。

「そんな……。ウソだろ……。そんなこと……あってたまるか……」

「ここ……例の廃ビルだな。俺にはまったく意味が分からない。ウチで幽霊に襲われて……。だけど言えることは一つある。十階から落ちた以上、如月は……」

「……くそったれ!!　洋平……。俺たちは、バカだよ。結局、何も出来やしなかった。救いの手なんて……。チキショウ……」

暁は屋上の外れたフェンスから下を覗き込んだ。

遥か下の方に小さく如月の体が見えた。如月は嘘偽り無く、落ちてしまったのだ。

「如月……!!　せっかく変わった人生が、何でこんなにも早く終わらなきゃいけないんだ……。自分の幸せを手に入れるんじゃなかったのか……。何で……こんな、不条理が……」

如月に拳銃を向けられても、白い服の女に屋上から突き落とされかけても、涙は出なかった。だが、暁はこのときだけは涙した。

再会なんて、すべきじゃなかった。

「暁……。おい……暁」

「……何だ?」

「これって、如月の……か?」

振り返ってみると、洋平は如月のペンダントを持っていた。おそらく倒れたときに落としてしまったのだろう。

「ああ。そいつは如月の……!!!!」

そうだ、まだその手があった。
暁の脳内に一筋の光が射し込んだ。
「洋平！！　それを貸してくれ！！」
「はあ？　あ、ああ」
暁は洋平から赤い宝石の付いたペンダントを受け取ると、夜空を見上げた。
「まだ夜は明けない。星は輝いている。まだ続くんだよ、この夜は……。そうだろ、如月！！」
夜空には、アンタレスの赤色が何よりも美しく、輝いていた――

――

- 4 -

水平線の向こうに沈んでいく夕陽。
夕陽が赤色なのは、日没直前の太陽の光線が、昼間より低い角度から射し込まれる為に、より厚い空気の層を通り、波長の短い青系の光が拡散されて赤色が強く出るからである。
同じ恒星であって、赤色のさそり座α星「アンタレス」は地球から六〇〇光年離れていると言われている。目の前の大きな太陽の七〇〇倍という大きさである赤色超巨星のアンタレスの輝きは、やはり太陽の数万倍の輝きであり、遠く離れたこの星でも美しさを誇るものだ。
その輝きは、人に何をもたらすのだろうか。
この事件の始まった海辺で、暁は全てを洋平に話した。
「首星に願うと望みが叶う……ねぇ。そんな不思議なことがあるんだな。まあ、あの幽霊……じゃなかった。あの化物を認める以上、信じなきゃな」
洋平は夕陽を眺めながら隣にいる暁に言った。
「俺たちが再会したのも偶然じゃなかったのかもな……。しかし、

本当に洋平には感謝してるよ。あの時、お前が俺の腕を掴んでくれなかったら死んでいたところだ」

「やめろよ。俺にも巻き込んだ責任があるんだ。礼には及ばないさ。……ところで、如月愛は助かったのか？」

「ああ。あの石の最後の願いで……な。今日見舞いに行ってきた。不思議な話だよ。奇跡だな、十階から落ちて、骨折が四、五カ所くらいで済んだんだ。科学じゃ説明できないんじゃないか？」

昨晩、如月が廃ビルから落ちた後、暁は赤い宝石に「如月の命を助けて欲しい」と願った。そして、如月の元へ駆けつけると先程までピクリともしていなかった如月が、痛みに苦しみだしたのだった。痛ましい姿であったが、命をつなぎ止めた証拠でもあった。

「だろうな。にわかに信じられる話じゃあない。で、如月愛はお前がここを去る頃には退院出来るのか？」

「いや、無理だろうな。帰る前にもう一度お見舞いに行くつもりだ。それでお別れ。殺しの事も言うつもりはねーしな」

もちろん、証拠不十分で逮捕すら出来ないだろうけれど。

「はは、そうだな。そういやお前の体は大丈夫なのか？」

洋平は暁の方へ向いて言った。

「まあな。ちょっと痛むけど、医者には診せられないだろ。如月は上手く理由を誤魔化したみたいだが、俺にはあの事件を誤魔化す技術はないさ」

「そうか」

洋平は再び夕陽を眺めだした。暁も夕陽を見ている。後数秒で、完全に沈んでしまうだろう。

「なあ、洋平」

「何だ？」

「やっぱ今度如月の入院してる病院で開催しないか？」

「何を？」

洋平は日の入りの余韻を楽しみながら尋ねた。

暁は如月の顔を思い浮かべながら、答えた。

「俺のお別れ会さ」
「ハハハ！！　ナンだソレ。自分でセッティングしてやがるよ。……しかしまあ、そりゃ楽しげだな。……よし、賛成だ」
砂浜の砂が潮風に流されて空に舞い上がった。
奇跡の余韻が暁の心を満たしていた。

赤色の願い（後書き）

次回で田舎編は終わりです。
これから先はサスペンス色が強くなります。
読んでいただいた方、ありがとうございました！

キズナ（前書き）

今回で暁の帰郷編は終わりです。

キズナ

- 1 -

如月の入院する小さな病院に着いた暁は、不意に鳴る携帯電話に指を這わせた。病院の冷たい階段をカツカツと音を立て上りながら、メールの送り主を確認した。登録外の人からだ。暁は眉をひそめ、本文を表示した。

二宮　光（＾∀＾）ノです
登録よろしくっ

「……」

……ああ、よろしくな……。

暁は携帯を閉じ、ため息をついた。その理由は自分でもよくわからない。

いつの間にか、如月の個室の前まで来ていた。真っ白なスライドドアをスライドさせ、部屋に如月がいないか確認した。如月はいた。真っ白なベッドに横たわっている。如月は暁に気付くと、目をキッとさせ、

「ノックくらいしなさいよ」

と一言。

暁はハッとしてから、

「悪い！」

と謝る。如月は上半身を起こして窓を見やった。窓の外には綺麗な自然が在った。

ベッドの近くにある椅子に腰掛け、暁はバックの中からリンゴの詰め合わせを取り出した。病院に行く途中にあったスーパーで買っ

てきた物だ。リンゴが五つで七百円とちょっと高めだが、美少女戦士如月のためなら、その程度は出費にもならない。

「わぁー！　リンゴだぁ～！　ありがとう、暁っ」

如月はそれを受け取ると、窓際に置いた。きっとあとで食べるのだろう。如月は笑顔で鼻歌を歌い出した。

暁は携帯を開いて時間を確認した。あと少ししたら、ここに洋平が来る筈なのだ。暁のお別れ会に参加するために。

「ねぇ」

いつの間にか如月は鼻歌を止めていた。穏やかな表情で暁を見つめている。暁は無駄にドキドキしてきたが、だからといって焦らなかった。

「……なに？」

如月はもう一度窓をチラ見してから、暁と目を合わせた。

「……色々あったね」

「……うん」

「……ありがとう」

「……は？」

暁は思わず漏らしてしまった。如月の「ありがとう」がやけにこもっていたからだ。恥ずかしくなり、暁は顔を赤らめた。如月は平然とにこやかに暁を見つめているいるが、暁はうまく如月と目を合わせられないでいた。頭を掻いたりして、挙動不審もいいとこである。

「……ねぇ、知ってた？」

「……え？」

如月の唐突な質問は、あまりに抽象的過ぎた。暁から目を逸らし、自分が乗っているベッドの中央辺りに目を落として――その表情はやけに平静としていた。

如月が何かを言おうと口を開きかけた瞬間、スライドドアがスライドした。洋平が入室してきた。

「よぉ」

「よお」
「よっ」
如月の最後の会釈から数秒の沈黙があり、三人は笑った。
洋平は何気なく口を開いた。
「ケガ……どうなん？」
暁は改めて如月をよく見てみた。パジャマみたいな格好で、左腕には包帯が巻き付いている。他に外見的に変わったところは無かった。下半身は毛布の下になっていて、よく分からないが多分骨折しているだろう。
「左腕と右足とあばら骨が二本いったくらい。すぐ治るって言ってた」
「なら良かった……ところで……さ」
「！！」
……洋平、もう切り出すのか。
「暁が明日の朝にはあっちに戻るんだよ、な？？　だからさ……写メでも撮ろうぜ」
暁は口を半分開けて洋平を見つめていた。何かサプライズを送ってやるとは聞いていたが、まさか写メとは……暁は頭をボリボリと掻いた。
「えーっ？　アタシこの格好でえ？　まぁいいけどっ」
如月はなんだかんだいって嬉しそうだった。ヤダと言われないだけ断然良い。洋平はちょうどいい高さの棚を勝手にズラし、その上に携帯を置いてセットを完了させた。
如月が小さな声で尋ねた。
「行っちゃうの？」
「……ああ」
「……」
二人の間に沈黙が流れた。暁は困った様子で額に手をあてがった。
如月は携帯の方を見た。
「あと五秒だ」

洋平に言われて、暁も少し椅子をベッドに寄せた。
「そんなんじゃ入んねーぞ暁ッ」
そう言って洋平はベッドに乗った。そして如月と肩を密着させてピースをした。暁はある種の怒りを感じつつも、どうしたらいいか迷った。洋平と同じようにベッドに乗るなんて自分にはできない。暁は慌てふためいた。すると、如月が自ら暁に手招きし、
「早く早く、上がって！」
と言った。暁は端に腰を下ろし、上半身だけ如月の方に傾けた――――なんとか入るか。はいるよな！？
刹那、如月は言った。そして、そのタイミングは完璧だった。
「はい！　チーズ！」
パシャッ

- 2 -

――ねぇ、知ってた？
洋平の後を追って病室を出ようとする暁に、如月が声をかけた。
『ん？』
暁は振り返った。
如月の目は優しく、前だけを見つめている。
『何を？』
『……きっと、全部、嘘だよ。何もかも』
『……』
『アタシ、ビルから落ちたとき、落下の衝撃を少しでも和らげようとして、ビルのつかめそうなところを必死になって……』
如月は、ここで一旦話を区切り、窓の外を見た。
『……それで？』
『アタシね、死んでなんか、なかった。これでも一端の殺し屋。うまく受け身をとったの。骨折したけどね』

『……』
『外崎クン……アタシが生き返るようにお願いしたでしょ』
『うん』
『……ほら、多分、嘘だったのよ。だって、アタシは生きてたし、家族は戻らなかったし』
『……』
『願いが三つ叶うなんて嘘よ。うん……そうに決まってる』
『……』
『あの幽霊も、多分、関係ないでしょ』
『……かもな』
『わかんないよね』
『ああ』
『世の中って難しいね』
『……うん』
如月は、ポケットに手を入れた。ゴソゴソしていた。そして、赤い宝石のついたペンダントを取り出した。
『おい……』
『これ、外崎クンにあげる』
如月はブンと腕を振り、それを暁に向かって投げ飛ばした。暁は慌てて受け止める。
『……え？』
『信じられないことが多い……けど、外崎クンがいなかったらアタシは変わらなかったと思うの。それだけは間違いない』
如月はニヤッと笑った。
『それは、絆の証。アタシと外崎クンを繋ぐモノ……。たまにでいいから、それを見て思い出してね。アタシがいたこと』
暁は何も言えなかった。ただ、如月の言葉を待つしかなかった。
『……もう行って』
如月は窓の方を見て言った。暁は背を向けると同時に、
『じゃあな』

と言った。その手に赤の宝石を握り締めて……――

――ガタンゴトン……ガタンゴトン……

「……」

暁は電車に揺られながら、窓の外で流れゆく風景に目を傾けながら、昨日の如月とのやり取りを思い出していた。ハンドバックの中には、如月から貰ったペンダントが入っている。

暁はバックの中に手を突っ込み、ペンダントを探した。それを手に掴んだとき、何故かほっとした。嬉しさが込み上げてくる。絆……――如月の声が頭の中で繰り返された。

……それにしても、爽やかな朝だな。

――――ガタンゴトン……ガタンゴトン――――

……

キズナ（後書き）

読んでいただいた方々、感謝します。
まだまだ物語は続きます。
いままでで最高の大伏線回収が待ってます。
読んでいただいている方を驚かせることが出来ると思います。
受験が迫っている時期なので、そのうち一時的に連載休止になるかと思いますが、ぜひ今後もお付き合いいただければ幸いです。

日常打破（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした。
この小説は携帯で執筆し、Ｅメールを利用してラリー形式にしていますので、ＰＣに送った後にワードにコピペして加筆修正をするのですが、その作業に時間がかかってしまいました。
現在、書き溜めた分は約２０話ですが、作者は大学受験のため、連載を一時的にストップせざるを得ませんので、この先更新が遅れるだけでなく、連載自体が数ヶ月間ストップしてしまうことになるでしょう。
しかし、打ち切りはありえませんので、どうか最後までお付き合いいただければ幸いです。

日常打破

- 1 -

自宅アパートに戻った俺は、さっそく亜美に電話した。
「よーっす！　戻ってきたぜぇ。さっそくだけど、一緒に祭行こうなッ」
「え？　暁？　戻ってきたの。そう……ッて、ムリムリ。アタシ彼氏いるし。てか電話とかしないでくんない？」
ツーツーツーツー。
「……」
なんということだろうか。亜美は俺がいない間に男とくっついてしまったらしい。ああ、悲しい。悲しいなぁ……ん？　それって、俺がアイツのこと好きってことか？？　え？　そういう問題じゃないってば。
ピンポーン。
……誰か来たなあ。
あれ？　君は……。
「暁ッ。ウチね、竜司と付き合ったから。じゃ」
バタン。
「いやいやいやそれはないでしょ静枝さん佐藤～」
俺は洗面所に行って自分の顔を見た。うわ、誰だこれ……。そこには、七十過ぎの爺がいた。俺はいつの間にか爺になっていた。髪の毛が全部白い。目の上の肉がただれて黒い影を作っているし。もう駄目だな……俺。
「いや、君はまだ大丈夫だよ」
鬼頭火山だった。俺のベッドに腰掛けている。ついでに彼はプルプルと細かく振るえていた。かわいそうになってきたので、暖かいコーヒーをあげた。

「すまないね……」
……いや、いいんすよ。
ところで、今は何時ですかね？　てゆうか、お互い年ですな。いや、ボクの方が年上ってゆうね。はい。
……あ、しまった。声に出していなかった。
「ふぅ～～」
ふぅじゃないよ鬼頭さん。てか神崎てめえ。
「この大量殺人鬼めっ」
俺は鬼頭を殴った。そしたら手の骨が折れた。
「暴力はよくねえだろ」
……うるせぇな。宮澤ぁ……。
鬼頭さん。人のベッドの上で小便を漏らさないで下さい。
「はぁ～？」
……もうダメだな。この人……――――。
――――！！！！
「……」
暁は目を覚ました。
全て夢だった。
暁はベッドから起き上がり、部屋の電気を点けた。紛うことない自宅アパート。そう、暁は戻ってきたのだ。
……それにしても、なんて夢を見てんだ。俺は……。
携帯を開いて時刻を確認した。まだ昼間の四時だった。
特にすることもなく、ただ時間だけが過ぎていった。いつの間にか外は真っ暗になり、寝る時間が近付いてきた。
「……あー暇だ」
暁はベッドに横たわった。次第に意識が遠のいていく……暁は眠りについた。
目が覚めると、昼間の一時だった。喉に渇きを覚えたので、冷蔵

庫に入っていたファンタグレープを一杯飲んだ。それからまたベッドに横たわり、ぼおっと物思いに耽っていた。宿題がほとんど手付かずであることに、暁はある種の危機感を多少覚えていたが、しかし体は動かなかった。こうやって永遠にのんびりしていたい。暁にはその類の願望が常にその身を脅かしていた。たまに死にたくなるのは、きっと些細な理由なのだ。暁の場合は、恐らく宿題が終わりそうもないことが原因である。だが、それを素直に認めるのも癪なのだ。暁は目をつむった。明日に希望が持てなかった。理由は分からない。しかし、たまに訪れる鬱は、そうそう簡単には解消されるものではない。経験上、暁はそれを知っていた。だから、暁には眠るしかなかった。全てを忘れて眠るしかなかった。

目が覚めたのは、夜の八時のことだった。暁はカーテンを閉めて、部屋の明かりを点けた。それからファンタグレープを飲み、携帯を開いた。Eメールが一件……。

「……あ」

送り主は竜司だった。内容は、グラビアアイドル由佳里（ゆかり）の百冊限定販売された伝説の写真集『ゆかりん』を至急譲渡せよとのことだ。暁は引き出しの鍵を取り出し、鍵穴に差し込んだ。確か、この中に『ゆかりん』はあるはず……。

「お……ゆかりん」

暁は『ゆかりん』を取り出すと、それを机の上に置いた。

……サヨナラだな。

暁は写真集と心の中で別れを告げて、再度ベッドに寝転んだ。竜司とニ、三のメールのやり取りをした後、またも眠りについた。暁は思った。このままでは恐らく廃人になるだろうと。だが、仕方がなかった。こうしてグダグダと眠る他、手立てがない。なんだか、またも逆戻りした心地だった。『脱出』のスタート地点に戻されたかのような気分……こんな虚しい気持ちになるなら、初めから何もしなけりゃ良かったな、などと一瞬、思いもした。

端的に言って、暁は不満を感じていたのだ。せっかく帰ってきた

のに、何故、亜美はメールやらをよこさないのか。暁は、様々な不安に駆られていた。恐らくその不安は、亜美と数日間の間会っていなかったことが原因だろう。数日前に見た夢からも判断できる通り、暁は亜美に彼氏の類ができたことを心配していたのだ。もう明らかに自身の心が亜美に寄っているのは言うまでもないが、暁はそれを認めたくなかった。言葉ではうまく表せないが、とにかく亜美を気に留める自分の存在は認めたくなかった。

「……」

……まさか、俺は、亜美が……。

暁は、一旦、亜美のことを頭から追い払い、眠ることに専念した。暇で暇で仕方がない暁は、明日、竜司に写真集を渡すのも兼ねて一緒に外で遊ぶことを約束してしまったのだ。ちょっと早めだが、グッスリ眠るのに越したことはない。

だんだんと意識が薄まる中、暁は思った。俺には目標がない、目に力がない……と。次の瞬間、　暁は完全に眠りに落ちた……。

……――。

目覚めは朝の九時だった。まだ寝足りない気もしたが、あと一時間もすれば、部屋に竜司がくる。眠っている訳にはいかない。

……風の強い朝だ。

暁は朝食にカップヌードルを選んだ。なかなかおいしかった。竜司は、十時ピッタリに暁の部屋のドアをノックした。『ゆかりん』を見せてやると、竜司は壊れたように騒いだ。まぁいい、お前のおかげで暗号は解けたんだからな。

二人は自転車で駅へと向かった。暁が竜司の横に行くと、竜司は何度も並列運転を注意した。十分もすれば、あの洋風で洒落た駅に到着した。あとは、ここでイオン行きのバスを待つだけである。竜司は段差に腰掛け、人目も気にせず『ゆかりん』に見入っていた。暁は竜司からなるべく離れた所で、『ゆかりん』を読む男との無関

係を装っていたが、時折、竜司が話しかけてくることによって、その努力は無に帰した。

ようやく来たバスに乗り込み、それでも竜司は暁の隣で『ゆかりん』に没頭していた。

「なぁ、暁……お前がこれを手に入れた経緯を覚えているか？」

そう言って、竜司は暁の返答も待たずに、その経緯をベチャクチャと非難がましく語り出した。

高校一年の時のことだ。竜司も暁も、なかなか友達ができず、悲しい思いをしていた時期。同じクラスだった竜司と暁は、席替えで隣同士になり、それからというもの、気が合ったのか、よく話す仲になった。そして暁が竜司との親睦を深める最大の要因となったのが、まさしく『ゆかりん』であった。

『俺さ……由佳里好きなんだよね』

竜司の突然の告白。だが、暁は目を見開いた。

『それって、グラビアアイドルの由佳里!?』

……そう、暁も由佳里のファンだったのだ。互いの本心を互いに理解した二人は、唯一無二の親友となった。ちょうどその頃と相まってか、当時、爆発的人気を誇っていた由佳里の写真集『ゆかりん』が発売されたのだ……。しかも、百冊限定。暁も竜司も血眼になった。しかし……その値は張った。一冊なんと一万円。

だが奇跡は舞い降りた。ある週刊誌がプレゼント企画で抽選一名に『ゆかりん』を贈呈するという噂が流れたのだ。『ゆかりん』の発売場所は暁たちの住む所からも離れており、もうこれに賭けるしかなかった。竜司は三百二十円するその週刊誌を三冊買った。暁は二冊買った。当たる確率などゼロに等しかったが、なんと暁は当てた。

『……あの情報を教えてやったのは俺だってのによ』

と言わんばかりの憤怒の形相で竜司は天狗になった暁を影から睨みつけていた……。

「――――ま、最後はちゃーんと、俺の手元に戻ってきたがな」

竜司は『ゆかりん』をバックにしまうと、満面の笑みでそう言ったのだ。よほど嬉しいらしい。
「戻るもなにも、お前が持っていたものではない」
「確かにな……おい」
竜司が暁の顔を見て表情を変えた。
「その傷……何だよ」
暁の頬には、如月が撃った弾丸のかすり傷がまだ残っていた。
「銃で撃たれたところを……」
「ははっ……転んだのか??」
暁は本当のことを言ったのに信じてもらえなかった。
イオンに着いた。

- 2 -

イオンではたくさんの物を買った。数学の参考書や、新しいシャーペン、Tシャツやズボン。
「おい、なんだそれ?」
「アイロンだよ」
暁はアイロンも購入した。四千九百八十円の最高温度百七十度の水蒸気噴出型のアイロンである。洋平に勧められた物だ。
「よし、次はワックスだ」
「ワックス?」
暁はウーノのコーナーに行き、洋平いちおしの『ウーノ　フォグバーＢＬ』を探した。新発売というだけあって、すぐに見つかった。スプレータイプなので、初心者には使い勝手が良い。
「おい、お前どうしたんだ?」
「ちょっとは外見に気を遣おうと思ってな」
「イメチェンかよ」
その後、適当に昼食をとってから映画に興じ、あっという間に夕

刻近くになってしまった。
「あー、帰るか、じゃあ」
「そうだな」
二人は買い物袋をぶら下げ、バスに乗り込んだ。
「あー疲れた」
「……同感だ」
駅に着き、二人はそれぞれの帰路についた。
自転車を漕ぎながら見る夕焼けの空は、生きていて良かったと思えるくらい綺麗だった。

数日後。
「ヤバイ。暇過ぎる」
暁は部活をしていない。だから夏休みは暇である。それはしょうがないことだ。暇つぶしに宿題に手を付けようと、ベッドから起き上がろうとしたが、無念、その気力すら湧かなかった。時間が重なる度に自分がダメ人間化していくこの感覚……。この言いようのない気だるさ。
……もうダメだ。
「……」
窓から差し込む日差しがポカポカ暖かく、良い感じにそよ風もそよ吹いている。陽気な午後に響き渡る子供の愉しげな声……暁は宿題を含めた全てを忘れ眠ることを決意した。
だが、ドアがノックされていることに気付き、暁はガバッと目を覚ました。
……誰だよ。
のそのそとドアに近付き、鍵を開けた。すると、向こうがドアを開いた。
「……久しぶりっ」
「……亜美？」

ドアの前に立っていたのは、篠原亜美であった。髪型が以前と微妙に異なった。
「髪……短くなったな」
「夏は暑いからね」
亜美はショートヘアーになっていた。何故か新鮮である。
「入っていい？」
「あ、どうぞ」
亜美のファッションはいつもに似合わず大胆だった。ショートパンツに黒のニーハイ、上はお洒落な柄のノースリーブだ。さらに頭にはカウボーイが被りそうな羽付きのハットが装着されているではないか。どうしちゃったんでしょう……。しかも肩にブラヒモが見えない。まさか！？　いやいや、何を考えているんだ俺は……そんなはずはない。よな？　それにだよ、もしそうだとしたら、その強調された双方の胸の中央にあるべき突起がみつからないではなかろうかよ……肩なしのブラだよ、そうに決まってる。
「ちょっと、どこ見てんのよ？　さっきからブツブツ言って」
亜美は入室するやいなや、部屋の中央に設置された四角いテーブルの側に腰掛けた。
亜美の派手な格好に対し、暁はパジャマである。自分の住処なのに何故か身の置き場に困る。
「ど、どっか行ってきたのか？？」
「ん？　うん、シズと遊びに行ってきたんだよ」
「へえ」
「……帰宅部って暇だよね」
「え？？」
「暇じゃない？　特に夏休みとかの長期休業って」
「……あ、ああ」
「でね、あたし、いいこと考えたの」
「ん？」
……いいこと？？

「……あ、喉渇いちゃった。何かない？　飲むもの」
暁は冷蔵庫を開けてアクエリアスを取り出した。コップと一緒に亜美の前に置いた。
「いいことって何だよ……」
暁もコップを持って亜美の真正面に座った。
亜美は一杯、二杯と飲み干すと、
「ちょっと待って」
と小さな声で言った。暁は頭をボリボリと掻きながら、お菓子を探しに台所に消えた。暁がいない間に、亜美は勝手にゲームキューブを起動させ、大乱闘を始めてしまった。
ポテトチップスを片手に戻ってきた暁に、
「スマブラやらない？」
と亜美が。暁は特に反論もせずにその誘いに乗った。二人でポテトチップスをバリバリと食いながら、約一時間乱闘を繰り広げた。一人は寝起きで、一人は遊んできた帰りである。なんと奇妙な光景だろうか。闘い疲れた暁はその場で倒れ込んだ。強烈な睡魔が彼を襲う。一方、亜美は依然としてゲームを続けていた。今度はＰＳ２でバイオハザード４である。暁は最後の力を振り絞って、台所にあるじゃがりこを二つ持ってきた。ドシャッと音を立て倒れ込み、ひとつを亜美に渡し、ひとつをガリガリと頬張った。
――……五時頃になっただろうか。亜美はバイオハザード４をやめて、机に顔を伏せてウトウトし始めた。暁は完全に覚醒し、今からだったら宿題をやってもいい気分にすら達していた。
「おい、亜美……そろそろ教えろ。いいこととは何だ？　そして、それは本当にいいことなのだろうか？？」
最終的に自問している自分に、暁は気付いていない。脳内麻薬が分泌されているのだろう。
「いいことよ……とっても」
亜美は顔を伏せたまま言った。暁はゴクッと音を立てて唾を飲んだ。何か、ただ事でない何かが起こりそうな気配だ。

「言ってくれ……その内容を……」
暁は額の汗を拭いた。
亜美は顔を上げた。その顔はどこまでも澄んでいた。
「もし、成功すれば……いいことだらけ」
「……」
「まさしく……」
亜美は暁を指差した。
――――まさしく??
「金儲けっっ」
暁の顔が青くなった。

追憶の先の君

- 1 -

暁は、壁にかかった時計の長針を目で追った。亜美のか細い腕の人差し指は、依然として斜め上の暁の顔を差している。長針が真上を示したとき、暁は冷ややかに呟いた。

「金儲け……ね……」

「そ。楽しそうでしょー」

亜美の顔は少女マンガのキャラクターのように輝かしかった。暁の顔はというと完全にピッコロ大魔王である。

「バイトの勧誘か？　悪いが亜美、俺はあのふわふわした感じが苦手なんだよ。バイトイコール雑用みたいなところあるだろ？」

「違う、そんな正当な方法じゃないよ」

「なるほど。十月の文化祭のバザーをやるから手伝えって訳か？言っておくが俺は肉体労働には向いてないんだ。売るものも無いしな」

「違う違う。だからそんな正当な話じゃないって。そもそもアレはボランティア。私たちが稼いでも全部カンボジアに行っちゃうもん」

「亜美、薬は駄目だぞ。人間を駄目にするんだ、絶対やるなよ」

「馬鹿なの？」

「……。亜美、詐欺は……」

「お馬鹿さん？」

「……はい」

くだらないやりとりをしている内に暁は完全に、亜美の「謎の金儲け」を断る手立てを失った。しかし、バイトでもバザーの類でもないとなると、なにやら怪しい雰囲気がある。

面倒なことになりそうだ……。

暁がそんなことを思っている間に、亜美は携帯電話をどこからか

取り出していた。画面に見入ってなにやら操作をしている。
「ちょっと待っててね」
「話が見えない……」
「あった！！」
どうやら亜美は携帯電話でウェブサイトを探していたようである。
「これを見て」
暁は亜美から携帯電話を受け取ると、画面に目を落とした。
「何だ、これは……」
そこには、予想もしなかった内容が表示されていた。

○第５回　ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ　文学賞

●応募要項のお知らせ●

対象：未発表の自作小説。ジャンルは問わない。

テーマ：「人間」

原稿規定：文字数-６０００～８０００字。

応募資格：１５歳以上３０歳以下のアマチュアに限る。

応募受付開始：２００９年８月２０日

応募締切：２００９年９月２０日

賞と賞金：

・ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ賞１名　賞金５０万円
・選考委員特別賞１名　賞金５０万円

・ノミネート作品中、特に優秀な作品3作品に優秀賞　賞金１０万円

選考方法：
・ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ賞は、応募された作品のなかから、１０作品（予定）を選考委員会が選出してノミネートします。ノミネート作品をこの特集上で公開し、一般のお客様からの投票によりＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ賞を決定します。
・選考委員特別賞は選考委員の鬼頭火山さん一名により決定します。

＊選考委員は斉藤征二（さいとうせいじ）さんに変更となりました

発表：２００９年９月３０日正午

主催：ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ

＊入賞した5作品は小説雑誌「サイン」に掲載されます。

暁は呆れた表情で顔を上げた。変な汗がそこらじゅうから出ている。
これを見せられたって事はまさか……。
亜美は顔をぐっと近づけて暁に言う。
「どう？」
「まさか、応募しようって訳じゃないよな？」
「すごーい。何で分かったの？」
亜美はわざとらしく言った。
「棒読みだぞ」
「賞金は山分けよ。二十五万円、何に使う！？」
「待て。ニュージェネレーションネットって言えば、最近若者に流行ってる検索サイトの管理会社だろ？　かなりの人数が応募するは

ずだ。下手すりゃ、学校単位で応募するようなとこもあるかもしれない。俺や亜美が通用するのか？」

「応募総数は例年通りなら大体二千弱。そこまで多いわけじゃないよ、ネット限定だからね。それにあたしと暁がそれぞれ出すんじゃないの」

「は？　どうゆうこと？」

「二人で一つ。暁がストーリー、あたしが文章。これなら弱点は補える」

亜美は自信を持っていた。今までにないくらいに。

「なあ……また、ろくなことにならないぞ。去年は散々だったじゃないか。お前は戦うことすら許されなかった……」

暁は思い出していた。去年の事件。忘れていたあの事件。

「今度は……あたしたちが勝つ。リベンジしなきゃ気が済まないじゃん」

「あのなぁ、勝算はあんのかよ」

そもそも、ここでは「勝つ」という概念そのものが比喩的であるのだが。

「暁は犯人とかすぐに当てるでしょ。それって作る側に立てば予想の裏をつけるってことでしょ？　それにあたしは暁も知ってる通り、国語だけは大得意だし、小説で賞貰ったこともある。プロなしのコンクールなら、狙えなくは無い」

亜美は真剣な表情で言った。

外の世界では太陽が沈み始めている。

「……もう小説はやらないって決めたろ」

「分かってるよ……暁。でも、暁はあんな終わり方で良いの？　本当にそれで……良いの？」

亜美は強い瞳で暁を見ている。吸い込まれそうな程に澄んでいる瞳。

暁は亜美のその瞳で見つめられて、頼みを断ったことは無かった。

ああ……。俺、あの瞳に弱いんだよな……。

「……亜美」
「……何？」
「来月の雑誌に、お前の名前を載せるぞ」
暁はそらしていた目線を亜美に向けた。
「……やったぁ！！　ふふ、そうこなくっちゃね」
亜美は満面の笑みを浮かべた。窓から差し込む夕陽に、似合う笑顔だった。
やっぱり俺は弱いなぁ、こいつに。

「いつまでにプロットを渡せばいい？」
「そうだなぁ……あたしは内容さえしっかりしてれば九月入ってからでも全然平気かな」
「ふうん……じゃあ遅くとも九月の初めまでには渡すよ。といっても亜美、どちらかに一任するよりか、ちょくちょく話し合った方が良いよな？」
「そうね。普通は話と文を分けたらアウトだからね、漫画じゃあるまいし。でもあたし、ストーリーは基本作れないから、暁とうまく協力しなきゃ」
亜美は窓の外を見ながら言った。窓の向こうではひぐらしが大声で鳴いていた。
「ああ、そうだな」
暁は自分に課せられた役割に底知れないスリルを感じていた。だらけた生活を正す良い機会だ。どうせやるなら、ノミネートくらいは狙ってやる。
「まあ、時間はあるからゆっくりやっていいよ。それより今は……」
「ん？　今は……何だ？」
「いよいよ明後日だね、八月九日」
「何かあるのか？」
「な・つ・ま・つ・り」

「ああ、そういや明後日だったか、祭り」
夏祭りの存在は記憶していたが、日にちに関してはすっかり忘れていた。
「暁君には今回、あたしが同伴してあげます」
「は？」
「祭りの楽しさを忘れてしまった可哀想な君には、あたしみたいな祭女が付いてかないと浮きまくっちゃうからね！！」
亜美は祭女らしい。
「……なんか俺、お前に振り回されてないか？」
「暁はチェスの駒で言うならならポーンだからねー」
「捨て駒かよ！　じゃあお前は何なんだよ。クイーンとか？　いや、キングか？」
「プレイヤーよ。あたし、チェスはすごく強いんだから」
「……」
次元が違った。
「あたしと行くの嫌？」
あ然としていた暁に亜美が聞いた。
「……いや、俺には一緒に夏祭りに行く相手なんて、お前くらいしかいないよ。亜美が誘わなきゃ俺は家でゲームしてるとこだ」
「竜司君は？」
「アイツは祭には絶対行かない。俺と違って誘われても動かないタイプなんだ」
「ふーん。あの人もなかなかの変わり者よね」
亜美は、真顔で言った。どうやら自分も変わり者だということに気付いていないようだ。
「それじゃ、そろそろあたし帰るね。遊び過ぎて疲れちゃったし」
「ああ。祭に関しては後でメールしてくれ。待ち合わせ時間とか色々」
「了解！」
亜美は一回伸びをして、部屋から去っていった。

室内に再び静寂が戻ってきた。暁はその場に横たわった。頭は冴えていたが、体は疲れていた。久しぶりに会った亜美にエナジードレインされた感じだ。

暁は無理矢理に瞼を閉じた。ひぐらしの声が聴こえなくなるまで。

- 2 -

俺は放課後の教室で腕時計の時間合わせをしていた。教室にはまだまだたくさんの人が残っていたが、今日は竜司は居ないようだ。

「暇だな……」

「あっ、居た!!　暁、今日約束してたでしょ!!」

教室の前には腕を組んで俺を睨みつける篠原亜美の姿があった。

「あー……ヤベ。すっかり忘れてたな」

「出会ってからまだ一週間!!　少しくらい気を使いなさいよ!」

「友達なんだから気を使わないでいいって、3日前に聞いた気がするんだけど」

「……へそ曲がり!!」

約束をすっぽかして、時計いじりに勤しんでいた俺は、篠原に無理やり教室から連れ出された。

「暁って小説好き?」

廊下を歩きながら、篠原は唐突に尋ねる

「まあな」

「ジャンルは?」

「推理もの」

「ホント!?　じゃあ、鬼頭火山って小説家知ってる?」

「代表作の『楽園』と『知恵の実』は読んだ」

「やるね～、その二つをチョイスするとは」

篠原は、小説が好きなのだろう。声が弾んでいる。

それにしても、放課後に会う約束をしていたが、何をするかは聞

いていなかった。
「なあ篠原、オレはどこに連行されるんだ？」
「まだ言ってなかったっけ？？　さあて、どこだろうねー」
「……」
元気だなぁ、コイツ。俺とは……違う。
「着いたよ」
目の前にはかなり広い部屋があり、十人程の人数が集まっていた。
確か、ここは……。
「ここって文芸部の教室じゃ……」
「ようこそ、我が文芸部へ！！」

午後九時、浅い眠りから目覚めた暁は忠実に再現された夢の残像にしばらくの間、脳内を支配された様であった。
数刻前まで亜美と話していた影響か、亜美の夢を見ていた。
それは懐かしい夢であった。懐かしいというのは、昔に見た夢を再度見たというわけではなく、懐かしい情報が反映された夢であった、ということである。
暁は、まだ完全に覚醒していない意識の中で、静かに追憶した。

月代学園文芸部に暁が何故か入部することになったのは、高校一年生の六月だった。
思い返せば、四六時中ぼんやりと空を眺めていた暁が、最初に亜美に翻弄されたのはあのときだったのかもしれない。なにしろ、無理やり部長に挨拶をさせられ、入部届けを書かされ、動揺している間にいつの間にか文芸部員になっていたのだから。
ちなみに、その日暁が亜美に連れ出された後、教室でも小さな騒ぎが起きていた。他クラスでありながら既に有名で、人気者であった亜美と、地味で孤独な暁がどんな関係なのかという疑問が教室中

で話題になり、Eメールという、無機質なネットワークを通じてその日の内に学年中に広まったのだ（もちろん、尾ひれをつけて）。

暁自身、後ほどクラスメートに聞いて初めて知ったことであるが、その日まで彼のあだ名は「空気君」であったらしい。だが、亜美の登場により暁はひと月程の間、ワイドショーな男になっていた為、晴れて「空気君」は同じくらい地味であった竜司に継承されることになる。もっとも、竜司もまた後に、定期テストで学年一位を獲ったことで「空気君」の名を払うことに成功するのだが。

暁が妙な時期に入部した一方、亜美は暁と違い、月代学園に入学した後すぐに文芸部に入部した。中学生の頃から亜美は幾度となく賞を取っていた。作文では五回以上、小説はコンクールに三回参加し、その内の二回が入賞している。

亜美の学力は総合的に考えれば暁より劣るが、国語、中でも現代文では学園内でも比較的高い能力を持っている。そして、さらに範囲を小論文などの作文形式のものに絞れば、あの佐藤静枝に並ぶ天才かもしれない。

しかし、昨年の秋、実力者である亜美と彼女曰わく読み手の裏を取る才能がある暁が、本来活躍できる舞台であるはずの文芸部を辞めることとなる事件が発生する。

『文芸部集団自爆テロ』と面白がって呼んでいたのは亜美自身だったはずである。わざと奇抜な名前を付けた事で、当時は学園内でも大事件として浸透していった。それが結果として伝統ある文芸部を弱小同好会レベルにまで陥れたのである。

事件は年に一度開催される関東最大の文芸コンクールの入賞作品発表日に、暁と亜美が退部したことに始まる。

コンクールに出場する権利を持つのは文芸部員五十二名中で、夏休みに仕上げた作品が部内投票で上位十作品に選ばれた部員だけであった。事前の投票で暁は二十六位、亜美は三位に選ばれ、見事亜美はコンクール出場の権利を手にした。

……はずだった。

しかし、亜美がコンクールに作品を出品さえされていなかったことが分かったのはコンクール入賞者の結果発表の日の放課後であった。

文芸部顧問の高村（たかむら）が文芸部員を全員集め、結果を発表した。

『今回は三年生のみの参加でしたが、残念ながら全員が落選してしまいました』

高村は確かに「三年生のみ」と言った。一年生の亜美が出場しているはずなのに……。そもそも、十作品の内半分は二年生が占めていたはずである。

この不可解な事件の原因はすぐに判明した。それは三年生による出場作品のすり替えであった。高校最後のコンクールで校内投票落ちしてしまった三年生の生徒が、焦燥感と悔しさが故にグルになって不正を行ったのだ。

本来、顧問の高村と部長が居る限りそんな不正はまかり通るものではない。しかし、高村は学園の教師不足の為に、吹奏楽部、演劇部、文芸部の兼任顧問をしていたのでコンクール出場作品の決定に関しては部長に一任していたのだ。そして、肝心な部長は事件の実行犯の一人であった。

この不正が発覚したことで、文学部は被害者側の二年生と亜美を擁護するグループと、不正を働いた三年生を擁護するグループとに分裂し、対立を始めた。そして亜美は、高村が騒ぎを処理仕切れなくなりかけたところで、やむなくカードを切った。

『不正をしたのに謝らない、解り合おうとしない。あたしがここにいる意味はありません』

そう言い放ち、亜美はその場で退部届を書き始めた。亜美が退部するならば、暁が残る理由も無く、暁もまた退部届をその場で書いた。

もちろん、亜美には高村の説得が入った（暁はすんなり退部できたのだが）。しかし、亜美は全く意志を変えずに文芸部を退部してしまった。

その才能を認められて、期待されてきた篠原亜美の退部は、文芸部員にとって予想だにしなかった展開であった。

そして翌日、亜美の行動に触発された被害者擁護グループは亜美の退部に習い、次々に退部していった。その数は四十人にもなった。

この騒ぎは学園中に広まり、亜美はクラスメートや友人からの説明の要望に対して、例の『文芸部集団自爆テロ』の名前を出した。そして急速に学園中に文芸部の悪名が轟く羽目となった。

亜美がどこまで計算していたかは不明であるが、「自爆テロ」と言っていた以上、部員の自主退部という犠牲を払うことと三年生の引退により部員の不足が起こることまで予測していたのかもしれない。おかげで月代学園では文芸部というメジャーな部が異例の同好会への格下げを余儀なくされることとなった。

と、ここまでは亜美による復讐劇の様であるが、実際にはそこまで双方が傷ついたわけではなかった。

亜美は退部後、しばらくして「推理小説同好会」を作り上げ、そこに暁を含む自主退部した生徒を呼び込んだ。そこでは、規模は小さいが文芸部と同じ様な活動が行われた。

昨年度中には自主退部した生徒の半分程が集まり、活動は本格化してきた。そして活動が安定した時点で、亜美は推理小説同好会を脱会した。文芸部から大量の退部者を出した原因を作り、騒ぎを大きくしたから、ということで自主的に脱会したらしい。当然、暁も同様の理由で脱会した。

そして今年度の夏休み、推理小説同好会は部に昇格したはずだ。同時に文芸部を退部しなかった対立グループとの和解も済み、文芸部を吸収する形で、名称を再び「文芸部」にすることとなっている。こうして、亜美によって「文芸部」は新しい形で復活することになった。

最近でも時々、亜美は推理小説同好会に顔を出すことがあった。その度に戻って来て欲しいと、元文芸部員に頼まれていたが、亜美はその要請を全て断ってきた。その姿は後輩達に憧憬の的とされる

ことが多い。

この一連の事件が、暁が亜美を深く理解するきっかけであり、この時から暁もまた彼女を憧憬しているのかもしれない。

パンドラの箱（前書き）

今回から本格的に2章に突入します。

パンドラの箱

- 1 -

六字五十九分五十九秒。目覚まし時計のアラームが鳴る一秒前に起きた俺は一秒後に鳴ったアラームに驚いて、一気に微睡みを払った。

亜美が来て、小説の話を持ち掛けられたのは昨日のことだ。それから、しばしの睡眠を取り、起きてからは日が変わるまで宿題に取り組んでいた。

小説の期限を考えると、宿題を先に片付けるのが賢明だろう。後から両立するのは厳しい。それに亜美本人が夏祭りを優先しているぐらいだし。

ところで、いつも昼近くに起きる俺が、今日は七時に起きたのには理由がある。今日は学校に用があるのだ。

図書委員会。先月にあの重労働を課しておいて、他に何の仕事があるかと思えば、今回はあの広い図書室の清掃らしい。ただ、前回と違うのは俺と二宮光以外にも全図書委員が参加するというところだ。

と言えば今回の仕事が簡単に聞こえるが、実際には問題は多々ある。事前の決まりでは各組ごとに担当する場所が異なるのだが、パートナーが光というところがまず問題だ。光は図書室の構造と本の配置に関してはずば抜けた知識を持っているが、亜美のような行動力が無い。

そして、なにやら陰謀がありそうなのが担当場所。二階の風土記、伝記などの棚だ。どう考えても誰も見ない本のたまり場だろう。無論、埃の量は半端じゃない。この前の重労働を押し付けておいて今回もこの待遇とは、図書委員会は俺や光に恨みがあるのだろうか。

まあ、もしも予想を立てるなら、『外崎と二宮は小説オタクだか

ら』とか言われて、俺たちは大変な役回りをさせられているのだろう。もちろん、この場合「小説が好きな人」というデノテーションではなく、「小説目当てで仕事をしなそうな輩」というコノテーションが適用されるわけだが。

しかしまあ残念なことに、いつだって俺の待遇はそんなもんさ、と拗ねてみてもどうにもならないことである。

嫌がる体を無理に納得させ、制服に着替える俺の姿は、まるで先日の夢に登場した、年老いた自分の様であった。

図書室の清掃が終わったのは午後三時過ぎだった。俺は校門の前でこれから何をするかを考えていた。

時間が中途半端過ぎて何をするにも、身が入らない気がする。

「ファミレスでのんびり宿題でもするか……」

空を見上げて呟いた。心の中で「暑いしな」と付け足して。

俺は何とも言い難い気だるさの中、校門から一歩踏み出した。丁度その瞬間だった。背中に鈍い衝撃が走ったのは。

「痛っ」

後ろを振り返ると、光が額をさすりながらこちらを見ていた。

「……どういうつもりだ、光」

「ごめんなさい、追突しちゃいましたっ」

「こんなに見晴らしの良いところでどうやったら追突出来るんだよ！」

「考え事しながらランニングしてたんですよぉ」

「てめぇ、何だそのランニングって！！」

「ランニングは走ることですよ？」

「学校でランニングすんじゃねえ！！」

「体育はどうするんですかぁ」

「外国人かテメエ！！　話が通じねえ！！」

「落ち着きましょうよぉ」

「……ああ」
試合終了。日本語の通じない日本生まれ日本人がそこにはいた。
この女は普通の登場が出来ないらしい。
「暁君、なんでここにいるんですか？」
「いや、特に理由は無い。お前こそ、帰ってなかったのか？　俺、結構遅く出てきたはずだけど」
「ちょっと調べることがあって……」
光が読書以外の理由で図書室を利用するのは珍しかった。
「調べるって、何をだ？」
「八年前に出来た新興宗教団体について……です」
「何だそりゃ？」
光のふわついた感じとは全く似合わない内容である。
「遠縁の親戚の一家が最近怪しげな宗教に入ったらしくて、ちょっと気になったんです」
「怪しげって、カルトってことか？」
「いえ、カルトとは正反対のようで、神を否定するような立場だとか……。怪しいというのは、活動に関してで、法に触れないギリギリのラインで悪いことをしてるって噂があります」
光の言う「悪いこと」の抽象的な感じが、噂らしさを強調しているように思われた。
「『王里神会（おうりしんかい）』っていう宗教団体なんですが、暁君はご存知ですかあ？」
知らない名であった。神を否定しているくせに名前に「神」が付いてるのが胡散臭い。
「さあ、知らないな」
「ですよね。私もつい最近知ったんです。作られたのは八年前らしいのですが、活動は相当地味だったみたいで。ただ、今年に入ってからは活動が過激化してて、各界の著名人も入会してるとか……」
「活動が過激化ねえ……。その割には噂すら入ってこないがな」

厳密にはたった今噂が入ってきたばかりなのだけれど。
「まあ、全部週刊誌の情報なんですけどね。今日、新興宗教団体を特集したちゃんとした本を見たら、『王里神会』はヨガ教室が母体だと記述されてましたし」
「ヨガ教室……か」
「どうかしました？」
確か、十四年前に解散したあのカルト宗教も、母体はヨガ道場だったはずだ。宗教法人の認可を取るために仮面を付けている可能性もあり得る……かもしれない。……馬鹿な、十中八九杞憂だろう。
「何でもない、それより気を付けろよ。一応悪い噂があるんだろ？」
「ありがとうございます。でも、深く関わるつもりはないので、大丈夫ですよ」
「そっか……。まあ、そうだよな」
危ない噂のある宗教にわざわざ近づく人間はいないだろう。いくら光が変わり者であっても。
「それでは、私は夏祭りの用意があるので、この辺で……」
「夏祭りの用意？」
「私の父が実行委員をやっていまして、そのお手伝いです」
「へぇー、偉いな。よしよし」
俺は子どもを誉めるように、光の頭を撫でた。
「ありがとうございっ……って、子ども扱いしないでくださいよぉ！」
ノリツッコミされた。本心が出たという可能性もありそうだが……。
「じゃあな」
「え……あ、はい。また今度っ！」
光は動揺したまま、そそくさとこの場を立ち去った。
王里神会……。どう考えても俺には関係ないだろう。
そういえば、鬼頭火山が書いた小説の中に、とある宗教団体がテロを起こし、小説内の仮想国家が崩壊する話があった気がする。彼が書いた唯一の推理小説でない作品だ。

その小説で最初に犯罪が行われるのは二〇〇九年であった気がする。

くだらない繋がりであった。「鬼頭火山の予言」なんて三流作家が好んで取り上げそうなネタだ。

俺はくだらない妄想を止めるために、気味の悪い偶然が起きないことを願うばかりだ、と強制的に結論を出し、王里神会の残像を脳内から追い出した。

考えることがなくなってしまった俺は、ファミレスに行くという目的を達成するために歩き出すしかなかった。

- 2 -

自室のベッドにどしりと座り込んだ俺は、ゆっくりと壁の時計を見上げた。午後六時を少し過ぎた頃であった。

図書室の清掃が終わった後、ファミレスで宿題に取り組んだものの結局集中出来ないまま六時近くまで時間を無駄にしていた。特別何かあったと言えば、亜美から待ち合わせ時間と場所を指定したメールがあったことくらいだ。

外崎暁の怠惰が顕著に表された時間であった、そう自覚していた。「健全さを失い、品行が卑しくなること」か。先程ファミレスで居眠りしながら解いた現代文のワークで「堕落」の意味として記述されていたものだ。「堕落」「放埒」まさにそんな状態である。

暇だな……。

俺の気持ちを察してか、後で読もうと思っていた漱石（そうせき）の『こころ』が、読んでくれと訴えるように床に落ちていた。

しょうがない、読むか……。

――ピンポーン

『こころ』に手を伸ばそうとした瞬間、俺の部屋のチャイムが鳴った。

誰だろう。直感だが、知人のような気がする。
俺は鍵を開け、ドアをおもむろに開いた。
「こんばんは、暁」
目の前には全身に黒い服をまとい、黒い帽子を深く被った若い長身の男が立っていた。手にはこれまた黒色の鞄が持たれていた。だが顔が帽子で隠れていて、俺の名を知るこの男が一体誰なのか、分からない。
「失礼ですが、どなた……でしょう」
「あっ。悪いね、帽子で顔が見えなかったか……」
そう言うと男は帽子を右手で外した。
「……！！」
「気付いたかい？」
「神屋……！！　神屋聖孝（かみやきよたか）か！？」
「ああ。久し振りだな、暁。元気だったか？」
「あ、ああ。お前、突然どうしたんだよ？」
「君に用事があるんだ。時間、大丈夫か？」
「丁度暇だったんだ。まあ、上がれよ」
「ああ、サンキュー」
突然訪問してきたこの男の名は神屋聖孝。俺の小学校時代の同級生だ。確か俺と同じく、中学からは他の同級生と別の学校に通っていたはずだ。
私立中学に受験して見事受かったという話である。
会ったのは小学校時代以来である。身長が三十センチ以上伸びていて、誰だか判断できなかった。
俺は折りたたみ式の丸型テーブルを広げて、部屋の中央に置いた。
「お前、背伸びすぎ」
「洋平にも言われたよ」
「洋平と会ったのか？」
「まあね、彼にも用事があってね」
「いつのことだ？」

「つい先日さ。洋平に会った後に君の家に行ったら、もうコッチに戻ったって君のお母さんが言ってたんで住所を聞いたんだ」
「そうか。タイミングが悪かったな」
なるほど。神屋が洋平宅を訪れたのは八月に入ってからだろう。行き違いになったわけだ。
しかし、タイミングに関しては悪くはなかったかもしれない。あの荒唐無稽で絵空事まがいな事件に神屋を巻き込むことになったかもしれない。
「それで、その用事ってのは？」
俺は神屋がそこまでして何をしたいのか知りたかった。
「焦るなよ、本題に入る前にまずはコイツだ」
そう言うと、神屋は鞄から、キャンパスノートを広げたくらいの大きさの板を取り出した。表はチェス、裏は将棋の升目が書かれている。と言っても表と裏は見分けがつかないのだが。そのような造りは珍しいだろう。……というより、今まで見たこともない。
「暁、チェスか将棋出来るか？」
「どっちも、そこそこは出来るけど」
「うーん……。洋平は将棋だったし、暁はチェスでいくかな」
「俺にチェスをやれって言うのか？」
「大丈夫、すぐ終わるからさ」
自信満々なセリフだった。俺も割と強い方だが、相手の実力を知らずにそのようなことを言えるのは、本当に強いということだろう。
「弱くはねーぞ、俺だって」
「ははは。やってみればわかるさ」
神屋はいつの間にか駒を並べ終えていた。
「暁は白な」
「了解」

勝敗が付くのには、十分も掛からなかった。

俺はあっさりと敗北した。それは実力の差があり過ぎたが故に、戦意を喪失したからだ。どういうことかというと、俺が駒を置いた瞬間、神屋もまた駒を置くのだ。神屋には戦略を考えている時間が存在しない。俺が指した手を見た瞬間に、次に打つべき最善の手が自動的に決定するかのような、もしくは俺の全ての手をあらかじめ知っていたような感じだった。

「何者なんだ、お前」

「多分、僕に勝てる人は日本に数人いるかどうかだろうな」

「天才ってやつか……」

「まあ、チェスと将棋においてはね。この世に努力によって完成するモノなんて存在しないから」

深い意味がありそうだった。神屋には不思議な落ち着きが常に身を取り巻いている。

「それで、何の意味があったんだ？　まさかチェスの腕を自慢しに来たわけじゃないだろ」

「よく気付いたね。僕はチェスを使って君の性格と素質を計ったのさ。しかし、ただのゲームじゃないって何故分かった？」

「チェスの天才がザコ相手に一言も喋らずに真剣な顔してるのはおかしい。会話とチェスを切り離しているのは頭で何かを考えているからかな……と」

そうは言ったが、実際は直感で神屋の不自然さに気付いて、その理由を必死で推理していたのだが。

「面白い。やっぱり君は思っていた通りの人間だな」

「どういう意味だ？」

俺は純粋に疑問をぶつけた。神屋の話し方は相手の反応を予測しているような話し方で、流れは常に神屋が操っている。俺が突飛な質問をするような隙など僅かも無かった。

「まずは、洋平に話したことと同じ内容を話す。だが、今から話すことは僕の意思とは反しているんだ。まあ、そこはとりあえずは気にしなくていいよ」

「……分かった」
何が始まるのか。俺の推理はますます加速した。小学生の頃の友人がわざわざ何を話しに来たのか。
神屋はテーブルに両腕の肘を置き、指を組んだ状態で数秒の間を取った。室内から全ての音が消えたその時、神屋は静かに言った。
「王里神会を知っているか？」
王里神会……だと？　二宮光に次いで、神屋の口からもその宗教団体の名が発せられた。
「ああ、知ってる。八年前に出来た新興宗教団体だろ？」
これは確認としての疑問だった。
「ふうん、知ってたか。意外だな。もしかして身内が入信したりした？」
「いや、風の便りさ」
俺は機転を利かせ、光の存在を会話に出さねばならない状況になることを防いだ。
「王里神会も有名になったものだな」
「それで、その王里神会がどうしたって？」
「実はね、僕は王里神会の幹部なんだ」
「は、はぁ！？」
神屋が王里神会の幹部……だと？
「驚いたか？」
「マジかよ……。な、何のために」
「おかしなことを言うね。宗教に入信するのに理由が必要かな？」
「確かにそうだが……」
俺は戸惑いを隠せなかった。神屋が一体何者なのか分からない。少なくとも、小学生の頃の神屋聖孝とは何もかもが違った。
「王里神会の名前の由来、分かるか？」
胡散臭いと思っていた名前に由来があったのか。想像もつかないが……。
「いや、見当もつかない」

「理神論（りしんろん）だよ。『理』という字を分解すると『王里』。それで王里神会ってわけ」
「何だ、理神論って？」
俺は持っている知識をフルに使って考えたが、理神論の意味が解らなかった。
「理神論というのは、世界の根源として神の存在を認めはするが、これを賞罰を与えたり啓示や奇跡をなす神とは考えないで、奇跡や啓示の類を一切否定する説だよ。王里神会はこの理神論という考え方と、宇宙論的証明っていう、モノがある以上その制作者がいなければならないという考えを用いて因果関係を遡り事物が起こる最初の一点として神の存在を証明する方法で成立している」
神屋はすらすらと説明してみせたが、俺は正直よく解らないでいた。
「なんか難しいな」
「簡単に言えば、世界がある以上その制作者として神がいなきゃいけない。しかしその神はあくまで制作者であり、人類に禍福をもたらす性質はないということだよ」
今度は理解した。しかし、一つの疑問点が浮上した。
「しかし、王里神会はそんなことを主張して何がしたいんだ？　宗教って普通、教祖が神を代弁したり、偶像崇拝したりして幸福を得ようとするものだろ？」
王里神会の場合、絶対者としての神を信じない上に、奇跡すら認めていない。信者は何をもって幸福を望めばいいのか。
「普通の宗教は幸福を受動的に求める。だが、王里神会は能動的なんだよ」
「能動的って、つまりどういうことだよ」
「神は幸福など与えやしない。ならば自らの手で幸福を勝ち取ればいい」
神屋は誰かの言葉を引用するかのように言った。
「……」

「王里神会は近いうちに革命運動を始めるだろう。教祖はこの国をリセットするつもりだからな。それが、法に触れるような行為であっても……」

「……リセット」

俺はその言葉に底知れない恐怖を感じた。テレビゲームのリセットボタンを押すかののように、この国を一瞬で消し去ってしまうイメージが脳裏を離れない。

「宗教って呼べるのかよ、それ。革命軍じゃねえか……」

「ここ一年で、その色が強まったからな。だから僕は教祖を信じられなくなった。気付いたのさ、王里神会の幹部達はただこの国を支配したいだけなんじゃないかってね」

神屋は溜め息混じりの声でそう言った。

「結局、お前は俺に何がしたいんだ？」

俺は話を元に戻そうとした。王里神会の内部事情を俺に話して何になるのか分からなかったからだ。

「王里神会は学生や若者を対象に、王里神会への入信の勧誘をしている。信者は知り合いの中で特に世の中を否定するかのような考えを持っている人間や国に反感を持っている人間を訪問し、入会を求めるんだよ」

「それで、お前は俺や洋平が基準を満たしていると考えて勧誘しに来た」

「その通り。君や洋平だけじゃない。同級生の鳥羽や島田、西山も候補者だった。しかし、結局宗教に入ろうとするやつなんていなかったけど」

当たり前の結果だろう。高校生が宗教に入るような時代ではない。

「だけど神屋、お前は教祖や幹部達が信じられないって言ったろ？」

「ああ。それは君だけに話したことだ。僕は罪を犯すような覚悟をしてまで革命を起こそうとは思わない。神に関しての考え方や世の中を立て直すことには賛成していたが、革命と銘打って権力を手に入れるのに賛成していたのとは違う」

「だったら何で入会の勧誘なんてしてるんだよ。さっさと退会すれば良いだろ？」
神屋は依然として真剣な表情であった。数秒して、神屋は言った。
「活動が激化したこの時期に幹部の僕が退会することは、組織への反感を持っていると言っているようなものなんだ。だから形の上は王里神会に心酔していなければならない。だけど、それだけじゃない。王里神会の危険性を示すような証拠を世の中に公表出来れば、被害者も出さずに済む。今退会したらチャンスを失ってしまう」
「被害者って……。王里神会は革命と銘打って何をする気なんだよ」
神屋は俺の目をじっと見た。
「……テロだよ」
室内に極度の緊張が走った。
外でひぐらしが不気味に鳴く中、室内の沈黙を破ったのは、俺だった。
「なあ、神屋。協力したい気持ちはある。だけどな、俺はテロ組織に立ち向かう勇気も力も無い」
「分かってるさ。それが普通だ。だけど、君は絶対に僕に協力せざるを得ないんだ」
神屋ははっきりとそう言った。
「どういうことだ。俺が何故、関係のない王里神会と戦わなければならない？」
「組織にとっての重要人物のリストに、君を含めた高校生二人の名前があったからさ」
「悪い冗談はやめろよ。王里神会なんて、俺は今日まで全く知らなかったんだぞ？」
「信じないのも手だよ。僕は危険だが1人でも戦える。だけど、君が洋平達とは違って関係者であるからこそ、僕は機密情報まで君に教えたんだ」

嘘を言ってる様には見えなかった。しかし、俺が王里神会と関係があるわけがないのだ。

「……どうやって、戦うつもりだ？」

「警察が一斉調査に踏み切れるような情報を持ち出せ次第、警察かテレビ局か、バレないようにどこかしらに送るつもりだ」

「……そうか」

再び沈黙が室内を支配した。何が何だか解らなかった。王里神会がそこまで危険な組織だとは思っていなかったし、俺が関係者だというのも、信じられない。

「気が向かないようだね。それなら、僕はそろそろ帰るよ」

そう言うと神屋は立ち上がり、玄関に向かった。

「待てよ！　俺の名前が何故リストに入っていたのかお前は知らないのか？」

「それを僕が言った瞬間、君の性格上関わらざるを得ないだろう。だから、決断は君に任せるよ。『協力せざるを得ない』って言ったけど、それは君がリストの内容を知った場合の話だ。君が君の進む道を選択すればいい」

「選択って、どうやって……」

神屋は玄関のドアを開けて外に出た。そして、ドアを閉める前に言った。

「暁、君が盤上でキングとして戦うとき、その戦いの理由を確かめないのも一つの手だよ。だけど、もしその戦いの理由を知りたいなら、しっかり地を踏みしめるんだね」

俺は、ただ神屋が部屋から出て行く姿を眺めるしかなかった。

頭が痛かった。混乱状態に陥って、神屋を呼び止める力さえ沸かなかったのだ。

俺はしばらくの間、姿の見えない恐怖でその場に立ちすくんでいた。

俺は見えない恐怖から逃げ出すように外に出ていた。辺りが暗くなっても、ただ歩き続けた。

自分の身に起こった不可解な出来事を細部まで見つめ直した。

王里神会は全知全能の神や奇跡や啓示を信じない。だから幸福を自分で手に入れる為に国家を攻撃しようとしている。それを阻止しようとしているのが神屋聖孝。神屋は俺が王里神会から重要人物扱いされていることを知り、俺に協力を求めてきた。

そして、俺は選択しなければならない。神屋に協力するか、全てを忘れて今まで通り過ごすか。だが、俺の気持ちが後者に傾いていることは明らかだった。

俯きながら歩いていると、俺はいつの間にか夜光公園（やこうこうえん）に来ていた。たどり着いたと言った方が正確かもしれない。たった一つの街灯が木々、大地、数少ない遊具を仄かに照らす。

人口的なオレンジが、何故ここまで幻想的な空間を作り出せるのか。春に来たときは、俺がこういう美しいモノを避けているからだと思った。あの頃はそれで正しかったのだと思う。

今はどうだろう。あれから綺麗なものを沢山見た。それでもここは不思議な世界だった。

気持ちが落ち着くと、いろいろ思うところがあった。神屋は、本当に王里神会を潰す為に俺の協力を求めたのだろうか。あいつにとって、俺はそんなに強い存在なのだろうか？

違う。俺は誰よりも弱いんだ。解っていたんだ、あいつの望みを。神屋はたとえ弱くても、友の存在を心に刻みたかったんだ。自分が信じたものに裏切られ、なのに戦おうとしていたんだ。

それが解っていても、俺は「いつも通り」を望んでいる。あれだけ、嫌っていた平凡でつまらない生活を心から望み欲している。

変わったと思ってたのに、実は何も前進していない。「脱出」出来ていない。

頭痛は勢いを増した。視界が霞む。俺は倒れるようにベンチに座り込んだ。

何分経ったろう。ベンチに座り、深く瞼を閉じていると、どんどん闇に堕ちていく感じがした。その感覚は底なし沼に沈んでいくように抵抗も出来ない無力感の中で感じる、唯一の感覚であった。

消えかけた意識の外から、小さく声が聴こえる。

声がだんだんと近づいて来る。……いや、違う。俺が闇から引き上げられているのか。

視界が徐々に開けていった。

「おい、大丈夫かよ？」

目の前には木原晋也（きはらしんや）がいた。パーカーとジーパン。いつもはもっとチャラついている服装の晋也だが、今は割と地味な格好だ。

「晋也か……。悪い、ぼーっとしてた。お前、ここで何してんだ？」

「コンビニ行って、帰り道でここを通りかかったらお前見かけたから立ち寄ったんだ。しかしお前、意識が無かったように見えたけどな」

「心配するな、俺は大丈夫だよ。それより、あの後体は大丈夫なのか？」

「ああ。あんなのは手術後は嘘みたいに元気になっちまうもんだ」

「そうか、良かったな」

心から良かったと思った。もし、晋也が死んでしまったら、借りが返せない。

晋也は、俺の隣に座って、ふと空を見上げ、そのまま固まった。

「ここって、星すくねーよな」

「そうだな」

晋也はそのことに今気付いたようだった。

「なあ、暁」

「なんだ？」

「お前さ、まだ鳴海に謝ってんのか？」
「……は？」
「お前、責任……感じてんだろ？」
「……ああ。だから俺は変わる決意をしたんだ。ずっとずっと前にな。なのに、変われてない。努力すれば変われるんだ。だけど、俺はそれを怠ってる」
晋也は黙り込んだ。
ごめん晋也、お前に俺自身への愚痴を言ってもしょうがないよな。
虫の声は美しく響く。俺の空っぽの心には、その響きは大き過ぎた。
「暁、お前は転んだ人を笑うか？」
晋也はそう俺に尋ねた。俺には意味が解らず、答えられなかった。
「俺はな、転んだ人を笑うのはいけねーことだと思うんだわ。だって、そいつは前に進もうとしていたんだぜ？」
「……」
「何もしなかったヤツは笑われ、馬鹿にされるべき人間だ。でも、前にしっかり進もうとしていた人間はたとえ転んでも、恥ずべきことなんてしていないんだよ。お前は転んだだけだ。そこにただ立っていただけのやつなら、転ぶことすら出来ない。転んだのは、進もうとしていた証拠だ」
「晋也……」
「立ち上がれば、まだ進めるだろ？　それなのに、全てを諦めたような顔すんなよ」
晋也は不思議なやつだった。俺に起きたことを知らないはずなのに、俺がもう一度立ち上がる為の何かをくれる。
「旧友が苦しんでるんだ。でも俺は見捨てて逃げるつもりになってた」
「……そうか。それで？　お前はこれからどうするんだ？」
「役に立つかは分からないが、一緒に戦う」
「……ハハハ。やっぱそっちの方が本当のお前らしいな」

晋也は、そう言って笑った。
「助けられてばっかだな……俺。晋也、ありがとな」
「何言ってんだ。気付いてないかもしれないが、同じくらいお前は人を助けてんだぜ！」
俺が人を助けている……。もしそうなら、少しだけ自信が持てそうな気がした。
それから、晋也は「帰るか」と言って、公園の入口に向かった。
その後に俺も続いた。
「またな、晋也」
「ああ」
俺が帰ろうと、晋也のいる方向から回れ右すると、後方の晋也が思い出したようにこう言った。
「あっ。おい暁！　亜美ちゃんにさっきみたいな死にそうな顔……絶対に見せんなよ！！」
俺は、首だけ幾分晋也の方に向けた。
「分かってる」
俺がそう言うと、晋也は安心したように笑った。
晋也は中学の頃俺のことが嫌いだったのかもしれない。だから、俺たちは決して関わらずに互いの人生を歩んで行くはずだった。
俺たちの前から消えてしまった「あいつ」がいなきゃ、俺たちは今互いを解り合っていないだろう。
だから、晋也もまた、あいつに謝り続けているんじゃないだろうか……。
友を失うのはもう嫌だ。神屋に対して、俺が何を出来るか分からないが、もしかしたら何も出来ないかもしれないが、それでもやれるだけはやる。そう……決めた。
夜風と共に、俺は走り出した。

自宅に戻った俺は、まず冷蔵庫に向かった。真夏に馬鹿みたいに走ってしまった自分に呆れていた。喉が渇いて死にそうだった。

炭酸飲料を体が欲していたが、賞味期限が今日の牛乳を見つけてしまったので、そちらを手に取った。喉が渇いていたので牛乳でも、いつもよりおいしく感じた。

生き返った俺はふと、テーブルを見た。卓上にはチェス盤が、俺が負けた時の状態で置いてあった。

――神屋のやつ、忘れていきやがったな。

片付けようかと思ったが、駒を入れる為のケースが無かった。

「意味分かんね」

ケース無しのチェスセットがあるのだろうか。しかも、このチェス盤は裏返せば将棋盤にもなる。つまり、将棋の駒も収納しなきゃいけないはずだ。鞄の中にケースがあって、鞄に入れたままそこから駒を一つ一つ出したのだろうか……。

俺はそんな僅かな疑問に何故真剣になっているのか。それはおそらく、神屋の言動があまりに完璧過ぎて、小さな不手際にさえ違和感を感じるからであろう。

神屋はどう見ても、このような明らかに遠回りなことをするようには見えない。……もしかして、この行動に意味があったのか……？

そう考えると、俺が疑問を持つこと自体が神屋の意思によって引き起こされたものなのだろうか。

そこまで至って、俺は携帯のカメラ機能でチェス盤を真上から撮った。最初の状態を撮っておけば、その後何をしても大丈夫だからだ。

さて、神屋はこの丸型テーブルの上のチェス盤を使って一体何をしたかったのか？

チェス盤を眺めていると、どうやら先入観が思考を妨げていたらしいことに気が付いた。俺はテーブルの上のチェス盤を見たとき、

負けた時の状態だと思った。しかし実際はそうじゃないようだ。
俺は確かに神屋にチェックメイトされたはずであった。だが、俺の目の前のチェス盤の上では、神屋の黒い駒は俺の白いキングにチェックすらしていない。その異変の原因は白のキングの位置が変わっていることだ。おそらく、神屋が俺の目を盗んで位置を変えたのだろう。
キングの位置は俺の座っている方向、白の側の一番手前、右から二番目の位置に変えられていた。
「どういう意味があるんだ……」
キング……キング？　キングとして戦う……神屋がそんなようなことを言ってたような……。
「思い出した……」
神屋が部屋を出たとき、あいつは言っていた。『君が盤上でキングとして戦うとき、その戦いの理由を確かめないのも一つの手だよ。だけど、もしその戦いの理由を知りたいなら、しっかり地を踏みしめるんだね』……と。
あのとき俺はパニックに陥っていて、神屋の言っていることの意味を考えもしなかった。
『君が盤上でキングとして戦うとき』は白のキング、『戦いの理由』はリストに俺の名前があった理由だろう。そして、『地』がチェス盤。
白のキングが神屋によって動かされていた以上、やるべきことはたった一つだ。
俺は盤上の駒を全てどかした。そして白のキングが置かれていたマスを右手の人差し指で強く押した。足で地を踏みしめるかのようにして……。
――――ガチャッ。
チェス盤は音を立てて浮き上がった。厚さ一センチ程の板の上半分が、四隅に仕込まれてあった小さな柱によって持ち上げられたのだ。内部に隠されていた柱は白のキングが置かれていた場所を強く

押すと上下に伸びる仕組みだったようだ。
「神屋、お前はホントに天才みたいだな」
そう呟いて、俺は天を仰いだ。
この仕掛けを失敗させずに遂行するのは、俺の心理を正確に読み、さらにそれを操作する必要がある。それに驚くべきは、俺と神屋が最後に会ったのは小学六年の頃だということだ。俺の心理を操作する為の情報は無いに等しい。ここに来てから俺の性格を把握したということだ。神屋は常に冷静で、かつ観察力がずば抜けている。
神屋は観察力、亜美は表現力、竜司は数学力、静枝は記憶力、洋平は言語力、如月は身体能力。俺の周りは何で天才ばかりなのか……。
晋也は人を元気付ける力があるし……。光……。お前と俺だけだ、しょうもない才能を持ち合わせているのは。
少しだけ哀しくなった俺だった。
気を取り直して、チェス盤に目を落とす。チェス盤は柱によって接続されていて相変わらず上部と下部が離れない造りだった。しかし、四隅の柱によって持ち上げられていることで、上部と下部の間には五ミリほどの隙間が出来ていた。
中は空洞で、そこにはＡ５のプリントが二枚入っていた。この二枚の用紙に、俺が重要人物リストに載っている理由が記されてあるはずだ。俺はすぐさまチェス盤を斜めに傾け、中からプリントを取り出した。
そして俺は胸を高鳴らせ、一枚目のプリントに目を落とした。
「！！！！　……神屋、そういうことかよ。俺が協力を余儀なくされる理由か……。俺はパンドラの箱を開けちまったらしいな」
プリントにはこう印刷されていた。

七月二十五日配信

下に記した二名の月代学園生徒を「V事件」の重要人物に指定する。

外崎暁（とざきあきら）　十六歳　男

篠原亜美（しのはらあみ）　十六歳　女

以上二名の個人情報に関しては現在不明。

それはおそらく神屋ら幹部に送信された王里神会本部からのメールを印刷したものであると推測できた。神屋の言った「戦いの理由」は、俺がリストに載っている理由ではなかった。それが真に示していたのは俺が協力せざるを得ない理由という、より直接的なものだったのだ。

俺には、この謎めいた展開に嫌な予感しかしなかった。俺だけでなく、亜美までもが、リストに記載されていたのだ。俺や亜美が王里神会にとって、どう重要であるというのか……。

これで俺は、引き下がる訳にはいかなくなった。王里神会がどんなことをしてくるか分からない以上、俺が能動的に戦う他ない。そうしなければ亜美にまで危険が及ぶかもしれないのだ。そして、その為には神屋に協力する必要がある。

神屋の作戦は巧妙だった。いや、上手く状況を利用した……という方が正確だが。

ただ、神屋はこれだけの好カードをもっておきながら、最後には俺の選択を望んだのだ。

俺は、利己的な精神に支配されていた。晋也がいなければ、亜美にまで危険を及ぼしていたに違いない。とはいえ、神屋への協力を決意しても、亜美を危険から守れる保証はないのだが。

とにかく今は、情報が少なすぎる。

……まてよ。プリントは二枚。もう一枚には何が書かれているんだ？　亜美の名前を見つけた瞬間、二枚目があるということをすっかり忘れていた。

俺は二枚目を手に取った。

そこには、神屋からのメッセージが記されていた。

暁へ

まず、君の大切な人間を利用するようなことになったことを謝罪しよう。申し訳なかった。しかし、僕の意思に関与しなくとも、篠原亜美が王里神会から重要人物と指定されることにはなっていた。君たちの重要度はまだそこまで高くはない。僕の指示に従えば、危険はないだろう。

君が僕に協力するかどうかの答えは、すぐに君本人の口から直接聞くつもりだ。君とはすぐに再会することになるだろう。君が「戦いの理由」を知る決意をしたならば、チェス盤の仕掛けを破りこの文書を目にするのにはそう時間は掛からなかったはずだ。この文書を見たならば、君は僕に協力する気になってくれただろう。次に会うときは、さらに詳しい情報を話そうと思う。僕の協力者としてやって欲しいことの内容はその時に話そう。

篠原亜美に君が知ったことを話すか否かは君に任せる。君が危険と思うなら話さなければいい。

最後に、この文書を読み終えたら、この文書は他人に見せることのないように注意してほしい。君の協力を期待している。

神屋のメッセージは、極めて正確に俺の行動を予言していた。その日の内にチェス盤の仕掛けを解くことさえ予期していたように思

われた。
やはり俺がチェス盤を見たときに、必ずや違和感を感じるだろうと読んでいたようだ。
しかし、俺を試していたという可能性もある。なぜなら、このメッセージは神屋が俺の実家を訪ねた時には既に仕込まれていたかもしれないからだ。
だとしたら、俺は神屋の仕組んだテストにまずまずの結果を残せただろう。
神屋がいつ来るかは分からないが、今俺が出来ることは神屋の接触をただ待つことだけだ。
そして明日の祭で亜美に会うまでには、今日あった事を亜美に話すかどうかは決めておかなければならない。
自分が亜美を守れるのか。そんな不安は何度打ち消しても湧いてくるに違いない。だが、晋也は俺も人を助けられると教えてくれた。それを信じるしかなかった。
俺がもし、パンドラの箱を開けてしまったのなら、「希望」まで箱の外に出すわけにはいかない。残された希望を掴み取るのが人間だ。

その日の俺は、この物語の結末がどんなものになるのか、まだ予想も出来ずにいた。蒼天のチェスゲームは既に動き始めていた。

月光と野獣

-1-

夜の道に足音が響いた。

ザッザッザッ……。

黒の上下に、黒い帽子。さらに、膝下まである黒のロングコートを羽織った神屋聖孝は、まるで中世の黒魔道士を連想させる。

それにしても静かな住宅街だった。

まだ夜の七時半であるにも関わらず、神屋は、まだ人っ子一人通らないこの住宅街を不思議に思っていた。

しばらく歩き続けると、大通りに出た。車通りが激しく、人通りも多い。

先程まで歩いていた住宅街が、まるで別世界に思える。神屋は振り返った。やはり、住宅街からは何の騒音も聞こえてこない。唯一、意識した音は、自分の足音と虫の音くらいであった。

向き直ると、目の前には男が立っていた。暗闇の中、ジッと神屋をうかがっていた。妙な威圧感がある。男は、神屋よりも背が高く、月光に照らされた盛り上がった腕の筋肉は、凶悪な暴を直感させる。真っ黒のズボンに真っ黒のタンクトップ。そして、銀色に輝く十字架の首飾りに、綺麗に整えられたオールバックヘアー、何より目立つのは、右目の縦に刻まれた不治の切り傷。強大な暴を匂わせるこの男を、神屋は知っていた。

「今晩は、上条誠也（かみじょうせいや）」

上条は軽く笑ったあと、神屋に付いてきて欲しい所があると伝えた。

「どこへ行くんだい？」

神屋は満月を見ながら、隣を歩く上条に尋ねた。上条は、逆に質問した。

「何故、気になる？」
神屋は答えず、上条の足音を立てない特徴的な歩き方を観察し、黙っていた。上条はさらに続けた。
「わかることだ……。わざわざ、聞くほどのことでもない。違うか？」
上条と神屋はおよそ二十分余り歩いて、目的地に到着した。上条は、夏なのに何故羽織っているのかと神屋を何度も疑った。神屋は、暑くないのだと聞かれる度に応えた。
上条と神屋は、聖蘭第一女子高等学校へと侵入した。
テニスコートからは、まだ部活をする女子生徒の蒼い声が響いた。
「ここにターゲットがいるのかい？」
神屋の質問に、上条は黙って頷いた。校舎に潜入し、教員に見つからないようにある場所を目指す。
夜の廊下は暗かった。
二年五組の前で、上条は立ち止まった。
「ここ？」
「ああ……」
上条は、ガラガラとドアを開いた。中には、女子生徒が一人いるだけだった。女子生徒は、入ってきた怪しげな二人組を一瞥すると、興味なさげに携帯画面に目を戻した。
「あの娘？」
「……違うな」
女子生徒は、自分のことを言われているとに気付いたが、敢えて顔を上げなかった。
「普通は、この時間には帰っちゃうんじゃないかな？　帰宅部なら……」
神屋は、壁に貼られた掲示物を横目に呟いた。
上条は、座って携帯をいじる女子生徒に話しかけた。
「平沼凛（ひらぬまりん）を知ってるか？」
女子生徒は携帯をいじるだけで、上条の言葉に反応する様子を見

せなかった。
「おい」
上条は女子生徒に近付いた。すると、女子生徒は携帯から目を離し、上条を上目遣いで睨んだ。
「平沼凛って知らないか？」
上条は、もう一度聞いた。
数秒の間を置いて、女子生徒は「知ってるけど何」と言った。
上条が、平沼はどこにいるかと尋ねると、女子生徒は、今は職員室にいるがそのうち戻ってくるなどと応えた。
「ここで待つわけね……」
神屋は、溜め息をつき、机に腰を下ろした。
十分待っても平沼が現れないため、上条は、もう一度、女子生徒に聞いた。女子生徒は、待っていれば来ると言った。
さらに十分待ったが、平沼は現れなかった。神屋は、教室で偶然見つけた将棋盤を手に、
「一局どう？」
と上条を誘った。
パチパチパチ……。
静かに将棋は始まった。上条が駒を置いた次の瞬間、神屋も駒を置くわけだが、神屋が駒を置いた次の瞬間には、上条も駒を置いていた。あたかも、初めから打つ手は決まっていたかのように……。
百手も指すと、上条の手が止まった。上条もかなりのやり手だが、所詮、神屋には及ばないということだろうか。
女子生徒は、横目でその戦いを眺めては、携帯をいじった。
「……神屋、また腕を上げたな」
「そうかい？　将棋よりチェスが本場なんだけどね」
「しかし……、甘いな、お前も」
「え？」
上条は、神屋の予期しないマスに駒を置いた。神屋は、一瞬だけ止まった手をすぐに動かし、駒を置いた。

パチパチパチパチ……。
「びっくりしたよ。絶対にアソコは銀だと思ったよ」
「ああ、だからこそ、角を捨てて、金を得た」
「……損しただけじゃないかい？」
「どうかな」
上条は、王の前に金を置いた。神屋は、その金の守りを破壊するため、飛車と角のコンビネーション攻撃を企んだ。
「どうやって回避する？　この大砲。受けたら、致命傷だ」
上条は、手を止めて考えていた。
「確かにな、だが……」
またも上条は、神屋の予期せぬ所に駒を置いた。神屋は、さらに大砲の威力を増すため、飛車の前に香車を置いた。次で詰む手である。
「やっぱり、アソコで角を犠牲にしたのは大きかった……。僕の勝ちだ」
「……」
上条は、無表情で投了した。
「……何故、あんな悪手を？　わかっていたはず、アソコは銀を打つべきだと」
上条は、神屋の顔を覗き込んだ。そして、こう言った。
「神屋、最強の力とは何だ」
神屋は、黙って上条の言葉を待った。
上条は、薄ら笑いを浮かべながら語り始めた。
「如何に……、頭がよく、数学ができようとも、将棋ができようとも、そう、たとえチェスができようともだ……、かなわないんだよ。あるひとつの力には」
神屋は、上条が言わんとしていることを知っていた。
「暴力には」
そう言うと、上条は笑い出した。神屋も笑った。「確かにそうだ」と言って笑った。

「俺に暴力で勝れる人間などいないだろう、ククク」
「……フ、そうは、ね」
「ククク、ククク……」
女子生徒が立ち上がり、二人に近づいてきた。
「凛に何の用？」
怪しげな目で、二人を見据える。
上条は、思い出したように言う。
「あの女、いつになったら来るんだ？」
「質問に答えて」
神屋が女子生徒を見上げる。
「ちょっと、彼女に話があるんだ。別に危ない連中じゃあないよ」
神屋は笑顔で言ったが、女子生徒の不信感は拭えない。
……暴力がどうとか言うから、怪しまれてしまった。上条、君のせいだぞ。
神屋は、視線だけで上条に訴えた。
上条は立ち上がり、女子生徒を諭すような論調で話し始めた。
「大丈夫。俺と平沼は知り合いだから……何も怪しむことはないよ」
「知り合い？　信じらんない」
「人を見た目で判断するのは、良くないな」
「……大体、あんたら、どうせ無断侵入でしょ？　普通なら警察呼ぶよ。ここ、女子校だし……、怪しすぎ」
「よく喋るな。この俺に対して、文句とは……、笑えるぜ」
「わっけわかんない」
女子生徒は教室を出て行こうとした。
「ちょっと待って！」
神屋が呼び止める。
「何？」
「取引しよう」
「はあ？」
神屋は立ち上がり、徐々に女子生徒に近付きながら、

「僕たちのことを放っておいてくれないなら、考えがある」
「……何なの??　考え?」
「僕たちはただ、平沼さんと話したいだけなんだ。できれば邪魔されたくない。もし、君が勝ったら、大人しく帰るよ」
「……勝負って?」
神屋は振り向いて、それを指差し言った。
「ちょうどあそこに将棋盤が出しっぱなしだ。どうだい?　将棋でも……、ルール知ってる?」
上条はそれを聞いて笑った。お前に勝てる奴などいるわけないだろう、ましてや、そんな小娘など……、という呆れた意味合いも含まれていた。
「ダメかな……、ルールがわからないなら、別の方法で……」
「本当に、負けたら?」
「ん?　ああ、帰るよ。将棋できるの?」
女子生徒の口元が、僅かに緩んだ。
「まぁ……そっちには強そうな人もいるみたいだし、こっちは約束破られてもどうにもできないんだけどね……、どうせ負けても帰らないでしょ?」
「いや、僕は帰るよ。上条はどうだかわからないけど……」
神屋は上条を一瞥した。
「やっぱね。あのさ……取引内容を変えたいんだけど」
女子生徒は、何かを企んでそうな笑顔で言った。
「何か企んでそうな顔だね……。言ってみてよ」
一呼吸置いて、女子生徒は言い放った。
「もしアンタが勝ったら、言う通りにほっといてあげる。けど負けたら、正体を暴露してもらう」
神屋は、相変わらずの無表情で、女子生徒の意表を突いた。
「……正体?　何のことだい?」
「ハハ、誰だって感じ取れるってば。アンタらが普通じゃないことくらい」

「……何を言ってるんだい？　……正体なんて、隠すまでもない」
「え……」
「僕たちは、王里神会だよ」
「……なっ」
女子生徒は、驚愕の表情を浮かべた。

- 2 -

神屋の言葉を聞き、女子生徒は驚愕した。思わず一歩下がった。
「王里……神会」
「もしかして、その反応、知ってるのかな」
「王里神会!?」
「……うん」
「……知ってる」
「もしかして、入信希望者？」
「いや、違うけど。……あの、もしかして、悪いことしてるっていう、あの？？」
「……ああ、確かに、週刊誌とかだと悪く言われてたりするかな、割と」
「へー、本物なんだ」
さっきまで怪しんでいた表情の女子生徒だったが、徐々に好奇心が湧いたかのような活気さえ感じさせる顔つきになっていった。
「で？　その王里神会の二人組が、凛に何の用？　もしかしてただの宗教勧誘とか？」
女子生徒は面白そうに聞いたが、「その通りだよ」という神屋の平坦すぎる答えに興をそがれてしまった。
「ふーん、ま、いいや」
「ん？」

「嘘は言ってなさそうだし、ほっといてあげる」
「そうか」
「でも……」
「ん？」
「怪しいっちゃ怪しいんだよね、やっぱ」
「……」
「そーね～、これも何かの縁かな。勝負しよっ。将棋」
「え」
「いいでしょ」
女子生徒は、将棋盤の置かれた机の前に座った。あとから神屋も席に着いた。
「学校の教室まで宗教勧誘に来ちゃった人と将棋しちゃうとか、ネタにできるよ」
そう言って、女子生徒は笑った。
「ハハ……僕はネタの為に一局打つのか」
自嘲気味に笑った神屋を見て、小さく笑った上条を神屋は見逃さなかった。
「ネタの為？　実質的にはそんなんじゃないよ」
女子生徒は、駒を並べながら言う。
「あんたが負けたら、王里神会が何を企んでいるのか……、本当のトコロ、教えてよね」
「……いいよ」
駒が並べ終わった。
「約束だからね。負けたら、洗いざらい吐いてよ」
女子生徒は、念を押すように言った。
「王里神会が何をしているか……それは勿論、入信した者にしか教えられない。そもそも、宗教勧誘の時点で、その活動内容の全容は明かしてはならないと決まっているし、裏があるかのようなほのめかしも禁止されている。ただ、僕は嘘が嫌いだ。見知らぬ、しかも今日会ったばかりの人間、つまり君にでさえ嘘はつきたくない。た

がら、僕はこれだけは約束しよう。もし僕が負けたら、話してあげるよ、裏の部分を」

話し終えると、神屋は女子生徒を見つめた。

女子生徒は、視線を盤上に逸らし、

「なかなかいい男みたいね、立派立派」

と笑った。

「へっ！　教祖がこの会話を聞いてたら、お前の首は飛んでるぜ」

上条がニヤニヤしながら皮肉を言った。

「そうだろうな。だけど、僕は君を信頼している。君も僕を信頼している。そうだろ？　それに、万が一にも、僕は負けないよ」

「はは、参った参った」

上条は、お手上げのポーズをとって、教室から出て行った。トイレにでも行きたくなったのだろうか。

「それにしても、大した自信だね」

女子生徒は、パチンと駒を鳴らした。

「まぁね。自信ならあるさ」

神屋も、駒を動かす。

戦いは始まった。

「どのくらいの自信？」

「そうだね、僕に勝てるのは日本に数人いるかいないかってとこかな。……それよりさ、王里神会について知りたいなら、入信しちゃえばいいのに。まぁ、単なる興味本位だろうから、押し付けはしないけどね」

「アハハ」

パチパチパチパチ……。

「打つの速いね」

「よく言われるよ。君もかなり速い方だと思うけどね、僕は」

戦いの展開は早かった。まだ神屋の陣形に守りが作れていない隙に、女子生徒は一気に攻めにかかった。

……強引だな。しかし、その割には謙虚な誠実さも読み取れる。

将棋を打ちながら、神屋は女子生徒の性格を分析していた。チェスを打つときも同様だった。一挙一動に対しての反応で、その人間の本質を見抜くというその洞察行為は、もはや彼にとっては癖そのものであった。勿論、自身の腕にに相当の自信があると、彼は自負しているからこそできる芸当なのだが。

「なかなか打つ。どこで将棋を覚えたんだい？」

「あのさ、ずっと気になってたんだけど、その胡散臭い喋り方は何なの？　キャラ作り？」

「……」

「アハハ、でも、似合ってるかも。その方が。だって、宗教勧誘員だもんね、怪しいもんね」

「……ん、へえ、右四間か。というか、君、かなり強いね」

「どうも、でもお互い様」

「そうみたいだね」

パチン。

「あっ」

「甘いよ。十二手前の銀成りが悪手だった。残念だが……」

「なんちゃってね」

「ん？」

女子生徒は、意表を突いてやらんとばかりの、強引すぎる捨て身の角成りに打って出た。

「その手も悪手じゃないかな」

神屋は、冷静にそれを受けた。だが、天才的な神屋であるからこそ、それに気付いてしまった。

……しまっ……！！

「残念。狙いは、こっちの飛車のカウンター。手遅れね」

女子生徒は、相手の歩を飛車成りと同時に頂いた。その飛車を銀で取ることはできるが、それをやってしまうと、角成りが王の首元をえぐり取りにやってくる。どっちつかずの状態。初めて神屋の手が止まった。

「どうしたの？　さっきまでの勢いは」
女子生徒は顔をニヤつかせている。
「ちょっと見くびり過ぎたのが敗因じゃない？　悪手っぽい手を連続で打たれて、気がほんのちょっと緩んだってとこ？　強過ぎるってのも考えもんね」
「……うそだろ。僕が……、こんな……」
神屋は、これからどう足掻いても、目の前の女子生徒に勝てはしないことを知ったとき、「投了だよ」と小さく呟いた。
神屋は、目の前でニコニコしている女子生徒を改めて一見した。髪は金色に染められ、顔はかなり可愛らしく整っている。スカートはかなり短く、とても生活態度の良い学生だとは思えない。そんな小娘に、自分は負けた……。神屋は、自分が負けたことに対し、次元を超えた疑問さえ感じていた。まさか、こんなことはあるはずがないと、彼は困惑した。突きつけられた事実が信じようにも信じられない。
一体……、
「……何者だ？　君は……」
……将棋でこの僕を……、初めから、見透かしていただと。
落としていた目を、神屋はもう一度上げた。神屋は、余りに久しぶりに味わう得体の知れない感覚にただただ身を任せていた。
「……名前は？」
女子生徒は、笑顔で言い放った。
「うちは佐藤静枝、十七の女子高生でぇーす！！」

聖蘭第一女子高等学校の化学を教える教師は、皆、頭が堅い。職員室で平沼凛を三十分近く説教していた金谷も、その内の一人である。
ようやく終わった提出物を巡る論争に、平沼凛は過度のストレスを感じていた。

……あのハゲめ。

浮かない表情で廊下を歩く凛の目が、突如、一瞬だけ捉えたのは、背後で蠢く影であった。

……だれ！？

凛は振り返った。

廊下の奥の暗がりから、ゆっくりと足音を立てて、凛に近付く影があった。

背が高い。身体が大きい。

凛は、その輪郭に見覚えがあった。凛は自然と、それが誰だか感覚的に理解していた。

かつての面影が、ついに月明かりに照らされたその顔に見て取れた。

……誠也。

言葉が出てこない。思わず、顔をうつむけた。

上条は、無表情に凛を見つめていた。凛は、少しするとうつむけていた顔を力無く上げて、野獣と目を合わせた。思い出が脳裏を巡る。野獣の片方の目は、未だ開くことはない。

もう開かない、その右目……。

「凛か」

その声は、あまりにも平坦としていた。感情の一切が読み取ることの容易ではない声……、たが、そのような声を上条が発するからこそ、凛は余計に苦しくなった。

「……何で、ここに……？」

「少し話があるんだ」

凛は、上条に施され屋上へと同行した。

空は星がきらめき、月明かりが異様に明るかった。その淡い光に照らされた上条は、まるでくすぶっている野獣のようだ。まだ、一度は燃えた恋の炎を、自らの手で消せないでいるかのような……、しかし、その恋が実らないことを野獣は知っていた。

「久しぶりだな」

上条の声は至って平坦だった。上条は、自分の置かれた状況について簡単に説明しだした。凛は、区切りのいい所で「うん、うん」と頷いた。依然として、その表情は暗かった。

「宗教の勧誘にきたわけ？」

久しぶりの再開の理由がそれなら落胆だ、といった意味合いの含まれた聞き方だった。

「お前に会う理由が欲しかっただけだ」

上条は、暗い街を眺めてそう言った。上条の左目には、何が映っているのか、それは彼にしか知りようがない。

「……今さら何の用？」

凛の顔は暗かった。

「さっきも話したよな……、俺は、革命を起こすであろう集団に属している。もう引き返せない道を、歩いている」

「……」

「革命は近い」

「あたしに何の関係があるの？　そんな危なそうな宗教なんか、入らないからね……」

上条は振り向いた。

「俺は、正直に言って、まだ心の折り合いがついていない」

上条は、凛に向かって歩き始めた。

「今さら、寄りを戻せなどとは言わない」

凛のすぐ目の前で立ち止まった。

「ただ……、俺は……」

「……」

「……俺……は……」

「もう……いいよ」

凛は、痛みに耐える表情を浮かべて、そう言った。

上条に背を向けて、歩いて行ってしまった。

一人、残された野獣は空を見上げた。そして、ふと視線を下に落とすと、月明かりに照らされた己の影を見て、憐れみを密かに想っ

たのだった。

幸せと感動と異端と……（前書き）

今回は2話同時の公開を予定してましたが、1話になりました。

幸せと感動と異端と……

-1-

神屋からのメッセージであるプリント二枚を手にとって、暁は、疲れた身体をベッドに休ませていた。

時刻は、ちょうど九時を回った頃だ。

「……V事件て、なんだ……？？」

わからないことは、山ほどあった。しかも、浮上する全ての疑問に対し、答えは出ない。全ては、神屋の自作自演だとしてしまえばそれまでだが、心の奥の暁がそれを許さない。何故なら、神屋の話に嘘はないと、暁自身、信じて疑わないからである。

……逃げてはならない。

暁は、己が運命に降りかかった闘いの宿命を予感した時、ただただ茫然とした。

「なんで俺は、こうも、トラブルメーカーなんだ。くそっ……、悔しいです」

部屋の電気を消した。瞼を閉じた……――――。

目が覚めると、そこは真っ暗な地獄だった。希望も夢もない、ただ嫌悪と虚無が入り混じった、何とも言えぬ朝……。いや、外はまだ暗く、朝の面影は見て取れないが……。

少しの間、ぼーっとしてから、俺は今日の時間割を思い出していた。国語、数学、数学、英語、体育……、あとは何があったか、よく思い出せない。

時間が迫っきた。

俺は、スクールバックに教科書などを詰め込み、そして、制服に着替えた。今日もまた、何の意味もない一日が始まった。ああ、早

く休日が来てくれればいいのに……。
食欲が沸かなかったので、朝食は抜かした。ドアを開け、すっかり明るくなった外の世界に足を踏み出した。
孤独には慣れていた。たった一人の登校など、何ら苦ではない。一人で登校している奴なんて、いっぱいいるじゃないか。
住宅街を抜けて、車通りの激しい大通りを渡る。そして、今度は商店街の横を通って、すると、田舎っぽい風景に出くわす。周りは、田んぼだらけだ。そこをずーっと歩いて、右に曲がる。そして、学校に着く。全く、長い道のりである。いつも思うが、早く自転車登校に変えたい。
教室には、まだ誰も居なかった。俺はいつも一番に着いてしまう。暇な朝だ。
……早く帰りたい。
時間は、目まぐるしいほどのスピードで加速した。気付けば、三時間目の数学の授業に入っていた。
「はい、じゃあコレ出来たら、周りの人と相談して下さい」
俺は困った。周りに知り合いなどいないからだ。数学の時間は、A組とB組の合同で行われるので、もしかしたら数少ない知り合いの一人である晋也と同じクラスになれるかと思ったが、残念なことに、このクラス分けはレベル別に分けられる。数学が出来る俺と、学力に乏しい晋也が同じ教室で数学の授業を受けることは、彼に学問の奇跡でも起きない限りは有り得ないだろう。
俺は溜め息をついた。勿論、既に俺はこの二次関数の問題を余裕で解いたが、さて、隣の女の子はどうだろうか。この娘は解けているのか。
俺は、気付かれないように、こっそりと彼女の机の上を覗き見た。ふむふむ、あちゃー、君さ、既に平方完成の時点で大きなミスをしているよ、全く。それじゃ永久に解けんぜ。
だが、こいつはA組の名前も知らない女の子。「そこ、間違ってるよ」なんて言えた義理は俺にはない。黙っていよう。いつも通り。

……にしても、いつも思ってたことだが、この娘、やけに可愛い顔してんな。

五分近く経っただろうか。教室中がざわめき、完全にお喋りムードと化していた。俺は、この空気が嫌いだった。

馬鹿共が、まだ解けねぇ奴までいやがる。それすらほったらかしてお喋りかよ、やってられねーぜ。

余りに暇な俺は、人間哲学を脳内で構築……もとい、窓の外を眺めてぼーっとしてると、肩に何かが触れているのを感じ取った。同時に、誰かが「ねぇねぇ」と言っているのにも。

「……ん？」

振り返って見ると、隣の席の女の子だった。

こちらを見て、妙にニヤニヤしている。俺は反応に困った。

「ここ、わかんないんだけど」

「……え」

「見せて」

女の子は、顔をグッと近付け、机の上に置かれた俺のプリントに見やった。「うんうん」などと言って、頷いている。

「なるほどね、それでコレはどーやったの？？」

「え？？　あっ……、えーと、ん？　どれ」

「この、χ＝５ってゆーの」

「これは、ここをこうして……、こう」

「あっ！　ありがとー」

女の子は、お礼を言うと、自分のプリントとにらめっこを再開した。

高校に入って、女の子に笑顔で礼を言われたのは、これが最初だった。俺は、このえもいわれぬ感覚に戸惑った。どうしようもない腐った高校生活に、僅かな光がどこからともなく差し込んできたような、そんな幸せを、確かにこの時、俺は感じていたんだ。

少しすると、女の子がまた話しかけてきた。

「名前なんてゆーの？？」

俺はキョドりながらも、小さな声で、
「外崎暁」
と答えた。
女の子は、よく聞き取れなかったらしく、「ん？？」と迫った。
この娘、俺なんかに興味があるのだろうか。俺はさらにキョドったが、さっきよりも少し大きな声で、
「外崎、暁」
と言った。
女の子は、ようやくわかってくれたらしく、笑顔になってくれた。
俺は、一旦彼女から目を離して、それから、もう一度目を合わせた。
そして、女の子は言った。
「アタシは……――――」

目が覚めると、そこは午前九時の輝かしい朝だった。希望と夢が、朧気なれど確かに介在した、爽やかな朝……。体中の細胞が活気付いている。いつもより気分が良い。
時間が迫ってきた。
暁は、しばらく着ていなかった私服に着替え、洗面所へと向かった。洋平に教わったマニュアル通り、ヘアーアイロンとワックスを使い、髪型を決める。
香水も利用し、暁はこれ以上にないくらい、自分を高めた。心踊る一日が始まろとしている。外の世界からは、既に太鼓と笛の音が心地良く鳴っていた。
部屋のドアを開け、夏の陽気に誘われた、破天荒な街へと足を踏み出した。何故だろう。清々しい。自然と笑みがこぼれる。
自転車で笑顔を輝かせ、そこへ向かう子供たち……。浴衣姿の幸せそうなカップル。微笑む家族。どこからともなく聞こえる笑い声……。
年に一度の、夏祭りだ。

暁が待ち合わせる場所は、御宝神社階段前だ。とうとうこの日がやってきた。いつもは誰もいないこの場所でさえ、今日は溢れたような人の群れが垣間見える。親子が暁の横を通り過ぎ、階段を上ってゆく。約束の時間より、ちょっと早めに着いてしまったようだ。ザワザワと人の行き交うその中で、暁はぼーっと突っ立っていた。何も考えないで、ただ、このどこからともなく溢れ出る幸せな気分を満喫していたい……。本当は、とても楽しみにしていたんだ。彼は、この幸せが永遠に続くことを心の中で祈った。暁は、今なら自信を持って言えた。

「あっ！　いたいた！　暁～っ」

俺は幸せだ、と。

「人凄いね……、じゃ、行こっか」

ショートカットの亜美は笑顔でそう言った。

「亜美」

暁は、言わずにはいられなかった。

亜美は振り返った。

「ん？」

暁は、歩き出してこう言った。

「今日、久しぶりに夢見たわ」

「夢？　……何の？？」

暁は間を置いて、高ぶる感情を抑えながら、なるべく平坦な声で言った。

「初めて……、声をかけてきた日の夢だよ」

どうして俺が、ここにいるんだろう。暁は考えた。今、目の前にいる輝かしい存在は、自分にとって何なのか。何の為に、今、自分の目の前で、その笑顔を垣間見せるのだろうか。

「誰が？？　誰に？？」

亜美は、ハテナマークを頭上に浮かべ、そう呟いた。

ただ、暁は、ひとつの真理を得ていた。いつもの薄っぺらい戯言でないことは、彼自身が最も理解していた。

……亜美。俺は……。
「お前が」
暁は、横目で亜美を見た。亜美は、顔を暁に向けていた。
……俺は、俺と一緒にいてくれるお前が……。
「俺に」
……今、一番大切な存在だ。
亜美は、暁の言葉を聞くと、鳩が豆鉄砲を喰らったような表情を浮かべ、そのまま固まっていた。暁はきまりが悪くなり、顔を赤らめた。
「……あ！　祭っ！！　祭だ！　ほらいくぞッ」
暁は慌ただしく言う。
「……」
「ま、祭りだ！　ホラ、いこーぜっ」
暁は恥ずかしくなり、思わず走り出した。
「ちょっ！　ちょっとぉ～」
亜美も慌てて後を追った。
暁は笑っていた。
「ハハハ！　ハハハ」
彼は幸せだった。

- 2 -

今日もまた一人、入信希望者がこのビルを訪れた。
上階へ行けば、そこからは東京タワーが一望できる、超高層ビルだ。沢山のビルとビル、建物に囲まれ、まるで林の中の一本の木のように、それは人間社会の裏にそびえ立つ。
宗教勧誘に来たかつての友人に案内され、青年はこのビルへと足を運んだ。
ここへ来る者は皆、暗い目をしている。

ロビーは広々とし、天井には豪華なシャンデリアが吊り下がっている。スーツ姿の中年男もいれば、制服姿の学生もいた。場所の雰囲気としては、高級ホテルのロビーに近い。

青年は友人とエレベーターに乗り込んだ。中にはエレベーターガールまでいた。青年は不審な目を友人に向けた。

「こんな凄い所なんだ……」

「ふふふ」

「八階へ上がります」

エレベーターガールの声で、青年は発しようとしていた言葉を遮られた。

到着し、縦長の長方形の視界が開かれたとき、青年は心臓が僅かな痛みが走ったのを感じた。何故か息苦しい。恐らくは、開かれた視界に映った光景が、奥の曲がり角へと続く一本道であったことが原因していたのであろう。

青年は、友人に施され、エレベーターを降りた。両方の壁には、ギリシア神話を連想させる絵画が約一メートルの間隔を置いて飾られていた。

「どこ行くんだ」

青年は不安を堪えきれず尋ねた。前を歩く青年の友人は、不敵な笑みを浮かべながら、

「Kの元へ行く」

とだけ言った。

十メートルも歩くと、曲がり角にぶつかる。右へとだけ曲がるその奥からは、異様な雰囲気が醸し出されている。青年は唾を飲み込んだ。

右に曲がったその奥の突き当たりには、ドアがひとつ……。ドアを見つめながら、青年はさらに尋ねた。

「そこにいるのか……、Kは」

「……そうだよ」

ドアの手前まできて、青年は最後の質問をした。

「Kって誰？」
「……」
友人は、何も答えずドアノブに手を掛けた。青年は友人の肩をつかみ、さっきよりも強く、真剣な表情を浮かべて聞いた。
「待ってくれ……、Kって誰だ？　何者なんだ？　まさか……」
「そのまさかだよ」
友人は首だけ青年に向けて言う。
「Kとは王里神会の教祖のことだよ」
青年は、無表情な友人の言葉に目を見開いた。
「……あ、……あ」
言葉が出ない青年に、友人が笑い掛けた。
「どうした？　……ふふふ。今更ビビってんのか？　おい。この扉の向こうには、いらっしゃる。我が教祖、Kが」
「……あ……のか」
「あぁ！？」
「い……ら……っしゃ……る……のか……？？」
青年の目が充血している。
興奮しているようだ。息遣いもだんだん荒くなつてきた。
友人は口の両端を吊り上げ、これ以上ない笑顔を見せた。
「ああ！！　いらっしゃる！！」
友人の高揚的な声に触発されてか、青年は歓喜の笑い声を上げ、なりふり構わずわめきだした。さっきまでとは打って変わってのテンションの豹変ぶりは、見る者をある意味、恐怖させるだろう。
「やった！！　会える！！　教祖にぃぃ！！　俺は世界一の幸せ者だっ！！」
わめく青年を横目に、笑みを浮かべて友人はそのドアを開いた。
突如、青年は死んだように静かになった。
「さぁ……、教祖Kへの拝謁を済ませてこい……。この堕落した日本を変革する御方……、いや、世界を変える御方だ」
役目を終えた友人は、一本道を辿り去っていった。

青年は、ゆっくりとその部屋へと足を踏み入れた……。

「オラ……。さっさと金出せよー」

一人の男子学生が、数人の不良に絡まれていた。建物と建物の狭い間に追い込まれ、奥は行き止まり、つまり逃げ場は無い。

眼鏡をかけた、背の小さくて、明らかに弱そうな男子学生は、絡まれたのはこれが初めてではない。友達も少なく、一人でいることが多かった彼は、絡まれるのにはベストな条件が揃いに揃っていた。気の弱そうな目が一番の原因かも知れない。

まだ昼間で明るかったが、通りから見たら、ただ数人の若者がいるようにしか見えないだろう。助けは、一向に訪れない。

「へいへーい。その買い物袋には何が入ってんだ～？？　オラ、よこせやッ」

「あっ」

秋葉原で買ったフィギュアの入った袋が取られてしまった。彼にとっては宝物である。

「なんだ～？？　ヘンテコなネコミミフィギュアかよ！！　ハハッ！！　ヲタかよ、コイツ！」

「ハハハハハハッ」

「ダアッセ！！」

「キモーイっ」

「ギャハハハハハハ！！」

彼は怒りで視界が真っ赤になった。自分の唯一の趣味を大笑いされれば、誰だって腹が立つだろう。だが、彼は何も言わない、反抗しない。自分が無力なのを知っているから。

「ギャハハハハハハハハッ」

「ヲタクとか引くわ～」

「キモッ」

「ホラ、さっさと金出せッて！！」

「早くしろよ」
ただただ、無力で哀れな自分が情けなかった。顔の筋肉を引きつらせ、両手を強く握った。
……ボクにもっと力があったら。
男子学生の胸ぐらを、不良の一人が乱暴につかんだ。男子学生は、一回り背の高い不良と目を合わせた。細くて、何の道徳性も感じられない目……。出来ることなら、拳を握り締め、その憎たらしい顔面に一撃を喰らわしたい……。
……怖い！！　無理だ！！
彼は目を固く閉じた。ついでに、歯も力強く食いしばった。今までの経験からして、こうしておくことが殴られる前にしておく最善の防御だと彼は学習していた。今までに、何度も何度も殴られたから。
「いちにいさんしいごおろく……」
誰かがカウントを始めた。
男子学生は覚悟を決めた。恐らく、カウントが十に達したとき、顔面に強い衝撃が走るだろう。
「七人……いや？　六人か」
……！？
男子学生は、恐る恐る目を開けた。カウントではない。というより、この声はここにいる不良の声ではない。誰か新しく来たのだろうか。
背の低い男子学生は、不良が壁となって向こうの景色は見えないが、ソレを見るのは容易だった。ソレは、不良よりもさらに背が高い男だった。
「……ンだ。テメエ……」
不良の一人が、背の高い男を威嚇するように睨みつけた。男は、それに全く動じない。
「複数で単体を苛めるとは、まさに不良らしい。気に入ったぜ」
男はそう言うと、睨みつけていた不良の胸ぐらをつかみ、宙に不

良を放り投げた。
その場にいた全員が唖然とした。片腕だけで、しかも、それ以外の部位は全く動かさず、人一人をまるでボールでも投げるかのように投げ飛ばすことが、人間に可能なのだろうか。しかし、それは既に現実として目の前に突きつけられた。
表通りに放り投げられた不良は、鈍い音を立ててコンクリートの道路に落下した。痛みに耐えるように、何かをうめいている。
男子学生の口は開いたまま閉じなかった。状況をよく把握できない。
「……て、てめっ！！　……う、何っ……、してんだ！！」
男は、顔色ひとつ変えず、不良に迫った。
男子学生は見た。たくましく盛り上がった上腕二頭筋、そして、右目に縦に走った痛々しい切り傷を……。
不良は反撃に出た。
「殺せッ」
――――バキ！！
不良の一人が殴り飛ばされた。
――バコッ！！
強烈なボディーブローが、不良の意識を混迷とさせた。
――ドゴッ！！
また一人、また一人と、幼稚園児でも相手にしているかのような余裕で、次々に不良を倒していく。あっという間に、最後の一人となってしまった。
「ま、待ってくれ……。金ならやるから……」
「……」
「頼む！　やめろ！！」
男は最後の一人となった不良の胸ぐらをつかみ、こう言った。
「人を殴るっつーのはよ、自分も殴られんのと一緒なんだよ」
――バゴォッ！！
不良は殴られた衝撃で意識を失い、倒れこんだ。ピクリとも動か

ない。
残された男子学生は、ただただ震えていた。彼は命乞いした。
「……お……願い……殺さないで……くだ、さ……い」
男は、縮こまりうずくまっている小さな存在を、ただジッと見据えていた。
しばらくそうしていると、ふと思い出したようにクルリと身体を回転させ、表通りへと出て行った。男子学生は顔を上げた。
……何だったんだ??　一体……??
彼はようやく立ち上がり、込み上げる何かと冷静に向き合っていた。恐怖よりも、強く何かが彼の心を刺激していた。この気持ちがどういったモノなのか、自分でもよくわからない。だが、今、どうしてもその気持ちに正直になりたい。
彼は走った。
――待って!!
通りに出て、男を探した。見つけた。
彼は走った。男に追いつこうと必死に。今までこんなこと、初めてだ。
「あっ!!」
つまずいて転けてしまった。通行人が笑う。しかし、彼には言わなくてはならない、そうでもしなければ、彼の中の彼は、彼を許さなかった。
大きな声で、言わなくてはならない。彼は言うだろう。
「あの!!　ちょっと待って!!」
通行人が振り返る。しかし、彼を窮地から救った肝心の張本人は、振り向くこともなく、前へと進んで行った。
堪えきれず、彼はうめき声を上げた。それから、さらに大きな声でこう言った。名前も正体も知らない誰かに、きっと届くと信じて。
……――――――。
「ありがとうッッ」
野獣はその声を聴くと、口元を僅かにニヤつかせ、片腕だけをの

んびり歩きながら上げた。背後で這いつくばる小さな存在に見えるように、心の中で「どーも」と口ずさんで。野獣は最後まで振り向かなかった。

幸せと感動と異端と……（後書き）

亜美と暁の出会いが描かれたのって意外にもここだったんですよね。
今、書きだめで、４０話書き終えたくらいなのでたまに振り返るのもいいですね。
次回、話が大きく動きますｗ
おたのしみに。
１７日ごろ更新すると思います。

bittErsweet festiVal（前書き）

今回、話が大きく動きます。

bittErsweet festiVal

-1-

八月九日、夏祭り。この街の夏祭りは、同県にある他の祭りとは異なり、市内に留まらず、他方からも多くの客が来る大規模な祭りである。主な会場は、御宝神社、総合運動場、大通りであり、かなりの数の人がそこで祭りを楽しむ。

御宝神社は、いわゆる「お参り」の会場で、大昔に災厄を避けるために始まったこの祭りの伝統である。今では、「祭り」というよりも「フェスティバル」といった感じに変わったこの祭りに残る数少ない大昔の名残ともいえるだろう。

総合運動場は祭りの本部であり、御宝神社から歩いてすぐの所にある。中心には実行委員のテントや巨大な舞台があり、昼にはパフォーマンスが常に場を賑わせ、夜になれば盆踊りなどのお決まりのイベントが行われる。そして、周辺には数多くの屋台店が立ち並ぶ。射的や金魚すくいなどの店もここに集中する。

そして大通り。暁の通学路にある大通りは大きくカーブを描き、総合運動場の前を通る。その大通りを総合運動場の前の一部だけ封鎖して商店街にある店が屋台店として、この日一斉に躍り出る。祭りが大賑わいになる時間帯には、巨大な神輿と溢れんばかりの人がこの大通りを闊歩する。

しかし、やはり最も盛り上がるのは祭りの最後の花火。花火自体は特に変わった点は無く、いたってシンプルなものであるが、祭りそのものの規模が大きい為、盛り上がり方も自然と盛大なものとなる。

……と、ここまでが暁の知るこの街の夏祭りの概要である。もちろん、暁はこの街に引っ越してから祭りには二回程しか行ったことがなく、しかもその経験も「参加」というよりは「観察」に近かったので、それ以上の情報は持ち合わせていない。

暁と亜美は取りあえず祭りの本部、総合運動場に向かうことにした。最初に至極真面目なお参りをするのは気が引けたし、暁が逃げるように御宝神社階段前から遠ざかり、亜美はその後を追ったので、引き返すのはいささかならず不自然であった。

「ねえ暁、そういえば、小説のネタは浮かんだ？」

暁に追いついた亜美は笑顔で尋ねた。

暁はそれを見て、亜美に歩幅を合わせた。

「いや、全然。考えてはいたんだがいろいろ忙しかったからさ」

実際暁にとっては凄まじい急がしさだった。主に精神的にではあるが。

「何かあったの？」

「図書室の掃除とか、小学校の同級生が急に訪ねて来たのとか……、宿題もあるしな」

「小学校の同級生？　でもさ、暁確か先月に実家に帰ったんだよね。そのときに会わなかったの？」

「まあ、そうなんだけど、色々あってコッチで会うことになったんだ」

暁は、亜美に全てを話すにはまだ早いだろうと考えていた。今はひたすら誤魔化すしかなかった。

「ふうん。……そういえばあたしね、宿題全部終わったんだ♪　羨ましいでしょ？」

亜美は自慢げに言い放った。それを受けて、暁は愕然とした。それは二〇一二年に地球が滅ぶとオバマ大統領が真顔で言うくらいの驚きだった。つまりは、瞬間的に否定に近い疑いを持つということでもあるが……。

実際、そんなはずはなかった。亜美はどちらかというと、というよりも明らかに、夏休み最終日の三日前になって焦って宿題を始め、挙げ句の果てには開き直って諦めるような性格だった。しかも実際に去年はそれをやってみせたのだ。小説を書いていて忙しかったという理由が無かったら停学処分をくらう程にありとあらゆる宿題を

サボタージュしていて、各教科の教師に説教されていた時間は合計五時間近くになっていただろう。
暁の動揺を目にした亜美は、暁の隣で嬉しそうに、そして満足げに子供のように飛び跳ねていた。
――こいつ、光とどっちが子供っぽいかわからねーじゃねーか。
「亜美、今日は四月一日だっけ？」
「ん？　八月九日よ。あら、暁君は忙しくて気が変になってしまったの？　なんて可哀想な子かしら。悲愴感を感じるわ」
「エイプリルフール以外に嘘を吐くもんじゃないぞ！」
「えいぷりるふうる？」
「Ａｐｒｉｌ　ｆｏｏｌ！！」
――知らないふりをしやがったんで、ネイティブな発音でもう一度言ってやった。
「ああ、エイプリルフールねー。思い出した思い出した。でも失敬じゃない？　ホントに終わったんだから」
暁は信じられないといった表情ですぐさま否定した。
「は、はぁ！？　んなわけないだろ！　お前が俺より先に、しかも八月頭に宿題を終えてるなんてことがあったら、今頃大雪、雷雨、強風、終いには竜巻辺りまでこの街に到来してるはずだ！　つまり、そんな事はあるはずな……ああっ！！」
暁は気付いた。簡単な方法があることに。
「亜美……。佐藤静枝を使ったろ……？」
「何のことかなー？」
亜美はあからさまにとぼけてみせた。
……やりやがったな、この女。
静枝に協力してもらえば、問題演習の類は解答を写しているに等しい。ありがちな間違いすら容易に演出出来る。そして作文、創作の類は亜美にとっては元々何の苦労もない。更に読書感想文に関しては、静枝が同じ本を読んでいれば、必要な文章を本を開かなくとも一字一句間違えずに手軽に引用出来るのだ。

「親友を手軽に使った訳な」
「やっぱり持つべきものは親友だね」
そんな話をしている間に、二人は祭りの中心部である総合運動場に入っていた。時刻はまだ十時を過ぎた頃であるのに、既に大勢の人がいる。しかし、これはまだほとんど地元住民だけである。夕方になれば更に人の数は増し、今の倍以上にはなるだろう。
「やっぱりこの街の夏祭りは違うね！」
亜美が華やかに装飾された矢倉を見て言った。
「そうだな。いつもの運動場とは別世界だ……」
「チョウ……」
亜美が呟いた。
「チョウ？」
暁は反射的に聞き返していた。
「鬼頭火山の推理小説の『蝶』だよ。暁読んだでしょ？」
「あー。お前から借りたんだったな、確か」
「あの作品で夏祭りの描写があったよね。多分、この祭りがモデルだと思うんだ」
「そうかもな。読んだときは気が付かなかったけど、今から思えばそんな気がする」
「密室トリックが難しくて……あたしなんか見事に騙されてたな～」
「枯れ葉そっくりの数百の蝶を麻酔で眠らせ、その下に死体を隠す。麻酔が切れたら蝶は飛び立ってそこに死体が出現する。……そんな感じだっけ？」
「そう。大がかりなトリックだけど、自然になるように条件を配置出来るところがスゴいよね」
まだ一年以内に読んだ本の話であるが、亜美は懐かしそうに話した。それは、もう帰っては来ない一人の天才小説家を悼んでいるようであった。
「……残念だ。もう、あの人の書く小説を読めないなんて」
暁は晴れ渡る空に向かって言った。

「あたしも」
亜美も空を見上げた。その刹那、暁は亜美の表情に浮かんだ曇りを横目に捉えた。
暁は初めて気が付いた。亜美も深く悲しんでいたということに。格は違うかもしれないが、同じように小説を愛する、尊敬できる人間が消えてしまったのだ。亜美だって静枝と同じように悲しんでいたのだ。しかし、それでも亜美は静枝を支え続けた。堪え難い苦しみを必死に抑えつけて。
「なあ亜美」
「ん？」
「よく……頑張ったな」
「えっ？」
亜美は暁の突然の言葉に、固まってしまった。
「さて、今度は大通りに行くか」
暁は亜美の肩をポンと叩いて大通りの方へ歩き出した。
「……あ、うん」
亜美は五メートル程前方の暁の後を追った。
何のことかな……。
「……あっ。もしかして……」
亜美は立ち止まった。ゆっくりと先に進む暁の背中が、亜美にはいつもより頼もしく見えた。
「……そっか。ふふっ。暁、……ありがと」
亜美は笑みをこぼしながら、暁に聴こえないような小さな声でそう言った。
「どうかしたか？」
少しだけ離れた所から暁が尋ねる。
「別に～」
暁へ駆け寄る亜美の表情には以前にも増して明るい笑顔が戻っていた。

- 2 -

太陽が沈む頃、外崎暁の部屋の前には一人の男が立っていた。

しかし、その部屋には外崎暁はいない。年に一度の夏祭りに出掛けてしまったからだ。

「朝から出っぱなしか……。暁、張り切り過ぎじゃないかい……？」

男、神屋聖孝は不満そうに呟いた。

神屋は半ば諦めていた。それは暁と会うことではなく、暁が協力するということにだ。

暁に答えを聞きに来た神屋であったが、会うことすら困難なようだった。チェス盤のギミックにより隠されたメッセージには「すぐに再会する」と書いたが、さすがに祭りに出掛けられては接触のしようがない。

一旦帰るか……。

暁の住むアパートの敷地を出口に向かって歩いていると、神屋はふと思った。もし暁が祭りに出掛けるとあらかじめ知っていたら呼び止めていただろうか、と。

……いや、止めなかっただろう。協力を拒まれたとしても、友は友だ。

それに、神屋は最初から祭りの日などに、暁に会うつもりはなかった。昨夜に届いた王里神会からのメールが神屋を焦らせているに過ぎないのだ。

神屋はアパートの出口の前で立ち止まり、暁の行動を推測した。

暁が出掛けてしまったというのは、チェス盤の仕掛けに気付かなかったということだろうか。それとも、ただ避けられているのか、もしくは翌日に来ることはないだろうと踏んでいたのか。いや、単に篠原亜美が暁にとって友人以上の存在なのかもしれない。だから祭りを優先した。

考えられるパターンのどれもあり得ることだった。
しかし、神屋の分析では、暁が夏祭りに出掛けるなどということは完全に予想外であった。暁の性格はもっと浮き世離れしているものであるはずだったが、どうやらそうでもないようだった。それもやはり、篠原亜美が関与しているのだろうか。
神屋には篠原亜美に関する情報が足りなかった。神屋は先日、暁のクラスメートの女子生徒に暁と篠原亜美の関係について聞込みをしていた。しかし、大した情報は入手出来なかった。かなり親密な仲であるようだが、付き合っているかは微妙だということだ。神屋にはそのはっきりとしない関係性が理解できなかった。
とにかく、完全な手詰まりだった。急いでいる時に限って計画通りにいかないものだ。
次第に街は目映さを増していく。あくまでも確率論ではあるが、これから陽が落ちるというこんな時間帯に、まさか暁を探しに祭りに赴いても、あの大勢の中から一人を見つけ出すのは困難だろう。神屋はアパートを立ち去ることにした。
その時だった。いや、厳密には神屋がアパートに背を向けて一歩踏み出したその時。
「神屋君ではないか」
後方に自分を呼ぶ男の声を確認した。神屋は声の主を知っている。
「神屋君だろう?」
神屋が背を向けたままでいた為、男はもう一度確認した。
神屋は黒の帽子を脱ぎながら、ゆっくりと振り返った。
「ええ。お久しぶりですね、藤原さん」
振り返った神屋の前にはタキシードを軽く崩した風に着こなす初老の男性が立っていた。身長は神屋よりも十センチ程低いが、威圧感は穏やかな神屋よりも、遥かに強い。
藤原と呼ばれるこの男は王里神会の幹部である。政界に通ずる男であり、神屋は何度か顔を合わせたことがあった。非常に頭のキレる男だ。

「ひと月程前に本部で会ったきりだったかね」
藤原はブラウンの鋭い瞳を神屋に向けて、そう言った。
ひと月前。王里神会が初めて誤魔化しようの無い法に触れる作戦を執行することを決定した会議があった。
「そう記憶しております。あのときはご苦労様でした。ところで、この街に何か用事が？」
「君は出席していなかったが、昨夜の会議でついに例の作戦の実行が決定したのだよ。メールを見なかったのかね？」
「いえ、既に確認済みですが、あなたは実行係ではないと思ったので」
「その通りだ。例の件の結末を見届けたくてね。私自ら観察役を買って出たのだよ。実行するのはプロだ、彼らは仮に捕まっても足は付かない」
「なるほど」
白々しい会話だった。神屋にはそんな事は予想できていた。形だけの挨拶に過ぎない。
「神屋君、君こそ何故ここにいるのかね？」
「ここに……ですか？　特に理由はありませんよ」
「V事件の重要関係者の捜索をしているのではなかったかな？」
「ええ、仰るとおりです。が、捜索範囲は『この街』であって『ここ』ではないということです」
「ほう……。しかし神屋君。君程の実力者が未だにたった二人の高校生の住居を特定できていないというのはいささか不可解ではあるな」
藤原は疑いを持っていた。しかし、それは当たり前であるともいえた。十七歳という若さで幹部にまで上り詰めた神屋が高校生二人の住居の特定に時間をかけ過ぎているのだから。
藤原も馬鹿ではない。神屋が意図的に任務を引き伸ばしていると読んでいるのだ。やはり彼は教祖に心酔しているタイプではない。王里神会を利用して地位を手に入れるつもりだろう。

「入会の勧誘も同時に行っているので……。しかし今週中には結果は出せるでしょう」
「そうか……しかしね、その必要はないよ、神屋君」
「……捜索はもう必要ないと？　何故でしょうか？」
「今日の結果次第では、人手が余るのだよ。明日には私の部下が重要関係者との接触を完了する。場合によっては『接触』以上の段階に踏み込む可能性もあるがな」
「つまり、僕が直々に接触する必要がなくなった……と」
藤原は煙草を取り出しながら「そういうことだ」と答えた。
神屋は藤原の発言に妙な違和感を感じていた。しかし、その違和感の正体を神屋が認識する前に藤原は攻めの一手を指した。
「そうそう、知っているかね？　このアパート、君の探していた重要関係者の一人、『外崎暁』の住むアパートなんだよ」
「……！！」
――この男、それを知った上で……！！
藤原は口にくわえた煙草にライターで火を付けた。
「なるほど、住居をご存知でしたか……。それでは僕の出る幕はないですね……」
神屋はそう応えるしかなかった。藤原の狙いは神屋を担当から外すことで、神屋と暁の接触を防ぐことだったのだ。そうなると、藤原は神屋と暁が旧友だということまで調べ上げていたのだろうか。それどころか、神屋の王里神会への裏切り行為に気付きかけている可能性がある。
「結果として私たちに任務を委任してもらうことになっただけだ。全て偶然だよ、神屋君」
全て偶然。そんな事を言うこと自体がそうでないことの証明だった。
神屋には状況を逆転させる術はなかった。序盤戦は素直に負けを認めるしかなかった。
「……それでは、Ｖ事件重要関係者の調査に関しては藤原さんに全

てを委任しましょう。情報の引き渡しは必要でしょうか？」
「いや、必要ない。君が重要なことを知っているなら別だが、住居の前に重要情報を入手するなんてことは有り得ないだろう」
藤原は不敵に笑いながら空々しい文句を言ってのけた。
神屋は静かな苛立ちを覚えたが、穏やかな表情を崩さなかった。
「了解しました。それでは、健闘を祈ります」
「それでは神屋君、私はそろそろ行くよ。くれぐれも悪手は打たないようにな」
「ええ。……しかし藤原さんも、思わぬ反撃が無いとも限りませんので、ご注意を」
「ほう……。因みに、誰からの反撃かな？」
「それはもちろん、王里神会の邪魔をする者の……ですよ。すでに予想はついているのでしょう？」
「フハハハハ！　……そうだな。心に留めておこう」
言い終えて藤原は祭りの会場のある方角へと去っていった。
神屋は藤原の背を見ながら、既に次に打つべき手を決めていた。
「……確率論か」
神屋は口に出して呟いた。少し前に捨てた方針が再び神屋の脳内に浮上してきた。
藤原は昨夜の会議で決まった作戦の実行とその後の報告で明日の早朝近くまでは身動きが取れない。
しかし相手は頭のキレる藤原だ。彼が神屋を敵として見ているならば、明日まで待たず、作戦執行後すぐに暁に接触しようとするかもしれない。
そうなると、神屋に選択の余地はなかった。

――祭りの会場で暁と接触する――

それしかなかった。篠原亜美には母親がいるので拉致は困難、つまりは神屋としては明日になってからでも手は打てる。しかし、一

人暮らしの暁は無防備過ぎる。本部に拉致される可能性は大いにある。
危険性を考えると、暁を自宅に帰らせるべきではない。
それが、神屋の結論だった。
「藤原……簡単に暁たちと接触出来ると思ったら大間違いだ」
神屋は夏祭りの会場へ向かって歩き出した。
まだ逆転のチャンスはいくらでもある。今、神屋に出来ることは早く暁が見つかり、そして彼が自分に協力してくれることを祈ることしかない。

夕陽の赤い光が、神屋の影を際立たせる。
夏祭りが盛り上がりを見せる中、作戦執行の時が徐々に近付いていた。

- 3 -

明るく灯る提灯は、二百段の階段の両端に規則的に吊られていた。
御宝神社は本会場と違って、幾分閑静であった。人も数十人程度、いつもなら多く感じる人数も、本会場の雑踏と比べたら大したことはない。リズミカルな太鼓の音も、殷賑な屋台道の楽しげな人声も、ほんの少し距離を離すだけで心地良い響きとして聞こえてくる。
暁と亜美は御宝神社の二百段階段の五十段程の所に腰掛けていた。
「やっぱり浴衣が良かったかな～」
屋台で買った食べかけの焼きそばを片手に、亜美はそんなことを言った。
午後八時、今夜の夕食タイムだった。
「持ってんの？」
暁も亜美と同じ店の焼きそばを片手に、言った。

「一応ねー。でも、似合わないだよね、あたし」
「似合うと思うけどな」
お世辞ではなかった。暁には何故自信なさげなのか分からなかった。
「あたしだけ浴衣って、冷めるじゃん」
「そりゃ……そうかもな」
暁は焼きそばを食べ終えて、意味なく空を見上げた。
一分経って亜美も食べ終えた。
「あー美味しかった」
「喉乾いたな。一緒に買うべきだったかな」
「じゃあ、買いに行こっ！　休憩終わり」
亜美は楽しげに階段を下っていった。
……ホント、元気だな。
暁も亜美に遅れながらも階段を下っていった。ずっとこうしていたいと思った。広大な世界の中の、小さな世界。永遠なんて有り得ない、だけど永遠にこの世界に居たかった。
もうすぐ終わるんだな……。
小さな寂しさが心に染み渡った。しかし、次の幸せまで頑張れる、そんな気がした。

総合運動場に立ち並ぶ屋台には意外に人が少なかった。
暁はその様子が気になって、先程買ったラムネを一気に飲み干し、亜美に聞いた。
「なんでこの時間帯に人が減ってんの？」
「ああ、これね。皆、抽選会に行ったのよ。受付で１００円でスーパーボールが売っててね、そこに数字が書いてあって、今の時間帯はその数字を使った抽選会。景品にヨーロッパ旅行とかあるから、参加率が高いの。でも、地元の人はこの時間帯の客の少なさを利用して祭りを楽しむわけ。結局当たらないことが多いしね」

「なるほどな。確かにこれくらいの数の方が祭りっぽい雰囲気は出るよな」
「だよねー。そういえば、ウチら全然祭りっぽいことやってないじゃん！！　もっと遊ぼうよ。……あっ、早速発見」
亜美は金魚すくいの店を指差した。
「金魚すくいかぁ、懐かしいな」
暁は小学生の頃を思い出して言った。
「おじさん、２つね」
暁たちは露店のおじさんからそれぞれ１つずつポイを受け取り、浅い水槽に向き合った。
「亜美、勝負な」
「いいよ、負けたらかき氷一杯奢りね」
「慎重な俺の方がこういうのは向いてるんだ」
「場数が違うのよ。なんせ、あたしの前世は金魚ですからね」
「穫られる側じゃねーか！」
「因みにあなたが子供の頃祭りですくい上げて次の日にすぐ死んだ金魚があたしよ」
「気味悪いこと言うなよ！　ていうか、同い年だろーが」
亜美は下らないことを言いながらも既に５匹の金魚を捕獲していた。一方、ツッコミを入れていた暁は一匹も穫れず、挙げ句、紙が完全に破れてしまった。
「暁下手すぎ……！！」
亜美が口を押さえて大爆笑している。
「……二セット先取三セットマッチ……な」
「いいよ、じゃあ次は……あれ」
亜美が指差した先には射的の露店。
亜美は金魚を店に返して小走りで射的の露店へ向かった。暁もそれに続く。
「あのお菓子の詰め合わせを落としたら勝ちだよっ」
１回につき２発、当たっても台から落ちなければ賞品は貰えない

ルールだ。暁と亜美はお菓子の詰め合わせを狙って銃を構えた。
「暁からどーぞ」
亜美は、標準を合わせながら言った。
「完全にナメてんな。言っておくが、射的は得意だぞ」
「へぇ……。じゃっ、当たるよね」
「まあ、見てろって」
暁は狙いを定め、引き金を引いた。
弾は真っ直ぐ飛んでお菓子の詰め合わせに見事命中した。お菓子の詰め合わせは前後に大きく揺れた。だが、一発では落とせないようだ。
「よし、次こそは……」　暁が銃に2発目をセットする。
しかしその瞬間、誰かの撃った弾がお菓子の詰め合わせを台から落とした。
「やった！　ご苦労様、あたしの勝ちね」
賞品を取ったのは亜美だった。
「ちょ、ちょっと待て。お前、今何をした？」
暁には目の前で何が起こったのか理解しかねた。
「言ったじゃん、場数が違うって。ああいう重そうな賞品は一発じゃ落とせないのよ。だから暁が当ててバランスが崩れたところを……バーン！」
「うわっ……。なんて姑息な……！　正々堂々勝負しろ！」
「さあ、かき氷屋は向かいの店だから」
「……」
ストレート負けした、暁だった。

「まもなく、今年の夏祭りの最後を締めくくる、花火大会が始まります。今年の花火の数は……」
花火大会の案内アナウンスがステージのスピーカーから流れてきた。

時刻は八時五十七分、花火の打ち上げ開始まで残り三分だった。
暁と亜美は、再び戻ってきた雑踏から逃げるように、円形の総合運動場の周りを歩いていた。
「終わっちゃうね、夏祭り」
亜美は、物足りなげに言った。
「ああ。でも楽しいもんだな、夏祭りも」
「あたしが一緒だったからねっ」
「そうかもな。お前で良かった。竜司だったら、やること分かんなくて一日中ファミレスに缶詰めだった気がする。不慣れだからな、俺もアイツも」
「はは、やってそう」
亜美は立ち止まってステージを見た。暁も同じようにそうした。
「あの人……」
亜美がスッと腕を伸ばし、ステージの方を指差した。
「ん？　誰？」
暁は訊きながら、亜美の指差す方に視線を向けた。ステージの横の数人の団体を指差しているようだった。
「ほら、誰だっけ？　あの知事の隣のオジサン」
暁は印となる知事の姿すらなかなか見つからなかったが、数秒してやっと見つけた。隣には近時メディアを賑わしている文部科学大臣の鮎川哲郎（あゆかわてつろう）が立っていた。
「文科相の鮎川哲郎だな、あれは」
「そうそう鮎川さんだ、ド忘れしちゃってた。暁はよく判ったね」
「最近よくテレビに出るからな。今の総理大臣が辞任したら次はあの人が総理だろうな」
実際、ニュース解説者達はそんな事を言っていた。低迷する日本経済をいつになっても救い出せない今の内閣を非難して、次の総裁選の話題が近頃よく聞かれるようになっていたのだ。
「分からないよ。官房長官の鈴木学（すずきまなぶ）も総裁選に出るはずだし、互角の一騎打ちじゃない？」

「いたなぁ、そんなやつも。まぁでも、俺は鮎川を応援するね。地元出身だしな」
「鮎川さんって、ここの生まれなの？」
「ああ、だから祭りに顔出しに来たんだろ。さしずめ、庶民的な姿をメディアに取り上げてもらう為って感じだろうけど」
暁は応援すると言いながらも辛口な評価を下した。
慣れない政治の話をしていると、花火大会の開始まで残り1分程となっていた。
2人は何も考えずに、ぼーっと遠くを見た。花火大会直前の会場はいやに静かに思えた。街中が花火が打ち上がるのを、じっと待っているかのようだ。
「……あのね、あたしも見たんだよ」
亜美が数十秒後花火が上がるであろう夜空を見ながらふとそんな事を言った。
「何を？」
暁も同じく空を見上げて、尋ねた。
「何だと思う？」
「うーん……分かんねーな」
「知りたい？」
「まあ……気になるな」
「今朝ね、ビックリしたんだよ」
亜美は笑顔で言う。
「……？」
「今朝、あたしも見たんだ、暁に初めて話し掛けた時の夢」
「……！」
――ドーン！
一発目の花火が上がった。
亜美の言葉に暁は何も言えなかった。二人とも顔を真っ赤にして、ただ花火を見ていた。
速まった心臓の鼓動と花火の振動が胸を響いた。

その日、花火の輝きがいつもよりずっと優美だった。

- 4 -

「あたし、ちょっと飲み物買ってくるよ。またラムネで良いでしょ？」

花火大会が終わると、亜美は何事もなかったかの様に言った。

「……あ、ああ。っていうか、俺も行くよ」

余韻嫋々たる花火の音に誘われ、暁は一瞬まどろみの中にいるような錯覚を感じた。そのせいか、暁は亜美の言葉にワンテンポ遅れて返事をした。

「いいよ、ここにいて。花火終わったから帰り道が凄い混むから、はぐれちゃうよ」

「そっか。じゃあ、任せる。お前がはぐれんなよ」

「りょーかい」

亜美は屋台に向かって歩いて行った。

暁は亜美を待つ間、ステージの方を見ていた。ステージの中央にはこの街出身の文部科学大臣、鮎川哲郎が立っていた。

一言挨拶ってわけか……。

案の定、鮎川はマイクを片手に自己紹介を始めた。予期せぬ有名人の登場に夏祭りの客たちは足を止め、ステージに視線を向けた。

一方、暁は客たちとは逆にステージから目を背けた。

「祭りに政治家ね……。ったく、興ざめだ」

暁は小さくぼやいた。

「全くだね、暁」

「……！？」

背後から声がした。暁の知っている声。

「……神屋か」

暁が振り返ると、眼前には神屋聖孝が立っていた。真夏の夜に、

薄手の黒コート。その姿は闇に溶け込みながらも異彩を放っているような、不思議さを感じさせる。
「やっと見つけたよ。ちょっと急用があってね。話を聞いて欲しい」
神屋は珍しく焦った様子で言った。
「神屋、その前にお前に答えを言わなくちゃいけない。お前に協力するか否か……」
「君の答えは分かってるよ。誰でも、危険な目に遭いたくはないさ」
「違う。……俺はお前に協力する。そう……決めた」
「……!?」
神屋は意外そうな顔をした。
「昨日は悪かった。お前は俺に危険を知らせてくれたのに、俺は自分が逃げることしか考えてなかった」
暁は友人を見捨てようとしたことへの罪悪感を感じていた。次に会ったら謝ると決めていたのだった。
「……ありがとう。しかし、僕は危険を知らせたわけじゃない。利用しようとしたんだよ」
「それでいい。俺を利用するには、同時に俺を守らなければならないはずだ」
信頼関係があればこその契約だったが、暁は神屋を信じていた。
「……分かった。君の身は僕が守ろう。……それで、早速だが暁、今日は自宅に帰らないでほしい」
「えっ……はぁ!?　な、なんでだよ?」
暁は神屋の急な指示に戸惑いを隠せなかった。
「急用があると言っただろう。今夜もしくは明日の朝、王里神会は君を本部に連行しようとするはずだ。それが昨夜急に決まった」
「もう動き出したのか?　王里神会は……」
「正確には『動き出す』だ。今からね」
「……マジかよ」
暁は状況を整理する様に黙り込んでしまった。
「駅前のホテルに部屋を用意した。今のところは危険はないはずだ

から、しばらくはそこに寝泊まりしてほしい。僕も同じフロアに部屋を用意したから、君に全てを話すのにも適している」

神屋は文科相がスピーチをしているステージの方を見ながらそう言った。駅前のホテル……おそらくは暁が帰省する際に使用した駅の前のホテルだろう。

「神屋、一ついいか？」

暁にはどうしても確かめなくてはならないことがあった。

「なんだい？」

「連行されるのは、亜美もか？」

「……いや、篠原亜美は母親と暮らしている。娘が急に消えたらすぐに怪しむだろう。面倒を起こさない為にも篠原亜美の連行は無いだろう」

「そうか。出来れば亜美を巻き込みたくないんだ。この事は亜美には話さないようにしたい」

「……」

暁の意思を聞いた神屋は何かを考えるように静かになった。

「それは無理だよ、暁」

「無理？　……どうしてだよ」

「君は大きな勘違いをしている。君か僕が彼女に事情を話した時点で彼女が巻き込まれるというのは違う。……いいかい、君たちは既に巻き込まれているんだ。リストに名前が載った時点でね。君にしたって、僕の同級生だから巻き込まれているわけじゃない。巻き込まれた君が偶然僕の同級生だっただけなんだ」

「……そうか、そうだよな。そんな簡単にはいかないってわけだ。つまり、亜美に話さないことの方がかえって危険なのか……」

暁はその現実に気付いていなかったわけではなかった。ただ、全てを話すことが、亜美を巻き込むことを確定させるようで怖かったのだ。

「ああ、話すべきだね。僕としては今日は無理でも、明日以降に出来る限り早く、彼女にも部活の合宿とでも親に嘘を言って、僕が用

意した場所に寝泊まりしてもらうべきだと思ってる。僕が全てを話すにしてもその方が良い」

「そうか……分かった。もうすぐ亜美が帰ってくる。王里神会のことも、俺たちが危険に巻き込まれていることも、簡単に話すつもりだ。だが神屋、その前に俺たちがリストに載った理由を……！！」

暁は言葉を止めた。

左目の端に、亜美の姿を捉えたからだ。話に集中するあまり、亜美が帰ったことに気付かなかった。その距離は暁と神屋の会話を聞き取るには十分な距離であった。

「亜美……！　お前、いつからそこに居た？」

暁が亜美にそう尋ねると、亜美は暁のすぐ前まで近づいて答えた。

「あたしが連行されるとかナンとかって辺りかな」

「……はぁ……」

暁は、頭を抱えて溜息をついた。

「それで、あたしと暁が何に巻き込まれてるって？」

亜美は落ち着いた様子で言った。

「……亜美、落ち着いて聴けよ」

「……うん」

「まず、王里神会を知ってるか？」

「危ないことをしてる新興宗教でしょ」

亜美は横目に神屋を睨みながら応えた。

それを聞いて神屋はつい感想を述べてしまった。

「世間ではそんなに評判悪いんだね、僕ら」

「ちょっと黙っててくれないか、神屋。話がややこしくなるだろ」

暁は急いで神屋を止めた。「僕ら」などという表現で亜美の神屋に対する懐疑の念を喚起させるのは、明らかな神屋の癖だった。無論、アクティブフェーズという一種の挑発による性格の特定である。

「あー……ゴメンゴメン。続けて」

そう言って神屋は一歩下がった。

亜美は「それで？」と暁に説明を促した。

「その王里神会が俺たちを何らかの事件に関わる重要人物としているらしい。詳しいことは俺もまだ聞いてないが、かなり危険な連中だ。何をされるか分からない」
「……それで、暁が今夜王里神会に連れて行かれちゃうからどこかに隠れるってこと？」
「ああ、そうだ。そして、次にお前が狙われる。だから亜美、お前も出来れば隠れてほしいんだ。隠れる場所はコイツが用意してくれる」
暁は目線で神屋を示してみせた。
「……ふーん。なるほどね。……で、この人はどなた？」
亜美は一歩下がって黙っている神屋を指差して尋ねる。
「言ってなかったな。コイツは――」
暁が説明しようとすると、それを神屋が止めた。
「自己紹介くらい自分で出来るよ。僕は神屋聖孝。暁の小学校の同級生だ。僕は王里神会の幹部だけど、今はその立場を利用して連中を壊滅させようとしてる。君と暁にはその協力者になってほしい。その代わり、王里神会に狙われている君たちの身は僕が守る」
「お断りします」
亜美は神屋が話し終えるやいなや、言い放った。
「……あれ……？　暁？　予定と違うんだが……」
神屋は暁に助けを求めるように言った。
暁はただ額に手のひらを置いて溜息をついた。神屋が一瞬で封殺されたので、やむなく暁は助け舟を出した。
「亜美、俺たちはどっちにしろ既に巻き込まれてる。神屋に頼るしかないだろ？」
亜美は暁の言葉を受けて、数秒間考え込んだ。
「それもそうね。……じゃあ、条件二つ。まず、あなたが信頼できると納得できる証明をすること。次に、王里神会が妄想集団じゃなくて、ホントに危険な連中だという証明をすること」
亜美は神屋に向かって二つの証明を要求した。

「面白い条件だね。幸い、僕は君が納得のいくような証明が出来ると思うよ。証明の材料は偶然にも昨日揃ったからね」
神屋は安心したようにそう言った。
暁は亜美の出した条件を厳しい条件だと感じていたが、神屋は自信がある様子だった。
暁と亜美から等しい距離の場所に立ち、神屋は再びステージの方を眺めた。
突然風が吹いた。神屋のコートが不気味に靡く。木々が枝葉を揺らす。
風が止む。いよいよ神屋が口を開いた。
「じゃ、始めようか」
暁には、真実の一端が明かされるような気がしていた。

- 5 -

「さて、まず僕の安全性を証明する。篠原さんに何故僕がここに来れたかを考えてほしい」
神屋は穏やかな口調で言った。
「どういう意味？」
亜美は首を傾げた。
「僕は暁がアパートに戻るのを止める必要があった。そして今実際に祭りの会場で暁と会っている。そこで、何故僕が暁の居場所を突き止めることが出来たのか……」
「暁に祭りに出掛けるって聞いてたんじゃないの？」
「いや、僕は暁から何も聞いていない。暁、一応復唱してくれ」
暁は、昨日の出来事を思い返した。確かに祭りに行くことは誰にも伝えていないはずだ。
「確かに俺は神屋に祭りのことは話していない」
暁には神屋が何を話そうとしているのか分からなかったが、言わ

れた通りにした。
「自宅に戻るのを止めたいのに、居るかも分からない祭りに暁を探しに行くのは危険だよね。……となると、僕は暁が祭りに出掛けたのを知っていたことになる。篠原さん、君は祭りに暁と出掛けることを誰に話した？」
「うーん……。お母さんと、友達かな。でも、今日はお母さんは出掛けてたはずだけど……」
「つまり、僕がその情報を入手したとすれば、君の友人が僕に話したことになる」
「……それで？」
亜美は一瞬戸惑った様に見えた。
「君が信頼する友人が、僕に暁の居場所を教えたということは、僕が信頼できる人間だという証明になるんじゃないかい？」
「……それじゃあ、その『あたしの友人』の名前は？」
「佐藤静枝」
「！！」
亜美は神屋の前で初めて驚きの表情を出した。暁もまた、同じ様に驚いた。神屋の口から静枝の名が出されることは想定外だったのだ。
「おい聖孝……。お前、静枝まで巻き込んだのか」
暁は静枝の名前が出たことに戸惑いながらも、神屋に糾弾した。
「そのことに関しても僕の意思は関係ないよ。別件で彼女の高校に行ったら、たまたま少し話すことになってね。話しているうちに君たちと友人関係であることを知った。それも偶然ではあるけどね」
「静枝が俺たちの情報を話したのか？」
「ああ、そうだよ。彼女は話すしかなかった。彼女の境遇からしてね。君たちが王里神会に狙われている理由を少しだけ話したら、彼女は僕を信用したよ。なんなら、電話でもして確かめてみたらいい」
そう言って神屋は亜美を見た。感想を求めるかの様に、もしくは信頼を求める様に。

「……分かった。あたしもとりあえず今はあなたを信用する」
亜美は迷い無く言った。親友である静枝が信用したならば、亜美も同じ様に信用する。それだけ亜美は静枝を信じていた。
「確認しなくていいのかい？」
無論、確認とは亜美による静枝への確認である。
「それは後でいいわ。そんなに自信満々で言うんだから、嘘偽りではないでしょ？　むしろ、あのシズを信用させるだけの理由の方に興味が沸いたし」
「もちろん、明日以降君が僕の指示する場所に来てくれるならそれも話すよ」
神屋は、亜美がもう一つの証明を無しにしてはくれないと思いつつもそんなことを言ってみた。出来ることなら次の証明はしたくなかったのだ。
「あたしは王里神会が本当に危険だって分かったら指示に従う。さーて、どうやって証明する気？」
一度は驚かされた亜美であったが、また挑発的な態度に戻っていた。
どうやら亜美は神屋の雰囲気が気に食わないようだ。
「僕からは証明することは無いよ」
「……パードゥン？」
亜美はあからさまに嫌な顔をしてみせた。
「僕は王里神会を裏切ってるのだから、僕自身が王里神会の危険性を証明するのは無理だろう？」
「……あああああああ！！！！　遠回しな表現は止めなさいよ！！　結局何だっていうの！？」
亜美はもう耐えられないといった様子で苛ついていたが、怒れば怒るほどに先程食したかき氷ブルーハワイ味によって染められた青い舌が見え隠れして、迫力が全く感じられなかった。
「落ち着きなよ。僕は君を怒らせるつもりは無いんだから。……それより彼のスピーチ、終わるみたいだよ」

神屋はそう言ってステージを指差した。ステージでは文科相鮎川哲郎がスピーチを終えようとしていた。

『……れることを心から誇りに思います。最後に、このようなスピーチの場と、時間を与えて下さいましたことを感謝します。これからも応援の方を御願いします』

鮎川がスピーチを終え、祭りの客たちの拍手の音が響いた。

「まだ話してたのか、あの人」

暁は客たちに向かってお辞儀をする鮎川を見て言った。

「篠原さん、それに暁、今から証明をしよう。何があってもステージから目を離さないでほしい」

神屋は更に強調するようにステージを指差した。

それに釣られて暁と亜美はステージを見た。

鮎川は三方向にそれぞれ小さくお辞儀をした。

そして、鮎川がステージから降りようとしたその瞬間、突然ステージの上空に花火が上がった。

「何だ？」

「……花火？」

暁と亜美は突然上がった花火を目で追った。その謎の花火に、ステージ周辺の客たちも一斉に空を見上げた。

そんな一瞬だった。誰もが花火に目を奪われたほんの数秒間。その間に事件は起こった。

――パァンッ！！！！

会場に大きくな発砲音が響いた。

「！！！！」

「！！！！」

暁と亜美は音が鳴った方向――――ステージに視線を戻す。

「なっ！！」

「ウソっ！！」

ステージには大量の血を流して、鮎川哲郎が仰向けに倒れていた。

ＳＰらしき男が数人側にいたが、花火の音に敏感になるあまり、

鮎川を護れなかったようだ。
知事を始め、数人が鮎川を取り囲んで必死に声を掛けている。
辺りにざわめきが広がる。暁も亜美も、何が起きたのか理解できずにいた。
しかし、ステージ近くにいた女性が悲鳴をあげた刹那、暁と亜美は全てを理解した。
……鮎川が何者かに狙撃された!?
「……」
亜美はあまりの衝撃に言葉を失っていた。
暁は混乱する頭を無理に働かせ、神屋の方を見た。
神屋は全てを冷静に眺めていた。
「心臓を撃たれている。この混雑のしようじゃ、救急車も中には入れない。長くはないだろうな」
落ち着き過ぎているくらいの口調で神屋は鮎川の死を宣告した。
暁は神屋の言葉を聞いて確信した。これは王里神会の仕業であると。
「神屋……お前知ってたんだな？　鮎川が撃たれるということを！」
「ああ。だけど僕には何も出来ない。今の僕じゃ止めることなんて不可能だ。分かっていながら見逃す、そうせざるを得なかったんだ。鮎川は秘密裏に王里神会の裏の部分を探り、教会の目論見に気付き始めていた。鮎川が総理になったら王里神会は動きづらくなる。だから彼は撃たれたんだ」
「警察に話せば、こんなことにはならずに済んだんじゃないのか？」
「情報元をどう説明する。王里神会はプロを雇ってる。警察も情報不足で王里神会までたどり着かない。結果的に王里神会を潰すことは出来なくなる。それに僕がリークしたとバレて僕は処分される。そうなれば王里神会を壊滅させようという作戦は失敗だ」
「……くそっ！！　どうしようもなかったっていうのかよ……」
騒然とする中、暁は鮎川が担架で運ばれるのを見ながら言った。
暁を言い含めた神屋は、亜美のすぐ前まで近づいた。

「やり方が美しくないが、僕は王里神会の危険性を証明した。納得いったかな？」
「……あたしもやり方が気に食わない。だけど、王里神会の危険性は十分に理解した」
「王里神会の仕業だという証拠は見せられないが、それはいいのかい？」
「何言ってんのよ。第一の証明であたしはあなたが信頼できると認めたんだから、それで十分でしょ」
亜美は神屋の目を見て、はっきりと言った。
「……そうか。ありがとう」
「あたしたちを守ってくれるんでしょ？」
「全力は尽くすよ」
「それじゃ、あたしも暁と一緒にあなたに協力するわ」
亜美は神屋に始めて笑顔を見せた。笑顔といっても微笑みに近かったが、それでも神屋は安心することが出来たのだった。
「しかし、間に合って良かった。暁が祭りの会場にいるのは知っていたが、見つかるかどうかは賭けだったんだ。暁が自宅に戻っていたら、アウトだった」
「携帯アドレスを交換すべきだったな」
暁は亜美が神屋を信用したことに安心しつつ、神屋に言った。
「そうだね。ホテルで各々の連絡先を交換しておこう」
「それはいいけど、あたしはいつ、どこに行けばいいの？」
亜美は先々から気になっていたことを神屋に尋ねた。
「君はとりあえず今日は自宅に帰ってもらうよ。一応警戒はしておいてほしいけどね。暁はこの後僕と駅前のホテルに来てもらう。それで明日になったら、暁がメールで篠原さんをどこかに呼び出して、そこから僕か暁が尾行に注意を払いながら同じホテルに連れて行く……という感じかな。それでいいかい？」
「了解。明日から文芸部の合宿に参加するって、お母さんには言っておくね」

「篠原さんが来たら君たちが王里神会に狙われている理由を話すよ。それから、王里神会の更に詳しい裏情報も……ね」
神屋はそう言って微笑した。
「ねぇ。あなたは何でそんなにホテルで全てを話すことに拘ってるの？　別に概要くらいここでも話せるでしょ？」
亜美は神屋の態度に違和感を感じていた。そして、それは暁も同じだった。
「落ち着いた場所で話したいんだ。佐藤静枝が君たちに何も話さなかったのも僕が口止めしたからだしね」
「明日まで待てっていうの？　ふざけないで。何に巻き込まれたのかも知らないで何を警戒しろというの？」
「……確かにそうかもしれないけれど……」
神屋は真剣に悩んでいる様だった。
「神屋、話してくれよ。俺は二日も待たされてんだぞ」
暁にも神屋がもったいぶる理由が解らなかった。それに、得体の知れない恐怖に心を支配されているようで、これ以上耐えられそうになかった。
神屋はその場でじっと考えていた。一分ほどして、ようやく神屋は口を開いた。
「……分かったよ。しかし、質問は明日までしないと約束してほしい。明日まで僕は何も答えない。……いいね？」
暁と亜美は息を呑んだ。
「分かった、約束しよう。質問は全部明日だ」
「あたしもオッケー。それくらいは我慢するわ」
神屋は辺りを見渡した。静かに息を吐いて、二人の顔を順に見た。
「君たちが狙われていることに深く、直接的に関わっている人物がいる。」
暁は亜美と顔を見合わせた。
妙な胸騒ぎがする。身体が悪寒を感じた。
神屋の次の一言は暁と亜美を驚かせはしなかった。それは、あま

りに突然だったのだ。あるいは無意識に恐れていたのかもしれない。神屋がその一言を口にすることを。

「その人物は……鬼頭火山。君たちが一度、その結末を見た人物だ」

その一言で、閉じたはずの運命の輪は再び螺旋を描き始めた。

bittErsweet festiVal（後書き）

ここまで読んでくださった方々、本当に感謝します！
実は、鬼頭火山のお話はまだまだ先があったんです。
1章は、その全てが2章のための伏線だったといっていいでしょう。
キーワードに「サスペンス」があるのもそのせいですね。
1章の鬼頭火山に関する事件はまだ氷山の一角です。
今後の展開をお楽しみに！

閉ざされしパンドラの箱　～真実～（前書き）

遅くなって申し訳ありません！
受験生って嫌ですね・・・。

閉ざされしパンドラの箱　～真実～

- 1 -

ホテルへ向かう道中も、ホテルに着いてからも、暁の首筋から冷や汗が引く気配はなかった。

「どうした？　死人みたいな顔して」

神屋は笑った。

暁の顔色があまりに悪く見えたためだ。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。ちゃんと手は打ってある」

神屋が何を言っても、暁の耳には届いていなかった。目の前で人が殺されたことにより発覚した王里神会の想像以上の危険性、その悪の組織に自身が狙われているという恐怖感、そして、神屋の口から出た「鬼頭火山」という名前……。それら全てが濃厚に暁の心中で混ざり合い、得体の知れない混沌的な恐怖を生み出していた。肩の力と足の力が抜け、胸の辺りが無性に苦しい。ホテルに向かう途中、何度もつまずいて転びかけた。

高級ホテル『Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ』は、中に入ると外から見るより広く感じ、安定感のある落ち着きが介在するその空間に、暁は耳掻き一杯分ほどの安心感を得た。

「今日からしばらくはここに泊まってもらうわけだけど……、聞いてる？？」

「……あ、ああ」

三階の十四号室、そこが暁たちの部屋となった。

部屋に入ると、暁はすぐに椅子に腰掛けた。背筋をピンと伸ばし、

目をつむる。本当は、今すぐにでも、誰かにすがりつきたい思いだった。怖くて怖くてたまらなかったのだ。

「……暁」

神屋の目から見ても、暁の心中は容易く伺えた。ピクリとも動かず、両の手のひらを太ももに添え、悲壮的な表情を浮かべる暁は、目撃した者に「哀れ」という語彙をあからさまに連想させる雰囲気を漂わせる。

……すまないね、暁。

自分が悪い訳ではない。それはわかっていたが、心の中で謝らずにはいられない。罪悪感とはまた少し違う感情である。

「……今日はゆっくり休んでてくれ。僕はちょっと行かなくちゃならない」

神屋の「行かなくちゃならない」という言葉に、暁は激しく動揺した。

「い、く……ッて！！　どこ行くんだよ！？」

一人にしないで欲しい、その思いが露骨に表れた言い方だった。

「王里神会の会議があって、これればかりは外せないッてヤツなんだ。明日の朝には戻るからさ」

そう言うと、神屋は暁に背を向けて玄関へ歩き出した。暁は立ち上がり、目をカッと見開いた。暁の尋常ならざる動揺を感じ取ったのか、神屋は振り返った。暁は、震える声で言う。

「も……もし奴らが来たら、どうすんだよぉ！？　頼むからいてくれよお！！」

「はは、いつものクールな暁君はどこへ行ったんだい」

「おッお前ぇ！！」

「ははは、大丈夫だってば。尾行はない。何のために、あのタクシーのおじさんに、あんなに走り回ってもらったと思っているんだい」

「そんなんわかんねぇだろぉ……！！　警察呼んだ方がいいんじゃねぇのかぁ！？　なあ！」

暁の目は、すがるようであった。しかし、神屋は相変わらず冷静

だ。
「警察ねぇ……。あんなの頼りにならないと思うけどね」
「……何故だ!?」
「うん、ひとつだけ、面白い話をしておこう」
と言って、神屋はリビングに向かって歩き出した。さっきまで暁が座っていた椅子に座り、暁をじっと見据える。
「何だよ……」
「言っておくが、王里神会は君を殺すつもりはない……、今はね」
今はね……、その言葉の意味することに、暁は半ば絶望を隠しきれない。一歩二歩と後退し、壁に背を預け、そのままゆっくりと潰れていった。
「もし僕たちの位置が割れていたとしても、君が殺されることはない。あっても、連行されるだけ。まぁ、僕は間違いなく、抹殺されるだろうけど」
「抹殺？　何故？？」
暁が小さく尋ねた。
「質問は無しだ。約束したろう。いいかい、王里神会は目的のためなら手段を選ばない。警察がいようがなんだろうが、やると決めたことはどんなことをしてでもやる。そのために、彼らを雇っているんだよ」
彼らが何のことを指しているのか、暁にはわからない。
「彼らはプロだ。警察など、相手にもならない。そう……、殺し屋だよ」
暁の眼球が、一瞬だけ微動した。一人の女子高生を思い出した。
「警察はあてにならないよ」
まるで諭すかのような口調だった。
「……何で俺が」
「とにかく、警察を呼ぶなんて馬鹿なこと、しないでくれよ。王里神会には、警察関係者の中にも抱き込んだ上役が何人かいるんだ。外崎暁からの通報だと知れれば、王里神会も動く」

神屋はベッドが二つある寝室の入口に顔を向けた。しばらく顔を向けたまま、視線を逸らそうとしない。寝室に特に変わったものはなかったはずだと、暁には神屋の視線の意味がわからなかった。

「……神屋。警察には連絡しないと約束するよ」

――けど、と暁は続けた。

「もし、もしも、この場所が奴らに知られたら、どうするんだ」

それは、強く、ハッキリとした口調だった。抗う術はあるのかと、神屋に迫るように。

しかし依然として、神屋は寝室から目を離さない。「聞いているのか」と暁が口を開こうとしたちょうどその時、神屋の見つめる寝室から『ガタガタッ』という音が鳴り響いた。暁は血の気が引くのを覚えた。

神屋はその音について、敢えて触れず、

「言ったでしょ。手は打ってあるって」

と言い残して部屋を出て行った。

ガチッというドアの閉まる音がぐったりとした暁の耳に余韻を残し、さらなる静けさを醸し出した。力なくドアの方を見てみると、ドアに微かな隙間があるかのように見えたが、正直、そんなことはどうでもよく感じられた。暁は冷蔵庫を開け、中に入っていた炭酸飲料を何杯も飲んだ。

自分の置かれた状況の深刻さは想像以上のものだった。最初は何かの冗談だと思い込むことで精神の安定を図ることができたが、あの映像が脳裏にこびりつき離れず、もう冗談では済まされない状況に立たされているということを理解してしまった。突如、夏の夜空に打ち上げられた花火、そして銃声……、鮎川の死。美しく開いた火薬の華は、まるで鮎川暗殺の成功を祝っているかのように感じられた。

暁は部屋を見回した。

見たところ、物に困ることはなさそうだ。高級ホテルだけあって、充実している。部屋はリビングと寝室の二部屋構造だが、どちらも広い。神屋と二人で生活するにしても、窮屈に感じることはないだろう。

壁に掛けられた時計を見ると、既に夜の十一時を過ぎようとしていた。いつの間にそんなに経ったのだろう。時間感覚が麻痺している。過度のストレスを感じているせいなのか。

部屋は静まり返っている。

気が付くと、飲みかけのグラスを片手に、焦点の合わない視線を部屋の辺りに彷徨わせていた。深い深い、底なしの闇に突き落とされた気分がした。

一旦、横になろうと、隣のベッドルームに入った。先程、不吉な音をこの部屋から聞いたばかりであったが、今の精神状態を鑑みれば、恐怖に負けて目をつむらないよりかは、横になって休んだ方が賢明に思える。もとより、王里神会に拉致、または殺害される恐怖に比べれば、誰も居ないはずの寝室から物音がしたくらいの恐怖など、恐怖と呼ぶに値しない。

ベッドに身体を預けると、自分が認識していた以上の疲れが、どっと溢れて出た。肉体的な疲労より、精神的疲労の方が大きい。仰向けの状態で目を閉じる。このまま目を開けることなく、心ゆくまで眠りたい……。

「……」

しかし、思い出さずにはいられなかった。神屋のあの言葉。

……鬼頭火山。

鼻の奥、ちょうど大脳の下辺りと言えばよいのか、その辺りに、黒くて重いモノの存在を感じる。悪夢が現実となって、目の前に突きつけられた感覚に近い。取り返しのつかない、重大なミスを犯してしまった時も、これと同じモノを感じていたことを、暁はぼんや

りと思い返した。確か、化学の成績で赤点を取ってしまった時も、これと同じ感覚を味わった。

……自分の心臓の音が聞こえる。

十四号室は完全に静まり返っていた。こうしている今も、世界のどこかでは、大声を張り上げ、その生を横臥せし者がいる。たったそれだけの事実が、嘘に思えてくる程の静けさ。外を走っているであろう車の音すら聴こえてこない。単に、このホテルの部屋の壁は、防音性に優れているだけとも考えられるが、それだけがこの静けさの原因でないことはわかっている。暁は感づいていた。すぐ側で息づく、自分以外の生命の存在に……。

「――――」

頭の中で、ゴォーンという音を聴き、目を開けた。それは外部で鳴った音では有り得なかった。頭の中で聴こえた音だった。

暁は、できるだけ静かに、音を立てず、ゆっくりと体を起こした。そして、目をつむり、極限にまで耳を済ませてみた。すると……、確かに聴こえてくる。何者かが、息を吸い、吐く音。かなり微かだが、聴こえる。だが、どこから聴こえてくるのかわからない。幻聴なのだろうか。

ベッドから立ち上がり、部屋をゆっくりと見回した。隣のリビング、二つのベッド、カーテン、テレビ、物置棚、クローゼット……。それらの物が、暁を包囲している。そんな感じがした。やはり、あれは幻聴ではなかったようだ。確実に、何者かが、物陰からじっとこちらを伺っている。背中に痛い程の視線が突き刺さってくる。間違いない。それは今、背後にいる。

暁は、すっと、振り返った。遅くもなく、速くもなく、かなり自然なスピードで振り返った。そこに何がいてもいいように、心の準備は整えてあった。いずれにせよ、そこに何かがいるのはわかっていた。気配が濃厚過ぎるのだ。妄想では有り得ない気配。否応なしに迫ってくる圧迫感。もう覚悟はできている――しかし、それにしても、心臓の音は穏やかだった。

そういえば、本物の幽霊を見たのは、ごく最近のことだ。暁は、止まった時間の中で、あの時のことを思い出していた。あの時は、すぐ側に頼りになる仲間がいたからいいが、今は一人きりだ。助けは来ない。思い出しただけでもぞっとする、あの女霊の歪んだ形相。結局は、如月愛の活躍により、幕を下ろした。暁は、それをぼんやりと眺めて、こう思った。あの経験がなかったら、今、クローゼットの隙間から覗く、冷徹な眼を前に、こうして立ってはいられなかっただろうな……。その眼は、ただただ、じっと、暁を見つめていた。

動けない。足が動かなければ、口も開かない。頭の中は空白だ。あらゆる思考がシャットダウンされ、その目に映る事象に圧倒される。

……それは……、ないですよ。いやいや……、そんなことはない。本能が事実を拒否しようとしている。

……なんで？　そこに……ある。おかしい……いや、おかしい。有り得……ない。

暁の意志とは裏腹に、皮肉にも、クローゼットは開き始めた。ギギギと音を立て、部屋の電気が不気味な眼の主を光にさらす……。徐々に、徐々に、陰影と光のコントラストをその表情に再現させて、それは姿を現した。

「……っ！！」

暁はよろけて、そのまま床にひざまずいた。

誰もいるはずのないクローゼットの中から出てきたのは……、人間だった。

背はそこまで高くない。暁とそう変わらない背丈。ベージュのズボンに、チェックの上着。ボタンを閉めていないので、上着の下に白のTシャツを着ているのがわかる。

顔は日本人のそれではなかった。

欧米人……。

「ハジメマシテー。トニーデス」

そこは一様に美しかった。

テレビ、棚、冷蔵庫、キッチン、床、天井、電気……、あらゆる小物、それら全てが、静かに呼吸をしているかのような静寂さが、そこには介在した。

恐怖から安堵までの、一切の感情が消えていた。在るのは、現実という名の虚無を冷静に眺める、いわば、無心の心だった。何もかもが、非常にどうでもよく思えてくる、一種の諦めのような感情に近い。己に降りかかるであろう運命が、喜劇であろうと悲劇であろうと、逆らうつもりはない。もっとも、喜劇を忌み嫌い、逆らおうとする人間もそういないはずだが。

暁は、椅子に座り、視線を少し落として前だけを見ていた。頭の中では、何も考えていない。いや、何も考えたくなかった、と言った方が適切だろう。

しかし、考えなくてはいけないことは幾つかあった。暁は、机を挟んで目の前に座る男を睨んだ。

……こいつは、何者なのか。

赤紫と白黒のチェックの柄の上着を羽織り、その下には白いTシャツを着ている。下はベージュのズボン。顔つきは明らかに日本人ではなく、アメリカ人。どう見ても怪しかった。見た感じの年齢は、二十三といったところか。しかし、それにしては背が低い。自分とそう変わらない背丈……。髪型は、一風変わっていた。額が異常に広く感じるほど、あるはずの前髪は、そこに面影すら感じさせない。かといって、他の部位は正常に髪が生えているし、見た目が若く見える禿げた年長者、というわけではなさそうだ。顔については、特に目が特徴的だ。奥目になっていて、角度によっては目もとに黒い影ができるほどだ。そして、何よりも、その瞳。冷たく、恐ろしい目だ。「悪魔的な目」というタイトルの絵画のモデルを務められそうな気さえしてくる。悪魔、この言葉が嫌に似合う瞳の持ち主だ。

しかし、何故だろうか。その目を見つめていると、妙に落ち着いてくる。

「座ッテ……、話デモシマショウ」

その言葉に素直に従ったのも、そのおかげと言えよう。

長い時間が経った。いつの間にか、暁の前にコーヒーが置かれていた。暁がうつむいている間に、男が入れたものだった。

いつまで待っても、男は口を開こうとしない。我慢できなくなり、暁は口を開いた。

「あの……。どなた……、ですか？」

男は、答える。

「トニートイウ者デス。神屋サンニアナタヲ守ルヨウ言ワレマシタ」

「……！！」

……神屋の言っていた「手」とはこのことか。

暁は唾を飲んで尋ねた。

「……と、いうことは……、やっぱり……」

男は、暁の危惧していることがその顔色からうかがえた。ニヤリと笑みを作り、暁に言い放った。

「アナタワ……、王里神会ニ狙ワレテイマス」

「……ですよ……、ね」

暁は、苦笑いを浮かべながら頭を掻いた。もう、この事実は動かないらしい。諦めるしかないようだ。

沈黙が訪れた。十分ほどの間、会話はなかった。暁は、ただただ、コーヒーを飲んだ。男は、感情を持ち合わせないロボットのように、微動だにせず、暁を眺めていた。暁は、度々、男と目が合って困惑した。こういう空気が、一番苦手な暁であった。

カップのコーヒーも底を尽き、ちょうど日付も変わった頃、男は突然にこう言った。

「怖イ……デスカ？」

暁は、頭をむしり掻いてから、「そ、そうですね」と答えた。

「コチラワ、コレカラアナタヲ護衛スル立場ニアリマス。デキレバ、

オ互イノコトヲ深ク知リ合イ、仲良クナリタイデス」
それもそうだ。護衛の前に、まずは信頼が欲しい。
「……そうですよね。すいません。さっきから、なんか……、焦っちゃって。えと、じゃあ、自己紹介しますね……」
こうして、暁と謎の外国人との、真夜中の対談が始まった。

- 3 -

王里神会本部ビルの六十七階。
エレベーターランプが指している階は、ちょうどそこだ。
「六十七階でございます」
若いエレベーターガールの声。同乗していた一人の男が、降りる間際に、こう言った。
「近いうちに白いニット帽を被った男が、このエレベーターに乗るだろう……。その男には、十分、警戒しておくことだ」
個性的なギザギザとした髪型の美形の男は、そう言い残して去っていった。歩いていくその後ろ姿に、女は深く礼をして、
「有り難き幸せ」
と微笑ましい笑顔で囁いた。
男の行く先は、上司の部屋。足取りは異様に落ち着いていて、漠然たる静寂がその身を包んでいた。見る者に神々しささえ感じさせる。
コンコン――、不意に叩かれたノックに、王里神会幹部、藤原は、回していたペンを落としてしまった。
「どうぞ」
「失礼します」
藤原は、入室してきた部下の表情を見て、口元をにやつかせた。
部下を見つめるブラウンの瞳は、信頼に満ちている。
「君のことだ。成功したのは、確認するまでもない……、そうだろ

う？　セシル」
「勿論です」
答えながら、絨毯に落ちたペンを拾い上げ、セシルはこう続けた。
「案外、簡単でした。神屋はまるで気づかなった様子です」
セシルはペンを机に置き、藤原の言葉を静かに待った。
「ふん……。いくら変装していたとはいえ、神屋が君の出す独特な雰囲気を感じ取れなかったとは……。どうやら、相当、焦っていたようだな」
藤原は、言い終えて窓を見やった。星ひとつ見えない、藤原の好きな真っ暗な空だった。
「あなたの手の者が、外崎を拉致することを案じていたと思われます。あなたが事前に神屋と接触してくれたおかげで、神屋を焦らせることができた……」
セシルは、椅子に座る藤原の横に立ち、一緒になって空を見始めた。それを見て、鼻で笑ってから、藤原は独り言のように呟いた。
「……外崎暁……か」
「作戦通りなら、今頃、二人きりでしょう」
「……」
「――――我らが主と」

ホテル『Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ』三階十四号室。鳴り響いたのは黄色い笑い声だ。
「ひひはははっ！！　そ……、それはないですって～～」
暁は、トニーのジョークに腹を抱えて笑っている。つい先ほどまでの、気の落胆ぶりが嘘のようだ。
トニーも笑顔だ。
「……暁サン……。布団ガ吹ッ飛ンダミタイデス」
「ははははッ」
「サテ……。コノクライニシテオキマショウ。ジャパニーズジョー

クハ下ラナイ」
　トニーの顔から笑顔が去った。それを見て、暁も表情を沈めていった。
「暁サン……。ワタシワ暁サンガ見セル……、ソノ顔ガ……、気ニナリマス」
「え？？」
「タマ～ニ、暁サン、悲シイ？？　辛イ……？？　ミタイナ顔ニナリマス」
「……」
「隠サナイデ話シテ下サイ。気持チヲ……、全部」
「……トニーさん。こんなダメな俺のことを……。わかりました。じゃあ……、話します」
　暁は親身になって、色々なことを語り出した。トニーは、うなずきながら、暁の話を聞いた。
「やっぱり、将来が不安です」「よく……」「学校って、色々と面倒くさいんですよ」「しかし、勉強がなぁ」「この前、高山っていう友人が、ゆかりんっていう」「努力はしたいけど、難しい」「生きることに意味なんて、見いだそうとすること自体、どこかナンセンスであって……」「ニーチェが」「どうしよう」「……もうダメかも」
「……ソンナコトハナイデス」
「……え」
　暁は、伏せていた顔を上げた。
「希望ヲ捨テテワイケマセン。マダマダ、人生ワ長イデショ」
　トニーは、限りなくにこやかな表情だった。暁は、トニーの言葉に勇気づけられた。他人に思っていることをとにかく話す、聞いてもらうということが、ここまで心を晴れ晴れとさせるものだとは暁も知らなかった。暁は、新しいものを発見したかのような心地を味わっていた。
「前ヲ見テ頑張ルシカナイ……ソウデショ」

「……と、とにーさん」
「辛イノハワカリマス。宿題ガ面倒ナノモ、痛イホド。暁サンワ学生ダカラ受験ガ怖イ。デモ逃ゲチャダメデス！！　不得意ダカラコソ挑戦スル。人間ニ課セラレタ運命。人生ワ挑戦デス」
「……あ、あ、ありがとう……」
トニーはテレビをつけた。
暁もなんとなくテレビに見入った。
結構な時間が経った。目をこすり、暁は時計を見た。
……午前二時。
暁の頭がまどろんできた。だんだんまぶたも重くなり、気を付けていなければ、眠ってしまうだろう。
……あー、ねみ。
……――キラサン、――――……サ……アキ――……。
「……」
……誰かが、呼んでる？
「暁サン」
「……おう」
「起キテ下サイ」
暁は、机に預けていた体を起こし、トニーを見た。いつの間にか、テレビが消えている。今は何時なのか。
暁は時計を見ようとしたが、眠気がそれを邪魔した。暁は、もう一度、トニーを見た。最初とまるで変わらない姿勢のまま、じっと暁をうかがっている。
……ずっと俺を見ていたのか？
暁の背中に悪寒が走った。急にトニーが怖くなった。思えば、トニーとは今日、会ったばかり。どんな人物なのか、本性はまだわかっていない。
「……」
「……暁サン。話ガアリマス」
……落ち着け。この男は神屋が選んだ王里神会の護衛役。危

険はない。危険はないはず……。
ここで暁は、数時間前のことを思い出した。
……そうだ!!　この部屋から音が鳴った時、神屋も気づいてたじゃないか!!　大丈夫だ。危険はなくなった。コイツがホントは王里神会の神屋側じゃない側の奴ってことは、なくなった。良かった良かった……。
トニーは立ち上がった。
冷徹な視線を、上から暁に投げかける。奇妙な雰囲気を纏って。
……トニー？
「暁……サン」
「……」
……なんだ？　何が起こる。もしかして、怒らせたか……？？
寝ちゃったのがいけなかった？？　いやいや……、まさか。そんな、嘘だろ……。まさか……まさか!?
暁も立ち上がった。トニーが敵側の王里神会である可能性も否めない。今までのは、警戒心を解くための芝居、そう考えれば納得がいく。
……コイツ、敵か？　……いや、しかし、神屋はあの音に気づいていた。しかし……、このヤバそうな雰囲気は。顔もなんか、恐いですし……、どうする？？
暁は、じりじりと限りなく少しずつ後退した。玄関に続く廊下に目をやった。
……確か、この部屋、鍵はオートロックだったよな。落ち着けよ。左に突っ走れば、すぐに玄関だ。それに対しトニーは、俺とテーブルひとつはさんでる。断然有利。一気に逃げるか……、どうする。今のうちに逃げた方がいいんじゃねえか？？　いや、まだ、様子を見てから……。
「……暁サン。立ッテドウシタンデスカ？」
不気味な笑顔を浮かべて、トニーはそう言った。
暁は、トニーを威嚇するように睨み、「……なんでもない」とか

すれた声で返した。
「……それより、話ってなんだ？」
「……」
「……」
「アル人物ニツイテデス……」
……ある人物？
「……思エバ、コレワ予言ノ通リダッタ。アナタト彼ガ出会ウコト、ソシテ、ワタシガアナタト出会ウコト……」
……予言？　彼？？
暁には、トニーの言っている言葉の意味がまるでわからない。
「全テハ運命トイウ名ノ歯車ヲ軸ニ回ッテイタ」
真剣に、尚且つ、力強く言い放たれたトニーの言葉に、暁は圧された。
「……ま、待て。何のことだか……、さっぱり……」
「ワカラナイノカ？」
「……」
「クックック……」

- 4 -

「クックック……。コチラヘドウゾ」
トニーと暁は寝室に移動した。この時、暁は初めて、鼻をつんざく臭いをこの部屋のどこかからか感じ取った。
……何の臭いだ？
「暁サン。暁サンハ、ギリシア神話ハ好キデスカ」
「あ、まぁ……、ほんの少しかじってる程度」
「そうですか……。ワタシハネ、コレガ結構、好キナ方デ」
「……トニー」
「何デス？」

「さっき言ってた……、彼とか、運命とか予言って……」
「マァ……、落チ着イテ下サイ」
トニーが一瞬だけ、棚に置かれた目覚まし時計を見るのを、暁は見逃さなかった。
「ギリシア神話ハ、面白イデス」
言いながら、クローゼットの方を見るトニー。この部屋には、クローゼットがニつあり、トニーが見ているのは、自分が入っていなかった方である。
暁もクローゼットを見た。特に変わった様子もなく、それは閉まっている。ただ、そこから妙な威圧感が感じられるのは、気のせいなのかどうなのか、暁にはわからない。
「暁サン。突然デスガ、コノ部屋ニハ、今、何人ノ人間ガイルト思イマスカ」
「……変な質問するなよ、トニー。まるで、俺とトニーだけじゃないみたいな言い方だしさ……。いや～～、まさか、そこのクローゼットに、入っているとか、ね……」
「……ドウデショウ」
「……はは」
トニーは一旦、クローゼットから目を離し、ベッドの端に腰をかけた。
「コノ世ノ生ト死。ソノ謎ヲ解キ明カシタノハ、二年前ノコトデス」
「……？？」
トニーの目は、どこか悲しそうに見える。
「暁サンハ、生キル意味ヲ考エルコト自体ガナンセンスダト……。マァ、考エヨウニヨレバソウナルノカモシレマセン。シカシ、暁サンハマダマダ若イ。何色ニモ簡単ニ染マッテシマウ。ダカラ、本当ノ答ニハタドリ着カナイ。実ハ、アナタガ見テイル世界ハ、想像以上ニ単純ナモノナノデス。数学ノ問題ヲ解イテイテ、コンナ簡単ダッタノニ見落トシテイタ……ナンテ経験ハアリマセンカ？　ヨク見エテイナイダケナンデスヨ。答ハ……、案外、近場ニ在ルモノ

デス」
「……やけに抽象的なことばっかりですねー。何が言いたいのか、よくわかりません……」
「……ソウデスカ？　森羅万象ハ繋ガッテイル……、ナンテ言ッタラ？？」
「……？？　余計……、わからないかな」
「暁サンハバカデスネー」
「えっ……。何だよ、突然」
「ノー。ソンナコトヲ言ッテイルノデハアリマセンヨ。ヤハリ、アナタハマダ若イ」
「若い若いって、トニーさん、あなたは何歳なんですか？？」
「ニジュウサンデス」
「充分……、あなたも若い方」
「ハハハハ」
「はは」
会話は途切れ、続いたのは三十分以上の沈黙だった。
暁は、気づいていた。
……これは。
「トニー」
暁の声は、半ば震えている。
「何デスカ」
「……王里神会がテロを起こすってのは、神屋から聞いてる」
「！」
トニーの眉間が微かにシワを作った。
「……どうするつもりなんだ？　王里神会は」
暁が敢えて言おうとしていたことを言わず、別の話題を振ったのは、直前でその真偽を知るのが怖かったからだ。だが、それはそろそろ晒されるだろう。
「暁サン、アナタ……」
「！？」

「何故、アナタガ王里神会ニ狙ワレテイルノカ……」
……まさか、コイツ。
「ワタシニハワカラナイ」
「……なんだよ、知ってるのかと」
「王里神会幹部ニシカ、V事件ノ詳シイ内容ハ知ラサレテイマセン。ワタシハ生憎下ッ端ナノデ」
「そうだったんだ。え??　てか、トニーって、王里神会のどんな立場?」
「タダノ戦闘要員デス」
「え?　意外だな。あ、まぁ、そうか……、じゃなきゃ護衛に選ばれないよねー……。なんか、ホント、強ーのかっていう……、見た目、そんな強そうぢゃ……、いや、はい」
「……マァ、コウミエテ武闘派デス」
「うん。まぁ……、うん。てゆうかさ、疑問なんだけど。殺し屋とかに勝てるんですか?　……トニーさん」
「……」
「お願いです。黙らないで下さい……せめてそこは」
「ソコソコ渡リ合エルト思イマス」
「そっ……すか。わざわざ僕を拉致するのに殺し屋を使う王里神会に、トニーさんみたいな戦闘要員がいたとは……。少し意外です」
「王里神会モバカジャアアリマセン。独自の暴力要素ハ流石ニ揃エテキマス。暴力無クシテ、宗教団体ガアソコマデ大キクハナリマセンヨ」
「そんな規模でかかったの??」
「世間ニハ知ラレテイナイ裏ノ部分ガ広大デス。カナリノ規模デス」
「へー……。やっぱ……さ、トニーも今の王里神会には否定的なわけ?」
先ほどまで、度々、薄ら笑いを浮かべて話していたトニーの表情が一瞬だけ冷徹なものに見えたのは、彼がこの質問を受けた直後だ。
「エェ……、勿論」

「はぁ、そっか……。あ！　今、思ったんだけど、神屋側の王里神会の人って、トニーの他にもいるんだろ？　いますよね……」
トニーは笑みをこぼして、
「ワカリマセン」
とだけ答えた。
「……怪しいですね」
「……ソウデスカ」
トニーがそう答えた直後のことだ。暁が見つめていたクローゼットから、ガタッという音が響いたのは。
「……」
暁は、言葉を失った。
……誰かいるのか！？
「と、トニーさん」
トニーは、立ち上がってクローゼットに近づいた。
「あ、おい……」
「平気デスヨ」
――――ソレヨリ、暁サン。
トニーは、唐突に、暁に背を向けたまま話し出した。
「……運命ヲ信ジマスカ？」
それは、非道く改まった声の質だった。
暁は、この状況にそぐわない唐突な質問にも、なるべく冷静に答えようとした。出した答えは、
「わからない……」
それは、本心からの声である。十分な間を置いて、トニーは返した。
「ソウデスカ……。確カニ、ヨクヨク考エテミレバ、ワタシニモソノ答ハ出セナイカモシレナイ。人生トイウノハ、イツモ突然ニ、思ワヌ方向ニ転ガッテイクモノ。運命……、ソンナモノハ、モシカスレバ、初メカラナカッタノカモシレナイ」
「……何言ってんだよ」

「一瞬デシタ。ホボ」
「？」
「アマリニモアッケノナイ儚サ。彼ラノ辿ッテキタ人生ガドンナモノダッタノカ、ワタシニハ知ル由モアリマセンガ、結果的ニハ……」
「お……おい、おい！！　さっきから何を言ってんの？　ワケがわからない」
「……ハハハ。暁サン、驚カナイデ下サイ。実ハ……」
「……」
暁は唾を飲んだ。
……実は……！？
「コノクローゼットノ中ニハ……」
「……！！」
「ビックリガ在リマス」
「……」
呆けにとられる暁をよそに、とうとうトニーはクローゼットのノブに手をかけた。
「……彼ラハ、コノ部屋ニ入ッタソノトキカラ、運命ヲ位置付ケラレテイタノダロウカ」
「もう前置きはいいから、さっさと開けろ」
「今際ノ際ダッタノダロウカ」
「開けろよ！」
「イズレニセヨ、ワタシトイウ名ノ運命ノ歯車ニ巻キ込マレタコトニ違イハナイ」
ギギギッと音を立て、驚愕の扉は開かれた。その中に在る存在は、暁に声にならない悲鳴を上げさせ、だらしなく腰を抜かさせた。
トニーは、中の存在を、限りなく冷静に眺めていた。
「あ……かっ……ぁ……う……っ」
「クールナ暁サンハドコヘ行ッタンデスカ？」
皮肉を込めた言い方で、笑顔を見せた。
「……なん……なん」

……なん……だ。
「暁サント神屋サンガ来ル三十分クライ前ノコトデシタ」
トニーは、敢えてなのか、それしか言わない。
暁が必死で声を出そうとして、やっとのことで聞けた質問は、
「……これ……、死んでる？」
であった。

- 5 -

寝室に移動したときから鼻についた、血なまぐさい香り。トニーの抽象的すぎる発言の数々。それらの原因は、まさに今、暁の目前に展開されている。
不気味な音を軋ませ、開け放たれたクローゼットの中に暁が見ているもの……、それは、
「……死体？」
年寄りともう一人、若い男。ハンガー掛けに両腕を開くように吊されたその光景は、あたかも二人のキリストを体現しているかのようだ。
暁は尻を床に付けたまま、立ち上がれずにいる。驚愕の場面にもかかわらず、不思議とパニックは起こらない。呆けているというより、言葉を失ったと言った方が正確だろう。
トニーは静かに説明を始めた。
「彼ラハ、神屋サント暁サンガココニ到着スル三十分ホド前ニ、コノ部屋ニ現レマシタ。ワタシハ寝室ノ物陰ニ隠レテ彼ラヲ待チ伏セシマシタ」
「……それで？」
「見テノ通リデス。殺シマシタ」
二つの屍から、赤黒い血が滴り落ちる。ポタポタという音が嫌に重く聴こえる。

「……殺したって……」
「身元ハ不明デス。王里神会デハナイデショウ」
「……！？　どういうことだ？　王里神会の手先が俺を狩りに来たわけではないのか？」
　トニーは少し考える仕草を見せた。
「ウーン、コウ見エテワタシハ王里神会創設期ノ頃カライルベテランデス。組織ノ人間ノ顔ノ大概ハ頭ニ入ッテマス。オジイチャンノ少ナイ組織ナノデ、コンナ方ガイタラワカリマス。コノ若者モ見タコトアリマセンガ、組織ニ見ナイオジイチャント一緒ニイルコトヲ見レバ、恐ラク王里神会デハアリマセン」
　言い終えると、トニーは脇腹を左手で痛そうにさすり出した。
「……じゃあ、こいつらは一体……」
「ワカリマセン。吐カセテカラ始末スルツモリデシタガ、ソウモイキマセンデシタ」
　暁はトニーの脇腹を見やった。
「どういうことだ？」
「コノ若者ガナカナカノ曲者デシテ、捕虜ニスルノハ困難ニ思エマシタ。オ陰デコノザマデス」
　トニーは、脇腹を抑えながら参ったのポーズを苦笑いを添えてとった。
「一度、拳ヲ交エタトキ、若者ノ拘束ハ不可能ダト判断シ、逃ゲヨウトシタ年寄リニ狙イヲ変エマシタ。年寄リヲ拘束スル暇ヲ与エレバ若者ニワタシガ殺サレテイマシタシ、カト言ッテ若者ヲ相手ニスレバ年寄リニ逃ゲラレテイマシタカラ、仕方ナク年寄リヲ殺シ、ソノアトスグニ若者ヲ殺シマシタ」
「それで……これからどうするんだ？　ここにいて大丈夫なのか？　こいつらに仲間がいたらヤバいんじゃないか？　こいつらだって、行き先くらい仲間に伝えてここに来ているはずだろ？　連絡が途絶えれば、仲間だって怪しんでここに向かって来るんじゃないか？」
　自身が危機的な状況に立たされていると思いつつも、暁はなるべ

く冷静を保った。気を抜けば、パニックに陥っているだろう。
「今ハココデ大人シクシテイマショウ。彼ラノ目的ガハッキリシナイ以上、大キナ動キハ禁物デス」
暁はそれを聞くと、勢い良く立ち上がった。堪えきれない様子で怒鳴り声を上げた。
「――目的？　そんなのわかってんだろ！？　俺なんだろ！？　なぁッ！！　……クッソ！！　何なんだよV事件て……！！」
暁は力一杯ベッドを蹴り上げたが、焦りは増すばかりであった。
「……暁サン。人生ハ災害デス。諦メル他ナイノダ」
「うるさい。とりあえずクローゼット閉めてくれ。気味が悪い。あと、水をいれてくれ」
トニーはクローゼットを閉めながら、
「水クライハ自分デイレテクダサイヨ」
とぼやいた。
暁は早足に寝室を出て、キッチンで冷蔵庫から出したコーラを勢い良く飲んだ。しかし、芽生えていた吐き気は引かず、結局、トイレに駆け込んだ。
――――うぉえ！
「大丈夫デスカー？　暁サン」
「大丈夫なわけねぇだろ！」
……はぁ、なんか、もうどうでもいいや。
暁は椅子に座り、深呼吸を一回二回。気持ちをある程度整えることに成功した。
「考えろ……考えるんだ」
今、何が大切なのか。
暁は、今なら自身を客観的に眺めることができる。ここまで生に執着している自分は久しぶりだなと、故郷で知り合いの女子に銃口を向けられたことを思い出していた。
……あの時は、弾が入っていなくて良かったな。
もっとも、二度目には実際に発砲されたのだが。

「……ははははは……」
暁は望んでいた。玄関のドアが開かれ、神屋が現れ、これはタチ悪い悪戯なんだと言って肩を叩いてくれたら、今どんなに幸せか。寝室からあの二人がやってきて、ドッキリと書かれたカンペを持って背後で笑みを浮かべていたら、どれだけ幸福なことか。
「……は……はは……」
しかし、それはない。起こり得ない。暁は、念のため背後の寝室に振り返った。トニーがベッドに腰掛けているのが見えただけで、クローゼットから彼らが這い出てくる気配はまるでない。何故なら、彼らは死んでいるからだ。
「……」
暁は、自身が逃れられない不幸な運命を背負った大層な不幸者であると、鼻で笑った。
……もういい。もういいよ……。
目をつむり、机に突っ伏そうとした暁の肩が叩かれた。
――――え？
振り返ったその先にあったのは、トニーの穏やかな表情だ。
「とにぃ……」
「暁サン、チョット来テ下サイ。話シタイコトガアリマス」
二人が向かったのは、玄関だ。
「サッキハ言イソビレテシマイマシタガ、今ハ暁サンモ落チ着イテイルミタイデスシネ」
「落ち着いてるというか、落ち込んでいる……、色んな意味で」
「ワタシガ話ソウト思ッテイタノハ、アル人物ニツイテデス」
「ああ、そういや言ってたな」
「誰ダト思イマス？」
「誰かな」
「ワカリマセンカ」
「じゃあ、鬼頭火山」
「正解デス」

「……」
それで？　と暁は促した。
「今回ノV事件ニツイテ、彼ガ深ク関係シテイルノハ知ッテマスヨネ」
「ああ、神屋がそう言ってたな」
「……神屋サンハドコマデ言ッテマシタカ？」
……どこまで？　どういうことだ？
「ドウナンデスカ？」
「いや……、V事件に関わっているとしか」
それを聞くと、トニーは口の端を吊り上げた。
「鬼頭火山……、暗号の勝負をしただけで、他に接点は……！」
……いや、ある！　それ以外にも接点が！
「……？　何デス？　接点ガ……？」
「あ……いや、何でもない」
「……マァ、トニカクデスネ、暁サンニハ予メ言ッテオキマス。コノママデハ不安デ夜モ眠レナイデショウ。特別ニ教エテアゲマス」
「な、何を？」
「モシカシタラ、既ニナントナク気付イテイルカモシレマセンネ。勘ノ鋭イ暁サンナラバ」
「もったいぶるなよ」
「心臓ニ酷ク悪イコトヲ言ッテシマウカモシレマセン。デモ、イズレハ知ルコトデスカラ」
「何だよ。早く」
「鬼頭火山ハ――」
「待て！」
暁がトニーを止めた。
「ナンデス？」
トニーは不機嫌な顔になった。
「いや、それを言う前に俺の質問に答えてもらいたい。大した質問じゃあないんだ」

「何デスカ？」
「何故、俺たちは今、玄関にいる？　わざわざここでお話しをする必要があるのか？　鬼頭の話しなら、リビングでもいいだろ」
「ハイハイ、ソレハデスネ、鬼頭サントハ別ノ話ヲシヨウト思ッテココニイルノデス。我々ハ」
「そっちを先にできないか？」
「構イマセンガ、ソレハマタドウシテ」
「いや、あの……、まぁ、特に理由はない。敢えて言うなら……、そうだな。怖いからか……、多分」
「ソンナタマデスカ？　別ニイインデスケド」
「よし、じゃあ話してくれ」

- 6 -

禁断の行為に無自覚なまま手を染めてしまうことを、俗に「パンドラの箱を開ける」という。パンドラとは、ギリシア神話における人類最初の女性の名だ。彼女はゼウスの人類に対する悪意の結晶だった……――――。

ギリシア神話の最高神、天神ゼウスは人類を嫌っていた。対して、人類をこよなく愛していたのが、ゼウスによって滅ぼされたティタン神族の生き残り、プロメテウスだ。実は人類を創造したのは彼だという説もある。

プロメテウスは、同胞を滅ぼしたゼウスを恨んでいた。彼はゼウスの意に逆らい、天上の火を盗み、人類に火を与えた。人類への深い愛情とゼウスへの敵意からの行為である。

怒ったゼウスは、プロメテウスに三千年もの間コーカサス山頂で拷問を受けるという罰を与えたが、腹の虫はおさまらない。そこでゼウスが目を向けたのは、プロメテウスが愛した人類だった。人類

にも罰を与えるべく、ゼウスが鍛治の神ヘパイストスに創らせたのが、人類初の美女たるパンドラであった。

「――ザット、ココマデ飲ミ込メマシタカ？」

「あ、あぁ」

トニーの分かりにくい喋り方と日本語を自分なりに脳内で再構築、文章化してからその内容を消化するという作業のせいで、暁にはロクに返事もままならない。

「続キヲ話シテイイデスカ？」

「いや、ちょっと待って。ここまで聞いといてナンだけど、話が読めない。何でギリシア神話の話をするの？」

「セッカチデスネ。最後マデ聞イテイレバ、ワタシガ何ヲ言イタイノカガワカリマス」

「……正直に言っていいかい？　俺はかなり疲れている。今すぐベッドに横になりたいくらいなんだよ」

「アンナ死体ガアルヨウナ部屋デ眠レルンデスカ？」

「あなたがやったんでしょうがよ。まぁ、とにかくさっさと話してよ」

暁の精神的疲労は限界に達していた。今は全てを忘れて眠りたかったのだ。

「暁サンノ顔ヲ見レバワカリマス。絶望シテイルノデショウ」

「……そーだよ」

「未来ニ希望ヲ見イダセテイナイノデショウ？　暁サント同ジ立場ナラ、誰ダッテ、ゲンナリシマス」

「……同情してるのか？　よせよ。あなたに俺の気持ちが分かるわけがない」

「ソウ怒ラナイデ。続キヲ聞イテクレマスカ？」

「……ああ」

……――――ゼウスの命を受けて、美の女神アフロディテはパンドラに女の魅力を注ぎ込み、神々の伝令ヘルメスはずる賢さを与えた。さらにゼウスは、病気や貧困や争いなど、ありとあらゆる災い

がつまった箱を彼女に持たせ、地上へと送り出した。たちまち彼女の虜となったのは、皮肉にもプロメテウスの弟、エピメテウスだった。賢明な兄とは対照的に愚か者だった彼は、前もって兄から「ゼウスからの贈り物を受け取ってはならない」と警告されていたにもかかわらず、「贈り物」を意味するパンドラの名を持つ彼女を妻としてしまう。

「パンドラの箱……か。こんな由来があったのか」

「マダ続キガアリマス。……パンドラハ好奇心ヲオサエラレズ、ヤガテハ例ノ箱ヲ開ケテシマイマス」

それが原因で、災いは人類社会に拡散した。驚いた彼女が、慌てて箱を閉じたとき、残ったのは唯一……――――。

「唯一……何だ？」

「……何ダト思イマス？」

「何だろ……？　わからないな」

「ソレハデスネ、暁サン。コレヲ見テ下サイ」

トニーが指差したのは、ドアだった。見るとある異変に気付く。

……ドアが完全に閉まっていない……？

「何だこりゃ。いつからだ？」

閉める力が弱かったのか、完全に閉まる一歩手前で縁につっかかっている。

「あ……、思い出した。そういや、神屋が出てったときに」

「ソノヨウデスネ。ワタシモサッキ気付イタンデス。オートロックダカラトイッテ、神屋サンハ油断シタヨウデスネ」

「そっか……、で？　これが何？」

トニーはドアノブに手を掛けた状態で言った。

「暁サン。悪インデスガ、ワタシハチョット用事ガアッテ、ホンノ少シ部屋ヲ離レマス」

「……な」

「スグニ戻リマス。……トコロデ、サッキノ質問ノ答ハ出マシタカ？」

「……あ、あれは多分……、確か、聞いたことはある。ちょっと待って、今思い出せそ……あ！　思い出した！！　『予兆』だ！！」
「正解デス。デスガ、モウヒトツ説ガアリマス。箱ノ中ニ唯一残ッタノハ『希望』ダトイウ説デス。コノ話ハ有名デスヨ」
「……あ！　そういや本で読んだことがあるな。残ったのが『予兆』であるから人類は未来を知ることができないが、だからこそ『希望』を持つことができるという理屈だったはず。まぁ実際に人類は未来を知ることができないわけだから、パンドラの箱に唯一残ったのは『予兆』だと考えるのが妥当じゃないかな」
「ナルホド……。ワタシハ違ウト思イマス」
「？」
「……全ク、チャント閉メナキャダメジャナイカ。ネェ？」
トニーはわざとらしく芝居でもするかのようにそういや言った。
ドアを開け、外に出たトニーは、閉める間際にこう言い残した。
「――――希望ヲ捨テナイデ下サイ。暁サン、あなたは――――わたしたちの希望なのですから」
……え？
「閉めの甘いパンドラの箱は、わたしがきっちりと閉めておきます。あなたという希望が逃げないように」
「……おい！？」
閉まりゆく扉のほんの小さな隙間から片目だけを覗かせ、トニーは言った。暁には半ば信じられない一言を。
「――――鬼頭ハ生キテイル」
「……！！」
ガチャン！
ドアは閉ざされ、暁はただただ絶句していた。
何も考えることはできなかった。
廊下を歩きながらトニーは呟いていた。
「暁……。人類は未来を知ることができる……」
その表情は、不気味の一言に尽きるものであった。

八月十日、午前七時。
「ふぅ～～。やっと解放されたあ」
王里神会本部ビル前。一夜通しの会議を終え、清々しい朝日を浴びて声を漏らしたのは神屋聖孝だ。
「はぁ……。また一日が始まった。忙しい毎日だな」
「何ぼやいてやがる」
「ん！　おはよう、上條誠也」
神屋の横には上條誠也が立っていた。
「何がおはようだ。さっきまでずーーっと会議で一緒だったろうが」
神屋と上條は同じ会議に昨夜から出席していた。
「なに、朝を迎えたっていう実感が欲しくてさ」
「はっ！　それよりお前これから暇か？」
「いんや、悪いけど」
……これから外崎暁の元へ行くなんて言ったらどうなることやら。
「そうか。まぁいい。俺はこれから平沼と会ってくる」
「約束したのかい」
「ああ……、なんとかこぎつけた」
「うん……、また昔のようになれたらいいね」
「……今は、よくわからない」
「……？　何が？」
「俺が俺自身、どうしたいのか」
「そうかい……。君は君のできることをやったらいい。そうだろ？　努力する志を忘れるなよ」
「……努力？　お前の嫌いな言葉じゃなかったか？　それって」
「そうだっけ？　はは」
神屋はわざとらしく笑った。
タクシーを拾い、乗り込んだ神屋に上條が声を掛けた。
「ん、何？」

「……気になってたんだがよ。会議中ずっと」
「？」
「ソレ、何だ？」
上條が指を差したと同時にドアが閉まった。上條を置いて、タクシーは走り去った。
「……」
神屋は、上條が指差した辺りの肩を見た。左肩に、小さくて黒いものが付いているのがわかる。服の装飾でないのは確かだ。手で取ってみると、どうやらプラスチックのようなものが外殻の小型精密機器であるように見える。
……まさかね。
その構造の大まかな仕組みを神屋は見たことがある。
「……早めに帰った方がいいかな。にしても、誰が、いつ……」
神屋が指でつまむものは、小型盗聴器。何者かに会話が聞かれていた可能性が高い。
「運転手さん、ちょっと急いで下さい」
「はいよ」

「……」
鏡に映る自身の姿が滑稽かつ哀れだ。
窓からは朝日が差し込み、小鳥のさえずりがしてくる。
結局、一睡もできなかった暁の目には隈ができている。
部屋には血の臭いが充満していた。
すぐに戻ると言っていたトニーはまだ戻ってきていない。
「神屋～～。早く来てくれ」
暁は死体のあるベッドルームで横になった。酷い頭痛が彼を襲っていた。
暁の意識が遠のいてきた頃、玄関のドアが開かれる音が響いた。
誰が訪問したのかさえ確認する気にならない暁は、まどろみゆく世

界をぼんやりと眺めていた。
「……何やってるんだい？　暁」
「寝てる……眠い」
神屋は荷物を置くと、上着を脱いで椅子に掛けた。夏らしい黒のTシャツ姿になった清々しい神屋を暁が見るのは、二人が再会してこれが初めてである。
「帽子とか上着とか……お前は暑くないのか？」
「紫外線対策だよ。そんなことより、この部屋臭いね。なんか血みたいな臭いがするけど……。もしかして僕がいない間に何かあったのかな？」
神屋は暁の顔を覗き込む。
「……血ねぇ。ま、ご察しの通り。何かあったよ」
暁は弱々しくそう答えた。
「何があった？」
「……そこのクローゼットに……、あるんだよ」
「何？」
神屋はクローゼットを見た。
「いいか。聞いて驚くなよ。ビビると思うが」
神屋はクローゼットの前に立った。
「……この臭いからして、まさか……」
「死体だ」
「……え？　本当かい？」
「……マジだ」
神屋はクローゼットを勢い良く開いた。血を滴らせる二人の死人を見た神屋は、数秒間動きを止めたあと、ゆっくりと暁の方に振り返った。
「……どういうことだい」
暁は起き上がり、頭をかきながら、
「トニーが殺したらしい。俺たちの来る三十分前にそいつらは来た。目的を吐かせることはできなかったってよ。捕虜にできるような相

手じゃなかったんだ」
　とだるそうに言った。
「そうか。それより聞きたかったんだけど、トニーさんとは打ち解けたかい？」
「……」
　暁は苦い顔をするだけである。
「あれ……？　その様子だと仲良くは……、まぁいいか。ところでトニーはどこ？　トイレにも入ってないみたいだし」
「なんか、三時間くらい前に出てったぞ。用事があるとか言って」
「本当かい。僕に何の連絡もせず勝手によくそんな……。自分の仕事わかってるんだろうな、トニーさん。暁の護衛だってのにほったらかすとはね……」
「それより、この死体をどうにかしねぇと」
「トニーのことも気になるが、まずはこっちか。……一体何者なんだ？　こいつらは」
「……わからん。でも、どうせ俺絡みだろ」
「断言はできない。けど、可能性は高いね」

- 7 -

「失礼します」
「……どういうことなんだ」
　王里神会本部ビル六十七階。藤原の顔色は優れない。
「セシル……。連絡は？」
「音信不通です。携帯の電源が切れたのか、故障したのか、手がかりがつかめていません」
「……どこかで水を売っているにしては長すぎる。やはり、何か問題でもあったんじゃ……」
「考え過ぎでは……。主は寄り道が大変お好きな方です」

「それにしたって携帯に出ないのはおかしい。今までもこういったことは何度かあったが、必ず携帯には出た。しかし、昨夜出かけてから、今の今まで電話もメールも何のひとつもない」
「……おまけに護衛を担当したロンにも連絡がつかない。どうされます？　これが単なる杞憂ならいいのですが、捜索隊を出動しますか？」
「……」
藤原はしばらく黙ったまま、肘を机に立てて座ったまま動かない。
「いかがいたしますか」
「……捜索隊を出せ。何もなければいいが」
「わかりました。それとひとつ……」
「なんだ？」
「――――先ほど、Kが藤原様に話があるとおっしゃっていました」
「Kか……。わかった」
「では」
用件を済ませ立ち去ろうとするセシルに藤原は言った。
「わかっていると思うが、捜索隊出動の際、うっかり口を滑らせるようなことはするなよ。うまい口実を作って、主とロンを探させるんだ」
「わかっていますよ。信頼できる同胞も何人か捜索隊に編入させ、指揮をとらせます。我らの秘密がバレることはありません」
「ふ……、信頼しているぞ。セシル……」

ジリリリリリリ！
「……ん、ん……わわわ！」
予想外に大きな音で鳴る携帯のアラームは、近隣住民の朝を妨害しかねないと焦って携帯を開いたのは、篠原亜美だった。
「はぁ。毎朝心臓に悪いなー。この新しい携帯。あれ？」
隣に敷かれた布団を見ると、いつもなら寝ているはずの母がいな

かった。亜美の母は夜仕事に行き、朝に帰ってくるので、ちょうど亜美が起きる頃には眠っているのが常であった。しかし、今日いないのは何故なのか亜美には何も母から知らされていなかった。

携帯を見てみると、メールが届いていた。送り主は母で、今日は仕事が長引くという内容であった。

亜美は洗面所で顔を洗ったあと、適当な朝食をとった。テレビを見ながら、パジャマを脱ぎ捨て普段着に着替えた。

……あ！

……そういえば、わたし、変なカルト宗教に狙われてんだっけ。

「……えー。どうしよ……やだ」

亜美は頭を両手で抱えたままの姿勢でしばらく立って考えた。これから何をすればいいのかを。

「なんか、ホテル行くんだっけ。うわー。あたし、あのイケメン君ともしかしてもしかすると期間限定同棲??　うそー。マジでー。やばーい、まじやばーい!!　えー……マジどうしよ。……って、暁もいるんだっけ？　ちょっとぉ～!!　ヤバすぎでしょ、色んな意味でさ……うん」

亜美は荷造りを始めた。今日中にここを離れることになるかもしれない。準備しておく必要がある。

「これで一通りはオッケーかな？　上着三着、ズボンみっつ、スカートひとつ、下着に帽子、傘に靴下、アイロン、化粧水、あとは……、あとは、お金も必要かぁ。あ、勉強道具も!!　……で、このくらいか」

スーツケースに詰め込みを終えた亜美は、暁たちの連絡を待った。

……ちょっとの間、サヨナラだね。お母さん。

「はぁ。狙われるとか、最悪。でも、合宿みたいでちょっと楽しそうかも。……大丈夫!!　すぐこんなこと終わる。終わるよ……」

そのときだった。亜美の携帯が鳴った。

緊張を胸に携帯を開くと、意外な名が目に飛び込んだ。

……高山竜司？

「竜司クン……、何だろ。こんな朝早く」

篠原さん
お久しぶりです
本格的に暑い季節になりましたね
学校の課題の方は順調ですか？
もしかして優秀な篠原さんのことだからもう終わってたりして笑
ところで今度一緒に
食事でもどうでしょうか
篠原さんが時間を取れる日で構わないので
もしよかったらメール下さい
待ってます

「……へ……？？？？」

亜美はピクリとも動くことができなくなってしまった。

「やべえ……。送っちゃったよ」

高山竜司がアプローチメールの送信を決心したのは一週間前のことだった。

とりわけ竜司に恋愛に対する強い執着などはなく、どちらかと言えば恋愛は邪道とする道を歩んできた男である。

しかし、屈強なはずの竜司でも、己の中に抱いた恋心には打ち勝つことができなかった。

世の中にはロクな女がいないと謳っていた竜司であるが、女性に対するその偏見は、篠原亜美との出会いによって変化を見せた。

……日本にはまだこんな女の子がいたのか。

鬼頭火山の一件で見え始めた亜美の人間性。竜司は亜美の外見以上に、彼女の中身に惚れ込んだ。

今まで好きになった女性は何人もいたが、最終的には自分から見

限る形で全て終わっている。
それから長い間眠っていた恋愛への情熱がこの時期に復活を遂げたのだ。
「……あ」
亜美からの返信に竜司は鼓動を高鳴らせた。
「……ふー。落ち着け……」
そこにはこうあった。

久しぶり（＾∀＾）ノ
宿題終わった（＾Ｏ＾）
凄いでしょ☆笑
悪いけどあたししばらく暇ないんだ（Ｔ＿Ｔ）ゴメンね

「……ふ、うあああああ」
竜司はこれを見てただうめいた。言葉に形容するのが難しいほど、彼の心はかき乱された。竜司は深い羞恥を感じ、いても立ってもいられなくなった。
……フ、フラれたっ！！
「……く、くそぉ！！　コレが……コレが現実なのか！？　俺の人生ってこんなんだったのかぁ！！」
崩れ込み、床を叩いた。
「わざわざ『恋の恋愛方程式』買ったのに、俺の場合の計算式かなり複雑だったのに、解いたのにぃ！！　ダメだったかぁ！！」
しばらく感傷に浸ったあと、竜司はベッドに倒れ込んだ。
……ま、所詮俺なんてモテるわけねえよな。わかってたよ。唯一の同類だと思っていたお前は、亜美ちゃんと仲が良い。何故だろうなぁ……、凄く悔しいぜ。これを嫉妬というんだよな。知ってるよ。ああ、最悪だ。お前は親友だと思ってるが、今はどうしてなのか、死ぬほど憎い。今もお前が亜美ちゃんと一緒にいるかもしれないと思うと、はらわたが煮え立つのがわかる。俺としたことが、こんな

思いに振り回されるとはな。だが、それだけ亜美ちゃんのことが、俺は……。

「……暁」

竜司はベッドから起き上がり、敵と対峙するように前を睨む。その目はある決意に満ちていた。

……ぜぇぇぇってぇ、負けねえ。俺は勝つ。勝つまで諦めねぇ。

「……暁。亜美ちゃんは、俺のモンだ」

竜司は、自身に誓った。必ず、篠原亜美にこの想いを伝えることを。

閉ざされしパンドラの箱　～真実～（後書き）

竜司ｗｗ

テンペスト（前書き）

受験が終わるまでは非常に更新が遅くなりますが、どうかご了承ください。
今回から三話分程が、今までで最も重要な回になるかと思います。
少々長いですが、楽しんでいただければ幸いです。

テンペスト

―1―

神屋は十五号室の部屋の扉を開け、テーブルのグラスにほんの少し残った水を飲み干した。

「暁は……ベッドか……」

呟いて、神屋はベッドルームへ歩みを進めた。ベッドに暁の姿はなかった。暁は窓から駅前の広場を眺めていた。

「寝ないのか、暁？」

ベッドルームの窓からのやわらかい光を浴びる暁に、神屋は尋ねる。

「隣でいかがわしい作業が行われていると想像したら、眠れないだろ」

暁はくたびれた目を神屋に向け、ぼやいた。

作業服を着た二人の大男が十四号室に到着したのは今から三十分前、午前八時半頃であった。彼ら手には旅行用の大きなバッグが持たれていた。

神屋は二人に「宜しくお願いします」と声を掛け、暁を連れて隣の十五号室に移動したのだった。それから三十分間、暁は部屋にただ独り放置されていた。神屋には、どこか行きたいところにフラフラと散歩に出掛けてしまう癖があるのではないかと、暁は冗談半分に思ったのだった。

「どこ行ってたんだよ」

暁は、部屋に戻ってきた神屋の右手に持たれた紙袋を見ながら言った。

「買い物だよ」

「お前はもし亜美用の隣部屋を用意してなかったら、俺を死体処理屋と一緒にしておくつもりだったのか！」

「一緒に買い物に行けばいい」
「俺は外に出られないだろ！」
「出られるさ。これから出てもらうしね」
「冗談はよせ……」
暁は、溜め息をついてベットに横たわった。
――コン、――コン。
妙な間をあけてドアが叩かれた。
「はい」
神屋はリビングに戻ると、紙袋をテーブルに置き、ドアへと向かった。
続いて暁もリビングに入った。
神屋がドアを開ける。
「終わりましたよ、確認しますかい？」
死体処理屋の男が大きなバッグを指差して訊いた。
「いえ、結構です。信頼していますので」
神屋は笑顔で料金を支払った。大男は「そりゃ、どうも」と不気味な笑みを返した。五十万円ほどの料金が神屋の手から大男の手へと渡った。暁にはその金額が割に合っているのか理解しかねた。おそらくは安いのだと思われた。少なくとも自分だったら五百万円はもらう仕事だと暁は思った。
「なぁ神屋、降りそうだな」
暁は、神屋がドアを閉めるのを確認しながら言った。神屋は一瞬何の事か解らなかった。
「雨が？」
「神屋、例えば他に何か降るのか？」
「うーん……槍とか」
「今の俺には洒落にならねーよ」
暁は真面目な顔で言った。もはや諦念が感じられる様であった。
「暁、雨が降るから何だっていうんだ？」
「亜美だよ。あいつ迎えに行けよ、雨が降る前に。買い物する暇あ

ったらさ」
「……一応言っておくけれど、君も行くんだよ」
「……何で？」
「トニーさん居なくなっちゃったし、単独行動は逆に危険だからね」
「なるほどなるほど……って、オイ！！　ボケかましてんじゃねぇ！！　お前、買い物独りで行ってたろ！」
盛大にノリツッコミした暁は、いつかの二宮光の姿を思い出していた。
「いざ王里神会が襲って来たら、僕が食い止めて君達は逃げる。篠原さんの性格じゃ、一緒に戦いかねないから、説得役の君が必要なんだよ」
「俺が説得しても言うことを聞かないだろ、亜美は……」
「僕の観察力を舐めないでほしいな。篠原さんは必ず君の言うことを聞くよ」
「ふうん……。Dだな」
「D？」
「『どうでもいい』の略。俺の中学で昔流行った言い方だ」
「その説明がDだと思ったことない？」
「……その質問がDだ」
Dな会話を済ませて、暁は冷蔵庫を開けた。理由なくオレンジジュースを取り出し、グラスに注いだ。柑橘系の匂いが暁の周りに広がった。
「暁、篠原さんにメールしていいよ。二時間後に迎えに行こう。場所は隣街のインターネットカフェ『ロキ』の三十八番の部屋、尾行には注意するように」
「……ちぇっ。分かったよ。ネカフェ『ロキ』の何だって？」
暁はしぶしぶ了承して、待ち合わせ場所を聞き返した。
暁はメールを亜美に送ると、ソファーに座り神屋に目を向けた。

神屋はテーブルの上の紙袋の中をガサガサと音を立てていじくっていた。
「神屋、三十八番が空いてなかったらどうするんだ？」
「大丈夫。会議に行く前に、貸し切ったから」
「……は？　お前の為に組織はどんだけ資金援助してるんだよ……」
「ん？　自腹だよ。強いて言えば両親の援助かな。僕の両親、アメリカで数学の研究やってるらしくてね。リーマン予想とか、そういう類の未だに証明がなされていない問題やらを研究していたな、昔は。経済面だけで言えば、金持ちっていうやつさ。僕が小学生の頃、あんな田舎に居たのも金持ちの気まぐれって感じらしい。あの頃は仕事を休んでたみたいだから。それに、幼少期は一般的な公立小学校で心を育てるのが良いとか何とか……」
「……知らなかったぞ、そんな話」
「まぁ、それは全部親の話だし。僕には微塵も関係してないから、昔は隠してたんだよ。訊かれなかったしね」
「……なぁ、お前さ、王里神会を潰してからどうする気だ？」
「しばらくは刑務所だろうね」
「……！！　何でだよ！？」
「当然でしょ、幹部なんだから」
神屋は、冷静に返した。刑務所に入ることに、何も恐れを感じていない様子だった。
「そんな理不尽があるか！　お前は王里神会の敵、つまり正義のはずだ！」
「今まで、王里神会の危ない命令に従ってきたのは真実だ。証拠もいくつか挙がるだろう」
「……何だよ、それ」
暁は、神屋が平然としている理由が解らなかった。自分達を助けてくれている神屋が、悪人として裁かれるなど、考えられなかった。
「一つ、頼みがある」
俯いていた暁に、神屋が言った。

「何だ？」
「裁判で君がこの事件のことを話してほしい。僕が裁きを受けるのは免れないだろうけど、罪は軽くなると思う。……そんなつもりなかったんだけど、やっぱり、出来るだけ早く暁や篠原さんと再会したいな」
神屋は、少しだけ淋しげな表情をしていた。
「……当たり前だ」
暁はテーブルに頬杖をつきながら言った。
「……ありがとう、暁」
「……ああ」
暁はオレンジジュースを一口飲んで、おもむろに携帯を開いた。
「あ」
いつの間にか亜美からの返信が来ていた。

了解（、∇´ゞ
二時間後？
ずいぶん長いね。
まあいっか笑
待ってるね！（ｂ＾ー。）

亜美のメールにはそう書いてあった。
そういえば、何故二時間も間を空けるんだろう……。
暁もまた疑問に思い始めていた。隣街とはいえ、一時間もあれば双方が到着出来る距離だろう。
「神屋、二時間は長いだろ。雨降りそうだって言ってんじゃん」
「出発前にやることがあるからね」
「やること？」
「これだよ、これ」
神屋は、テーブルの上の紙袋を左手で持ち上げて、右手の人差し指で指差していた。

「何だ？　何が入ってる？」
神屋は不気味に微笑した。
暁には嫌な予感しかしなかった。

二〇〇九年、八月十日、午前十時四十七分。
インターネットカフェ『ロキ』三十八番部屋のＰＣの画面右下には小さく現在の時刻が表示されていた。篠原亜美は、ＰＣをインターネットに接続した。
トップページには最新ニュースの記事が貼られていた。
「鮎川氏狙撃、搬送先の病院で死亡……かぁ」
亜美は小さく溜め息をついた。
やっぱりダメだったんだ……。
心の中で呟き、亜美は検索フォームに「かみやきよたか」と入力した。
数分前亜美は三十八番の部屋の扉を見て驚愕した。

「このルームは篠原亜美様により貸し切られております」

亜美はこの張り紙を見て、指定された部屋が一室だけであった理由を理解したのだった。
そのことも影響して、亜美は神屋の素性に興味を抱いていた。
「あっ」
亜美は入力した文字の変換をしようとして、動きを止めた。
「漢字分かんないじゃん」
亜美は神屋の調査を断念して、今度は王里神会を検索した。
一番上に表示されたのは、王里神会のホームページだった。
「……」
亜美は少し悩んでからそれをクリックした。
開かれたページは濃いオレンジ色の背景に黒い筆字で「王里神会」

と書かれているページであった。大きく書かれた筆字の後ろには小さな星マークが八つ、大きな星マークが一つ描かれていた。小さな星は大きな星を中心として、同心円状に広がっていた。

我が王里神会は、神への信仰などには頼らず、あなたの幸せをあなた自身で掴み取ることを可能とする宗教法人です。そして、それを助力して下さるのが、王里神会開祖である教主Kでございます。教主のお導きは……

亜美は表示された文章を読みながら不快感を感じ始めた。配色と書体、言い回し、その全てが視覚的洗脳を促しているようだった。

亜美は気味が悪くなり、インターネットのウィンドウを閉じた。

「はぁ……暁遅いなぁ」

亜美は両腕を真上に上げ、深く伸びをした。

時刻は十時五十一分。暁は待ち合わせを十一時に設定していた。暁が遅いのではなく亜美が早いのだった。

「神の信仰などには頼らず……ね」

亜美は王里神会が神を信仰しない特殊な宗教であると初めて知った。

――だったら名前に神なんか付けなきゃいいのに。

以前暁が感じた疑問を亜美も考えていた。

「！」

遠くで足音が聞こえた。複数の足音である。

「やっと来たみたいね」

足音はだんだんと近づいて来た。近づくに従って、音は明瞭になって、人数が二人であることが分かる。

「あれ？」

亜美の動きが止まる。

足音が隣の部屋の前で止んでしまったのだ。

バチッ！

「！！！！」
電気回路がショートしたような音がなった。
――な、何！？
直後、亜美は気が付いた。……スタンガン。
謎の音の正体は紛れもなくスタンガンの音であった。
バチッ！！
今度は三十八番の部屋の前で音が鳴った。
その後、十秒程の静寂が訪れた。
「……」
亜美は息を呑んだ。静かにドアノブへ手を伸ばす。
コン、コン。
彼女の手がドアノブに触れるその瞬間、ドアが二回ノックされた。
……ゴクリ。
亜美は、意を決して、扉を思い切り開けた。
「……！！！！」
そこには、茶色の長髪にキャップを深く被った男と、金髪にサングラスを付けた男が立っていた。
亜美の体は瞬時に硬直した。
茶髪の男の右手には、スタンガンが持たれていた。

―２―

「……」
言葉の出ない亜美を見て、茶の長髪にキャップを被った男が微笑した。
金髪にサングラスの男は、おどおどしながらゆっくりとサングラスを外した。
「俺だよ」

サングラスを外した金髪の男は、冷静になって見れば、亜美のよく知る人物だった。
「暁ぁ！？」
亜美は素っ頓狂な声で叫んだ。
金髪にサングラスの男――外崎暁は、遠くで店員がこちらを見ていることに、微かに怯えていた。
「変な声出すなよ。俺達が犯罪者みたいじゃないか」
暁は金髪の前髪をいじりながら不満そうに言った。
「えっ？　ええ～！？」
亜美は暁に、正確には暁の髪に何が起きたのか理解できなかった。
そんな中、茶髪の男がついに口を開いた。
「犯罪者みたいって……、僕はある意味犯罪者だけどねカッコ笑い」
「神屋、テメェ！　何余裕かましてブラックジョーク言ってんだ！　あと、何だその『カッコ笑い』って。それは口語じゃねー！」
神屋は「面白いな、暁は」と言って、スタンガンを黒の上着にしまった。
「……ってことは、コッチは神屋クン！？」
亜美は神屋を見上げた。身長差は二十センチを軽くオーバーしていた。
「こんにちは。中があまりに静かだったから、刺客がいるかも、とスタンガンを構えていたんだが、どうやら驚かしちゃったみたいだね」
「べ、別に。ドンと構えてたもん」
亜美は、恥ずかしくなって後ろを向いた。
「固まってたじゃんか」
暁がからかうように言った。
「うるさいなー。それより、何で二人とも髪染めてんの？」
「俺は染めたけど、神屋はカツラだよ、ロン毛になってるだろ。コイツ、俺をはめやがったんだ」
暁は神屋を睨んだ。

「変装をしようと思ってね。でも、カツラとヘアカラーを買い間違えちゃって……」
「買い間違えるはず無いだろ！！　ぜってー俺もカツラで良かったはずだ！　わざわざ時間取ってまでふざけたことしやがって……」
「ははははカッコ笑い」
「何だそりゃ！　お前の中で流行ってんのか、それ！」
「暁、Dだよ、D」
「ぶっ殺すぞ」
「D♪」
「そいつは『どうぞ』の『D』か、神屋！」
暁は、神屋と漫才をやらされているような錯覚を覚えた。
亜美はニヤリと笑って目を細め、暁の顔を覗き込んだ。
「なんか新鮮ね。あたしも染めたいなー」
「冗談じゃないって。俺、マジでハズいんだが……」
「文化祭までには慣れるよ」
「俺に十月の文化祭まで、このままでいろと言うのか！」
「良いじゃん。不良になった設定でいこうよ。まあ、その頃には髪が伸びてプリンみたいになってるだろうけどねー」
「なんという鬼畜な……」
暁の訴えも虚しく、亜美は暁の金髪を面白がるだけだった。
「さて、暁、篠原さん。タクシー待たせてるし、そろそろ出発しようか」
神屋はそう言うと、ドアに貼られた張り紙を取り外して、丸めた。
「そうね。行きましょ」
亜美は、室内に置いたバッグの方を振り向いた。
「あれ？」
バッグは忽然と姿を消していた。
「俺が持つよ」
亜美が暁の方を振り向くと、暁は亜美のバッグを手に持っていた。
「あ、ありがと」

「ああ。……よし、行こうぜ」
三人はタクシーの元へ歩き出した。

「ここが篠原さんの部屋だから。欲しいものがあったら僕が買ってくる。僕に頼みづらいものは佐藤静枝さんにでも頼んで買ってきてもらって。荷物置いて、用が済んだら十四号室に来てほしい」
「了解しましたっ。いよいよ、全てが解明されるわけね」
「彼の筋書き通りならね」
「彼って？」
「Ｖｏｌｃａｎｏ事件、通称Ｖ事件の中心人物、鬼頭火山だよ」
「……なるほどね」
亜美は、満足とも不服とも取れぬ表情を見せ、十五号室に入った。
暁はそのやりとりを側で聴いていた。
「Ｖ事件はＶｏｌｃａｎｏ事件って意味だったのか。Ｖｏｌｃａｎｏ……火山、つまり鬼頭火山の事件ってことだな」
「ああ。あくまで王里神会側からの名称だけど……」
暁と神屋も、十四号室に順に入った。十四号室からは、血の臭いも、自己を空恐ろしくさせるかのような雰囲気も消え失せていた。
暁は最初にクローゼットを開けた。中には普段通りの光景が広がっていた。さすが、その道の専門業者であった。おそらく、特殊な薬剤を使ったのだろう。死体があった痕跡は完全に消えていた。
暁は数時間前を思い返した。確か、今亜美が居る十五号室に入ったときも、最初にクローゼットを確認したはずだ。死体など在るわけないが、暁は確認せずにはいられなかったのだ。
一通り点検し、暁はソファーにどっしりと座った。
「なぁ、神屋。俺、多分この先ホテルに泊まるときはまずクローゼットを確認するんだろうな」
「ははは。かもしれないね」
神屋は鞄の中を整理しながら言った。彼の傍らには取り外された

カツラとキャップが重ねて置いてあった。
　暁は神屋の鞄にチェス板が有ることに気が付いた。それは、現在暁宅にある将棋板を兼ねたものとは造りが違うようだった。つまり、チェス専用のものであるのだ。
　鞄にチェス板が常に存在するという時点で奇妙であることに相違ないが、盤上ゲームを用いて正確に目標の精神的特徴を捉える神屋は更に奇妙であるように思われた。
「そういえば、お前、亜美ともチェスか将棋やんのか？」
「そうだね。やってみようかな。……そうそう、僕負けたんだよ、佐藤静枝に」
「何を……だ？」
「将棋を」
　暁は口をポッカリ開けて数秒間フリーズした。
「あの女、計り知れないな」
　暁はしばらく会っていない静枝の顔を思い出しながら言った。
　奇しくも、彼は自分じゃ有り得ないと思っていた静枝と同じ、金髪になっている。暁は小さくうなだれた。
「ふと思ったけど、ブラインドで彼女と将棋を打ったら、今度は完膚なきまでにやられてしまうだろうな、僕は」
「ブラインド？」
「要するに、チェス板なり将棋板なりを見ないで試合をするんだよ。自分が打った手も相手が打った手も、全部覚えなきゃいけない。升目の座標を言って駒を動かすんだけど、置けない場所を言っちゃうと負けになってしまうんだよ」
「……俺には出来ない芸当だな」
　暁は、興味なげに言った。
　――コンコン。
「入るよー」
　ドアが叩かれると、亜美の明るい声が飛び込んできた。
「どうぞ」

亜美の声に神屋が応えた。亜美がずかずかと部屋に入ってくる。
「ねぇ、お腹空いた」
亜美はまるで子どものように部屋の中央で言い放った。
「着いたばっかりじゃんか」
暁は呆れた様子で返した。そういえばダイエットはどうなったんだろう。一ヶ月半程前から、亜美はダイエットをしていたはずだった。確かに、暁にはダイエットコーラを買いに行った記憶があった。
「育ち盛りなのっ」
亜美は少し怒ったような表情になった。
「止まっただろ、成長」
「何でそう言えるのよ」
「去年から身長伸びてないじゃん」
「気持ち伸びてるわ」
「お前の『気持ち』は『ほんの少し』って意味じゃなくて、本当に『気持ち』の中だけの妄想だからな」
「横には成長してるもんね」
「自慢げになるな。成長は成長でも『肥大』だろーが。てゆうか、横にすら成長してないと思うがな」
「じゃあ、暁は食べないのね？」
「……食べます」
暁と神屋は朝食を抜かしていた。確かに、何か胃に入れた方が良さそうだ。
「じゃあ、オーダーしようか」
神屋が、電話から内線を繋いだ。
「何が良い？」
神屋はメニューを暁に向かって投げた。
亜美は暁の隣に座った。
「あたし、おろしきのこスパゲティ」
「俺はトマトスパゲティペスカトーレ」
二人はメニューの最初のページにあったスパゲティの欄から適当

に選んだ。
　部屋に料理が届いたのは十五分後のことだった。

「ちょっ、ちょっと待って！　ねっ！」
「チェックメイト」
「キャー」
「も、もう一回！」
「……」
「……んっ」
「……」
「……えいっ！」
「チェックメイト」
「キャーッ」
　亜美は十六回目のチェックメイトでようやく体力を使い果たした。
「神屋君強すぎ……」
「篠原さん、考えて駒動かしてる？」
　神屋は心から疑問に思った。
「亜美……。お前十六局やって、十五分しか経ってないぞ……」
　暁は呆れた目を亜美に向けた。開始からチェックメイトまでに平均一分もかかっていない計算になるのだ。
「だって、強過ぎでしょ？」
「お前が尋常じゃない弱さなのもあるがな」
　暁は呆れ顔で言った。
「えー、そんなことないよ。シズが『アミはスゴい強いから、誰にも負けないよ』って言われたもん！」
「……あーあ……」
「あぁ……」
　静枝に完全に遊ばれていることを自覚していない、可哀想な亜美に二人はどんな言葉を掛けてやったらいいのか分からなかった。

―3―

神屋は、「オブザベイション」と書かれたメモ帳の篠原亜美の欄に「短絡的」と書き加えた。

「何だ？　そのメモ帳」

暁がそれとなく尋ねた。神屋がチェスか将棋で対局した後にメモを取っているのだとしたら、それは暁にとって大変興味深いものであった。

「今回の事件に関わる人物のデータを記録しているんだよ」

「チェスか将棋によるデータか？」

「いや、それに限らず……だよ。君の時みたいに、チェスや将棋を利用して情報を収集していることに気付く人もいる。その中には、意図的にカウンターやトラップを仕込んでくる人間もいるから」

「……そんな頭の回転が速いやつがいんのかよ……。まずはお前のチェスあるいは将棋の強さに驚いてそれどころじゃないだろ」

データ収集の意図に気付いたところで、暁にはカウンターもトラップも用意出来そうに思えなかった。そもそも、「カウンター」と「トラップ」が具体的に何であるのかさえ暁には分からなかった。

「普通はそうだろうね。もしくは、佐藤静枝のように勝負に集中してしまうのが常だよ」

「大体、そんな探偵小説の主人公みたいに頭のキレるやつがいるなら是非とも見てみたいものだな……」

暁は、高山竜司ならどうだろうか、と一瞬考えてすぐに彼でも不可能だろうと判断した。少し前、彼は「西」という一文字を「スペイン」と瞬時に結び合わせるという、彼の頭の回転の速さを知らしめる業を見せたことがあったが、比較対象が神屋となると話は別だった。何しろ神屋ならそんなことの二三簡単にやってみせるだろう

と思えたのだ。
「鬼頭火山」
神屋は、前触れもなくその名を言い放った。
「！！」
暁は彼の名が神屋の口から出たことに動揺した。隣で性懲りもなくチェス板とにらめっこをして、打倒神屋の作戦を立てていた亜美も、顔を上げて神屋を見ていた。
「僕との対局で勝敗に関わらず、カウンターやトラップを仕込んできた人物は全部で三人いる。王里神会教祖K、王里神会幹部の藤原、そして……鬼頭火山だ」
「……」
暁は神屋の発言に対する言葉が出なかった。情報量が膨大で、脳がそれを上手く処理できないようだ。
「神屋君は鬼頭火山に会ったことがあるのね」
亜美は冷静に呟いた。
「当然そうなるね」
神屋もまた、冷静な口調で返した。まるで、亜美を試すような態度である。
「一般人が推理小説家とチェスする機会なんて……普通はないよね。それはつまり、神屋君が一般人じゃないか、もしくは……どっちも一般人じゃないかってことだよね？」
「……！！　意外に鋭いね。暁なら絶対、『確認』ではなく『質問』をしていただろうね」
神屋は亜美の発言に驚いていた。彼女のキャパシティを明らかに超越した発言であるように思えたからだ。神屋の中にある篠原亜美のデータは次々と新しい情報が更新され変化しているようだった。
このままでは、神屋は彼女のメモに「予測不能」と書いて観察を終了せざるを得ないだろう。
「随分と冷静だね、篠原さん？」
「まあね。あたし、昨日から考えてたのよ、あなたと鬼頭火山の関

係について。……で、予想してみたんだけど、鬼頭火山は王里神会に入会してたんじゃないのかな」

「！！　……凄いな、予想外だった。君がそこまで辿り着いていたとは。だが、おしい。正確には『入会』というレベルじゃない。鬼頭火山は八年前の王里神会設立のときからの幹部にあたる人物だったんだ」

「！！！！」

「！！！！」

二人は驚きを隠せなかった。暁は、浮かんでは消える言葉の中から、なんとかして文章を作り出した。

「鬼頭が幹部？　は、話が見えない……」

暁は、鬼頭火山の師がキリスト教のスペシャリストであることを思い出していた。鬼頭火山は王里神会設立に関わっている可能性があった。

「話が見えないのは当然だよ。話す順序が予定と違うからね。……さて、君らもそろそろ気になってきたようだし、ここらで本題のＶ事件を説明しようか。Ｖ事件の理解は君達が狙われる理由の理解と同義だしね」

神屋はそう言って開いていたメモ帳を閉じた。

「……教祖Ｋは何もかもを見通していた。おそらくは今もなお、僕達は彼の予想内の行動をしているだろう。この国を手中に収めるために、内部で意見の対立が生まれることも、見越していたに違いない。だからこそ、彼はいつでも仮面を被っていた。文字通りの意味でも、暗喩的な意味でもね」

「どういうことだ？」

「Ｋは会員に対しても、幹部に対しても、素顔を見せなかったんだ。彼は常に仮面を、あるいは顔を隠せる何かを装着していた。だから、僕も教祖がどこの誰で、何歳なのか未だに判らない。確かなのは彼には、瞬時に人を惹き付けるカリスマ性があるということだ。そして、彼が素顔を見せなかった理由は保険だったんだ」

「……つまり、教祖である自分に心酔しきっていない幹部が、内部から反発してきた時に、自分の正体を特定出来ないようにしていたって訳か？」

暁は神屋に導かれるようにして、尋ねた。

「そういうことだ。これで、話の方向性は分かったんじゃないかい？」

神屋は、話を区切って問題を提議した。

亜美が続けて答える。

「その教祖の計画に対する反乱分子の一人が、鬼頭火山だったってことね」

「そう。皮肉なことに、王里神会の規模を拡大するのに大きく貢献していた、初期メンバーであり、幹部であった鬼頭火山が反発の意思を表し始めたんだ。王里神会が、武力をもって日本の再構築を目指す教祖Kグループと元来の教義に従い平和的に幸福を目指す鬼頭グループに、はっきりと二分したのは今年の六月中旬頃だった」

神屋は瞼を閉じ、暗闇の中に記憶を投影させているかのようだった。

「六月二十一日、鬼頭グループが参加した最後の幹部会議があった。そこで、鬼頭火山は七人の幹部を率いて王里神会を脱会した。僕が鬼頭火山とチェスをしたのはその日だった。僕はチェスの途中、鬼頭グループに入らないかと呼び掛けられた。だが、僕はそれを断った。心の中では鬼頭火山のやっていることが正しいと分かっていたが、凄まじい覇気を持った教祖と堂々と争う勇気は、その頃の僕にはなかったんだ……」

神屋は後悔するかのように言った。だが、その一方で、ある種の希望を見出しているかのようでもあった。その姿は、何とも形容しがたい姿であり、暁と亜美には不安を増幅させる要因でしかなかった。

「鬼頭火山と僕のたった一回の対局が、奇跡的に希望を紡いだことに相違ないだろう」

しばしの沈黙の後、神屋はそう言った。
「……何故だ？」
暁が間髪入れずに尋ねた。暁の心には、六割の不安と四割の好奇心が渦巻いていた。
「僕が鬼頭火山に鬼頭グループに入ることを誘われたとき、僕は一瞬思考を止めてしまった。葛藤と恐怖がそうさせたのかもしれない。今まで瞬時に駒を動かしてきた僕が彼の誘いの言葉を聞いた途端、動揺して、挙げ句の果てには悪手を打ってしまったんだ。その瞬間、僕は鬼頭火山の駒になった……。鬼頭火山は確信したのだろう。僕の意思が鬼頭グループのそれであることを。そして、恐怖心によってKグループに所属せざるを得ないことを」
「……鬼頭はお前をどうしたんだ……？」
「どうもしなかったよ。ただ『今は教祖Kに従え。来たるべきその時まで、ただ従順に』……そう言い残して、投了して、去っていった」
神屋はチェスの試合を解説するような口調で言った。
暁は、それを聞いて直感した。この事件は最初から壮大なチェスゲームだったのだと……。
「神屋君、つまりV事件というのは、鬼頭グループが教祖を敵に回した事件って意味なの？」
亜美は、合点がゆかないというような表情で言った。
「いや、ここまでが前置きさ。鬼頭グループがただ素直に脱会したのなら何の問題も生じなかった。七人の元幹部が殺されることも、君達が王里神会に追われることも……ね。しかし、僕達が教祖Kの野望を阻止する可能性もまた生じなかっただろう」
神屋は先程とは打って変わって、今度は確かな希望を捉えていた。
「……待て。神屋、お前は今、七人の元幹部が殺されたと言ったのか？」
暁は続きを話そうとする神屋を制して、訊いた。
「……？　そうだけど……」

暁は少し前から「七人」という人数に引っかかっていた。
「まさか、その元幹部七人って、この近辺の街で起きた連続殺人事件の被害者七人なのか？」
「！！　……その通りだよ、暁。しかし、何故分かった？」
「何故って……、俺達はあの連続殺人の犯人が鬼頭火山だっていう所まで知ってるんだ。しかし、そうなると、鬼頭は自分の仲間を殺したことになる……」
「！！！！」
神屋は驚き、言葉を失っていた。
「……なるほど。そうか、それで君達は何一つＶ事件の情報を持っていなかったのか……！」
神屋は暁の言葉を聞いて、そう言った。
暁と亜美はその言葉の真意が分からなかった。
「それってどういう意味？」
亜美は神屋に説明を催促した。
「……鬼頭火山は、もし君達が王里神会と接触しても、Ｖ事件と無関係だと判断されるようにする為に、最初からＶ事件の事を教えなかったんだよ。虚構の中に真実に隠したんだ」
「……神屋、分かり易く説明してくれ」
暁は、混乱する頭を冷静に保とうと、小さく深呼吸した。
「いいかい？　あの連続殺人は鬼頭火山による犯行ではないんだ。犯人は教祖Ｋグループの雇ったプロの殺し屋だ」
「……！！」
「！！」
暁と亜美はその場で愕然とするしかなかった。
――鬼頭火山が犯人じゃない？
「これで『予兆』は『希望』に変わった。君達は王手を取るための道標なんだ」
神屋の中で論理は固まった。
暁と亜美は、何がどうなったのか分からず、ただ神屋の説明を待

つしかなかったのだった。

―４―

室内はクーラーで涼しくなっていたはずであるが、何とも不可思議な生温さが三人を取り巻いていた。

暁と亜美の精神は謎の塊が支配されていた。この謎の塊は言うまでもなく神屋がV事件を語る過程で生み出したものであり、広い意味では好奇心とも不快感とも言えるものだった。

不意に訪れた沈黙は、各々の考えをまとめるのに十分な時間を作ってくれたようだった。

「ねえ神屋君、もし鬼頭火山が殺人犯じゃないなら、彼は殺された仲間を追って自殺したの？　それとも鬼頭火山自身も自殺に見せかけた殺人による被害者ってこと？」

亜美は出来る限り自分の推理を昇華させ、真実に近い答を導こうと試みていた。しかし、結果として現出した二つの疑問は、いずれも神屋の用意していた解答とは異なっていた。

「どうやら君の名推理もここまでみたいだな。……まずは、固定観念を捨てるんだ。……鬼頭火山は……」

神屋は先を言いかけて、再び口を閉じた。

「……鬼頭火山は……？」

一点を見ながら固まってしまった神屋に、亜美は聞き返す。

神屋は、数秒目を細めて、口を開いた。

「……暁、どうかしたのか？」

神屋の視線の先には暁がいた。隣にいる亜美には確認するまでもなかった。神屋は暁の表情に陰りを読み取ったのだ。

「……いや、何でもない。続けてくれ」

暁は「いつもより平常」であることを強調するというような、矛盾を含んだ口調で言った。

この時、暁は動揺を隠すようにしていた。
暁には、神屋が何を言おうとしているのか分かっていた。
トニーの別れ際の一言。その一言の重みを痛感していた。
――鬼頭火山は生きている……神屋はそう言おうとしているんだ。
それは、暗喩でも、婉曲でも……ない！
神屋は疑惑の目を暁へと向けていたが、すぐに元の表情に戻った。
「……鬼頭火山は生きている可能性が高い。もし死んでいたとしても、少なくとも彼の意志を継ぐ者が彼に成りすまして存在する」
神屋ははっきりと言った。
「鬼頭火山が……神崎さんが生きてる……」
亜美は、天井を見上げて神屋の言葉を繰り返した。
「何故だ？　神屋、何故お前はそう断言出来る？　意志を継ぐ者の存在を考慮に入れてるってことは、鬼頭に会って確かめたんじゃないんだろ？」
暁は矢継ぎ早に尋ねた。もはや、彼の願いは一刻も早く謎を全て解明することであった。
「離反した八人とその仲間達は、『王里神会』の反抗勢力である自分達を『アンチマター』と呼んでいた。アンチマターは表では活動をしていなかった。王里神会は宗教法人の形を取って公的な一面を持つが、アンチマターは表向きには一般人だ。……知っているかい？　『アンチマター』は『反物質』、あらゆる物質に対する反対概念だ。それは光に対する闇、引力に対する斥力、神に対する悪魔、ゼロに対する無限、プラスに対するマイナス……そんなものを比喩している。それらが出会った時、双方は消滅するんだ。おそらく、彼らはその名の通り王里神会を倒すという目的以外では活動する気はなかったんだろう。……それが、鬼頭火山の意志なんだ」
神屋は具体的な例を挙げて説明した。それは、暁の中の哲学にインスピレーションを与えていた。
暁はこの壮大なチェスゲームが本来のチェスとは大きく異なるものなのではないかと考えていた。

チェスには足し算も引き算も存在しない。王を詰めれば勝ちだ。しかしこの勝負は、最後に盤上の駒を完全に相殺させることが鬼頭火山の勝ちを意味し、それを防げば王里神会教祖Kの勝利となる。しかも、駒は全てプラスとプラスの闘いではなく、プラスとマイナスの闘いを強いられている。

それはもはやチェスではない。さらに上位で、高度なゲームだ。

悪魔は元々は神だった。そんな話はよく聞く話だが、「反する」のはどこか似ているからではないだろうか。悪魔は神から生まれ、闇は光から生まれ、『アンチマター』は『王里神会』から生まれた。

源を同じくする二者が互いに異なる道を踏み出した時、両者は「反する」のだろう。暁はそう感じていた。

「しかし神屋、そのアンチマターが鬼頭火山が生きてる……って話とどう繋がるんだ?」

「アンチマターの代表者を名乗る者から、僕のPCへEメールが届いたんだ。そのメールの差出人は自分が鬼頭火山であるかのように文章を書いていた。だけど、あくまでもメールだし、その人物が鬼頭火山なのかどうかは、僕には判断できなかった」

「メール……? 王里神会にか? それとも、お前にか?」

「僕にだ。僕にはそのメールの送り主が鬼頭火山であるとしか思えない。そのメールを読んで、僕はアンチマターに協力することを決意したんだ。今度こそ逃げ出すわけにはいかなかった……。彼らは逆転の一手になりうる切り札をKから盗み出した。でもそれは僕がアンチマターに協力しなければ、非常に使いづらいものなんだ。僕が王里神会に付けばアンチマターはおそらく詰んでしまう。一方、僕がアンチマターに付けば王里神会を倒せる可能性が高まる」

神屋は、真剣な眼差しでそう言った。

亜美はすかさず「切り札って?」っと返した。

「切り札……か。篠原さん、これは真実であり真実でないような話なんだけど……要するに僕もそれがどんな切り札なのか分からないんだ。不安をあおるようで忍びない限りだが、それが本当に切り札

なのかさえ、不明なんだ」
神屋はテーブルの上に指を組んだ手を置いて、噛み締めるように言った。
「何それ、全然解らないんだけど」
亜美はテーブルの上の巨大なワイングラスに入れらたメタリックグリーンの包装紙のチョコレートを一つ取り出した。
包装紙をはがして人差し指と親指でチョコレートを摘むと、そのまま口に放り込んだ。
「何コレっ。にがーい……」
亜美が飽き始めていることは誰の目にも明らかであった。
「暁、君がこの辺りで起きた殺人事件の話に出したとき、僕が何を言いかけていたか分かるか?」
神屋に訊かれて、暁は数分前の記憶を思い返した。
「確か、アンチマターが最後の幹部会議の日に何をしたかって話じゃなかったか?」
「そう。それこそが切り札なんだ。あの日、鬼頭火山達は教祖Kが絶対に奪われたくなかったもの、他人の手に渡ったら絶対的に危険なものを盗み出したんだ」
「でも、それが何なのか分からないんだろ?」
「ああ、明確にはね。でも、それが発覚したときKは明らかに焦っていた。その後何日もしない内にアンチマターに接触したくらいだ。それだけに留まらず、現に七人の人間を殺しているのがその裏付けだ」
「七人がやられたのはKにとって重要な何かを持ち出した報復だったのか?」
「報復じゃあない。単に、危険な武器を手にしたアンチマターの代表者七人を排除しただけだ」
「……謎ばかり……だな」
部屋は再び沈黙に包まれた。
耳を澄ませば、雨音が聞こえる。どうやら降り出したらしい。

神屋が鞄から印刷されたプリントの束を二束取り出した。
「これを読んでほしい。僕に届いたメールだ。僕には、君達へ向けて打った手紙のようにも感じられてならない。僕が説明するより、ずっと解りやすいはずだ」
神屋はテーブルにプリントの束を並べた。
亜美は、静かにそれを手に取った。暁も続いてプリントを手に取る。
タイトルには「フロム・ヘヴン」とあった。
その文書には、事件の全容が記されていた――――。

テンペスト（後書き）

読んでいただいた方々、毎回有難う御座います。
次回は鬼頭火山あるいは鬼頭火山を継ぐ者が残したメールが丸々一話となります。最重要話になるでしょう。
漱石の『こころ』かってくらい長いですから、時間のあるときにどうぞw
いつ更新できるかは判らないのですが・・・

フロム・ヘヴン（前書き）

いよいよ来ましたね、この回（笑）
最初に謝らせてください。
長すぎて申し訳ないです。
しかも文面がうッザいって・・・
なんでしょうね、この拷問。
ただ、読まないと真相はわからないという・・・
何人の読者がいらっしゃるのか定かではありませんが、この回で読者様が減るのではないだろうかと危惧しております。
無理をなさらずに、読んでいただければ幸いでございます。

フロム・ヘヴン

久しぶりだね、神屋君。突然のメールに不信感を抱いていることだろう。しかし安心してほしい。私は君の味方だ。君が私の味方かどうかは分からないがね。

時に、私が誰であるか分かるだろうか。君ほどの人間ならば既に私が誰であるのか気付いているだろう。

我は片翼の鷹なり。世間では私の死を悼んでいる事であろう。しかし否、私は悼まれるような存在ではない。我が使命の為に犠牲になった七人の優秀な友がいた。彼らの為にも私は闘わねばならない。新たな駒を揃えなければならないのだ。そして、それらを守らねばならないのだ。

ここに闘いの全てを記す。私と共に闘うか、私を消し去るか。君に、いや君達に委ねられたのだ。

ファーストムーブは私たちアンチマターによるものだった。君も知るように、六月二十一日のことだ。王里神会との決別を決意し、私を慕う七人の同胞達と王里神会脱退の意思をKに伝えた。Kとしても、革命の為には仲間との衝突は避けられないと思っていたのだろう。私たちが、反対運動をしないと言ったらスムースに脱会の手続きは進められた。もちろん、その言葉は私の嘘だ。予定ではその日から一ヶ月後には、王里神会は消滅している算段であった為、我々は何も恐れる心配はなかったのだ。

幹部会議の後は、ロビーで意見交換をするのが王里神会の慣習だった。我々が決別を言い渡した会議の後も、いつもと同じく本部のロビーで幹部は集まっていた。いつもと違うといえば、皆怒りや怨みというような表情をしていたくらいであろう。幹部の半数近くが王里神会のやり方を否定したのだ。表面上ではスムースな話し合い

がもたれたが、内心では互いが憎み合い、憎悪の感情が渦巻いていたに違いなかった。そんな中、君は他の者とは違っていた。王里神会に残った者は皆、組織の膿みを出してやったと言わんばかりの表情で、この国を我が物にせんと野心的な瞳をしていた。しかし君は、そんなものには興味がなかったようだね。幸せを勝ち取ることを自らの欲を満たすこととすり替え始めた王里神会を見て、失望したようにも見えた。だから私は君に話し掛けてみたのだ。君が何故、後にアンチマターとなる我々と共に来なかったのか、興味があった。どうやら君はチェスを用いた方が洞察力がはるかに高まるようで、途中からはチェスの対局になったわけであるが、あれはこちらとしても都合が良かった。君はおそらく相手によってチェスと将棋とを使い分けているのではないだろうか。失った仲間を使える将棋はチェスとは僅かに戦法が異なる。より単純なチェスを選択してくれたおかげで私は君と対等に闘えた。勿論、チェスの対局ではなく、心の読み合いでね。

君の内なる恐怖心を察知した私は、その瞬間、ある種の保険をかけることを思い付いた。万に一つ、アンチマターが作戦に失敗した場合、あるいはそれに準ずる結果になった場合、君に援軍として協力してもらおうとしたのだ。君に選択の余地はなかったはずだ。作戦が成功すれば、王里神会は全員刑務所行きだ。君が自らそれを望まない限りは、何らかのモーションを起こさざるを得ない。作戦が失敗すれば、その時は複数の死者が出ているに違いない。そうなれば、くすぶっていた君も、王里神会を倒す為に動き出すであろう。君はそういう人間だ。

さて、我々が達成するはずであった作戦であるが、君ならばその概要くらいは把握しているだろう。我々アンチマターの勝利条件は畢竟するに、王里神会のテロ計画を世間に公表する他ないのだ。そうと決まれば、アンチマターのやるべきことは一つだ。

私たちは、Kの管理するデータの中から、私とKしか知らない、あるデータを盗み出した。そのデータは、王里神会がテロを計画し

ていることを裏付ける証拠であり重大な秘密であった。
我々が犯罪に手を染めることを恐れた為に王里神会を脱会したのだと思い込んでいた、Kを筆頭とする王里神会幹部どもは、まさか我々自らが逮捕される危険を負ってまで王里神会を潰そうとしていたなどとは考えもしなかったのだろう。それはいとも簡単に盗み出せてしまったのだ。これがKの最初で最後のミスであろう。夜襲的であったとはいえ、データを盗まれるなどというミスはらしくなかった。

しかし、直後私たちも致命的なミスをする事となる。幹部に藤原という男がいることは知っているだろう。この男には十分に注意したまえ。私は奴に一度出し抜かれたと言ってもいい。

会議後、Kやその直属の部下たちは会議室で会議を続けていた。その隙に私の仲間の内、二人がKの部屋で機密データのコピーを進めていた。それは丁度、私を含めた六人の元幹部がロビーで君たちを監視していた時、君に分かりやすい説明をするならば私が君とチェスしていた頃だ。

藤原が動いたのは機密データのコピーが終盤に差し掛かった頃だった。藤原は突如、警報装置を作動させたのだ。私が君とのチェスを投了した直後だ。警報装置が誤作動を起こしたという連絡があったのは君も覚えているであろう。しかし、これは誤作動ではない。藤原が意図して作動させたのだ。無論、別室にて機密データをコピーしていた私の仲間二人は、自分たちの行動がバレたのではないかと思い込んでしまった。幸いデータのコピーは終えたのだが、焦った二人はKのPC内に侵入の痕跡を残してしまった。藤原は万が一我々が犯罪の証拠を盗もうとしていた時のことを考え、先手を打って警報装置を作動させたつもりだった様だが、結果的にデータのコピーは成功した以上、あの時点では勝利したのは我々だっただろう。しかし、PCの痕跡から機密データを盗んだことがKに知られたことで、後に我々は痛手を負うことになる。

六月二十一日、我々はあるホテルに身を潜めた。そこで正式にアンチマターという組織を新たに独立させた。メンバーは私を含め八人。君も顔と名前くらいは知っているだろう。メンバーには戦闘員はいなかった。王里神会に残った上條という若い男は他の者よりはるかに戦えそうな風貌をしていたが、アンチマターに引き込むには至らなかった。この、明らかな戦力不足は早々に問題になった。弱さは我々に「逃げる」や「隠れる」のようなパッシブな選択肢しか与えなかったのだ。君も早い内に戦力は確保した方が良いだろう。

日付が変わり、六月二十二日になった。我々は入手した機密データを、鮎川氏に送ろうと考えていた。それは、彼が王里神会に不信感を持ち始めているという情報を入手していたからだ。それに、次期総理の候補というのも都合がよかった。現総理には藤原が既に接点を持っていたようであり、機密データを渡すには危険過ぎた。王里神会信者の多い警察はさらに危険であり、敬遠せざるを得なかった。

しかし、いざ機密データを確認してみると、強固なプロテクトが掛かっていることが判明した。プロテクトを解除しなければ、鮎川氏にデータを送ることは出来ない。

幸いにもアンチマターにはコンピュータに関して極めて優れた技術を持った三島という男も居た為、プロテクトの解除にも時間は掛からないであろうと誰もが思っていた。

しかしながら、問題が生じた。まだ夜が明けない時間だった。三島曰わく、プロテクトの解除には専用のプログラムが必要であるらしい。そしてそのプログラムは三島の自宅のＰＣでなければ使えないとのことだった。一時間程の会議の結果、危険を承知で三島の自宅に三島を含む四人が出向くこととなった。それが丁度午前五時頃のことだ。

しかし、後に彼らとの再会の誓いが、別れの言葉となってしまったのだ。

三島家自宅からＰＣを持ち帰る為に仲間四人が出発してから、連絡なしに四時間が経過した。探知されることを避ける為に携帯の電源は常に切るように決めていたが、他に連絡方法はいくらでもあったはずだった。四人に何かが起こったのは明らかであり、疑うまでもなかった。私は何らかの判断を下す必要があった。

だが、判断を下す前に進むべき道は決まってしまったのだ。午前十時、一件のメールが届いた。それは四人の仲間からではなく、王里神会からのものだった。

内容は以下の通りである。

「機密データの消去とその証明を提示せよ。二十三日、午後六時までに上記したことが出来なければ、こちらで拘束した三者の命はない。」

すぐに我々は対策会議を開いた。気にかかるのは、「三者」という表現だった。誰か一人は逃げ切ったようだった。私はその一人の帰還を待った。その間にも話し合いは続いたが、結果として我々は信念を貫き通す決意をした。「何があっても目的を果たす」と皆で決めたのだ。それに、いくら機密データが盗まれたとしても、Ｋが殺人の命令を出すとは思えなかった。王里神会としてもかなりリスキーな決断となるし、王里神会は以前にそのような直接的な重犯罪を一度も行わなかったのだ。王里神会にここまで早い時点で、重犯罪に手を染める覚悟も後ろ盾もあるとは、誰も考えもしなかった。

次の日、二十三日のニュースを観るまでは……。

二十三日、依然として膠着状態が続いていた。逃げ切った一人は

まだ戻ってこない。ホテルに残った四人は、交代で仮眠を取りつつ、メールを使い、アンチマター寄りの信者の引き抜きを進めた。四人がいつまで拘束されるか分からない以上、ただ味方を増やすしかやれることはなかった。三島に代わる機密データの解析が出来るだけのテクニックを持った人材も必要になる。

二十三日、午前七時、我々は軽く朝食を取ることにした。もちろん、仲間の安否に関しては全く情報はなく、心配ではあったが、想像以上に我々の疲労は大きかった。しばらくの間、あらゆる作業をストップし、休憩しなければ体が保たない状態だった。

私は何も考えずにテレビを付けた。最新のニュースが次々とピックアップされ、簡易的な説明が一言ずつキャスターから話される。オープニングが終わった後に紹介されたニュースをひとつひとつ取り上げる形式であるようだった。

三つか、四つ目のニュースだったであろう。

我々が潜伏するホテルから程近い所で死体が見つかったという。

一瞬、誰もが最悪の展開を予想したことだろう。しかし、簡易的な説明では被害者の名前までは分からなかった。正確には他殺どうかも不明であったが。我々は無言でテレビを見つめるしかなかった。

私はあの時の事を忘れやしないだろう。テレビに映された幸せそうな顔写真。その表情が二度と再現され得ないことを思うと、心は酷く痛んだ。

殺人事件の被害者の名前は「三島雄一（みしまゆういち）」と報道された。それはまさしくアンチマターの一員、我が仲間であった。

我々は戦慄した。しばらくは誰も身動きが取れず、ただ苦しみ、うなだれた。

メンバーの一人がテレビの電源を切った。そこでやっと我々は正気に戻った。

三島が死んだ、殺された。それは、確かな事実を我々に知らせて

いた。

まず、Kが今まで決して立ち入らなかった殺人を命令したということ。そして、一線を越えたKはもう、拘束された三人にも同じことが出来るということ。

さらに、三島が戻って来ないということが、機密データのプロテクト解除が出来ないことさえも示していた。

我々の完敗であった。仮に、私がKと刺し違えたとしても、おそらくは状況を変えるには至らなかったに相違ない。もはや、指導者を失ったところで何も変わらない。歯止めが効かない状態だった。

我々アンチマターに残された選択肢はいずれも頼りないものだった。王里神会の指定した時刻までに、機密データをデリートするか、捕らわれた仲間を犠牲にして、王里神会から逃げ切れることに賭け、逆転の一手をじっと狙うか……。

後者は、かなりのギャンブルであった。それこそ、この世から消えてしまったかのような、完全な隠れ方を考えずには、到底不可能なのだ。無論、そのような時間は残されていない。

我々が考えるべきは、前者についてだった。機密データのデリートをしたところで、仲間や我々が生かされるとは限らない。ならば、仲間を見捨て、データだけでも誰かに託すべきか……。

いや、考えるだけ無駄なことは誰もが分かっていた。全く打つ手は見つからず、時だけが無情にも過ぎていった。

運命とは、常に少しずつ何処かへと向かって行くものなのかもしれない。あるいは、無限にループする閉ざされたものなのかもしれない。

古くから、運命は二元論で語られてきた。「円環」であるか、「螺旋」であるか……。どちらかが答であると証明出来たものはいない。私はふと思うことがある。どちらも正しい答なのではないか……と。

二つの差は、「個人差」なのではないか。「円環の運命」は、円を描くように進み、やがて同じ軌道に縛られ、違うような同じ道を進む。「螺旋の運命」は、同じく円を描くように進み、しかし、同じ円ではない。一見同じようにみえる円の道を進みながら、次第に何処かへと進んでいく。

私は以前から、「正しい円環の運命」が最も美しく、望ましいものであると考えていた。「正しさ」が反復されるなら、それはどこまでも正しい。しかし、それはあくまでも「理想」であり、我々の営みは、正しさのみを選択することはない。故に、運命とは常に螺旋であるというのが私の持論だった。

しかし、それは何もかもが恵まれ、苦しさを知らない者の、詭弁なのかもしれない。仮に、自らの時を閉じてしまった者はどうだろう。おそらく、その者の目には、新しい朝日など見えやしない。幸福感の有無が、円環か螺旋かを決するのだ。観測者の心が僅かな差異を見出すのだ。

だから、この世に正しいものなど、たった一つも無いのかもしれない。逆に、この世の全てが正しいのかもしれない。

ならば、未来のための現在の選択が正しいか正しくないかは、その未来が訪れるまで判らない。いや、一度決した判定が変わることだってあり得る。浪人して苦しんだ学生が十年後、浪人時代を振り返って、「あの頃の経験があったから今の自分がいる」と話すかもしれない。

ただ一つ言えることは、このメールをもし、神屋聖孝以外の者が、例えば、勇猛な高校生たちが読むようなことがあるならば、綱渡りのように心もとない私の最後の物語は、確かに紡がれているのだろう。

王里神会が指定したタイムリミット、午後六時になるまで、残り三時間と迫っていたあの局面。部屋に響いたコールが何処かへと繋がる螺旋の一欠片となる。

Kという人間は、あくまでも「人間」の範疇である。当たり前ではあるが、その前提を確認しなければ、彼を「神」と崇める者が現れてもおかしくはない。K自身、自らは神ではなく、幸福の探求者に過ぎないと言っているが、信者の多くはKに対し神に対する信仰に近い崇拝をしている。Kの最終目標が何処にあるかは定かではないが、それがもし戦争を余儀なくさせる段階にまで及ぶならば、信者は最大の武器である。死を恐れずただ素直に命令を聞く軍隊が誕生するのだ。それを可能にする力を持っているのがKであり、私自身、Kが正しいのではないかと思い悩んでしまいそうになることがあるくらい、あのカリスマ性は強大である。畢竟、彼は比喩的意味においてはまさしく「神」であるのだ。

しかし、私ほど近い場所からKを見てきた者はいない。「神」が不完全なのか、Kが「神」として不十分であるのか、悩ましいところではあるが、Kは完全ではない。最も近かった私だからこそ言える。完全に見えるだけで確実に不完全である。もしかしたら、人よりも人間性があるが故に、今、このような抗争が生まれているのではないか。つまり、この現実が示すのは、Kが「神」として不十分であって、あくまで「人間」の範疇であることの証明かもしれない。

Kのミスは、ホテルの場所を突き止め、武力をもって我々を拘束するという選択をしなかったことだ。武力行使の最大のネックは、正確なプランを立てねばならないことであろう。それが殺人などとなれば、一人殺害するに至るまでに最低でも六時間程は会議しなくてはならないだろう。加害者が組織めいていればいるほど、決断には慎重になる。そして、リスクが大きい勝負であるほど、確実な勝利が必要とされる。

王里神会もまた、我々同様焦っていたに違いない。殺人の命令を出してしまった以上、負けは許されない。確実に機密データを処分出来て、かつリスクが最小である手段を使うしかなかったのだ。故に、我々が自らの手で機密データを消去するような状況を作るのが

ベストであると決断を下してしまった。それにより、我々が論理による反撃をする僅かな隙が生まれたのだ。

閑話休題、タイムリミットまで残すところ三時間となったときに、私達が隠れる部屋に鳴り響いたコールについての話に戻そう。といっても、Kの「神的な」外面に隠された「人間的な」内面についての話がなければ希望すら見えない、危険な綱渡りの話になるのだから、テーマは一貫しているわけであるが。

午後三時、響いたコールは私の携帯の呼び出し音であった。王里神会がこれ以上の武力行使をしないであろうという察しがついた時点で電源が点けられていた私の携帯は、さも発信者が「神」であるかのように、救済の電話がかけられたことを私に伝えていた。

私には姪がいる。電話の発信者は彼女であった。先日、この抗争に勝利すべく多忙な小説家の職を退くことを、その姪に伝えたばかりであった。もちろん、引退の決意を話したに過ぎず、王里神会もアンチマターもその話には登場しなかった。この問題は私の問題であり、彼女を巻き込みたくはなかったのだ。しかし、彼女はまるで私の渇望する平和な日常を、書き物を続けたいという欲求を見透かしたように、小説家を引退することに断固として反対した。電話の内容が、私に小説家を続けさせるための説得であろうと予想するのはごく自然なことだった。

しかし、その予想は間違いであった。姪からの電話は、予想外の突飛な頼みであった。

その内容はどういうわけか、「ある人物と会ってほしい」というものであった。ある人物とは、姪の親友であり、同時に私の書いた小説の世界一のファンであると自称する、シノハラという女子高生であるそうだ。

しかし、世界中の何人の小説家がそのような頼みに応えるだろうか。特殊な理由がない限り、仮にも有名人である者が一般人と私的

に会うことはない。それに加えて、今、この状況下――仲間が殺されるかもしれない上に自身の安全すら保証できない状況下で、姪の頼みだからなどと言って安逸をむさぼり、ファンと会っているようなら、私の脳は確実に異常をきたしているだろう。

そもそも、私とて姪の意図が分からない訳ではない。おそらく私の姪は、家族のような近しい者がファンとして小説家の引退を止めようなんてことに無理があることに気付いたのだ。その場しのぎの慰めに聞こえると考えたに違いない。

そして、次なる打開策として、家族ではない他人であり、かつ私に関する知識をかなり持っている本物のファンを私に送り込み、世辞的でない言葉のひとつでも贈ろうと考えたのだ。

さらに言えば、私の姪は常人の域を逸した能力を持っている。私がそこまで考えるのを見越して、シノハラという少女を選出したのかもしれない。最後の切り札、頼みの綱、などと思っていたのかもしれない。

私がもしこの一連の事件に関与していなければ姪が最後の最後で会わせようとしたシノハラという女子高生に会おうとしたかもしれない。

いやしかし、この仮定は成り立たないのだ。私がこの状況下に置かれたからこそ、姪はシノハラという女子高生を紹介したのだから。

つまりは、私は姪の頼みを聞くはずがなかった。聞くことが出来なかった。仲間を死なせてしまった、この傷だらけの心では。

しかし、傷だらけで、追い詰められた心であったからこそ、私はあの計画を、まるで小説のシナリオを創るかの如く思い付いてしまったのだ。

あの計画は、まさに神頼みであり、危険な綱渡りだった。

しかしながら、もしもこれを読む者が、私の隠した最後の道標を見つけるならば、私の計画は何万人もの人間の命を救うかもしれな

い。だが、同時にKを信じた何万人もの人間の精神を殺すかもしれない。そして、これを読んでいる神屋聖孝ないしはシノハラアミは、紛れもなく私が巻き込んだ人間だ。私は君達を駒にした。神屋聖孝君、君の心の疑心と正義を利用したのは私だ。シノハラ君、君に真剣勝負などと言って暗号を解かせたのは、最終的に私が生きて機密データを保持している事を隠しながら神屋君の集めた反王里神会グループを動かし、Kを倒すための布石だった。王里神会の情報にない君ならば、神屋君が私と合流するまでの間、王里神会の追っ手から逃げ切れるであろうと考えたのだ。仮に捕まっても何も話せないように暗号勝負というカムフラージュも用意した。しかし、恐怖心と過ぎ去った時間までは元には戻せない。君を私の私情に巻き込んで本当にすまなかった。

私は姪の頼みを引き受けることにした。シノハラという女子高生が、私の計画において、クイーンの駒と成りうる人間か、それとも盤上に置く価値のない人間か、それを確かめるために、私は彼女に会う約束をした。その約束の日は、六月二十四日水曜日、姪から電話を受けた次の日だった。

シノハラアミと会う前に、私には乗り越えなければならない現実があった。約束の日を迎える前に、王里神会が機密データの消去とその証拠の提示の期限、そして、捕らわれたアンチマターの三人の安全が保たれる期限である、二十三日の六時を迎えなければならない。

それは、アンチマターの意志を果たすために仲間を見捨てるという意味でもあった。

その時間を迎えるまでに、幾度も後悔と葛藤、決意を繰り返した。吐き気と目眩が継続し、自分がこの一日で随分と年老いた風に思わ

れた。

そして、その瞬間がやって来た。ホテルの時計の長針と短針が直線的に並んだあの瞬間、私たちは深く目を閉じ、暗黒に沈んでいった。

そして数分か数十分して、私は鞄から一冊の本を取り出した。

『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』

この本は、実は私が覆面作家として書いた推理小説だ。最近では私と比較されることの多い作家であるが、それも当然、どちらも私なのだから。

この作品は、ハムレットの如く思索家で非行動的な探偵と、ドン・キホーテの如く独りよがりの正義と情熱に駆られ、無分別な行動をする探偵の二視点で同じ事件の解決を試みる内容である。

この主人公達は、紛れもなく私である。私を二つに分裂させた、分身達だ。

私は彼らに、思索故の快楽と、無分別故の恐怖を与えた。

だからこそ現実世界の私は、殺人の快楽と殺人の恐怖というシナリオを自らに与え、それを理由に表舞台から去ろう、私はそんなことを思った。罪悪感のあまり、自己の存在に、たとえ虚構であっても「死」というものを与えねば、あの悪魔の計画を達成出来そうになかった。そして、私の仲間を、自らの欲を満たすために私自身の手で殺してしまう、そんなフィクションを与えねば、いつの日か自分のしたことを正当化してしまいそうで怖かった。

それが、私が姿をくらますに当たって、自殺というシナリオを選んだ理由である。

しかし、この物語は本当に「フィクション」なのだろうか。結局のところ、私のしたことは「フェイク」ではあっても、「フィクション」ではないのかもしれない。殺人者であることに変わりはないのかもしれない。

二十三日の午後七時を回った頃、私は残る三人の仲間と共に、最後の晩餐をとった。キリストと十二使徒のそれに倣い、我々はパンとぶどう酒を酌み交わした。キリストは受難の前日、十二人の弟子にパンとぶどう酒を分け与えた。しかし、我々の行った見窄らしい晩餐会では、三人の同胞が私にそれらを分け与えた。今回の決死の作戦、救世主の役には三人の仲間達が相応しかった。

私には妻がいる。巻き込みたくはなかったが、彼女の協力なくして、作戦は成功しない。私がKと共に王里神会を成長させていった時から、活動内容や取り決めは全て彼女にも話していた。私たちがKと対立し始めたことも、妻は知っている。彼女もまた、こうなることを覚悟していたのだろう。私は妻に、電話でここ数日の事件と、三島の死、新たに捕らえられた仲間の事、そして、その仲間を見捨て、達成しようとしている悪魔の計画の全て、それらを全て話した。それを聞き、妻は一言「わかりました」とだけ言った。あの時の、私の頬を伝う涙の温かさを、私は今でも覚えている。

六月二十四日、私は三人の仲間と共にいくつかの暗号を作った。それは、シノハラアミが、キーパーソンとして、相応しい人間であったとき、効力を発揮するものだった。もし、彼女が普通以下の素質しか持ち合わせていない女子高生ならば、この暗号の真意に辿り着くことはない。それどころか、おそらく暗号を使った真剣勝負に至ることすらないだろう。

本来、私を説得出来ずに諦めるのが普通だ。しかし、何度でも食らいついてくるような心の強い人間ならば、私の計画を正確にこなしてくれるかもしれない。あの姪が最後の切り札として選んだ者ならば、私の計画の更に上に到達するやもしれない。私はそんな願いと希望を持って、書籍、手紙、ＣＤと次々に暗号を作り上げていっ

た。

移動は二十四日中に済ませなければならなかった。ここでの移動とは、隠れるという意味である。これが、最初の賭でもあった。最も安全な場所への移動がこの作戦においては重要だった。そしてその場所は二つ用意された。一つは、私が「死んだ」後に隠れる場所。もう一つは、自宅の地下だ。自宅をあえて選んだのは、王里神会の裏をかくためである。元々、有り余る金を有効に使うべく、防災用の地下シェルターを造ったのが、始まりではあったが、まさかこれが「防塞」に変貌するとは思いもよらなかった。

地下に続く階段は、私の書斎に隠されている。その書斎にシノハラアミを招き入れれば、いざ王里神会の刺客が自宅に侵入してきても、気付かれずに隠れることが出来る。しかし、これはあくまでも予防線。彼女を匿うような状況になるようならば、彼女に全てを明かすことになる。つまり作戦は失敗する。そうならないための、念には念を……というものである。

それから、客人を書斎に招くのも不自然であるため、私は書斎を片付け、出版社との打ち合わせ部屋を思わす部屋を演出した。

巨大な本棚の向こうに封印された隠し階段は数年ぶりに出現した。テーブル下のカーペットは古いものに変え、久しく模様替えをしていないような風にした。そして、そのカーペットが地下への階段の入口の真上に来るように調節した。

地下シェルターは書斎と、中庭に入口を持っている。管理は常々、妻にやらせていたが、その際は裏庭の入口を使わせていた。その裏庭の入口もまた、その姿を見られぬよう、内側から押し上げればすぐに開く程度の、軽いプランターで覆った。

裏庭の階段を隠し終えた頃、午後三時を回る頃だったか、自宅周

辺を見張っていた三人の仲間の内のひとりから、電話があった。

「シノハラアミらしき女子高生が来ました。王里神会の追っ手は今のところありません」

電話を切り、私は裏庭から玄関に向かった。

そこに、彼女はいた。

海が青いように、雲が白いように、森が緑であるように、その瞬間の「当たり前」のひとつのように、彼女はそこに存在した。

姪が何故、シノハラアミを選んだのか、私はすぐに思い知ることとなった。彼女は私の説得を諦めるどころか、私を叱りつけてきたぐらいだ。

彼女は私から気に入られることや、世にありふれた体裁よりも、彼女の親友でもある私の姪の思いを選んだ。迷いなく、圧倒的な意志を持って。

私はこの時、確信した。彼女ならば、作戦を遂行出来る……と。

第一の暗号へ導くメモをシノハラアミに渡した後、私は地下にて三人の仲間と共に会議を開いた。これが我々が四人で会う最後の機会だった。

神屋君がこのメールを読み、王里神会よりも早くシノハラ君に会えば、我々はKにチェックを掛けることが出来る。しかし、敵の屈強な「壁」を崩すことが出来たら……の話だ。

私は王里神会幹部の一人、王里神会の「壁」、藤原の拘束を仲間に頼んだ。実質、政界との楔である藤原をどうにか止めなくては、大衆媒体へ機密データを送っても、権力をもって握りつぶされてしまう。事が終結するまでの間、藤原を拘束出来れば、殺す必要はな

い。しかし、それはかなりの難易度を誇るミッションだった。仲間達は、常に部下に護衛をさせている藤原の拘束は不可能だと、考えた。そこで、やむなく暗殺という方法を進言した。私は最後まで反対したが、どうやら後に彼らは、その作戦を実行しようとしたようだ。七月十一日の時点で、彼らは皆、殺されてしまった。私のために、私の計画を成功させるために、彼らは藤原の暗殺を試みたのだ。またも、私は、自らの意志の弱さ故に、大切な仲間を失ってしまった。更に、私たちが見捨てた、王里神会に捕らわれた三人もまた、殺されていたことが分かった。

私はこの苦しみを、たった一人で耐えた。藤原の動きを止めることには失敗したが、私の計画はその程度では崩れない。逆転の時を信じ私は涙を呑んだ。

私はここまでに、幾度も「計画」「作戦」という語を使用したが、これを読む者にその内容を明言してはいない。

これを読むものには、その全容を知る権利があるだろう。最後に全てを説明し、君たちの選択を見守ろうと思う。

シノハラ君が暗号の最終地点、「夜行公園」にたどり着くか否かは、私にとってどうでもいいことだった。私が君に託したものは、暗号の中の隠れている。結果に意味はない。事実として、私が連続殺人犯だという虚構は、私の罪悪感の象徴であり、君たちには何の関係も意味もないものだ。それよりも重要なのは、君が持つ暗号だ。それの中に、私が現在隠れている場所が記されている。それを見て、神屋君を私のもとに連れてきてほしい。

そして神屋君、君にはまず信頼のおける仲間を集めてほしい。元々王里神会に反感を持っていた同志達なら、安全に引き抜けるはずだ。

そして、このメールが君に届くのは七月二十一日だろう。今から急いでシノハラアミに接触してへしい。これは、暗号の最終地点へ辿り着いた者に私の虚構を伝える役目を負ってもらった私の師にあたる人からの情報であるが、どういうわけか、シノハラアミの存在が王里神会に知られてしまっている。

それどころか、私すら知らないシノハラアミの協力者、トザキアキラという者の情報すら手に入れているようだ。

どうやら雲行きが怪しい。

私が、本当は死んでいないということも、王里神会にはバレているとのことだ。

それらの、私の意図しないいくつかの誤算を、神屋君が既に知っていれば、対応も出来たかもしれないが、Kはごく近しい幹部や側近にしか、情報を伝達していないだろう。

幸い、私の隠れ場所は私以外の誰にも教えていない。

思えば、不可解な点は幾つも見受けられた。三島の自宅に向かった四人は一人も逃げることは出来ず捕まった。王里神会は三島の自宅で待ち伏せしていたのだ。

さらに、前述した通り、王里神会にとって、三島の殺人が初めての重犯罪だ。殺人を決意し、会議を開き、その道の者を雇う。さらに、待ち伏せ。それだけのことを、あれだけスムースに実行するには、予知能力でもなければ不可能だ。

敵は私たちの行動を、正確に読んでいた。いや、知っていた。

だが、全て知っていたなら、何故早々に機密データを奪還する作戦を立てなかったのか……。

もしか、この仮説が確かならば、とんでもないことになるかもしれないが、Kの他に、機密データを狙うものがいるのだろうか。

私たちをあえて泳がせ、機会を見て、アンチマターと王里神会をまとめて消してしまおうなどという考えを持ったものが存在するのか……。

私はその存在に、「第三勢力」の成長に、三島が死んだ時に感づ

いた。だからこそ、このメールに私の隠れ場所を直接記さずに、シノハラアミを通して君に隠れ場所を教える計画を思い付いたのだ。どこから情報が漏洩しているのか私には、とうとう判らなかった。

いずれにせよ、現時点で私が君に教えられる情報は以下の通りだ。

シノハラアミ　月代学園生徒　十六歳

トザキアキラ　協力者

急いで彼らのどちらかに接触し、暗号に隠された私の居場所を聞き出してほしい。困難を極めるようならば、私の姪に取り合ってもらう手もある。姪が簡単に話すとも思えないが……。

とにかく君と私が合流出来れば君の集めた新たな仲間に、私が直接命ずることも可能だ。アンチマターの戦力は回復する。そうなれば、王里神会と政界の繋がりをどうにか遮断し、マスメディアに機密データを渡すことが出来る。

得体の知れない何者かが、この勝負に介入しようとしている。少ない情報であるが、神屋君、君には誰よりも早くシノハラアミに接触してもらいたい。

このメールを、シノハラ君が読んでいるようなら、神屋君は最も早く接触することに成功したことになる。そうなることを私は願っている。

敵を倒せるかどうかは、君たちに懸かっている。

フロム・ヘヴン（後書き）

読んでくださって有難う御座います。
いや、本当にありがたいです。
ひとつ言い訳をさせてください。
僕自身、書きながら死にたいと切に願いました（笑）
相方の竜司に送るメ切を数カ月延滞したような気がします。
小説恐怖症になりました。しかも、僕がこのとき担当した分は２９話から３２話、携帯のメール１０個分です。
なので申し訳ない限りですが次回と次次回は若干調子がおかしいです。ここで力尽きてしまいまして。
そしてなによりキツかった理由は、今回で語られた真実は、僕がこれを書くときその場で考えたアドリブだったということです。
以前お話ししたかもしれませんが、僕と相方は、事前に物語の方針や内容を決める打ち合わせを一切しておりません。
相手がバトンを持っているときはこちらは読者に徹します。
で、相方が作った最新話を見て次の最新話を決めます。
つまり、かなり巧妙に伏線を張った風に見せかけている今回ですが、１から１６話を書いていた段階でこんな展開にすることは微塵も考えていなかったわけです。
なので今回は辻褄合わせが死ぬほど大変でした。
全話読み返して、ノートに時間的関係を書き込みまくり、隙を見極めて暁や亜美、静枝の行動に裏の面を見せる作業は生地獄でした。
そのためか僕の頭がいい感じにぶっこわれまして、狙ってもいないウケをとるような言い回しが実現しましたが（笑）
片翼の鷹ってなんぞ、って感じっすよね。
もはやこの回は僕と竜司にとってネタになろうとしていますよｗ
本当に、皆様にはご迷惑をおかけいたしました。
反省して精進しますので、今後ともよろしくお願いいたします！

ムーンストーン（前書き）

あけましておめでとうございます！
いよいよ受験も間近ですね・・・。
一応書き溜めておいた分があるので、連載はぎりぎり続けられますが、浪人や多忙の可能性もありますので、もしも休載になった際には、再開するまで待っていただけると嬉しいです。

暁は三十枚ほどのプリントの束を読み終え、テーブルにそっと置いた。数分遅れて亜美もプリントをテーブルに戻す。

「……俺達が暗号を解いてる間に、こんな物騒なことが起こってたのか……」

暁は天井を見上げ、溜め息混じりに呟いた。

亜美は不機嫌そうに目を臥せていた。

言葉が虚空に消え入る。沈黙の空間に、雨が窓を叩く音が響く。

「篠原さん、君に課せられた役割の重さは普通じゃない……。ショックを受けるのも解るけど……」

「違う」

亜美は神屋の言葉を遮るように言い放った。

「……違う？　何がだい？」

「ショックなのはそこじゃない。そのくらい大したことない。私がショックなのは、神崎さんのこと……」

亜美は物悲しげに、言った。暁には亜美の気持ちが手に取るように分かった。

「神屋、俺達は鬼頭の姪の佐藤静枝が、心から心配してたのを知ってる。鬼頭が自殺した時、涙を流して悲しんで、それでも真実を知ろうとして暗号解読に参加したのを知ってる。そして、鬼頭が連続殺人犯と知らされて、大声で泣いて、それでもおじさんのことが好きだって、そう言ったのを知ってる。それだけ静枝は鬼頭火山を、自分のおじさんを想ってたんだ。それなのに、アイツは……、鬼頭のやろうは……、なんで静枝の気持ちを解ってやれねーんだよ！！」

暁は悲しみの感情に身を任せた。それは怒りではなかった。怒りよりも、悲しみが強かった。

微かにオレンジがかった照明の光が部屋に明暗のコントラストを

創り出す。際立つ黒い陰は室内の光を蝕んでしまいそうだった。
「……」
神屋はただ黙って暁を見た。彼には何も話せなかった。
亜美はスッと立ち上がり、神屋の方を向いた。
「神屋君。暁と、ちょっと外行くね。戻ってくるから、待ってて」
「……分かった。君たちの準備が出来るまで、事件の話はよそう」
「うん。ありがとう」
亜美は神屋に礼を言うと、部屋を出て行った。暁は「悪いな……」と神屋に一言残し、亜美の後を追おうとした。
「……暁！」
暁が振り返ると、神屋は立ち上がっていた。
「……何だ？」
「やめたくなったら、いつでもやめていいんだ。鬼頭火山なんか関係なく……日本の未来なんか忘れて……、何処に向かって歩みを進めてもいいんだ」
「……あのメールの書き手が鬼頭火山だったら、一発ブン殴る。鬼頭火山なんて、その程度しか関係ない。日本の未来なんて俺は初めから知らない。だけどお前は……神屋聖孝は、俺と亜美の仲間だ」
そう言って暁はドアを開けた。
――ガチャ。
ドアが閉まり、神屋はただ独り、部屋に残った。
静まり返る部屋で、神屋は雨の降る駅前を一望できる窓辺へゆっくり近寄った。
「君たちは誰にでも優しいんだな……。でも……それじゃ、いざという時、肝心な誰かを守れないよ……」
雨は、暁たちの心を見透かしてか、その強さを増したようだった。
暁が部屋を出ると、メモが落ちていた。

「外で待ってる。あみ」

……雨降ってんだろうが、あのばか。

暁はホテルを走った。

ホテルの外に出ると、亜美は入口前の階段でポツンと座っていた。

雨脚は強まっており、ホテルを出て亜美の側にたどり着くまでに、暁の体はずぶ濡れになってしまった。

「亜美……」

「……遅い」

「……俺は亜美みたいにどこでもドアを持ってるわけじゃないんだ」

「あたしが持ってるのは猫型ロボットだって言ったじゃない」

「そういや、そうだったな」

暁は亜美の隣に座った。亜美は泣いていたように見えた。雨はその痕跡を流す。本当に泣いていたのかは、暁には分からなかった。

「暁は、あのメールを書いたの、誰だと思う？」

「……分からない。だけど、偽物にしたって、本人から相当詳しく聞かなきゃ、あれは書けない」

「そうだよね。……あたし、神崎さんは解ってくれたと思ってた。世界一のファンはシズだって話した時、気付いてくれたと思ってた。なのに、あれはあたしを試すためのものだったなんて。しかも、暗号の最終地点に辿り着くかどうかはどうでもいいだなんて……」

亜美は空中の一点をじっと見て、言った。

「巻き込まなきゃそれでいいって思ってたんだろうな……。暗号解読に静枝を混ぜちゃいけないってルールも、静枝を巻き込まないためだったんだ、きっと。でも、おじさんが自殺したなんて聞いたら、静枝が暗号解読に参加するだろうとは考えなかったんだな。結果として、罪悪感だかなんだか知らないが、おじさんが殺人犯だったなんていう、重たい悲しみを背負わせてしまったんだ。あの人はもっと静枝の気持ちを考えなきゃいけなかったんだ。……でも、俺

もそうだったんだ。王里神会が俺と亜美を狙ってるって知って、お前だけは巻き込みたくないって思った。……でも違うんだ。大事なことほど、隠しちゃ駄目なんだ。解り合えるまで、ちゃんと話さなきゃいけないんだ……。ごめんな……亜美」

暁は昨日までの自分と、鬼頭火山の姿を重ねた。そして、自分は変わると、決意した。

「謝るのはあたし。暁に協力を頼まなかったら、暁は巻き込まれないで済んだ。巻き込んだのは暁じゃなくて、あたし……」

「運命だよ。この時代に、この街に、亜美は亜美として生まれ、俺は外崎暁としてやって来た。扉を自分で開いて、自分の手で運命を開いてきた。お前から送られたメールが、俺が閉じた運命を開くキッカケだった。お前の言葉が、俺の恐怖を打ち消す支えになった。俺は恨んでなんかいない。亜美に感謝してる」

暁はあの「始まりの日」に見た夢を思い出していた。開いた扉の先には三つの月が輝いていた。

そして同じように輝いていた月夜に、亜美は暁に一つの言葉を送った。それが暁の支えになった。

ふと亜美の顔を見た。すると亜美は顔を伏せた。今度は本当に泣いているみたいだった。

「……ありがとう。……暁が居たから、あたしもこれまで辛いことと戦えたのかもしれないね……」

亜美は、晋也が病院で「自分は暁には及ばない」と話していたのを思い出していた。暁が亜美に救われているのと同時に、亜美も暁に救われているのだと、晋也はあの時気付いていたのかもしれない。

亜美の気持ちが晴れていくと、不思議と空模様も変わってきた。にわか雨は徐々に勢いを弱めていった。

「なぁ、亜美。お前さ、ひとつ忘れてることがあるだろ」

暁の脈略のない発言に亜美は伏せていた顔を上げた。

「忘れてること……？」

「自分で頼んだくせに」

「あたしが暁に何か頼んだの？」
「七月二十一日にな」
それを聞いて亜美は記憶を辿った。そして何かに気が付いたような顔をした。
「……『あたしを神と崇めて』とか？」
亜美は真剣な顔でそんなことを言い出した。
「真顔で言ってんじゃねーよ、そんなボケを」
「あ、これは晋也に言ったんだっけ」
……こいつ、晋也に何てこと言ってんだ……！
亜美が思い出せそうにもないので、暁は答えを言うことにした。
「遅くなっちまったけどさ。用意してたんだぜ。お土産……」
「……！！　ホント！？　暁が！？」
「何で意外そうなんだよ、腹立つな～」
「だって、八月七日にくれなかったじゃんっ」
「昨日渡そうと思ってたんだよ……。神屋が来たから渡せなかった」
「祭で渡そうなんて、ロマンチックなこと考えるタイプだっけぇ？」
亜美は楽しげに言った。
「さしてロマンチックでもないだろ？」
「あれぇ？　もしかして照れてるのかなぁ？　……まぁでも、それもそうなのかな……。……それで、何をくれるの？」
暁は少し照れながらもポケットから、透明のビニールを取り出し、亜美に手渡した。
「うわぁ……何？　スゴい綺麗……」
ビニールの中には、白色半透明の石が付けられたストラップが入っていた。布製の黒い帯に、相応の大きさの石が付けられ、その石は角度によって青みを帯びた輝きを放った。見た目は暁が如月愛から貰ったペンダントによく似ていた。
「水晶……？」
亜美はこちらを向いて、首を傾げた。
「水晶ならもっと透き通ってるさ。それはムーンストーンっていう

半貴石。宝石だよ」
「宝石!?　えっ、ウソ!!　た、高いんじゃない？」
亜美は急に慌て始めた。その様子があまりに可憐だったので、暁はこのまま何も話さないでいようかと、冗談半分に思った。
「俺の叔父さんが、趣味で宝石とか珍しい石なんかを集めてて、この前田舎に戻ったとき、いくつかくれるっていうからさ」
「ふう……そういうことね。……でも、いいの？　宝石なんてあたしにあげちゃって」
「お前あげるためにこの石にしたんだ。月の綺麗なこの街に生まれたお前に……な。まぁ、貰い物なんだけどな」
……叔父さんが「女を落とす時に使え」とか、馬鹿言ってたが、今は忘れておこう。大体、こんなんで落ちる女は絶滅危惧種だろうが。
「……ははッ。暁が宝石ね～」
亜美は足をバタバタと動かしながら、子供みたいに言った。暁は、亜美がこの動作をするときは嬉しいときと暇なときだと気が付いていたので、密かに喜んでいた。
「ちなみに……ムーンストーンは別名、月長石。六月の誕生石なんだ。これにもちゃんと意味があるんだぜ」
「……六月？　あたしの誕生月、六月じゃないよ」
「分かってる。ついでに俺の誕生月も六月じゃないよ」
それを聞いて、亜美は考え込んでしまった。
これ以上雨に打たれて、夏風邪でも引いたら大変なので、暁はすぐに答えを話した。
「俺たちの始まりは、みんな六月だろ？　お前が、暗号解読の協力を頼んできた『始まりの日』も六月。俺たちが初めて話したのも六月。来年の六月には、何が始まるんだろうな……」
「……きっと、大事件があたしたちを待ってるよ」
「ははっ。お前といると、波瀾万丈の人生が送れそうだな」
暁は、引いていく雨を天を仰ぐように見て、言った。

「素敵なお土産をありがと。大事にしてあげる」
亜美はにこにこしながらそんなことを言う。
……こいつは喜怒哀楽がすぐに顔に出る。独りの時は、何考えてるか分からないのにな。
「……さて、そろそろ戻らないと風邪引くぞ。……俺たちには、まだやることがあるはずだ」
「うん。今度こそ、本当の真実をシズに伝えたい。……それから、ついでに日本も救ってあげなきゃね……なーんてっ」
亜美は立ち上がり、軽い足取りでホテルに戻って行った。暁はその後について行く。
空には、真夏の太陽が顔を出し始めていた。

再始動（前書き）

今回、大方の謎は解けてきます。

再始動

ホテルに戻った暁と亜美は、各部屋でシャワーを浴びて、用意していた服に着替え、再び神屋のもとへ集結した。
「さて……と。じゃあこれから、僕の元にメールが届いた後、どういう経緯で現在に至ったか、話そうと思う」
神屋はそう言うと、コーヒーを一口飲んで、軽く深呼吸をした。
「ああ、頼む。このメールの終盤での、俺の名前の登場の仕方に、違和感があったんだ」
暁はテーブルのプリントを指差した。今から数分後には神屋の情報と自分達の情報とが共有される、そう思うといよいよスタートラインに立った心地がする。
「僕は二十一日の晩、あのメールを受け取った。そしてすぐに二十二日、この街にやって来た。そして君たちの通う高校、私立月代学園高等学校に向かった。しかし、タイミング悪く、その日から夏休みになってしまっていたんだ。まぁ、それもありえるとは思ってはいたけれどね」
神屋はメールを受け取ってからの経緯を、説明し始めた。
すると暁がすぐに疑問を投げかけた。
「だが神屋、お前はその後、一度俺を追って田舎に帰って来たよな？」
「ああ。僕は二十二日から、君たちの情報を集めていた。都合悪く新型インフルエンザなんかが流行して、部活動も活動的ではなかったし、なんせあの巨大な学園の生徒から君たちの情報をピンポイントで聞き出すのは困難を極めた。二十五日には、ついに王里神会も君たちの名前が書かれたリストを発表した。だから僕は調査員に立候補して、王里神会の調査をなるべく防ごうとした。そんなことをしている間に、七月も終わりかけていて、僕は焦りを感じだした。

そして、一か八かある賭けにでたんだ」

「賭け？　そもそも何でお前は、同級生の俺をすぐに見つけられなかったんだ？」

「そこが賭だったんだよ、暁。僕は篠原さんの協力者が『トザキアキラ』だとは、メールで知っていたけど、その『トザキアキラ』が、僕の小学校の同級生の『外崎暁』だとは知らなかったんだ。前にも言っただろう？　鬼頭火山に巻き込まれた君がたまたま僕の同級生だったに過ぎないって。漢字表記が判っていれば気付きえたかもしれないけれど、音だけでは同姓同名の人間はいくらでも居る」

　それは、改めて暁と亜美を驚かせる話だった。そんな偶然が実際に起こるとは、到底想像できない。

「えっ、神屋くん。つ、つまり、賭けっていうのは、メールに書いてあった人物が神屋くんの同級生の暁と同一人物だという可能性に賭けて田舎に帰ってみよう……っていうことだったの？」

　亜美は身を乗り出して訊いた。神屋は再びコーヒーを口にすると、穏やかに微笑した。

「そういうこと。僕は暁がこの街に引っ越したなんて知らなかったから、まさに一か八かの賭けだった。だけど、いざ田舎に帰ったら、暁がこの街で一人暮らししてるっていうから、僕は驚いたよ。せっかく田舎に帰ったけど、とんぼ返り。街に帰ったら、今度は暁と篠原さんの関係を探った。王里神会も、君たちの自宅を見つけるのに手間取っているようだったし、君たちに会う前に、情報を収集しておきたかった。そして、八月八日、暁に会った。だが、僕は暁の状態が予想と違うことに気が付いた。メールには『虚構を伝える』とあったし、てっきり暁と篠原さんは既にある程度の情報を知っているものだと思っていたが、暁は驚くほどに何も知らなかった。そこで、僕は作戦を変え、取りあえず暁に仲間として助けてもらおうと考えた。しかし案の定、拒否されてしまった。そこで僕は、暁から鬼頭火山の居場所を聞くのを諦め、篠原さんとの自力での接触を試みた。丁度、その日、別件で訪れた学校で佐藤静枝と会うことが出

来て、篠原さんの自宅も分かった。しかし、その日の晩、ある問題が浮上した」

「問題……鮎川の暗殺か？」

暁は神屋を先回りして答えを出した。

「そうだね。発端はそこにある。鮎川の暗殺が会議で決定したこと。それが僕を焦らせた。しかし、さらに大きな問題が昨日の夕方に起きたんだ。メールにもあった王里神会幹部、藤原が僕にこんなことを言ってきたんだ。『鮎川暗殺が済めば、部下の手が空く。そうなれば重要関係者二人を捕らえることも出来る』と。藤原はいつの間にか暁の自宅の場所を知っていた。つまり、祭りが終わり、暁が自宅アパートに戻れば、藤原の部下によって拉致される心配が生じたというわけだ。それによって、僕は暁を探しに祭りの会場に赴き、無事君たちをホテルに移送することに成功した……」

神屋は「これで全てを話したことになるよ」と言って、コーヒーを一気に飲み干した。

「俺たちがのんきに遊んでたときに、そんな攻防が展開されていたとはな……」

暁は真面目な表情で呟いた。

「何かウソみたいよね～」

対照的に、亜美は他人ごとのような反応を示した。

「僕としては、篠原さんまで何も知らない状態だったもんだから、何を何処で間違えたのか……と真剣に悩んでたんだけどね……」

「ウチら、二人とも何にも知らないけど、大丈夫なのかしら？」

亜美は急に不安になったように、神屋に尋ねた。

「要は、君たちが捕まったとき、安全を確保するための予防策なんだと思う。何も知らなければ、何も話せないわけだからね。だから、鬼頭火山の隠れ場所は必ず君たちが解いた暗号の中に、密かに隠されているはずなんだ。二人に何か思い当たる節は……？」

「皆目見当もつかないな……」

暁は暗号の内容を軽く思い返してみたが、場所を示す何かが隠さ

れているとは思えなかった。
亜美もまた、暁と同じ結論に至り、頭を抱えた。
数分考え込んだが、暁も亜美も、それらしい情報を得ることは叶わなかった。
「……取りあえず、亜美のアパートに行って、暗号をこっちに持って来た方が良さそうだな」
暁は、記憶から何も得られないことを確信し、進言した。
「そうしよう。そうと決まれば、善は急げ、だ。すぐに出発しよう」
神屋もすぐに賛成した。

そうやって、鬼頭火山の最後の暗号を解くべく、三人はホテルを出た。
残された希望を手にするために。

再始動（後書き）

いやあ、センター試験ですねー。
今回以降は予約投稿なんでまだ、去年末なんですけど、未来の僕はどうなってるんでしょうか。
センターは捨てているんですけどね笑

GOD

―1―

亜美の自宅アパートへ着いた三人は、早々に暗号を探し始めた。
「見る限り尾行はない……が、さっさと終わらせよう」
神屋の声が僅かに堅かった。トニーが不在の今、外出は非常に危険なのだ。すぐにでもホテルに帰る必要がある。
だがここは亜美の自宅アパート。暗号を探すと言っても、その在処は亜美にしか知りようがない。神屋と暁は、実質亜美を待つだけだ。
「どう？　ある？」
暁は部屋を見渡しながら亜美に聞いた。
神屋は外の様子を窓から眺めていた。
「これが最後の暗号のテキストデータが入ってたＣＤ」
『パッヘルベルのジーグ』を単独で収録しているＣＤ……。だが中身は暗号のテキストデータだった。
暁は思いついたようにこう言う。
「もしかしたら、そのＣＤに隠されているかもな。あまり詳しくはないが、どうにかすれば、他のデータ……つまり鬼頭の最後の暗号が出てくるかもしれねぇ」
亜美は何も応えずに他の暗号の捜索を続けた。
「神屋、そう思わないか？」
亜美に無視された暁は、窓際でじっと動かない神屋に話しかけた。
「うーん。どうだろう。とにかく、早くここから出ないとね……長居は危険だ」
神屋の言う通りだった。暁も窓の外を覗いてみた。
「王里神会の奴らがここを監視していたとしたら、もう終わりだろ」
「そうかもね……トニーさんがいたら、もう少しは安心してられた

んだけどね」
「彼に電話とかできないのか？」
「できるよ。ただ……」
「何だ」
「さっき……トニーさんからメールがあった。なんか、もう少ししたら来るって」
「はぁ……なるほど。俺らの場所判ってんのかな？」
「……んー」
暁は窓から目を離し、亜美の方を向いた。亜美は直立したまま、何かを考えるような表情をしていた。
「どうした」
「……暗号がいくつか見つかんないんさ。どっかにはあると思うんだけど……もしかしたら捨てちゃったかも」
「ええ！？　やばくね」
「君の頭だって十分ヤバいよ。暁クン」
亜美の言葉で、自分が金髪であることを再認識した暁であった。
「自分の頭髪の色に落ち込んでいる場合ではないぞ。何とか打開策はないのかい。見つからない暗号を頭の中で覚えているなら、それでいいかもしれないんだけど」
神屋が振り返ってそう言った。暁はすかさず反論する。
「待て待て。頭の中で覚えてればいいのか？　まぁ、確かにそうでなければキツい面もあるけどな。例えば、暗号のひとつに、ある哲学書自体に暗号が記されたものがあった。この場合はどうなる？　本自体は不必要なのか？　それとも暗号の内容だけ覚えてりゃいいのか？　勿論、俺は覚えているけどさ。どうなんだ」
苦労して解いた暗号の内容を、忘れる筈もなかった。
神屋は少し考えてから口を開いた。
「実際、今はそんなに焦る必要はない……と思う。その本って、今どこ？」
「確か……図書館に返した筈だ」

「なるほどね。僕たちは本来、こうして外に出るべきではないんだが、状況が状況だからね。トニーさんさえいれば、その本は僕とトニーさんの二人で後日、回収できる。今は……暗号の内容だけで十分だが、間違っていたら話にならない。できれば、記憶よりも物的な記録が欲しい。暁のアパートにないかな？　暗号の内容をコピーした紙とかさ」

「……ああ、残ってる……筈だが……亜美、どれが無かった？」

亜美は即座に答えた。

「八百屋で受け取った暗号がない～。それ以外は全部あるよ。本のヤツはコピーだけど」

「八百屋のヤツ……は、ウチにあるぜ。あれだろ？　ほら……」

「ビブリオテカとかジーグとか……」

「そうそう！　絶対ある！」

神屋が玄関に向かいながら、「暁のアパートに行くよ」と声を張った。

暁の自宅アパートに着き、最初にタクシーを降りたのは神屋だった。亜美の自宅アパートに到着したときも同じで、彼が最初に降りた。暁と亜美には待機していてもらい、神屋が様子を見てくるのである。もしも王里神会の手下が待ち構えていたら、二人には逃げてもらう算段である。その自己犠牲的行動の裏には、無関係な二人を危険に巻き込んでしまったことへの憐れみないしは償い、贖罪の意思が隠遁している。無論、神屋には何の罪もない。彼は二人をただ、無償の愛の心をもって救済しているだけだ。冷静沈着な言動、表情の影には、言葉そのままの優しさが佇んでいる。そのことを、暁も亜美も理解していた。

タクシーの中、二人は無言だった。いつ、どこから王里神会がやってくるかわからない……恐怖心が二人を包んでいた。

「ふぅ……」

暁のわざとらしい溜め息は亜美を振り向かせた。
「こんなことになるなんてな。こりゃ人生最大の思い出決定だ」
そう言って、暁は鼻で笑った。亜美も小さく笑った。「本当だよ」と呟きを添えて。
「しかし、彼が生きてるなんてな……」
「要するに、あの人はアタシたちを利用したってことでしょ？」
「まぁ、そうだろうな」
「……最悪だね」
「……」
「ていうか、気になってたんだけど、あの手紙にあったさ……」
「ん？」
「第三勢力だっけ……」
「ああ、あれか」
「あれって何なの？」
「……さぁ」
「さぁって」
「わかんねーよ。いいか、ちょっとまとめるぞ。王里神会は俺たちを捕まえたい。何故か？　鬼頭の居場所を吐かせたいからだ。要は、鬼頭を殺すのが最終的な目的だろうな。しかしだ、ここである疑問が浮上する。なーぜ、王里神会は俺たちの存在を知っているのか」
「存在……」
「だからぁ、何で王里神会は、『外崎暁と篠原亜美は鬼頭の居場所を知っている』と知っているのか」
「まぁ、まだ知らないけどね」
「とにかく、あっちはそう考えてやがるわけだ。そこで鬼頭は第三者の存在を仮定した」
「んー。あ、わかった！」
「？」
「実は、あの八百屋のおじさんおばさん夫婦は王里神会だったってのは！？　鬼頭は直接、あの夫婦に暗号を記した手紙を渡した。し

かもそのあとアタシと竜司くんは八百屋に行った。だから……」
「待ちやがりやがれ。おばさん夫婦が王里神会なわきゃねーべな。鬼頭は王里神会だったんだぞ！？」
「あ、そっか」
「王里神会に狙われているのに、王里神会の人にイケしゃあしゃあと会いに行って暗号渡してる場合じゃあねーだろう。大体、仮にあのおばさん夫婦が王里神会だとしたら、会いに来たその日の内に上に密告されて、今ごろ鬼頭はマジでフロム・ヘブンだよ」
「ううーん。どうなんだろ。じゃあ……あ、竜司くんが王里神会だったら！？　あ、同じか。上に報告されてアタシたち今ごろ拉致監禁状態？　アハハ」
「笑いごとじゃねぇよ」
「わかったわかった。つまり、アタシたちの出会った人たちの中には王里神会はいないってわけだね」
「そうかぁ……？　わからんけど。もっとよく考えないと」
「誰と出会いましたっけ？　アタシたち」
「……竜司だろ。二宮だろ。ん……二宮光。そういや、あいつなんか……」
「暗号解読で一回だけお世話になったよね」
「ジーグ……いや、じゃなくて。うーん……あぁ！！」
「え？」
「あいっつの、しっ……知り合いが確か王里神会だっ」
「……うそぉっ！？」
亜美が驚愕の声を上げたとき、階段横で手招きをする神屋の姿を暁が捉えた。
「この話はまた後でしよう。さっさと探して終わりにするぜ」

―2―

暗号の記された紙は五分もかけずに見つけることが出来た。
「よし、帰ろう」
神屋と亜美が部屋を出て行こうとする中、暁は机の引き出しに鍵を差し込み始めた。
「何してる」
「ちょっと待ってくれ」
「急いでくれ。王里神会はここが君の住所だと知っている」
引き出しを引くと、暁はそこからある物を取り出した。
「わぁ……綺麗」
亜美に感嘆の声を上げさせる物は……。
「このペンダントがあると、心強い」
殺し屋でありながら現役の女子高生である如月愛からのプレゼント、赤色のペンダントだ。ペンダントには赤色の宝石と思われる石が付けられていて、鎖は綺麗な銀色で宝石の赤色が僅かな光と共に反射して輝いている。廃ビルで見たときと変わらない輝きを放っている……。
「買ったの？」
亜美に尋ねられた暁は、言葉を濁した。
「いや……。早くホテルに戻ろう」
暁はペンダントをポケットにしまった。
視界から消えるまで、亜美の眼差しが赤い綺麗な輝きを捉えていた。
暁はまだ気づいていなかった。このペンダントが、後に二人の運命を大きく変えてしまうということに……――――。

―３―

「光が俺たちのことを密告したとは考えにくい」

走行中、暁は切り出した。
「アタシもそう思う」
亜美は冷静な口調でそう言った。
「光って誰だい？」
神屋が尋ねた。
「うちの学校の同級生だよ。確か暁の隣の席の子」
「その人が何だって？」
「知り合いが王里神会なんだよ……」
暁の声は暗い。
「その知り合いの名前は？」
「知らん」
「光って子が、君たちが暗号ゲームに没頭しているときに鬼頭火山との関係に何らかのルートから気づいたとしたら……怪しいね」
「いや、それはない。関わったと言っても、鬼頭についてはまるで触れていないし、気づくような要素自体無かった筈だ」
「アタシもそう思う」
「まぁいい……とりあえずその子にはこれから注意してくれ。一応ね」
「まぁ……ぜってぇ無いと思うがな。俺は」
「一応だよ。一応」
「わかったよ」
――――ホテルに着くと、見覚えのある人物が暁の目に入った。
玄関口で、大きな荷物を持って佇んでいる。
「ねぇ……なんか外人がいるよ」
亜美が不安げに言った。
「いや、心配要らない。彼は仲間だ」
神屋は安堵のため息をつきながらそう言った。
「ハジメマシテー。トニーデス」

ホテル「Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ」十四号室に響いたのは、どこかイントネーションの合わない日本語だ。日本語を覚えたての外国人の喋り方を忠実に再現している。
「は……初めまして～。亜美です」
「ワタシハコレカラアナタト暁サント神屋サンヲ護衛スル者デス。宜シク願イマス」
「よ……宜しく」
亜美とトニーが自己紹介している最中、暁と神屋は暗号に不具合がないかを確認していた。
「大丈夫だ。全部ちゃんと揃ってる」
「そうか……ならいいんだけど」
「はぁ……とりあえずはやることやったな……」
「そうだね。あとはこれらの暗号から鬼頭火山の居場所を特定すればいい」
「……どうにも思いつかんな」
「何がだい？」
「本当にこれらの暗号から鬼頭の居場所が特定できんのかな？」
「それこそやってみなくちゃね」
「いや……だって考えてみろよ。この暗号は最終的に、二つの答を持っていたことになるんだぜ？　まずひとつは『夜光公園』……もうひとつは鬼頭の居場所。俺や亜美が後者の答を導き出してしまっていたら、どうするつもりだったんだろう？　彼は」
「その場合、君たちは度肝を抜かれていたことだろうね。死んだ筈の彼に遭遇するのだから」
「ああ……見た瞬間気絶するかもな」
「――――多分、後者の答を導き出すことはできないように仕組まれていたんじゃないのかな」
「！」
「大体において、この作戦は僕と君たちが接触しなければ話が始まらない。つまり、僕がいて初めて解ける暗号になっている可能性が

高い」
「……そうか！　多分そうだ！」
「僕には判り、他の人には判らない何かが隠されているんじゃないのかな……その暗号には」
「それなら合点がいくな」
暁は口元をニヤリとさせ、神屋を見た。
「ぜってぇ解いてやろうぜ！　なぁ！　神屋っ」
暁は大声で言い放つと、ベッドに勢いよく倒れ込んだ。祭りの日から眠っていなかった疲労がここにきてピークに達したようである。暁は気持ちよさそうに寝息を立て始めた。
夕方が近づく――。
亜美と談笑していたトニーの肩を神屋が軽く叩いた。
「神屋サン。スイマセンデシタ」
「どこ行ってたんですか」
「大事ナ用ガアリマシタ」
「……しっかりして下さいよ。僕なんかはいつ死んでもおかしくない状況にあるんですからね……」
夏祭り当日の藤原との会話を忘れたわけではない。藤原は神屋を完全に疑っていた。あのとき拘束されなかったのは幸いだった。トニーは床に置いた大きなバックに目を泳がせた。
「次カラハ注意シマス」
「頼みますよ。ところでひとつ気になることがあるんだけど」
「ハイ」
「昨夜、ここに来た二人組についてなんだけど……あれは？」
「アノ死体デスカ」
「……うん」
「ワカリマセンネ。目的ヲ吐カセルコトハデキナカッタノデ、アシカラズ」
「大丈夫かな……？　もし仲間がいたら……相当ヤバイんじゃ……」
近くに座って聞いていた亜美は、我慢しきれなくなって聞いた。

「死体って何？」
「いや、実は……ここは一度襲撃されたらしい」
「……え……」
「……」
「嘘でしょ？」と言いたげな表情で亜美は目で神屋に訴えたが、神屋は目を伏せた。
「襲撃って……」
今一度、自分たちが狙われていることを再認識した亜美であった。
「安心シテ下サイ。ワタシガツイテイマス」
トニーの声が、亜美の胸中に響いた。トニーは床に置いた大きな荷物を見てこう付け足した。
「イザトイウ時ハ、ワタシヲ見捨テ下サイ。ワタシハソノタメニイマス――――」
……――――日は完全に落ち、窓から見る外の世界は、薄暗い。
世界の終わりを予感させるようなどこまでも続く空の向こうに、果たして神は居座っているのだろうか……。夜空をコウモリが横切った。
暗闇の世界を眺めて、亜美はそんなことをしばしば考えた。
話し合いにより、行動に移るのは明日からになった。今日は暁も神屋も疲れ切っているからである。
神屋はコーヒーを片手にテレビを眺めていた。
亜美も一緒になってテレビを眺めている。トニーは一人でチェスに勤しんでいた。
亜美はもう一度窓に目を移した。空の向こうはさっきよりも薄暗い。
……人生とは何なのか。
亜美は思った。こうして、黄昏ゆく世界の夜の断片を眺めていれば、いつかきっと人生の意味を知ることができると……。しかし、それはただの幻想だった。

神屋がテレビを消す。
「夜がやってきたね……」
窓の外を眺める亜美を見て、神屋はそんなことを言った。窓から吹き込む風が、艶のある亜美の髪を悪戯に揺らした。
「今夜は涼しい風が吹く。夏だということを一瞬忘れてしまいそうなくらいの涼しい風が……」
神屋の独り言のような囁きに、トニーが顔を上げた。
「神屋サン……神屋サンハ……神ヲ信ジマスカ」
神屋は応えず、ただ微笑みを作るだけだった。
トニーは諦めて下を向いた。彼の眼前には、盤上の激しい闘いが繰り広げられている。キングを動かすその指は、まさしく盤上の駒にとっての神の導きに他ならない。生かすも殺すも、神の気まぐれ次第である。
「神……か」
トニーの耳に神屋の小さな声が届いた。
「いると思うよ」
神屋は平然と語り出した。
「例えばそうだな……小説だ」
亜美には神屋の発言の意味が理解しかねた。人生を小説に例えているのだろうか。
「僕たちのいるこの世界は……もしかしたら、小説なのかもしれない」
亜美は夜空を窓から眺めながら、じっと神屋の言葉を聞いていた。
「……誰かが書いているんじゃないかな……、『神屋は言った』とか『トニーは床でチェスをしている』とかさ。考えられなくはないだろう」
そんなことを言って、神屋は窓に振り返った。
「神は案外、気まぐれな高校生かもしれない」
亜美はその発言に興味をそそられた。神屋の瞳に視線を送る。
「きっとこんな物語を作るのは、宿題に追われてて、人一倍気まぐ

れな高校生に決まってるよ」
「何故デスカ？」
ここにきてようやくトニーが口を開いた。トニーは大抵、いつも薄ら笑いを浮かべている。
「僕たちは、普通に人生を送っている他の人たちに比べて非常に忙しいだろう。だから作者も忙しい」
「……それって神屋くんらしい答じゃない気がする」
亜美も会話に参加した。
「ワタシモ亜美サント同意見デス」
神屋は身を乗り出し、テーブルに肘をついてこう言った。
「作者はきっと、心の寄りどころが欲しいんだ。忙しい毎日に疲れ果て、恐らく人生に絶望した。だから物語を作り上げた。そこに自身の存在理由を見いだしているに違いない。いわば執筆活動は彼の生きがいだ」
「……ふうん。神屋くんにしては、突飛な仮説だね」
「彼ト言イマシタガ、女性デアル可能性ハナイノデスカ」
「男だね……そして言うなれば、作者は二人だろう」
「？？　……なんで？？」
「二人……デスカ」
神屋は椅子に寄りかかり、腕を組んだ。
「まず……大した名声もない矮小な存在と言ってもいい高校生が、一人でこんな長々と物語を構築していける筈もない。物語をある程度書いたら、もう一人にそれを見せてる筈だ」
亜美もトニーも、何が何だかわからない様子だ。
「そして見せられたもう一人の作者は、その続きを書く」
ここで亜美は疑問に思ったことをぶつけてみた。
「二人で考えて書いていくんじゃないの？」
すると神屋は声を荒げて笑った。
「今の篠原さんの発言をどう思う？　トニーさん」
トニーはすぐに答えた。

「ソレデハ書イテイテ面白クナイ気ガシマス」
「……その通り！　それじゃあ書く意味がない」
「ふーん。そうかなぁ」
亜美はトニーと神屋の考えに納得いかないという様子である。
「じゃあさじゃあさ！　何で男なの!?」
「……んんん」
「……」
「……うーん」
「分かんないの?」
「……いや、普通、主人公が男なら、作者も男かなって……まぁ、突き詰めればカンかな」
亜美は数秒考えた。
……主人公が……男??
「……まさか……このお調子者めぇ！」
亜美は突然ニヤニヤしてそう言った。
「ん?　お調子者?」
神屋はハテナマークを頭に浮かべた。
「この物語の主人公は、何も神屋くんだなんて、決まったわけじゃないんだからねっ」
そう言って亜美はニコニコしている。
トニーも笑っている。
「ああ……なるほどなるほど。そういうことか。ふふふ。だけど誤解しないで欲しいなぁ……何も、僕だって、僕が主人公だなんては言ってないんだからさ……」
神屋は不敵な笑みを浮かべた。亜美とトニーの顔が曇る。
「この物語の主人公は僕じゃあないよ……」
「え?」
神屋はベッドルームの方に顔を向けて、こう言い放った。
「今、ちょうど夢の世界にいる人さ」
十四号室には、今日金髪デビューした男のイビキが気持ち良さげ

に響いていた。

ｄａｒｋ　ｎｉｇｈｔ（前書き）

今回はなかなか迫力がありますよ。
相方の担当なので、僕も読者として楽しませてもらいましたｗ

dark night

―1―

「久しぶり……」
「ああ」
とある高級レストラン。月明かりが眩しいこの夜、平沼凛と上條誠也は会う約束をしていた。
高級レストランということもあり、二人は服装をわきまえた。上條はスーツ姿、凛はあまり派手ではないが、地味でもないドレス姿だ。二人とも静かだった。
「……」
初めは無言だった二人も、料理が運ばれてくるにつれて次第に口を開き始めた。
「最近どうだ？」
「……どうも」
「……」
二人は酷く落ち着いた表情で料理を口に運んだ。噛む動作もとりわけゆっくりとしている。
「旨いな」
「うん……」
他愛のない会話だった。
二人とも、まだあまり目を合わせていない。
……――――二人が付き合い始めたのは、去年の春のことだ。バイト仲間として知り合った二人は、互いの外見的魅力に惹かれ合い、まさに川の水が上流から下流に向かって流れるが如く当然のようにして付き合い始めた。二人は強く愛し合った。
狼のような静寂を醸し出す、鋭い上條の目を凛は愛した。
……素敵な目。

凛は上條の両目を見つめ、よくそう呟いていた。
「そういえば……」
「ん？」
「あんたが入ってる宗教団体はいつ革命を起こすわけ？」
「もうそろそろだ」
「何するの？」
「……テロだ」
「！？」
「……このことは口外するな」
「嘘でしょ」
「いつどこで行われるかは後でメールする。決して行くなよ」
「……」
「巻き込みたくはない」
「何をする気？」
「何をするかまでは教えられない」
凛は言葉を失った。
上條に対して軽蔑の感情を抱いたのは、これが初めてである。
「嘘でしょ……やめてよ」
「俺は教祖の考えに同意した。このテロは起こすべきだと悟った」
「嘘でしょ？　……人が死ぬんじゃないんでしょ？　ねぇ……」
上條は目を伏せたまま、何も言わない。
「そんなことやめて」
「最初は俺だって反対した。だがあの御方の、教祖の言葉を聞けば、お前だって納得すると思うぜ」
「……本気じゃないんでしょ。犯罪に手を染めるようなことは絶対にしちゃいけない。わかってるの？」
「……」
「……あたし、怖いよ。誠也がそんな風になってしまっただなんて思いたくない。あたしたちは別れたけど、これは人として当然の意見……変なことはしないで」

「落ち着けよ」
「とにかく、テレビに出るようなことはしないでよ。そんな人と付き合ってただなんて思われたくないし……」
「大丈夫だって……そんなに心配するな」
「心配してるわけじゃないけど」
「……」
「やめてよ……犯罪を犯すのは」
「誰も犯罪を犯すとは言ってないだろう」
「もう少し小さい声で喋ってよ。周りの人に不審がられるからさぁ」
「わかったよ……」
「……前々から言おうと思ってたけど、その変な宗教から脱会したら？　あんたが王里神会に入ってさえいなければ、今頃あたしたちは別れてなんかいなかったんだし」
「……かもな」
「かもなって何？　絶対そうでしょ？　その右目の傷だって……失明することは無かったんじゃないの」
「フッ……」
「笑って誤魔化すの？」
「お前と口喧嘩するために高い金を払っているわけではない」
「別にワリカンでも構わないけど」
「口数の絶えないところは昔のまんまだな……」
「うるさいな」
凛は小さく笑った。
上條も微かに微笑んだ。
「あのときのことは今でも忘れられないよ……忘れたくてもね」
「酒飲むか？　中学の頃、たまに飲んでたんだろ？」
「……要らない。あと、やっぱあんたが全部払って」
「飲めって。一緒に酔おうぜ」
「そうゆうところは変わらないね」
「……」

「あたしまだ高校生だから遠慮しとくよ。お酒はさ……」
「中学の頃は飲んでたくせにか」
「あんたの前じゃあ、一回も飲んだことないんだよ」
「そうだっけか。つうか、あのときのことって……もしかしてあれか？」
「そう。あれ」
「……」
「あれは一体誰だったの？」
凛は聞きながら上條の左目を覗き込んだ。
「……あれは」
「友達には見えなかった」
「あれはな、要するに」
「要するに？」
「要するに敵だ」
「はぁ」
「信じてないな？」
「わかんない」
「奴はな、王里神会の敵だった。昔のイザコザ相手」
「ふうん」
「奴のせいで俺は右目を失った……」
「そんときのあんたのセリフ、未だに一字一句覚えてる」
「……言ってみろ」
「俺といると危険が及ぶ。別れよう」
そう言って、凛は笑った。
「ああ言うしかなかった」
「映画かっつうの」
凛はわざとらしく言ってみせた。上條はグラスの水を飲み干して、大きくあくびをした。
「言っとくけどね……」
「ああ？」

凛は何食わぬ顔をして、言葉を止めた。言うのを躊躇っているかのようでもある。
「なんだよ」
「……泣いたんだから」
「？」
「あんたがそう言ってどっか行ったあと、あたし一人で泣いたんだよ」
「……」
上條は不器用に頭を掻いた。
「なんか言葉はないの？」
「……すまない」
「……」
「……すまなかった」
「謝ってほしくなんか……ない。でも……いいや、もう。あんたには何も求めてないからね……あたし」
「……そうだな」
「馬鹿みたい」
「ほんとだ」
「ほんと」
「……」
その後、しばらくして二人はレストランを後にした。それぞれの帰路についた……。二人とも、幸せだった過去をぼんやりと思い返していたのだった。

―２―

ホテル「Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ」十四号室。夜九時。
そこには暁のイビキを無理やり聞かされる神屋、亜美、トニーの姿があった。

「さて、篠原さん。どう見ても眠そうなんだが……寝るなら十五号室で寝てくれよ」
「……なんで？」
亜美はテーブルに顔を突っ伏して眠たげな声を発した。
「なんでって……あの部屋は君の為に用意した。ちなみに言っておくが同居人はトニーさんだからね」
「……ええ？」
何やら小さな黒い精密機械のような物を持って部屋中をうろつくトニーの方を亜美は向いた。何をしているのか聞いたが、教えてはくれなかった。
「女性というのもある……。暁は僕がなんとかするさ」
「神屋君てそんな強かったっけ？」
「暁を逃がす足止めくらいなら……」
「ふうん」
「まぁ、とにかく君はトニーさんと一緒に十五号室だよ」
「うん、わかった」
そう言って、亜美は立ち上がった。
「じゃあ行こう。トニーさん」
亜美はトニーに呼びかけた。
トニーは立ち上がり、大きな荷物を肩で背負うと、抑揚のない平坦とした声で言った。
「亜美サンノ安全ハ、ワタシガ保証シマス」
二人は部屋から出て行き、神屋は眠っている暁と二人きりになった。
次第に暁のイビキも治まり、部屋には漠然とした静寂が流れ始めた。
神屋は立ち上がり、冷蔵庫からコーラを取り出した。並々とグラスに注ぐ。
氷を入れると、ピキピキという特徴的な音が響いた。そして、一際強く氷が音を鳴らしたとき、神屋の携帯が着信音を響かせた。

――――プルルルルル
「はい。もしもし」
「神屋の旦那ですかい」
電話をかけてきた主は、今日の朝、世話になった死体処理屋の男であった。
「そうです」
「報告しとかなきゃならないことがあります」
神屋は一瞬、その声に内心身構えた。嫌な予感がしたのだ。
「今朝の仏二つについてなんですがね……、旦那、悪いことは言わねえ。早く逃げなぃ」
「……どういうことですか？」
男は数秒の間を開けてから、弱くため息をついた。
電話越しであったが、相手に同情するかのような念さえ感じ取れるため息だった。
「ありゃあ、ロン・クーリンと長老ですわ」
「……ろ……ロン・クーリン？　……まさか……」
神屋はその名を聞いたことがあった。嵐の如く暴を振りかざすその男は、裏世界でも「生きる伝説」と評されるほどの腕前を持つ、屈指の殺し屋だった。
「そんな大物が……」
神屋の額にはじんわりとした汗がにじみ出てきていた。
「ロン・クーリンの方は聞いたことがあるみたいですねぇ。奴が死んだとなれば、殺し屋界は動きますぜえ……」
「長老も知っています。裏世界では割と有名な御方ですよね。顔は実際に見たことは無かったのですが……。あれが長老だったとは」
神屋は驚きを隠せないでいた。
「昔は悪さばかりしてましたからねぇ。あのオヤジは。十五年程前から静かになったかと思いきや、近年になって行動が活発になったと聞きましたが……。今回の件には何か心当たりはありますかい？」
「……いや、こちらが聞きたいくらいですよ。一体どうなっている

のか」
「殺し屋界の長老、板垣権三郎……。奴を慕ってる部下は多いですよ。殺されたことが知れたら、旦那もただじゃあおかれないかも知れませんぜ？」
「……」
「権三郎が殺し屋界で名が通ったのにはちゃんとわけがあります。奴はいわば、仲介者ですわ。殺害を依頼する者と殺し屋を繋ぐ、重要なパイプの役割をしてましたからねぇ。しかも親子二代に渡ってですよ。殺し屋たちとの絆は深い。『殺しを決めたら権三郎』とまで言われたほど。権三郎は一般人との交流も幅広かった。恐らく、奴の部下が殺し屋を雇い、復讐を始めるはずですよ」
「……復……讐」
「気をつけてくだせぇ、旦那」
「はい……。気をつけます。ところで、あっちの方はどうですか？」
神屋は死体を処理してもらうのと一緒に、肩に付いていた盗聴器のようなものも預けていた。
「あれもなんだかわかりましたよ。あれは小型盗聴器でありながら、発信器でもある優れものですわな」
「発信器……」
「物騒な世の中になりましたわ。まぁ、あっしらの言うセリフじゃありませんがね」
神屋は礼を言って電話を切った。

―３―

夜の十時を回っても神屋は眠りに就こうとしなかった。整理しなければいけないことがいくつかあったからだ。
神屋はソファーに腰掛け、鬼頭が書いたと思われる「フロム・ヘブン」を手に取った。気になっていた箇所に目を通していく。

……しれないが、Kの他に、機密データを狙うものがいるのだろうか……

……私たちをあえて泳がせ、機会を見て、アンチマターと王里神会をまとめて消してしまおうなどという考えを持ったものが存在するのか……

……第三勢力」の成長に、三島が死んだ時に感づいた……

……得体の知れない何者かが、この勝負に介入しようとしている……

「……」

文を読む限り、「フロム・ヘブン」の書き手は「第三者の存在」をV事件の登場人物として推理しているようだった。

神屋は呟いた。

「得体の知れない何か……」

現時点で、神屋にはわからないことが二つあった。世界屈指の殺し屋ロン・クーリンと殺し屋界のパイプ役、長老、板垣権三郎がこの部屋を訪れた理由。そして、肩に付いていた盗聴発信器の出どころとその目的だ。

……冷静に考えればわかるはずだ。

神屋は自分自身にそう言い聞かせた。盗聴器のことをよく思い出してみる。あれが付いていたのはいつからだったろうか？

気づいたのは八月十日の朝、つまり今朝だ。上條に言われて、神屋は自分の肩に盗聴発信器が付いていることに初めて気がついた。上條がこう言っていたことを思い出す。

「気になってたんだがよ。会議中ずっと」

……つまり、付けられたのは会議が始まる前か。

神屋はさらに推理を押し進める。

会議から遡っていくと神屋のいた場所は、本部ビルに向かうタクシー、この部屋、ホテルに向かうタクシー、夏祭りの開催地となる。

……夏祭りの会場に行く前は暁のアパートで藤原と会話をした。

神屋は一瞬、自分の肩に盗聴発信器を付けた犯人は藤原ではないかと考えたが、すぐに違うということに気がついた。藤原が神屋の肩辺りに接触するような場面はどこにも無かった。

……やはり、有り得るのはあそこか。

神屋は、ロン・クーリンと板垣権三郎の訪問から答えを導き出した。あの二人は一体どのようにしてこの場所を知ることができたのか。答えは簡単だ。

……盗聴器の情報をたよりにしてここに来たに違いない。

神屋は夏祭りから帰る途中、暁に行く場所を声に出して告げていた。

それを盗聴してホテル「Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ」に来たのだろう。だが、二人は先に来ていたトニーに殺された。これが事件の真相だ。発信器の機能も持ち合わせていたのは、恐らく保険をかけるためであろう。

神屋は大体の考えをまとめていった。

しかし、引っかかる。

……二人の目的はなんだ？

「……」

盗聴発信器を付けられた場所は、まず間違いなく夏祭りの会場だ。人ゴミの中、何度も人とぶつかったのを神屋は覚えていた。肩に何かが付けられたとしても、気付くことは困難な状況であった。それに神屋は焦っていた。藤原よりも先に暁を見つけなければならなかったからだ。これらの事実から、裏で糸を引いているのは藤原である予感はするものの、神屋はまだ確信できなかった。そもそも、仮に藤原が盗聴発信器を付ける手引きをしたと考えても、おかしな点は幾つかあった。

そうだとしたら、ロン・クーリンや板垣権三郎がやってくる筈はないのである。

藤原が盗聴発信器を神屋に付けさせたのだとしたら、その理由は恐らく納得できるものだろう。藤原は神屋が王里神会に対して反対派であることを少なからず知っている。今回のV事件に至っては、神屋は重要関係者の外崎暁と過去に繋がりのある同級生でもあった。外崎暁をかくまっているのでないかと疑われるのは、藤原の洞察力からして仕方のないことである。それ故に、盗聴発信器を神屋に仕掛けるのは納得できる。暁との関係を探るためだ。

しかし、問題はその後だ。

神屋は自身に盗聴器が仕掛けられているなどとは全く思わず、暁と様々な会話をしてしまう。その内容を王里神会側に聞かれた時点で、神屋は裏切り者だとバレるわけである。神屋に付けられた盗聴器には発信器の機能も備わっているので、神屋を見つけて抹殺するのは簡単なことである。

だが、神屋は未だに抹殺されていない。一人で夜中に王里神会本部にまで行ったが、殺されたり、拘束されることもなかった。本部で会議にまで参加していたのだから、拘束するチャンスは余るほどあったはず。

……つまり、僕は王里神会に裏切り者だとバレているのに、泳がされているというのか？

だとしても理由がわからない。王里神会のV事件に関しての目的は、機密データを鬼頭から奪回し、彼を殺害することである。しかし、肝心の彼の居場所が分からないから、その居場所を知っているとされる外崎暁と篠原亜美を拘束しようと動いているわけである。

しかし、ここでもさらに疑問が浮上する。外崎暁と篠原亜美は鬼頭火山の居場所を知っていると、どうして王里神会側はつかんでいるのだろうか。

神屋はもう一度「フロム・ヘブン」に目を通した。

……私はその存在に、「第三勢力」の成長に、三島が死んだ時に感づいた……

第三勢力……。

神屋は直感した。全ての答えは、この第三勢力が握っていると……。

つまり、第三勢力は方法は定かではないが、外崎暁と篠原亜美は鬼頭火山の居場所を知っているということに気づいたのである。

しかし――――。

神屋は顔をしかめた。

……本来、そのことを知っているのは、メールを受け取った僕と送り主の鬼頭、その二人だけであるハズだぞ……!?　情報が漏洩する余地はなかった筈である。ここで神屋は、気になっていた箇所をもう一度見た。

……れだけのことを、あれだけスムースに実行するには、予知能力でもなければ不可能だ。

敵は私たちの行動を、正確に読んでいた。いや、知っていた……

神屋の中で何かがはじけた。この文章の中で、絶大な影響力を持つ言葉が神屋の中で揺らめいている……。

それはまさしく、インスピレーションでもあった。

「……予知能力」

もしも、もし仮に、第三勢力が予知能力を携えていたとしたら？

全ての答えに明確な理論が発生するだろう。

外崎暁と篠原亜美は、後に鬼頭火山の居場所を知ることになる……。そうわかったとしたら、王里神会は暁たちを捕まえようとするだろう。

……いや、しかし、何故なんだ？　何故僕は殺されない？　まさか、盗聴発信器を僕に仕掛ける手引きをしたのが……。

藤原ではなく、第三勢力だとしたら……。
「その可能性は高い」
……いや、待てよ。もしそうだとしても、第三勢力の目的は何なんだ？
神屋は頭を抱えた。
……ロン・クーリン。板垣権三郎。
ま――――まさか！！
「そうか……！！　あの二人は第三勢力か」
二人は王里神会と接点も交流もないことを、神屋は知っていた。
だが、それにしても、何故二人がこの部屋に来たのかはわからない。誰かに会いにきたのであろうが、それが何のためなのかわからない。
神屋は顔を両手で覆った。
「……ふぅ」
……明日、暗号を解くために体力を残しておかなきゃな。それにしても、フフ、予知能力か……そんなものがでてきたら、太刀打ちできるはずがないなぁ……。
神屋は電気を消して静かにベッドルームに向かった。
……またあとで考えよう。
神屋は暁の眠る隣のベッドに崩れた。神屋は目を閉じた。次第に世界がまどろみ始めたのを楽しんでいた。
……神よ。いるならば、いるならば……。
神屋は眠りに落ちてしまった。
真っ暗な十四号室に静かな寝息がたった。

―４―

神屋が眠りについた頃、ホテル「Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ」の周辺では、夜の暗闇に潜む醜悪な男たちが不気味に笑みをこぼしてい

た。十四号室を外から監視していた彼らは、部屋の電気が消えてターゲットが眠りについたと判断した。

男の一人が携帯電話で話し始めた。

「セシル様……。ターゲットのいる部屋の電気が消えました。恐らくは眠りについたと考えられます」

電話の向こうでは、セシルが何食わぬ顔をしていた。

……主とロンを拘束しているとしたら、部屋の電気は消さないはずだ。わざわざ暗闇を作る必要はない。

「まだ突入するな。罠かもしれない」

「ではいつ行きますか？」

「まだだ……。もう少し様子を見よう」

「はい」

「……一応聞いておくが、今、全員で囲んでいるのか？」

「はい。司令官の私を含めた十一人がホテルを囲んでいます。二人一組で……」

「よし。その中に手練れは何人いる？」

「……一人は、以前軍人だった武田という男。あと、特殊部隊上がりの今川という男。その二人ですね」

「相手は少なくともロンを上回る相当のやり手だ。心してかかるよう命じろ。失敗は許されん」

「はい。必ず二人を救出します」

―5―

ホテルに侵入したのは四人。元軍人の武田。柔道経験者の近藤。現役のキックボクシング選手である宮寺。そして、特殊部隊に所属していた経験を持つ今川だ。四人とも武器は所持していない。

「つべこべ言っている暇はない。すぐにでも突入するぞ」

武田が鬼の形相で言った。

すると、宮寺が悲願の表情を浮かべ、武田に迫った。
「……待ってくれ。ま、待ってくれないか？」
「何だ」
「俺には……妻も子供もいる。頼む……頼むから……降ろさせてくれ！」
宮寺は自分よりも一回り体の大きい武田に、泣いてすがる思いだった。
自分はまだ死にたくない。宮寺は武田に必死で訴えていた。武田の服を掴み、目に涙を浮かべてわめいた。
「……いい加減にしろ！！」
武田の図太い声は、聞く者を震え上がらせる響きを持っていた。宮寺は大人気なく涙を流すばかりだ。
武田は宮寺の襟元を両手で掴むと、彼の顔をグッと自分の顔のすぐ近くに引き寄せた。
「もう我々は引き返せない……！！」
「……ふ……う……う……」
「お前はそれでもKの信者か！？　結局、我々のしていることは全てKの為なんだ。突き詰めればな……。いいか、死など恐れるな。我々はKの配下、命令に従うだけだ」
「……は……はい」
武田は宮寺を乱暴に突き放すと、他の二人に向かって言った。
「今川、お前は十四号室に行け。ロンと板垣権三郎を救出するんだ。近藤、お前は俺と宮寺の三人で今から十五号室に突入する。気を引き締めろ」
今川の額には一筋の汗が流れた。
「罠があるかもしれない。お前ならなんとかなると思うがな……気を付けろよ」
武田は今川の目を見て念を押すように言った。武田がこの中で一番信頼しているのは今川だった。だからこそ今川を一人で行かせることにしたのである。

「……フゥッ……フゥッ！！」

宮寺は半ばパニック状態に陥りながらも、必死の剣幕で十五号室の扉を睨みつけている。その様子を見て、近藤は唾を呑み込んだ。

ホテルは異様な静けさを醸し出している。特にその色が濃いのは、目の前にある十四号室と十五号室の周辺だ。未開の洞窟を思わせる不気味さが漂う……。

「行くぞ」

武田は十五号室のドアに手をかけた。

「鍵が掛かっている」

「鍵？」

「うぉえっえぇ」

宮寺が嘔吐したのは、極度の緊張からだった。

武田は一旦ドアから離れた。

「近藤、三つ数えたら、ドアを蹴破れ……いくぞ。一、二、三！！」

近藤と武田は同時にドアを蹴った。思ったより大きな衝撃はなく、ドアは壊れた。外から中が伺える状況になった。

「……！」

部屋の中から、実体なき悪風が静かに吹いてきた。

その冷たい空気が武田の肌を触れたとき、命を賭す覚悟をしていたはずの彼の心は一瞬怖じ気づいた。そのことに武田自身が最も驚いた。

無意識に彼の手は震え、それを見た近藤の額にも大量の汗が噴き出していた……。

「……あ、悪魔がいる」

宮寺は廊下でひざまずきながらそう言って笑った。

真っ暗で、恐ろしい邪気の垂れ流れる十五号室を見つめ、武田は言った。

「近藤……行け」

「ヒヒヒヒヒヒ」

宮寺が涎を垂らしながら金属音的な笑い声を漏らした。

近藤は慎重に部屋に入っていく……。
その近藤の後ろ姿を見ながら、絶望的な表情をする今川は、とうとう覚悟を決めたようにしてドアから離れた。
「……みんな死ぬ」
宮寺は何かをブツブツと呟いている。その光景を傍目に、今川は十四号室のドアを蹴破った。
「立て」
武田に命令された宮寺は、ゆっくりと立ち上がった。
「行け」
「ひ……ひ」
宮寺はスゥーッと、音もなく十五号室に入っていった。
その頃、近藤を包み込んでいたのは、全身が凍りつくほどの恐怖であった。だが、柔らの道を堅く信じる近藤は、歩を止めることなく部屋の奥へと進んでいった。
張り詰めた空気。殺すか殺されるかの闘い……。勿論、近藤には初めての経験である。リビングにたどり着くと、近藤は電気を点けた。
「……」
まばゆい光が近藤の視界を一瞬遮った――――チュンッ！
……音がして、近藤は倒れた。彼が最後に感じ取ったのは、頭蓋骨への超局部的な衝撃だった。つまり、近藤は脳を撃たれれて死んだのだ。
「うッッ」
その一部始終を宮寺は見ていた。
「武田さんッ！！　いました！！　ヒットマンです！！」
宮寺は叫んだ。
武田はその声を聞いて入室してきた。
「どこだ！？　そいつは！！　俺がひねり殺してやる！！」
「近藤が撃たれました！」
「物陰に隠れろォ！　死ぬぞ！」

宮寺は壁に貼りつくようにして息を殺した。
武田は堂々とリビングに入り、倒れた近藤を見下ろしてから辺りを見回した。
「……ふぅ……ふぅ」
「武田さんッ」
「静かにしろッ」
武田がベッドルームを凝視した。
「……」
「武田さんッ……！」
「……ベッドルームだ」
「！！」
「……奴はそこだ」
「……どうします？」
宮寺は武田と離れた所で壁に身を預けていた。
武田はしゃがんだまま、真っ暗なベッドルームをただただ見ている。
「武田さん……銃がないと無理です！　死にます！」
「……ふぅ……ふぅ……！！」
「……ッッ……！」
「おい！！　そこにいる男！　板垣とロンはどうした！？」
武田に直接トニーの姿が見えたわけではなかった。武田はベッドルームからの気配を感じ取り、声をかけたのだ。
「……板垣とロンはどこだ！？」
トニーはその質問に応えることにした。
「十四号室デス……」
「！！！！」
無論、それは嘘だった。
既に二人は死に、死体は処理された。
「……貴様は誰だ！」
「……ヒットマンデス」

「殺し屋か……！　わかった！　取引しよう！　こちらはお前に手を出さん……代わりに、板垣とロンを返せ」
「ワカリマシタ」
武田は立ち上がり、早足で部屋を出た。宮寺を見ると、武田は強く言った。
「お前はここを見張っていろ」
「……はい」
トニーは暗いベッドルームで拳銃を手に佇んでいた。彼のもう片方の手に握られているのは……。
武田は勢いよく十四号室に入ると、戸惑いを隠せない様子の今川に出くわした。
「あ……ぁ……」
「どうした!?　二人はいたか!?」
「い、いま……せん」
「バカな！　いるハズだ！」
「探しましたがいません！」
「ちゃんと全部探したのか!?」
「全て確認しました。どこにもいません……ただ……」
「ただ？　なんだ?」
「ただ……おかしな物が」
「何だ?」
――――チュンッッ
「!?」
……ドサッ
「何だ……?」
武田が首だけで振り返った。今川の息遣いが荒い……。
「……宮寺」
「敵は……」
――――ドオォンッッ!!
「うっああ」

「オオオオ」
爆発が起こった。
十五号室だ。
突然の事態に、今川と武田は慌てふためいた。
「な、なんだあ」
「隠れるんだ！　早く……！！」
二人はベッドルームまで退いた。
「何があった……」
「爆発……」
「宮寺は無事なのか！？」
「わかりません……」
「……ハァ……ハァハァ」
「……！！　まさかぁッッ」
今川は飛び上がった。
「何だ？　どうしたッ」
「……あれは小型の爆弾だったんだ！！　逃げろ！」
――――ドドドドォォンンッッッ
……トニーが片方の手に持っていたもの、それは超小型爆弾のスイッチであった。
トニーは二部屋が炎に包まれるのを見ると、荷物を背負って早々にホテルから出て行った。

――爆発が起こったちょうどその頃、高木の車の中では簡単な自己紹介が行われていた。
「――――……名前は高木海。海って書いて『カイ』と読むんだ。まだ二十二歳。周りにはもう少し老けて見えるらしい」
そう言って、夜の街を走るドライバー高木は笑ってみせた。
「俺は王里神会ではないけれど、神屋とトニーの仲間だよ。だが……昔は王里神会の幹部だった。随分前に脱会した……」

暁も亜美も黙ったままだった。無理もない。二人は精神的にかなり疲労していた。

助手席の神屋が口を開く。

「高木さんのことは言ってなかったからね……二人には。そろそろ気になってきたところだろうから教えておくが、僕たちの協力者はトニーさんと高木さんの二人だけ……二人以外にはもういない」

暁は返事をしようとしたが、口が開かなかった。

「戦闘要員はトニーさんだけだが……何の暴力も持たなかった『アンチマター』に比べたらまだ良い方だ」

ため息混じりに神屋は呟いた。

亜美は疲労のせいか、既に眠ってしまった。

――――十分ほど経つと、暁が重々しく口を開いた。

「どこに向かってるんですか？　高木さん」

「俺の家だよ」

「え……これからそこが活動の拠点になる感じかぁ……」

「なかなか広いぜ？　なぁ神屋、お前来たことあるよな？」

「ええ、まぁ、確かに普通の家よりかは豪華な感じで……広かった覚えがありますね」

暁の肩に、亜美の頭が触れた。暁は亜美の頭を反対側に押しやると、腕を組んで目をつむった。そのまま質問を続けた。

「……家はどの辺りですか？」

「なに、さっきの駅から五キロ以上離れたとこだよ。もうちょっとかかるな」

高木が口を閉じると、今度は神屋が口を開いた。

「暁」

「なんだ……」

「ひとつ聞いていいかい？」

「……なんなりと」

「カレー味のうんこと、うんこ味のカレー。どちらかを選び、食べなければならない運命ならば、君はどっちを選ぶ？」

「……UDestだな」
「ゆうですと？」
「アルティメットどうでもよすぎるの略だ……Dの派生語。Dの最上級型」
「……僕だったら、カレー味のうんこを……」
「……まさかな」
「えら……」
「うん……」
「ぶ」
「……」
暁は頭をむしり掻いた。何本か毛が落ちた。
「……一見、Dだと思われがちなこの問いだが、案外Dではないと、最近になって思うようになった」
神屋は真剣な表情で言った。
「……」
暁は無言だ。神屋は続ける。
「よく考えてみてくれ。暁。きっと君もカレー味のうんこを選ぶはずだ」
「……」
「そもそも、うんこ味のカレーなんて食えるわけないじゃないか」
「じゃあテメエはうんこが食えるのか」
「要するに調理だよ。味を変えたと考えればいい。如何にうんこだろうが、それがおいしいカレー味ならば、僕は食える」
「……勝手に食ってろよ」
暁は力無く笑った。

ｄａｒｋ　ｎｉｇｈｔ（後書き）

最後何の話だよ！ｗｗ

まぁ、でも、どっちかといったら……ｗ

生命の足跡

王宮の神秘

ディランはリザベラに恋をしていた……――――――リザベラは美しかった。彼女を知る男達は皆彼女に優しい。その美貌故だ。ある日のこと。ポルノという騎士が彼女に愛を告げた。リザベラは迷う様子もなくポルノと会うようになった。

それを知ったディランの悲しみといったらなかった。王宮に仕えていたディランは、王にこの悲しみを訴えた。王は深く頷くだけで、彼に言葉はひとつも送らなかった……。

リザベラがポルノの女になってからというもの、ディランは変わってしまった。日に日に彼を蝕んだのは果てしなき絶望感。人生への大いなる諦め。ディランの髪は伸びていった。伸びた髪を切るのももどかしい。その長さに比例するかのように彼の絶望は深みを増していった。

だが数カ月もするとディランの心に変化があった。

底無しの絶望感はいつの間にか甚大なる虚無感へと変貌した。その感情は長くに渡り絶望し続けた彼にとっては、ある意味心地の良いものでもあったという。

しかし、その心地のよさはすぐに消えた。虚しさだけが彼を襲い始めた。

……リザベラ。

心の中でその名を呼んでもディランの目から涙が零れることはもうなかった。感情が無くなっていく感覚……。ディランは全てを悟ったかのような眼差しをただただ空に向けて生き続けた。

彼が生きる意味はなかったが死ぬ意味もなかった。彼は無意味を恐れなかった。むしろ、無意味と共存した。リザベラへの想いがどんなものであるのか、よくわからなくなっていた。

ある夜のこと、ポルノと共にリザベラがディランの勤める王宮に訪れた。王に用があったようだ。二人は腕を組み、さも仲良さげだ。

仲間にリザベラが来たことを教えてもらったディランだったが、ついに彼女の前には姿を現さなかった。

今更何を話すというのか。彼女に語る言葉などこの胸のどこぞにも存在し得てはいない。

ディランは王宮の門が見える位置に付き彼女が帰る姿を見ることにした。

その時に見上げた夜空を彼は死ぬまで忘れなかったはずだ。

――――何ひとつ不思議のない平坦で普遍的すぎるつまらない夜空。星は薄い輝きを纏い、ぼんやりと浮くだけだ。月などない。

長く笑みをこぼさなかった彼の表情がほんの少し、このときばかりは微々たる笑みをこぼしていた。頭がおかしくなったのだろうか。

……究極の虚無ここに極まり。

ディランはそう呟いた。

門の側をポルノとリザベラが一緒に歩いているのが目に映った。

暗い夜。二人はほんの少しの間隔を開けながら共に帰っていった。

その光景を黙ってディランは見つめた。どうとも表現しようのない感情が湧き上がるのを必死にこらえ、ディランは泣いた。

……おお、愛する人よ、リザベラよ。あなたと話したことを私は忘れはしない。忘れることはできない。

ディランは走り王の元に急いだ。

涙ぐみながら王にその心情を打ち明けた。複雑すぎて単純すぎるその心の内を。要するにディランはリザベラを諦めきれていなかっただけだった。

王は頷く。

それから数カ月が経った。同じく王宮に仕えるカエハンという女がディランに声をかけた。

彼女との会話でディランは驚くべき事実を知った。

どうやらポルノとリザベラが離れたらしい。

ディランは一人部屋で喜んだ。無性に嬉しい。しかし彼は疑問に思った。何故自分は喜んでいるのか……。

あの絶望をもたらしたのは、あの虚無感の理由は何だったのか？付き合うという言葉に惑わされて、本当のリザベラの気持ちなどには目が向いていなかったのでは？

自身にある感情がリザベラへの単なる下心だったとしたら？

ディラン己の精神の情けなさに半ば絶望した。そんな日が何日も続いたが、彼の精神はある日一筋の希望を捉えた。

リザベラと話すことができたからだ。リザベラとは天気のことや家のことなどで他愛のない会話を楽しんだ。それといったことはなかったが、彼女と話せたこと自体が彼にとっては無性に幸せなことであった。

それから一年ばかりが経ったがディランはリザベラに心の内を明かせてはいなかった。好きだということを告白できていなかった。

悶々とした日々はディランを苦しめた。恋愛に苦痛はつきもの。カエハンが言っていた言葉は本当だったとディランはこのとき強く理解した。

ディランは己の容姿に自信がなかった。リザベラに悪く思われたくない。だから告白には勇気がいるのだった。

ついにディランは王宮の役割をごまかし始めた。だらしないディランを王が然りつけたが彼は目をつむっているだけだった。憂鬱は人を狂わせるのだろう。

そしてある朝、ディランは衝撃の事実を知ることになる。

それを教えてくれたのはまたしてもカエハンだった。

彼女の話によると、リザベラはマントスという王族の男と付き合い始めたというのだ。リザベラの美貌に惚れ込んだマントスはリザベラを前々から狙っていたらしい。リザベラとポルノが別れた頃から時を見計らっていたという。王族であるマントスからの告白をリザベラは快く承諾した。

その話を聞いたディランの心にはとても大きな穴が開いたという。

そして彼は絶望し……

……とここまでが私が彼から聞いた彼の恋の物語だ。この先彼がどうなったかは、話すまでもない。さて、そろそろ筆を折ろう……私にもその時がきたようだ。さらばだ。またいつか逢おう。

――――ディラン物語。それがこの本のタイトルだ。

本を棚に戻すと、亜美はベッドの端に座った。

時計の針を眺める。

……零時。

全ての針が真上を差し、今、日付が変わった。

新しい一日が始まる。

……――――暁と亜美、神屋と高木を乗せた車が辿り着いた場所は、真夜中の住宅街だった。

「ここが俺のマイホーム。この歳にして家を持ってるなんて……と思う？　実は宝クジが当たってさ……俺って何かと運の良い人間で」

約三千万円で購入したという。眠気に負けた暁と亜美は大して反応ができなかった。

一見、普通の家である。木は森の中に隠せば見つからない。結果的には普通の家で良かった。普通じゃないのはやや大きいということだけか。

家の中は広い。ホテル「Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ」よりも快適そうに見える。三人にはそれぞれ部屋が与えられた。暁はほとんど物が置いていない部屋を選んだ。亜美は本がたくさんある部屋、神屋はごく普通の部屋に入っていった。部屋はたくさんあった。他にも色々な部屋がありそうだ。

「何か用があったら言って。自分の家のように使ってくれていいよ。この闘いが終わるまでは」

高木はそう言い残しベッドのある部屋に消えていった。

暁も自分の部屋に入るとすぐに眠ってしまった。
神屋も眠った。ただ一人、亜美だけが起きていた。ずらりと本が並ぶ本棚から一冊を取り出した。

ディラン物語

作者　Y．K．

表紙は真っ黒の下地に白い文字でタイトルと作者名。
聞いたことのないペンネームだった。
亜美は本を開いた。サブタイトル「王宮の神秘」。

ディランはリザベラに恋をしていた……――――

亜美は眠りについた。

八月十一日

暁の目が開いたのは朝八時のことだった。突然目に入った映像がいつもと違うことに多少混乱はしたが、すぐに自身の境遇を思い出し納得した。

……ここは高木さんの家だったか。

上半身だけを起こして部屋を見渡した。暁はこのとき、自分が床で寝ていたことに気がついた。この部屋にはベッドがない。それどころか、あるのは空白だかりだ。物があまり置いていない。何故こんな部屋を選んだのか。覚えていない。ざっと見渡して目に入るのは、床に散らばった紙が数枚、空気清浄機のような小さな装置、そして壁際には背丈の高いルームスタンドがひとつ。

他にも細々とした物が床に散らばってはいるが、あまり目立つよ

うな物は他にはなさそうだ。テレビもないとは驚いた。
暁は起き上がり部屋のドアを開けた。
「……うわぁ！！！」
ドアを開けた目の前には、男が一人。背丈は暁とあまり変わらない。顔は日本人のそれではない。特徴的なのは髪型と目だ。前髪が見当たらない。一般にこの頭部の状況のことをおでこが広いというのだろうが、それとは何かニュアンスが違う気がする。
「オハヨウゴザイマス。暁サン」
目のくぼみは特徴的だ。角度を変えて見ると黒い影が彼の目を隠してしまうほど……。
暁を至近距離で捉えるその瞳は冷たい。かなり悪魔的である。
「おはよう。いつの間に来たんだ……」
トニーは微笑んだ。
「夜中デス。タクサン荷物ガアッテ重カッタデスヨ」
「……荷物？　てか昨日……大丈夫だったのか？」
「武器デス。銃トカ。昨日ハ危ナカッタデス。敵ガイッパイイマシタ。デモ全部倒シマシタ」
「さ、さすがトニー！　やるな」
「ソロソロ下ニ行キマショウ。神屋サンガ今後ノ予定ニツイテ皆ト話シマス」
「ああ、わかった」
暁は部屋を出た。とても爽やかな朝だ。知らず知らずのうちに胸が希望に満ちてゆくかのような感覚。手すりに手を添えて、広い空間を照らす太陽の光に目を向けた。階段は半螺旋状になっていて、その頭上には開放的な空間が三階の天井まで突き抜けている。暁がいる階は二階だ。三階には何があるのだろう。行ってみたい。
暁が階段を下りようと近づくと亜美が廊下の奥から姿を現したした。寝起きから亜美の姿を見たことに暁はびっくりした。
……女子高生とひとつの屋根の下で眠っちゃってるよ……俺……。
わかってはいたことだが暁は半ば動揺を隠しきれない。

「……ヒュウ」
「ヒュウッテ何デスカ、暁サン」
「おはよう」
暁は亜美に挨拶をした。
亜美も何だかパッとしない様子だ。
「おはよう」
「……」
暁は頬を叩いた。夢を見ているのではないかと錯覚したからだ。
どうやら現実らしい。
……何やってんだ、俺。
三人は階段を下りていった。自分たちが立てる足音を、確かに自分たちはそこにいると認識しつつ、階段を下りていった。

生命の足跡（後書き）

更新速度ですが、受験の関係で書き溜めておいた分に頼ってきたので、しばらく貯蓄が増えるまでこのままで行かせてくださいｍ（＿；）ｍ

溜まり次第、早めます。

次回は、遅くとも３月２６日までには更新します。

罪の芽（前書き）

今回短めです。
この時点で受験終わってたら嬉しい。

罪の芽

東京某所、ここは都内でありながら、若者のアラモードを逸脱した大人の洒落た街並みが静かに展開される。そんな、一風変わった場所に、一人の女が歩いていた。

女は、眠たそうな目を擦りながら、先日の雨から生成された水たまりを歩幅を広げてかわした。

「そういえば、マリは今、元気かしらね……。あの結婚はネタよね……」

女は声にならないような小さな独り言を呟いた。

マリは女の友人のひとりである。先日念願の結婚を達成したばかりであった。旧姓が「久保田」であるマリは、親密な友人からは「くぼ溜まり」と呼ばれていた。つまり、「くぼんで水が溜まった場所」という意味のニックネームをふざけて付けられた訳である。そんなマリは結婚を果たしたら、名字が変わることを口実に、この地味に不快なニックネームを変えてやろうと企んでいた。

だが、マリは結婚してもなお、「水が溜まった場所」という意味のニックネームからは逃げられなかったのだ。それどころか、以前にも増してニックネームの意味合いが強まってしまった。神の悪戯か、皮肉なことにマリの結婚相手の名字は「水田」であったのだ。

つまり、この女は、水たまりを見かけて「水田マリ」という友人を思い出し、冷ややかに嘲るようなユニークな性分なのである。

女は、窓のないシンプルな外装の喫茶店の前で立ち止まり、小さく溜息をついた。今日はこの店で、ある男との待ち合わせがあるのだ。嬉しい待ち合わせではなかった。

入口には一メートル強の高さの看板が置かれていた。縁には赤、黄、青、緑の小型電球が輝く。看板にはこの喫茶店の名前と思われる文字が筆記体で表記され、その上にカタカナで読みが書かれていた。

「喫茶・パンドラ」

外観は常連客以外を受け付けないような雰囲気だった。外からは中の様子を全く伺えず、女はやむなく心の準備も出来ないままに、喫茶店「パンドラ」の扉を開いた。

ドアに付属した小さな鐘が短く鳴ると同時に、店内の朗らかで心地良いバックグラウンド・ミュージックが耳に入ってくる。見渡すと、想像以上に店内が広いことが分かる。木製のテーブルとチェアがゆとりをもって並べられ、壁で隠された奥には、まだいくつか席があるようだった。天井は高く、大部分がガラスで、今日のような晴れた日には直接日光が差し込む造りになっている。壁はコンクリートであるが、日光に照らされることで、温かみすら感じる不思議な雰囲気であった。

女は、出迎えた若いウエイターに「待ち合わせなんだけど……」と話すと、店内の奥を背伸びして覗き込んだ。

「篠原優子様でしょうか？」

ウエイターは、待ち合わせ相手を勝手に探し始めた女――篠原優子に声を掛けた。

「……そうです。あの人、もう来てる？」

「御来店しています。毎回、角の席を好んで選んでいらっしゃるので、奥に進んでいただければ、見つかるかと思います」

「……いつもって？」

「あの方は常連のお客様ですから」

そう言って微笑むと、ウエイターはカウンターの裏へ消えていった。　優子は店の奥へ進んでいった。入口からは死角になっていた場所がだんだんと姿を見せていく。全貌が見えると、そこは細長いスペースだった。テーブルは壁沿いに等間隔で三つ並べられ、皆同じく二人用の席だった。ここだけは他とは別の照明が設置されていて、天井もガラスではなくコンクリートである。

優子の待ち合わせ相手である男は一番奥の席で読書をしていた。左手には文庫本、右手にはティーカップが持たれている。

優子が近づくと、男は本を閉じテーブルに静かに置いた。

「来たか、優子」

男は久しぶりに優子と会ったのにも関わらず、自然な口調で言った。優子にはそれが気に食わなかった。

「久しぶりね……。あんたと会うのは『あのとき』以来かしら」

「『あのとき』とはいつのことかな」

「白々しい口を叩かないで。アタシがそういうの嫌いだって知ってるでしょ」

優子は木製の椅子に腰掛けながら言った。

「知ってるさ。だから訊いたんだ。君なら『あのとき』などとは言わず、『離婚したとき』と言うと思ってね」

「揚げ足を取るのがお好きなのね、イイ趣味してる。友達いるのかしら」

「私は友など作らないよ。極力、人とは関わらないことにしている。いつ人を傷つけても悲しまないように、罪悪感を感じないように、ね。……いや、これは言い過ぎかな……」

「そうやって逃げるの？」

「逃げる……？　逃げられないさ。だからせめて、新たな苦しみを背負わないようにしている」

男はそう言って紅茶を飲み干した。

男と優子は三年前までは夫婦であった。今日、優子がこの喫茶店に来たのは、かつての夫から直接会って話すことがある、と呼ばれたからであった。

「苦労を背負わせてすまないな」

男は悲しげに言った。

「別に……アタシは……」

優子が話そうとすると、先ほどのウエイターがやってきた。

「何か注文なされますか？」

「……紅茶をもう一杯もらえるかな。さっきと同じものを」
「かしこまりました。篠原様はどうしますか？」
どうやら優子はウエイターに名前を覚えられたようだった。
「アタシも同じのでいいわ」
「わかりました、すぐにお持ちしますね」
ウエイターはお辞儀をすると、壁の向こうに消えた。
優子と男は、紅茶が来るまでの間、一言も話さなかった。
「苦労って何？」
沈黙を破り、優子が言った。
「……亜美のことだ。一人で育てるのは大変だろう。金も要るしな」
「……亜美のことをあんたは苦労だと思ってたの？　アタシは違う。亜美は良い子。あの子は宝物」
「……そうか」
そう言うと、男はテーブルの上の本に目をやった。

『日本の腐敗』　宮澤睦

「優子、亜美はどうしてる？　好きだったろ、鬼頭火山って小説家。自殺したらしいじゃないか」
男は思い出したようにそんなことを言った。
優子は七月の中旬頃の亜美の様子を思い返した。
……亜美は何をしていたかしら。
「鬼頭火山が自殺した頃は忙しそうな感じだったわ。期末テストが近いとか言ってたけれど、外にも頻繁に出てたみたいよ。鬼頭火山が何とかって、お友達と話してた気もするけど……。今は文芸部かなんかの合宿に行ってるんじゃないかしら」
「……そうか。元気ならそれでいい。今日君を呼んだのは、実は亜美のことに関して、これとは別に話さなければならないことがあったからだ」
男は唐突に本題に入った。

「何？」
優子が尋ねると、男は黙り込んだ。悪夢を見た後のような青ざめた顔で自分の腕を凝視している。
「どうしたの？　大丈夫？」
優子は心配そうに男の顔を覗き込んだ。
「亜美は私の子だ……」
「……何よ、いきなり」
「そして、君の子だ……」
「……そうよ」
「だが私には亜美を救う力はない。君が亜美を導くしかない」
「どういう意味？」
優子は、深刻な表情の男に僅かに恐怖を感じた。男の言葉が、予言のように聴こえる。
「……私の娘であるという事実が、いつの日か亜美を苦しめるかもしれない」
「……どうして？」
「亜美は罪の芽を持っている。私が植え付けてしまった。あの子は私の過ちの残響を抱えている」
「何よそれ。ちゃんと説明して」
「説明しても君は何も出来ない。かえって苦悩を呼ぶだけだ。ただ、もしそんな日が来たら、君が亜美を支えてほしい。それを言いたかっただけだよ」
男はそう言って、瞼を閉じた。
「怖いこと……言わないでよ……」
優子は言い知れぬ恐れに身を震わせた。
「すまない。何も起こらないことを、切に願っている……」
「へ……変なこと言わないで！」
ガシャンッ！！
優子は堪えかねて椅子から立ち上がった。紅茶の入ったティーカップが床で砕け散る。

優子は「さよなら」と一言吐き捨てて、席を去った。
途中で、ティーカップの割れる音を聞いてやって来たウエイターとすれ違った。「お帰りですか?」というウエイターの声が背後で冷ややかに響く。
ドアのベルの、乾いた音と共に、優子は喫茶「パンドラ」を後にした。

新たな螺旋（前書き）

未来の自分が大学生になっていることを祈る！

２０１０．１２．３０

新たな螺旋

—1—

階段を降りると、来たときは閉まっていた二枚の扉が開かれていた。扉の裏側は鏡になっている。

開いた扉の奥には、一際広い部屋があった。中央には長方形のテーブルが置かれ、左右に三つずつの椅子が置かれている。右手の三つの椅子の前にはそれぞれワンセットずつ朝食が用意されており、奥の二席には神屋と高木が順に座っていた。一方、左手の三つの席では、中央を空けて二つの席に朝食が用意されていた。

全員が部屋に集結すると、トニーは右手、高木の隣に座り、亜美は左手、神屋の向かいの席に座った。暁は最後の一つ、トニーの向かい、亜美の一つ空けた隣に座った。

暁は席に着くと、改めて部屋を見渡した。部屋は直方体で、月代学園の教室四つ分くらいの広さはありそうである。中央のテーブルが目立つが、それ以外にもこの部屋には様々な物が遍在している。「地デジ対応」と印刷されたステッカーがまだ貼られている比較的新しいモデルの薄型テレビ（これは部屋の角に設置されている）、テレビに平行に配置されている三人用ソファ、一二〇センチ程の高さのラウンドテーブル、それを囲むように置かれた背もたれと脚の長いデザインの椅子三脚、そしてラウンドテーブルの上にはチェス盤（よく見ると暁には見覚えのあるチェス盤だった。おそらく暁の部屋に暗号を回収しに訪れた際に神屋がギミック付きのチェス盤も回収したのだろう）。ちなみに駒はバラバラに並んでいる。ついさっきまで神屋と高木が対局していたようだ。暁の座る席からは戦況はよく分からなかったが、盤上では未だ決着は着いていないらしい。神屋に瞬殺されずに、勝負を中断しているということは、高木も相当チェスが強いのだろうか。もっとも、高木が対戦相手とは限らな

いが……。
　さらに、部屋の内装は灰褐色の絨毯、ベージュの壁紙、壁には印象派が好みなのか、モネ、ドガ、ルノアール、セザンヌの絵画のレプリカ（まさか本物ではないだろう）が一枚ずつ飾ってある。
　そこまで観察を終えた段階で、神屋が口を開いた。
「昨日はよく眠れたかい？」
「うーん……それより、この朝食はどなたが作ったん？」
　亜美は食べ物に興味が向いているようだった。ダイエットを止めたらしいことが伺える。朝食はフランスパンを切ったもの、海藻のサラダ、ポタージュスープ、コーヒーゼリー。
「作ったのは俺。昔は海上レストランのコックだった。オールブルーを目指して海賊になったんだ」
　高木は真面目な顔で言った。
「あなたはサンジですか、高木さん。というか、もうそこまで読んだんですか、『ワンピース』。貸したばっかりでしょ」
　神屋がツッコミを入れる。神屋が『ワンピース』のコミックスを集めていることが判明した。
　……王里神会幹部は『ワンピース』を読むのか。
「神屋、『ワンピース』は凄いな。一話で泣いたぞ。トニーから電話があるまで暇でさ。お前たちがホテルから脱出してる時も読んでたんだ」
「今更ですか、高木さんは流行を逃しすぎですよ。だからモテないんですよ」
「高木さーん、神屋くーん、食べてイイ？　お腹ぺこぺこ」
「暁サン、『ワンピース』ッテ何デスカ？　洋服デスカ？」
　部屋が不似合いな賑やかさで湧く。暁はついにイライラを抑えきれなかった。
「だぁぁぁぁぁぁ！！！！　てめぇら！　少しは落ち着け！！
神屋！　こんな緊急事態に『ワンピース』貸してんじゃねえ！　高木さん！　俺たちが生死の岐路に立たされている時にあなたはサン

ジの人生の岐路を読んでたんすか！！　とんだ惨事だよ！　亜美！　我慢しろ！　トニー！　『ワンピース』は日本の人気マンガです！　知らねーのかよ！」

「……」

「……」

「……」

「……暁うるさい。頭ギンギン。お腹ぺこぺこ」

亜美は完全に寝ぼけているようだった。お得意のはずの日本語がトニーより拙い。

「……疲れたぜ、頭がおかしくなりそうだ……」

暁は現状を夢と錯覚し掛けた先ほどの自分が、完全に覚醒してしまったことに後悔した。あのまま自分も夢現な状態で、目の前の暢気者たちのように馬鹿話をしていた方が気楽だった。

そもそも何故に彼らはここまで、のほほんと構えていられるのか。日本という国で殺し合いが勃発したというのに、随分と落ち着いている。

……そうか！　俺が人とのコミュニケーションを苦手としているのは、極度のビビりだからか！　……ということは、竜司もビビりか？

暁は、随分と残念な自己分析だ、と心のなかで自嘲した。

ここで、ようやく神屋が話し始めた。

「……さて、今日からはここ、高木さん宅で活動するのだけれど、とりあえずいくつか注意しなきゃいけないことがある。一つは、外出はしないこと。ここがバレたらもう行くあてがない。二つ目、あまり時間がない。理由は二つ、王里神会のテロが近いかもしれないのと、鬼頭火山もしくは彼の意志を継ぐ者が見つかってしまうかもしれない。簡単には見つからない場所に居るとは思うけど……」

神屋は、先ほどまで馬鹿を言っていたとは思えないほどに冷静な口調で、淡々と説明した。

「了解。とにかく、早めに鬼頭の居場所を突き止めりゃ、いいのな」

暁は少し強がって言った。実際は不安だらけである。
「神屋くん、質問。あたしらって昨日襲撃されかけたけど、その件はどうなったの」
亜美は眠そうな目をして言った。やっと、脳が働きだしたようだ。
「されかけた……というか、あの後襲撃された。でもトニーさんが返り討ちにした。……ていうか、トニーさん、爆弾とか聞いてないんだが。ニュースで大騒ぎですよ。今年最大の事件とか言ってましたよ」
「スミマセン。シカシ、警察ガ働イテクレレバ、シバラクハ同ジヨウナ事件ハ起コセマセン」
「うーん……。それもそうだな。他にも利点はあるしね。……幸い、直前に出て行った僕らだけど、特に今は疑われてないみたいだし。それに、王里神会がテロ起こしたら、今年最大どころじゃないな」
神屋はそう言うと、グラスの水を口にした。
すると、高木が次に話し始めた。
「食事が冷めんぞ。亜美ちゃんも食べたがってるし、後は食いながら話そうぜ」
亜美が「やった」と小さくガッツポーズをしたのを、暁は目の端に捉えた。
「一つ聞きたいんだが、具体的に俺達がやらなきゃいけないことって何だ？」
暁はフランスパンを手に取りながら神屋に言った。
「僕らの最優先課題は鬼頭火山の居場所を、回収した暗号の中から見つけることだね。仮説だが、それには僕が加わらないと解らないような細工が施されている可能性が高い。だから、僕と暁と篠原さんでこの作業にあたりたいと思う」
「……だよな。じゃあ、飯食べ終わったら早速開始するか」
「そうだね」
今後の方針が決定すると、五人は再び和やかなムードに包まれた。
しばしの間、雑談をした後、高木が不意に話題を振った。

「俺からは、特に重要な話はないが、俺も神屋ぐらいの歳の頃、いや、もっと早くのうちから王里神会の幹部だった男だ。基本、戦闘以外はオールマイティーだ。何かあったら何でも相談してくれ。それから、この家は自由に使っていいからな」

そう言って、高木は白い歯を見せて爽やかに笑ってみせた。

すると亜美が口の中のパンを飲み込んで話し出す。

「この部屋って、他の部屋とちょっと違いますよね。壁の絵とか、高木さんの趣味？」

「いや、あれは元カノの趣味の影響で飾られてるだけ。俺は芸術に好みはないんだ」

「別れちゃったんですか？」

「酔っ払って、十代の頃に宗教団体の幹部やってたって口走って、逃げられたのさ。なあ神屋、お前も気を付けな」

急に話を振られたが、神屋は顔色ひとつ変えずに応える。

「僕の場合、教団幹部云々よりも、前科者になっちゃうでしょ」

「ハハ、神屋サン、ソンナコトヲ言ッタラ、ワタシハ殺人者デスヨ、ハハハ」

「……」

トニーの突然のブラックジョークに、ただ一人、神屋だけが「ははは」とわざとらしい笑い声を上げ、室内は静まり返った。

……トニーには、『ワンピース』を教える前に、『ＫＹ』という言葉を教える必要があるな。

暁は冷ややかな雰囲気の中、フランスパンをかじった。

―２―

青い空、灰色の街。空が晴れるほどにそのコントラストは際立った。

暁は、朝食を終え、自分にあてがわれた部屋に戻っていた。暗号

の再解読は先ほど食事をした部屋で行うことになった。
現在はいわば休憩時間。同時に、荷物の整理時間も兼ねていた。休憩は十五分と決められた。暁はその時間を今後貴重になるかもしれないと感じ、外の空気との触れ合いに割くことにしたのだ。
窓を開くと、閑静な住宅街が遠くまで広がっていた。住宅と住宅の間を涼しい風が吹き抜ける。暁は、もしかしたらこの住宅街は高級住宅街なのではないか、と感じた。「高級」と言っても、中の上といった印象ではあった。この家が他の家よりも少し大きく感じたのは確かであるが、窓から見える他の家も高級そうな家が多い。思い返せば、神屋が「少し広い」などと表現していたが、神屋の家も一般的な住居の広さから比較すれば、相当広いだろう。想像するに難くない。
そんなことを意味なく考えていると、住宅街の中、遠く向こうからリズミカルな音がすることに暁は気付いた。
音の正体を掴もうと、建ち並ぶ住宅の細部に目を凝らすと、意識が次第に音源に近付くようなイメージを体感した。それはまるで、数多の暗号文の隠し持つ内包を特定するかのようだった。
ふと気付くと謎のリズムは消えていた。それから数秒間窓から見られる景観を見つめていると、ついに暁は音源を特定した。
それは高架線だった。遠くの建物の合間に南北に続く高架線が見える。その上を走る電車の音が、広く行き渡り、暁の耳に入るまでの間に無数の反射を繰り返した。その結果、雑音は和らぎ、リズミカルな、聞き苦しさのない音に変わったのだろう。
「鬼頭……これで最後だ。俺達は駒じゃない……。人なんだ……」
暁は存在すら不安定な鬼頭火山へ向けて、囁いた。
真実は歪められる。暁たちが最初に辿り着いた真実は、本物ではなかった。
……今回はどうか。
暁は窓を閉め、部屋を出た――――。

亜美は、本棚の前で丁寧に並べられた書籍の背表紙を一つずつ目で追っていた。

「趣味合うかも……」

亜美は、僅かに笑みを浮かべながら呟いた。本棚の小説の多くは、亜美の好みに合いそうなものだった。鬼頭火山の作品も、全てこの部屋の本棚で見つけた。高木も、鬼頭作品は全て読破したようだ。

それ以外にも、亜美には興味深い発見があった。

この部屋の本棚には、小説やその他文芸書、論文、格言集……、と多岐にわたる種の本が納められているが、その並べ順には規則性がない。正確に述べるならば、亜美には規則性があるのかさえ分からないのだ。隣り合わせの本の種類があまりに違う。小説の隣に英語の論文、その隣にニーチェの哲学書、さらに隣に将棋の戦略本、そしてまた小説……と、バラバラに本が並べられているのだ。カテゴライズを好まない人間でも、さすがにこの様な並べ方はしないだろう。そして、ますます不思議さを助長しているのが、本の「納められ方」である。

「わざと……だよね……多分」

亜美は腰に手を当てた恰好で、本棚を見渡した。

この本棚には、中から一冊の本を抜き出すのさえ（むしろ一冊だけ抜き出すのが）困難なほど、ぴったりと、隙間なく、本が納められている。どの段も全て、例外なく。一冊でも増えたら、その本は居場所がなくなってしまうのだ。

それはカテゴライズされておらず、むしろ意図的に種類をバラしてあるかのような並べ方の理由になりうるのだろうか。

しかしながら、もし本と棚の幅を合わせるために本の並べ方を変えているならば、何故そのようなことをしようと思ったのか、疑問が残る。

「からくり本棚だったりして……。あとで高木さんに聞いてみよっ」

亜美は中学の頃に読んだ小説を思い出して、そんな独り言を言っ

た。

その小説は鬼頭火山の作品『地底湖』である。この作品では、殺人事件の舞台となる邸宅の、読書部屋の本棚が地下へと続く隠し扉だった。

とはいえ、ここは至って通常な住宅街。微塵もミステリアスな雰囲気はなかった。凝った造りの金庫……というオチがいいところだろう。高木ならそんなことをしてもおかしくはなさそうだ。

亜美は、本棚の謎が解けそうもないので、そろそろ部屋を出ようと考えた。しかし、体の向きを変えると、視界の端に黒い革のファイルを見つけた。背表紙には「二〇〇六年　十一月　～　二〇〇八年　十一月」と刺繍されている。

特にインスピレーションを感じたわけではないが、亜美の心の中で、ファイルの中身に対する興味は徐々に膨れ上がっていった。

ファイルは上から三つ目の段の一番右に存在した。見た目は大きめなサイズの本によく似ている。そのため、亜美は今になってそれがファイルであると気が付いた。

亜美は指先に力を入れて、本棚からファイルを取り出した。

ファイルは少々重量があり、女子が片手で持つのは辛そうだった。亜美はファイルを落とさないよう注意しながら、ゆっくりとそれを開いた。

……スクラップ……？

中身は新聞の切り抜きであった。つまり、ファイルはスクラップノートに近いものであったことになる。

一枚目のスクラップは、二〇〇六年十一月十八日の殺人事件の記事だった。

「……ん？　あれ……？」

亜美はその記事に見覚えのある姓を見た。

日本人数学者、神屋夫妻殺される

十四日午後、アメリカ在住の数学者、神屋真司氏（４９）とその妻、神屋聖美氏（４７）が、何者かに殺害されているのが神屋氏の別荘で発見された。研究所の友人による証言では……した犯人の目撃情報はなく、いまだ逃走中である。

また、神屋夫妻が取り組んでいたリーマン予想の証明に関する研究資料が同日紛失しており、現在そのことが事件と関連しているか調査中である。リーマン予想とは、クレイ数学研究所によるミレニアム懸賞問題の一つであり、解決者に対して百万ドルの懸賞金が支払われる約束がされている問題である。ベルンハルト・リーマンによって約一五〇年前に発表され……ゼータ関数の零点の分布に関する予想であり……と言われる数学上の最重要未解決問題とされている。夫妻の友人は、神屋夫妻はリーマン予想の証明に最も近い数学者であると話しており……と嘆かれている。また、ドイツの物理学者ラインハルト氏は同大学の……

亜美は、記事の半分程までを、難解な点を読み飛ばしつつも、黙読した。

……「神屋」夫妻……か……。生きていれば五十代前半。王里神会は各界の著名人も信者に取り込んでいる。だったら、「著名人の息子」ならどうか……？

亜美の脳内を数々の憶測が錯綜した。

「……アハハ。まさかね～。当て推量もいいとこよねー」

亜美はパタンと音を立て、ファイルを閉じた。

休憩時間の終了も迫っていたので、亜美は荷物を軽く整理し、部屋を出た。

盤上の戦争にかろうじて勝利した神屋は、先ほどまで死闘が繰り広げられていたチェス盤を片腕に自分に用意された部屋に入った。

今回の対局は、まさに竜虎相搏つ一戦だった。相手は高木。彼は、チェスの実力は一般的なレベルを遥かに凌駕している。さらに将棋では神屋を超える腕を持っている。神屋の知る人物のなかで最強の相手だった。

序盤、神屋は優位に立っていたが、中盤に差し掛かるに従って次第に追い詰められていった。その後はシーソーゲームが続き、互いの戦況が均衡したところで、暁たちが起きたため、一時休戦したのだった。

朝食を終えると、神屋と高木はチェスを再開した。七、八分の後、高木の過失により、神屋は高木の所持する最強の駒クイーンを取ることに成功した。クイーンの消えた高木の陣営は次第に矮小化した。神屋はその時点で、八手先に勝利のシーンを見た。それは高木も同じだった。そして、高木の投了をもって一進一退の白熱戦は幕を閉じたのだ。

しばらく本気を出していなかった神屋にとって、チェスの勘を取り戻す良い機会だった。

「いい感じだ」

神屋は部屋の中心で眼を閉じ、呟いた。

脳は適度に冴えていた。対局相手の心理を詮索せずに、純粋にチェスをしたのは久し振りだ。相手が高木でなければ、面白みに欠ける。

チェスや将棋において、最も基本的な思考は、相手の側に立って、戦法を読むことである。それは、結果から過程を導く手法で、単純に、大まかな相手の行動を読むことに似る。それは、無意識下で人間が行っている思考でもあるが、それを意識的に行うのが、チェスや将棋、チェッカー、リバーシなどである。

その思考を日常的に行えるセンスを持ち合わせた人間ならば、あ

るいは、それに加え神がかった強運を持つ者ならば、鬼頭火山やKのように、運命を先読みするかのようなシナリオを造り、人を操ることが出来る。

神屋は気付いていた。自分にもそれに準ずる力があると。

だから、このチェスゲームの駒に「選ばれた」のだと。

そして、その類い希なる力を駆使すれば、必ず鬼頭の残した暗号にも屈することはないはずである。

それだけに留まらず、上手くいけば、更なる高見に立てるかもしれない。駒がプレイヤーを支配し、小説の登場人物が作家を支配することも可能かもしれない。

神屋は、自分が立てた推測に誤りがないことを確信していた。

故に、鬼頭の居場所を突き止めるには、必ずや神屋の存在がキーになるはずであるのだ。

神屋、あるいは神屋の持ち込んだ情報があって初めて欠けたピースが揃う。

そこまで分かれば、後は神屋でも、暁でも、亜美でも答に辿り着く権利を得る。

……そうすれば、目的達成にまた一歩近づく。

ここに来て、神屋の心の内なる目的、野望が再燃していた。それは、神屋自身でさえ気付いていないことだった。ましてや、彼以外の誰かがそのことを正確に察するなど、不可能だった。この時、この瞬間までは――――。

ＳＥＸトラジティ（前書き）

今回、一部性的描写がありますので、１８歳未満の方はご注意を。

SEXトラジティ

―1―

リビングに戻った暁の目に最初に映ったのは、ソファに座るトニーの姿だった。

「……」

暁は立ち止まってトニーの後頭部に強い視線を送った。

悪者の不気味な笑みに潜む秘め事を見破ってやらんとばかりの剣幕だ。

部屋に入った足音を耳にはしていたが、トニーは敢えて振り向かなかった。その表情は爽やかな笑みで満たされている。電源の入っていないテレビの闇を見つめながら、悪魔は不気味に笑みを零す。

暁は立ち止まったまま考えていた。ずっと感じていた疑問について。

……こいつは一体何者なのか。

「教エマス」

「!?」

突然の発声に、暁は肩を微動させた。感じていた直感的な疑問に対する答えを、言葉のやり取りなしで一方的に聞かされたかのようだ。

暁はトニーに徐々に近づいていった。不自然なほどにゆっくりと。

トニーは首だけを動かし、目の端で暁を視界に捉えたが、すぐに前に向き直った。

暁はトニーが微笑しているのを目にして、歯に力を入れた。数学の問題が難しくて解けないときも、暁はそれとよく似た表情を作っていたものだった。

「座ッタラドウデスカ?」

……今ハ誰モイマセン。この言葉が省略されているかのように思

わされてしまう言い方だった。
トニーの微笑みは崩れない。
暁は疑いの目を向けつつもトニーの隣に腰を下ろした。二人の間には人一人分が座れるスペースがあった。暁はそのスペースを意識的に作るようにして座った。
暁は両肘を膝辺りにつけて、手の平を顔の前で軽く組んだ。授業中、考え事をするときの姿勢に似ていた。授業中の場合、肘をつくのは膝辺りではなく机となる。
暁の目は、ただじっと一点を伺う。睨むようにして、前だけを見据えていた。
トニーが静かに声を発した。
「教エマス」
繰り返されたその言葉に、今度は動揺しなかった。暁は、上の歯と下の歯に唾液を絡ませ、まるで怪物が獲物に食らいつくかのようにして口を開いた。
「……お前は……誰だ……」
その声はかすれていた。
悪魔の口角がつり上がる。
二人とも、依然として前を向いたままだ。
「ワタシハトニートイウ者デス。コレカラ暁サント神屋サント……」
「護衛するんだろ？　分かってるよ。俺はそんなことを聞いてるんじゃない。あなたが何者なのか……隠してることがあるはずでしょう」
「隠シテイルコト……デスカ……」
「……」
トニーは白に近い金髪を左手で流した。デキモノの一切ないトニーの白い肌が際立つ。
暁は最初の体勢を保ち続けている。
「彼とか予言とか言ってたろうが。二日くらい前の夜に。あれは何のつもりだ」

「アレデスカ」
「……言いやがって……この世の生と死の謎を解き明かしただのなんだの……」
「ワタシハ日本人デハアリマセン」
「知ってるよ。誤魔化すな。話をうまい具合にすり替えようったって、そうはいかないぞ」
「スイマセン」
「判ればいい。とにかくだな、この俺を悩ませる、自分でもよくわからん疑問に対する答えを握ってるのか？　それが知りたい」
「握ッテマスネ……」
「まじかよ。いや、なんとなく予想はついていた。初めから変な奴だとは思っていたよ。何を握ってる？　どんな秘密だ？」
「知リタイノデスカ？」
「当たり前だろ。俺と彼が会うのは予言の通りだったとか言ってたよな？　予言って誰が予言したんだよ。彼って誰だ？」
「ソレダケデハナイ。ワタシトアナタガ出会ウノモ予言ノ通リダッタ」
「……」
暁は体勢を崩し、背をソファに勢いよく押し付けた。その衝撃がトニーにも伝わる。
「……」
虚ろな目をぼんやりと空に向けて、暁は放心しかけた。
「予言者ハ上位概念トコンタクトヲ取ルコトガデキマス」
「……？」
「神様ノ言葉ヲ聞ケマス」
「……」
「暁サンハ聞イタコトガアリマスカ？」
「……ないな」
「ソウデスカ」
ここで会話は止まった。二人は静けさを身に纏い、口を閉じ続け

た。
　暁は考えるのをやめた。
　……あとで考えよう。
　心の中で幾度となくそう呟いて……――――――

「よっし、それじゃあさっそく……見てみますか」
「頑張って！　神屋くんっ」
「お前ならできるっ」
「おいおい篠原さん……君も一緒にみてくれよ。さすがに一人でハナからやるのはちょっと……って高木さん。見てないで協力して下さいよ」
　神屋、亜美、高木の三人は暁とトニーのいるリビングに同時に入室した。同時だったのは単なる偶然だ。三人共にリビング前で奇遇にも鉢合わせたのである。
　入室してすぐに神屋たちが暗号解読に取り組み始めても、暁はトニーと二人でソファに座ったままだった。
　神屋や亜美、高木も何度か暁とトニーに視線を送ったが、声をかけるには至らなかった。自分たちが来ても暁が動こうとしないのは、それだけの理由があるのだと三人は解釈したのだ。
　実際には、ただ暁には立ち上がる気力さえ残されてはいなかっただけなのだが。
　トニーは背後の話し声を聞いてか、声を発するチャンスを得たと思ったのだろう。暁の方に顔を向け、二人の間に垂れ流しになっていた奇妙な沈黙を破ることにした。
「……宇宙人ヲ信ジマスカ？」
　……この気まずい状況を打破するために考えついた質問がそれかよ……さっきの朝食時に空気読めてないの実感しなかったのか……コイツ……学習しろよ……。
　暁は呆れた様子で額に手をあてがった。かなりわざとらしい仕草

である。
「宇宙人ガイルカイナイカ……日本人ハコノ時代ニナッテモ、ソンナ低レベルナ会話シカシマセンネ」
「……」
「彼ラハイマス。日本人ハマズソレヲキチント認識スベキダト思イマス」
「……宇宙人……？」
「三浦正（みうらただし）トイウ作家ヲ知ッテイマスカ？　彼ノ作品ノヒトツニ『ライト』トイウ本ガアルンデスヨ。光トイウ意味ト正シイナドノ意味ガ込メラレタタイトルナンデス」
「……」
トニーの言葉を聞いて、暁の中で何かが弾けた。
……トニー……さん……。
「三浦……ただし？　知らないなぁ」
「アノ作品ニ登場スルノハ、惑星アロンドギアス。ソノ惑星ハ地球ノスグ近クヲ回ル、人類ガソレマデ見落トシテイタ惑星デシタ。人類ハソノ星ヲ遠クカラ観察シ始メマシタ。ソコニハ知的生命体ニヨル発展途上ノ文明ガ栄エテイマシタ。彼ラハ言語ヲ持チ、字モ書ケマシタ。タダアマリ火ヲ使イタガリマセン。火ヲ神聖ナモノトシ、特別ナ行事ヲ行ウトキニシカ使イマセンデシタ。植物ヲ利用シテ槍ナドヲ作ッタリシテイルヨウナ状況ナノデ、科学技術ナド全クナイデス。ソンナ彼ラノ星ニ、星ヲ発見シタ天文学者ノ主人公レックスハ夢ト希望ヲ見イダシマシタ。アロンドギアスコソ、人類ニトッテノ楽園ナノダト」
そこまで言い終えると、トニーは暁の顔を覗き込んだ。暁は興味なさげである。しかし、トニーは続ける。
「マサニコノ地球コソ、『ライト』ノ中ノアロンドギアスダト、ソウ思ウノデス。ドウ思イマスカ？」
「……よくわからんな」
「コノ地球ハ、監視下ニアルトイウコトデス。悪ク言エバ、支配下

ニアル」
「……宇宙人……が支配してんのか？　地球をか？」
「所詮、宇宙ナンテソンナモンデスヨ」
「そうか……」
亜美が二人に近づいてきた。
「ほら、暁！　宇宙人の話は置いといてさっ！　鬼頭火山、神崎冬也の隠れ場所を見つけよう！」
亜美は元気よく言い放った。
暁はソファから重い腰をゆっくりと上げながら、亜美に尋ねた。
「――――なぁ、宇宙人って、いると思う？」
亜美と暁は至近距離で目を合わせた。亜美は口を半開きにしてこう答えた。
「さぁね」
「そうかよ」
暁は何食わぬ顔をして、金色の髪をいじくった。

『自害していいっすか？』

作詞作曲　高山竜司

生きる意味を捨てた
誰も止めてくれなかった
現実に目をむけても
あっちが逃げてゆく

世界は止まったままだ
歯車を止めたのは
他ならぬこの俺自身

自害していいかい？
呼吸をすることすら煩わしい
自分で掲げた傘が多すぎて
片付けられなくて
膝を抱えて座っていた
光の当たらない陰の中

手を差し伸べられても
視界がかすんでいて掴めない
何度も何度も
差し伸べてくれる人

本当はそこまで汚れてなかった
今気づいたよ
君が俺を見ていてくれたんだな

自害しなくていいよな？
自分自身に確認した光輝く希望
君に会うと心が晴れる
今まで待っていた
君を待っていたんだ
声の聴こえる闇の中

だけど形あるものはいずれ朽ちていく
そうだろ
だから君はいつの間にかもういない
もう二度と幸せを分かち合えない

またここへ戻ってきてしまった
前よりも虚しいのは

君がまだ目に微かに映るから

自害していいっすか？
生きるのも馬鹿げてるが死ぬのも馬鹿げてる
だったら歩いてってやる
どんなに遅くとも
その喉元に食らいつくさ
太陽光の照りつく地面の上

……
……
……
「――――――――――」

高山竜司は、クーラーの効いた自室で戦慄していた。
己の気持ちをつづった歌の出来映えがあまりに暗く地味なモノであったためだ。
竜司は亜美とのメールのやりとりを思い出しながら、こう囁いたという。
「てかぶっちゃけ自害していいっすか？」
虚しい夏の朝の物語であった。

―2―

照りつける太陽光――――……
某ショッピングモールの中心部には、天井がガラス張りになった広々とした空間が存在する。
そこには、燃え盛る巨大な恒星からの光輝く光線が容赦なく降り

注いでいた。
だが、それはあまり問題にはならない。一階から二階まで突き抜けた広い空間である割には、夏ということもあって、冷房設備による涼しさという名の叡智が空間全体に適度に行き渡っている。涼しい空間で直射日光を浴びるという行為はなかなかに気持ちの良いものであるのか、ここで疲れた足の休憩をとる人は多い。植物を傍らにして腰を掛けられる場所は、ほぼ埋まってしまうほどである。
闇沢征一(やみざわせいいち)もまた、広すぎるショッピングモールに足を痛めた一人だと思われたのか、通りすがりの老婆に同情の声を掛けられた。
「ここはホントに広いからねぇ。ゆっくり休んでねぇ」
「……あ、はい」
去っていく老婆の後ろ姿を一瞥しつつ、闇沢は現在時刻を確認した。
……正午ジャスト。
闇沢の目前を沢山の人間が右に左に行き交っていく。夏だというのに長袖長ズボンの者も居れば、危なっかしい程の露出度を誇る薄着を着る若い女も居る。目に映る大概の人間が半袖半ズボンの中、思わず目に止まってしまうような服装をしている人は少なくない。闇沢自身、黒スーツに黒ネクタイと他とは常軌を逸した服装であることに多少なりともの恥ずかしさは覚えていた。
闇沢はこの広間の洋服店のすぐ近くに立っていた。ここは待ち合わせ場所である。待ち合わせ時間は今日の正午。相手がどんな人間なのか知らされていなかった闇沢は、もしや先ほどの老婆がそうなのかもと焦りだした。相手は今回の会談に相当の注意を払っている。今のは「老婆に付いて行け」という高度な誘導であったのかも知れない……。
老婆が接触してきた時間もちょうど正午くらいだったこともあり、闇沢はその可能性を捨てきれなくなった。
少し場所を移動して、老婆の向かった方を見た。
そのときだった。

「麻生さん？」
と背後で声がした。
闇沢はゆっくりと振り返り、相手の顔を見た。
「……麻生さんですか？」
闇沢に声を掛けた女性は、目が点になった闇沢の表情を見て困惑した。
闇沢は突然の事態に声を発することを忘れていた。
「……あの、ここで待ち合わせを約束していた者ですが……、あなたが麻生さんですよね？　確か黒スーツに黒ネクタイ、そして黒い革靴、ミディアムヘアーの男性、まさにあなたが待ち合わせの相手だと思うのですが……」
闇沢は女性の顔を見つめながら、事前の打ち合わせを思い出していた。この会談の為のシュミレーションは何度も行ってきた。闇沢は体勢を立て直し、女性と正面から向き合った。
女性の服装は殆ど闇沢のそれと変わらなかった。違うのはネクタイをしてないことと、下がスカートだということ、そして、彼女はサングラスを掛けているということだけだ。
全身黒尽くめの男女が立ち話をする光景はそうそうお目にかかれない。過ぎゆく人達は皆、彼らに視線を止めた。
闇沢は言った。
「……ここでは何なので、場所を変えましょう。あ、申し遅れました。私が麻生です……」

黒尽くめの二人は、ショッピングモール内の飲食店で会談を始めた。
店内は薄暗く、テーブルの仕切りが多く、会話を他人に聞かれることはまずない。静かに音楽が流れる落ち着いた雰囲気の店であった。
豪華な料理が女性の前に運ばれたが、闇沢の前に料理が運ばれる

ことはなかった。
「食べないんですか？」
女性は不思議そうに聞いた。
「ああ、今はお腹が減ってないんですよ」
闇沢は水の入ったグラスを触りながら、女性の目を眺める。
サングラス越しでは解らなかったが、女性の瞳はスカイブルーで彩られていたようだ。
これから会談というわけだからサングラスを取ったのか、食事を前にするから取ったのか、闇沢には判断しかねた。
闇沢は勝手な想像を推し進めた。この女性は瞳がスカイブルーであるからサングラスをしているのであって、今回特別にサングラスをしてきたわけではないのかも知れない……。
闇沢は敢えて瞳がスカイブルーであることについては触れないでおこうと思ったが、女性自ら瞳の色について話題を振ってきた。
「似合ってますか？」
「……え」
「本当はこの色、あんまり好きじゃないんです。でも彼氏がうるさくって、この色にしているんです」
……している？
「……あ、その目の色ですか？　もしかしてカラーコンタクト？」
「そうです。カラーコンタクト」
雑談は目の色から枝分かれし、五分程続いたが、闇沢が本題に切り出すことによって女性の表情もやや堅くなった。
「……そうですね。じゃあそろそろ本題に入りますか」
そう言って女性は、上品にナイフとフォークを置いた。
闇沢は両手の指を絡ませてテーブルに静かに寝かせた。ある種の緊迫感が二人を包んでいる。
「じゃあまずは……、私の方から質問してよろしいでしょうか」
「えーと、麻生さん。わかっているとは思いますが、こちらが答え

にくい内容の質問には意図的に回答できない場合もありますので……」

「あ、はい。大丈夫です。答えられる範囲内で勿論結構です」

「はい、初めに断っておきたかったので……」

「ええ、じゃあまずは……、あのことについてよろしいですか？」

女性は数秒の間を置いてから、こう答えた。

「――――はい。彼は……間違いなく……」

闇沢は失礼だとは思いつつも、追い討ちを掛けた。

「……間違いなく……」

「……ええ、間違いないですね」

女性の顔は少し残念そうであった。

「……わかりました。彼は、板垣権三郎氏は、亡くなられたのですね？」

それはまさしく相手の心情を伺うかのような聞き方だ。闇沢が低い声で小さくそう囁くことは、形の上での「残念がる心」を相手の女性に判らせようという闇沢の意志があることを物語っている。慎重に事を進めなければならない立場にあるのは、話を持ち掛けた闇沢の方にあるのだ。

「はい。彼は……、主は……亡くなりました」

「……御冥福を祈ります」

「……はい……」

二人の間に神妙な気配が流れた。

……ここまでは順調だな。

闇沢は心の中で笑みを零した。

「……詳しいことを……聞かせて貰えますか？」

闇沢の柔らかい口調が女性の警戒心を撫でる。

「はい。勿論」

女性は手提げバックの中から、何枚かの紙を取り出した。全部で五枚ある。それぞれの紙には片面にのみ黒い文字がびっしりと印刷されている。

闇沢は受け取り、内容に目を通し始めた。
「それが私たちが極秘に調査した事件の全容です。大ざっぱに口で説明致しますので、紙に目を通しながら聞いていて下さい」
女性のすらりとした声を聴きながら、闇沢は印刷された文字列を目で追っていく。
「全ての始まりの鍵を握っているのは、アフリカです」
「……アフリカ……」
「私は主の秘書なので、他の者が知らない主の秘密を知っています。そして、あなたにも彼の秘密をお教え致します」
「……秘書だったのですか……」
「かなり根本的なところから話しますので、初めは今回の事件とは無関係であるかとお思いになるかも知れません。でも、全ての始まりから話そうと思っている所存です」
闇沢は紙から顔を上げ、女性と見つめ合った。
「是非、お願いします。其方の丁重なご対応に感謝申し上げます」
闇沢は、シュミレーション通りにそう言った。
今回のこの接触に失敗は許されない。
王里神会教祖Kにより直々に極秘任務を命ぜられた、王里神会最高幹部団所属、闇沢の心的負担は想像以上のものだった。

―3―

「時代は十年以上前に遡ります。舞台となる場所はアフリカ。主とそれまで友好関係を築いてきた外国の過激派が、主側の勢力に対して暴動を起こしたのです。ちょうど主が、新商品の銃を視察する為、アフリカを訪れていたときでした」
「視察かぁ……」
「主は取引先と交渉する為、万が一の事も考えて相当の暴力を携え

て現地に向かいました。それが別の形で功を成したのです」
　薄暗い店内に、外からの雑音はあまり響いてこない。近くのゲームセンターの騒音が、遥か遠方から届いてくるかのように聴こえる。
　店内に灯された光はオレンジ色に近い。この色は様々な物を美しく輝かせる効果を持っている。どちらかと言えば清潔な肌の持ち主である闇沢の肌も、普通の光で照らされるより綺麗に見える。最も、闇沢の目の前にいる板垣権三郎の秘書の女性は、どんな光で照らしても変わらぬ美しさを放つであろう。
「銃の取引売買は、小さな町で密かに行われました。売り手の粘り強い交渉の末、主は新商品の銃の購入を取り決めました」
「あっ……ちょっといいですか？　あなたは同行されたのですか？」
「いえ、その頃は別の者が秘書をつとめていました……。今、私が話しているのは、過去の書類などから調べた物を中心にしています」
「……そうですか」
　……なるほどねぇ。ちっ……なるべく生の情報が欲しかったが、まぁ、仕方ねぇか。
「話を続けます。主は……、実は、そのとき既に騙されていました。取引先と、これまで主と友好関係を保ってきた過激派はグルだったんです」
「ほう」
「銃の取引先は主が死ねば、過激派からの温厚を受けます。そして過激派は、そのまま主の権力を乗っ取ろうと企んでいたのです。主の権力を狙う者はあとを絶たないんです。殺し屋たちとの強力なパイプ……完全武力行使だった過激派にとっては、主の持つ独自のパイプは喉から手が出る程のお宝だった訳です」
「人間の醜い欲……ってやつですね」
「ええ……。過激派は取引が行われた町の住民の格好を扮して、主たちを急襲しました」
「……」
　現時点では、闇沢は今回の板垣の死について、何が理由となるの

かまだわからないでいた。この極秘の会談にはボイスレコーダーなどの盗聴器具の使用は禁止ということで合意していた。危険な状況に立たされているのは、闇沢よりも女性の方だった。組織の機密情報を漏洩していることがバレれば、間違いなく処分されてしまう。それを踏まえた上での極秘会談なのである。

……この女。俺が盗聴をしているかどうかなんてどうでもいいと思ってんのか？　こいつはボディチェックすらしなかった……。何か企んでいる……？

闇沢は悟られぬよう、紙に目を通しながらそんなことを考えていた。

「部下が敵勢力を殲滅している最中、主は民家などに身を隠したという記録が残っています。主は無傷、部下は大勢死にました。何の罪もない一般市民も多く亡くなりました。敵とは勝負がつかないままになりましたが、主は何とか逃げおおせたようでした。そのとき……主はある拾い物をしました」

「……？」

「……それが何なのか、はっきりとした記録は残っていません」

「……」

「ただし、私はそれがなんであるか知っています」

「それは……？」

「まぁ、まだ定かではありませんが……恐らく特定できたかと……」

「……」

「今回の主の死には、そのときの拾い物が大きく関係していると考えています。結論的に言うと、反逆行為が主を死に至らしめたんです」

「……反逆？　誰のです？」

「拾い物の、です」

「……拾い物とは、人間なのですか？」

「はい。主はアフリカから人間の子供を一人だけ連れ帰りました。その子こそ、主にとって最高の拾い物であり、最大の失敗だったの

です」
「……へぇ」
……アフリカの子供か。初耳。こいつはかなりの重要事項だね。
闇沢はわざとらしく頭を掻いた。
女性はナイフを持つと、料理の肉をフォークと合わせて切り始めた。器用な手つきは見る者に大人の女性特有の魅力を感じさせる。
緩やかに動くナイフ。光を反射して、鋭さを増した。
「美味しいですか？」
「……食べたいんですか？　頼めば良かったじゃないですかぁ」
果たしてこの世界の誰が考えただろうか。
食材になったこの豚の倫理を。
キラキラと光るソースがかけられた豚の肉片をそれとなく眺めて闇沢はそんなことを思った。
女性は肉を噛みながら、ふと思い出したかのようにして、こう切り出した。
「そういえば、麻生さんは宇宙人を信じますか？」
「……！？」
突然の事態に闇沢は動揺した。突飛な質問だったからこそ、事件に関係しているのかも知れないと闇沢は思ってしまった。
「いると思いますか？」
「……ぁあ、いるんじゃないのかな？」
「ふーん」
「それは……、また、どうして？」
「いえ、特に……」
「？」
「……実は……」
……まさか、宇宙人なの？　そうなのぉ？
「実はですね、宇宙人はいないかも知れないんです」
「……あ、そう……」
「私は宇宙人肯定派だったんですが」

「……そうですか……」
「どう思います？」
――――どう思います？
そう言ったときの女性の顔が可愛らしく、闇沢は一瞬だけ呆気に取られてしまった。
女性の年は二十代後半といったところだろうか。ほんのうっすりと、目を凝らさなければ見えない程に薄く皺が走っている顔……。かなり綺麗な方の顔である。闇沢は昔の好きだった高校の教師と目の前の女性が似ていることに、このとき初めて思い至った。
……年齢も近い。彼女は俺が高二のとき二十九だったはず……。
頭の片隅で美化された過去を回想しつつ、闇沢は見つめ合った女性の瞳に飲み込まれていった。
オレンジ色の電灯が、美しく女を包んでいる。
「先生……」
「はい？」
「……あ！　いや、何でもないです」
「何？　先生？」
女性は笑っていた。
闇沢は照れながら、
「何でもないです」
と繰り返した。
「何～～？　何ですかぁ？　もう」
「いや、ホントに何でもないんですよ」
「……もう、麻生さんったら」
「ははは」
女性は口にステーキを一切れ放り込んだ。
旨そうに噛み砕いている。闇沢はその仕草をつぶさに観察した。
一通り噛まれると、肉は唾液と混ざり合った状態で食道に入る。そして胃に滞在し、消化される。その後、様々な消化を受け、養分を吸収された肉の塊は、摂取から約二十四時間後、排出される。

一体どうしてこんなシステムなのか。
この類の疑問を感じたことのある人間は少なくないはずだ。
闇沢はこの疑問に対する考えを一応持っていた。
……神がそう決めたから。
「あの、私、古代のオーパーツとか世界のＵＦＯ現象とかに興味があって、趣味でそういう本買って読んだりしてるんですけど、実は宇宙人はいないんじゃないかなって」
「……へぇ。そういう話、実は興味ありますよ。あなたの話を聞かせて下さい」
「え……、麻生さんもこういう話好きなんですか？　意外と趣味合うかも」
「古代のオーパーツとか、少し知識ありますよ。宇宙人とかもちょっとは」
「へえー、じゃあ趣味合うかも知れないですね」
「……あ、あぁ……」
「……オーパーツを調べてて思うのは、絶対宇宙人がいるって事なんです。超昔に極小のネジとか見つかってるんですよ？　絶対、発達した文明が地球に飛来してきたんですよ」
「まじっすか……」
「宇宙人はいると考えないと納得できない発見が数多く存在している……これは人類誕生など多くの超絶的な疑問に関係する訳ですよ。無視できない事なの」
「そっ……ですね……」
「ちゃんと私の話聞いてます？」
「あっ……はい」
……どっちなんだ？　宇宙人はいるのかいないのか……。
闇沢は困惑した。
「アフリカの子供によれば、私たちは神様によって創られた物らしいですよ。宇宙人が遺伝子操作して人類を誕生させた訳ではないって」

「アフリカの子供がそう言ったのですか？」
「はい」
……確かに、その方がロマンがあるな。
闇沢は密かに思った。人類の誕生や、地球が築き上げてきた歴史、それらに宇宙人の介入を認めた時点で、どこか薄暗さが漂ってしまう。
俺たちは自然に生まれ、独自に今までの文明を築いてきた！　そう胸を張って言う者のロマンを壊すのが、宇宙人の存在なのだ。いや、存在だけならまだ別のロマンを見いだせるだろう。だが、地球外知的生命体の文明が、地球上の未発達な文明に介入していたとしたら、そのロマンは砕け散る。
……結局、俺たちは創られただけでしかない、そんな存在なのか？
人類の表情が青ざめる様を、闇沢は想像していた。今まであまりしたことのない、気味の悪い想像であった。
「そうであって欲しいものですね。宇宙人を人類の誕生と結びつけてしまったら、何て言えばいいのかな……、希望が持てなくなりますよ」
「希望ですか？」
「ええ、希望というか、何と言うか」
「まぁ、この世界は宇宙人じゃなくて神様が創ったらしいですから、希望、持てますね」
女性はそう言って微笑んだ。
闇沢はまたも、目の前の女性と高校時代の女教師を重ね合わせていた。微笑んだときの表情は、より一層、彼女に似ていた。
……清子（せいこ）。
次第に周囲の音が聞こえなくなるのを、朦朧とした意識の中で感じ取っていた。現実の音が小さくなるにつれて、徐々に大きく響いてきたのは、忘れていた高校時代からの呼び声だった。

―4―

あれは二十年前のことだったか……。

その日は、確かにいつもとは異なっていた。

登校中、行き交う人々の表情は皆、うなだれて見えた。空は暗く、朝だと言うのに太陽は雲の奥に隠れ、姿を見せない。

その日見た夢を今でも覚えている。狼だ。三、四頭の狼が、俺に食らいついてくる夢……。

夢の舞台となった場所は雪山の一角。吹雪いていて、とても寒かった。

歩いても歩いても、雪の道は続いた。それは終わる事なき永遠の苦悩を意味していた。人生に似ている。どこまで行っても、理不尽な不幸は付き物。それが人生というものだ。

雪を踏む俺の足は、既に凍傷を患い、今にも動かなくなりそうだった。感覚などまるで無い。寒さと寂しさ、そして孤独だけを感じ取りながら、山を下り続けた。

どれだけ進んだだろうか。二日か三日は歩いた筈だ。聞こえるのは吹雪の音と、自身の呼吸音、ただそれだけだ。

ああ、喉が乾いた。

しかし、雪を含んではいけない。誰かがそう言っていたのを思い出し、俺は我慢して山を下り続けた。

……これは夢か？

何度そう思ったことだろうか。足を止めて休む度にそう思った。

だって、こんな事、起こる訳ないのだから。

「助け……て……」

歩き始めて五日後、とうとう俺は倒れてしまった。

体は既に寒さを感じていない。それどころか、置かれている状況にはそぐわない暖かさがどこからともなく感じ取れる。まるで全身を厚い毛布でくるまれているかのような感覚だ。俺は雪の上で目を

瞑っていた。とても暖かい。吹雪が心地いいくらいの涼しさを持って、肌を撫でた。

……眠い。

だが寝たら死ぬ。それはわかっていた。しかし、すんなりと死を受け入れて目を瞑った理由が、後になってわかった気がしないでもない。

俺は高二のその頃、まさに人生に未練などなかった。

死ぬなら死ぬで、問題はなかった。好きな女もいなければ、俺を必要とする人間もいないように思われた。

そう、人生に興味はなかった。

それにしても、その夢はリアルだった。目を瞑り、吹雪舞う雪の上を横たわって、俺は死を理解したつもりになっていた。

あぁ、なるほど。

これが死か。

――そう、もう少しで安らかに死ねた。あと少しだった。だが、頭上で何かの息遣いを聴いた。

……それは狼だった。

複数の狼が俺に食らいついてきたのだ。俺は両手両足を失い、脇腹から内蔵をはみ出させ、顔の半分を失った。

脳みそが流れ出てくる感覚があった。

皺を形成した白っぽい塊が、顔の右上辺りからズリュッとはみ出てきたのか。

俺は死んだ。死肉をも食い荒さられ、俺は息絶えた。

――――……目が覚めて、悪夢を見た事は理解したが、その内容を思い出す事ができない。なに、別に珍しい事ではない。日常のちょっとした事で、忘れた夢の内容を思い出す事なんか……。

登校中、思い描いていたのは平田（ひらた）清子の顔だった。その年のクラス担任を受け持つ女教師である。

自信を持って言える事がひとつあった。

その学校は共学であったが、学校中を探してみても、清子に適う

美貌を持つ女性はいないという事だ。彼女はもう三十路の一歩手前、二十九になるが、その見た目の若々しさには驚かされる。笑ったとき、ほんの少し目尻に皺がよるだけで、それさえ除いてしまえば、彼女の外見から歳を感じさせるものは微塵とない。

その故、多くの男子生徒が彼女に対して淡い下心を込めた視線を送るが、本気で清子を求めていたのは俺くらいのものだった。

彼女は英語の教師だった。

「それじゃあ、闇沢君、ここ訳してみて」

「……はい」

俺は日に日に彼女に、今まで遠目に羨望していたときより大きく増して、彼女に惹かれていった。

気付けば清子の事を考えている。そんな日が何日も続いた。

……あああぁぁ……

「――――!!」

彼女への思いが増すにつれて、あの悪夢を見る頻度も増した。

だが、目が覚める度に、どんな内容の夢であったか思い出せない。わかるのは、嫌な夢だということだけだ。

……清子、せいこ、セイコ……。

俺は彼女に溺れ、悪夢に浸ったのだ。

霞んだ視界に映るのは、意味を見いだす事が出来ない世界。そこにうすらぼんやりと形成される彼女の存在。そして悪夢。

それらだけが、あの時代の俺を占めていたのだ。

ある朝の事だ。太陽の光は無く、外では夏前の雨が降っていた。

午前五時、まだ早朝だった。

もう何回見たかも判らぬ悪夢の余韻を微かに残し、俺は家を出た。

「……」

予感……。

そう呼ぶのだろうか。
雨が降る寂れた道を歩みながら、俺は確かに、今日がいつもと違う事に気付いていた。
言葉では形容できない感覚が、胸の奥で疼いた。
……胸騒ぎがする。
吐く息は熱く、目はせわしなく動いた。胸に小さな痛みが走る。
学校に着くと、信じられない光景に出会した。やはり今日はいつもと違ったのだ。
「……先生」
教室にただ一人、俺の机に寄りかかっていた女は、紛れもなく、清子だった。
まるで俺が来るのを待っていたかのような眼差しだったのを覚えている。
俺は清子と長い間、呆然と見つめ合った。
整った鼻筋、流麗な顎のライン、白くて柔らかそうな肌、ストレートに伸ばした艶やかで茶色がかった髪の毛……。
そして、その瞳。
「闇沢君」
二十年経った今でも、忘れはしない。完璧な容姿、可憐な声音。
あれほど長い間互いを見つめ合った事は初めてだった。にもかかわらず、不思議と平静は保てた。
彼女にゆっくりと近づき、止まった。
今日は何かが違うという予感……、恐らく、感じていた予感の正体は目の前にいた。
寄りかかっていた俺の机から離れ、清子は俺に身体を預けた。気付くと、俺は床に膝をついていた。清子から漂う香水の香りが、脳を麻痺させているかのようだ。
……ぁあ、清子。
持っていた荷物はその場で落とした。
知らぬ間に清子を抱き締める恰好となった自分に、俺は気付いて

いない。
――――ドクン
体の奥底で、太鼓が強く鳴ったかのような音を聴いた。
清子の匂いを存分に嗅ぐ。
地上に天国を見た。
「……闇沢……君」
清子の身体が徐々に下に下りてきた。彼女の柔らかい谷間に、服の上から顔をうずめた。彼女が俺を掴む手に力が一層入った。
俺はシャツを脱ぎ捨て、清子に掴みかかった。まず、思い切りキスをする。舌と舌を濃厚に絡み合わせ、清子の唾液を舌で絡み取る。唾液が糸を引いた。
……グオオ……
頭の中で、それは抑揚を持って響いた。低く、何かが唸るような音……。
彼女の胸を服の上からまさぐりながら、俺は確かに、ある恐ろしい想像をしていた。
……まさか……。
肩から服を外し、下にずり下ろした。清子の白い上半身の肌が露わになる。紫色のブラジャーがまばゆかった。
最後の覆いもずり下ろされ、彼女の白く小振りな双乳は、二人だけの静かな教室にて晒された。既に勃起した男根を彼女の太ももに押し当てながら、淡いピンク色の小さな突起にしゃぶりつく。清子の若々しいほどの喘ぎ声。そして……
……グォォッッ！！！！
「ハァッ」
雪……。
何処までも続く、終わりなき白の山道。時々垣間見たのは、白の大地から突き出た黒い岩だ。
そうだった……あの夢は……――――――――
清子の首筋に残る、舌の走った、テラテラと光る跡。彼女の顎を

舐めまわし、スカートの中に手を入れた。探るように指を這わせ、秘部を撫でた。

「ハァッッ……清子……」

俺は吹雪き舞う上空を見た。

「……！？」

何か、巨大で、黒い物が遥か頭上を横切ったかのような……。

グルルル……

「あぁ！！」

狼が背後にいた。

逃げねばならない。

「やっ……」

スカートを無理やり脱がし、膝の下に手を入れる。紫のパンティ。頭が狂いそうだ。

グッと力を入れ、下半身をさらけ出す。まさに羞恥的な姿だ。俺はパンティの上から清子の秘部を舐めまわした。教室に、大人の女性の淫靡な声が響く。一通り舐めた後は、パンティをむしり取り、直接舐めた。

……

……

……あぁぁあ……

「ハァッハァ……」

俺は力尽き、雪の上にうつ伏せになった。寒さは不思議と感じない。吹雪きの音が途切れ途切れに耳に入る。そして何故か暖かい。

清子の細くて白い柔らかな両太ももをわし掴みにして、漸く解き放たれた一角獣を、突き刺そうとした。だが、その前にやりたい事があった。清子の艶のある髪を乱暴に掴み、太く長く、硬いそれを小さな口の中にねじ込んだ。清子の柔らかい唇の感触を、男根が感じ取る。

……ああ、清子。清子。清子。清子。清子。清子清子清子。
気持ちがいい。
「……助けてくれ」
死は目前に迫っていた。
夢の内容がフラッシュバックの如く蘇る。今なら全てを思い出せそうだ。あのあと俺はどうなったんだ？
清子の頭をリズミカルに前後に振動させながら、俺はこめかみに汗を垂らし、夢の続きを追っていた。もう少しで全てが判る。あの悪夢のラストがどんなものであったか……。
狼の唸り声が聴こえてきた。
ちょうど下腹の辺りか。
込み上げる精力の存在を感じた俺は、彼女の口からそれを抜き、性器に入れた。えもいえぬ快感が全身を突き抜けるのを楽しみながら、俺は腰を振った。口の端から涎を垂らし、目を充血させ、上を向いた状態で。
……思い出せないぞ。どういうことだ。あと少しなのに。
快感はピークに達しようとしていた。あと一分もせず果てるだろう。
俺は清子の顔を見た。
目は薄く開かれ、口はほんの少ししか開かれていない。次に視線は、小刻みに揺れる真っ白な胸へと移った。まるで雪のように白い肌だ。どうしてももう一度触れたくなった俺は、手を伸ばした。ぽつんと突き出た淡いピンク色の突起を人差し指と親指で摘んでみた。
「あぁぁ、もう、もう」
思わず俺は声に出していた。全てが放出されるその時が迫っていることを。
……吹雪いている……。
朦朧とした意識の中、それだけはよく感じ取れた。
……狼は……？
わからない。うつ伏せになっているので、見える範囲が狭まって

いる。
「ハァッハァッ」
ヒートアップする腰の動き。あと数秒で果てるだろう。
……ビュオオォォ……
体の至る所に痛みが走っていることに気付いた。どうやら、狼に喰われているらしい。
脳がドロリと体外にはみ出た。
「……――ッッ」
全てが終わった。

―5―

王里神会本部ビル五十一階……。
そこには暗い灯りが灯る部屋がひとつだけ存在する。
その部屋は、最高幹部団所属……氷鳥（こおりどり）の部屋だ。
今、部屋には氷鳥と男が一人……。
薄暗く、静かな部屋。
氷鳥は、ソファに座って、ゆっくりとした動作で水を飲む。テーブルに置かれたグラスに残るのは、内側の表面についた水滴だけ。
氷鳥の居るリビングの出入り口に、男が立った。暗すぎて、その輪郭すらも掴みずらい。
静かに佇む男は、特徴のない声で言った。まるで独り言のようだ。
「嬉しいなぁ……あの鬼頭火山を殺せるのが僕で……」
佇む男は、暗闇の中、口の両端を吊り上げた。
氷鳥も、男の独り言に流され、会話を始めた。
「私が君を推したんだよ……。君は私が知る中で一番の手練れだ」
「ふん……。それにしても氷鳥君、何故なんだ？　目的の為なら手段を選ばない筈の王里神会様が、どうしてこんな小癪な手を使う」

氷鳥はそれを聞いて笑った。低い笑い声だ。
「小癪だって？　君のような立派な殺し屋に仕事を頼んだにすぎない。小癪ではなくこれが妥当な方法だろう」
「へっ……王里神会ってのは腰が引けてるねぇ～。もう少し大胆にいかないもんかね。いつも殺し屋ばかり利用してよぉ」
「金が余ってるんだ……。それに、なるべく責任は負いたくないからね」
「責任？」
「人を殺す責任さ」
「なに、そりゃちょっとずれてないか？　俺たち殺し屋は殺したくて殺してるわけじゃない。殺しを頼み、望むのはお前ら依頼者だろう。とどのつまり、責任を負うべきはお前らの方じゃないのか？」
氷鳥は暗闇の中、小さな溜め息を吐いた。
「……これはなかなかに議論のしがいがある。殺し屋と依頼者、どちらが悪いか……」
「馬鹿野郎、どっちも悪いに決まってんだろ。ま、殺し屋の俺が言うセリフじゃないけどね……」
「ところで責任とは何だろうか？　左虎（さとら）君」
「……さぁな」
左虎はいつの間にか、入り口付近から消えていた。
どこにいるのだろうか。ただ声だけが近くにある。
「氷鳥君、世の中は不公平だろう。だから……責任なんて、そんな言葉は……ただの慰めにしかならんよ。俺の言っている意味がわかるかぁ？　わからないか……いや、ある程度はわかるんじゃないか？　そうだろ。まぁ……ぶっちゃけると俺自身、何が言いたいのかよくわからんがな」

「……――――――ということだ。つまり君には、実行係とリーダーの役割の二つを兼ねてもらうことになる」

「……なるほどな」
薄暗い室内。
クーラーが利いているので、夏特有のまとわりつくかのような暑さはそこになかった。
「……成功を祈ってるよ」
さて、これで話は終わりだ、とでも言いたげな後味を残して、氷鳥は口を閉じた。向かい合うソファに座り話を聞いていた左虎は、
「さ、お引き取りを」と邪険されているかのようにも感じ取れた。
「……了解、了解しました。……だが、ふたつばかり文句があるな」
暗闇の中、氷鳥は顔を上げた。
「何だ」
「……まずひとつ。初めにも言いかけたが、どうしてこんな小癪な手を使う？」
左虎の言葉に、氷鳥は眉をひそめた。
「……何だと言うんだ？」
「だからよぉ、どうして殺し屋なんか使う？　お前らくらいなら銃くらいすぐに用意できるだろう。銃が扱える戦闘要員もいる筈だ。それにだ……面倒にも鬼頭を捜索して殺そうというが、アイツには妻がいただろう。そいつを人質にとっちまえば話はスムーズに進む。姪もいたんじゃなかったか？　確か」
「……そういうことか。それはあまり意味がないだろう」
「何で」
「少し考えればわかるさ。鬼頭はV事件以来、既に多数の仲間を失っている。わかるか？　命がけなのさ。人質をとったくらいで出てくる筈がない。今回のヤツは本気なんだ。全てを賭けて我々を潰しにくる。死んでいった仲間たちの為ってやつでもあるだろうな。だが……鬼頭は気付いていないんだ。仲間の死は警告だってことに……」
「本当かよ。家族が死んでもいいってか？　奴はそんな薄情な野郎

だったのか。僕だったら、家族の命を優先して、さっさと自分から殺されに行くね」

「鬼頭は馬鹿じゃない。きっと家族には既に手を打ってある筈だ。家族旅行に行かせるとかな……」

「……ふぅ。まぁいい。仕事は仕事だ」

「もうひとつの文句ってなんだ？」

「あぁ……、もうひとつは、大した事じゃないんだが。……何故、俺一人にやらせてくれないのか。俺は単独で仕事をするって知ってるだろ」

「今回はなんとしても成功しなければならない。私も会議で相当やり合った。もう少しで殺し屋を複数雇い、協力させようという話が通りかけていたんだ。私が怒鳴り声を上げてなんとか頭の固いお偉いさんたちを黙らせたんだが……。まあ、私は知っている。君が協力を好まないことを。それも踏まえて、どうにか、うちの部下を付けるという事で納得させたんだ。悪くは思わないで欲しい」

氷鳥の話す声を静かに聞いていた左虎は、部屋の出口に向かって歩き出した。

「左虎……成功しろよ……高い金を払っているんだ……」

左虎はドアノブに手をかけた。

「……期限は……わかっているだろうな……」

「……」

左虎はドアを開けた。眩しい光が部屋に差し込む。

リビングの奥から、氷鳥の低い声が響く……。

「十日……以内だ」

左虎は、重い足取りで部屋を出た。

オープニングゲーム（前書き）

サブタイトルはチェス用語でゲームの序盤戦の意です。

オープニングゲーム

―1―

八月十一日

リビングのテーブルには四枚の暗号文と高木が自室から持ってきたマイクロソフト社のノートパソコンが置かれていた。

暗号の一枚は、有名推理小説家、鬼頭火山こと神崎冬也直筆のメモ。一枚は、鬼頭火山の師、宮澤睦の執筆した哲学書『キリストの哲学』に隠された暗号文の転記。一枚は、鬼頭火山が八百屋の店主を介して篠原亜美に渡した手紙の写し。一枚は、月代学園第2図書室のCDコーナーに収納されていた、パッヘルベルのジーグを単独で収録しているCDの中身を印刷したもの。当然中身は本来印刷不可能な音楽データであるべきだが、このCDは予め鬼頭によってテキストデータとすり替えてあった。

それらを囲むようにして座る五人。トニーは解読に励む四人を眺めているに過ぎないが、解読経験者である暁と亜美、そして暗号を初めて目にする神屋と高木は、暗号解読に取り掛かっていた。しかしながら、解読と銘打っても、ただ紙を凝視しているに等しかった。ただ見ているだけで、問題が解決し得ないことは場の誰もが悟っていた。

そんな最中、かつての解読者は微かに懐かしさを感じていた。約ひと月前の記憶がより鮮明になっていった。まるで、これまでの人生で日常的に暗号解読を行っていたかのような錯覚を感じていた。長期入院した会社員がようやく職場復帰したかの如く、暗号解読の勘を取り戻すように、慣れている風に、暗号を見る。それでもやはり、ただ見ているだけに過ぎないことを自覚しているのではあるの

だ。
しかしながら、解読未経験者のあるひとりは四枚の暗号文を訝しげに眺めていた。
神屋聖孝は改めて四枚の暗号文を眺めた。
……たったこれだけの文書に、新たな答えが存在するのだろうか。
神屋は自分の力で直接暗号を分析したい衝動に駆られた。
「……僕にこの暗号を解かせてくれないか？」
「……はい？」
亜美は目をしばたたいた。
「神屋君が言ってるのは、この暗号の第一の答を解きたいってこと？」
「そう。聞けば、君たちはこの暗号を複数人で解いたらしいじゃないか。最初に解いた人間と、その答えを聞かされた人間では、感じるインスピレーションが違うかもしれない。さっきは一人でハナからやるのはキツいと言ったけれど、暗号解読の進行の仕方として、僕と解読経験者二人でチーム分けする方が良い。僕が一人で一通り解いてみたら何か分かるかもしれない……」
「なるほどね……」
亜美は顎に手を当て考える。
隣で暁は、うーん、と唸りを上げた。
「どうやらあまり乗り気じゃないみたいだね」
神屋は不思議がった。彼の中では名案であったからだ。
「まあ……な。鬼頭は俺たちに、いや正確には亜美にこの暗号を解かせるつもりだった。だから、余所から来たお前じゃ解けない内容もある。地理的なアプローチとか、固有名詞の利用とか……な。それに時間はあるのか？　俺たちは四人で二週間、静枝が最初からいたら……まあ、かなり短縮されるだろうけど」
「そういうことなら問題ない。君か篠原さんが居れば分かり得ないところはヒントをもらえる。時間は七、八時間あれば解けるだろう。君たちのように暗号回収のために移動する必要はないし、情報交換

も要らない。加えて、迷惑な嵐も来ないだろう。そして、図書館の哲学書、八百屋の暗号、最後の暗号がCDに記録されている、これらの情報は既に君たちから聞いている。それに、解らなければ諦めるという選択肢もあるしね。僕は最悪自力で解くのを放棄しても問題ないんだし」

「……なるほど、俺たちみたく差し迫った状態じゃないもんな。確かにお前なら出来るかもしれないが……。まぁ、やってみるか？」

「よし。じゃ、暁と篠原さんは暗号を、解く順番に並べといてくれ。高木さん、あなたは出掛ける準備を」

神屋は順番に指示をした。高木は神屋の急な要求に怪訝な表情を見せる。

「出掛ける準備？　神屋、俺はどこに行かされるんだ」

「そんなに嫌そうな表情をしないで下さいよ。高木さんが一番動きやすいんですから。頼みたいのは宮澤睦の哲学書を図書館から借りてくることです」

「哲学書……な。分かった、じゃあちょっくら行ってくるわ。昼食の時間までには帰る」

「ありがとうございます。お願いします」

高木は大きく欠伸をしながら暁と亜美の横を通り抜け、部屋を出た。

暁と亜美は四枚の暗号文を左から解読順に並べた。

「神屋君、準備オッケー。それで、神屋君が暗号解く間、あたしたちはどうすればいいの？」

「僕と逆方向から、つまり四枚目から何か別の答がないか検証してみたらどうかな」

「そうね。っんじゃ、あきらっ、やっちゃいますかあっ」

亜美は軽快に言い放つ。今日は何故か亜美のテンションが高い。

「亜美、何か良いことでもあったのか？」

「久しぶりの暗号でワクワクドキドキじゃん！！」

「あのな、新要素ゼロじゃんか。それに、お前は実質、暗号二つく

らいしか解いてないだろ」
「いいのっ。今回はあたしが活躍する気がするのさ！」
「何が『するのさ！』だ。はしゃぎやがって」
「さあさあ、そんなことDだし、早く解こうよ！」
「なんか『どうでもいい』をナチュラルに『D』と言うようになったな、俺ら」
暁は四枚目の暗号を手に取り、現代人の短縮語の濫用を心もなく嘆いてみた。
「アノ、神屋サン。イイデスカ」
トニーが会話が途切れた隙を狙って、真剣な顔つきで暗号を眺める神屋に言った。
「……何ですか、トニーさん」
神屋は少し迷惑そうにトニーの顔の方を向いた。
「足……ズット踏ンデマス」
神屋の右足がトニーの左足の上にあった。
「あ……いや、うん……ごめん」
「……ハイ」
部屋に静寂が戻った。

空調が備わった大部屋。高木が退室してから数十分が経った。トニーもまた、家の周りを見回りするために数分前に退室した。トニーはいざという時に狙撃しやすい部屋を見つけておきたいとも話していた。
神屋は照明の光を照り返す長方形の巨大なテーブルでノートパソコンと向かい合っていた。
神屋はワードプロセッサ用のパソコンソフトウェアを開き、いつでもメモ出来るように準備した。続いて、暗号解読に必要な情報を素早く入手出来るよう、インターネットに接続しようとしたが、高木のパソコンには米マイクロソフトのＩｎｔｅｒｎｅｔ　Ｅｘｐｌ

ｏｒｅｒの他に、米モジラ財団の開発した無料ＷｅｂブラウザーであるＦｉｒｅｆｏｘを搭載していた。Ｆｉｒｅｆｏｘはタブによる画面切り替えを素早く行える利点がある。

Ｆｉｒｅｆｏｘのショートカットアイコンがデスクトップにあるということは、高木は米マイクロソフトのＩｎｔｅｒｎｅｔ　Ｅｘｐｌｏｒｅｒが圧倒的なシェアを占めている中、Ｆｉｒｅｆｏｘを常用しているのだろう。まだ少数派ではあるが、その使い勝手の良さ故、Ｆｉｒｅｆｏｘの利用者は増えつつある。不思議なことではない。

神屋はＦｉｒｅｆｏｘのオレンジとブルーのアイコンをダブルクリックした。

……さて、これで前準備は終わりだ。

神屋は第一の暗号文に目を落とした。

「初めが肝心である」

市場・内閣・最果て・大雨・ノア・図案・書斎・館長・ニアミス・行雲・ケア

『鉢』の中に、『位置』あり。『位置』とは『位置・灸・霊』であり、『禄・霊・灸』のパーツから成る。『荷・酸・霊』と『荷・酸・位置』番目のパーツは間に道標を持つ。

彼には既に、解答の目星は付いていた――――

神屋が第一の暗号に取りかかる頃、暁と亜美は同じ部屋のテレビの前のソファに座って暗号を眺めていた。

Ｓａａｒ
ａｂｌａｔｉｏｎ

gauche
unbelievr
oak
Bahama
Janus
Sacchrin

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる?』

◎風化した未熟なヤヌスは言った。『騙されるなよ。リンゴが二個ある。そこへ猫がやってきてリンゴを一つくわえていった。さていくつ?』

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

◎ある化学者が言った。『ある物質をいじくった。すると炭素56水素40窒素8酸素24硫黄8という組合せになっちまった。元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』

篠原亜美へ
よくぞここまでたどり着いたね。約束の日にちまで、もう残りわずかではないのか?
これが最後の暗号だよ。
待ってるよ。では
鬼頭より

暗号文の最後には鬼頭のメッセージが添えられていた。暁は、過

去の鬼頭が現在の自分たちの状況を予期して書いたように感じ、少しばかり怒りを覚えた。

「なぁ亜美、マジでコレに別に答を見つけるのかぁ……」

暁は早くも行き詰まりを感じていた。それもそうである。最初から暁はこの勝負の難しさを理解していた。自分たちが何日にも渡って解き続けた暗号文に別の答を見つけるなど、とても考えられなかったのだ。

「それじゃ鬼頭火山らしくない考え方じゃん。別の答じゃなくて、別の暗号を隠したんじゃない？」

暁は目を丸くした。本当に今日の亜美は冴えているかもしれない。亜美の発言はかなり信憑性の高い仮定だと、暁は感じた。

「そうか！　つまり、第五の暗号の存在を示唆する何かがあるのか！　だとしたら、今持ってる第四の暗号が怪しいな。ここに来て、また第一とか第二の暗号に戻るのはあまりキレイじゃない」

「……でもさ、自分で言っといて早速疑問が浮上してんのよね。第五の暗号が存在すると仮定してだけれど、第四の暗号で一度終結したように見えないと、あたしらが第五の暗号に進む恐れがあるじゃない？　そうすると、やっぱり神屋君が仲間に加わらないと第五の暗号に辿り着けないトリックがなきゃいけないわけさ。ただ、そんなハッキリしたストッパーを、そもそもあたしらに気付かれないような形態で隠せるものなのかな？」

「確かにナチュラル過ぎるよな。……しかし、こんなのはどうだ？　仮に俺たちが第四の暗号の中に第五の暗号の在処を見つけたとする。そして第五の暗号を入手する。そしたら驚いたことにそれは暗号じゃなかった」

「どういうこと？」

亜美は首を傾げる。ショートカットがふわりと揺れた。

「すげー乱暴な話だが、それが金庫だったとする。鍵は指紋認識で開く特注のもの」

「あー！　分かった！　指紋認識に必要なのは神屋君ってわけね！

あたしらがどんだけ頑張ろーと、神屋君がいなきゃ金庫は開かない。金庫の中には鬼頭火山の居場所なり、それに準ずる情報なりが入ってる」

「正解。……そんで、金庫の側面には、張り紙がある。『四番目の暗号にはもう一つ答がある。そちらが正しい解答だ。この金庫は時間稼ぎに過ぎない。しかし、これは篠原亜美が厳重に保管するように。後に開かれる時が来る。それまでは無理に開けないように。』とかいう内容のな」

暁はかなり乱雑な仮説だと思いつつ、亜美に自説を説明した。

「まあ、どっちにしても何かしらの、ヒントを見つけなきゃいけないよねー」

「……そうだな」

広いリビングで、先の見えない戦いが続く――――――

―2―

「ちょっといいかい？」

気が付いたことを互いに伝達し合い、第四の暗号を再解読していた暁と亜美に、背後から神屋の声が掛かる。

「ん？　もう解けたのか！？　……それともギブか？」

暁はゆっくりと振り返りながら言う。

「まさか。最初からギブなんてないさ。前者の方だよ」

「おお！　やっぱりか。さすがに早いな！」

「一応解答を言うと、最初の単語群は頭文字の縦読みで、第二の暗号が図書館にあることを示す。後半は数字として読める漢字に日本十進分類法を当てはめて棚と本、それからその本のページの位置を特定する。これで、第二の暗号入手ってことでいいかな？」

「ああ。ちなみに、第二の暗号の答は固有名詞だ。『北の八百屋』って場所を示してる。それだけは最初に教えておく」

「オーケー、第二の暗号は時間もそうかからないだろう」
神屋はそう言うと、テーブルに戻っていった。数学的な暗号は彼の得意分野だ。著名な数学者である両親譲りの才能である。とは言うものの、本当に優れた者は分野を問わず優秀なものである。神屋に、数学以外の学問全般の高い能力が見受けられたのは確かであった。
暁には坂本洋平という親友が存在したが、神屋もまた、比較的よく遊んだ友人のひとりだった。昔から、学力において一番長けていたのは神屋だった。
気付くと、旧友二人は自分よりも遥かに優秀な人間になっていた。暁は取り柄のない自分に少しばかり情けなさを感じた。
「あたしらも第三の暗号に移らない？」
「そうだな。最初は広く浅く調べよう。今日中に一度全ての暗号の内容を吟味するのが望ましいな」
「よし、神屋君、第三の暗号貸して」
亜美は跳ねるように軽やかに神屋のいるテーブルに駆け寄った。

亜美が第三の暗号を受け取り、暁の側に戻ると、神屋は第二の暗号を見渡した。

『７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７１０
十字架を背負いし者に
数と方向をあたえよ』

「……並び方か」
神屋は呟くと、暗号の数字の部分の並びを整理した。

７４０　６７０　７００　７２０　６９０　６８０　７３０　７

１０
　　←
６７０　６８０　６９０　７００　７１０　７２０　７３０　７４０

……数と方向。

規則的に並べられた数と、方向というワードには関連するものがあると神屋は知っていた。高校数学における数列では、一般項を表す際にｎという文字が使われる。ｎは方向を表す文字でもあり、北を示す。さらに、この暗号の解答は「北の八百屋」である。十中八九関係性があるだろう。

神屋は苦もなく等差数列の一般項を導いた。

１０ｎ＋６６０

「……！」

神屋は「十字架」の正体を掴んだ。

ｎに方向は与えた。残るは数である。アルファベットの数値変換ほど単純な暗号はない。

「……」

神屋は悩んだ。ａを１にするか０にするか。一般的だとされるのは０の方だったか……。

神屋は導いた一般項のｎにａを０とした時の数値――１４を代入した。

算出された数は「８００」だ。神屋は瞬時にその数の意味する事柄を悟った。

「北と８００で『北の八百屋』か」

そのころ高木海は図書館に居た。

哲学書の棚には、宮澤睦の『キリストの哲学』が確かに存在した。それは通常の本よりも遥かに巨大で、見た目にもかなりの重量感があった。

彼は指に力を入れて、その内の一つを引き抜いた。

その瞬間、仄かに紙の匂いと埃の臭いとが混ざりあったかのような懐かしい香りがした。すると、ふと高校の図書室が高木の脳裏に浮かんできた。

高木の母校は暁や亜美と同じ月代学園である。月代学園の図書室はかなり広い部屋だった。蔵書量も田舎の小規模な図書館よりは遥かに多かっただろう。高校三年間ではその全てを把握するのは不可能に近い。さらに今では新図書室が設立されたらしく、前にも増して本の量は増えているのだろう。

高木は新設された図書室を一度見てみたかった。高木が卒業したときには、新図書室の設立は既に予定されていた。流行りの中等一貫校を目指すとかで、五つ目の棟が建設されるという話だった。その一、二階が吹き抜けの図書室になるとのことだった。

高校時代を想う。やはり懐かしいという感情が涌いてくる。どんなに無色で、味気ない過去であっても、それでもその過去は自分だけの過去なのだ。

高木は、王里神会に入信していなかったら自分はどんな高校生だっただろう、と現実ではない理想の過去を追憶した。

沢山の友人に囲まれて、馬鹿みたいな話をしていたかもしれない。学力はあったし、東京大学でも目指して清々しい勉学の日々を過ごしていたかもしれない。彼女なんかを作って、週末には楽しくデートでもしていたかもしれない。

「……ったく、何で王里神会なんか信用しちまったかなぁ……俺は」

高木は誰も居ない哲学書の棚の前で、哀しげに呟いた。

今度は不意に、神屋の姿が脳裏に浮かんだ。

「……」

神屋は数年前の自分だった。少なくとも、そう高木は思っていた。

神屋聖孝。彼は王里神会を何故壊滅させようとしているのか。単なる正義感か？　それだけで、人は恐怖に打ち勝てるのか？

それとも、アメリカの神屋夫妻――神屋聖孝の両親の殺害事件に関わっているのだろうか。

神屋の両親は王里神会の幹部だったのだ。そして、ある日理由もなく夫妻は殺された。高木は夫妻と面識があった。夫妻は宗教を通じて、真の幸福を見いだそうとしていた。それだけでなく、それを広めて幸福な国を作れると信じていた。善良で、良い人たちだった。あの頃は、みんな王里神会を信じていた。

……本当に夫妻が殺されたのには、理由がなかったのだろうか。知ってはいけない何かを知ってしまったのではないだろうか。

数学の最重要課題の一つ、リーマン予想。その研究資料が盗まれたことから、犯人の夫妻殺害の動機はリーマン予想証明の賞金を得るためかと噂されたが、本当か？　そのような、余りに単純で愚かな理由か？

仮に、王里神会が夫妻の殺害に関わっていたならどうか。そして神屋聖孝がそれを何らかの方法で知ってしまったのなら。

神屋が両親の敵を討つために王里神会を崩壊させようと考えても不思議はない。それが「敵を討つ」に留まれば問題はない。ただ、神屋の目的が「復讐」ならばどうか。もし、アンチマターが勝利を収めたとして、それで納得するのだろうか。最後に何かをやらかしかねないのではないか？　何かとんでもない企みを図っているのではないか？

「……神屋聖孝だけは、闇に堕ちてはいけない」

高木は、自分の心臓が早鐘のように体内に鳴り響くのを感じた。額にはべっとりとした汗が浮かんでいる。こめかみの辺りを一筋の汗が伝わる。

「あの、大丈夫ですかぁ？」

横を向くと、一人の女子高生が立っていた。月代学園の制服を着ている。よほど本が好きなのか、手には十冊のハードカバーの小説

を抱えていて、かなり重そうだ。この図書館の貸し出し期間は二週間だから、一人で読むには比較的多い量である。そもそも、市民だけが申請して作ることが出来る貸出カード一枚で借りられる冊数は五冊だったはずである。つまり、残りの五冊はこの場で読んでしまうか、あるいは親兄弟の分のカードも併用しているわけである。

「……え？」

「……あ、あの、顔色が良くないようだったのでっ」

女子高生は酷く慌てた様子であたふたしている。

「あっ、ごめんよ。大丈夫だから。心配かけて申し訳ない」

「えっ、あっ、こちらこそすいませんっ！　何でもないのに大丈夫ですかとか言っちゃって、あのっ、……すいませんでした！」

女子高生は慌てた様子のまま、何故か謝って、猛スピードでどこかに消えてしまった。

「……なんだありゃ。最近の女子高生はああなのか？」

高木は思わず笑ってしまった。動悸も汗もすっかり引いてしまった。

……おれはなんつう不気味な想像をしてたんだ。あいつが堕ちるなんて、あるわけがないよな。

高木は自分の行き過ぎた妄想を忘れようとした。

あの神屋聖孝が、復讐心に取り憑かれているとは到底思えない。

高木は静かな図書館を、貸出受付に向かって歩き出した。

オープニングゲーム（後書き）

まさに序盤戦ですね。
読み返すと神屋の解読能力半端ないな、と思いますね（笑）
やりすぎましたかね？

次話は２８日の夜になるかと思います。
更新速度遅くて本当に申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

ミドルゲーム（前書き）

サブタイトルはチェス用語で、中盤戦の意です。

ミドルゲーム

―1―

高木は帰宅するとすぐに昼食を作り始めた。海上コックというのは嘘でも、料理の腕は確かである。高木の家には食材は二週間分あり、保存食を加えれば三週間分はある。豪華に振る舞っても十分な量だった。

トニーは窓から高木の車が戻ってくるのを見ていた。その後十分程、尾行がなかったか観察し、安全だと判断して部屋に向かった。

神屋は二つの暗号を解き、小休止中だった。高木が戻り、昼食にするというので、そのまま休憩を延長して昼食を摂ることにした。神屋は今の調子ならば、あと数時間程で全て解読出来るだろうと考えていた。

暁と亜美は神屋が休憩をしているうちに第三の暗号の点検をしていた。何も変わった点は発見出来なかったが、高木が帰宅したので切り上げることになった。神屋が想像以上のスピードで暗号を解読していたことから、本格的に検証するのは神屋が参加してからということで合意したのだった。

食事休憩が終わると、五人はそれぞれの持ち場に就いた。

高木は図書館から借りてきた『キリストの哲学』に何か細工がないか、全てのページをチェックする作業を行う。

トニーは再び部屋の外へ出て行った。見張りをするのだろう。

神屋は第三の暗号の解読を進める。

そして暁と亜美は第一の暗号と第二の暗号の点検をしながら意見交換をしていた。

「やっぱり第一と第二には何もないと思うんだが」

暁は二枚の暗号を交互に見ながら言った。
「どうして？」
亜美は不思議そうな顔を暁に向ける。
「いや、だって、さすがに暗号自体が短いし」
「……そうだね。でも、例えば数列の並び方に他のパターンがあるとか、日本十進分類法をアメリカ版で出してみるだとか、やってみなきゃ判らないじゃん」
亜美は諦めるなと言わんばかりに威勢よく言った。どうやら亜美は、まだまだ元気なようだ。
「いや、俺も理由もなく半分の暗号文を切り捨てようとした訳じゃないんだ。大体判るんだよ、論理的に考えていけばな。数列が別のパターンだったとしても、十字架と方向と数っていうワードは変わんないんだし、そうなると、条件が厳しくないか？　日本十進分類法を他の分類法に置換しても、やっぱり無理がある。さすがに棚の整理とか掃除とかやってると思うんだ」
「うーん…そっかぁ」
亜美は少し考えて、納得した。暁の話す通り、論理的に先の展開を読むと、ほとんどの可能性は潰えてしまう。
「いずれにせよ可能性は低いんだが、第四の暗号のテキストデータが入ってたＣＤの本物を取り寄せてみたらどうだ？」
暁は少し前から考えていた案を呈した。
「本物？　すり替える前のＣＤってこと？」
「ああ。俺にはどうも暗号文に別の解釈を与えるってのが引っかかってて、別の解釈っていうよりもむしろ全くの別物なんじゃないかって気がすんだよな」
「そうなると、答は音楽の中にあるって話になるよね。もしくは、収録された曲の作曲者、演奏家、指揮者、歴史、演奏されたスタジオ……。確かに隠せる場所は増えるけど……」
「……ああ、やっぱり何か釈然としないよなぁ。こういうのは得てして、身近にあるごく単純なものだったりするもんな……」

灯台下暗し、近くて見えぬは睫という諺があるように、難解な問題の答は思いの外近くにあることが多い。話が広がるに従って、そのようなミスをしたときに時間切れになりやすかった。それを踏まえると、虱潰しをするために無闇に外を出るわけにはいかないのである。

しばらくの間、意見交換も止まり、沈黙が続いた。同室の少し離れた位置に神屋と高木も居るが、二人とも言葉を発さずにいるため、部屋は水を打ったように静かになった。

時刻は既に午後を回っていたが、午前中からずっとこの調子だった。暁と亜美は意見を交わし合い、一通り議論すると沈黙が訪れる。どちらかが新たな案を呈するか、直前に出た案とその反対論の折衷案が出るまで沈黙は続く。しかし、沈黙を破って出された多くの案も、議論百出して結局は仕切り直しになっていた。

「そういえばさ、暁。全然関係ない話をしても構わない？」

にわかに亜美がしじまを破った。

「別に構わないけど、何？」

暁は反射的に了承してしまったが、その関係のない話とやらは確実に神屋や高木にも聞こえてしまうはずである。二人の承諾なしに勝手に容認して良かったのか。特に神屋は集中出来なくなってしまわないか、暁は横目で二人の姿を視認した。二人は何の反応もせずにただひたすら作業をこなしている。問題はなさそうだった。

「こないださ、竜司君からメールがあったんさ」

「竜司？　へー、それで……何だって？」

「いやさ、食事でもどうですかって」

「何だそりゃ。なんでそんな堅いんだ？　ていうか何で食事？　しかもなんで亜美？」

「うーん、いや、わかんない。突然メールが来てさ。あたし、その日から暁とか神屋君と合流する予定だったから断っちゃったけど、何か用事があったのかな」

「他に何か言ってた？」

「本格的に暑い季節になりましたねとか、学校の課題の方は順調ですかとか、時間を取れる日で構わないのでとか」
「……用事があるって感じじゃないな。暑さでトチ狂っただけじゃねぇの？　俺が言うのもなんだが、アイツも相当ヤバい人間だからな」
「あーあ……。何かそれ可哀想。この一件が終わったらお見舞いに行こうね」
「そーだな」
二人は竜司が居ないことといいことに、本人が聞いたら発狂しかねないような会話をしていた。
少し離れた場所で密かにそれを聴いていた高木は、見知らない高山竜司の目論見を理解し、彼を憐れんでニヤリと微笑した。
「そういやあ、前から気になってたんだが、何で竜司はこの事件の登場人物に選ばれなかったんだ？」
「……どういうこと？」
「王里神会は俺のことを亜美の協力者として知ったんだよな。だが、実際は途中参加した静枝は除くとして、竜司も協力者だろ？　同じ協力者の一人なのに何で俺の情報だけ掴んで、竜司の情報は掴めなかったんだろう」
「確かに……。竜司君があたしたちに協力してくれたのは、かなり初期の頃だから、例えば学園の生徒から情報を得たのなら、竜司君の情報を得ていても不思議じゃないよね。むしろその方が自然な気もする」
「別のクラスだからか？　……となると、王里神会の情報源は俺たちのクラスメートだったってことか」
「どうだろうね。複数人から情報を仕入れたなら、竜司君の存在を知っててもおかしくないと思うけど」
「訳分からないな。ただ単にアイツが運が良かったに過ぎないんじゃないか？　俺はそう思う」
暁はそう結論を出すと、再び暗号文に目を落とした。

「……ふーん。しかし、何やっても分かんないよねー。ちょっと気分転換でもしない？」
　亜美は突然そんなことを言う。しかし暁には彼女が予め考えていたことを言ったようにも見えた。
「気分転換？」
「そう」
　応えると亜美はスッと立ち上がった。
「高木さん、ちょっと家の中散歩してきていい？」
　『キリストの哲学』を調査中の高木は亜美の呼び掛けにフッと顔を上げた。
「散歩？　ああ、いいよ。外には出ちゃダメだぞ」
「はーい」
　亜美は返事を返しながら扉の方へ歩いていった。その後を追って、暁もソファから腰を上げる。
　部屋から出ると、亜美は階段を登って行った。
「どこに行くんだ？」
「あたしの部屋」
　……あの、書斎みたいな部屋か。
　暁は前日に少しだけ亜美にあてがわれた部屋を見ていた。壁一面に大きな本棚が並べてあったのを覚えている。
　亜美の部屋の前に到着すると、彼女はドアノブに手を掛けながら微笑んだ。
「名探偵暁君の活躍を期待してるわ」
「……は？　何だよ名探偵って」
「これよ、これ」
　部屋に入ると、亜美は本棚を指差した。
「本棚……」
「この本棚、変なの」
　亜美は何処からかエアコンのスイッチを入れた。真夏の暑さで暖められた室内の空気が、暁の金色の髪を微かに揺らした。

「変？　どこが？」
「当ててみて」
「……ちょっと、考えさせてくれ」
暁は当惑した様子で本棚を見上げる。
「……あ」
暁の脳内で、歯車の噛み合うような音が確かに聞こえた。

―2―

「分かった……けど、一体どういうことだ？　これは」
暁は数歩後退して壁一面の本棚を広く見渡した。本はきちんと本棚に納められている。しかし、奇妙なことに目の前の本棚には一切の隙間がない。更に妙なのは、本のジャンルや内容がカテゴライズされておらず、並べられている順番に規則がない。シリーズものや上下巻の作品すら別の位置に差し込まれている。
亜美は暁の質問に困った表情を返した。この本棚が変であることには気付いたが、それが何を意味しているかは亜美にも分からなかったのだ。
「分からないのか？」
「うん。でも、なんの理由もなしにこんな風にすることはないと思う」
「確かに」
「だから、金庫かなんかを兼ねてるとか……あるいは、鬼頭火山の『地底湖』にあったような隠し階段隠し扉の類だとか……」
亜美は他の可能性を考えたが、思い浮かんだのはその二つだった。事実、鬼頭火山の邸宅には地下シェルターが存在し、その入口は小さな部屋に隠されていた。
「後者はあまり考えられないと思うぜ。そりゃ、高木さんも王里神会の関係者だし、鬼頭が用意してたような地下シェルターを持って

てもおかしくはないが、せめてその程度の規模だ。二階から直接地下に繋がるようなものは造れないだろう。小説なんかに出てくるような大規模な地下みたいなのは、現実にはあり得ない。大昔から在る城とかなら分からないが、現代建築じゃ建築法みたいなのに引っかかるからな……」

「じゃあ、金庫かな。もしくは、金庫室の扉とかね」

「……ああ。だがだとしたら扉を開く術があるはずだ……開けてみよう」

暁はそう言うと本棚をコンコンと軽く叩きながら調査を始めた。

「えっ？　開けるの？」

亜美は目を丸くする。その様子に暁は逆に拍子抜けしてしまった。

「何だぁ？　そのつもりで来たんじゃないのかよ」

「……あー、それもそうだね。高木さんなら開けても怒らないか。じゃ、開けるとして、どうやって？」

暁は口元に手を当て、本棚を見た。本棚自体にはおかしな点はない。妙なのは本の並びと、一切の隙間がないことだ。

「なあ、本の並びが変なんだから、それがキーってことだよな」

「そうだと思うよ。多分バラバラに本を配置してるのが鍵だよ。指定の位置に指定の本を配置するには、棚の隙間はあっちゃマズいもんね」

「こういうのは、普通どんな仕組みが施されてるんだ？」

「……さぁ。決められた本を押すとか……じゃない？」

亜美は記憶を遡り、参考になりそうな情報を確かめる。亜美が読んだ小説や観たテレビ番組で本棚に仕掛けがある話はそう多くはなかった。鬼頭火山の『地底湖』を含めても三作品程度だ。そのいずれも、決められた一つないしは複数の本を本棚の奥に押し込むことで仕掛けが働く仕組みだった。

「参ったな。もし亜美の言うとおりとして、一個だけがスイッチだったら全部押しちまえばいいが、複数なら順番も考えなきゃ……だし」

「逆に言えば、わざわざ本棚に仕掛けを用意してまで隠しているものをたった一個のスイッチで見れるはずがないよね。……となると、複数のスイッチだろうし、多分あたしらじゃ解らないような順番だと思う。それに、そんなに重要なものだとしたら、こっそり覗いちゃおうっていうのも、俄然悪い気がしてきた」

亜美は自分の発見した仕掛けが想像以上の代物を隠しているように思えてきていた。

「……そう……だな」

亜美の言葉を聞き、暁もまた後ろめたさを感じた。

――カチャ。

その時、部屋のドアが開く音が聞こえた。

「大した高校生だな、君らは」

声の方向に二人が振り返ると、高木が後ろ手に扉を閉めたところだった。

「あっ、高木さん」

亜美が声を上げる。

「見つけたのは亜美ちゃんか。しかし、さすがの君もコレは開けられないだろう」

「はい……っていうか、高木さん！　勝手に開けようとしてごめんなさい！」

「いや、別にいいよ。この家は自由にしていいって言っただろ？」

「……やっぱりこの本棚、何かあるんですか？」

亜美は訊いていいものか悩みながらも、高木に尋ねた。

「察しのとおり隠し部屋だ。そして、そこにあるものは……」

高木はそこまで言うと、本棚の目の前まで歩み寄り、バラバラな位置にある十数冊の本を次々と棚の奥部に押し込んで言った。本来なら入らない位置にまで本が押し込まれていくことをみると、どうやら棚に指定された本が入るような窪みが外見には判らないように用意されていたようだ。

高木が必要な分全ての本を押すと、中央の棚がガタンと音を立て

奥にスライドし始める。すると本棚の両脇に人一人が入れる隙間を作り、動きは止まった。

「中を見てみな。王里神会を、これで一網打尽にする手筈だ」

「王里神会を……一網打尽だって……？」

暁は驚嘆の声を洩らしながら、本棚の奥の部屋へ入った。亜美はその後に続き、高木は最後に隠し部屋に入り、部屋の照明を点けた。

「これは……」

部屋が明るくなると暁は周りを見渡した。そこは真っ白な壁に四方を囲まれた六畳程の小さな部屋だった。天井は低く、そのせいか照明は部屋の隅々を照らし、全体的に白が際立って清潔感がある。奥の壁には長方形のデスクが隣接していて、その上には一台のノートパソコンとブックスタンドに支えられた十冊のファイルが置かれていた。その全ては白一色に揃えられていた。

「高木さん、一体この部屋には何があるんですか？　王里神会を一網打尽にするって……」

暁は高木を振り返り、口早に尋ねた。

「パソコンには王里神会の犯罪を裏付ける資料がある。俺が抜けるまでのもののみだが、王里神会はその頃には既に目立たない幾つかの被害を出していた。殺人なんてやり出したのは今年に入ってだが、免罪符みてえなのを法外な金額で信者に売りつける詐欺なんかで自殺者を出したことだってあったようだ。ファイルは王里神会幹部会に配布される資料だ。これも大分前の物だが、いくつか法に触れる記述がある。この部屋のものは全て幹部会を退会したときに抹消させられたんだが、削除する前日に暗記して、ヤツらが俺を気に留めなくなった頃に記憶を元に復元した」

「ふ、復元って、そんな膨大な量の資料を……ですか！？」

「まあな。言ったろ、戦闘以外はオールマイティーだって」

「す、すげー……」

暁は目の前の男が凄まじく優秀な人間であると初めて認識した。考えてみれば至極当然なことではあった。神屋聖孝は十代半ばでテ

ロを起こすような組織のトップにいる人物だ。そして、この高木海という人物もまた十代で、しかも神屋よりも若い齢で幹部になった人物なのである。

「ねぇ高木さん、どうしてこれを警察に出さなかったの？　あたしならすぐに警察に駆け込むな。だって、高木さんも王里神会が悪いことをしてるって気付いたから退会したんでしょ？」

亜美は不思議そうに言った。

「これはごく小さな証拠だ。警察もマスコミも、上層部に王里神会の手の者が居る。俺が退会した頃や、今でさえも、簡単に証拠は握り潰されてしまうさ。……つまり、これは本攻撃ではないんだよ。俺たちはまず、政治界や警察界に強力な影響力を持つ藤原を押さえないといけない。その上でいろんな攻撃を仕掛けて敵の防御策を破り、アンチマターの持つ機密データをぶつける。それでも、ヤツらはおそらくあらゆる不利なデータをデリートするだろう。そこで、こういう小さな証拠を出して敵を逃がさないようにするって訳さ」

高木は亜美に説明をすると、ニヤリと笑った。

「なるほど……あの、高木さんはこういうチャンスが来るって分かってたの？　それとも、信じていた……の？　アンチマターや神屋君が動かなかったら、高木さんは独りで王里神会と戦うつもりだったの？」

亜美の問いを受け、高木は動揺した。痛い所を衝かれた心地がしたのだ。

「……どうだろうな。実は、俺はただ怖かっただけなのかもしれない。怖いから退会して、怖いから証拠をいつまでも手元に抱えてた。アンチマターと神屋がいなきゃ、俺はずっと怖がっていただけだったかもしれない。君たちのように戦いを決意することなんて、あの頃の俺なんかには出来なかったんだな、きっと」

高木は壁に寄りかかって悲しげに言った。過去を悔やむように、高木は虚空を見つめていた。

暁はそんな高木を見て、自らの姿を僅かに重ねた。高木は、自分

と同じ種類の障害を抱えているのかも知れない、そう感じていた。
「……いいじゃないっすか」
暁は高木を見て言った。高木は茫然と暁に視線を合わせた。
「……え？」
「今、戦えるなら、高木さんは何も間違ってはいないんじゃないですかね？　亜美はどうか分かんないけど、俺は高木さんと同じで怖かった。でも、俺も今はなんとか戦おうとしてます。転ぶことは、前に進もうとしていた者にしか出来ない……俺の友達がそんな話をしてましたよ」
暁は静かに話した。まるで自分自身に語りかけるように。
「あたしだって、怖かったよ。それに、あたしはいろんな人を巻き込んじゃったから、重い責任を背負ってるような……そんな感じがする。でも、あたしの親友はもっと責任を感じてるんだと思う。だから、あたしばかりが弱いままじゃいけない。暁だって、あたしが巻き込んだ。でも、命懸けの戦いに協力してくれているし、暁が居なきゃあたしはきっと精神的に参ってた。たった独りで前に進める人なんていないとあたしは思う。高木さんだって、暁だって、あたしだって、みんなそう。……チェスは一つの駒だけでは勝てないでしょ」
亜美はそう話すと、口角を上げる。
暁は恥ずかしくなって顔を逸らした。
高木は茫然と数秒間二人を見て、次第に笑顔を取り戻した。
「ははははッ、なるほど。俺の選択は正しかった。君たちの話を聞いたら、そう思えてきたよ。ただ、転びっぱなしじゃ何にもならないよな。この勝負、絶対に勝とうぜ、みんなで……な。さて、そろそろ戻るぞ」
「はい！　頑張りましょう！」
亜美は快活な声で応じた。
「しかし亜美……お前な……」
亜美が振り返ると、暁が笑いをこらえている姿が目に映った。

「……えっ？　何!?　何か可笑しいことした？」
「くくく……いや、亜美さぁ。チェスは一つの駒だけでは勝てない……とか……お前の場合、駒がいくつあっても誰にも勝てないだろ～が……」
「なっ……」
「俺なら必要な駒二つあればお前に勝てる自信があるぜ」
「もぉ～！　だからぁ！　あたしは凄く強いんだってば！　シズが言うんだから確かでしょ！　神屋君が強過ぎるからあたしが弱く見えるの！」
「はい、はい」
「信じてないでしょ」
「……あーあ、イタすぎるな」
「ああ！　もういいもん！　暁なんかキライ！」
部屋に暁の哄笑する声が響く。

そしてこの頃、神屋聖孝は第三の暗号の解読を完了しようとしていた。

ミドルゲーム（後書き）

次話は６月１１日を予定しています。

ツーク・ツワンク（前書き）

サブタイトルはチェス用語で、「相手から直接の狙いはないにもかかわらず、自ら状況が悪化する手を指さざるを得ない状況」の意です。

ツーク・ツワンク

―1―

暁たち三人が部屋に戻ると、神屋は第三の暗号文を再び確認した。

?「新・上・満・下」を一度に掲げる場所

これはそれぞれ月の形を表していた。「新月、上弦、満月、下弦」を示し、それを校章として使っている月代学園が答である。

?「日没する向」　ビブリオテカ

日が落ちる方角は西。西はスペインの漢字表記の頭文字である。そして、ビブリオテカはスペイン語であり、意味は「図書館」。これが答である。

?孤ドクなエイ君

「猫」「注意」「隣人」「オペラ」「自然」

この問のポイントは「ドク」と「エイ」がカタカナ表記である点だ。これは「独」と「英」の強調であり、それぞれが「ドイツ語」と「英語」を意味している。後に続く五つの単語をドイツ語と英語に変換し、頭文字を順に読む。そうやって導かれた単語「カノン」が答だった。

?ＰＸＴＨＲＢＲ

あ　う　え　う　え　う

これは、まずは下段の母音をローマ字に直す。次にそれらのローマ字を一文字ずつ上段のアルファベットの適切なところに挟み込む。導かれたのは人名、「パッヘルベル」だった。

?「陰になり日向にならず」

これは「陰日向になる」という言い回しを改変したものである。「陰日向になる」の意味は「裏で支えたりして、援助すること」である。「陰になり日向にならず」とは、ここではパッヘルベル作曲の『ジーグ』を指した。有名で人気の高い『カノン』に対して、ほとんど知名度がないにも関わらず、どちらも同一の作品『カノンとジーグ・二長調』の一部であるからだ。

?50＝L　100＝「1」　500＝「2」　1000＝M

数字は基本的に「?・?・?」のようなアラビア数字に直すことが可能である。そして、このアラビア数字にはアルファベットと同じような形を持つものが存在する。例えば、「1」を表すアラビア数字「?」は、アルファベットの「I」、「5」を表すアラビア数字「?」はアルファベットの「V」、「10」を表すアラビア数字「?」はアルファベットの「X」というように、アラビア数字の一部はアルファベットに酷似しているのだ。同じ要領で問題文の四つの数字はアルファベットに似た形に変換出来る。その結果、「1」は「C」、「2」は「D」となる。続けて読むと「CD」つまり、コンパクトディスクである。

「暁、第三の暗号を解いた。十中八九答えは合ってると思うよ」

神屋は戻ってきた暁に向かって言った。

神屋は暗号の答えには自信があった。しかし、第三の暗号は完全

解答が出来ない類の暗号だということも彼には分かっていた。
「神屋、第三の暗号の答を出したのか？」
「暗号の答は……ね。だが、残念ながら第四の暗号が何なのかは明確には分からなかった。とはいえ、君からあらかじめＣＤだと知らされていた分、そこは問題なかったかもしれないけれど。暗号の答を繋ぎ合わせると、月代学園の図書室にあるパッヘルベル作曲のジーグのＣＤじゃないかとは思うが……」
「ああ、正解だ。正確にはパッヘルベル作曲のジーグを単独で収録しているＣＤだけどな」
「ふうん……なるほどね。しかし……僕も君たちからのヒントがなければもっと時間を使っていただろう。この手の暗号も子供じみているとはいえ、厄介だね。……さて、第四の暗号に取り掛かろうかな」
「その前に一つ良いか？　現段階で、何か手掛かりになりそうなことは掴んだか？」
「……そうだな、暁もさっき話していたと思うけれど、僕も第一、第二の暗号は切り捨てて構わないと思う。僕に送られてきたメールが真実を述べているならば、暗号の制作は今回僕らが探しているものと同時に作られたのだろう。しかしその割には第一、第二の暗号にはあまりに付け入る隙がなさ過ぎる」
そう言うと神屋は高木の方を見た。高木は『キリストの哲学』を調べていた。神屋は暁に視線を戻すと、続ける。
「第一、第二関連で何かあるとしたら、高木さんの調べているアレだろう」
高木の手にしている『キリストの哲学』は、言わば第一の暗号と第二の暗号の楔である。そこに別の意味が存在する余地は十分にあった。
「……そうか。……そんじゃあ、俺は亜美と第三の暗号を調べる」
「ああ。それと、これを使うといい。さっき作っておいた」
神屋は一枚の紙を暁に手渡した。それは第四の暗号文の複製だっ

た。
「おっ、サンキュー。そんじゃ、俺らは第三と第四を片付ける」
「ああ。僕は第四の暗号に挑戦してみよう」

高木が図書館を出てから数分が経った頃、晴れ晴れしい表情で図書館へ訪れた男がいた。
「……よし、完璧だ。俺なら出来る」
三冊の入門書を抱え、高山竜司は読書スペースにどっしりと座った。
竜司は自らが厳選した三冊の本を順に眺めた。

『小説家入門』

『文学賞に入選するには』

『キミもベストセラー作家になれる！　～七つの法則で読み解くデビューへの道～』

竜司はニヤリと笑い、ジーンズのポケットから数時間前にプリントアウトしたばかりのプリントを取り出した。

○第５回　ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ　文学賞

●応募要項のお知らせ●

対象：未発表の自作小説。ジャンルは問わない。

テーマ：「人間」

原稿規定：文字数－６０００～８０００字。

応募資格：１５歳以上３０歳以下のアマチュアに限る。

応募受付開始：２００９年８月２０日

応募締切：２００９年９月２０日

賞と賞金：

・ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ賞１名　賞金５０万円

・選考委員特別賞１名　賞金５０万円

・ノミネート作品中、特に優秀な作品３作品に優秀賞　賞金１０万円

竜司が「ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ　文学賞」の存在を知ったのは数時間前のことだった。大型検索サイト「ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ」のユーザーの一人である竜司は、サイトのトップページで大々的に宣伝されていた「第５回　ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ　文学賞」に目を留めた。

そして彼は閃いた。今の停滞した状況を打破するには、これしかない……と。

竜司にとって篠原亜美のイメージは「文学部」だった。そして、恋敵である暁が亜美と仲良くなり始めたのも、文学部がきっかけである。

亜美を自分に振り向かせるためには一体何が必要か。答えはパソコンの液晶にはっきりと映し出されていたのだ。

「……たかだか数千の文字列だぜ。神よ、これが無理だと思うか？　否、こんな簡単なお話はありませんよ。これが笑わずにいられるか？　くくくく……」

ぶつぶつと独り言を洩らしながら竜司は入門書の一冊を手に取った。

……亜美ちゃんは元文学部だ。この文学賞もきっと知っているはず。これで俺が入選でもしたら、絶対に俺に振り向いてくれる！恋の方程式は解くんじゃねえ、自ら作るんだ！

竜司は知らなかった。亜美が同じ文学賞を狙っているということを。しかも、それは恋敵だと思っている暁との合作であるということを――

――午後六時を過ぎた頃、暁たちは再び休憩することとなった。気付くと四人は六時間以上も何かしらを考え続けていたのだ。

暁は精神的に疲弊していた。今回の暗号は今までとは種類が根本的に異なっているからだ。先月までの鬼頭火山との暗号勝負では、思考が停滞してもヒントは豊富にあることが多かったし、やるべき作業が明確で先の展開がある程度は読めるものだった。しかし、今回はあまりに不明瞭な点が多すぎる。

亜美は十数分前からソファで眠っていた。どうやら暗号文を調べながら寝てしまったようだ。それを見て暁は神屋と高木に休憩を提案した。まだ初日である。早々に決着を着けたい問題ではあるが、現時点で体力と精神力を使い果たしてしまうのはあまりに早計だった。

神屋と高木は、少し前に部屋に戻ってきたトニーと談笑している。そのトニーはというと、昼過ぎからずっと二階には居なかった。

……トニーは一体今までの間どこに居たのだろうか？

必然的に三階に居たということになるのではあるが、暁はまだこの家の三階は見ていない。彼がどの部屋に居たのかは見当もつかなかった。

対象的に、神屋と高木に関しては常に暁の近くにいた。時々退室することはあったが、この部屋はトイレが隣接しているわけではな

い故に、それは他の人間にも言えることだ。
休憩前、高木は相変わらず『キリストの哲学』を調べていた。否、調べていたというよりは読んでいたという方が正しい。高木は初め、落丁を調べるかのように本自体をくまなく注視していた。しかし、途中からは内容も併せて調べているようだった。
一方、神屋は第四の暗号の解読に思いのほか苦戦していた。休憩に入った今もなお、答にはたどり着いていないようだった。

結局、この休憩はしばらく続くことになった。亜美が起きて、全員で夕食を食べ始めた午後九時まで、何も進展がなく時は過ぎていった。

―2―

亜美はバスルームから出て脱衣所で髪を乾かしていた。
夕食を終えると、それぞれ湯にでも浸かり、疲れを取ることになった。
この家にはバスルームは二部屋あった。一階のエントランスホールを挟んだ北と南に一つずつだ。高木は亜美が女性ということ配慮して普段は使っていないバスルームを掃除しておいたのだ。
高木の家は外見よりも遥かに広い感じがした。
……本当に三千万で買えたのだろうか？
亜美にはそんな大金の価値など、見当もつかなかった。
数分の後、亜美がエントランスホールに出ると、向かいに神屋の姿が見えた。どうやら神屋はもう一つのバスルームを使っていたようだ。改めて神屋の容姿を見ると、かなり端正な顔立ちであるのが判る。少々幼さが残っているような気もしなくはなかったが。しかし、長身であるが故か、まるでモデルのようである。佐藤静枝と並

んで歩いていたら、さぞ絵になる光景だろう。
　声を掛けようと亜美が手を挙げると、丁度神屋も亜美に気付いた。
「やあ、疲れは取れたかい？」
「うん。早く鬼頭火山の居場所を突き止めないとね」
「鬼頭火山は死んでいるかもしれないよ。どちらにせよ、僕らが見つけようとしている人物は自らを『鬼頭火山』と名乗っているわけだけれど」
「そうね。あるいは、誰も居なかったりして」
「誰も居ない？」
　神屋は亜美の言葉に目をしばたたいた。
「つまり、アンチなんたらって人たちが鬼頭火山という幻を抑止力に使ってるってことはないかしら」
「……面白いことを言うね、篠原さんは。僕は佐藤静枝に確認を取ったんだ、神崎冬也本人の死体を見たかって。どうやら死に姿が酷かったとかで、奥さんに止められたらしいけど。つまり、現段階ではどれが真実か判らない。ただ、鬼頭火山の親族はほとんどこぞって行方をくらましているっていうのも事実なんだけどね」
「ふーん。宮澤さんは？　鬼頭火山の先生の。連絡取れないの？」
「ああ。行方知れずだ。メールによると、あの人が最後に鬼頭火山に会った可能性がある上に、どうやら王里神会の情報を少しは入手出来る立場にあるみたいなんだけど」
「使えないオジサマね。協力してくれてもいいじゃん、まったく」
　亜美は頬を僅かに膨らました。
　メールが真実ならば、確かに宮澤睦は夜光公園にて、暁に虚偽のシナリオを話した人物である。そうなれば、この事件に一枚噛んでいることになる。
「ところで、篠原さん。第四の暗号なんだけれど、僕なりに答は出したんだが、合ってるか確認していいかい？」
「あれ？　もう解いてたんだ？」
「ああ。暁も疲れてるようだし……」

神屋は服のポケットから第四の暗号の書かれた紙を取り出し、亜美に見せた。

Ｓａａｒ
ａｂｌａｔｉｏｎ
ｇａｕｃｈｅ
ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ
ｏａｋ
Ｂａｈａｍａ
Ｊａｎｕｓ
Ｓａｃｃｈａｒｉｎ

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる？』

解答「１」

◎風化した未熟なヤヌスは言った。『騙されるなよ。リンゴが二個ある。そこへ猫がやってきてリンゴを一つくわえていった。さていくつ？』

解答「３」

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

解答「５」

◎ある化学者が言った。『ある物質をいじくった。すると炭素５６水素４０窒素８酸素２４硫黄８という組合せになっちまった。元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』

解答「８」

篠原亜美へ

よくぞここまでたどり着いたね。約束の日にちまで、もう残りわずかではないのか？

これが最後の暗号だよ。

待ってるよ。では

鬼頭より

「えっと……ここまでが各々の問の解答。これを分類した単語群に照らし合わせて……」

unbeliever　1
oak
Saar

ablation　3
gauche
Janus

Bahama　5

Saccharin　8

「この数字がそれぞれの英単語の『～番目』を示すとすると、数字の示すアルファベットだけを抜き出すと……」

ｓ　ｏ　ｕ
ｎ　ｕ　ｌ
ｍ
ｉ

「さらに、これを意味のある単語に並び替える。すると、一つの単語が導けた。『ｌｕｍｉｎｏｕｓ』意味は『夜光性の』かな」

神屋は自分の解読手順を事細かに亜美に伝えた。

それを聞くと、亜美は驚嘆の表情を見せた。

「スッゴーイ！　あたしたちが何日も考えて解らなかった暗号をたった一日で解読しちゃったんだ！」

「いや、君たちは状況が状況だっただけに時間が掛かったんだろう。タイムリミットもあれば、雷で停電だとか、それに鬼頭火山が死んだというショックもあった。対して、僕の場合障害がない上にヒントだらけだったからね。……それで、この『ｌｕｍｉｎｏｕｓ』という単語、僕にはさっぱり意味が解らないんだが、君たちならピンとくるものなの？」

神屋としてはここまで時間が掛かったのはまさに単語の意味付けのせいだった。「ｌｕｍｉｎｏｕｓ」がどこを示すのか解らない神屋にとって、単語群と数字の関係を導くのは厳しかった。

「ああー……それは『夜光公園』のことだよ。あたしんちの近くに

ある地味〜な公園。綺麗な場所だけどね」
「……なるほど。そこで暁は宮澤睦にあったわけか。会ったのは暁と……？」
「暁だけ」
「……そうか。よし、ありがとう。これでとりあえず、明日からは君たちに協力出来そうだよ。僕が解き直したのが役に立てば良いが……」
「そうだね、早く手掛かりが掴めれば良いね。……というよりも、進展がないと退屈だし」
亜美はそう話すと、伸びをしながらリビングに向かって歩いていった。
「確かに……そろそろ刺激が欲しい頃合いだね」
後に続く神屋は聞こえるか分からないくらいの声で、そう返した。

この後、暁、亜美、神屋、そして高木、トニーを加えた五人はそれぞれ意見しながら、暗号と向かい合い続けた。しかし、結局この日に彼らが成果を上げることはなかった。
翌日に備え、五人はそれぞれの部屋に帰っていく。そして彼らは次々と微睡みに身を沈めていった。
——しかし、高木海だけは熱いコーヒーを片手に、リビングの大部屋に戻ってきていた。
彼はテーブルの前に腰掛ける。テーブルには読書用の電気スタンドと巨大な本が一冊。宮澤睦著『キリストの哲学』だ。
高木は左手に持ったコーヒーカップを口元に持っていくと同時に、栞を挟んだページを開く。
「……しかし、宮澤睦ってのは、なんてやつだ」
高木は呟くと、コーヒーを一口飲む。
……こんなとんでもない文量を書いているのに内容は決して希薄にならない。これが神崎さんの師、宮澤睦の知識の深さか。

高木は宮澤睦の膨大な知識に驚愕しながらも、『キリストの哲学』を読み進めていった。

彼はこの本を明日までに読み終えておきたかった。彼は決して文字を読むのが遅いわけではないが、さすがに内容を細かく確認しながら読むのには相当の時間を要する。何かあってからでは遅い。自分の出来ることくらいは全力で取り組むつもりだった。

「……ん？」

ようやく集中し始めると、高木は読んでいたページにある異変を感じ取った。

「……」

……何だ？　今何かあったような……。

「……あ、何だこれ」

高木は自分の視界で起きた小さな異変に気が付いた。それは、普通に本を読んでいれば全く気付かないであろうものだった。

「これって……まさか」

……待て。神経質になりすぎか？　こんなごく些細なものが、何かヒントにでもなるのか？　いや、冷静になれ。あまりに些細であるとはいえ、こんなものが普通、本に存在するのか？

「まさか、今までのページで俺は『コレ』と同様のものを見逃していたのか」

高木は一ページ目に戻り、最初から順にページを調べ直し始めた。

……あれと同じものがもう一つあれば、間違いない。

高木は電気スタンドの向きを直し、神経を集中させた。

胸の奥の早鐘が体中に響いていた。

ツーク・ツワンク（後書き）

次話は２５日を予定しています。

エンドゲーム（前書き）

サブタイトルはチェス用語で、終盤戦の意です。

失礼しました汗

前回、ツークツワンクの－２－が今回の－２－にすり替ってましたｗ

修正しましたので、よかったら再読してください。

話がつながらなくて変だったかと思います。

申し訳ありませんｍ（＿＿）ｍ

エンドゲーム

―1―

八月十二日

暁が目を覚ましたのは、既に昼に差し掛かろうという時間だった。あまりの寝苦しさに目を覚ましたのだ。昨夜、涼しい風が窓から吹き込んできていてクーラーを効かせなかったのが裏目に出た。おまけに風でカーテンが半分閉まっているから風の通りは悪かった。カーテンの隙間から差し込む太陽光がやけに眩しく、暁はすぐに起き上がった。

「やべ……寝過ぎた……」

暁は急いで支度を済ませ、部屋を出た。

……高木さん朝食作っちまったかな。悪いことしたな。

部屋の前に到着すると、暁は大扉を開けた。

「ごめん、遅れ……って、あれ？」

部屋には神屋と亜美の姿があった。二人ともテーブルの周りの椅子に座っている。しかし、高木の姿は見えない。

「あっ、起きたんだ暁。おはよっ」

亜美が腕を挙げて挨拶する。

「ああ、おはよう。高木さんは？」

「まだ寝てるよー」

「え？　高木さんも寝てんの？」

「高木さんもって？」

「いや、俺も今まで寝てたからさ……」

昨日は早く起きて、朝食の準備までしていたので、高木が昼まで寝ているのは不思議だった。

「なあ神屋、トニーは？」
暁は今度は神屋に訊いた。トニーは昨日ほとんど部屋に居なかったが、一応所在は確認しておいた方がよいだろう。
「今はコンビニに。高木さんが居ないから昼食を買ってきてもらってる。勝手にキッチン弄るのも気が引けたしね」
「あの人がコンビニって、なんかウケるな……」
「『冷ヤシ中華デイイデスカ』とか言ってたよ」
「ははは……」
暁は神屋の隣に腰掛けた。
ふとテーブルに目を落とすと、一枚のメモがある。メモにはこう書いてある。

「サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ」

メモの隣には『キリストの哲学』が置いてあった。
「……何だ？　このメモは」
暁はメモを手に取り、まじまじと文面を見つめた。
「僕や篠原さんが起きた時には既にテーブルに置かれていた。何のことだかさっぱり解らないが、トニーさんによると高木さんは早朝までここで何か作業をしていたみたいだ」
「マジか！？　じゃあ、コレって……」
「高木さんが何か突き止めたのかもしれない。朝から僕らはそれが何なのかを考えているんだが、よく解らないな。高木さんを無理に起こすのも悪いし、とりあえず保留かな」
「……そうか。しかし……最後の扉は夜にしか見えない……か」
暁は新たに現れた謎の一文に胸の高鳴りを感じた。しかし、逸る心とは裏腹に、その一文の意味は全く掴めなかった。

高木が目を覚まし、部屋に訪れたのは、午後二時を少し過ぎた頃

だった。
「……ああ？　あれ？　暁君に亜美ちゃんに……神屋、トニー……。みんな起きてたのか……？」
扉を開けた高木は暁たちを見渡して、そんなとぼけたことを言った。
それを聞くと神屋がすぐに返す。
「何言ってるんですか、高木さん。もう二時ですよ。ずいぶんと長い間寝てましたね」
神屋の言葉を聞くと、高木は次第に驚きの表情になっていった。
「おいおい……マジか！！　スマン！　仮眠のつもりがついつい熟睡しちまってた。飯は？　もう食ったか？」
「トニーさんにコンビニで買ってきてもらったんで大丈夫ですよ」
「そっか。ワルいな、俺が生活面はサポートするわけだったんだが……」
高木は申し訳なさそうに頭を掻きながら、椅子に座った。
「高木サンノ分モアリマス」
トニーは一つ残った冷やし中華をコンビニの袋に入ったまま高木に手渡した。
「お、冷やし中華か、美味そうだな。サンキュー」
礼を言いながら高木はバリバリと音を立ててプラスチックの容器に被さったフィルムを剥がした。
「ねえ高木さん、徹夜で何やってたの？」
亜美が半分身を乗り出して言った。
「……ん。ああ、そうだ！　話すことがあったんだ！　暢気に飯食ってる場合じゃないな。みんな、メモは見たか」
場の皆が同時に頷く。
「俺は日付が変わる頃、宮澤睦著の『キリストの哲学』にある細工が施されていることに気が付いた」
「……細工？」
「ああ。四百ページを読み終えたぐらいだったか……『カトリック』

という単語の『カ』の文字の隣に一ミリにも満たない直径の極小さな穴があったんだ」

「穴……ですか」

暁は高木の言葉を繰り返した。それが何を意味するのか、おおよそ見当がついてきた。

「俺も偶然発見したんだ。ページをめくるとき、電気スタンドの光がその穴の部分に小さな陰を作り出した。俺は最初、製本段階で出来た穴かと推理したが、意図的に穴を作ったという線もあった。そもそも本に穴があるなんてことは、ありそうでいてほとんど有り得ないんじゃないかと思ったんだ。そして一ページ目から集中して調べていくと、『サクリファイス』という単語の『サ』の文字の横に同じような穴を見つけ出した。同じ要領で全ページを調べると、合計十七箇所に穴があった。示された文字を順に抜き出すと一つの文が完成した」

「……最後の扉は夜にしか見えない」

暁は高木の言葉を先回りして言った。

「そういうことだ」

高木は暁の言葉を肯定すると、何もなかったかのように遅めの昼食を摂り始めた。

神屋はしばし何かを考えた後、おもむろに話し出す。

「しかし高木さん、よく見つけましたよね。インクの点とかならともかく、穴なんて。お手柄じゃないですか、大きく前進しましたよ」

「ああ、サンキュー。……でもな、神屋。お前、その先まで悟っちまったんだろ」

「……まあ、そうですね。でも、ゼロとイチではやはり違いますよ」

「何にしろ、役に立って嬉しいね」

高木はズルズルと音を立てて黄色い細麺をすすり、神屋と話す。

「えっ！？　神屋君、その先って？」

亜美は二人の会話の意味が解らず、思わず訊ねていた。しかし、暁もまたこのとき高木の言った「その先」の意味を解ってはいなか

った。
「この発見だけど、僕たちが見つけるべき答の要素ではないと思う」
「ええ！？」
亜美は声を上げて驚いた。彼女は高木の見つけた文が鬼頭火山の居場所を示す暗号文であると期待していたのだ。
「あまりに判りづらいと思わないかい？　それに、もし暗号の中身まで王里神会が知っていたら、この本は王里神会に回収されていた可能性があった。……つまり、僕が何を言いたいのかというと、『サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ』というこの文は、言うなら『ボーナスアイテム』なんだと思う」
「ボーナスアイテム？」
「うん。真の答を見つけるためのヒント。無くても真の答にたどり着けるが、あった方が楽になる代物ってことさ」
「……これが、この文が道標になるかもしれないってこと？」
「なるさ、間違いなく。高木さんの見つけた情報は、既に幾つかのヒント的要素を与えてる」
そう言うと、神屋はメモを全員が見える位置に置く。
「この一文が暗喩だと仮定する。そして文節に分ける。すると雰囲気くらいは掴める。『最後の』は鬼頭火山の居場所を示す情報、『扉は』は対象が内と外を繋ぐものであること、『夜にしか』は対象を記録している媒体が夜を表すような状態になりうるものであること、『見えない』は不可視性であること。……もちろん、全て仮定と一例だ。他にも理解の仕方と組み合わせはいくらでもある」
ここは、暁や亜美にとって、さすがだと思うばかりだった。まだその場の誰もが、新たに得た文の解読方法を思い付いていなかった中、ただ一人神屋聖孝だけは解決策を見出していたのである。
神屋の言葉を聞くと、亜美の表情はぱっと明るくなった。
「その理解の仕方と組み合わせをあたしたちで次々に提案していけば、答は見つかるかもしれないね」
「そういうこと。パターンは相当数あるけど、無限ではない。あく

までも有限の範囲なんだ。しかも、この文は『条件』をはっきり指定している」

「夜……？」

「そうだ。『見えない』ものを見るには『夜』を作らなければいけない……おそらくそういう意味だ。篠原さん、夜といえば何だろうか」

「暗い。太陽が沈んでいる間が夜なら、夜はきっと暗い」

「そう。夜の最大の性格はその闇にある。それを暗示している可能性は……高いはずだ」

停滞していた雰囲気が今日、高木の発見と神屋の指針によってゆっくりと動き出した。

二

八月十三日

時刻は午後一時。新たな方針が決定してから、もうすぐ二十四時間が経とうとしていた。高木の発見で動き出した流れも、いまだに有力な情報を得られないことから、再び停滞しようとしていた。

「うーん……」

誰かが低く唸る。昨日の晩辺りから今まで、部屋に響くのは誰かしらの苦悩の唸り声のみである。

誰もが暗号文と一見して不毛な睨めっこを続け、無限に思えるような思考の一本道を走っていた。

暁はテーブルに向かって突っ伏し、頭を抱えている。ヒントを得たことが焦燥感をより濃厚にしていたのだ。

神屋と高木はノートパソコンを使って、答に関係しそうなワードをひたすら検索し、情報をかき集めている。しかし、それによりもたらされた効果はあまりに希薄である。

そんな中、久方振りに亜美が快活な声を上げた。
「ねえ、夜の特徴といえばやっぱりどう考えても真っ暗ってことよね？　単に部屋を暗くしたって、私たちの持っている暗号はなんの変化も見せなかった。じゃあさ、ブラックライトでも当てるってのはどお？」
亜美は右手の人差し指を立てている。
「ばーか」
暁は気だるそうな声で亜美の新案を却下した。
「えー！？　何でー？」
「いやいや、集中しろや。初歩的なミスだろーが」
「……ん？　どこが？」
「まず、特殊な塗料や印刷が行えるのは第一と第三の暗号の原盤だ。第三は複製前のものが手元に無い。第三の原盤が必要ならば既に俺たちは詰んでいる。第一の暗号は鬼頭火山がお前の目の前で書いた。つまり、俺たちが持っている暗号には、特殊な塗料やインクで細工をする隙はなかったんだ」
「あっ、そっか。……ん～？　いやいや暁、第一の暗号はトリック次第では特殊な塗料や印刷は可能じゃない？　暗号を書く前に、つまり白紙のメモ用紙に何かを書く前に、塗料を使うなり印刷をするなりして、その上から暗号文を書くとかさ」
「んん～？　ああ、なるほど。それなら可能なのか……いや、でも、なんか引っかかんだよなぁ」
会話が途切れると、またも沈黙がやってきた。
……やけに静かだ。
暁は部屋の静寂に一種の寒気のようなものを感じた。まるで雪山にただ一人漂っているかのような、感覚。
……キーボードをタイプする音が消えたんだ。
暁が神屋に目をやると、彼はノートパソコンのキーボードを叩くのを止めて、何やら深刻な顔で思考を巡らせていた。高木もパソコ

ンの画面を眺めていて、手は止まっている。
今まで断続的に、カチカチというキーボードの音が部屋に響いていたので、その音が消えると静寂は深くなる。この空間からは、音が消滅したのだ。
そしてその刹那、静寂が暁に、一つの閃きを運んできた。
……そうか！　俺たちは迷宮を漂っていたんだ！　何故、「あの場所」を調べなかった！？
このとき暁は、世にキエティズム、いわゆる静寂主義が生まれた理由を悟ったような心地がした。
――静寂が騒々しい。矛盾した感覚が脳内を掻き回した。円が螺旋に、渦が一つの流れに変わる。冷えきった部屋に暖かな空気が舞った。――否、体が熱を放っているのだ。
部屋の雰囲気が一転していた。
……俺だけじゃない。他にも気付いた人間が――！
暁は部屋の中をぐるりと見渡した。亜美、高木、トニー、そして……神屋。
暁は神屋を見た。神屋は既に暁を見ていた。
「……よお神屋、どうやら俺たちは感覚を共通したみてえだな」
暁は薄ら笑いを浮かべた。
「そうみたいだ。僕たちが何を間違えていたか……解ったのは僕ら二人だけか」
神屋も笑みを返す。
驚いたのは、亜美だった。
「え！！　な、何！？」
亜美は二人を交互に見る。説明を促すようにして。
「亜美、俺たちは早い段階で『夜にしか』という文節に重きを置いた。文脈から鑑みて、答を見つける条件のように思えたからだ。それはおそらく正解だろう。高木さんの見つけた文の最重要ポイントは『夜』だ。そして、俺たちは『夜』の最大の性質である『暗さ』にも着目していた。ここまでは、多分模範解答だった」

「じゃあ、何を間違えていたのさ？」
「『暗い』の意味をよ～く考えなかったことだ」
「はぁ？」
亜美は目をしばたたいて、呆然とする。そしてすぐさま反論する。
「他より光量が少ない様子……とかじゃないの？　コノテーションを引っ張り出してくればもっと多層的かも知んないけどさ」
「亜美、昼にとって夕方は暗い。夕方にとって夜は暗い。暗さは対象によって程度が違う」
「それで？」
亜美はもう訳が分からないという様子だった。
「暗号文に何らかのの薬品を使って文字を書いたとする。それを見るためには『暗さ』を作る必要がある。それらしい方法は幾つか思い付く。まず部屋を暗くすること。こんなんで見つかるならハナから悩まない。次に亜美が言ったブラックライト説。これは、鬼頭火山があらかじめ細工をしたなら、案外答かもしれない。だが、ブラックライトを用意するのに時間がかかる。もし、俺と神屋の案でダメなら明日辺りに試そう。そして、もう一つの方法。第一と第三の暗号を暗い色で塗りつぶすんだ。第三は無いから第一だけになるけど」
暁は淡々と説明する。ここまで、神屋が口を出してこない。つまり、暁と神屋は、ここまでで見解が相違していないのだ。
「塗りつぶしなら試したよ、鉛筆で」
「鉛筆じゃ駄目だったら？　何で塗りつぶす？」
「サインペンとか、絵の具とか……？」
「何色の？」
「何色って、黒でしょ。暗いんだから」
「黒か。じゃあ、紺や灰色や焦げ茶色じゃ、暗いとは言えないのか？」
「……そっか！　対象によって、それは変わる！　対象は……暗号のメモだから……白！　紺も灰色も焦げ茶色も暗いと言えない色で

はない！　……でも、それがどうしたの？」
「もし、インクの色が関係していたら、『暗い』という表現は抽象的だ。もし、間違った色で塗りつぶしてしまったら、その下の薬品は機能しなくなるかもしれない。何故、そんなミスを招きかねないリスキーなヒントを作ったんだ？　考えてもみろよ、鬼頭火山は自分の居場所を俺たちから隠したいのか？　いや違う、見つけて欲しいんだ。だったらメモを塗りつぶすという方法は間違っている。ミスを誘発しうる媒体は最初からスカだったんだろう」
　暁は言い終えると神屋一瞥した。神屋は深く頷く。
「ねえ、じゃあ、後で『失敗した』ってならないものが答ってこと？」
「そうだ。俺たちの犯した最大のミスは、見つける側が不利な立場にいると早とちりしてしまったことだ。だが、実際は見つける側は優遇されている。『間違った色で塗りつぶして詰みました』なんて馬鹿げた顛末になることは始めから有り得なかった。何故なら、そんなことをしたら、出題者の鬼頭火山が困るからだ。……何度でも、様々な色で塗りつぶしても……いやハナから一発で結果を得られるであろう隠し場所を俺たちはまだ確認していない」
　暁はじりじりと追い詰めるように論理を展開していった。その様子は、さながら探偵小説の推理ショーのようだった。
「僕らは意味を見出すことに躍起になりすぎた。答は足下に転がっていたようだ」
　神屋が暁に続いて語った。そして、遂に暁は結論を呈した。
「おそらく……答は第四の暗号だ。ＣＤ－Ｒの中、テキストデータに隠されている。印刷という手段をとると、そいつは消滅してしまう」
「！！」
　亜美は言葉を失っていた。つまり、ＣＤに答が隠されているならば、暗号文の内容は関係なかったということなのだ。
　高木は一連の会話を聞き、ニヤリと笑い、言った。

「……亜美ちゃん、ＣＤを持って来るんだ。遂に、鬼頭火山の居場所が判るかもしれないぞ」
「は、はい！」
亜美は、ＣＤの入ったバッグが置かれている自室に駆け出した。

―３―

カチャ。
音を立てて、ノートパソコンの右側面の開閉部が開いた。
「これで答が見つかったら、僕が一から暗号を解き直した意味がなくなるな」
パソコンが唸りを上げてＣＤを読み込む中、神屋は自嘲した。
「そうでもない。今までの行為が悪手続きだったことに気が付いたのも、お前が暗号を解き直しても何も発見出来なかったからだ。士気を下げると思ったから言わなかったが、正直俺は暗号文自体には何もないんじゃないかと感じてた。お前だってそうだろ？」
「……フッ、まあね。……さあ、テキストデータをワードに表示してみたよ」
神屋はマイクロソフトオフィスからワープロソフトのＷｏｒｄを呼び出し、第四の暗号文を表示させた。
亜美が画面を覗き込みながら言う。
「それで暁、これをどうするの？」
「俺と神屋の推理では、文字の色を『白』にして文字が書かれているはずなんだ。一般的にテキストデータを表示出来るようなソフトの背景色は白だろ？　だから文字が白色だと、普通には読めないんだ」
「なるほど！　だから『夜』……つまり、暗い色全般に背景色を変えれば文字が現れるってことね！」
「そういうこと。神屋、背景色の設定を暗い色に……」

神屋は背景色をグレーに変更した。画面に映し出された暗号文は途端に見にくくなった。しかし、画面内に見える範囲ではそれ以外に変化はない。

「下にスクロールだ、脈絡のない場所に何かを隠すとは思えない。何かあるなら一番下だと思う」

暁は緊張を押し殺し、神屋に指示をする。

……頼む。何かあってくれ。

その場の全員が、神屋のパソコンの画面に釘付けになった。

Ｓａａｒ
ａｂｌａｔｉｏｎ
ｇａｕｃｈｅ
ｕｎｂｅｌｉｅｖｅｒ
ｏａｋ
Ｂａｈａｍａ
Ｊａｎｕｓ
Ｓａｃｃｈａｒｉｎ

◎不信仰者のオークはザール川にて言った。『二分の一とその半分、それの半分、これまたそれの半分……てな具合に、極限までそれらの数を足していくと答えは何になる？』

◎風化した未熟なヤヌスは言った。『騙されるなよ。リンゴが二個ある。そこへ猫がやってきてリンゴを一つくわえていった。さていくつ？』

◎バハマは言った。『日本の福徳の神とユダヤの神が一緒に旅をした。道中、三人殺された……』

◎ある化学者が言った。『ある物質をいじくった。すると炭素５６水素４０窒素８酸素２４硫黄８という組合せになっちまった。元に比べてどれだけのパワーがあるのか……』

篠原亜美へ

よくぞここまでたどり着いたね。約束の日にちまで、もう残りわずかではないのか？

これが最後の暗号だよ。

待ってるよ。では

鬼頭より

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．×××．ｊｐ

「あった！！」

亜美が大声で叫んだ。

「……これは……ＵＲＬか。どこかのＷｅｂページのアドレスみたいだね」

神屋はすぐにクリップボードにＵＲＬをコピーした。

高木は意外そうな表情で、暁を見た。

「しかし暁君、地名とか電話番号が書いてあるわけではなかったのか？」

「そんな甘くはないっすよ。前提として、俺らが王里神会関係の事件についてまったく知らない時に見つけても大丈夫なようになっているはずですから」

「そうだったな。つまりこの先にはまだ、薄いか厚いかはともかく、何かしらの壁があるってことだな」

「はい。少なくとも、俺たちが神屋と逢っていなければ先に進めないような仕掛けが存在するはずです」

暁が言い終わると、同時に神屋のノートパソコンから音楽が流れ

出した。
「……！！」
皆が一斉に神屋の方を向く。
「アドレスに従ってＷｅｂページを開いたんだが、アクセスすると音楽が鳴るように設定されたページらしい。この曲は……」
パソコンから聴こえる曲は、クラシックの名曲。そして、暁や亜美が幾度となく聴いた曲。
「パッヘルベルのカノン！」
亜美は嬉しそうに言い放った。『カノン』は第三の暗号のテーマである。この曲が流れたということは、正解を引き当てたことと等しかった。
「それで神屋、そのページには一体何が……」
暁はパソコンのディスプレイを覗き込んだ。
「何だ……これは……！」
そのＷｅｂページは至って簡素な造りだった。模様も文字も無い背景に、インターネットの検索フォームのような、文字を入力出来る長方形のスペースが縦に一定の間隔で十七個、そしてその下に「送信」と書かれたボタンがある。
「神屋、これは……？」
「……多分、ページの上部から続く入力スペースに、決められたキーワードを一つずつ入れて、全て入力したら送信ボタンでどこかに送るんだ。キーワードがあっていれば、次のページに進む。そしてそのページに、鬼頭火山の居場所を示す何かが在る……」
神屋は説明しながら十七個全ての入力欄を入念に調べた。しかし、ヒントになる選択肢などは表示されない。
「神屋君、もしかして……問題文とか、ヒントとか、そういうのは無いの？」
「無いようだ。……どういうことだろう？　いきなり十七ものキーワードを訊かれても、分かるはずがない……。僕らは何かミスをしたのか？」

「……もう一つ、ヒントがあるのかな。本に隠された文みたいな何かが」
亜美はテーブルに置かれた『キリストの哲学』を横目に見た。
亜美の言葉で、暁たち一斉に考えを巡らせた。
そして、最初に持論を固めたのは暁だった。
「……いや、何かがおかしい。Ｗｅｂページを見つける前のヒントと見つけた後のヒントを同時に配置したら、あまりに複雑すぎる。俺たちのやったことは、多分間違っちゃいない」
何かミスをしたのか、それともミスではないのか、部屋中に混乱が渦巻く。
次に話し出したのは高木だった。
「少なくとも、あの本にはヒントはもう無いだろう。別のヒントがあると仮定して、それは他の媒体に存在する。だがＣＤも既に調べたし、暗号文に意味があるなら、この二日間で見つかっていないのも少し不自然だ」
高木の意見はかなり的を射たものだった。しかし、状況は依然として謎に包まれていた。
「あたしも、二人の意見を聞いたら、別のヒントは無いって気がしてきた。でもさ、事実としてノーヒントの課題が出されてしまったわけなのね。これって、問題文の無いクロスワードみたいなものでしょ。一体、どの欄にどんなワードを入力すればいいのか、ヒントが存在しなければ、まったく分からないんだよ？」
亜美は現実を見ていた。理論的にはヒントは存在しない可能性が高いが、現実問題としてヒントが無ければこの謎は解けそうにもない。
「クソ、どうしろって言うんだよ！」
暁は声を荒らげた。このままでは何を考えるべきかさえ不安定だった。
「ステイルメイトか……？」
不意に神屋が呟く。

「ステイルメイト……？　将棋で言うところの千日手か……？」
「厳密には少し違う。チェス用語で互いに手詰まりになって引き分けることだ。鬼頭火山……アンチマターがこの勝負にけりをつけられるだけの手筈を整えることが出来て、僕らと合流する意味がなくなったとか……。だから解けない問を出した」
「待てよ神屋、『お互い』って誰だよ。俺たちとアンチマターなら、実質負けるのはこっちサイドじゃねえか。さらに俺たちと王里神会なら……」
「分かってるよ。ステイルメイトは実際は至極不自然だ。だが、第三勢力の存在が見え隠れしている以上何かやむを得ない理由があったのかもしれないと言いたいんだ。解けない問を出したいならＷｅｂページを削除した方が早いしね……」
「……ダメだ……情報量がゼロとか、無茶すぎる」
暁はうなだれた。あらゆる論理が見えざる神に弄ばれている。この蒼天のチェスゲームを支配するプレイヤーは、何を考えているのか。誰もがその答を欲していた。
暁はいつの間にか背後に佇んでいたトニーに視線を投げた。無表情の立ち姿が、暁の勘に障る。
「トニー……あんたよぉ……いくら俺たちの護衛が仕事だからっつっても、少しは考えてくれよ。あんた、一度も意見とか提案とかしてねーだろ」
「皆サンノ邪魔ヲシテハイケナイト……シカシ、考エテハイマス」
「……そうは見えないんだが？」
「デハ、コノヨウナ解釈ハデキナイダロウカ。情報量ハ決シテ、ゼロデハナイ。ソノＷｅｂページソノモノガ、情報ナノダ……ト」
「……何だって？　このページのどこに情……」
暁の言葉は途中で途切れてしまった。暁は、自らの非を認めざるを得ないことをたった今悟ったのだ。トニーの言っていることは真実だった。情報量は決してゼロではない。
「トニーの言う通りだ。情報はＷｅｂページに存在する」

暁はそう言うと、その場の全員の顔を順に見た。トニーの発言の真意を理解した者はいない。

しばしの沈黙が訪れた。亜美、神屋、高木はＷｅｂページを凝視している。それでも、誰もが首を傾げる。

堪えかねて神屋が静寂を破った。

「トニーさん、その情報とは？」

「ページニハ上部カラ下部ニカケテ十七個ノ入力欄ガアリマス。何故、十七ナノカ。意味ガアルトハ考エラレマセンカ？」

「そうか！　十六でも十八でもなく、十七……。そこに意味があるのか！」

十七個の入力欄、そしてそこに一つずつ入るキーワード。その数こそが唯一最大のヒントであると、トニーは語ったのだ。

「そ、それってつまり、十七個のキーワードが互いに関係しているってことよね。例えば『七つ』だったら『月、火、水、木、金、土、日』、『八つ』なら『水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星』みたいに、その数が表す共通の範囲のキーワードを入力する……」

亜美が口早に話す。

「だったら……『十七』って……何だ？」

暁は考えた。「十七」という数の示すものとは何か。

それに続き亜美、神屋、高木も思索する。

カノンが響く室内。最後の一手を打つ闘いが始まった。

エンドゲーム（後書き）

次回は7月9日になるかと思います。
一応大学生になったので、休載はないですw
王里神会篇は序破急の三部構成にしました。
現在急の執筆に取りかかるところです。
公開の方はまもなく破が終わります。

小さな亀裂（前書き）

王里神会編も終盤に差し掛かりそうですね。

小さな亀裂

- 1 -

パソコン画面に表示された最後の道標。突き付けられしは、十七のキーワード。

「十七……十七……」

暁は、眼球を激しく動かし、思考した。この暗号を解くまでの過程で導き出した、十七という数字から連想できる材料は、どこかに存在したか。

「……十七か」

神屋もまた、自ら暗号を解いた過程を思い起こし、十七に関連しそうなものを探った。コンコンと、指で軽く机を叩いて。

「十七、じゅうなな、じゅーなな……、えー、わかんなーい」

亜美は、わざとらしく頭(かぶり)を振った。

「……」

トニーは、パソコンから少し離れた場所で、その様子を静かに眺めていた。その表情には、微かに笑みがこぼれている。

「待てよ。十七……だろ？」

閃きを得たのは、高木だった。高木はメモを手に取り、はっきりとした発音で、読み上げた。

「最後の扉は夜にしか見えない」

その言葉を聞いた神屋が、「あっ」と漏らした。若干遅れて暁が、そして、亜美も気付いた。実際に、この暗号文を導き出した高木だからこそ、すぐに気付いたのだろう。

サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ

この暗号文の文字数は十七。暁の鼓動が高鳴った。
「これだ！！　上から一文字ずつ、『サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ』と入力して送信するんだ」
暁は早口にまくし立てた。が、パソコンの前に座る神屋はピクリとも動く気配がない。「おい」と暁が迫ると、神屋は手でそれを制した。黙ったまま、暁に手のひらを向けている。暁は眉を顰めた。
「冷静になるんだ。ここまできて全てが台無しになるのは困るだろ？」
神屋は、パソコン画面を見つめたまま、流暢にそう言った。
「何が？　どういうこと？」
暁の代わりに亜美が尋ねた。
「まだ、考えれば他にも出てくるかもしれない。もう少し考えよう」
神屋は、椅子から立ち上がった。
「おい、どこ行くんだよ」
暁は、神屋の後ろ姿に声を投げかけた。
「ちょっとトイレ」
そう言い残し、神屋は、部屋から出て行ってしまった。部屋を出る直前、神屋の目が捉えたのは、不気味な笑みを隠すように、顔を手のひらで覆うトニーの姿だった。
「……つうかさ、他にもあるかもしれないけど、とりあえずは『サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ』でやってみない？　俺はこれで絶対合ってると思うんだけどなぁ」
言いながら、暁はパソコンの前の椅子に座った。すると高木が近寄ってきた。
「まぁ、俺もそれで合ってる可能性は高いと思うが、まだやらない方がいいな」
高木はパソコン画面を横目に言った。
「どうしてっすか」
「うん。恐らく神屋は、一回で成功させたいと思ってんだろう」
「……一回？」

高木は腕を組んだ。
「さっきは、こちら解く側は優遇されてると踏んだが、万が一のことを考えたんだ。もし、一回で正解しなければ、もう二度と送信できなくなる仕組みがないとは言い切れない。神崎さんだって、簡単には自分の居場所を明かさない。あくまで隠れていなければならない立場の人間なんだからな」
「な～……るほど」
「別に時間制限があるわけではないし。まぁ早い方が良いに決まってるが、とにかくもう少し考えてからにしようと神屋は言いたいんだわな」
高木の話を聞き、「確かに」と亜美はうなずいた。
「早まる気持ちはまだ胸の奥にしまっときな。とりあえず疲れたから、一旦、休憩したいなぁ」
そう言うと、高木は大きくあくびをして、ソファに向かって歩き出した。その様子を見て、亜美は大きく伸びをした。
「あたしもなんか疲れたなぁ。ここ最近、頑張り続けた気がするしぃ」
伸びをする亜美の体は大きくそれ、浮いた服の隙間から、小さなへそが覗いていた。暁は、すぐにへそから目を逸らし、パソコン画面を睨んだ。
「他に何か入るのか」
「それを今から考えるんでしょ。馬鹿暁」
「きっ……貴様！　馬鹿とは何だ、馬鹿とはぁ」
「馬鹿トハ、役ニ立タナイ」
「うるせっ！　いきなり入ってくんな！」
暁がトニーに怒声を浴びせた、ちょうどそのとき、神屋がトイレを済ませ戻ってきた。
「……え？　あ、入っ……ちゃったん……だけど……」
神屋は、暁の怒声にたじろいだ。何故、自分が入ってはならないのか、必死に考えながら。

「あ、あ……いや、うん、そうじゃなくて、うん……」
暁の表情は、どこまでも曇っていた。

各々は、各部屋に戻り、休憩を取った。
ベッドもソファもないので、座布団だけを敷き、その上に頭を乗せて直に床に寝転んでいた暁は、気付けばふと、亜美のことを考えていた。
先程見た亜美のへそが、脳裏に浮き上がっては消え、暁を惑わした。
……俺は何を考えているんだ。
ここ最近は、常に一緒にいるものだから、思い描こうとすれば、亜美の全体像など容易く想像できた。
越えてはいけない一線を踏み越えようとする脳を、暁は、左右から拳で叩きつけた。しかし、如何せん、脳は頭蓋骨によって守られている。加速する脳の悪戯は、暁に呻き声を上げさせた。
――――その時。

カチャカチャ

暁の部屋のドアが開き始めた。
「――――うっ！？」
「よっ」
笑顔で入室してきたのは、亜美だった。
「ど、どうかしたか、亜美ぃ」
「え？　どしたの？　アハハ」
亜美は座り込むと、十七のキーワードについての話題を振った。
しかし、暁はそれどころではない。頭の先から足の先まで、亜美を舐めるように眺め、血走った目で「あぁ」とか「うん」とだけ返していた。

「ねぇ……どうかしたの」
まじまじと見つめると、とても整った顔立ちであるのがわかる。目は大きい方だ。鼻も高い。肌の色は、どちらかと言えば白っぽい。全体的に細く、痩せ型だが、その割に胸は大きい。
「あっ！！」
「？」
亜美は何かを見つけたようで、スッと立ち上がった。その拍子に前のめりになり、目の前にいた暁には、一瞬だけ見えてしまった。小さな谷間と、それを隠すように被ったブラジャー。白いレースが、大人っぽさを感じさせた。
暁は口の端から涎を垂らし、「何も考えるな」と連呼している。既に、人の目つきではない。亜美が動く度に流動する空気の中に、女の子特有の良い香りが漂った。
戻ってきた亜美の手にぶら下がっていたのは、赤色のペンダントだ。
「これ、凄い綺麗だね。これってさぁ、暁に似合うの？　女の子がつけた方が可愛いでしょ。でも、ちょっと派手過ぎかも」
「……ほ、欲しいの？」
「ん？　いや、アタシには暁がくれた宝石があるからいーよ！　あれ？　宝石だったっけ」
「あぁ、そっか」
亜美は物珍しげにペンダントを眺めた。
「どこで買ったの？」
「あ？　いや……」
「あっ！　そっか！　買ったんじゃないんだよね。貰ったの？」
「まぁ、な」
「へー、竜司くん？　……なわけないか」
「もしそうだったら、悲しいな。色んな意味で」
「……こんなのくれる友達、いるんだね」
それは、短く切った言い方だった。亜美は暁と目を合わせる。そ

の表情は、どこか意味深だ。
「うん、まぁ、ね」
きまり悪そうに、暁は誤魔化した。
「如月愛ってゆう女友達がくれたんだよ」
とは言い出せないのは何故なのか。
暁は金髪を弄り始めた。
「……ぁ……」
「……」
言葉がうまく出て来ない。
……俺は……恐れているのか。
「どしたの」
「いや、なんでも」
亜美の目を見つめた。つぶらで、優しそうな印象を受ける目だ。
暁は、何故か申し訳ない気持ちになった。
……こんなペンダントを持ってきて、俺は馬鹿じゃないのか。
ただ、なんとなく亜美とか神屋に、それとなく自慢したかっただけだ。俺だって、こんな俺だって、女の子からペンダントとか、貰えるんだぞって……。
「……いや、何でもないよ」
「ふーん、そう」
亜美は、ペンダントを床に置いて、立ち上がった。そして、何も言い残さず部屋を出て行った。ドアが閉まる音が無性に虚しい。
「……」
暁が最後に見た亜美の目は、どこか寂しげであった。
……きっと、亜美は気付いたに違いない。
――――このペンダント、女の子に貰ったんだね――――
言葉は無かったが、亜美はそう言っているのではないか。
暁にはそう思えてならなかった。

「なぁ、最高幹部団って知ってるか？」
「さぁ、何だそれ？」
男は、ペットボトル片手にジェスチャーしてみせた。
「それがさぁ、すげぇ秘匿性らしいんだよ」
「はぁ？」
「話によれば、公式には認められていないらしいんさ」
「何が？　どゆこと？」
人々が行き交う交差点で、二人は立ち止まった。信号が赤になったからだ。慌ただしい都市の喧騒。
「だからよぉ、ようするに、アメリカ軍でいうところの、デルタフォース？」
「知らねーよ。何だよ」
男は、怪訝な顔をして、腕時計を見た。
「構成人数も、その人材内容も、誰一人として知らないんだってさ」
「ふーん」
「王里神会最高幹部団、めっちゃ格好良いよな」
「要するに、エリートだろ？」
「バーカ。エリートはタダの幹部止まりさ。最高幹部団は、エリートの中のエリート。超スーパーエリートだよっ」
「何、憧れてんだ。おめえみてぇなザコがなれるわけねぇだろ」
言い捨てると、もう一度、時計に目を落とした。
「いつかなってやるぜっ」
「なぁ、そんなことよりさぁ、もうすぐ映画始まるぞ」
「ええ！？」
信号が青に変わると、二人は走ってその場を去っていった。

王里神会本部ビル。

藤原は、若干の不安を覚えながらも、目の前のドアを開けた。
部屋の中は真っ暗だ。
明かりひとつ点いていない。
「……」
そして、静かだ。
部屋に足を踏み入れると、いやに足音が響いた。ここだけ別世界のように感じる。普段、同じビルで過ごしているというのに。
ドアを閉めると、光は一切の姿を消し、闇だけが残った。どこか、うら寒い室内だ。冷房が作動する音はしないのに、肌寒い。
このままでは歩くのも容易ではない。藤原は、部屋の主に断りを入れることなく、電気を点けた。
「よしてくれよ。電気を消してくれ」
オレンジ色の光に照らされた氷鳥は、両目を腕で覆うようにした。長い間、暗い所にいた彼にとって、光は害となりつつあった。
藤原は、電気を消さず、訝しい視線だけを送っていた。
すると氷鳥は、ニヤリと笑い、奥の部屋に招き入れた。肩まで伸びた髪が揺れる。
「初めまして。藤原君」
ソファに座る藤原の前には、氷の入ったグラスが、隣室の光を浴びて、闇とオレンジの美しきコントラストを奏でている。
「私に会ったということが何を意味するかわかるか？」
「……ええ」
「数日前、君はKに、最高幹部団所属の命を受けた……だから、こうして今、ここにいる」
「……」
「君は晴れて、今日から、最高幹部団の一員だ。恐らくは、功績を讃えられたのだろう。君が王里神会にもたらした利益は多大なものだ。政界に通じるその権力は、我々を常に社会的優位な立場に固定させてくれた」
氷が僅かに動いているのが、反射する僅かな光の歪みで確認でき

る。少しずつ溶けているのだろうか。
「最高幹部団に入るということは、表向きに『いなくなる』ことと同義だ。具体的にどうするのかというと、絶対に最高幹部団に所属していることを口外しない。最高幹部団の存在を示唆するような発言はしない。大きくはこの二つで十分だ。ちなみに、それが守れないと、もれなく殺される。以前、こんな簡単なことができないで死んだ馬鹿がいたせいで、都市伝説的に我々の存在はほのめかされているみたいだが、そこまで深刻に秘匿性が破られているわけではない。今のところ、我々は『存在しない』で通っている。どういうことか、わかるだろう。我々は最後の切り札なんだよ。Kが振りかざす最後の武器だ。我々のおかげでこの王里神会は成り立っているといっても過言ではない。ところで、君はこの最高幹部団の存在に気付いていたか？」
「いえ……、噂程度で耳にしていたくらいで」
「ふん。では不思議に思っていただろう。こんなビルを有する資金元は何なのか……、そう、全て、我々だよ。この王里神会を根元からささえているのは、我々だ。殺し屋を雇う金も、テロの為に用意した爆弾やら銃やらも、資金提供は我々なのだ」
「そうだったのですか……」
「まぁ、今回、君に来てもらったのは、こんなつまらない話をするためではない。これからのことについて、話合いたかったからだ。さっそくだが、V事件について、君の意見を聞かせて欲しい」
藤原は、「V事件」という単語に反応し、肩を僅かに揺らした。
「V事件……ですか」
「活躍したそうじゃないか。機密データが盗まれたとき、警報を鳴らしたんだろう？」
「ええ」
「言うまでもなく、このV事件は、我々の目的の前に立ちはだかる最大の壁と言ってもいい。早急に対処する必要がある」
「……V事件の重要人物として、高校生二人が挙がっていましたが、

正直、私はあまり期待していませんでした」
「……？　どういうことだ？　藤原君」
「いえ、今は大いに期待しています。彼ら二人が鍵を握っていると……」
　ここで一口、藤原は水を飲んだ。年下の者に敬語で話すのは、それも面と向かってでは、いささか言葉が続かない。藤原より二十歳程は若い氷鳥だが、今、この場で立場的に上なのは氷鳥の方だ。
「なるほど。わからないでもないな……、神屋聖孝だろう？」
「！」
「最近、彼が顔を見せないという話は小耳に挟んでいる。そして、彼は、重要人物の外崎暁の知り合いだ……、仲の良い友達という可能性もある。そんな彼が最近になって姿を消し、外崎も自宅アパートから姿を消した……、このことが意味するのは、神屋の裏切りだ」
「そういうことです。恐らくは、篠原も交えて、どこかに隠れているのかと」
「……初めは期待していなかったと言っていたが……」
　藤原は無言でうなずいた。氷鳥は続ける。
「それは何も君だけに限った話ではない。情報元が何なのかを知る者たちは、あまり期待していなかった。なんせ、情報を提供したのがただの女子高生だ。それも、その内容はとても踏み切れるようなものではなかった。初めは、忘れかけられていたくらいだからな」
「ですが、我々にはそれしかあてもなく、結局はその情報を頼りに動くハメになった……が、結果としては、万々歳でしょう。籔（やぶ）をつついて出て来たのが目当てのお宝だった……」
「そう。あの女子高生のおかげだ。私は顔を見ていないがな……、確か、親戚が我が王里神会だったとかなんとか。あの女子高生の名は何だったか」
「……忘れてしまいましたな」
「そうだ！　今、良いことを思い付いた。現在、足取りが掴めてい

ない外崎と篠原を見つける為に、その女子高生をまた利用するんだ。うまく扱えればの話だが」

「ふむ……名案ですな」

「よし、ではさっそく、動いてくれ。女子高生の親戚に話をつけ、女子高生を操るんだ」

命令を受けた藤原は立ち上がった。

すると、思い出したかのような表情でハッとした氷鳥が言った。

「言い忘れていた。自己紹介が遅れた。名は氷鳥。今回のV事件の最高責任者として動いている。君はその補佐役だ」

藤原は軽く返事をすると、足早に部屋を出た。

黒い陰謀が、事件を取り巻く……。

全力で

- 1 -

亜美が部屋を出てから十数分。暁は、ただただ、呆然としていた。
……亜美。
心の中で何を言おうが、現状は変わらない。分かり切っていたが、亜美の名を呼ばずにはいられない。やり場のないこの感情を、どこに、誰にぶつければいいのか、暁はさ迷った。
「……あぁ、亜美のやつ、怒っちまったかな」
――――しかし。
……別に、俺がどんな女と仲良くしていたって、俺の自由じゃないか。実際問題、如月とは仲が良いというわけではないんだし。ましてや付き合っているわけでもない。あのペンダントは、ただの……。
「……」
……つか、まだ、亜美と気まずい関係になったわけではないし。それに、俺は如月なんかよりも、亜美、お前の方が――――
「――――って、何考えてんだ。自惚れんな、暁」
……てゆうかだよ。仮にあれで亜美が嫉妬していたとしよう。もしそうなら、亜美は俺のことが……――――
「……って、ばか。そんなわけねえだろ、暁」
暁は床に寝転びながらニヤニヤしていた。
――――ひょっとしたら、亜美は俺のことが好きなのではないか――――
今までに、何度も考えたことがあった。
一緒に夏祭りも行った。

鬼頭の暗号のときだって、真っ先に頼りにしてきた。
……そうさ。亜美は俺のことが好きなんだ。
しかし、ここである疑問が脳内に浮上する。
「果たして、この俺のどこに惹かれたか」
暁は、自分に男としての魅力などひとかけらもないと、何年も前から認識していた。
特別頭が良いわけではない。背も高くない。運動能力もどちらかと言えば低い。無論、顔はイケてない。が、悪くもない。そう、顔は普通だ。「男は所詮顔」と恋愛を諦めたのは、確か中ニの頃だった。取り立てて良い顔とは言えない自分は、モテることはないだろうと悟ったのである。事実、中学、高校とモテることはなく、今に至る。が、実はモテているんじゃないかと最近になり思い始めたのも事実だ。その辺のしがない男共に比べれば、断然、女子と話してる。そうさ、僕はモテモテだ。

カチャン

突如、ドアが開いた。
「ちょっといいか」
「高木さん」
「そんな驚くなよ」
高木は、将棋盤を抱えて入室してきた。暁のすぐ前に座り込み、盤の上に駒を並べ始めた。
「え？　将棋、やるんすか？」
「おうよ。できるよな」
「あ、はい」
暁も並べるのを手伝った。
「あの、いきなり何で……」
「言っとくが、俺は神屋より強いぜ」
「……」

暁には何が何だかわからない。
「そっちからだ。打っていいぞ」
「えっとぉ……」
「難しいこと考えんな。とにかく本気で来な」
「あぁ……わかりました」
初手、7四歩。
「やっぱ、それがオーソドックスだよな」
高木も続けて打つ。やけに楽しそうである。パチパチパチパチ……
急戦の気配はなく、互いに陣形を組んでいった。
「振飛車大好きマンか、お前」
「はい？」
「ククク」
パチパチパチパチ……
「む、その飛車の動きは……まさか」
「……高木さんは、居飛車大好き哺乳類ですか」
「まさか、石田流本組か」
飛車を7四に、そして桂馬を上げる。これで角が動けば、攻めの理想型と呼ばれる石田流本組が完成する。
「！」
……端の歩を上げてきたな。石田流でやるつもりか。
相手の攻めを読みつつ、高木は王将を深く囲ってゆく。
「左美濃……銀冠に持ってくつもりかなぁ」
「正解」
二人とも、とうとう、王将の囲いのランクは上がりきった。ここからは、上質で大胆な、攻め合いだ。
ずっと眠っていた高木の右銀が、ようやく持ち上がった。
……来たな。切り込み隊長、銀！！
「暁よぉ、残念だが、俺は石田流崩しを知ってんだ……」
「……」
「行くぜ！」

バチィ！！
角頭の歩がつかれる。
暁はその歩を無表情に取った。
「ほう、受けて立つぜって感じか？」
強烈な攻め合いが始まった。
バチバチッバチバチバチバチッバチッ！！
「角を見捨てて、飛車をさばきにやってきたか」
「くッッ」
「やるな」
――――バチィ！！
「くっ……まじかよ。なかなかやるな、暁……！」
「……攻めるッ」
「ダイヤモンド美濃バーサス、飛車……」
暁の表情は、いつになく真剣そのものだ。
打つ手にも力が漲っている。
「飛車の恐怖を教えてやる」
バチィ！！　バチッバチッッ！！　バチバチ！！
「ウオオオ」
高木の強引な攻めに負けじと、暁も徐々に追いつめていく。
その目には怒りにも似た感情が見て取れる。
「――――！？」
しまった！？
一手足りなかったか！？
「やったぁ……絶体絶命だな。暁」
……やばい。負ける。
ぱちん。
「はい、俺の勝ち～。ははは。残念だったなぁ」
「う……う……負けました」
「アハハハハ、でも、結構強かったぞ、お前」
暁は、部屋の隅に移動してうずくまった。

「高木さん……僕を虐めないで下さい」
「……」
「……うぅ」
しばらくすると、暁の携帯が振動した。
「……ん？」
ディスプレイに表示されたメールの送り主を見て、暁は目を丸くした。

王里神会本部ビル、第三会議室。広々とした空間に、二人の男が立ちすくむ。
「説明してもらうぞ。セシル」
その声は至って平坦だ。
「返答次第では、ただではおかん……」
セシルは、ただ黙って藤原の後ろ姿を見ていた。
「初めてのことだ。お前の予言がはずれたのは……いや、あれは予言とは言わないか」
「……」
藤原は振り返った。
「セシルよ。結果として主は死んだ」
「……」
「お前のせいなのか？」
「……」
「全てが出来すぎている気がしなくもない……」
「！」
藤原の言葉に、セシルは若干、動揺した。
「お前のあの……神の導きとやらはまさか……」
「藤原様」
藤原は口をつぐんだ。
ゆっくりと、セシルが話し出す。

「嘘はついていません。確かにあの時、神の声が聞こえたのです。主を呼ぶ声を聞いた……」
「……だが、結果として主は殺害された。何者かに」
「そこまで先は見えなかったのです。ただ、神は主をあの場所へ導けとおっしゃった……」
「では、得体の知れない何者かに殺されるのが、主の運命だったとでも言うのか」
「返す言葉がありません。深く悲しんでいるのは、私とて同じです」
「……セシル。話が過ぎている……お前が殺したようなものだ。お前が予知能力を持つと知る者は少ないが、いずれ復讐の矛先が向けられるとすれば、お前じゃないか？」
セシルは黙り込んだ。
「このことは……私からは誰にも言わないでおいてやる」
「……！」
藤原の発言にセシルは、しめたとばかりの表情を作った。藤原には見えぬよう、手で口元を覆って。
……藤原様。あなたを殺さなくて済むようだ……。
「ただ、かくまってもやれん。私はあくまでも何も知らなかったで通す」
「……」
「お前の神の声とやらに導かれ、辿った先で主は死んだ……主に『行かなくてはならない』などと言ったことがバレれば、お前は死んだも同然。かくまったら私も殺られる。今、組織は混乱している。突然、トップが死んだのだから、当然だが」
「……」
「王里神会も、ある程度は動いているみたいだ。裏世界の長老と呼ばれる主が謎の死を遂げたんだからな……、興味本位で調査しているという感じか。殺し屋界も、慌ただしい。主がやられたのもあるが、一緒にいたロンも死んだからだろう……奴は最強レベルの殺し屋だった。セシルよ、確かあの部屋には、神屋と外崎がいたな」

「ええ、後に篠原がやってくる予定でありましたね。ホテル『Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ』……」
「うむ、まさか、たかが十七、八の高校生二人に、あのロンが負けるとは到底思えない。一体、誰がやったのか」
「……わかりません」
セシルは唇を軽く触った。
藤原は、鋭い視線をセシルに送った。
……もし、セシルが嘘をついていたら……。
「それだけが謎だ。ロンと主の死を伝えてくれた死体処理のスペシャリストの話によれば、事件現場は荒れた様子もなく、一方的な最後だったのではと考えられるという。お前のあのただ事でない様子に、主は血眼で『Ｒｅｎａｉｓｓａｎｃｅ』に向かった。警戒心を解いていたのだろう。急きょ用意した護衛のロンですら葬る力を持つ者……、殺ったのは、相当のやり手だろう」
「これから、いかがいたしますか」
藤原は口元に手を添え、考えるそぶりをした。
「実は、先程、Ｖ事件の最高責任者から、情報を提供した女子高生に再度接触しろと言われた。聞いた話によれば、彼女は外崎や篠原と知り合いだとか……、私はすぐに女子高生の親戚である王里神会の信者に連絡し、女子高生に外崎らの居場所を探させるよう命令した。事はスムースに進み、女子高生は事情も判らぬままに外崎にメールしてくれたらしい。これで外崎が居場所をまんまと明かしてくれれば、女子高生からその居場所を聞き出し、神屋もろとも拉致する手筈だ」
「……なるほど、Ｖ事件も、ようやく幕を閉じそうですね。それにしても、これから組織はどう動くのでしょうか」
「三代目を決めなければならないのは必然だ。場合によっては、一時、王里神会から手を引くことになるやもしれん」
――――……藤原とセシル、この二人は、言わば搦手（からめて）であった。
近年、勢力を増し続ける宗教団体、即ち、王里神会の存在を知っ

た板垣は、搦手として二人を送り込んだ。いずれ、己の率いる組織に王里神会を吸収してやろうと企んでいたのは言うまでもない。

「……これから、どうなるのか」

藤原は、光り輝く太陽を、目を細めて見つめた。

- 2 -

夕刻が近付いていた。

――――沈みゆく太陽が奏でる永遠の輝きに、人々は目を奪われる。

何という美しさか。

淡い夕焼けが、空に浮かぶ雲に究極の美を与えている。

どんな感情も、その焼け空を見れば、あるひとつの感情に統一されてしまう。

その感情を言葉で表現することは、不可能だ。

「アイーイーイアー」

車のラジオからは、アフリカの部族の歌声が響いた。

感傷的な気持ちにさせられるのは、こんな綺麗な夕日を見ながら聴いているからではないか。

赤き太陽の光に顔を照らされ、夕焼けを見つめながら、佐藤静枝はそう思った。

今日は学校で模試が行われたので、今はその帰りだ。

「難しかった?」

「全然、阿部コーポレーションも大したことないね」

静枝は鼻で笑った。

……日本有数大手企業、阿部コーポレーション。会社が独自に作り上げる模擬試験、通称「阿部模試」はその難易度の高さたるや富士山の如し、と言われるほど。受けるのは、聖蘭第一女子高等学校など超一流高校ばかりだ。

あ、そうだ、と静枝は目を開いた。
「今度さ、『ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＰＡＲＫ』行ってくることになった」
「へぇ、あそこ？　誰と」
「凛と」
『ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＰＡＲＫ』……
大手企業、阿部コーポレーションが、検索管理会社、ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴの進出を祝って、両者が結託して完成させた巨大テーマパークである。
ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴの誕生に阿部コーポレーションが関与していたことが、両者を密接化させる発端になった。
テーマパークとは言えど、内容は落ち着いたもので、大人たちに人気がある。最近になって完成したので、周囲の注目の的はまだ続いている。
静枝はそこへ行くのを楽しみにしていた。ショッピングが目的だ。
「たまにはいいんじゃない。息抜きも」
静枝の母は、優しく承諾した。
家に着くと、静枝は自分の部屋に行き着替えを済ませた。
「……さて、自己採するか」
鞄から解答と問題冊子を取り出し、机の上に広げた。

英語　２００
数学？Ｂ・？Ｃ型　２００
現・古・漢型　２００
物理　１００
化学　１００
地理　９９

「あちゃあ～。あと一点で全教科満点だったんに……」
静枝は落ち込んだ。

「久しぶりに全国一位かと思ったんだけどなぁ」
これほどの高得点を取っても、静枝は自分が一位ではないと肩を落とした。
誰が一位なのか、想像はつく。成績開示表には名前を載せない男だが、その男は、常に満点を取るのだ。
……神宮正信。
有名な予備校に通う高校の友人が、彼はいつも全国一位であることを教えてくれた。
「神宮めぇ、どうなってんだよ、あいつの頭……」
静枝は、一時間ほど地理の復習をすると、ベッドに横になった。
天井を眺めていると、何の脈絡もなく、親友のことを思い出した。
……今、どうしてるんだろう、亜美。
眠りにつく直前、学校での神屋との会話を思い出した。

――――……神屋は、しばらく呆然としていた。女子生徒から発せられた言葉が心の奥底に、妙に引っかかる。
聖蘭第一女子高等学校。二年五組には、神屋ともうひとり、佐藤静枝の二人しかいない。
『……佐藤？　静枝……』
静枝は、勝ち誇った表情で、盤上に置かれた駒を眺めた。
佐藤静枝が操る駒が、神屋の王将を詰む数手前で、動きを止めていた。負けを悟った神屋が投了したのである。
神屋は記憶を探り出した。
『さて、話してもらいますよっ』
『あ、あぁ……』
神屋は目を思い出した。
目の前の女が何者であるか。
『こんなところで会うとは……』
『え？』

『いや、何でもない』
神屋は静枝の目を見つめた。
……この娘が電話さえかけなければ、暁も篠原亜美も巻き込まれなかったかもしれない。
神屋は、フロム・ヘブンの内容を思い出しながら、そんなことを思った。
――しかし、と考えを改めた。外崎暁と篠原亜美の名前が王里神会に入った経緯については、神屋は知らされていなかった。知らされているのは極一部だった。
『わかった。勝負は僕の負けだ。よって、少しばかり話すとしよう、我が宗教団体について』
『嘘はだめだからね。裏の部分よ』
『ああ』
静枝は、興味津々といった様子だ。
何故、そこまで知りたがるのか。大した理由はないだろうと神屋は踏んだ。万人に共通するただの好奇心というものが、静枝に作用していたのは事実だ。
神屋は頭をかいた。
『どこから話そうか……、うーん、裏の部分か』
『考えてなかったの？』
『まさか負けるとは思わなかったからね』
『じゃあ、質問。構成人数は？』
『ははは、そんなのわからないよ』
『じゃあ、週刊誌とかで騒がれてるくらいなのに、教祖の話とかがあんまり出ないのは何故？』
『……さぁ』
……それは、教祖について誰も詳しく知らないからだろう。
『名前も知らないの？』
『K』
『……けい？』

『アルファベットのK、Kと呼ばれている。こんなことは、インターネットでも検索すればすぐ出てくるよ』
その後も、静枝は質問質問を続けた。
神屋はこんなことを考え出した。
……フロム・ヘブンによれば神崎さんは誰にも自分の居場所は教えてないそうだが、ここはかまをかけてみるか。
『佐藤さん』
『何？　さん付けはやめて』
『もしかしたらさ、もしかしたら、君は鬼頭火山の姪だったりする？』
『……え？』
静枝は、鳩が豆鉄砲でもくらったかのような顔をした。
神屋の額に一筋の汗が流れた。
『どう……して……？』
神屋は顔をしかめた。
静枝が鬼頭火山のことをどこまで知っているのかわからない神屋にとって、詮索は容易ではない。
『……いや、鬼頭さんさ。小説、書いてるでしょ』
『……』
『彼が書いた作品の中に地底湖というのがあるよね。あれを書いたとき、鬼頭さんは犯人を二重人格にしたくて、精神科の病院に訪れて、実際に二重人格者について自ら調べたんだよ。知らない？』
『……え、そうだったの？　全然知らなかった』
『僕の母親が看護婦をしていてさぁ、そのとき鬼頭さんと話したそうなんだよ。これ、僕の唯一の自慢話』
そう言って、神屋はわざとらしい笑顔を作った。
『あぁ、それでうちの名前が出て、お母さんからあんたに伝わったわけね』
『そういうこ……っ！！！！！』
神屋は、ようやく気付いた。

自分がとんでもないミスをしていることに。
……しまった。
神屋は忘れていた。世間では、鬼頭火山は死んだことになっている。ニュースでも取り上げられたくらいだ。知らない国民は、かなりの世間知らずだ。鬼頭の居場所を聞き出そうとしていた神屋は、自分の言動に恥ずかしさを覚えた。
『どうしたの？』
『いや、何でもないよ。いや、それにしても、いきなりすまなかった。あまりに無遠慮に足を踏み入れてしまい、悪かったよ』
『……あ、うん。別にいいよ』
『気の毒だよ。僕も鬼頭さんの作品はよく読んでいた……つい……』
『いいって、もう』
神屋は内心ほっとした。
静枝は、机の上の将棋盤をかたし始めた。
『ねぇ、そんなことよりさ、まだ教えちゃいけないようなこと、何にも教えてもらった気がしないんだけど』
ここで神屋は、一計を案じた。
……ちょうどいい。深く詮索される可能性は高いが、致し方ない。
神屋は、フロム・ヘブンを読んだことで、静枝と亜美が友人関係であることを知っていた。
亜美のもとを訪れたい神屋は、静枝に聞き出そうと思ったのだ。
『そうだったね。じゃあ、極秘情報を教えるよ』
『やった』
『実は、今、王里神会は人捜しをしてるんだ。二人の高校生。外崎暁と、篠原亜美っていう』
神屋は、さも二人のことなど知らなげに名を出した。
静枝は、目をまん丸く開け、動かなくなっている。
『まぁ、そんな二人知らないだろうけど……』
『……』
『で、二人を拉致して、あることについて聞き出そうとしているわ

けなんだが、だが、しかし、僕はそんな教祖の考え方に反対だ！』

『……？』

静枝はもう、何が何だかわからないといった様子だ。

『ここだけの話、僕は王里神会をもう見限っている。何の罪もない一般人をさらおうだなんて、僕にはできない。そして、仲間がそれをするのも許せない。だから、僕は王里神会に立ち向かうことにした。簡単に言うと、誰よりも早く二人を見つけ、安全な場所に避難させようと考えている。だから、何日も前から僕は二人を見つけようとこの辺りをまわってるんだ。ああ、早く二人の住所が知りたいよ……や、悪いね、こんな私情を聞かせちゃって……』

そこまで言うと、神屋はわざとらしく咳払いをしてみせた。「風邪かな」などとうそぶいて。

静枝は、額に汗を浮かべ、唖然としている。

『あ、あ、待って、ちょっと！』

『！』

『詳しく聞かせて、その話』

……チェックメイト。

神屋は、僅かに微笑みを見せた。

- 3 -

目が覚めたのは、十九時を少し回った頃だった。

気持ちの良い目覚めではなかった。暑苦しくて目が覚めたのだ。

ベッドから上半身だけ起こし、窓の外を眺めた。既に外は真っ暗で、夜空には星が輝いていた。

数え切れない程の星たちを、静枝は夢中で眺めた。

小さい頃、何度かこんなことを思った。

……あの星たちのどれかひとつにでもいい。今、うちと見つめ合っている何かはいるのかな。

何かとは、即ち、地球外生命体のことであった。
「……」
――――あるひとつの星に狙いを定め、遥か向こう、そこにいるかもしれない何かに、静枝は呼びかけた。
「お願い。うちとおしゃべりして」
少しの間を置いて、静枝は小さく笑った。自分のしていることが、急におかしく思えたからだ。
それでも、しばらくは星を見続けた。そうしていると、何の脈絡もなく、今日のことを思い出したりしていた。
記憶は、さらに過去にさかのぼる。
……亜美、暁。
神屋と教室で話したことを思い出し、続いて二人のことを思い出した。
今、二人はどうしているのか。それが気がかりになった。
静枝は携帯を手に取り、どうするか迷うような仕草を見せた。
そして、決心したように、ある人物にコールした。

小休止という話だったが、既に五時間は部屋にいる。
誰からの呼びかけもないので、亜美は若干の不安を覚えた。
……もしかしたら、アタシ以外でもう暗号解いちゃってるかも。
そんなわけないか、とつぶやき、亜美は再度、ベッドに横たわった。
暁の部屋からこの部屋に戻り、それから数時間に渡り、本を読み続けていた。
読み終えたのは、つい先程、午後七時を回った頃だ。
「……」
暁とのやり取りで、何とも言い難い感情を彷彿させてしまったのが理由なのか、半ば向こう見ずの長時間読書を敢行してしまった故は。

未だ脳内では、先程読んだ本の内容が渦巻いている。
長編小説を読み終えることで幾分落ち着いた心になっていた。
「！」
――――突如、携帯の呼び出し音が鳴った。誰かから電話がかかってきたようだ。
発信者の名が、ディスプレイに表示されていた。
「ん？」
佐藤静枝、とそこにはある。
「もし、もし」
「亜美」
「シズ！」
「……あのさ、いきなりかけてごめん。ちょっと、心配だからかけただけなんだけどね」
「あ、あぁ、あぁ、そっか……そっか。神屋君から聞いたんだっけ」
「……？　かみや？　だれ？」
「ん？　あぁ～、もしかして名前は知らないんかぁ」
「うん」
「ほら、学校で話したとか……」
「……あ！　あの人か！」
「そうそう、わかった？　なんかさ、まぁ、髪はちょっと長めで、背が１８０くらいあってぇ……」
「あのイケメンくんでしょ？」
「そう！」
「あの人、かみやっていうんだ」
「そう言えば、訊きたかったんだけど……どのくらい聞いたの？」
「……うん、そう、それで心配だったんだけど……なんか、暁と亜美が、拉致されるとか」
「そっか……」
尋ねつつも、亜美には返ってくる答えの、大体の予想がついていた。

まず第一に、神屋が、神崎冬也は生きているかもしれない、とは言うはずがない。

したがって、知っていたとしても、何故かはわからないが拉致されようとしていることくらいだろう。

「かみやって人は、その理由を教えてくれなかったんだけど……何か深いわけでもあるの？　もし、うちにできることがあるなら言って」

「……シズ」

「……うち、余計だった？」

「ううん、そんなことないよ。アタシも……ホントは凄く怖い。ちょっとほっとしたよ」

この言葉は嘘ではなかった。

親友の温かい言葉に、亜美の心は確かに救われたのだ。

「警察に言ったら？　もう言ったの？」

「……警察は……信用できないみたいだけど」

「……え？　それって……」

「詳しくはわかんないけど、警察に言うと、いずれは拉致のリスクが高まるらしいんさ」

「……つまり、拉致グループは、警察関係者を抱き込んでるか、もしくは、それそのもの……？」

「抱き込んでるみたい」

「ふぅん……なんか、凄いことになってんね……はは」

「別に、悪いことしたわけじゃないんだよ。アタシはね」

「そっかぁ、あ、ねぇ、あのさぁ、かみやって人……は、信用できるん？　亜美とか暁を助けたいとか言ってたけど」

「え？　できるよ、何で？」

「……だってさ、冷静に考えれば、あの人が敵である可能性は多いにあるじゃん。王里神会だっけ？　それのスパイかも。亜美たちを巧みに信用させて、最後に裏切るかもよ」

「そんな、ことは……ない、と……思うけど」

「本当に大丈夫？　信頼できるっていう証拠はあるの？　あの人、『僕』とか『～かい？』とか、喋り方もなんか変だし」
「あぁ、顔の割には確かに……」
「スパイって考えた方が納得いくことの方が多いんじゃないの？　知らないけど」
「まぁ、多分、大丈夫だと思う」
「あ、つーかさ、大事なこと訊くの忘れてた。もうかみやって人に会ったん？」
「うん、もう何日も一緒にいるけど」
「……ええ！？」
「え？」
「一緒にいるって……それは……まさか……」
「……うん。一緒にいるよ。同じ家に」
「なっ……その人の家！？」
「いや、いや、あはは。神屋君の知り合いの人の家。最初はホテルだったけど」
「ホテル！？」
「暁も一緒にね」
「さ、三人！？」
「まぁ、襲撃されたから、今は違うとこにいるんだけど」
「しゅうげ、しゅ……」
電話口の向こうでは、開いた口がふさがらない静枝がいた。

――――リビング。
ジューッと焼く音が、静かに耳に溶け込んでくる。
ハッと我に返ったかのようだ。
暁は、時折、こんな感覚に襲われる。
自分をどこからともなく呼んでいるのは、過去だ。
あるひとつの記憶が、まるでフラッシュバックの如く、脳裏に呼

び覚まされる。
……あぁ、死んじまったのか、鳴海。
「ようーし、ご飯できたぞー、亜美ちゃん呼んで」
「ん、わかった」
たまたまドアの近くにいた神屋が、亜美を呼びに部屋を出て行った。
亜美と神屋が部屋に戻ると、全員で夕食を食べた。高木は大勢でとる食事が嬉しいのか、どこか表情は豊かだ。今までは、この広い家で、たった一人の食事にありついていたのかと思うと、少し気の毒に思えてくる。
食事中、暁は亜美と目を合わせなかった。いや、合わなかったと言った方が適切か。斜め前に座る亜美に、勇気を出して何度か視線を送ったが、亜美は暁の方を見る気配がない。
暁がトニーとの茶番を繰り広げるも、無反応だった。時々、「おいしい」と言って高木に笑顔を見せていた。
端から見たら、いつもと変わらない風景だっただろう。しかし、一人の男は、この異変に気付いていた。
食事が終わると、暁はすぐにトイレに向かった。
尿意を覚えたからではない。ただ、あの部屋が、亜美がいるあの部屋が息苦しかっただけだ。
洗面台の前に立ち、鏡を見つめた。いや、睨んでいた。
「……」
何故、自分が金髪になっているのか、大して似合ってもいないのに、無性に腹が立った。
そして、目を伏せた。
……まるであのときみたいだ。
あのときとは、ちょうど暁が田舎から帰ってきた頃のことだ。
亜美と数日間関わらない生活を送ることによって発生した、一種の飢餓感。そして、孤独感。
亜美は誰かと付き合ってしまってはいないか。そう思えてならな

かったのだ。
――――しかし。
考えてみれば不思議なことだった。亜美レベルの女ならば、もう誰かと付き合っていても、なんらおかしくない。容姿もいいし、性格もいい。要するに完璧な女だ。暁は首をかしげた。どうして亜美は、俺みたいなしがない男と一緒にいるのだろう。とゆうか何故、周りの男共はもっと亜美にアタックしないのだろう。
……俺にいいとこなんかねぇのに。
「暁」
足音もなく、突然に自分を呼ぶ声がした。振り返ってみると、そこには神屋がいた。ゆっくりと洗面所に進入してくる。
二人で並んで鏡を見つめ合う形となった。いやでも身長差を思い知らされる。
神屋が振ってきたのは、亜美のことについてだった。どうやら神屋は、亜美と暁の間に流れる良くないムードを感じ取ったらしい。
「何があった」
「……いや、別に」
「篠原さんのこと、好きなんだろう」
「!?」
あまりにも意外な神屋の発言。心の内を簡単に見透かされた気がした。しかし、相手は神屋だ。ずっと前からわかっていたのかもしれない。
「壁にぶつかっている顔だ。恋の壁に」
そう言って神屋は笑顔を見せた。
「いいじゃないか。君は生きている」
「……ん?」
「葛藤するくらいに、生を楽しめてるのさ。世の中には、死んだ目をした奴らが腐るほどいる。生を放棄した者たち。プライドも糞もない。そいつらに比べたら、死ぬほどマシだよ」
「……言いたいことは、なんとなくわかる」

「暁、全力で生きろ」
「……！」
「人生を歩むんだ。人外の道を歩いていたって、最後は後悔しかない。人生を歩め。全力で生きることでしか、人生の幸せは見いだせない」
神屋は洗面所をあとにした。
残された暁は一人、神屋の言葉を反芻（はんすう）していた。

- 4 -

十七のキーワードについて、意見は二つに別れた。
ひとつは、一文字ずつ入れるパターン。
もうひとつは、単語単位で入れるパターン。
最後の扉は夜にしか見えない
サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ
これを単語単位にすると、
サ……サクリファイス
イ……イエス
ゴ……ゴシック
ノ……ノエル
ト……トーラー
ビ……ビザンチン
ラ……ランス
ハ……ハイメ・ネボト
ヨ……ヨハネ

ル……ルター
ニ……ニカイア
シ……シャトーブリアン
カ……カトリック
ミ……ミレニアム
エ……エルサレム
ナ……ナザレ
イ……イスラエル

ビザンチンについては、直後に「帝国」と続くが、全てカタカナで統一していることを考慮し、敢えて「帝国」は入れないことで話はついた。
「さて、それじゃあ、早速、入力しようと思う……その前に」
椅子から立ち上がった神屋は、亜美に突然、言い放った。
「二宮光は怪しい」
――事の発端は、暁の携帯に送られてきたメールだった。そこにはこうある。

暁くん、今、どこにいますか？

それを見た亜美は、神屋の言葉の意味をすぐに理解した。
親戚に王里神会を持つ二宮光は、密告者の可能性が高い。しかし、いつどこで光に鬼頭火山との関係を見抜かれたのか、それがはっきりしなかった。
暁も亜美も首を傾げた。
確かに、まだこれだけでは、光が密告者だと断定するには早とちりである。
亜美は、暁の予想に反し、案外あっけからんとした様子で切り出した。
「授業中かな？」

暁は、なるべく平坦に接した。「そうかもな」などと返しながら。
暁も亜美も、あの頃はよく、授業中に暗号に取り組んでいた。そして暁の隣の席は光だ。何をしているのかはわからなかったかもしれないが、怪しく思われていたとしても無理はない。
――光が密告者とすれば、合点がいくのは確かだ。Ｖ事件の重要人物として暁と亜美の名は上がったが、住所はわかっていなかった。月代学園の生徒だということだけしか明らかにされていない。何故なら、光は暁や亜美の住所は知らないから……。
問題は、もし光が密告者だとして、どうやって鬼頭火山との関係を見抜いたのか。
恐らくは授業中。亜美と暁には、そうとしか推理できない。
光は、このメールで、ただの友達を装い、居場所を聞き出そうとしているのだろうか。
亜美は、過去を追憶しつつ光のことを咀嚼（そしゃく）した。
……いや、ないでしょ。あの二宮さんが。
亜美の中で半ばおちゃらけたイメージしかない二宮光が、スパイさながらの密告者たりえたなど、信じようにも信じがたい。
話し合いの末、まだメールは返さないでおくことになった。
まずは目の前の問題を解決しなければならない。
神屋は、単語単位で十七のキーワードを打ち込んでいった。これでダメなら、一文字パターンである。全員が、息を呑んでパソコン画面を見つめた。
「個人的には、これが正解な気がするんだけどね……さて、送信っと」
送信ボタンがクリックされた。
その瞬間、垂れ流しになっていたパッヘルベルのカノンが、優美なる演奏を止めた。
――プルルルルル

「……はい、もしもし」
東京郊外、とある参道。
一人の男に電話がかかった。
「私だ……仕事は順調か」
声を聞くと、誰だかわかった。
「非通知でかけてくるなよ」
男は、周りの清らかな景色に酔いながら、参道をひねくり歩いていた最中だった。
「……仕事は順調か」
「いや、行き詰まってる」
寺社の姿形が、異様に美しく見える。日々の億劫から完全に解き放されたかのような感覚だ。男は、ふと足音がした方を見た。ただの足音ではなかった。
「……ちょっと、またあとでかけるよ」
「どういう――――」
パタン
携帯を閉じた。
……巡り合わせ、というのだろうか。まさかこんな場所で会うとは思わなかった、そんな顔を、二人共していない。これは必然だったのだろうか。
砂利を踏みしめ、十分な時間を置いて、やってきた男は言う。
「復讐だ」
「……」
「左虎……お前を殺す」
相手は、左虎のよく知る同業者……殺し屋だった。
数年前、仕事で互いにやりあい、そのとき瀕死の傷を負わされたのを根にもっているようだ。左虎は平坦とした目で見据えるばかりだ。
「あのときは心底、イラついた。お前を殺したくて殺したくて仕方がなかった」

「はらわたは元に戻ったのか？　それとも人工臓器でも入れてんのか」

この一言に痺れを切らしたのか、出してきたのは銃だ。

だが、左虎は動じない。

「お前は今日、ここで死ぬ」

「撃つ前に教えてくれ。どうして俺の居場所がわかった」

「びびってるのか。お前でも死は怖いか」

「そうか、なら撃て。試してみろ」

「いくらお前でも……銃には勝てない。命乞いはどうした」

「試してみろ……って」

「しゃらくせぇ」

――――パァンッ！！！

発射された銃弾は、僅かな流線型を描き、それこそ人の目には見えないが、左虎の心臓目掛けて空を切った。

常人ならば、一瞬のうちに死を覚悟するか、流れ出る血を目に、走る痛みに浸りながら徐々に死を覚悟するだろう。そうでなければ、恐怖で我を見失うであろう。

だが、左虎は、笑っていた。

銃弾が、心臓に向かって一直線のその最中、笑っていたのだ。

殺し屋界にはこんな言葉がある。「一流の殺し屋とは、人の領域を超えた先にしか、その体躯（たいく）を現さない」

……

……――――――

銃弾の軌道が、まるで目に見えてるかのように、ゆっくりと、時間の遅くなった世界で、左虎の眼球は、回転する銃弾を見つめていた。

……――――――ビシッッ！！

弾は左虎の背後にある岩にぶつかり、亀裂を作った。
銃を撃った男は、己の目を疑った。
早すぎてわからなかったが、何故か、左虎は身体を斜めに傾けている。
……まさか!?
「ビックリしたか。復讐成功って思ったか」
「……!」
「人間が銃弾を避けられるわけがねぇー、と、そう思ってたか」
まるで被弾していなかった。
信じがたいことに、銃弾を回避したらしい。
男は銃を撃ったままの姿勢で唖然とし、左虎を食い入るような目つきで見ていた。足が震えていることにも、気付かずに。
左虎は姿勢を元に戻し、男と向き合って言った。
「あのとき、お前を殺さなかったのは、お情けだ。俺は慈悲深い……
……引導をな、渡したつもりだったんだよ」
「引導だと?」
「お前みたいなのはヒットマンに向いてねぇ。個人的な見解だが、ボディガードにでもなりゃあ良かったんだ、お前は。今より俄然、売れっ子になれたと思うぜ」
「おちょくってんのか」
「人にはそれ相応のステージってのがある。お前は大した実力もないのにこっちの世界に足を踏み入れた、いわば勘違い」
「……くッ」
「俺に復讐だぁ? 善意であしてやったのに、全く……」
「死ね」
男は、一気に三度も引き金を引いた。鉛が宙を舞う――――――
「救えねぇ野郎だ」
「――――!!」
血飛沫(ちしぶき)をあげ、いつの間にか、宙に浮いていた。あまりに一瞬の

こと過ぎて、何が何だか理解できなかった。
地面に倒れると、自分の両腕が切断されていることに気付いた。
左虎は、靴で男の胸を踏みつけた。手には、先ほどまで男が握っていた銃が……。
「判断を誤ると、死ぬことになる」
「……ごふっ」
男は、何か喋ろうとして、気付いた。腹の辺りが切れてるのか、胃に血が流れ、うまく喋れない。喋ろうとすると、血を吐きそうになる。
「死ぬ前に答えろ。どうやって俺の居場所を知った」
「……ぐっ……」
「銃まで持ってきて、まさか偶然ですとは言わないよな……」
「……ぅ……ッ」
「言え」
左虎は、銃を向けた。
「答えろ」
「……」
「答えろ！」
「……ごふっ……ヴヴ」
男は、息絶えた。
左虎は、男の体をくまなく調べた。何か手がかりがあるかもしれない。
「これは」
いま、左虎がいる寺社の名前が書かれた紙が、内ポケットから出てきた。しかし、注目すべきは、紙と字。
特徴のある龍の絵が浮き出ている。そして、黄色い。
更に、どうやら文字は、血で書かれているようだ。
左虎は、地面に落ちている男の手を拾い上げ、指先を調べた。すると、予想通りの痕跡を発見した。
――プルルルル

「……左虎君。一体何があった」
「いえね、ちょっと、仕事に光が見えたよ。もしかしたら、鬼頭火山の居場所、わかるかもしれない」
「ほう。それは凄い。期待している」
電話を切り、紙をポケットにしまうと、左虎は歩き出した。

全力で（後書き）

謎も少しずつ埋まっていきますね。
まぁ、打ち合わせなしのアドリブラリー小説なので謎は作者にとっても謎なんですけどね。

パペチュアル・アタック（前書き）

サブタイトルはチェス用語で相手に同一の着手を繰り返しさせる事を言います。

パペチュアル・アタック

パソコンのスピーカーから流れていたカノンは鳴り止み。Ｗｅｂページは次の画面を読み込んでいる。まもなく、高木が導いた答が正解か否か、結果を示す画面が現れるはずだ。

そして一瞬の後、スピーカーからはまたカノンの演奏が流れ出した。

「どうだ……？」

暁はパソコンの画面を覗き込んだ。暁の立ち位置からでは照明が液晶に反射して結果が見えないのだ。

「……駄目だ」

神屋は落胆した様子で答えた。

エラー

＊キーワードが間違っています。

回数制限　残り二回

画面の上部には「エラー」の文字が表示されていた。第一の案は間違っていたことになる。しかし、一同を注目させたのはそれではなかった。

高木と亜美はほぼ同時に口を開いた。

「回数……制限……？」

エラーの文字の下に赤い文字で表示された《回数制限　残り二回》の文字。

神屋は右手を口元に添えて「うーん」と唸った。

「……どうやら、あと二回しくじってしまうと、僕らにはチャンスがなくなるようだね」

神屋はこの場の誰もが気付いているだろうことを、微笑を浮かべながら言った。この微笑は苦笑でもある。

「間違ったら即失敗じゃなくて良かったと捉えるべきかしら？」

亜美が神屋に皮肉めいた視線を投げつける。

「現時点では……ね。幸い、僕らには第二の答がある」

神屋はそう言いながらカタカタとキーボードをタイプする。今度は「サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ」という文を一文字ずつ入力欄に打ち込むパターンである。

しかしこのパターンはあまりに率直だった。それ故、最初は単語ごとの入力をすることに決めていたのだ。それが駄目だった以上、こちらの一文字ずつ入力するパターンに全てを託すことになる。

「一応訊いておくけれど、二回目はこれでいいのかい？　これでミスをすると、なかなか肝を冷やす展開になるけど……」

数秒間、沈黙が続く。そして、神屋の言葉に応えたのは暁だった。

「他の案で失敗して、三つ目に一文字ずつのパターンを持ってくる方が肝を砕く展開になる気がするけどな」

続いて高木と亜美も暁の意見に賛同した。

「俺も、さっきのが駄目なら、今度はいけると思う。逆にこれが駄目ならまだチャンスはある。こっちのパターンを後に回したら、リスクが高まる」

「あたしも、これで駄目ならもう何も思い付く自信ないし」

暁は一瞬だけ亜美の表情を見た。いつもと変わらないその表情。普段なら「お前が思い付いた案じゃないけどな」などと茶化すかもしれないが、今の暁にはそれは難しかった。

「……まあ、そうだね。じゃあ、送信するよ……」

カチッ。

無機質な音を立て、神屋の右人差し指がマウスの左ボタンを押した。

エラー

＊キーワードが間違っています。

回数制限　残り一回

今回はすぐに画面が切り替わった。結果は一度目と同じ。虚しくも変化したのは残り回数の数字だけである。

「……ッ」

声にならない叫びの余韻を漏らしたのは暁だった。

「これはマズいな」

神屋も今度ばかりは苦笑さえ浮かべなかった。

「どうすんの？　これって、結構やばい状況じゃない……？」

亜美は少し焦った様子で神屋に問いかけた。

「間違いなく、僕らは今、窮地に立たされたね。間違ってる可能性も予期していなかった訳ではないんだけれど……」

「えっ！　どういうこと？」

「いや、今更危ないと思っていたなんて言い訳するのも申し訳ないけれど、一つだけ引っ掛かっていたことがあったんだ」

神屋は哲学の難問を提示された子供のような様子で、頭を抱えた。

「神屋サント篠原サンガ合流スルコトノ必然性デスネ」

少し離れた所で音も立てずに佇んでいたトニーは全てを見透かしていたかのように言った。神屋は溜息を漏らしながら顔を上げる。

「……そう。もしキーワードが『サイゴノトビラハヨルニシカミエナイ』であったなら、リスクがないとはいえない。篠原さんか暁が拉致されたら暗号の内容が王里神会に漏れる可能性がある。暗号の内容が判れば『キリストの哲学』を入手し、キーワードを見つけないとも限らない。やはり、『僕がいなければ分からない何か』が鍵を握っているのかもしれない。安易に答を出しすぎたか……？　しかし、他に答らしきものがあるのか？」

神屋は答の出ない問を発し続けた。「残り一回」という文字が、

画面の前の四人にプレッシャーを与える。
　同じ頃、暁は妙な感覚に陥っていた。このまま全てが壊れてしまってもいいのではないかという程の倦怠感。鬼頭火山を探すというただそれだけのことなのに、こう幾度も失敗を重ねては、失望にも慣れてくる。暁の心は荒(すさ)んでいた。
「神屋、お前のせいじゃない。……なぁ、それよりも、俺達がアンチマターと合流したからって、ホントに王里神会のテロを防げるのか？　逆に、アンチマターは俺達を必要としているのか？」
「……僕が思うに、必要なのは君や篠原さんではない。だからといって君達が関係ないとは言えない……それに、僕は君達を守ると約束した」
　神屋は少し申し訳なさそうな表情をしてそう言った。暁はそれを聞いて極まりが悪くなり、目線をそらした。
「……そうだな、悪い、変なこと言って。なんにしろ、鬼頭の居場所を知らなければ話は進まないんだよな」
　神屋は「構わないさ」と呟き、徐(おもむろ)にに立ち上がった。
「みんな、とりあえず解散だ。各自、何か思い付いたら連絡を。僕は用があるから少し外に出るよ。護衛は要らない。帰りはきっと遅いだろうから、先に休んで構わない」
　神屋はそう言い終えると立ち上がり、大きく伸びをして部屋を出た。その際に高木は神屋の深刻な表情を一瞬だけとらえた。しかし、声をかけることはできずに、扉は音を立てて閉じてしまう。
「……用って何だ？」
　高木が首を傾げながら囁くように言う。
「神屋君に直接訊けば良かったじゃないですか」
「いや……なんだか真剣な様子だったからさ。護衛は要らないって、平気なのかな……？」
「一人じゃないとダメな用事なんじゃないですか？　まさか王里神会の会議ってことはないはずだけど……」
　亜美が高木の声に応えた。ほぼ同時に暁はトニーの方を向いて視

線を合わせる。
「トニー……何か知ってるのか」
暁の問を聞き、高木と亜美もトニーに注目した。
「イエ、何モ。私ハ、暁サント篠原サンノ護衛ガ仕事ナノデ」
「そっか」
興味なげに応え、暁は大きく息を吐いた。
手詰まりだった。何度も何度も同じように追い込まれる。逆に言えば、これまでは追い込まれればそれなりの答を見つけ、次のステップに進めたということだが、今回の失敗で落胆していた彼らにはそのようなポジティブな考え方はできなかった。
暁は提示された問題に集中できないでいた。自分でも私事と解っていながら、亜美との関係の変化に思い悩んでいたのだ。

『いいじゃないか。君は生きている』

『葛藤するくらいに、生を楽しめてるのさ。世の中には、死んだ目をした奴らが腐るほどいる。生を放棄した者たち。プライドも糞もない。そいつらに比べたら、死ぬほどマシだよ』

『暁、全力で生きろ』

神屋に言われた言葉が胸に刺さる。酷(きび)しい痛みが暁の息を詰まらせた。
「ちょっと、部屋で考えてきます」
暁は言い終えぬうちから立ち上がり、扉に向かってゆっくりと歩いて行った。
何を考えるために部屋に向かうのか。暁はぼんやりとそんなことを思いながら歩みを進める。十七のキーワードのことか、それとも亜美のことか。ともかく、暁は激しい眠気を感じていた。考えることを脳が拒絶しているようだった。

暁は背に亜美の視線を感じたが、振り返ることなく扉を開け、部屋を出て行った。

大きな部屋には重苦しい空気が立ちこめていた。

神屋は住宅街をゆっくりと歩んでいた。午後八時を過ぎ、辺りは徐々に光を失いつつある。

空には薄く月が姿を見せていた。神屋はこの街に初めて来た頃、月の綺羅びやかな相貌に驚いた。太陽光を反射しただけの明かりが何故ここまで綺麗だと感じるのか。この世のものでないような妖々な月明かりは心に何かを植えつける。懐かしさだろうか、それとも畏怖だろうか、あるいは退廃だろうか――。

この街は心を穏やかにする時と不安にさせる時とがある。月の満ち欠けのように。

思いに耽(ふけ)っていると、神屋は学生とぶつかりそうになり、寸前で身をかわした。

暁や亜美が住む住宅街と違い、この時間になっても人は通行している。いつもは喧騒のない住宅街だ。おそらくこの時間に限って人が多いのだろう。神屋はこの辺りの地理には明るくないが、近くに学校の類があれば人が多くても不思議はない。

しばらく歩き、住宅街を抜けると駅に続く道に出る。自動車の数が増え、街灯や建ち並ぶ店の数々が辺りを明るく照らす。人も多くなりようやくタクシーが目にはいるようになった。

神屋はそこでタクシーを拾い、東京を目指した。ここから東京までは高速道路を使って一時間程だ。おそらく高木宅に帰る頃には夜中になっていることだろう。

「果たして、無事に帰れるか……」

神屋は夜の街を眺めながら思った。

これから合う人物を、神屋は疑っていた。敵か味方か、どちらにせよ強い覚悟が必要な相手である。

夏風を肌に感じ、ふと空を覗くと、暗い闇がすぐそこまでやってきていた。

パペチュアル・アタック（後書き）

今回からは僕が3話連続担当しましたが、その3話のホップステップジャンプの「ホップ」の部分ですw
次回をお楽しみに・・・

ディスカバード・チェック（前書き）

サブタイトル「ディスカバード・チェック」の説明
以下参照

・ディスカバード・アタック：駒を動かして背後にある駒（クイーン、ルーク、ビショップ）で駒取りをかける手筋である。特に、背後の駒でチェックをかける場合は、ディスカバードチェックという。さらに、動かした駒でもチェックがかかる場合はダブルチェックとなる。ディスカバードアタックの主目的は駒得あるいは手番を得ることである。

ディスカバード・チェック

―1―

小さな鐘の渇いた音を背後に聞きながら、神屋は喫茶店の中に入った。

神屋は「喫茶・パンドラ」に訪れていた。ある人物からメールで招かれたのだ。この喫茶店の営業時間は二十三時まで。どうやら長い話にはならないようだ。それとも営業時間に関係なく話せるよう、客足が減るこの時間帯を狙って店を借りたのだろうか。

レジカウンターの裏からウェイターが顔を出し、名簿のようなものを見て、「いらっしゃいませ」と丁寧に一礼した。

メールには名を名乗れば案内されると書いてあったので、神屋はウェイターに自分の名を告げた。

「神屋です」

「お待ちしておりました。店内奥、壁の向こうの最深席が予約なされた席になります」

「はい」

短く返答し、店の奥へ進む。客は二組しかおらず、店内は静かだった。自分の足音が目立つ。

奥に進むと二人用のテーブルとチェアがいくつか並んでいた。そしてその一番奥に、彼は座っていた。

「初めまして、宮澤さん」

「来たか。まあ座れ」

神屋を招いた男――宮澤睦は不敵に微笑した。

「お前が神屋聖孝か、概ね鬼頭から聞いた通りだな。自己紹介がてらチェスでもしようか」

「構いませんが、その前に一つ」

「何だ」
「鬼頭火山の居場所を、知っていますか？」
「……俺が聞きたいくらいだよ」
宮澤の低い声と鋭い眼光が神屋の精神を緊張させる。神屋は椅子を軽く引き身構えた。
宮澤は木製のチェスセットをテーブルに広げ、同じく木製の駒を定位置に置き並べた。
「では始めよう」
「お願いします」
先制、白の宮澤はポーンをｄ４と進めた。それに対し神屋は同ファイル（縦列）のポーンをｄ５に進め、宮澤は間を開けずにさらにポーンをｃ４に進める。これは典型的なパターンであり、クイーンズ・ギャンビットと呼ばれる。ルイ・ロペス型の定跡を基盤とした戦い方を好む神屋だったがどちらも極めて基礎的な定跡、クイーンズギャンビットのオープニングもまた何百回と戦ってきた。その程度では当然自信は揺らがない。
そこから、数手で両者悪手なくキャスリング（キングとルークを１回で入れ替えるというルール。これを用い序盤でキング周辺の守りを固めるのが良いとされる）を成功させ、場に駒を展開、戦いの準備を整えた。
チェスでは一般的に駒に点数が振られる（ポーンが一点、ナイトが三点、ビショップが3点強、ルークが5点、クイーンが九点）。この合計点数が相手よりも高いことを、「マテリアルアドバンテージを持つ」といい、マテリアルアドバンテージを持つことは勝率に大きく影響する。ポーンは一見、点数の低い弱い駒であるように思えるが、実際はポーンの一点を損失することは重大な失敗となり得る。チェスではポーンが敵サイドの最深部に達するとプロモーション（将棋で言う成りであり、キング以外の駒に自由に変化する）でき、プロモーションの争いの結果によっては相手の駒の合計点数が跳ね上がるからである。

それを踏まえたうえで犠牲にしていいポーンと犠牲にできないポーンを見定める。ミドルゲームに突入すると、神屋は一気にポーンで敵エリアを進撃した。同時に宮澤も自分の駒を取ったポーンを攻め返していく。

そして次第にナイトやビショップによる戦いに進展し、神屋はナイトで宮環の持つメジャーピース（ルークやクイーンのように価値があって、縦横に動ける駒）にフォーク（一つの駒で二つ以上の駒を狙うこと）をかけるも、宮澤はそのクイーンを活用し敵陣地に切り込み、逆に神屋のキングを守る壁となっているピースにフォークをかける。神屋は一瞬動きを止めビショップで宮澤の猛攻を足止めした。

ミドルゲームが落ち着きを見せると、戦況が解ってくる。現在、場の中央を比較的動きやすい駒で支配しているのは白の宮澤、その進行を抑えるように中央にビショップで楔を打った状態にあるのが神屋だった。

チェスでは、先手と後手で勝率が違い、先手の白が高い勝率を持つことになる。高レートのプレイヤーによる対局では、ほとんど白が勝ち黒はドローに持ち込むことができれば御の字と言われることが多い。

経験的に神屋は悟っていた。宮澤は強い。この状況で勝つのは非常に難しく、まず不可能といっても良い程に分が悪かった。

「宮澤さん……この勝負は……」

「待て、神屋。俺はリザイン（チェスで投了すること）は好まん。特に、まだ勝ち目のある対局に自ら幕を下ろすのは……な」

「しかし……」

「神屋、お前には鬼頭の元に辿り着いてもらう。俺にはそれは許されていない。お前に託すほかないのだ。最後まで、戦ってもらおう」

「……」

神屋はチェスにおいて初めてたった一手のために悩んだ。今までの経験が、打つ手なしと訴えているのにも関わらず、奇跡の一手を

模索した。答が出るかもわからない、意味もないかもしれない思考をひたすら続けた。

「……」

投了できないのならば応急措置的な意味合いの強い手を指さざるを得ない。それは経験者ならば誰しもが選ぶ選択肢であり、独自性はない。

宮澤は悪手を打つわけでもなく変わらぬペースで攻め立てた。それに対し、神屋は宮澤のクイーンを払い、時間を稼いだ。

そして、ここで最終的に勝敗を左右することになる一手が神屋によって指されることとなる。

「……！！　何のつもりだ、神屋？　そいつは言うまでもなく悪手だが……？」

それは本来ならまずありえない手だった。宮澤のポーンが神屋のナイトを狙っていて、そのナイトを逃がすのが本来の手であったが、神屋はナイトを逃がさず、次で確実に取れる位置に楔となっていたはずのビショップを移動した。これは無駄に駒を取らせる行為にしか見えず、自棄（やけ）になったようにすら見える手だった。

「……宮澤さん、定跡どおりに指しましたよね。あれは悪手ではないです。しかし、このサクリファイス（自分の駒を犠牲にして、より良い状況を作ること）は僕の好手です」

「……ほう。なるほど、これは見たことのない手だ。一見、無駄な一手だが先を読めば好手。今からナイトを攻撃しても五手以内にメイト、数の暴力ってやつか……。となれば……ルックで手を封じるのが最善手」

宮澤はビショップをルークで取り戦況を整えた。しかし、神屋はまだ手を残していた。

神屋はただでさえ価値の高いビショップを犠牲にした直後にもう一つナイトをサクリファイスに利用した。

「な……！　正気か……？」

「正気ですよ、宮澤さん。むしろ、ここまでの好手はない。さきほ

どのナイトのサクリファイスと同価値の好手です。僕がざっと図っただけでも八つ程攻め方……いや逃げ方は存在しますが、十手以内にはすべてチェックメイトにできると思います」

実は神屋は宮澤に投了を拒否されたときには、この手を思い付いてはいなかった。むしろ、勝つこと自体が不可能なことであると決めかかっていた。しかし、その後数分の間悩むことで、たった一つ勝てるかもしれない一手を思い付いたのだ。宮澤が定跡を忠実に再現した戦い方をすることは判り始めていた上に、クイーンズ・ギャンビットでオープニングを作ってきたところからも、手堅く攻めるタイプであることは判っていた。そこで、神屋は一つ賭けに出た。勝てる唯一の方法は、宮澤が最善手とされる模範の手を指すことだった。型にはまっているが故にイレギュラーな手に対応できなくなるのだ。神屋は、詰みまでのパターンを脳内で再生し、それしか手がないと確信していた。

「妙だ……いつの間に俺はミスをした？　お前の駒はルックとクイーン、俺の駒はルック二つにビショップ二つにクイーン……だが気づいたころにはピン（相手の駒を動けなくするテクニック）がなされていた」

「十五手目、ポーンのｆ３への移動が悪手です。いや、正確には定跡通りの正しい一手でしたが、一八手目の僕のビショップのサクリファイスが結果として一五手目を悪手に変えたことになります。それからビショップがｅ２に戻った手も悪手です。これは結果論的ですけれど……」

「フッ、俺の負けだ。見事な対局だった。しかし、まさか改新譜を使うとはな」

「いえ、宮澤さんがリザインを拒否なされなければ僕はこんなリスキーな手は出せなかったので、純粋に僕が勝ったとは言えないでしょう」

「いや、勝ちは勝ちだ。お前の資質は解った。今からお前に重要な話をする。よく聞くがいい」

「重要な話……ですか」
神屋は宮澤の目の色が変わるのを感じ取った。

―2―

チェスセットをしまい終えると、宮澤はウェイターを呼びオーダーをした。
「コーヒーを」
「ブラジル、モカ、スマトラ、ジャマイカとありますが、どれがお好みでしょうか」
「スマトラ、ブラック」
「かしこまりました」
神屋は珍しい分類の仕方だと感じた。喫茶店でこのような分類することは少ない。かえって分かりづらいともいえるだろう。しかし宮澤は即座に返答したことから、おそらくこの喫茶店の常連ではないかと予想できる。
「神屋様はご注文はいたしますか?」
「ん、えーと、マンデリンってスマトラでしたっけ。僕も宮澤さんと同じで」
「かしこまりました」
深々と頭を下げ、ウェイターは壁の向こうに消えていった。
「神屋」
宮澤は研ぎ澄まされたナイフのような瞳で神屋を見た。その目は鷹の目を連想させる。神屋は幼い頃、両親に連れられた動物園で見た隼(はやぶさ)を一瞬想起した。
「はい」
「俺を信用できるか?」
「……」
神屋は宮澤が何を言っているのか解らなかった。ウェイターがコ

ーヒーを持って顔を出すと、しばし沈黙が訪れた。その間も神屋は宮澤の真意を探っていた。

「王里神会のテロは八月中に実行されるだろう。いいか、機密データがテロの抑止力になるとは限らん。あれはあくまでも時間稼ぎに過ぎない」

「その言い方だと、機密データの正体を知っているみたいに聞こえますが？」

「俺が知っているのは王里神会がどうやってテロを起こすかということだ」

宮澤はコーヒーを一口飲み、ゆっくり息を吐いた。

「鬼頭は自分の居場所だけはどんな手段であっても伝達しないと決めたようだ。万が一にもその伝達が傍受されたら鬼頭の命は危険に晒されるからな。だから、俺が知った情報を鬼頭に伝えるためには、唯一鬼頭の居場所を知ることが出来るお前を介するほかない」

「なるほど……」

神屋は脳内で「どうやってテロを起こすか」という宮澤の言葉を繰り返していた。そもそも、宮澤はそれをどうやって知ったのか。

「どこでその情報を得たのですか？」

「その情報……？」

「どうやってテロを起こすか……です」

「ああ……。弟子からだ」

「弟子？　鬼頭火山……とは別の……ですか？」

「俺には数人の弟子がいた。その内、才能が開花したのは三人。鬼頭火山、それから斎藤という小説家、そして、鬼頭風林（きとうふうりん）という作家だ。どいつもこいつも……妙なことに首を突っ込む大馬鹿者だがな」

宮澤は昔を思い出すように眼を閉じた。

「鬼頭……風林？　確か、国際テロリズムに関する書籍を幾つか書いて……」

鬼頭風林はテロやテロ組織についての知識に長け、世界中を取材して回り、濃密な本を執筆する作家として高名だった。鬼頭火山と

の関係は公表されてはいなかったが、何度かその関係性に関して噂が立ったことがあった作家だ。

「俺には大師がいた。鬼頭信玄（きとうしんげん）という作家だが昭和初期の文豪として活躍した方だ。そして彼の名を継いで作家になったのが鬼頭火山と鬼頭風林。俺の弟子は皆、鬼頭が自殺したと報道された後、連絡を取ることができ一件に関わっていないことが確認できた。風林を除いて……な」

「……つまり、鬼頭風林もまた、この一件に関わっているということですか？」

天井の照明が湯気を立てるコーヒーに映り込む。それを見ながら神屋は混乱する頭を落ち着かせていた。

「風林はロシアで取材活動をしていた。テロ組織とそのパトロンについてな。そして、その最中、知ってはいけない情報を入手し、何者かによって殺害された」

「……殺害っ！？」

「騒ぐな。じきに風林の死は報道されるだろう。死因をどう説明するかは判らんがな。俺は俺でここしばらくロシアにいた。以前ロシア聖教の取材で知り合った知人のもとで日本の様子を伺っていたのだ。正直、神崎が例の一件に何らかの終結を迎えるまでは帰国するつもりはなかった」

宮澤は眉一つ動かさずに語る。しかし、何か思うところがあるのも確かだろう。変わらぬ表情の奥に落胆と疲弊の色が隠れていた。

「宮澤さん、鬼頭風林は一体誰に……？　まさかそこで王里神会と関連が……」

「真相は藪の中だ。風林は体に四発の銃弾を受け死んでいたらしい。死体は見てないが俺の友人が直接確認した。それをやったのが、王里神会なのか、テロ組織なのか、あるいはロシア政府なのか……は判らない」

「ロシア政府？　なぜロシア政府が鬼頭風林を殺害する必要があるのですか」

「単純な話だ。流出した情報がロシア政府にとって厄介な情報であり、そしてその情報を手にした人間が日本国民に信頼のある作家だったということに過ぎない」

宮澤は神屋の問に即答すると、微かに俯いた。天井の照明が彼の表情に陰影をつける。

クラシック音楽のＢＧＭが神屋の逸る気持ちをいくらか落ち着かせた。

「鬼頭風林が入手したその情報が、王里神会と関係のあるもの……というわけですね？」

「俺の見解では……な。神崎は言っていた。Ｋが『アレ』を手に入れたのはもう随分と前のことで、それがＫと決別した直接的な原因である、と。神崎は『アレ』について何も語らなかったが、今回風林の入手した情報の内容を知ることでそれが何だったのか、予想がついてしまった。それはお前が神崎に会えば知ることになる情報かもしれんが、風林が殺されたことについては俺が教えない限り知ることはできない。俺が神崎に伝言したいのは、鬼頭風林の殺害についてだ。だから、それが伝えられればお前に話すことはもうない。お前がそれ以上の情報を望まなければ……な」

宮澤は神屋に選択の余地を残した。余計な情報を知れば間違った戦略を組むリスクも上がる。しかしその反面、より多くの情報を得ていれば戦略が強化されるのも事実。今の段階でどの情報をどれだけ入手するか、神屋の選択に委ねたのだ。

「僕は打つべき布石はできるだけ早く打つべきであると考えています。これは、あってはならないことですが、もしも僕達が鬼頭火山の隠れている場所に向かったとき、すでに彼が消された後だったら、僕らは何もできなくなる。宮澤さん、教えてください、早急に相手の手を読むためにも……」

「解った。しかし、情報に惑わされるなよ、神屋。全てを疑って、初めて光明は見えるものだ」

「……はい」

「放射線強化型核爆弾、いわゆる中性子爆弾と呼ばれる核兵器。それがロシア連邦から盗まれた」
「……！！」
中性子爆弾。宮澤の口から予想もしていなかった恐ろしい言葉が発せられ、神屋は耳を疑った。視点が定まらず言葉が出てこない時間が数秒続いた。
「これが事実であると仮定する。それを受け入れなければこの話は進まないのだよ」
「そんなまさか……！、それは国際的な大問題では？　そもそもロシアは中性子爆弾を退役させたのではないのですか！？」
「退役させたはずだが、保有している可能性はある。いや、事実保有していたから盗まれた。あるいは、開発技術が盗まれたのかもしれない。だが、そもそも高技術力がなければ製造できないものだ。取り扱いも専門家でなければ難しい。……ともかく、ある個人あるいは団体がそれを保有できる状態になってしまったわけだ」
そう言うと宮澤はｍｉｃｒｏＳＤカードをテーブルの上に置いた。ＳＤカードは透明のビニールに包まれている。
「これが風林の遺体の口内に、正確には舌の裏から見つかった。遺体を確認した友人は俺と風林の共通の友人だったが、その友人に自らの死を示唆していたらしい。もし自分が死んだときは、口内を調べ、そこにあったものを師である宮澤に渡せと言付けをしていたようだ。遺体が燃やされたり回収されたりしたときはどうするつもりだったのか定かではないが、どちらにせよ何らかの方法で俺にメッセージが届く仕組みになっていたのかもしれない」
「そのＳＤには何が入っていたのですか？」
「先に俺が話したこと、つまりロシアから中性子爆弾が盗まれたという情報だ。……そして、もう一つ」
「もう……一つ……？」
「その一件に、日本の新興宗教団体が関わっているかもしれないという情報だ」

「……まさか……王里神会か……！」
「おそらくは、そういうことだろう」
神屋はコーヒーの液表に映る自身の顔を見た。ひどく狼狽している。まさかそこまでの危険が訪れつつあるとは思いもしなかった。王里神会――否、Kは本気なのだ。
「王里神会が関与してるならば、Kが手にしたという『アレ』というのは、まさか……」
「俺は、中性子爆弾の可能性もあると考えている。……となれば、神崎がKから奪った機密データの中身も自ずと推測できるだろう……」
「……つまり、機密データは『中性子爆弾あるいはそれによるテロ行為』を抑制するもの……ということですか」
「俺には判らん。だが、仮に中性子爆弾の機能停止を可能とする機器、または無効果を可能とする何かだとすれば、Kが動揺したのも不思議なことではない。もしくは中性子爆弾が王里神会の関与する領域に存在するという証拠でも同じことだ。Kにとっては脅威になる。俺の推測が正しいならば、そういったものが神崎の持つ切り札、機密データの正体だろう」
「……なるほど」
神屋は飲みかけのコーヒーにブロックシュガーを一つ入れて溶かした。それを飲み干すと、目を瞑り宮澤から聞いた話を思い返す。
「宮澤さん」
「何だ？」
「僕は、あなたを疑っていました」
「そうか。別に構わない。むしろ今も疑うべきだ。それくらいの警戒心が必要な時だろう」
宮澤はそう言って、神屋と同じようにコーヒーを飲み干した。
思わぬ返答だったため一瞬動揺したが、神屋は話を続けた。
「僕は、あなたが神崎さんとその仲間による機密データ奪取及び解読の際の情報漏洩をしたのではないかと思いました。三島氏の殺害

には、事前に彼らの移動を知っていなければ難しい面があったからです。さらに神崎さんから受け取った指針『フロム・ヘヴン』には、篠原亜美とその協力者である外崎暁の存在が王里神会に知られているという情報をあなたから受け取ったとあります。これもまた、あなたが敵であるならば当然のこと。さらに、篠原亜美にはもう一人の協力者高山竜司という男がいました。しかし彼の存在は王里神会に知られていない。これは、単純にあなたが高山を知らなかったからだと考えました。篠原亜美の存在は神崎さんから聞き、外崎暁の存在は最後の暗号を解き夜光公園に来た人間が篠原亜美ではなく外崎暁だったために知ることができた。しかし、高山竜司の話は誰からも聞いておらず知らなかった……と。僕はこれらのことから推理し、宮澤さんが敵である可能性があると思いました」

神屋は真剣な眼差しを宮澤に向け、自分の考えたことを一つ一つ説明した。宮澤は最後まで静かにそれを聞いていた。

「なるほど。確かに、今の俺が向こう側に居てもおかしくない人間だということは理解した。俺がお前の立場なら同じように考えるだろう。俺が敵ならば、今俺が話したことの信憑性も揺らぐというわけか。神屋、お前は何を望む。俺が敵でない証拠が欲しいのか？」

「いえ、それでも僕は……宮澤さんを信じます」

「……何故だ？　俺が味方だと証明する術はないぞ」

宮澤は神屋に訝しげな視線を当てた。

神屋は怯むことなく、迷わずそれに返答する。

「宮澤さんのチェスは真実を帯びていた。チェスは嘘を吐かない――僕はそう信じたいんです」

「……ふっ、なるほどな。極めてお前らしい考え方だ。ここはお前の論理に感謝しておこう」

宮澤はそう応えると、微笑した。

それを見て緊張の糸が緩んだのか、神屋は深く呼吸をし、背もたれに身を預けた。木製のチェアがキシリと音を立てた。

二人の会話が終わると、ＢＧＭのクラシックも丁度終わり、次の

曲に入った。
　始まった曲はパッヘルベルのカノン、最早鬼頭火山のイメージが強い曲だった。
「この曲は……」
　もう幾度も聴いた曲だからか、神屋は思わず呟いていた。
「カノンか……。神屋、神崎がこの曲を暗号に使った理由を知っているか」
「えっ？　いや……分からないです」
「神崎はこの曲を自らの人生に見立てていた。繰り返し似たような音律が重なっていく曲。それは単調だが少しずつ変化する螺旋のような旋律だ。神崎は螺旋の運命の先に幸福の世界を見据えていた。カノンの後にジーグが続くように……な。運命は三つの力に左右される。時と場所、そして意志だ。お前が此処に来たのも、それらが噛み合ったからなのだよ。運命を円環から螺旋に変えるにはそれら三つの力が要る。これが鬼頭の運命論だ」
「……そんな意味があったのですか。だとしたら、最後の問題を解き終えたときは、カノンではなくジーグが流れるのかもしれないな……」
　神屋は十七のキーワードで開かれる最後のＷｅｂページを思い浮かべた。正解にたどり着くとき、部屋に響くのはジーグだろう。
「……神屋、お前たちは最終問題で躓（つまず）いているのか？」
「ええ。おそらく、僕と篠原亜美が合流することに意味があるはずなんです。つまり、僕だけが知る情報が鍵ではないかと……」
「……そうか。では最後に、俺を信じると言ってくれたお前に、一つアドバイスをやろう」
「アドバイス……ですか？」
　神屋は宮澤は何も知らないとばかり思っていた。その宮澤が突然何かを思いついたように神屋にこう言い放った。
「お前だけが知る情報とは限らない。お前が持ち込んだ情報でもいいのだろう。お前が持ち込んだことによって他の者にも伝播した情

報も元を正せばお前だけが知っていた情報ということだろう。合流に意味をもたらすならば、むしろそちらの方が自然だ。お前は神崎から指針を記した文書を受け取ったのだろう？　お前が持ち込んだ情報に鍵が隠されているならば、最も怪しいのはそこではないか？」

ディスカバード・チェック（後書き）

今回は謎が幾つか明らかになってきて少しは楽しめたのではないでしょうかw
というか、楽しんでいただけたら嬉しいです。

読者さんもわずかだと思いますが、亀更新ながらこれからも続けていくので、完結までお付き合いしていただけると嬉しいです！

チェックメイト（前書き）

恒例になりつつあるチェス用語解説もこれでラストかも・・・
「チェックメイト」
詰み。どうあがいても逃げられない状況の事。相手をこれにする事がチェスの目的。（記すまでもないけど・・・ｗ）

チェックメイト

―1―

青空、雲、風。俺を取り囲む全てが、艶(あで)やかに色づいていた。
自分の肉体が本当に存在しているのか分からず、ただ辺りを見渡す。
そこには小さな扉がある。茶色く塗装されたような扉。自然に包まれたこの場所には不似合いな人工物。
不思議なことに、扉は宙に浮いている。当然そこには壁などなく、扉だけがぽつんと浮いているのだ。
意識を研ぎ澄ませていくと、僅かに肉体を認識出来るようになった。手、足、体、頭……次第に自分が具現化していく。
背後を感じ取れるようになったからか、不意に自分を追う深い闇に感づいた。
振り向くと、白かった雲が黒く淀み、渦を巻くようにして肥大していた。そしてその中央に一層淀んだ暗黒が現れる。
それは次第に腕のような形に変容し、ゆっくりと俺の方を目指して進んでくる。
言い知れない恐怖を感じ、俺は扉を見つめた。
――誰かが、呼んでいる。
闇の腕に呑み込まれる寸前のところで、俺は扉を開いた。
扉の先には、淡い黒の空間が広がっていた。そこにあったのは三つの月。
覚えてる。この月は確か……。
「時の月、空間の月、心の月」
月明かりは、どれも少しずつ違っていた。
《……あきら》
「……！！」

誰だ？
今、誰かが俺を呼んだような……。
《あきら―暁》
また――。
俺は果てなく広がる空間を見回した。
すると、遠くで月明かりに照らされる小さな人影を見つけた。
「お前は……」

八月十三日。
暁は朝の柔らかな光を浴びて、穏やかに目を覚ました。
……俺を呼んでいたのはお前か、鳴海。
あの幾度目かの神秘的な夢を見て、久しく感じていなかった安らぎを感じ布団の上でしばらく微睡んでいると、ふと思い出したように亜美の顔が脳裏によぎった。
「俺を呼んでいたのは鳴海だ……だけど、あるいは……」
あの夢を見るのは久しぶりだった。正確には、以前、首を吊った鬼頭火山の姿が現れた似たような夢を見たが、それを除けば約二ヶ月振りである。
あの夢をどんな時に見るかなど、暁は今まで一度も考えたことがなかったが、思い返せば似たような状況下であの夢を見ていると感じていた。
苦しみからの解放。
あの夢にはそういう意味がある。暁は漠然とイメージしていた。
鳴海が死んでから、暁はあの夢を頻繁に見るようになった。暁が思い悩んでいた時期だ。そして、前回に見た時は、苦悩からの「脱出」を図り、病院に向かいトラウマに負けた後だった。
その後は、しばらく見ていない。
このことに関して、暁は理由を掴んでいた。紛れもなく亜美の存在だろう。篠原亜美という人間が暁の心の中で大きくなってきたか

らこそ、暁はあの夢――鳴海――に頼らずとも精神を保つことが出来た。

そして、それは同時にもう一つの事実を示していた。今、現在、自分自身の精神が不安定な状態であるということだ。

「……くそ……俺は何を悩んでいるんだ」

暁はもやもやとして実態の掴めない何かに苛立っていた。

「俺は、亜美と鳴海を重ねているのか」

暁の言葉は窓の向こうに虚しく消えていった。

―2―

一階の洗面台では、神屋が冷水で眠気を払い、乾いたタオルを濡れた顔に当てていた。

昨日の宮澤との対談で疲弊していたのか、神屋は普段よりも遅く起床した。まだ微かに疲れは残るが、最後の関門を打破するための重要なヒントを得た以上、寝過ごすわけにはいかなかった。

宮澤は最後に言った。鬼頭火山による指針「フロム・ヘヴン」に鍵は隠されているのではないか、と。

神屋は宮澤と密会したことに関して、暁や亜美には黙秘することに決めていた。今はまだ何も話す必要はない。暁や亜美が宮澤の話した情報を知るのはまだ後でも構わないのだから。

今、考えるべきことは一つ。十七のキーワードを見つけ、鬼頭火山にとっての最後の砦を打ち破ることである。

……もう少し。もう少しで戦いは終わる。長く続いた苦悩から、ようやく解放される。

神屋は洗面台の鏡に映る自分をじっと見つめた。

「まるで鬼のようじゃないか」

自分の瞳を凝視しながら、神屋は苦笑した。水銀の鏡面を一枚挟んだ別の世界に住む自分は、生気を失っているように思えた。ずっ

と、正義のための戦いを演じてきた。事実、それは正義であろう。しかし、自分の為でもある。いつか、暁に言った「利用しているだけだ」という言葉。暁はそれに対して「利用するためには自分たちを守る必要があるだろう」と応えた。彼は自分の意志で戦っている。

「人の道を生きろ……か」

自らの止まらない野望に、微かに身震いした。自分でできないことを他人に託すのは人類くらいだろうか。他人に指針を与え、満足し、自らは過ちと解りきっている行為に没頭する。

神屋を動かしているのは深い復讐心に他ならなかった――。

気付くと、鏡には高木の姿が映り込んでいた。神屋は急いで笑みを作る。

「……高木さん、おはようございます」

「もう起きてたのか。しかし……随分疲れた様子だな？」

「ええ。さすがに堪えてきましたね、いつ消されてもおかしくないと思うと……」

「まあな。昨日は誰に会ってた？」

「……誰かに会っていたと思った理由はなんですか？」

高木は神屋と入れ替わるように洗面台に入り、歯磨き粉を歯ブラシに一センチ程乗せて、口にくわえた。

「いやさ、昨日は随分険しい表情で外に出たからさ。パソコンの前にいたのはお前だけだろ。多分メールかなんかが届いて、誰かに呼び出されたんじゃないかと思ってよ」

「宮澤睦。『キリストの哲学』の著者に会ってきました」

「……そっか。お前、宮澤睦を警戒してたんだろう。俺も暁から宮澤睦に会ったときの話を聞いたんだ。高山竜司という協力者がこの趣味の悪いゲームの登場人物に選ばれなかったのは、宮澤睦が暁にしか会っていなかったからと解釈すれば辻褄が合う」

「……！　高木さん、そこまで考えていたんですか？」

神屋は心から驚いた。

前々から高木の能力には感嘆していたが、自分の行動が完全に読

まれていたことは驚異的な事実だった。自分ならここまで読めるか、と考えざるを得ない。

「偶然だ。それで、あの人は安全な人なのか？　何を聞いた？」

「今は話せません。今直面している問題の解決に支障をきたすかもしれませんので。後ほど、必ず話します。神崎さんと合流出来れば、そろそろ敵を迎え撃つ作戦も考える必要が出てきます。そこで重要になるであろう情報を得ました。宮澤さんは今のところ信用する方向で考えようかと……」

「わかった。その点はお前に任せよう。暁や亜美ちゃんには、宮澤睦と会っていたことは伏せよう。今話すと発想力を殺ぐかもしれんしな」

「そうしていただけると助かります」

高木は歯磨きを終え軽く毛先を弄ってから、部屋を出た。

「そうだ神屋、お前スペインに興味ないか？」

高木は立ち止まり、顔だけを神屋の方へ向けて訊ねた。

「スペイン……ですか？」

「ああ。この事件が終息したら、向こうに住んでみないか？　俺の友人がスペインにチェスバーを開いたらしくてな。チェスの強い使用人が欲しいらしい」

「……面白そうですが、僕は王里神会幹部ですよ。この一件の解決は、僕の逮捕と同義です」

「そうか？　お前の行為はもう王里神会にバレてるだろ。王里神会から脱会したも同然だ」

「でも、僕は未然に防げたかもしれない事件を見て見ぬふりをして逃げました。これは犯罪になるんじゃないでしょうか」

「警察に言ったところで連中の利害を考えれば、動くとは思えないな。警察は王里神会と共犯みたいなもんだ。お前が何も言えなかったのは自分の身を守るため、致し方ない事情だろう。それに、俺が何とかする」

「しかし……」

「まっ、考えとけよ。……どうせ罪人なら、なんて思って妙なことを考えたりするなよ」
神屋の言葉を遮り、そう言い残すと、高木は前を向きなおし、姿を消した。
神屋は高木の言葉を反芻した。
……あの人はどこまで見透かしてああ言ったのだろうか。
神屋はしばらくの間その場に立ち尽くしていた。

―3―

朝食が片付けられ、時刻は八時三十分を少し過ぎた頃だった。暁、神屋、亜美、高木はいつもの広いリビングの中央に集結した。トニーは姿を表さないが、高木によれば二階か三階に居るらしい。暁はそれを聞いて、見張りだろうと思った。拠点を高木家に移してから少々の時間が経過した。そろそろ敵が踏み込んでくる可能性も警戒しだす頃合いだろう。
暁は亜美とは依然として目も合わなければ会話もなかった。外から見る分には、何かを気にしている風でもなければ、意図的に暁を避けているようには見えない。しかし、どうしても暁から自発的に話しかけるような、そんな勇気がなかった。もし、素っ気なく振舞われたら、と妄念に取り憑かれ、一歩が踏み出せない。
暁は十七のキーワードに集中することに決めた。亜美について考えていると、視点が定まらず、落ち着かなくなるからだ。
しかし、十七のキーワードに集中しようとすると、どうしても昨日の神屋の外出が思い出される。神屋はどこに出かけていたのか。
「なあ神屋、昨日はどこに？」
「定期連絡。まだ僕が王里神会に従っていると思っている人間もいてね。僕の裏切に感づいていないということは幹部以下の人間ってことだけど」

「それって、危険じゃないか？　そいつらからお前の居場所がばれるんじゃ……？」
「いや、抜かりはない。僕なりに上手く処理しておいたから。それより、気づいたことがある」
神屋は暁の詮索を早々に裁ち切り、本題に入った。神屋としては、早急に議題に上げたい事案があった。無論それは、宮澤からの助言、「フロム・ヘヴン」の調査だ。
亜美は少し驚いた様子で神屋の言葉に返答する。
「気づいたって？　十七のキーワード？」
「うん。もともと僕だけが知っていて、君たちに教えた情報もまた、僕がいなければ分からない何かに含まれるんじゃないかってことなんだけど、篠原さんはなにか思いつくかい？」
「あたしたちからしたら神屋君から聞いた情報は殆どが新規の情報だったけど……鬼頭火山が生きてるかもしれないだとか……王里神会がテロを起こすかも……とか」
亜美は口元に手を当て思索を巡らせた。しばらく考えていると、情報量は多いが、大まかに分類すれば先に上げた二点が主な情報であると結論が出る。
「篠原さんは思いつかないみたいだけれど、暁はどう思う？」
暁も亜美と同時に思い当たることを探していた。そして亜美よりも先に正解を導いていた。
「フロム・ヘヴン……か。鬼頭が生きてる可能性も、王里神会のテロもあれには含まれるが、なにより、あれは鬼頭が神屋に渡し、神屋が俺達に渡した情報。他の人間には見られていない前提で俺達は動いているし、だからこそ俺達だけが正解にたどり着ける……そうだな？」
「正解。つまり、十七のキーワードはおそらくフロム・ヘヴンの中に隠されている。それを、今から見つけ出す。高木さん、みんなにアレを配ってもらえますか」
神屋がそう言うと、高木はどこからか紙袋を持ってきて、中身を

全員に渡した。亜美が高木にその正体を問う。
「高木さん、これって……？」
「フロム・ヘヴンを全文印刷した。襲撃されたときに消失したからな。そこから、みんなで、『誰も知らないが、俺達だけが知っている情報』を探し出す。それが十七のキーワードの発見に繋がるってわけだ」
「なーるほど……」
亜美は納得しながらも目を細めてフロム・ヘヴンの文面を見た。暁には亜美が思うところが解っていた。フロム・ヘヴンは一度見た。しかし、それらしい情報はあっただろうか。
それから十分程の間、四人はフロム・ヘヴンを再読した。何か、ヒントになるようなことがあるかどうか一ひとつ確かめるように。
「……神屋、質問がある」
沈黙を破り、暁は落ち着いた声で言った。
「何だい？」
「ここを見てくれ」
暁はフロム・ヘヴンの後半部のある部分を指さした。高木や亜美もそれを覗き込む。

そして数分か数十分して、私は鞄から一冊の本を取り出した。

『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』

この本は、実は私が覆面作家として書いた推理小説だ。最近では私と比較されることの多い作家であるが、それも当然、どちらも私なのだから。
この作品は、ハムレットの如く思索家で非行動的な探偵と、ドン・キホーテの如く独りよがりの正義と情熱に駆られ、無分別な行動をする探偵の二視点で同じ事件の解決を試みる内容である。

この主人公達は、紛れもなく私である。私を二つに分裂させた、分身達だ。

私は彼らに、思索故の快楽と、無分別故の恐怖を与えた。

神屋はこの部分をよく読み直した。一見普通の文に見えるが、ここに何か隠されているというのか。

すると、暁は微笑して「何悩んでるんだ、お前らしくない」と言う。神屋には何のことだか判らなかった。

「神屋、難しく考えないでくれ。一つ聞きたい。『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』を執筆したのが鬼頭火山だっていうのは、世間には公表されていないんだよな？　この事実を知っているのは、誰だ？」

「……そうか！　焦燥からか僕は短兵急な勘違いをしていた！　そもそも十七のキーワードは直接的に発見されるものではないのか！

つまり、『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』を執筆したのが鬼頭火山だという一般には知られていない情報、せいぜい出版に携わった数人しか知りえないような機密性の高い情報から、さらに変換をするということか！」

「ああ、俺の読みではフロム・ヘヴンから直接十七のキーワードを見つけ出すのは不可能だと思う。十七個も共通した括りのワードが隠されていたら、流石に気がつくと思うんだ。高木さんが見付け出した『最後の扉は夜にしか見えない』ってやつみたく、注意しなければ発見出来ないようなものという可能性も捨てきれるものではないけれど、もっと判然した間違えようのないものなんじゃないだろうか？　鬼頭から神屋へ、そして神屋から俺達へ広まった情報で、かつ一般人は知ることができない情報って言ったら、『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』を書いた覆面作家の正体が鬼頭火山ってことぐらいじゃないか？　だから、それがまず土台なんだ。そこからその情報を元に十七のキーワードを導く」

暁は僅かに高揚感を感じながら、そう言い切った。しかし言い切ったものの、暁にはまだその答えを導く方法までは皆目見当が付いていなかった。

「よし、とりあえず行き詰まらない限りはその線で考えてみよう。『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』の作者が鬼頭火山であることから十七のキーワードに繋げるに値する裏付けを探すんだ」

神屋は、部屋にいる全員の顔を順番に見ながら意見をまとめた。

しかし高木は頭を傾げながら唸り声を上げた。

「うーん、暁や神屋が言うことも解るんだが、そんな都合のいい答があるのか？　全く思いつかないけど……。　また文字数とかか？」

高木は頭の中で小説のタイトルを思い浮かべた。

「漢字で二十文字、音で二十四音か……いずれも不適だよなぁ」

「僕としてはそういう視覚から直接辿りつけるような答えはあまり好きじゃないですけどね……」

神屋が思わずそう呟くと、亜美が後方で笑い声を上げた。

「ははっ、好きとか嫌いとかじゃないじゃん。突破口が見えてくるとなんだか楽しそうね、神屋君」

「まあね。もともと僕はこういう思考パズルみたいなことが好きなんだ。ところで、篠原さんはなにか思いついた？」

「ん～、なんか思いつきかけてる気がするんだけど……」

「ほんと？」

「うん……十七だよね……うーん……」

亜美は何かを思いつきそうになりながらも、依然として糸口を掴んではいない。神屋や高木もそれは同じであり答は簡単には出ない。そんな中、暁は一つ疑問を感じていた。

「なぁみんな、そもそも、鬼頭火山は『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』という書名を出してるわけだし、実物の本を買ってきたほうが良くないか？　これまでの傾向だと、作品中に答が

ある場合も考えられる気がするが……」
　暁はまだ『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』を読んだことはなく、二宮光に勧められた時に読んでおけばよかったと感じていた。未読が原因で失敗してしまったなんてことがあったら遣り切れないだろう。
「俺は読んだことあるぜ。なんなら、亜美ちゃんが使ってる部屋の本棚に有ったと思うが、取ってこようか。あの本の作者名何だっけ？」
「えっ？　高木さん、あの本棚の本の並びってアトランダムじゃないんですか？」
「ああ、あれは実は俺にだけは意味が判るような並びになってるんだ。ベースはランダムだが、作者名が判れば一応大まかな位置は検索できる。『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』の作者名は確かプラスなんとか……じゃなかったけ？」
「ＰｌｕｓＹＡですよ、確か……。読み方は合ってるか判んないですけど」
「ＰｌｕｓＹＡ……？　……あ！！」
　高木の脳内に一筋の光が差し込んだ。暁と神屋は顔を見合わせる。
　神屋は矢継ぎ早に尋ねた。
「どうかしました？　何か気がついたんですか？」
「いや、あまり関係ないんだがよ、一つ面白い事に気がついた。ＰｌｕｓＹＡって名前は、鬼頭火山を意味するんだ」
　高木は興奮した様子で叫んだ。そして手に持っていたフロム・ヘヴンのプリントの余白に滝のような勢いで何か文字を書いていく。
「これを見てくれ」
　高木が書いたものを、三人は揃って覗き込んだ。

鬼頭火山
←
ＫＩＴＯＵＫＡＺＡＮ

←
←アナグラム変換
←
ＫＡＮＺＡＫＩＴＯＵ
←
←ＰｌｕｓＹＡ（ＹＡを足す）
←
ＫＡＮＺＡＫＩＴＯＵＹＡ
←
神崎冬也

「あ！」
　亜美が感嘆の声を上げた。
「凄いっ！　それでＰｌｕｓＹＡって名前になったのかぁ！」
「ここまで考えてるってこたあ、他にも重要な役割があってもおかしくないんじゃないか？」
　高木は神屋の方を向いて微笑んだ。
「……まあ、鬼頭火山なら意味がなくてもこのくらいのことはするかもしれないですけれど、最悪の場合、この暗号から答を引っ張り出せるように保険をかけた可能性は少なからずあるかもしれませんね。ＹＡというのが、１７という数字に結びつけば話は早かったのだけれど……」
　神屋は答に繋がる情報を模索しながら、応えた。しかし冷静に考えればそれでも問題が残ることは確かではある。仮にＹＡが１７という数字に結びついても、そこから更に十七のキーワードに変換する術が必要なのだから。
　高木の発見を見てからしばらく何かを考えていた暁は不意に二ヶ月ほど前の記憶を呼び戻していた。
「……ＹＡって言うと、示す数字は２５と１だな。これも直接関係あることじゃないが、『鍵穴』の解説に付いていた鬼頭火山の経歴

の紹介を見たことがあるんだが、鬼頭火山がデビューしたのって二十六歳の時じゃなかったか？」

暁の言葉にパンと掌を合わせ高木は「そうか」と呟き、感心した様子を見せた。

「暁、俺もその経歴の紹介は読んだが、確かにデビューは二十六歳だった。俺の推測だが、鬼頭火山というペンネームを付けた時、偶然中途なアナグラムが成立してしまったんじゃないか？　つまり意味のないＹＡという文字が生じてしまった。だからデビュー時期を調整して余ったＹＡという文字に意味を持たせた……って、今回の件にはやっぱ関係なさそうだな……はは」

高木は自分が十七のキーワードに関係しないであろうことを熱く語ってしまっていることに気付き僅かに苦笑した。

一瞬、沈黙が訪れ、空調の音が妙に目立って響いた。暁は軽く欠伸をして意味なく亜美の顔を見た。そこで久し振りに亜美と目があってしまった。

「……」

暁には耐え難い気まずさがあり、直ぐに目を逸らした。亜美は何も気にしていないのかもしれないが、暁は酷く息苦しかった。自己顕示欲から自身の不幸を引き起こしてしまった気がして言いがたい後悔が押し寄せる。

そこで突然、亜美が短く声を上げた。

「あっ」

神屋と高木は若干驚いた様子で亜美に視線を移した。一方、暁は何故か思わず出口の扉の方を見てしまった。

「どうかした？」

神屋は興味深げな表情で問うた。

「気付いたの！　十七のキーワード！」

「……！！！！」

「本当か！？」

暁はここでようやく、遅れながらも亜美の方を向いた。

……謎を解いたって言うのか……？

「あたしも、『鍵穴』の解説で鬼頭火山の経歴の紹介は読んだんだけど、そこに確かに二十六歳でデビューって書いてあった。それを思い出した時、同時にもっと重要なことが書いてあったのを思い出したの。そこにはこう書いてあった。鬼頭火山は二十六歳でデビューし、これまでに十六作の作品を執筆したってね」

「しかし亜美ちゃん、十六だと一つ足りな……あっ！　なるほど！」

「そうです。十六だと一つ足りない。そこで『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』が最後の一つとして加わる。これで、全部で十七！　キーワードに入るのは、鬼頭火山の全作品名！」

亜美が高らかにそう言い放ったとき、その場の全員は勝利を確信した。

神屋は僅かに声を震わせて一人ひとりに訊ねた。最初に亜美に。

「篠原さん、自信は？」

「ある！」

次に高木に。

「高木さん、異論は」

「もちろん、ない」

そして、最後に暁に。

「暁、君は？」

「……ああ、異議なしだ！」

この時ばかりは不安定だった精神に仮初の軸が生じた。暁は高揚感に身を震わせた。

「……よし、篠原さん、鬼頭火山の作品名を」

「うん、でもこれ、順番は？」

「おそらく、順番は関係ない。番号が振ってあるならともかく、何もヒントが無い所に順番通りに入力しろというのは酷だ。僕らが見落としていない限りは、順番の指定は恐らくないだろう。どちらにしても試す余裕はもうない。やるなら、発表順かな。篠原さん、発表された順番は分かるかい？」

「任せて！　まずデビュー作、『鬼頭火山』！」
神屋はキーボードを軽快に叩いていく。
「二作目、『楽園』」
「三作目、『人形』」
亜美は神屋のすぐ後ろからパソコンのディスプレイを覗き込み、神屋の入力を確認しながら続ける。
「四作目、『蝶（せんごく）』」
「五作目、『千国』」
「六作目、『知恵の実』」
神屋のタイプは緊張と興奮からか、ミスタイプが目立った。しかし、徐々に空いたスペースは埋まっていく。
「七作目、『鬼斬祭（おにきりさい）』」
「八作目、『永遠の女』」
「九作目、『月明（げつめい）』」
「十作目、『地底湖』」
高木はゴクリと喉を鳴らし、画面を凝視した。
「十一作目、『氷の街』」
「十二作目、『ｐｒｅｌｕｄｅ』」
「十三作目、『滅びの惨禍』」
暁は亜美が言った十三作目『滅びの惨禍』のタイトルを聞き、数日前のことを思い出した。二宮光と図書室掃除をした後に彼女から初めて王里神会の名を聞いたとき、暁はこの作品の事を思い出していた。とある宗教団体がテロを起こし、小説内の仮想国家が崩壊するという物語だった。鬼頭火山が書いた唯一のサスペンス小説だ。その小説で最初に犯罪が行われるのは二〇〇九年だった。まさか、本当に王里神会の企みを暗示していたのか――。
「十四作目、『扉』」
「十五作目、『糸』」
亜美はここで一度大きく息を吸い、そして鬼頭火山としては最後の作品の名を口にした。

「十六作目、推理小説の金字塔、鬼頭火山の最高傑作『鍵穴』」
神屋が慎重にタイプする。
「そして、十七作目……『ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を』！」
皆の視線が集まる中、神屋は最後の二十文字を打ち込んだ。
「……送信……するよ」
「……」
「ああ」
高木は思わず口を閉ざし、暁は短く応えた。
――――カチッ。
ついに送信ボタンが押された。これで失敗すれば策は一切潰える。振り出しに戻るか、先に進むか。あるいは、生か死か。最後の審判が下される。
「いよいよだね」
亜美が固唾を呑んで読み込まれる画面を見つめる。
そして、ついに画面が切り替わった――。
スピーカーから流れだしたのは、パッヘルベルの『カノン』に続く曲『ジーグ』。フーガ風な処理で始められるニ長調。軽快な舞曲が祝福の旋律を響かせた。
その瞬間、神屋は口角を上げ至極冷静な様子で言った。
「チェックメイト」

チェックメイト（後書き）

今回、暗号が指し示す解答が明らかになりました。
少しでも読者様の想像を超えられていたら嬉しいですね！
次回以降数話は竜司担当です。
王里神会編も終焉に向かいつつありますね。

設定資料（前書き）

鬼頭火山についての設定資料です。
興味のない方は読み飛ばしても大丈夫ですw

設定資料

？　鬼頭火山周辺のの師弟関係について

大師　鬼頭信玄

宮澤睦、鬼頭火山、鬼頭風林、斉藤征二などを輩出した師弟関係の頂点にあり、昭和初期の文豪として高名な作家。

小説と評論を得意とし、作品数は少ないものの、殆どの作品が高評価を得ている。

鬼頭火山と鬼頭風林は彼の名である「鬼頭」を受け継いでいる。

本人は師弟関係を後代に継承しようとは考えておらず、弟子である宮澤がさらに数人の弟子をとったことで結果的に三代の師弟関係が成立した。

既に他界したと思われる。

？

？　師弟

？

師　宮澤睦

第二の暗号が隠されていた書籍『キリストの哲学』の著者。

現在６８歳のベテラン哲学者でありながら評論家でもあり、キリスト教の専門家でもある。５年前、そのキリスト教への精通の高度さから、あるネットユーザーが『キリストＪａｐａｎ』と有名掲示板にて打ち込んだのがきっかけで、一躍、時の人となる。
推理小説の金字塔と称された鬼頭火山の最高傑作『鍵穴』の解説をつとめた人物であり、鬼頭火山の師でもある。

弟子を数人育成し、後に以下の三名が著名な作家となる。

？
？師弟
？

？　鬼頭火山

本名、神崎冬也。推理小説家として二十六歳でデビューしてから十六作の作品を世に放ち、平成二十年に発売された『鍵穴』は推理小説の金字塔とも称された。平成二十一年の冬で四十九歳になる。

大師である鬼頭信玄の名を引き継ぎ、大作家となる。弟子の中で唯一宮澤睦との師弟関係を公表している。

ちなみに、「鬼頭火山」というペンネームは本名「神崎冬也」をアルファベット表記にした「ＫＡＮＺＡＫＩＴＯＵＹＡ」から「ＹＡ」を削除したもののアナグラムにもなっている。
「ＹＡ」は「２５と１」を表し、足した「２６」は鬼頭火山のデビュー年齢でもある。

覆面作家「ＰｌｕｓＹＡ」の名義でとして『ハムレットに快楽を、

ドンキホーテに恐怖を』を執筆している。

平成二十一年に自殺したとされる。

？

？兄弟弟子

？

？　鬼頭風林

ジャーナリスト作家、評論家。国際テロリズムに通じ、多くの著作で国民から信頼を得ている。

外国を渡り歩き、取材をし、執筆の際には帰国するというスタイルを持っている。

職業柄か、鬼頭火山および宮澤睦との関係性は世間には公表されていない。

鬼頭火山の死亡報道後、連絡が取れなくなり鬼頭火山と王里神会に関する事件に関わっていたか否かは不明。

ロシアにて、テロ組織とそのパトロンに関しての取材をしている最中、ロシアが中性子爆弾を保有しており、それが何者かによって盗まれたということを知る。それが起因となってか、何者かによって殺害されたとされ、師である宮澤へメッセージを残す。

メッセージの内容はｍｉｃｒｏＳＤカードに記録されており、その内容は以下の通り。

？　ロシアが退役させたはずの中性子爆弾を保有していた。

？　中性子爆弾が何者かによって奪取された。

？　それらの一件に関して、日本の新興宗教団体が関与している可能性がある。

？

？兄弟弟子

？

？　斎藤征二

国内で著名な小説家。
大衆小説全般を得意としており、鬼頭火山と違いジャンルは一定していない。
宮澤睦の弟子であるが公表はしていない。
ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　ＮＥＴ主催の文学賞の選考委員として選抜された鬼頭火山が自殺した（と報道された）為、彼の代わりに選考委員を務めることとなる。
そのことから、鬼頭や宮澤とは私的な交友があったと思われる。

鬼頭火山の死亡報道後、鬼頭風林を除く他の兄弟弟子と同様、宮澤により鬼頭火山が存命である可能性があることや王里神会が関わる事件等について何か知っているか確認がなされ、一件に関わりがないであろうことが判明している。

？　鬼頭火山の作品一覧

1. 鬼頭火山
? 鬼頭火山のデビュー作
? 作者と同名の主人公が登場する作品
2. 楽園
? 後に鬼頭火山の代表作とされるヒット作
? 師である宮澤睦が制作に関わったとして話題になる
3. 人形
4. 蝶
? 古典トリックをアレンジした新トリックが話題となる
? 祭の描写が鬼頭火山の住む地域の夏祭りをモチーフにされたとされる
5. 千国
6. 知恵の実
? 後に代表作とされるヒット作
? 師である宮澤睦が作品制作に関わったとして話題となる
7. 鬼斬祭
? 後に代表作とされるヒット作
? ある村に伝わる「鬼斬」と呼ばれる伝説を巡り事件が起きる
? 映画化される
? 宮澤の師である鬼頭信玄の作品『鬼斬』の舞台となった村で再び事件が起きるという設定であり、『鬼斬』をリスペクトした作品であると鬼頭が語り、鬼頭周辺の師弟関係が広く知れ渡る。
8. 永遠の女
9. 月明
10. 地底湖
? ある屋敷の地下に隠された秘密を巡り事件が起きる
11. 氷の街
12. Ｐｒｅｌｕｄｅ
13. 滅びの惨禍
? 鬼頭火山作品唯一のサスペンス

？　テロによる仮想国家の崩壊を描く
？　テロリズムに関する専門家鬼頭風林との関係性が噂される
１４．　扉
１５．　糸
１６．　鍵穴
？　推理小説の金字塔と称され、鬼頭火山作品で最も有名なヒット作
？　映画化・ドラマ化が決定される
？　師、宮澤睦が解説を書いたことで話題となる
１７．　ハムレットに快楽を、ドンキホーテに恐怖を（鬼頭火山名義ではなく「ＰｌｕｓＹＡ」名義、なお両者が同一人物であることは公表されていない）
？　鬼頭火山が覆面作家「ＰｌｕｓＹＡ」として執筆し、一般には鬼頭火山の作品とは知られていない書籍
？　映画化が決定している
？　ハムレット思考型の探偵と、ドン・キホーテ思考型の探偵が、難事件の解決に挑む作品

妙手

-1-

ジーグの音量は次第に小さくなった。
部屋の中にいる誰もが固唾を呑んで見守る中、パソコンの画面内容は一転した。
画面は、一瞬だけ白くなり、次にその全貌を露わにした。
……文字だ。
パッと画面に映し出されたのは、幾行からもなる文字列だ。
興奮した暁は、画面に何が書かれているのか、うまく読めなかった。すぐに視点が定まろうとしなかったからだ。
やっと文頭に目が落ち着いた。

０９．７．２０．Ｍｏｎ

此処に重要な件について記す。
心して読むべし。

既に機密データは看破した。
機密データの内容は、簡略すると、核兵器の弾頭内のコンピュータの目標番号の変更を可能とする手順についての説明であった。
私はそれを理解し、いつでも目標を変更することが可能な立場に現在いる。

機密データには、他にも、＜革命＞についての詳しい場所、日時が記されている。＜革命＞とはテロ行為のことだ。

今年、八月二十一日金曜日、東京「ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯ

N　PARK」にて、前述の核兵器は投下される。

以下に、私とのインターフェースを提示する。

クリック

――ここで終わっている。

馬鹿としか言えぬ程の沈黙が、一体どれほどの間流れたのか、時計が刻む正確な値を体内で理解した者はこの部屋に一人もいない。時間感覚とは不思議なものだ。

しばらくして神屋が重々しく、実に重々しく語り始めた。他三人は、静かに聞いた。

「……つまり、だ。僕たちは、クリックを押せばいい。恐らくは、電話番号なり、メールアドレスなりを入手できる。そして、これを書いた人と詳しく話し……」

神屋も言いながら気付いていた。自分は何かズレた発言をしている。否、大切な部分から意図的に目を背けて口を動かしている。判っていたが、思考がどうのより、口が動いてしまったのだから仕方ない。

亜美は――普通の抑揚で言った。

「核？」

核。

……核？

暁は、頭がジンジンし始めたのを、微妙な快感としてその身に受けた。

もう一度、最初から黙読してみる。

二度目は素早く読んだ。

やはり、そう、これは――

「……」

暁の脳は思考を遮断してしまった。一時的に。

高木は、「え？」と小さく漏らす亜美を一瞥しつつ、顎に手を添え、その腕の肘をもう片方で支えた。直立したまま、黙ってパソコンから少し離れいく。献立を考える若者のような顔だった。
神屋は、再び声を発した。
「……そうか。これは……」
違う。
そうではない。
「……いや……」
珍しい。
神屋聖孝が口ごもる場面などそうそう滅多にお目にかかれない。
扉が――暁は扉の方を見た。
扉が開いた。

「……核兵器。Kハ本気ノヨウデスネ」
唯一。
その部屋で冷静だったのは、入ってきたばかりのトニーであった。
表情が引き締まっている。いつもの薄ら笑いは、そこにはない。
声に引き戻されるようにして、暁は、現実に帰ってきた。
「核って」
なんだよ。という声があまりに小さかった。
神屋はじっと動かない。パソコン画面を見つめたまま。
亜美は言った。
少し落ち着いている。呑み込めてきたらしい。
「つまり、王里神会のテロっていうのは、核兵器を使ったものなの……？　でも神崎さんは、それを防げるの……？」
つまり。
「テロを未然に防げるの？」
まるで自問のような口調だった。
高木が背を向けたまま、独り言のように語りだした。

「そこに書いてあることが真実なら、アンチマターは勝利したことになるかもしれない。テロは失敗するということだからな。しかしそれにしても、核兵器、ときたか。これは、おれたちが関わっていいレヴェルの事件では、いよいよなくなってきたかもしれん」

高木は振り向いた。神屋がおぼろげな視線を高木に投げかける。

暁は、壁に手をついて、体を支えていた。

「この文章の書き手はどうやら、テロをどうにかできるらしいな。機密データを看破した……つまりは、フロム・ヘヴンにあった強固なプロテクトを、解除したということか」

高木が言い終えぬうちに、それは鼓膜を刺激した――

「放射性強化型核爆弾、中性子爆弾と呼ばれる核兵器」

神屋はさらさらと言ってのけた。

「恐ろしい兵器だ」

そして押し黙った。この男はいきなり何を言い出すのか。

亜美には神屋の言ったことの意味が判らない。

暁はもう一度、画面に見入ると、携帯を取り出した。

今日が八月十三日。テロの実行は、二十一日。一週間も経てば、それは起こる予定だったらしい。

「聖孝」

暁は、低い声で、押し黙った神屋の名を呼んだ。

「なんだい」

「事件は収束したと捉えていいのか」

神屋は、すぐには答えなかった。

――クーラーが利いている。このリビングは涼しかった。

トニーは扉に寄り掛かり、うつむき――そして。

嗤(わら)った。

―2―

暑さがピークを迎えた昼下がり。
都会をひた歩く人、人人人、人の群れ。
世の中には、意外と暇人が多いみたいだ。こんなに暑い中、外出するなんて、熱中症になりたいだけの馬鹿だけだ。
左虎は群れの中心でそう真摯に思った。恐らく――それほどに暑苦しく、実際は、理知的に考えるならば、ここにいる人間たちは暇でないと判る。忙しいのだ。だが中には馬鹿もいるだろう。
飲食店に一人で入った。
繁盛しているようだ。客でにぎわっている。左虎はそういう印象を持った。
それにしても八月中旬の昼間は暑いものだ。当たり前だが店内には冷房が利いていて、ようやく一息つける。
冷やし中華という気の利いたメニューが目に留まる。左虎はそれの他にコーラを注文すると、振動する携帯電話をポケットから取り出した。電話か。
「はい」
かけてきたのは氷鳥だった。王里神会最高幹部団。
「この前、鬼頭の居場所が判るかもしれないと言っていたが」
周りの客の雑音によって、氷鳥の声は聞き取り難かった。左虎は聞き返した。
「昨日の夜、電話で、鬼頭の居場所が判るかもと言っただろう」
ああ、と左虎は思い至った。
「あれはな、早とちりだった。おれに個人的な恨みがあるヒットマンに偶然会ってね。そいつが変な紙を持ってたんだよ」
左虎は、視線を斜めに昨夜のことを思い出しながら話した。
「その紙には、血で文字が書かれていた。ちょうど、そのとき、おれがいた参道の名前だったわけよ。そこでインスピレーションが浮かんだ」
左虎はここで一旦、言葉を切った。氷鳥の反応をうかがう。
「なるほど」

彼はそれだけ言った。早く話せという心の声が聞こえたような気がした左虎は、フッと笑ってから、続けた。

「いやね、最近はなんだ、おれは疎いもんでさあ、世間様の中には、いるらしいじゃないの。占いだかなんだか、高名なオカルトティックな人が。で、そういった類なんじゃないかと思ったんだ。自分の血を使って、恨みのある人物が今どこにいるのかを当てる的な」

「ふむ」

いざ言葉にしてみるとどれほど馬鹿馬鹿しいかがよく判る。そんな超自然的な能力を有する人間など、いるはずがない。

「勿論、信じちゃいないさ。だが、可能性がゼロだと断ずるには些(いささ)かの躊躇がある」

「左虎君。君は、そういった物事を信じるタイプではなかったと、私は思うのだが」

意外にも、氷鳥はこの話題にノッてきた。

左虎は、王里神会の最高幹部という堅苦しい人間の気が引けて若干気分が良い。

「いやいや、まあ、信じないのは確かだ。ああいうのは、必ずトリックがあるからな」

「言ってみたまえ」

「言うも何も、言葉通りだよ。種がある」

種――左虎は強調した。

「では、占いはどうしている」

「占いは、別に当たらなくともいいのだよ。当たることもあるらしいがね」

「当たらなくともいい……つまり、こういうことか？　占いとは、仮説であり、信じるも信じないも自由」

「詳しくはないがね。あいつらは、何か、資料を持っているだろう。それ見てああだこうだと言っているだけだ。テレビでやる天気予報と変わらん」

氷鳥が何故この手の話につっかかるか、未だ左虎には理解できな

かった。だが、別にその点について深読みする必要もなかろう。左虎はあくびをした。
「ほう。では、予言者はどうか」
「予言？」
「未来を当てる者だ。彼らはどういった種を使うのか」
「さあな」
そういったことには、あまり詳しくない。予言といっても、やり方は色々あるのだろうくらいにしか、左虎は考えなかった。
しばらく話していると、例の話題に戻っていた。
「ところで、その黄色い下地に龍の絵が描かれた紙の正体とは何だったんだ」
「あれはな、インチキ婆の糞商売だよ。いわゆる恋愛系統のオマジナイだ。下町に行って聞いて回ったら、それなら、あの婆さんが売ってるよと教えてくれた。ちなみに、若者は誰も知らんかったがな。紙について知ってたのは、どいつもこいつも年寄ばかりだ。とりあえず言われた店に行ってみると、なんとまあ、怪しそうな小店でね。客なんて来んのかいと思わず聞きそうになっちまうほどの、薄汚れた内装で。しかし、結構に客足はよくて、暮らしは成り立っているらしい。副業なんかもやってねえらしいな。で、一番目立つ場所にその紙は置かれていた。店が店だ。若いのは来ないだろうな。あのヒットマンは四十半ば。調べたところ、店の付近に住んでいたらしいな。だから、あの紙を持ってても不思議じゃあない。合点はいくわけだ」
「うむ。で、その紙に参道名が記されていたのは？」
「思い人。何、折り入って話すほどのことではないがね」
「思い人？」
「紙に、自分の血で思い出の場所を記す。大概は好きな女との出逢った場所だとか、プロポーズしたところだったりする。稀に、一度は訪れてみたい場所として書く奴もいるらしいがね。店の婆さんや、紙を買ったことのある年寄に聞いた話だ。まあ、あのヒットマンに

とってあの参道がどんな意味での大切な場所であったかは判らんが、皮肉だね、おれに殺されてしまうのだから」

話の内容は結局のところ、強いて言えば、どうでもいいものだった。氷鳥は興味関心を無くしたのか、幾分、落ち着いた雰囲気の声を出した。

「そうか。それで……実際に効果はあるのか？」

聞いておいて、そうか、の三文字で終わらせるのは幾らなんでもと自重したのか、なけなしの質問は吐いた空気のようでもあった。

「評判を聞いたら、まあ、そこそこ効果はあるらしいぜ。別れた妻と再婚したなんていうおっさんもいたしな」

どういった種かは判らない。

しかし――この世には、ないのだ。

「左虎君」

「ん？」

「それは――」

思うかね？　不思議だと。

「ああ、あんたが何を言わんとしているか、当ててやるよ。この世に、不思議なことなどないのだと、そう言いたいのだろう」

左虎は少なくとも、この世に不思議なことは起こりうると思っている。

だが全ての物事には、種が、理由が存在する――べきなのだ。

「そう。だが教えてやろう」

不思議なことなど。

「ないのだよ」

「――与太話はいいさ」

そう言って、左虎は電話を切った。

数年来の付き合いがある氷鳥の性格は、だいだい判っていた。ああいう話は、始まってしまうと、止まらなくなる男なのだ。

冷やし中華が運ばれてきた。

コーラも同時に用意された。

喉が渇いていた左虎は、勢いよく飲んだ。
それにしても……
今日を含めて、あと八日か。ぼんやりと仕事のことを思い浮かべた。
鬼頭火山殺害までのタイムリミットは、残りわずかだ。
そもそもの話、居場所をくらましている人間を殺せというのは、難儀である。
左虎は基本的に「殺し」を行うだけで、居場所を掘り当てる義務を有していない。鬼頭の居場所を突き止めるのは王里神会の仕事である。しかし実際には、鬼頭探しも左虎に頼っている部分が大きい。今回の？事件、これは王里神会が身内から出た不祥事だ。本来は自分で尻拭いすべき事柄である。左虎はそう思っている。
予想に反して——しかしながら、鬼頭は手強かったようだ。
左虎に仕事の話が入ったのも、つまりは、音を上げた。さすがの王里神会様もお手上げということだ。
鬼頭火山——神崎冬也。
闇の殺し屋である左虎の耳にも、その名は通っていた。
……否。
そういうレヴェルではない。
左虎と鬼頭には、ある因縁の関係があるのだ。それを知っていて氷鳥が左虎を選んだとすれば、氷鳥とは、なんとも計算高い男である。
しかし、それはないだろう。
今回、鬼頭と左虎を引き寄せたのは、全くの偶然なのだ。なぜなら、いくら氷鳥とはいえ、あの秘め事を知っているはずがないからだ。
鬼頭火山に、いや、神崎冬也に隠された、最大の秘密。
——嬉しいな。鬼頭火山を殺せるのが僕で……
左虎は、思う。
何事にも種があるなら、そうだ、鬼頭と自分を再び引き合わせた

のは――いや、種など、ないのかもしれぬ。それはだが、判らない。
不思議？　違う。
因縁が、二人を、負のエネルギーが、何らかの力を以ってしてまるで磁力のように、巡り合せたのだろうか。
左虎は深く考えるのをやめた。
真夏の太陽光が、窓から差し込んではいるが、冷やし中華の冷やかさに一瞬、夏を忘れることができた。
うずく心が――箸を、僅かに震わせた。

妙手（後書き）

段々と物語が収斂していますね、王里神会編の終わりも近いでしょう。

作者も楽しみにしていますｗ

急展開

―1―

海岸に打ち寄せる波。
暗黒の世界に吹きすさぶ潮風。
一隻の貿易船は、大量の貨物を背負い込み、出航した。
夜中に船を沖合まで出すのは危険だ。
それでも大型の船は、孤独に、漆黒の海へと旅立った。
船内に収められた、沢山の荷物。
そのうちのひとつから、人為的な動きが見られた。
船のスピードは速かった。しかし、波は、結構強い。
そのせいで、巨大な偽装容器から這い出た二人の男は転倒した。
船内はあまりに薄暗かった。
船は、進む。
ゆらりゆらり、異国の地へ向けて。

―2―

カレンダーを見たが、今日が何日か判らなかった。
寝っころがりながら、携帯を手探りで探す。ない。少なくとも、手に取れる範囲には、存在しない。
……別にいい。
気怠いこの夏の昼、起き上がってまで今日の日付けを知りたくはない。
既に、高山竜司の中では、別のことが考えられていた。
篠原亜美。
同じ高校の違うクラスの女子だ。竜司は瞼の裏、亜美の全身を、

記憶の限り思い描いた。
背は、自分より低い。
痩せている印象が少しある体。胸は、Cカップくらいだろうか。意外に大きい。
制服のスカートからスラリと伸びた、少し色白な太もも。
黒目がちな、大きな瞳。セミロングの黒髪――
「……？」
いつも、竜司には不思議に思うことがある。
「どうしてだ……」
理屈は判らないが、好きになった女の顔は、何故か浮かんでこないのだ。
――恋は人を盲目にさせる。
この言葉はあながち間違っていない。何故なら、どうでもよくなった途端、その顔を容易に思い描けるようになるからだ。
竜司は数回、恋をしたことがある。
勿論、一度も成熟したためしはないが、しかし、確かにそのときも目は見えなくなっていた。意中の相手の顔面だけが、何故か、どうしてなのか判らないが、映像として頭に浮かんでこない。
だが竜司はにんまりと笑みを作った。
「証拠じゃあないか……亜美ちゃんのことが、好きだという……」
竜司は喉の渇きを覚え、ベッドから立ち上がった。
飲み物を求め階下のリビングに赴き、ウーロン茶を飲んだ――そのはずであり、それは事実であるが何故か竜司には疑問に思えた。
いつの間にか、また自室に戻り、ベッドに倒れている……
喉は潤いを与えられ、その点に関しては満足だ。
しかし、満足できない点は幾つもまだ、己の中からその存在を目ざとく誇張している。亜美。篠原亜美は――これは、恋か。
それにしたって、記憶が曖昧過ぎる。
自分はいつから、亜美を好きになったのだ？
判らないのか……

暑い。

今年の夏は、一際、暑く感じられた。

竜司は意味もなく唸った。意味はないが、意義もない。

暑いからいけないのだ。

クーラーをつけてみた。

また数時間が経過した。

随分と部屋は涼しくなり、竜司は満足した。

このまま寝ていたい気分だが、竜司はそういう男ではなかった。

案外、思慮深く、そして律儀な人間である。自分に厳しい者なのだ。

気持ちに踏ん切りをつけ、机に向かった。勉強をせねばならぬ。

――この男は、一言で表すなら、孤独なのだ。

だが一様に孤独ではなく、孤高な人格を有した稀な人間である。

竜司はそれを自覚していない。

二時間ほど数学を考えると、またベッドに突っ伏した。勉強が自身を救うことを竜司は把握している。単に受験のためではなく自己の確立のためにも勉学を怠らない。若い世代では立派な部類に属するといっても過言ではなかろう。

竜司はクーラーに感謝した。なかったら勉強などとてもじゃないができなかった。然るに、クーラーのある環境にも感謝した。自分がこのような社会環境に生まれ落ちたことに感謝した。竜司はある意味、かなり大人びている。その辺の大人よりよほど立派だ。毎日、食事にありつけ、静かに眠り静かに目を覚ませる。新しい服を買うことができる。十分に、幸せではないか。少なくとも彼はそう考えている。ニュースで見るような事件の被害者に自分が該当しないことも、その日自分は平和に暮らせたと、運がいいと思えるのであった。だから竜司は幸せなのだ。

――それでも、彼の心のどこかに釈然としないものがある。

それが何なのかはよく判らない。

だが亜美が関係していることだけは明らかだった。

彼女のことを思い出すと、連鎖的に小説のことを思い出した。人

間をテーマにした作品である。原稿はどこへやっただろう。探すとすぐに見つかった。何となく読んでみた。

……つまらねえ。

読み終えた感想がそれだった。

第一、　文を書くのは性じゃない。

竜司は早くも小説に嫌気を差していた。亜美の気に留めてもらおうと始めたわけであるが、何だか突然ふとどうでもいいように思えた。

なぁにが恋愛だ、くだらねえ。

竜司は原稿用紙をほっぽり出すと、再度眠りに就こうとした。時間が気になった。寝たままの姿勢から見える窓の外の景色は、済んだ水色をしていた。今、何時だ？　そういえばこの部屋に置いてある時計は電池が切れ止まったままだ。だから携帯を見なければ時刻は判らなかった。先ほど起き上がった際に、勉強机の上に置かれた携帯をポケットに入れたままだ。取り出して開いた。

八月十九日　水曜日　午後五時二分

「もう夏休み終わるじゃねえか」

竜司は露骨に嫌そうな声を出した。

急展開（後書き）

暁たちが暗号を解いたのが１３日、現在は既に１９日、まさに急展開、この先どうなるのか、僕等もまだ解っていません。

極限状態

―1―

氷鳥は、薄暗い部屋からほとんど出ない。

何か外に用事があっても部下を使う。どうしても外に出なければいけないときは、特製のサングラスを付けた。すると目の病気かというとそうでもない。ただ、常に自分が暗闇の世界にいるかの如く錯覚したいだけだ。

明るい所は嫌いだった。

簡略すれば、彼は極度の根暗である。性格が暗くなった原因というのが恐らくはあるはずだが、あまりに長い間暗闇に身を置いたせいか、それは忘れてしまった。彼は自身の在り様について特に思考しない。どうでもよいのだ。

そうしていつしか、彼はいわゆる天才となった。

己というモノにほとんど一切構わなくなった彼は、外部にのみ目を向けるという偉業を成した。生活する上での必要最低限のことは適当にやり、そう、学習し続けた。高校にさえまともに通わなかったものの、世界最高水準の大学に合格し、首席で卒業。超一流企業に就職した。彼の人生は傍目からすれば、完璧そのものだった。だが彼の精神状態を知っての羨望ではない。

誰も氷鳥の中身は知らなかった。

両親でさえも、彼の腹の中に何が溜まっているのかは見抜くことができず、そのまま他界した。氷鳥が二十五のときだ。二人とも癌で亡くなった。一般的には早い死といえる。葬式には多くの人が来た。それは普通の人数ではない。二人はそれなりの権威を持った人物であった。属にいう高層階流だ。金持ち権力ありの社長の父、美しく高学歴で皇族でもあった母、こんな二人のもと生まれ落ちた氷鳥は、到底普通には育たなかった。二人とも人間ではない。その辺

にいる普遍的な大人とは違っていた。完璧主義、というのだろうか。氷鳥の精神は二人によってあたかも作られてしまったのだ。だから自我を持っていない感覚に似ている。勉強しろ、体裁をわきまえろ、両親のしつけはしつけではなく、命令に等しい。簡潔にいえば、氷鳥の精神は一度壊れたのだ。それが原因なのかもしれない。七歳の頃から異様に光を嫌うようになった。それに比例し、脳は活発に作用したようだが、人としての心は持ち合わせられなかった。勉強はあまりしなかったが、ちょっとやるだけでほぼ全てを理解できた。一を知って十を知るとはこのことである。

外国の企業で働くようになってから四年が過ぎた頃か。

ようやく、三十を手前にして自分という存在に気を向けた。きっかけは大したものじゃない。鏡だ。仕事の合間、休憩がてらトイレに赴き、顔を洗い、拭き、鏡を見た。そのとき、恐らく氷鳥は初めて自分の顔を見たのだろう。大層驚いた。何故なら、目の前にいるのが誰だか判らなかったからだ。

そして王里神会に出会った。

普段から、宗教などには目も向けず耳も傾けぬ男であるが、仕事の関係で一度だけ、宗教に関わることがあった。ついでくらいの意味合いであったが、王里神会の教祖の演説を聞く機会があったのだ。感情が少し欠如している氷鳥であるが、その演説は実に興味深かった。体の中を何かが無許可に通り抜けたような、そんな感覚である。それから数日、Kという名の教祖の言葉、存在は氷鳥の中からなかなか抜け出さなかった。こんな経験は初めてだった。氷鳥は仕事を辞めた。

一年ほど仕事らしい仕事は何もしないで過ごしてみた。

この一年はつまり自分を見つめる期間である。これまで自分を意識したことがなかったから、彼にとっては非常に重要な一年であった。日記を書いてみたり、自画像を描いてみたり、カウンセリングを受けたりもした。色々と試すのは案外に面白かった。徐々にであるが、彼は自分が何者かを自分なりに掴み始めていた。しかし。

完全には判らなかった。

これは普通のことである。自分が何者であるかを全く理解している人間はそうそういない。吹聴する者はいても、実際は不可能だ。氷鳥は納得できなかった。彼の知り合いは皆、「人生とは自分が何者であるかを探す旅だ」云々で、やはり明確な答えは示せていなかった。氷鳥は唯一、悩んだものだ。自分という存在に。だからこそ答えが欲しくてたまらなくなった。ほとんどの人間は曖昧な認識しか示さない己という概念。いかにもな言葉で誤魔化す者が多過ぎる。結局のところ、一年自分を見つめたが、氷鳥にはそれが何なのかは遂に判らなかったわけである。

自身と対峙した明くる年の一月、氷鳥は王里神会に入会した。

このとき仕事はしていなかったが、経済的に困ることはなかった。両親の遺産、死亡保険の金、働いて貯めた金、腐るほどあった。氷鳥の経歴を知った上層部は、すぐに彼を最高幹部団に配属した。予想通り、氷鳥は大いに仕事をこなし、組織拡大に貢献した。しかして、問題は彼が自分を理解したかどうかである。彼は要するに、Kならば自分というものが何なのかを理解するヒントを与えてくれるのではないかと思ったのだ。そうでなければ宗教に入りなどしなかった。

彼はKと話し、自分が何者かを悟った。

Kは明快な答えを示してくれた。まさしく神の啓示のような、心に響く言葉を彼に授けた。一時間ほどの対話であったが、たったそれだけでこれまで悩んでいた答えが出たのである。氷鳥は、素直にKを尊敬した。氷鳥はKと話す前までは、Kは実は頭のネジが緩んだ狂者ではなかろうかと疑ってもいた。確かに演説を聞いた時点では多少の感銘を受けたが、それだけで素晴らしい人間であると断ずるのは愚かだ。Kという者がどれほどの存在かを理解する意味も含め、王里神会に入ったのだ。

氷鳥が判断するにKは偉大な人物であった。

いや、尊敬やら畏怖やらより、恐怖が働いた。氷鳥は今まで人間

に、人間的な恐怖の感情を示したことがない。何故ならば氷鳥にとって他人は皆、下級な存在であったからだ。自分が他の人間より知力能力的に優れているのは勿論理解していた。故に自身を凌駕したと思う人間、Kとの出会いは恐怖以外の何物でもなかった。短時間の対話で氷鳥はKが恐ろしき存在であるとの認識を得たが、しかしKはそれすらも鎮めた。氷鳥は自分より上の人間には淘汰されてしまう可能性があることを意識する人間であったから、Kを怖がったが、それは杞憂であった。Kはカリスマ的だ。全てを包み込む包括力すら有している。弱者を導く、救う天才である。氷鳥はKをそう理解するに至った。もはやKは、氷鳥にとって敬うべき存在である。自分が何者かも教え、さらに自分を超える資質の持ち主でもあるにもかかわらず自分を包括してくれた——感謝すべきだ。氷鳥はそう思った。

そういった意味では、狂信的であるといえよう。

あからさまに狂信者であることを他に示そうとする者とはまるで違う。心からKを信じていて、それを他の人間にまで示そうとは思わない。氷鳥は王里神会でも、ほぼ一番にKを讃える精神を有しているが、表情やら行動ではそれを安易に露出しないため、本人も周りもそれには気付いていない。むしろ氷鳥はK以外の他人はそう認めていないから、他人がどうこうなどどうでもいいのである。その優秀で最も信者としてパーフェクトであった氷鳥が殺されたのは、八月十九日水曜日、夜のことであった。

「ここ最近、連絡が取れていない会員のリストを見せてくれ」

王里神会本部ビル、五十一階。内ひとつが氷鳥の部屋である。別段広くない、普通の部屋だが、電気が消えている。家電製品も一部を除き電源を断たれているため、光はほぼ皆無だ。

氷鳥は電話の相手が出るなり要件を伝えてすぐに切った。これは機嫌が悪いことを意味している。すぐに電話の男はリストを持って

きた。あらかじめリストの作成は頼まれていたので、持っていくのを待っていたのだ。氷鳥はテーブルに置かれた電気スタンドをほんのちょっと光らせてプリントに目を通した。

一般幹部　神屋聖孝　八月十日の定期連絡なし。以後連絡が取れない。

執行部第一部隊員　Ｔｏｎｙ・Ｓａｎｃｈｅｚ（トニー・サンチェス）　八月九日の定期連絡なし。以後連絡が取れない。

一般幹部　Ｃｅｃｉｌ・Ａｌｆｏｒｄ（セシル・アルフォード）八月十四日の定期連絡なし。以後連絡が取れない。

最高幹部団　闇沢征一　八月十二日の定期連絡なし。以後連絡が取れない。

幹部や執行部の者で連絡が途絶えている者は以上。

――氷鳥は思考する。

ここ最近、妙に騒がしい。殺し屋界の大御所、板垣権三郎の死。鬼頭火山による？事件。連絡が途絶える会員たち……

何か嫌な予感がするのは恐らく勘違いではない。

「……」

予感は悪い意味で的中した。

ピーッという高音が部屋に短く響いた。この音は危険を知らせるセンサーが作動したときに鳴り響くようになっている。これが鳴るということは、無断でここ五十一階にエレベーターが止まったことを意味する。エレベーターは全部で五つある。作動したのは……

氷鳥はボウッと光が宿ったパソコン画面に見入った。ここに着いたエレベーターは第二エレベーターひとつのみのようだ。一応、氷

鳥は警戒した。以前にも間違ってこの階に無断で止まってしまったことが数回あった。手違いをしたエレベーターガールは厳重処分を受けるのが決まりだ。何故この階に無断で止まってはいけないかといえば、そこに氷鳥がいるからである。本質的には最高幹部団所属の者がいるなら、その階はまずその者の貸切で、許可が下りない限りは進入を許されない。

仮に許可なくその階に降りたなら、普通はすぐに執行部が注意をしにくる。最高幹部の護衛を含め、そういう対応を取らされる執行部の駒は多くいる。氷鳥の場合は、護衛として十人の手練れを同じフロアに在住させている。他の最高幹部に比べれば少ない方だ。これは彼らによってまちまちである。護衛は義務付けられているわけではないので、中にはたった一人でフロアを独占する変わり者も存在する。

氷鳥は至極冷静にソファに腰かけることにした。いつもと変わらないポーズ。焦ることはないと彼は思っているのだが、彼はこのあと自分が死ぬことになると果たして想像できただろうか。

異変には徐々に気付いていった。そう何度もこういった事態は起きないが、あればすぐに執行部から連絡がくる。ただの間違いだった、心配は無用だと。しかし、遅い。もう連絡がきてもいい。氷鳥は立ち上がった。何かしらの異常が発生している可能性は否めない。パソコンの画面に変化があった。暗闇の中光っている、その中に浮かぶ文字が緊急事態を伝えていた。

レベル6

レベルは0から6まで七段階ある。最高レベルの危険性らしい。氷鳥はマニュアル通り行動した。まずは拳銃を確保すること。部屋の鍵を閉めること。大丈夫だ。問題ない。パソコンには詳しい情報が表示された。

侵入者一名が執行部数名と交戦中。収集がつくまで部屋で待機すること。

情報をパソコンに送っているのはこのフロアにいる執行部の誰かである。何もなければふざけて顔文字などを付けたりしてくるが、今回の事態の深刻さがどれほどのものかが文面からひしひしと伝わってくる。既に執行部本部にも連絡が届いているだろう。しかし、一体誰が侵入したというのか。氷鳥は、こんな事態はそもそも想定していない。こんなことはまず起きないと、考慮する価値もないと踏んでいたから正直面喰っている。それどころではない。このフロアには十人しかいないのか、十人もいるのか、どっちとして捉えるべきなのか。敵襲してきた者の強さにもよる。いや、こちらは手練れが十人もいるのだ。負けるわけがない、相手は一人だ。

奥で争うような音が聞こえる。

第一、何が目的なのか。氷鳥にはそれが判らない。最高幹部の居場所自体はほぼ極秘である。自分を殺しにきたとは思えない。では何か？　単なる馬鹿か？　いや、自分を殺しにきたのだろう。どうせそうだ。しかし何故？　判らない。誰が何の目的で……

「！」

マズイこのフロアは全滅した模様。おれはここで様子を見る。すぐ応援が駆けつける。奴の目的は不明。

確か司令室には一人しか残らないはず。氷鳥はそう記憶している。つまり。残りの九人はやられたのか。ありえない。たった一人に。武装した九人がたった一人に！？

久しぶりに――冷や汗が流れた。

氷鳥はドアに近付こうとしてやめた。隠れるべきだ。そして部屋に侵入してきようものなら隙を見て銃撃するしかない。しかし一体何者だ。

焦る。常に冷静沈着な氷鳥が。
どうする？　落ち着け。大丈夫だ。大きく深呼吸した――そうだ。いつだって、乗り越えてきた。私にできないことはない。最善の選択肢を掴み取るだけ。氷鳥は充分に理解している。自身が天才であることを。
だが大きな音がして、いとも簡単にドアは開いた。壊されてしまった。
光が部屋に侵入してくる――
逆光で見えないが、誰かが立っているのは判る。そう背の高くない人物だ。
氷鳥は愕然とした。やはり……狙いは私だったか。
影は傾き、その表情を露わにした。男か。いや、外国人？
見覚えが――そうか。この男は。知っている。我が宗教団体の信者。執行部の。欧米人。
トニー・サンチェス！
氷鳥は凍りついた。トニーと思しき男の手が真っ赤で、血、血。血まみれになっている手。
侵入者は言った。
「ドウモ。オ初ニオ目ニ掛カリマス。トニーデス」

気が狂ったのか。ただ一言、氷鳥は静かに呟いた。
「ノー。ワタシ？正常デス」
トニーは笑顔だ。手に血がべっとりと付いているからどうしたって不気味だ。
「ソレヨリ、ヨク判リマシタネ」
トニーは白いニット帽を被っていた。特徴的な顔だから無意味であったようだ。しかしロビーの方は気付かなかったのか。そもそも連絡が途絶えた信者など正確に把握しているのは上層部のみだ。下っ端を恨んでも仕方がない。

「ソノ顔、ワタシノコト知ッテイルミタイデスネ」
「執行部だろう。それ以外は知らない。それより、この状況は何の冗談かな」
氷鳥はあくまで平静を保った。別に無理をしてはいない。彼は本当に平静でいられたのだ。それなりの道を歩んできた証だろうか。妙に冷静な自分が若干不思議に思えた。まさか、心の奥底で死を覚悟してしまっているのだろうか。
「アナタハ残念デシタ。有能サヲ買ワレ、？事件トイウ難題ノ解決ヲ任サレタノガアナタダッタカラ、コンナ冗談ミタイナ状況ニ、アナタハ立ッテイルノデス」
「早まるな。私に聞きたいこともあるんじゃないのか。それに、自分の命を捨ててまで私を殺すことに君は満足するのか」
「ワタシガ死ヌ？」
「あと数分もしないで執行部が大勢駆けつける。生きてここを出られると思わない方がいい。私の気分しだいだがね」
「投降シロト？　フフ」
「何か策があるのか。まあいい。私を殺したければ、やってみるがいい。ところで死ぬ前に教えてもらいたい。君は何者なんだ」
トニーは薄ら笑いを崩さない。
「ワタシハ人間デス」
死とは意外にも壮絶なものだ。
氷鳥は死の瞬間、いや、正しくは首をはねられるその瞬間、止まった世界でただ思考した。自分の人生とは一体何だったのか。ここで死んで満足できる人生だったか。不思議とトニーの動きは遅かったらしいことを、このとき氷鳥は初めて知った。
結局、私はこの人生をここで終わらせていいのか。
何故今こんなことを。
生きる意味……そんなものは考えなくていい。私は自分の幸せのため、もう少し詳しく言うなら自分とは何かを理解したいという欲

望から王里神会に入った。私は、私はこれで――満足したのか。

人生で、私は幸せを掴めたのか。

……いや、人生とは、案外終わっても、幕を下ろさぬものなのかもしれぬ。死んだ後の世界。ふ、下らない。止まった時間の中で氷鳥は口角を僅かに上げた。自分が何者かなんて、終わったときに初めて決まるのだ。

氷鳥は静かに目をつむった。首を斬られるのか。まず空気が抜けていく。同時に大量の血液が噴き出し、意識はだんだんと遠のいていく。そうか。そうなのか。Kの言葉が甦る。

――君は――

……？

私はあの日、なんと言われたのだ？

思い……出せない。

私は誰だったのだ。いや、そうか。私は判ったような気で……

所詮はKも人。人間だ。人に人は救えない。私は――

氷鳥の中で何かが吹っ切れた。

「！」

どうせ最後の最後なんだ。思い切りいこう。光など――怖くない。

氷鳥は咆哮の表情で声にならない悲鳴を上げた。

この世に不思議なことなどない。ただ、それだけのこと。

切られながら、目にも止まらぬ速さで懐から拳銃を取りし発砲した。

乾いた音が鳴った。

氷鳥は人間の顔ではなくなっていた。

そして血が――血が、滴り落ち……

極限状態（後書き）

これは衝撃的でしたね・・・ｗ
竜司がだいぶ話を動かしましたｗ
ちょっとマンネリ化してたので状況を打開しようということでしょう。
次回から僕の担当なので、僕も軸を揺さぶってみましょうかね。

嵐の前の静けさ（前書き）

日付が大きく進んでいるので、ご注意ください。
暗号解読が８月１３日、今回が８月２０日、王里神会によるテロが行われる可能性がある日が８月２１日になります。
今後の展開は時系列の入れ替えがありますので、日付に注目して読んでいただければ解りやすいと思います。

嵐の前の静けさ

八月二十日木曜日、午前七時
王里神会テロまで　残り一日

東京都千代田区永田町一丁目、カフェ「魯山人」

「コーヒーをお持ちしました」
黒いエプロンを着用したウェイターは平均的な男性よりも少し低い声で言う。高木は「ありがとう」と軽く返答しながらコーヒーを受け取り、テーブルの奥から一つずつカップを並べた。外崎暁、篠原亜美、神屋聖孝、高木海、各人の席の前に置かれた四つのコーヒーカップは、白くたなびく湯気を立ち昇らせながら、香ばしい香りで周囲を満たしていく。
その様子を見て、神屋は視線をすっと店内の天井に送った。涼やかな風を送る空調が自分たちの席の斜め上に設置されているのを店内に入ってから初めて了解した。
彼らは店の奥に席を取った。早朝から店を開けていて、人のあまり来ないカフェは少なく、探すのに少しばかり苦労は伴ったが、高木はこのカフェ「魯山人」を探し当て、四人は現在店内で朝食を摂っている。亜美は高木に対して「別にカフェである必要はないのでは？」と幾度か質問を投げかけていたが、高木はカフェを選んだ。
席次は奥に暁と亜美、手前に神屋と高木が座り、それぞれが向かい合う形になった。そこに何らかの意味があったわけではないが、彼らの内面的な緊張は、既に普通の人間が人生で味わうレヴェルのそれを遥かに凌駕していた。それが、席次に少なからず顕れていたことは確かである。

コーヒーが運ばれた後、続いて朝食のメニューが次々に運ばれてきた。暁はトマトジュースにスクランブルエッグベーコン添え、トーストをオーダーした。亜美は暁のオーダーのトーストをクロワッサンに変えたもの、神屋は亜美と同じメニューをオーダーし、高木はグレープフルーツのジュースにボイルした卵とソーセージ、トーストを頼んだ。

カフェ「魯山人」では、オーダーの形式はある程度セットとして決まっており、四人はアメリカンブレックファストというセットの中から料理を注文した。亜美はコーヒーとジュースを別に頼む仕組みに、どっちかでいいよね、などと文句をつけながら角砂糖を一つ親指と人差指で抓み、エスプレッソに放り込んだ。

それを見て、同じように暁も角砂糖を一つエスプレッソに入れ、口を開いた。

「神屋、本当に来るのかな、あの鬼頭火山は……」

「さあ、来て欲しいところだけれど。鬼頭火山かアンチマターどちらか、あるいは両方か、来なければ篠原さんが困ることになる、僕らも」

「宮澤睦は信用出来ないってことか？」

「僕は、チェスで嘘を吐けない。彼も僕と同じだと信じたい。だが、自分が一体『誰なのか』を完全に解っていれば、心を嘘に従わせることもできる。鬼頭火山もアンチマターも宮澤さんも、挙って敵ならば、篠原さんは危険ということになる」

神屋は時折コーヒーを飲みながら、冷静に応えた。

亜美は一瞬不安そうな表情をしたが、直ぐに笑顔を見せて言った。

「暁、心配しないで。暁たち程には危険じゃないよ」

「……俺は、お前を逃がすという選択は選べない。ごめん、本当ならそうすべきなのかもしれない、土下座してでも、お前を安全にするべきかもしれない。だけど俺は、今の作戦が最善だと思う。俺は強欲だ、全員が無事でいられる可能性が高いならば、散々世話になったお前でさえも危険な目に合わせてしまう」

「……大丈夫。あたしは、誰かを犠牲にしてまで助けてもらいたくなんかないよ。暁がそんなことをしたらあたしは、顔を上げて生きていけないでしょ。特別扱いしなくていい、十分過ぎるくらいに安全な役を、あたしは与えられてる」

「……ああ、やるしかない。全部終わらせよう」

暁はテーブルの下で、震える手を押さえつけていた。どうしても恐怖心が頭を離れない。死ぬことが本当に怖く、嫌だった。それは同時に、絶対に死なないという覚悟でもある。

その様を隣の神屋は横目に見ていた。自分の中の復讐心が揺らぐことはない。暁も亜美も自分の野望の為に利用してきた。しかし、神屋にとって彼らは、単なる駒ではなくなっていた。Kは駒を操り最後の一手まで策略を巡らしてきた。だが、神屋にはそれと同じことが出来なかった。彼は、神にはなれなかった。だが、復讐はやめられない、たとえ、唯一の肉親を悲しませることになっても。

「謝りたいのは僕の方だ。君たちは普通の高校生だった。僕らと関わらない手もあったかもしれない。仮に敵に捕まっても、君たちは神崎さんによって情報を何もインプットされていなかった。あの段階の、まだ決定的に間違っていなかった王里神会ならば、捕縛されても思いのほか早く解放されたかもしれない。……僕が巻き込んだんだ」

「神屋、下らないことで謝るな。俺たちは最初から狙われてた。早く解放されたかなんて判らないじゃないか。俺はお前と久しぶりに会えて良かった。楽しいなんて言ってられるような状態じゃなかったけど、それでも、どこか楽しかった」

「ありがとう……君は最後まで無事でいてくれ、絶対に」

「……違う。全員、無事にだ。そうでなきゃ、俺たちは勝ったことにならない」

「……ああ、そうだね」

神屋の心境は、複雑だった。彼の目的は、必ずしも生きて成されるとは限らない。「神」の如き者を、如何にして普通の人間が殺め

られるか。簡単に事が済むなどとは、初めから期待していなかった。
「おいおい、みんなしんみりするなよ。まるで、特攻でもしかけるみたいじゃないか。俺たちは、完勝するんだ。みんなまた再会できるし、後悔するようなことなんてない。全てが無駄じゃなかったって思える。チェスや将棋を思い出せ。どの手も無駄じゃない、勝つための布石だ」
高木は、そう言って笑った。その言葉は意外にも、場の雰囲気を好転させたのかもしれない。暁や亜美の表情は幾分明るくなった。
「この事件が解決したら神屋君は、逮捕されるの？」
亜美は神屋に尋ねた。王里神会の幹部だった神屋は一体どのような扱いを受けることになるのか。本当に再会できるのだろうか。
「さあ……世の流れに身を任せようと思う。裁きを望むものがいるならば、僕はそれに応じる」
「そっか……お父さんが、まだ現役ならなぁ……」
「篠原さんのお父さんは弁護士だったよね？」
神屋はクロワッサンを噛りながら言った。
暁はそれを聞いて少し驚きながら、会話に入った。
「そうなのか？　知らなかった」
「まあね、しばらく会ってないけれど、今は弁護士は辞めたんだって。でも、神屋君、よく知ってたね。もしかしてあたしのストーカー？」
亜美はニヤニヤしながら神屋視線を送る。神屋は苦笑いを浮かべ、コーヒーを喉に流し込んだ。
「ちょっと否定できないな。暁や篠原さんについてはストーカーより詳しく調べちゃっているし。ただ、随分予想と違っていた。篠原さんはもっと馬鹿っぽい感じかと思っていたし、暁は世捨て人みたいなのを想像していたけど、人間っていうのは、やはり会ってみないと解らないね」
「馬鹿っぽいってヒドイ！　ちょっと頭いいからって！」
「僕なんか大したことないよ、佐藤静枝には到底及ばないし、暁の

同級生の洋平ってやつにも知識では及ばない。それに妹にも……」
「妹？　神屋君妹いるの！？」
亜美は口に手を当てて驚愕の表情を浮かべた。それを見て暁は「驚きすぎだろ」と呟いた。
「お前の妹って一個下だろ？　十六歳か、確か。そういえば、お前がこんな状態で、妹は今どうしてるんだ？」
「海外に留学中だよ。そろそろ日本に戻りたいって言ってた。僕がどうなるか判らないし、日本の高校に転校させようと思ってる。月代学園にでも……ね」
「マジか……お前の妹が後輩か。楽しみなような怖いような……」
「僕と違ってあんまり一般常識を重んじるタイプじゃないからね。もし、転校することになったら、君たちには挨拶しに行くように言っておくよ」
神屋は澄ました顔で言う。紙ナプキンで口を拭いている神屋を横目に、暁は金髪になった自身の髪をいじった。
……人の髪を金髪に染め上げるのは一般常識なのかよ。
「妹さん、名前は？」
亜美は目を煌めかせていた。美男子である神屋の妹が後輩になるかもしれないと聞いて、亜美は静枝の中学生時代の姿を思い起こしていた。
「神屋茉祐（かみやまひろ）。ジャスミンの一種に茉莉花（まつりか）っていうのがあってその『まつ』に当たる字と示偏に右って書いて『祐』。『祐』は助けるという意味だ。名は体を表すって言うけれど、本当で、夏に咲く茉莉花の白い花のようなやつだよ」
「その比喩、よく解んないけど……？」
「じゃあ、癖のある香りのするようなやつって言っとこうかな。父は自分の名前である『真司』から『真』の字を使おうとしたみたいだけれど、ちょうど中国のジャスミン茶が頭を過ぎって、『ま』を茉莉花の『茉』に置き換えたらしい」
「へぇー、会うの楽しみだなぁ」

この時、亜美が以前高木宅の新聞記事のスクラップで見た、殺害された数学者の名前「神屋真司」の名を思い出すことはなかった。また、この時に暁が神屋夫妻が数学者であるということを口にしなかったのも悪い偶然であったかもしれない。

暁は数学者である神屋夫妻が神屋聖孝の両親であるということは知っていた。しかし、夫妻が殺害されていたことを知らない。亜美は夫妻が殺害されていたことを記憶の片隅で覚えている。しかし、夫妻が神屋聖孝の両親であるということは知らなかった。

「篠原さんなら、きっと善い先輩になる。暁は……良い友だちになれる」

「なんで俺は先輩じゃないんだよ?」

「君は先輩って柄じゃないだろう? それに、茉祐のほうが君より学力は上だし、きっと馬鹿にされる」

「嫌な妹だな! お前に似て!」

「もし、僕に何かあったら、妹は頼んだ。……高木さんにも、一つお願いしていいですか?」

何もない天井の一点をぼんやり眺めていた高木は、急に話しかけられて、目を丸くした。

「何をだ?」

「僕が妹に何も出来ない様な状態になってしまったら、高木さんが妹を月代に入れてあげてください。高木さん、あの高校の卒業生でしょう?」

「自分でやれよ。ただ、……もしも、万が一そんなことになったら、俺が何とかしてやる」

「ありがとうございます」

神屋は一息吐いて、トマトジュースを一口含んだ。

「高木さん、月代の卒業生だったんですか?」

暁は意外そうな顔で尋ねた。

「ああ、俺は七年前、まだ幸福の追求のための団体でしかなかった王里神会に十五で入会した。そして月代学園高校に入学し、王里神

会の人たちから色んな知識を貰い、王里神会の発展に努めた。そして、十九の時彼らの元を離れた。まぁ……だからあんまり高校生活を楽しんでたわけじゃないけどな」

高木が王里神会を離れたのは、二〇〇六年十一月、神屋夫妻が殺され、それが王里神会による犯行ではないかと密かに疑念を持ったからであった。それ以前から徐々に王里神会の犯罪性は増しつつあったが、調べれば調べるほど王里神会の最高権力が事件の裏に見え隠れする。神屋夫妻は、高木にとって様々な知識を教えてくれた恩師のような存在だった。

そして、その息子、神屋聖孝の離反。高木はこの一件において、神屋聖孝を守る役目を夫妻から受けたように感じていた。戦うべきなのは王里神会だけではない。神屋聖孝は己にも勝たなければならない。高木はその為に神屋と共にここまで来た。

「高木さんがいた頃って中等部あったんすか？」

「いや、俺が卒業した頃じゃないかな、そういう動きが始まったのは。第二図書室ってのを俺は見てみたいね」

「あそこは凄いですよ。マジで広いですからね。蔵書量も半端じゃないし。俺、図書委員だからかなり苦労してます。でも、月代名物の本の虫を見られますよ」

「本の虫？」

「結局、保留のままここまで来ちゃいましたけど、俺にメールを寄越した二宮ってやつですよ、あいつ読書と図書室通いに人生かけてるばかで、休日は市の図書館に入り浸ってますからね」

「……そりゃあすげえな。俺も暇さえあれば図書館行ったり本読んだりしてたけどな……。そういやあ、俺が『キリストの哲学』を取りに行った時、月代の女子生徒に会ったぞ。本を十冊も抱えてた」

それを聞いて暁は亜美と顔を見合わせた。自然と笑みが零れてくる。

「そいつが二宮光ですよ。月代にそんなやつがいたらすぐに噂になりますから。しかし十冊って……」

「あの娘、読む本なくなんないのかなぁ」
亜美は呆れ顔で笑った。
「俺たち……何にも知らなかったんだな。でも、少なくともこうやって少しずつ解り始めた」
暁は、トーストの最後の一口を口に放り込んだ。店内に人が少しずつ増えてくる様子をじっと眺めながら、彼は微笑んだ。
「どういうこと？」
「いやな、俺たち、短い間とはいえ、一緒に生活して、協力してきたけどさ、こうやってゆっくり話し合えば、知らないことなんて山ほど出てくる。みんな、何処で誰と、どんな場所で繋がってるか解らない。……でも少しでもお互いのことを解ろうとしてる。Kは大量の駒を持ってるかもしれない。でも、その駒同士は互いを信頼してるのか？　もしかしたら、自分が駒だってことにすら気づいてないかもしれない。本当は、隣り合わせたポーンが親友かもしれない、前後に並んだナイトとビショップが先輩後輩だったりするかもしれない。それで、思いの外、気が合ったりして、強固な絆が生まれるかもしれない。ただ利用するだけじゃ、ホントの意味では強くないんじゃないかな」
暁は、鳴海の姿を脳裏に浮かべていた。あの事件に、真の終を与えるには、どうしたら良いか判らなかった。しかし、信頼できる仲間が一人もいなかった頃の孤独な自分が出来なかったことに、今なら少しだけ違った挑戦ができるかもしれない。暁は自分のことをよく理解していた。今のこの緊迫した状況が終わったら、意外と平凡な毎日が待っていて、また要らぬ心配や、怠惰な生活や、自己嫌悪に悩まされるに違いない。しかし、過去の自分と決定的に違うことが、そこに確かに在るはずだ。
「Kは……孤独なんだ。たぶん今も、これからも」
暁は、会ったこともないその人物に、悲しい言葉を贈った。
「行こうか」
神屋が、静かに、しかし強く、そう言った。

朝食を終えた四人は、カフェ「魯山人」を出た。

永田町駅前

駅前をスーツ姿のサラリーマンたちが忙しなく歩いていた。時折目にする制服を着た高校生たちは、携帯を片手に歩く。喧騒はその密度を上げていた。

「送ってくれてありがと」

亜美は、他の三人に向けて礼を言った。そこに不安な表情はなかった。

神屋は微笑した後それに応える。

「宮澤さんと、そして鬼頭火山と合流したら、こう言ってほしい。『あなた方を信じている』と」

「うん、神屋君も、暁も、高木さんも、絶対無事でいて」

三人は深く頷いた。心の奥の不安など、誰にもある。だが、誰一人としてそれを言葉や表情には出さなかった。

「じゃあね、また後で」

亜美はそう言って、駅に向かって一歩踏み出した。行き先は、決まっている。そして、帰る場所も。

「……」

その亜美の後ろ姿を見て、暁はその表情に僅かに不安を漏らした。それは心配という感情でもあり、それ以上でもあったかもしれない。

神屋は、左隣に立つ暁の右腕を肘で小突いて、囁いた。

「何か言うことはないのか、君は。意気地なし」

「……また、会うんだろ、絶対」

「だからこそ……だ」

「……ちっ」

暁は躊躇いがちに一歩踏み出した。小走りで亜美を追いかける。

「亜美っ！」

亜美は驚いた様子で振り返った。

「何？」
暁はすぐに追いつき、これ以上ない程の気まずそうな表情を亜美に向けて言った。
「全部終わったら、大事な話がある。だから、必ず無事でいろ」
「……」
亜美は鳩が豆鉄砲を食らったような様で亜美は暁の目を見た。暁の見開かれた目に、自分の顔が映り込む。亜美は無意識に自分が笑っていたことに気がついた。
「暁も無事で。……一番ノーマルな人間なんだから、死ぬ前に逃げてよね」
「……役目さえ終えたらな。その役目ってのも俺にはまだ判らないけどさ」
「あたしのどこでもドア貸してあげたいけど、今修理中なの。みんなで、自力で戻ってきて」
「必ず、戻る。普通の高校生になんなきゃな」
「うん、……じゃあ、また後でね」
「ああ」
暁の返事を聴き、亜美は踵を返した。途端に、不安が押し寄せてくる。暁を巻き込んだ事の発端は、亜美が夜光公園で暁に話しかけたことである。あの日のことを亜美は後悔していた。こんなことになるなんて誰も判らなかった。しかし、今は後悔だけじゃない。確かに後悔も少しはあるが、それよりももっと大きな何かが心の中にあった。会うはずのなかった人たちとの出会いも含めて、全部、自分の運命に感謝した。同じようでも、少しずつ前に進む螺旋のような運命に、ただ感謝をした。

「ああいうのを死亡フラグって言うよな、普通」
高木はゆっくり戻ってくる暁を見て、ニヤケながら言った。
「死亡フラグに負けるような奴に、運命は変えられないですよ」
神屋は囁くように静かに応えた。

「運命？」
「暁と篠原さんについては、本人たち以上に知っている。上辺だけの情報ならば。……あの二人は不幸な巡り合わせで出会ってる。本人たちが気づいていない奥底で、彼らの過去は既に繋がってる。そこで訪れる破滅の運命を変えられるか否かは、当人たち次第です」
「……俺は聞かないでいたほうが良さそうだな、その話。何にしろ、上手くいきゃあいいけどな」
「僕は信じてますよ」
神屋はどこか悲しげな表情を暁に向けた。

嵐の前の静けさ（後書き）

更新速度を変えるかもしれません。
２週に一度の更新がもう少し遅くなるかもしれませんが、王里神会編の終わりも近づいてきたこともあり、情報量が多いのが原因です。この章が終わるまでは一時的に更新が滞るかもしれませんが、次の章からは戻るので、最終話までお付き合いいただければと思います。
今後もよろしくお願いいたします。

二人のハムレット（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。
『ハムレット』はシェイクスピアの悲劇。
ハムレットによる復讐が主軸の劇作です。

二人のハムレット

時は遡り、八月十三日木曜日、午前九時
王里神会テロまで　残り八日

高木宅　リビング

涼しい風が穏やかに室内を廻る。部屋は隅々まで冷気に包まれていた。
暁はいまだ状況を掴めずにいた。ようやく探し当てた鬼頭火山との繋がりの先にあったのは理解のレベルを超えた内容。

０９．７．２０．Ｍｏｎ

此処に重要な件について記す。
心して読むべし。

既に機密データは看破した。
機密データの内容は、簡略すると、核兵器の弾頭内のコンピュータの目標番号の変更を可能とする手順についての説明であった。
私はそれを理解し、いつでも目標を変更することが可能な立場に現在いる。

機密データには、他にも、＜革命＞についての詳しい場所、日時が記されている。＜革命＞とはテロ行為のことだ。

今年、八月二十一日金曜日、東京「ＮＥＷ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯ

N　PARK」にて、前述の核兵器は投下される。

以下に、私とのインターフェースを提示する。

クリック

暁はこれを、もう五回は読み返していた。暁だけじゃない、亜美も高木もそうだ。唯一思考を巡らせていたのは神屋だった。彼は宮澤睦によりロシア政府から中性子爆弾が盗まれた可能性があるという情報を得ていた為、敵の成そうとするものを覆っていた霧が晴れたような心地だった。核兵器とは、中性子爆弾を指すと考えて間違い無い、神屋は確信する。

その様子を冷めた目で捉えていたのはトニーである。神話の世界を描いた絵画に出てくる神職者のような顔つきでただ口角を上げている。彼の笑みは人間のそれではないようであった。

「神屋、核ってあの核だよな？　広島や長崎に投下された、あの核……」

暁は言葉に窮しながら神屋に尋ねた。

「……君たちに話すことがある。僕はここに戻る前、定期連絡ではなく宮澤睦に会っていた」

「宮澤……って鬼頭火山の師匠の宮澤か？」

「そうだ。彼は僕に伝言を頼んだ。鬼頭火山に、兄弟弟子の鬼頭風林が殺害されたことを伝えてくれと」

神屋は静かに語った。閉めきられた部屋に声が響く。

鬼頭風林というワードに高木は反応した。

「鬼頭風林っていうと、ジャーナリストで、作家の、鬼頭風林か。確か十年ほど前から一切メディアには姿を見せなくなった都市伝説のような作家だろ。国際テロリズムの取材中に行方不明になっていると聞いたが」

高木はニュースでその情報を得ていた。しかし、殺害されたとは

ニュースでは報じられていない。
「鬼頭風林が何者かに殺されたことは、今のところ、宮澤さんとその友人しか知らない。宮澤さんの友人は鬼頭風林の友人でもあった。そういった経緯で、鬼頭風林の死は師である宮澤さんに伝えられた」
神屋が語る中、押し黙っていた亜美が言葉を遮った。
「鬼頭風林は誰に殺されたの？　彼は鬼頭火山との関係性が噂されていた。鬼頭火山と兄弟弟子だなんて初めて聞いたけど、名前からして絶対関係してるって思ってた。つまり、あたしたちが関わってるこの事件に、鬼頭風林も関わっていて、それで殺されたの？」
「そこは定かではないんだ。ただし、鬼頭風林は取材の中である情報を得た。それはロシアから中性子爆弾と言われる核兵器が盗まれたこと。そして、その一件に日本の新興宗教が関わっていること」
「……じゃ、じゃあ、なんでロシアは何にもしないの？　核兵器が盗まれたって、大事件じゃない！」
「ロシアは中性子爆弾を退役させたはずなんだ。つまり盗まれたことが露見するのはまずい。だから、鬼頭風林が誰に殺されたか判らないし、逆に、ロシア政府も王里神会も彼を殺害する動機があったことになる。重要なのはその先だ。鬼頭風林はその情報を友人を介して、宮澤さんに届けた。僕は昨日その情報を伝えられたんだ。だから、ウェブページに記載されている核兵器というのは、中性子爆弾の可能性がある……。中性子爆弾は建築物を破壊することは考えられていない。人を殺すことに特化した殺人兵器だ」
神屋はそう言って暁の方を見た。ようやく話が戻ったが、暁は険しい表情で唸った。
「宮澤睦を信用するならば、そういうことなんだろうな……。まあ、信用しなくてもどうにかなる話じゃないかもしれないが」
暁は神屋の話にどこか不自然さを覚えていた。しかし、それが一体何なのか解らない。ただ、都市伝説を聞いているような不透明な何かを感じていた。
しかし、暁は無理に自分を納得させ、再び口を開いた。

「……ともかく、鬼頭火山に直接話を聞こうじゃないか」
暁の一言で、部屋に緊張感が走った。メッセージの末尾に記載された「クリック」の文字にはリンクが貼られている。それをクリックすれば何らかのインターフェースが姿を現すはずなのだ。
「オーケー、それが一番早いな。どちらにせよ僕らに出来ることはもうない。後はアンチマターの指示を受けるだけだ」
神屋はそう言って再度ノートパソコンに向き直った。「クリック」の文字にマウスカーソルを合わせる。
「いくよ」
神屋は自らの道を確かめるようにして、左クリックした。
一秒足らずで画面は次のページに切り替わった。そこには十一桁の数列、携帯電話の電話番号が表記され、他の部分は完全な余白だった。
「電話番号だ。高木さん、相手の声をスピーカーで外に出せるような固定電話か携帯ありますか？　僕の携帯だと万が一ってこともあるんで、安全な高木さんのを使わせてもらいたいんですけれど」
「分かった、待ってろ」
高木はそう言うと、壁際の机の引き出しから携帯電話に接続できるスピーカーを取り出した。どうやら予め用意してあったらしい。高木はポケットから携帯を取り出し、スピーカーをイヤホン端子に接続した。神屋はそれを受け取ると、机の上にゆっくり置いた。
「流石、準備がいいですね」
「まあな、それからこれを使え」
高木はチェス盤の置かれた高足のテーブルに置かれたペン立てからペンを一本抜き取ると、神屋に向かって投げ渡した。神屋は綺麗にそれをキャッチする。
「これは？」
「ペン型のボイスレコーダーだ。一応会話を録音しておくといい。スイッチはクリップ部分にある」
「なるほど」

神屋はクリップ部分の小さなスイッチでボイスレコーダーを起動し、高木の携帯の横へ置いた。
神屋は電話番号を慎重にプッシュした。場に緊張が走る。呼び出し音が二度三度と続き、ようやくスピーカーから声が発せられた。
『ようやくたどり着いたか』
無機質な声だった。電話の向こうの相手はボイスチェンジャーを使っている。
「こんにちは、失礼ですが、あなたは……？」
神屋が代表して会話することが暗黙の内に決まったようで、他の人間は一切言葉を発しなかった。
『鬼頭火山だ』
機械音はその名を告げた。その瞬間、誰もが顔色を変えた。
「神屋聖孝です。あなたの作ったインターフェースを通じ、電話をかけました」
『よろしい。盗聴の可能性は？』
「ありません」
『関係者は全て揃っているのか？』
「神屋聖孝、篠原亜美、外崎暁のことでしたら、この部屋にいます。そして、他に二人の仲間が一緒です」
『信用できる仲間か？』
「はい、信用できます」
『了解した。では新しい回線を用意する。次回の交信はその回線を使え』
鬼頭火山を名乗る人物はそう言うと、新たな電話番号を続けた。高木がその番号を手帳に書き込んでいるのを横目に、神屋は口早に質疑を始めた。
「では、早速、今の状況と我々への指針を聞かせてください」
『そのためには条件が二つある』
「条件？」
『一つは、作戦の参加を約束することだ』

「作戦……？　機密データを看破したことで、テロは未然に防げるのではないのですか？」

『事情が大きく変わっているのだ。新たな作戦において、君たちが参加することの約束を条件とさせてもらう』

事情が変わったとは、すなわちどういう意味なのか。その時、暁は妙に嫌な予感がした。機密データだけで戦況が逆転するはずだったとはいえ、それもう一月以上前の話だ。時の経過と共に、敵も当然手を打つ可能性がある。

「少々の時間を」

神屋は携帯電話のマイク部分を手で押さえ、全員の顔を見渡した。

「どうしますか、高木さん」

高木は神屋の言葉に被せるように即答した。

「俺は参加する。トニーもそうだろ？」

トニーはニヤリと不気味な笑みを見せた。

「参加シマショウ」

問題は暁と亜美だった。二人はここで作戦に参加しなければ、解放されるかもしれない。勿論、安全な場所に避難し、事件の解決まで静かにしている必要はあるが。

「暁と篠原さんは……」

神屋が思案しながら、声を掛ける。暁も亜美も意志は決まっていた。

「俺は参加する。足手まといになるかもしれないが、それでも俺は、協力する」

「あたしも。ここで降りる訳にはいかない。最後まで見届けて、シズに真実を話したい」

神屋は彼らの言葉を聞き、仮に自分が不参加を勧めても、簡単に断られてしまうだろうと感じた。暁も亜美も、もはや関係者なのだ。

彼は電話に向かい直し、解答を呈した。

「全員、参加することを約束します」

『承った。では第二の条件だ。作戦当日、私と君達は別行動をする。

そこで、作戦当日までにシノハラアミを私と合流させること、それを条件とする』

「篠原亜美……」

その条件に驚いたのは神屋だけではなかった。暁も高木も驚き、そして不思議に感じた。そして何より、亜美が最も驚いていた。

「なんで……あたし……？」

亜美はつい声を漏らしてしまった。鬼頭火山の真意が解らない。

『理由は幾つかある、神崎冬也はシノハラアミを大いに利用した。それを詫びなければならない。その上、命を落としでもしたら、その犠牲は大きい。そして、君達を信用するためだ。我々は互いに何も信ずるところのない状況で協力をせねばならない。その為に、彼女が本人であることの証明と、同時に彼女を通じて信頼を獲得する目的がある』

「……それは人質ということですか？　僕達が味方でない時の為に篠原亜美を管理下に置く、と。そういうことですか？」

『逆だよ、神屋君。そういった意図が無いことの証明だ。君達が私たちを信用しないならば、この条件に従う必要はない。しかし、この条件が呑めないならば、それは逆に、私たちが君達を信用しない理由になるということだ。聡明な君ならば意味は解るだろう』

「……仰ることは解りました。数分の時間を頂きたい。再度、返答します」

神屋は再び携帯電話のマイクを遮った。

「……ということだ。どうする？　これは危険かもしれない。アンチマターは信用すべきだが、アンチマターがこの勝負に必死であるのも確かだ。それに、アンチマターは僕らよりも情報を持っている。もしかしたら、あまり戦局が良くないのかもしれない。つまり、何をされるか、判らない。それに、鬼頭火山は王里神会から命を狙われている可能性が高い。そこに篠原さんが一緒にいるとなれば当然リスクが生じる」

暁は胸騒ぎを感じた。亜美が近くから居なくなるかもしれない。

そして、万が一、アンチマターが味方じゃなかったり、暗殺者と出くわしたりしたら二度と会うことが出来ないかもしれない。それなのに自分は今、亜美と目を合わせることもできない。

暁は言いようもない不安と焦燥感に駆られていた。

「判らないことだらけじゃないか。神屋、そんな条件はどうでもいい。鬼頭火山は俺達を馬鹿にしてる。信じようなんて思ってない。大体、命を落としでもしたら、って逆に言えば俺達が危険で、鬼頭火山は安全って言い方じゃないか。俺達は、あんな奴の為に苦労してここまで来たのか？　違うだろ。なあ、神屋……」

神屋は暁の眼を見た。酷く不確かな目だった。

暁には馬鹿馬鹿しかったのだ。亜美を危険な場所に送って何か状況が変わるのだろうか。神屋の言うとおり人質に他ならないではないか。暁の目はそう語っていた。無論、誰もがそんなことにはもう気が付いている。

「……ああ」

神屋は返答に窮した。気持ちの上では暁の言うことに賛成だった。神屋自身、対等な立場で情報を分かちたいと考えていたが、妙な条件を突きつけられ、今の状況が不快だった。

しかし、ここで鬼頭火山の条件を表立って拒否してしまっては行き詰ってしまうことも確かなのだ。結論は簡単には出せない。

「大丈夫」

そんな中で静かな室内に小さく声がした。声の主は亜美である。小さく、しかし強い声で、亜美は言った。

「あたし、行くよ。だって、それくらいしかあたしには出来ないでしょ。それに、ここで条件を呑まなければ、あたしたちがここ数日間でやってきたことが全部台無しじゃない。鬼頭火山だって二月も前から動き出して、あたし達と繋がりを保った。それには意味があるはず。意味を、持たせなければいけない。あたしは、大丈夫、だから話を先に進めよ？」

暁は、亜美の目を見ていた。その瞳に陰りはない。しかし、自分

はどうだろう。調子にのって協力するなどと言って、すぐに自分の言ったことをひっくり返して、まるで覚悟ができていない。

亜美の目は決意の目だった。その決意に、任せるしか無い。暁は、自分の不甲斐なさに思い悩んでいた。

神屋は二人の様子を見て、何かを思い付いたような表情で、携帯電話の置かれたテーブルに向き直った。

「僕に考えがある。篠原さん、ここは君の覚悟に応じる。ただし、君一人では危険だし僕達に不利だ、僅かでも戦略的な手を使おうと思う」

そう言うと、彼はマイク部分を抑えていた手の平をそっと引く。

「鬼頭火山、僕からも一つ条件を呈示させていただきたい」

神屋は機械的に言った。暁は神屋の様子が変化したことに気が付いた。守りから攻めの体制に変わったのだ。

『聞こう』

鬼頭は会話が寸断されていたとは思えないような自然な返答をした。

「先ほどの条件は了承します。ただし、篠原亜美の他にこちらが自由に選択した誰かを同伴させることを条件とさせてください。その許可が下りれば、協力しましょう」

神屋は亜美の方に向いてアイコンタクトを取った。亜美への最終確認である。

亜美は、それに軽く頷いた。

『神屋君、その条件を呑もう。そこで私から提案したい。君達の中で二つの班を作ってもらう。一つは敵と直接相対する可能性がある実行班、もう一つは作戦当日に私と合流する待機班だ。それぞれに何人所属していても大きな問題ではないが、実行班には能力の高いものをなるべく多く、待機班には実行班に向かない者、そして待機班には必ずシノハラアミを加えること。先ほどの私の条件の内容を以上のものに変更する』

「解りました、同意します。では、実行班と待機班の班員の編成を

行う時間をもらえますか」
『よろしい。全て決定した後、先程伝えた回線を用い連絡することとしよう』
鬼頭火山はその言葉を最後に通話を切断した。神屋は溜息を一つ吐き、椅子の背もたれに見を預けた。
室内にまた静けさが戻ってくる。ディスプレイには十一桁の数列。おそらく、もうこの電話番号は使えなくなるようになっているのだろう。
「ごめん、篠原さん。結局君をアンチマターに送ることになってしまった」
神屋は申し訳なさそうに言った。
「いいよ。あたしが頼んだんだし。それより、実行班と待機班はどういう振り分けにするの？」
「ありがとう。……まだ、そこまでは決めてない。しかし君を一人で向かわせるよりは、実行犯の人数が減る方が幾分マシだろう」
神屋はノートパソコンを閉じると、完全に体を向き直した。
「僕は実行班に加わる。唯一の戦力のトニーさんも実行班だ。そこまでは確定でいいだろう。問題は、待機班の同伴者を高木さんにするか暁にするか……だ」
神屋はチェアの上で長い脚を組んだ。当人の意思に任せるつもりのようだった。
暁は高木の顔を覗き込んだ。高木は珍しく複雑な面持ちで立っている。暁には高木が別のことを考えているように見えた。
悩み、そしてついに、暁は決断した。
「俺が亜美に付いて行く」
亜美は意外そうな目を暁に向けた。この時の暁の瞳には少しも曇りはなかった。
神屋は一瞬思案してから、独り言のように呟く。
「……確かに、実行班で行動するよりも、待機班で篠原さんを守る方が向いているかもしれない。しかし問題は、王里神会について精

通していない二人が纏まるという点か……」
神屋が決断を渋っていると、不意に高木が口を開いた。
「それは……駄目だ」
高木はあまりに真剣な眼差しで神屋を制した。
「暁が待機班に入ることが……ですよね？　何故ですか？」
神屋にはその理由は思い当たらなかった。確かに問題はあるが、駄目であると完全に言い切れるほどの決定的要因が見当たらない。神屋だけでなく他の人間もまた同様の疑問を感じていた。
「すまん。理由は言えん。しかし、暁を実行班に置いて欲しい。そして、暁もそれに同意して欲しい。頼む」
高木は言い終えぬうちに頭を下げていた。
「た、高木さん。一体何ですか？　俺が実行班に必要な訳って……」
暁は混乱していた。快活な高木がこの時ばかりは真剣に頭を下げている。何が彼をそうさせるのか、皆目検討がつかないのだ。
「高木サン、デハ、アナタガ篠原サンニ同伴スルトイウコトデスカ？　王里神会ノマークカラ完全ニ外レテイルノハアナタダケ。本来アナタモワタシ同様、実行班ニ不可欠ナ存在ナノデハナイノデスカ？」
気配を殺しているかのような静かな立ち姿で、トニーは突然口を開く。神屋は再び思案した。
「確かに、高木さんは機動力という点において、僕らよりも有利だ。これは実行班に向いているということになる。しかし、高木さんの要望を満たすならば、高木さんが篠原さんの同伴をするということになるが……」
「神屋君、やっぱりあたし、一人で大丈夫だよ。元々、そういう条件だったんだし、仮に人質になるとしても人数が少ない方がリスクは低いんじゃない？」
亜美は眉間に皺を寄せる神屋の表情を見て、説得を試みた。どちらにせよ覚悟はもうできていたからだ。
「それは出来ない。それはあまりに無用心だ。やはり、誰か代役が

必要か……」
「代役って言っても、高木さんも暁もトニーさんも神屋君も、実行班に必要なんでしょ？」
　亜美からは恐怖心を感じられなかった。本当に一人でも大丈夫だと言っているようだった。しかし不安がないはずはない。神屋は心中では暁が適任と考えていたし、始めからそのつもりで条件を出したのだ。しかし、ここに来て高木が暁を引き止めた。これは神屋にも真意が全く解らない。
「……高木さん、暁が必要な理由は、どうしても言えませんか？」
「ああ。……すまない。これは、重要なことだ。だが、言うわけにもいかない」
「……解りました。聡明な高木さんの言うことだ。ここは暁を実行班、そして、高木さんも実行班に配属しましょう。したがって、ここで味方を増やします」
　神屋は何でもないようにさらりと場の皆の想像もしなかったことを言った。
「味方……？　増やす……？」
　暁は目を丸くして、オウム返しに応えた。
　脳が機能するのにしばしの時間がかかった。暁には神屋の言う「味方」が一人しか思い浮かばなかった。しかし、それはリスクを重ねるということでもある。
「味方って、誰を……だ？　まさか」
「ああ。鬼頭火山をよく知る人物、宮澤睦。彼を篠原さんに同伴させる」
　神屋はそう言い放った。高木がそれに反応する。
「しかし、俺の意見でこうなっちまったんだからどうこう言える立場じゃないが、宮澤睦が味方なら頼もしいが、もしも敵だったらリスクは跳ね上がるんじゃないか？　みすみす敵を自陣へ誘いこむことになる」
「僕は既に彼と接触してる。彼が敵なら既に何らかの影響が出てい

るでしょう。この状況を見越して泳がせているなんてことも考えにくい。彼は鬼頭火山に会いたがっていた。必ず協力するでしょう」

「なるほど……確かに、適任とも言えなくはない……か」

高木は慎重に考えた。宮澤睦……あるいは彼なら、万が一鬼頭火山が何か決定的な誤りをしたとしてもそれを制することが出来るかもしれない。

高木が納得しかけたところで、今度は暁が疑問を口にした。

「神屋、お前が宮澤睦を信じるなら、俺もそれに応じるつもりだ。しかし連絡は出来るのか？　それに、鬼頭火山は俺達にフロムヘヴンを通じて宮澤睦との接触を持ちかけなかった。俺には鬼頭火山が万が一宮澤が敵だったらと考えて連絡を絶ったように思える。そんな相手が待機班として自分と合流することを許すのか？」

「連絡は取れる。昨日、緊急時の為の連絡先を受け取った。問題は鬼頭火山がこれを許可しないだろうということだ。だから、暁、君が待機班に入ればいい」

「……は？　待て、それはどういう……？」

「向こうは僕らを明らかに軽視した態度なんだ。一矢報いてやればいい。鬼頭火山には暁が同伴すると伝え、実際には宮澤さんが同伴する。これで、問題は解決する」

神屋はそう言って微笑した。

「鬼頭火山相手に、ハッタリをかますのか！？」

「少なくとも、今の鬼頭火山は神崎さんほど手強くないよ」

「あの鬼頭火山は、神崎冬也じゃないっていうのか？」

「いや、判らない。ただ、以前ほどの力は無いように感じただけだ。彼は一度自分を殺したんだ。人が変わったとて不思議なことではないさ。……さて、みんな、これを最終決定としていいかい」

神屋の確認に最初に応えたのは亜美だった。

「おっけー……宮澤さんかぁ。ちょっと緊張するけど、きっと上手くやる」

次いで高木、暁も同意した。

「上手いやり方だ、宮澤睦をぶつければ鬼頭火山が何かを隠していても何かしらモーションを見せるかもしれない。何も分からない状況で鬼頭火山まで騙すとは、まるでハムレットだな」
「宮澤睦……信じるしかない。誰も犠牲にならないためにも……神屋、上手く協力してもらえよ……亜美の安全もかかってるし」
神屋は深く頷いた。「さて」と小さく呟き高木の携帯を手に取る。
「高木さん、次の回線の番号を見せてください」
高木は手帳の一ページを綺麗に破り取ると、神屋に渡した。
神屋は番号を慎重にプッシュして、携帯電話を静かにテーブルに置く。静寂の中、発信音だけが響く。
『こちら、鬼頭』
先ほどと同じ機械の声がスピーカーから響く。
「神屋です」
『話し合いは済んだか？』
「ええ。報告します。篠原亜美の同伴者は外崎暁に決めました」
『そうか、暗号解読の協力者だった者だな。了承した』
特に意見することもなく、鬼頭は神屋の報告を受けた。最初から同伴者が誰であろうと関係なかったのか、あるいは神屋のような思慮深い人間が同伴者であったら何か言うつもりだったのか、誰にも判らなかった。
「我々を実行班と待機班に分けて、どうするつもりなのですか？」
『まだ正確なところは分からないのだよ。この組分けに意味があるか否かも……な。ただ、我々はKの裏をかかなければ勝てない。私はそう思っている』
「裏……ですか」
神屋は鬼頭の言う「裏」という言葉がどこまでの未来を内包しているのか考えた。神崎冬也もKも神がかった強運と未来を書き換えるかのような影響力を持っている。
……果たして、自分はそれにどこまで追いつけるのか――
『“世の中の関節は外れてしまった。　ああ、なんと呪われた因果

か、　それを直すために生れついたとは”　私は一人の人間の狂気、一人の人間の不条理な力を消すことに、自らの力のすべてを使わねばならないのだ』

　ハムレットの一節だった。父を謀殺され、ハムレットは復讐を決意する。関節の外れた世界、不条理の起きる狂った世界でハムレットは唯一人、正常な理の成すべき裁きを実行しようとする。

　鬼頭火山は、Kの狂気を不条理だと、そう言ったのだ。そして、自分がそれを正すための人間であると。

　神屋は笑った。それは鬼頭火山に限った話ではない。むしろ神屋の方がハムレットに近い境遇を持っていた。

「鬼頭火山、その台詞は僕の方が似合いますよ」

　神屋はただ、冷笑した。

『そうかもしれんな』

　鬼頭火山は、無機質な言葉で返答した。神屋の言っていることが、鬼頭には解っていた。

　そして、神屋の一言はある人物に確信を抱かせた。

　高木海。彼はその言葉で、神屋の復讐心を完全に捉えた。そして自分の判断に誤りがなかったことを理解した。やはり、神屋は復讐をしようとしている。それは、王里神会の壊滅に留まらないだろう。おそらく、Kの殺害、その為に最初に実行班に名乗り出たに違いない。

　高木はここ数日で神屋への疑念を募らせていた。神屋を救う為に何が出来るか、ずっと考えていた。しかし、彼を止めるには彼を裏の世界から連れださなければいけない。神屋は既に、普通の若者が生きる世界とは別の世界に生きている。神屋を止めるのには、自分は適任ではない。神屋聖孝の目を醒まさせるには、表の世界に住む人間が差し伸べる手が必要なのだ。

　高木は、その為に外崎暁を実行班に加えた。神屋の傍らで、彼が堕ちる前に手を差し伸べられる人間は外崎暁しかいない。二人の信頼と友情に頼る他ない。高木はそう考えていた。

『いずれにせよ、今日は休むといい。こちらも調整がしたい。明日以降本格的に話し合う機会を設けよう。回線は今のものを使えばいい』

「了解しました。では、明日の午前中にでも会議を再開しましょう」

『そうしよう、ではまた……』

鬼頭はそう言って通話を終えようとした。

しかし不意に暁が口を開いた。

「待ってください」

『……』

「外崎暁です。……一つ質問をさせてください」

『なんだね？』

暁は短い沈黙の後、気になっていたことを訊いた。

「あなたは、神崎さんですか？」

暁の表情は険しかった。

「……私は鬼頭火山だ。それ以外の誰でもない」

機械の声は悲しげに言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6848l/

undecided

2011年11月20日03時29分発行